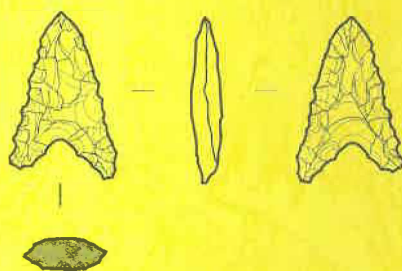


伊礼原B遺跡 伊礼原E遺跡

ー キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～14年度) ー



2008(平成20)年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

伊礼原 B 遺跡 伊礼原 E 遺跡

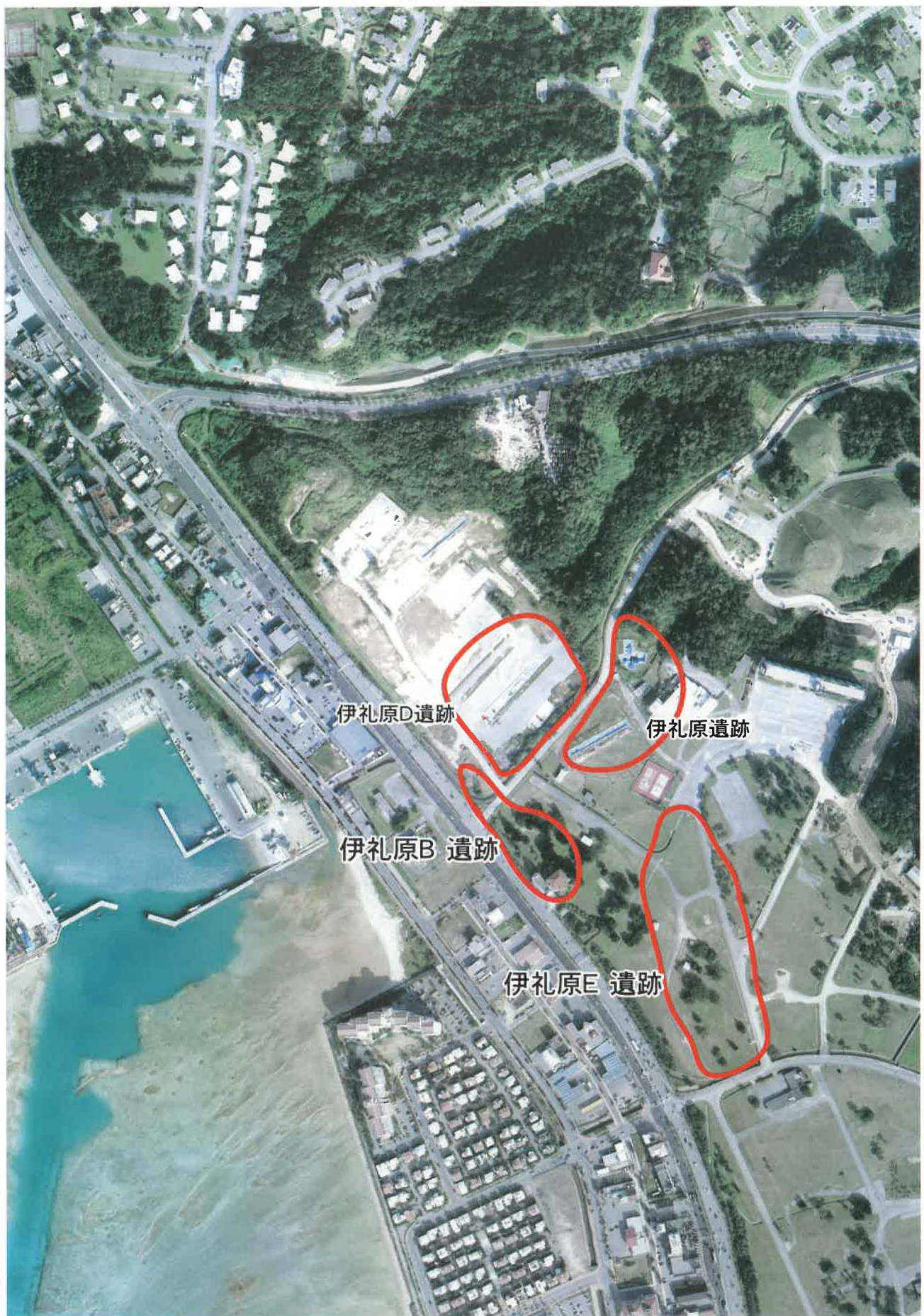
— キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～14年度) —

2008(平成20)年 3 月

沖縄県 北谷町教育委員会

伊礼原B・E遺跡 正誤表「北谷町文化財報告書第27集」(2008.3)

ページ	行	誤	正
7	32	蔵本奈々子	蔵本奈々絵
37	図4	図と写真の角度が異なる	
43	表9の2「観察事項」	混和材:光	混和材に光沢
69	第25図	第25図8	第25図9
69	第25図	第25図9	第25図8
89		南側サブトレンチ	南側にサブトレンチを
125	表7の7「出土地」	A-1西白色枝サンゴ層	A-1西 白色枝サンゴ層
137	27	リュウキュウサルボウ	リュウキュウサルボオ
139	表31	リュウキュウサルボウ	リュウキュウサルボオ
159	20	深さがあまりないことを	深さがあまりないことを
167	36	5弁状	五弁状
191	表50の1「材料」	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器
191	表50の2「材料」	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器
193	5	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器
235	3	試掘の石器として第 節	試掘の石器として「1.石器」
238		第98図	別紙差し替え
243	3	8本の試掘設け	8本の試掘穴を設け
	報告書抄録	伊礼B原遺跡	伊礼原B遺跡



卷首図版1 伊礼原B・E遺跡航空写真



南トレンチ 北側より



南トレンチ 井戸内



南トレンチ 井戸断面



南トレンチ 東壁



北トレンチ 柱穴検出状況



巻首図版2 伊礼原B遺跡

北トレンチ 西壁



北壁



東壁



巻首図版3 A-1東トレンチ・東側試掘トレンチ

南壁（東側試掘トレンチ）



東・南壁



北壁



巻首図版4 A-1西トレンチ

灰白色粗砂層検出面



西壁・遺物出土状況



北壁



流木と土器出土状況



遺物出土状況



南壁



石鏝出土状況



南壁



北壁



土壇半截 人骨出土状況



人骨出土状況



B-1 西壁



B-4 西・南壁



B-2 西壁



B-3 西壁



B-5 北壁



白磁・青磁・染付・褐釉磁器



B-5 (溝状遺構)



石鏃



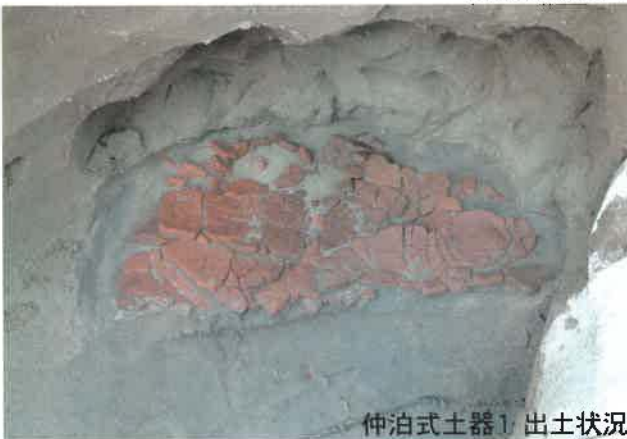
室川下層式土器



仲泊式土器 1



仲泊式土器 2



仲泊式土器1 出土状況



仲泊式土器2 出土状況

本文目次

伊礼原B遺跡

はじめに	
例言	
第一章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制	6
第二章 遺跡の位置と環境	8
1. 位置	8
2. 地勢	8
3. 周辺の遺跡	9
第三章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 調査の経過	11
第3節 層序	16
第4節 遺構	19
第5節 出土遺物	24
1. 土器	24
2. 中国産陶磁器	26
3. 近世陶磁器	31
4. 近代磁器	34
5. 陶質土器	41
6. 沖縄産施釉陶器	48
7. 沖縄産無釉陶器	55
8. 石器・石製品	63
9. 貝製品	66
10. 円盤状製品	68
11. 銭貨	70
12. 瓦	70
13. 簪	71
14. 軽石	72
第四章 まとめ	81

伊礼原E遺跡

第五章 調査方法と成果	85
第1節 調査の方法	85
第2節 調査の経過	88
第3節 Aトレンチ層序	91
第4節 Aトレンチ遺構	98
第5節 Aトレンチ出土遺物	106
1. 土器	106
2. 石器・石製品	124
3. 貝製品	136
4. 骨製品	147
5. チャート	149
第6節 Bトレンチ層序	153
第7節 Bトレンチ遺構	159
第8節 Bトレンチ出土遺物	162
1. 土器	162
2. 中国・タイ産陶磁器	164
3. 本土産磁器	167
4. 陶質土器	171
5. 沖縄産施釉陶器	175
6. 沖縄産無釉陶器	184
7. 円盤状製品	191
8. 金属製品	192

9. 簀	193
10. キセル	193
11. 銭貨	193
12. 軽石	194
13. 瓦	195
第六章 理化学的分析	198
1. 伊礼原E遺跡の放射性炭素年代測定	198
2. 放射性炭素年代測定結果報告書	200
3. 伊礼原(D・E)遺跡の放射性炭素年代測定	207
4. 北谷町伊礼原B・D・E遺跡出土石器の岩石肉眼鑑定	210
第七章 沖縄県北谷町伊礼原E遺跡出土の縄文人骨	214
第八章 まとめ	243

伊礼原E遺跡 (旧ロッジ試掘No.26・30・32)

試掘No. 26	226
試掘No. 30	229
試掘No. 32	234
その他の遺物	235
1. 石器	235
2. 円盤状製品	241
3. 脊椎動物遺体	241
報告書抄録	

図版目次

伊礼原B遺跡

巻首図版1	伊礼原B・E遺跡航空写真
巻首図版2	伊礼原B遺跡
巻首図版3	A-1東トレンチ・東側試掘トレンチ
巻首図版4	A-1西トレンチ
巻首図版5	A-2トレンチ
巻首図版6	A-3トレンチ
巻首図版7	Bトレンチ
巻首図版8	伊礼原E遺跡出土遺物

図版 1	伊礼原B遺跡遠景	21
図版 2	チンガー	21
図版 3	土器	25
図版 4	青磁・染付・褐釉陶器	30
図版 5	近世陶磁器	33
図版 6	近代磁器	40
図版 7	陶質土器1	45
図版 8	陶質土器2	47
図版 9	沖縄産施釉陶器1	52
図版10	沖縄産施釉陶器2	54
図版11	沖縄産無釉陶器1	59
図版12	沖縄産無釉陶器2	61
図版13	沖縄産無釉陶器3	62
図版14	石器	65
図版15	貝製品	67
図版16	円盤状製品	69
図版17	銭貨	70
図版18	瓦	70
図版19	簀	71
図版20	軽石	72

図版21	貝類 (巻貝1)	77
図版22	貝類 (巻貝2)	78
図版23	貝類 (二枚貝)	79
図版24	南トレンチ発掘状況と上空写真	83
図版25	北トレンチと遺物出土状況	84

伊礼原E遺跡

図版26	遺物検出状況	101
図版27	遺物検出状況 (A-1東・西トレンチ)	102
図版28	シルト層上面検出状況	103
図版29	人骨の調査	103
図版30	土壌半裁状況	104
図版31	人骨出土状況	105
図版32	土器 (A-1東トレンチ)	106
図版33	土器1 (A-1西トレンチ)	110
図版34	土器1 (A-2トレンチ)	114
図版35	土器2 (A-2トレンチ)	116
図版36	土器1 (A-3トレンチ)	117
図版37	土器2 (A-3トレンチ)	120
図版38	土器 (出土地不明)	122
図版39	石器1 (石斧)	129
図版40	石器2 (敲き石)	131
図版41	石器3 (敲き石・磨り石)	133
図版42	石器4 (磨り石・石皿・砥石)	135
図版43	貝製品1	142
図版44	貝製品2	144
図版45	貝製品3	146
図版46	骨製品	148

図版47	石鏃	151
図版48	チャート製品	151
図版49	チャート	152
図版50	土器 (Bトレンチ)	163
図版51	白磁・青磁・染付・瑠璃釉・青磁染付・ 褐釉磁器・褐釉陶器	165
図版52	陶質土器	174
図版53	沖縄産施釉陶器 1	181
図版54	沖縄産施釉陶器 2	183
図版55	沖縄産無釉陶器 1	188
図版56	沖縄産無釉陶器 2	190
図版57	円盤状製品	191
図版58	金属製品	192
図版59	簪	193
図版60	キセル	193
図版61	銭貨	193
図版62	軽石	194

図版63	脊椎動物遺体	197
------	--------	-----

伊礼原E遺跡 (旧ロッジ試掘No.26・30・32)

図版64	No. 26東壁	226
図版65	落ち込みNo. 2	227
図版66	層検出状況 (南東側)	227
図版67	土器 (試掘No. 26)	228
図版68	No. 30北壁	229
図版69	土器1 (試掘No. 30)	231
図版70	土器2 (試掘No. 30)	232
図版71	No. 32南壁	234
図版72	土器 (試掘No. 32)	235
図版73	石器 1 (試掘旧ロッジ)	237
図版74	石器 2 (試掘旧ロッジ)	239
図版75	円盤状製品	241

挿図目次

伊礼原B遺跡

第1図	北谷町の位置	2
第2図	北谷町の遺跡	3
第3図	伊礼原B・E遺跡の位置	5
第4図	グリッド設定	12
第5図	試掘ポイント (『キャンプ桑江試掘調査』(2005))	15
第6図	北トレンチ層序	17
第7図	南トレンチ層序	18
第8図	戦前の集落とチンガー	21
第9図	南トレンチ戦前遺構(チンガー)平面図・断面図	22
第10図	北トレンチ戦前遺構と柱穴平面図	23
第11図	土器	25
第12図	青磁・染付・褐釉陶器	29
第13図	近世陶磁器	32
第14図	近代磁器 1	37
第15図	近代磁器 2	38
第16図	近代磁器 3	39
第17図	陶質土器 1	44
第18図	陶質土器 2	46
第19図	沖縄産施釉陶器 1	51
第20図	沖縄産施釉陶器 2	53
第21図	沖縄産無釉陶器 1	58
第22図	沖縄産無釉陶器 2	60
第23図	石器	64
第24図	貝製品	67
第25図	円盤状製品	69
第26図	銭貨	70
第27図	瓦	70
第28図	簪の分類と部位名称	71
第29図	簪	71
第30図	出土地別軽石出土状況	72

伊礼原E遺跡

第31図	グリッド設定	86
第32図	試掘ポイント (『キャンプ桑江試掘調査』(2005))	87

第33図	東側試掘トレンチ層序	93
第34図	A-1西トレンチ層序	94
第35図	A-1東トレンチ層序	95
第36図	A-2トレンチ層序	96
第37図	A-3トレンチ層序	97
第38図	溝状遺構 (A-1東・A-1西)	99
第39図	灰白色粗砂層遺物検出状況 (A-1西)	101
第40図	遺物検出状況 (A-1東・西トレンチ)	102
第41図	遺物検出状況 (A-2)	103
第42図	人骨周辺の岩と検出状況 (A-3)	104
第43図	人骨上部の石組み状況 (A-3)	105
第44図	土器 (A-1東トレンチ)	106
第45図	土器 1 (A-1西トレンチ)	108
第46図	土器 2 (A-1西トレンチ)	109
第47図	土器 1 (A-2トレンチ)	113
第48図	土器 2 (A-2トレンチ)	115
第49図	土器 1 (A-3トレンチ)	118
第50図	土器 2 (A-3トレンチ)	119
第51図	土器 (出土地不明)	122
第52図	石器 1 (石斧)	128
第53図	石器 2 (敲き石)	130
第54図	石器 3 (敲き石・磨り石)	132
第55図	石器 4 (磨り石・石皿・砥石)	134
第56図	貝製品 1	141
第57図	貝製品 2	143
第58図	貝製品 3	145
第59図	骨製品	148
第60図	チャート出土状況(個数)	150
第61図	チャート出土状況(重量)	150
第62図	試掘(旧ロッジ)チャート出土状況(個数)	150
第63図	試掘(旧ロッジ)チャート出土状況(重量)	150
第64図	石鏃	151
第65図	チャート製品	151
第66図	B-1 トレンチ層序	154
第67図	B-2 トレンチ層序	155
第68図	B-3 トレンチ層序	156
第69図	B-4 トレンチ層序	157
第70図	B-5 トレンチ層序	158
第71図	遺構平面図 (B-1)	160
第72図	溝状遺構・柱穴平面図・断面図 (B-2)	161

第73図	土器(Bトレンチ)	163
第74図	白磁・青磁・染付・瑠璃釉・青磁染付・ 褐釉磁器・褐釉陶器	164
第75図	本土産磁器	170
第76図	陶質土器	173
第77図	沖縄産施釉陶器1	180
第78図	沖縄産施釉陶器2	182
第79図	沖縄産無釉陶器1	187
第80図	沖縄産無釉陶器2	189
第81図	円盤状製品	191
第82図	金属製品	192
第83図	簪	193
第84図	キセル	193
第85図	銭貨	193
第86図	出土地別軽石出土状況	194
第87図	瓦	195

伊礼原E遺跡 (旧ロッジ試掘No.26・30・32)

第88図	試掘ポイント位置	225
第89図	No. 26東壁柱状図	226
第90図	層検出状況	227
第91図	土器	228
第92図	No. 30北壁柱状図	229
第93図	土器1 (試掘No. 30)	230
第94図	土器2 (試掘No. 30)	232
第95図	No. 32南壁柱状図	234
第96図	土器(試掘No. 32)	235
第97図	石器1 (試掘旧ロッジ)	236
第98図	石器2 (試掘旧ロッジ)	238
第99図	円盤状製品	241
第100図	伊礼原E遺跡の柱状図と遺物変遷図	247
第101図	砂丘形成と長浜金久遺跡群・ケジ遺跡・泉川 遺跡の立地横断模式図	245
第102図	枝サンゴ層の範囲と出土土器の分布	246

表目次

伊礼原B遺跡

表1	北谷町遺跡一覧	4
表2	土器観察一覧	24
表3	中国産陶磁器出土量	27
表4	中国産陶磁器観察一覧	28
表5	近世陶磁器観察一覧	31
表6	近世・近代磁器出土量	35
表7	近代磁器観察一覧	36
表8	陶質土器出土量	42
表9	陶質土器観察一覧	43
表10	沖縄産施釉陶器出土量	49
表11	沖縄産施釉陶器観察一覧	50
表12	沖縄産無釉陶器出土量	56
表13	沖縄産無釉陶器観察一覧	57
表14	石器観察一覧	63
表15	貝製品観察一覧	66
表16	円盤状製品観察一覧	68
表17	瓦出土量	70
表18	簪観察一覧	71
表19	海産腹足類(タカラ貝を除く)の出土詳細	73
表20	海産二枚貝類の出土詳細	75
表21	陸・淡水産貝類の出土詳細	75
表22	海産タカラ貝類の出土詳細	75
表23	イノシシ・イノシシ/ブタ(イヌ・ウシ)・ ブタ遺体の同定結果	80
表24	イノシシ・ブタ・イノシシ/ブタ歯牙一覧	80
表25	その他の種類一覧	80
表26	ウシ・ウシ/ウマ・ヤギ(?)の同定結果	80
表27	サカナ出土一覧	80

伊礼原E遺跡

表28	土器出土量	123
表29	石器観察一覧	125
表30	石器出土量	127
表31	貝製品出土量	139
表32	貝製品観察一覧	140

表33	骨製品観察一覧	147
表34	チャート出土量(個数)	150
表35	チャート出土量(重量)	150
表36	試掘(旧ロッジ)チャート出土量(個数)	150
表37	試掘(旧ロッジ)チャート出土量(重量)	150
表38	チャート製品・チャート観察一覧	151
表39	宮古式土器観察一覧	162
表40	白磁・青磁・染付・瑠璃釉・青磁染付・ 褐釉陶磁器観察一覧	166
表41	青磁・染付・褐釉・白磁・瑠璃釉出土量	166
表42	本土産陶磁器出土量	168
表43	本土産磁器観察一覧	169
表44	陶質土器出土量	172
表45	陶質土器観察一覧	172
表46	沖縄産施釉陶器出土量	178
表47	沖縄産施釉陶器観察一覧	179
表48	沖縄産無釉陶器出土量	185
表49	沖縄産無釉陶器観察一覧	186
表50	円盤状製品観察一覧	191
表51	瓦出土量	195
表52	魚類遺体出土一覧	196
表53	ウシ・ウシ/ウマ出土一覧	196
表54	ウミガメ・リクガメ・クジラ・ジュゴン出土一覧	196
表55	イノシシ(ブタ)歯牙出土一覧	196
表56	イノシシ/ブタ出土一覧	196
表57	イノシシ出土量	196

伊礼原E遺跡 (旧ロッジ試掘No.26・30・32)

表58	試掘(旧ロッジ)土器出土量	233
表59	試掘(旧ロッジ)石器出土一覧	237
表60	試掘(旧ロッジ)石器観察一覧	240
表61	試掘(旧ロッジ)円盤状製品観察一覧	241
表62	その他の種類出土一覧	242
表63	年齢段階別イノシシ最少推定個体数	242
表64	イノシシ歯牙出土一覧	242
表65	イノシシ・イノシシ/ブタ・ブタ遺体同定結果	242

はじめに

伊礼原B遺跡、伊礼原E遺跡は、旧キャンプ桑江北側地区返還跡地に伴う区画整理事業の事前調査として、文化庁の補助を得て平成7年度から平成9年度に行われた試掘調査において発見された9遺跡のうちの2遺跡であります。

その後の範囲確認調査として、遺跡の規模である範囲を確定するなどの情報を得るために平成13・14年度事業として両遺跡について、並行して行っております。伊礼原B遺跡は、1988年に発見された縄文時代相当期の遺物が出土した遺跡であります。調査の成果から、遺跡の本体が、戦前の伊礼集落方向に存在することをうかがわせる様相がみられたことにより、キャンプ桑江北側地区返還に伴う試掘調査の発端となった遺跡であります。

今回の範囲確認調査においては、縄文時代相当期の遺物が二次堆積の状況で出土していますが、遺跡の立地や地域が形成される様相と周辺遺跡との関連性をうかがわせる多くの情報を捉えることができっております。また、戦前の字伊礼集落北西隅に当たる位置からは屋敷に伴っていた井戸、その洗い場となる敷石遺構等が発見されております。

伊礼原E遺跡では、今回設定された調査区のうち北側区において縄文時代相当期の遺物やグスク時代、近世の遺物が出土し、さらに、縄文時代相当期の遺物が出土する地層で発見された人頭骸骨については、改葬はありえないとの所見をいただいております。

南側区においては砂丘系土器が出土しておりますが、文化層は確認されておられません。これらの遺物が出土する層の下位では海生堆積層等が確認され、出土した遺物から先史時代の多くの情報を得ることができております。

この範囲確認調査を行った成果も含め、戦前は字伊礼の集落であった地域一帯から縄文時代相当期、弥生時代相当期、グスク時代、近世、現代までにいたる永い間の人々の生活の様子をうかがい知ることができ、北谷町内の桑江・伊平地域が生活を営むうえで環境の良い地域であったことをあきらかにすることができております。

今後、これらの成果を踏まえ、現在進められております跡地利用計画の桑江伊平土地区画整理事業、さらに諸開発事業と貴重な埋蔵文化財の保護との調和を図りながら文化財行政を進めてまいります。

末尾になりましたが、範囲確認調査・資料整理にあたりご指導・ご助言を頂きました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

北谷町教育委員会
教育長 瑞慶覽 朝宏

例 言

1. 本報告書は平、「キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業」として文化庁補助を受けてキャンプ桑江北側返還に伴う範囲確認調査、平成11年度から平成14年度まで実施した『伊礼原B遺跡』『伊礼原E遺跡』発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図(昭和54年測量)を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告書の方位は磁北をさす。
3. 遺物の同定等については、下記の方々にご協力をいただいた(敬省略)。記して感謝申し上げます。

石 質	大城 逸朗 (北谷町文化財審議員：理学博士)
獣魚骨	樋泉 岳二 (早稲田大学)
貝 類	黒住 耐二 (千葉県立中央博物館 上席研究員)
人 骨	松下 孝幸 (土井ヶ浜人類ミュージアム館長)
本土産陶磁器	渡辺 芳郎 (鹿児島大学法文学部教授)

4. 松下孝幸氏・松下真美氏には玉稿を頂いた。記して謝意を表します。

5. 実測業務委託

伊礼原B遺跡 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 株式会社 イーエーシー
株式会社 文化財サービス

伊礼原E遺跡 アーキジオ沖縄 株式会社 文化財サービス

6. 放射性炭素分析 パリノ・サーヴェイ株式会社 株式会社 地球科学研究所
株式会社 古環境研究所

7. 本報告書の編集は、松原哲志・島袋春美で行った。

第一章～第三章 第1・2節・第五章 第1節	中村 愿
第五章 第2節	中村 愿・東門研治
第三章 第3・4節	松原哲志・秋本真孝
第三章 第5節1～7・第五章 第5節1・3・4・第七章・第8節2～6・13	島袋春美
第三章 第5節8・第四章・第五章 第5節2・5 第8節1	秋本真孝
第三章 第5節10～12・14・第五章 第8節7～12	細川 愛
第五章 第3・4・6・7節	東門研治・島袋春美

付篇(試掘)については、島袋春美、秋本真孝、細川愛で分担して行った。

8. 遺物洗浄・接合・実測・復元・集計・図面整理・トレース・図版作成等の資料整理は下記の人員で行った。

上間真寿美	豊里 初枝	東 順子	照屋 元子	佐久間クリエ	山城小百合
稲嶺恵利奈	西原 美草	仲村渠恵子	東恩納里花	大城 光	吉田 美百合
曾木 菊枝	上地千賀子				

9. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物の全ては北谷町教育委員会に保管している。

伊礼原B遺跡

第一章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経過

伊礼原B遺跡、伊礼原E遺跡の範囲確認調査については、キャンプ桑江北側返還跡地に伴う区画整理事業の事前調査として、文化庁の補助を得て平成7年度から平成9年度の3年間に行われた試掘調査の成果を踏まえ、開発側とのより円滑な事業計画を行うために、発見された9遺跡を対象とし、その範囲と遺跡の性格を詳細に把握するために行われたものである。その試掘調査の成果については『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』として平成17年3月に公に付してある^(註1)。

試掘調査は返還跡地約40.5haを30×30mのメッシュを組み、そのクロス点に4×4mの試掘穴をもうけ調査地点とした。その総試掘面積は5,568㎡にあたる。そのような中、平成10年度に文化庁から「埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取り扱いについて（報告）」が刊行され、「台地上の比較的単純な遺跡の場合には、埋蔵文化財包蔵地の範囲の10%について確認調査を行えば、本発掘調査の範囲の決定に必要な情報を得ることができる」という指針が示され、文化庁からその指導・助言を賜り、平成11年度から範囲確認調査として情報の必要な遺跡の把握に努めることとした。

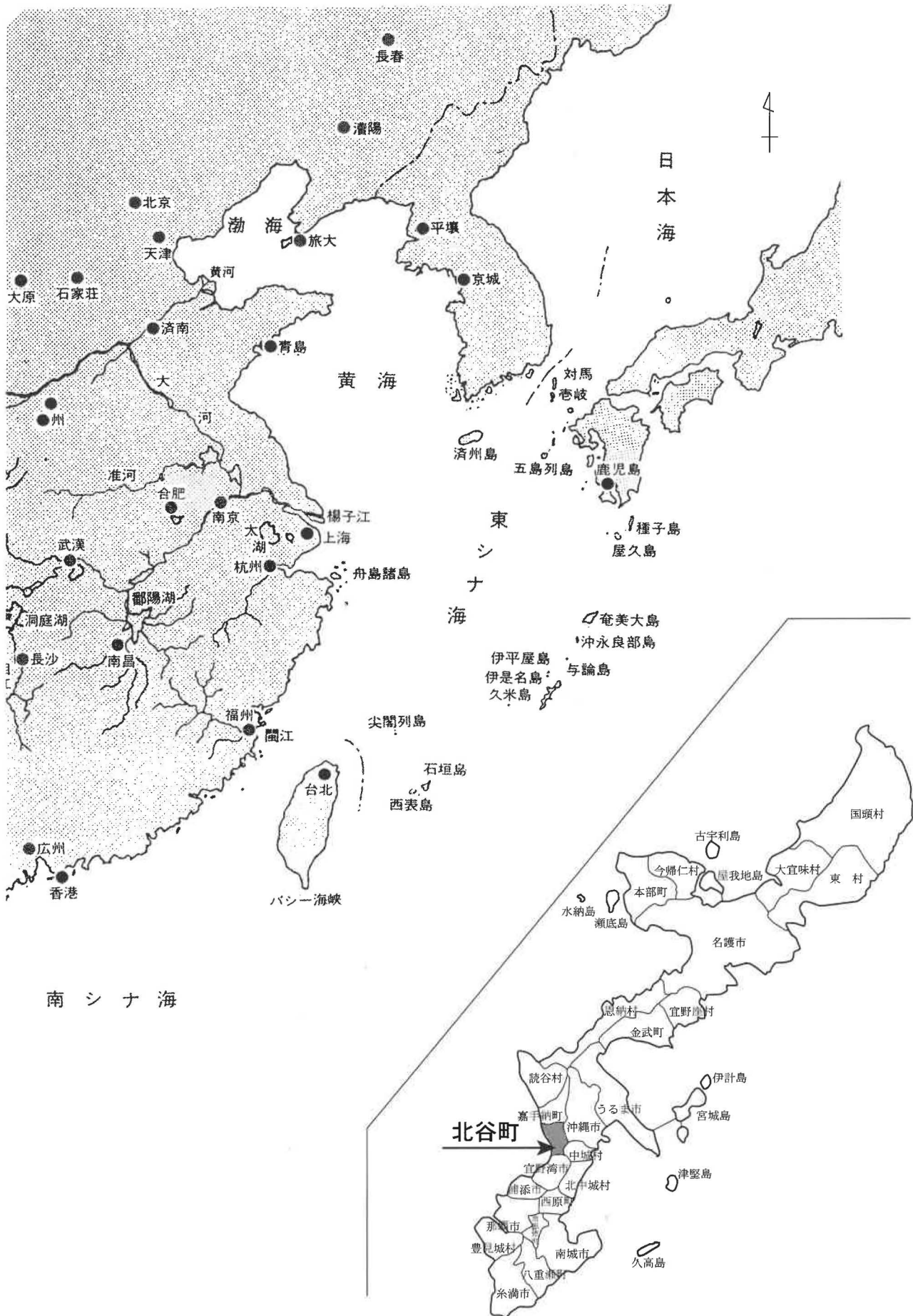
範囲確認調査の対象とした遺跡は9遺跡すべてでなく、試掘調査で出土遺物がまばらで遺構の存在が明確に把握できない遺跡を主とし、また、逆に出土遺物は多量に出土するが、遺構の把握ができない遺跡もその対象とした。

範囲確認調査を対象とした遺跡は小堀原遺跡・伊礼原遺跡（旧伊礼原C遺跡・旧伊礼原A遺跡）・伊礼原B遺跡・伊礼原D遺跡・伊礼原E遺跡・平安山原B遺跡である。

今回、範囲確認調査を対象とした遺跡は伊礼原B遺跡で平成13・14年度事業、伊礼原E遺跡では平成13年度事業として並行しておこなった。

参考文献

註1. 文化庁文化財保護部記念物課 「埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取り扱いについて（報告）」 月刊『文化財』文化庁文化財保護部監修 平成10年7月号



第1図 北谷町の位置



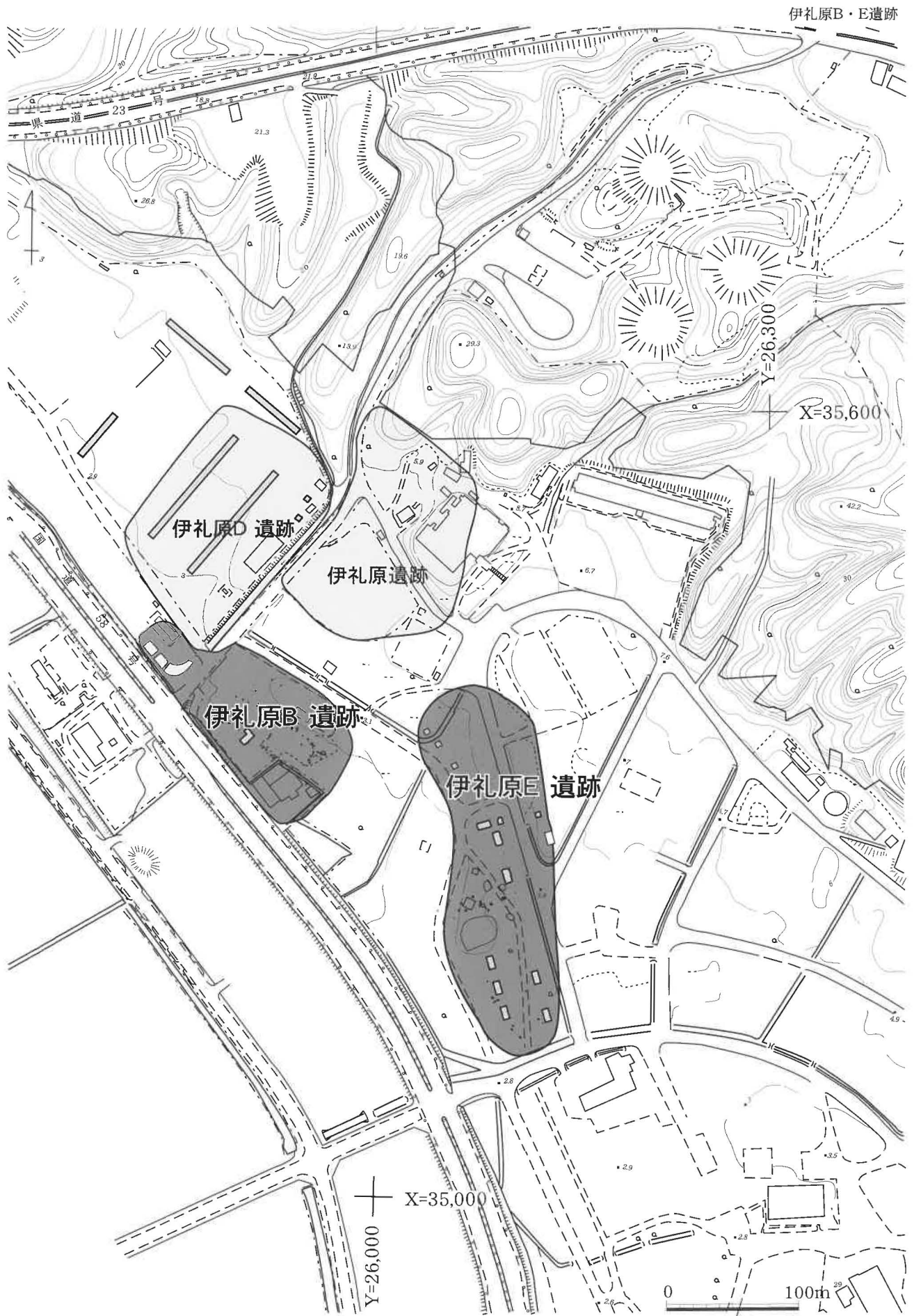
0 500m

第2図 北谷町の遺跡

表1 北谷町遺跡一覧

	遺跡名	時期	
1	砂辺サーク原貝塚	前期	字砂辺差久原770番地 他
2	砂辺サーク原遺跡	後期～近世	字砂辺加志原415、444番地 他
3	砂辺貝塚	後期～グスク	字砂辺村内原147、502～505番地
4	砂辺ウガン遺跡	後期～グスク	字砂辺加志原524番地
5	カーシーノポントン遺物散布地	グスク	字砂辺加志原340番地 他
6	クマヤー洞穴遺跡	前期～グスク	字砂辺村内原49番地
7	浜川千原岩山遺物散布地	後期	字浜川浜川千原145、157番地 他
8	浜川ウガン遺跡	後期	字浜川浜川47番地
9	上・下勢頭区古墳群	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原遺跡	前期～近世	字伊平伊礼原188番地 他
11	伊礼原B遺跡	グスク	
12	桑江ノ殿遺物散布地	後期～近世	字桑江小堀原278・279・280番地
13	桑江遺物散布地	後期	字桑江後兼久原213-2番地 他
14	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
15	前原古島A遺跡	近世	字桑江桑江原60・62番地 他
16	前原古島B遺跡	近世	字桑江前原1018番地 他
17	伊地差久原古墓	近世	字桑江伊地差久原841番地
18	前原古墓群	近世	字桑江前原978-2、1070番地
19	桃原洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
20	インディアン・オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
21	池グスク	後期	字吉原東宇地原・西宇地原
22	白比川河口遺物散布地	グスク	字北谷西表原
23	北谷城遺跡群	後期～近世	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	後期～近世	字大村城原325番地
25	北谷番所址	後期～近世	字北谷北谷原
26	吉原東角双原遺跡分布地	グスク	字吉原東角双原931-1番地 他
27	山川原古墓群	近世	字大村山川原448・450・454番地 他
28	玉代勢原遺跡	後期～近世	字大村玉代勢原43・44番地
29	長老山遺跡分布地	後期～グスク	字大村玉代勢原14番地
30	大道原A遺跡	後期	字北谷大道原983、992番地
31	大道原B遺跡	後期	字北谷大道原993番地
32	新城下原遺跡		
33	後兼久原遺跡	グスク～近世	字桑江小字後兼久原、字桑江小字小堀原
34	塩川原遺跡	後期	
35	稲千原遺跡	前期	
36	伊波川原遺跡		
37	伊礼伊森原遺跡	後期	
38	東表原遺跡		
39	安仁屋原遺跡		
40	千原遺跡	後期	
41	平安山原A遺跡	後期	
42	平安山原B遺跡	後期	
43	平安山原C遺跡		
44	伊礼原D遺跡	後期	字伊平伊礼原213番地 他
45	伊礼原E遺跡	後期	
46	小堀原遺跡	後期	
47	大作原古墓群	前期～近世	
48	横高原遺跡	後期	

* 番号は位置図に付随



第3図 伊礼原B・E遺跡の位置

第2節 調査体制

範囲確認調査の組織

補助事業に伴う平成13・14・15・16・17・18・19年度の組織体制

調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	教育長	瑞慶覧朝宏（平成13～19年度）
事務総括	教育次長	伊禮 喜正（平成13～16年度）
		阿波根 進（平成17～18年度）
		謝花 良継（平成19年度）
	文化課長	嘉手納 昇（平成13～14年度）
調査総括	社会教育課長	幸地 清（平成15～16年度）
		大城 操（平成17～19年度）
	文化係長	中村 愿（平成13～19年度）
調査担当		嘉陽田朝栄（平成19年度）
	文化係主任主事	東門 研治（平成13～19年度）
事務担当	文化係主事	松原 哲志（平成18～19年度）
	主任主事	比嘉ゆかり（平成13～16年度）
	主事	太田 有紀（平成15年度）
調査指導		鈴木 典子（平成16～19年度）
	黒住 耐二（千葉県中央博物館上席研究員）	
	樋泉 岳二（早稲田大学・東京農業大学非常勤講師）	
	松下 孝幸（土井ヶ浜人類学ミュージアム 館長）	
調査協力	知念 勇（恩納村立博物館 館長）	
	ポール宜野座（在沖海兵隊基地施設部不動産事務所長）	
	クリス・ホワイト（在沖海兵隊基地環境保護課 自然・文化財保護官）	
	平敷 兼直（同上 自然・文化財保護係）	
	エリック・ウイリアムズ（同上 考古学専門官）	
	喜友名朝重（在沖海兵隊基地施設営繕部部長）	
比嘉 賀盛（沖縄市文化財審議委員）		

（平成13年度）

発掘調査補助員

松原 哲志 安里 美紀 屋嘉比邦之 中村 響 金城 直子 照屋 高之 島袋 彩人
東 順子 山内 盛英 照屋 元子 仲田 浩二 宮平 論 宮里 光

シルバー人材センター 伊礼原B遺跡

仲村渠正男 四元 正 新垣 好唯 安里 盛保 松本 文喜 喜屋武盛忠 仲村渠春幸
原 節子 目取真久子 島袋 隆子 徳田 栄子 屋我 清子 石川 光江 根間 平雄
山川 良子 松田 洋子 福本サナエ 園田 和子 大嶺トシ子 大城ヨシ子 小渡 義昌
新垣 義孝 儀間 義忠

シルバー人材センター 伊礼原E遺跡

仲村渠春幸 宮里キミ子 新垣 裕 中山 和成 大城 明孝 比嘉 トヨ 比嘉 喜永
屋良 朝功 吉元 光清 宮平千代子 大嶺 明文 熊谷 嘉文 吉田 昌博 仲村渠正男
比嘉 景幸 新里忠太郎 松田 正盛 佐久川正喜 内間 千福 喜屋武千衣子

(平成14年度)

発掘調査補助員

照屋 高之 島袋 春美 前川 恵子 菊池 恒三 金城 麻紀 島袋 保 東 順子
 山内 盛英 照屋 元子 比嘉 光彦 富平砂綾子 八田 夕香 富山 悠太 知念 均

(平成15年度)

嘱託職員 島袋 春美 菊池 恒三

臨時職員 真喜屋 隆 松原 哲志 砂川 正幸 縄田 雅重 上原 恵 秋本 真孝
 八田 夕香 上間真寿美 知念 真衣 田仲美智子 東 順子 山城小百合
 佐久間クリエ

(平成16年度)

嘱託職員 島袋 春美 尾木 綾 縄田 雅重 菊池 恒三 上原 恵 細川 愛

上間真寿美 八田 夕香 富平砂綾子
 臨時職員 仲田 浩二 豊里 初江 島袋 保 知念 均 東 順子 佐久間クリエ
 山城小百合 金城 拓真 田仲美智子 照屋 元子 佐久本盛翔 宮里 伊織
 棚原 優樹 山岡 由治 浦崎 誠 照屋 博之 大嶺 一貴 亀谷 幸伸

(平成17年度)

嘱託職員 島袋 春美 尾木 綾 細川 愛 菊池 恒三

臨時職員 仲村 毅 徳嶺 理江 島袋 保 照屋 元子 田仲美智子 呉屋 広江
 瑞慶覧 亮 稲嶺恵利奈 富平砂綾子 花城 直子 西原 美草 八色 篤史
 新城とよ子 山田 奈美 知念 栄子 宮城 康 三宮 央意 安達 美奈
 提 祥雄 與那覇洋子 饒波工リカ 仲栄真盛史 饒波 春菜 徳平久美子
 宮城 奏子 兼城工ミ子 砂辺 未来 宜志 晴菜 砂辺つゆき 上間 玄
 當真 圭祐 山城 翼 長田 祐一 中里 直哉 東恩納寛人 名嘉 俊也

(平成18年度)

嘱託職員 島袋 春美 宮里 光 呉屋 広江

臨時職員 西原 美草 山田 奈美 新川美和子 比嘉 美絵 大城 梨乃 池原恵梨香
 仲田 知子 湧川 卓 松長 稔 比嘉 学 喜友名正和 古謝かなえ

(平成19年度)

嘱託職員 秋本 真孝 細川 愛 豊里 初江 上間真寿美 東 順子 照屋 元子

西原 美草 島袋 春美 山城小百合 佐久間クリエ
 臨時職員 新川美和子 比嘉 美絵 大城 梨乃 仲里 知子 上江洲陽子 蔵本奈々子
 仲村渠恵子 稲嶺恵梨奈 仲村渠春樹 名嘉真弥生 東恩納里香 大城 光
 安里 美紀

第二章 遺跡の位置と環境

1. 位置

伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡は、旧キャンプ桑江北側返還に伴う事前の試掘調査で発見された9遺跡の2つである。

旧キャンプ桑江北側が位置していたのは沖縄県中頭郡北谷町字桑江・伊平にあたる。旧キャンプ桑江は平成15年3月（2003年）に返還され、現在、区画整理事業が進行中で、隣接するキャンプ桑江南側半分約61haも近年に返還予定とのことである。

北谷町は略南北に細長く伸びる沖縄本島の南西よりに位置し、県庁所在地の那覇市から約20km北東に所在している。南北約6km、東西約4.3km、総面積13.63km²の台形状を呈し、底辺が西側の東シナ海に面した形状を成している。人口約27,000人あまりで第三次産業を主とした町である。

伊礼原B遺跡は現在のナガサガーが国道58号と接する地域で、1988年の那覇防衛施設局の河川改修の際に発見された遺跡である。発掘調査の成果をみると、標高30cmの第Ⅷ層の旧海底に堆積した枝サンゴ上部に水摩を受けた室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊A・B式土器、面縄東洞式土器、嘉徳I式土器、伊波式土器が混在して出土し、標高1m以下の第Ⅵ層の海生砂地から15～17世紀の青磁、染付、南蛮などの陶磁器と共にイノシシ・牛・馬の下顎骨と人骨片が出土している。第Ⅲ層の下部から喜名焼や壺屋焼出土以後には黄褐色シルトが1～1.5mも急激に堆積していることから、上流地域の人的改変があったことがうかがわれ、近世の入植者との関わりが推察される。文化層はいずれも二次堆積であったが、東側の上流地域や南側の地域に遺跡の本体が予想された。

伊礼原E遺跡は伊礼原遺跡の南側約200m離れた場所に位置し、北側のクシヌカー（後ろの川）という小川で境をなし、南側はナルカー（奈留川）で区切られている空間に所在している。遺跡の東側端部は赤土土壌（国頭マージと島尻マージが存在）の地山層で、それに沿うように形成された海生砂地や砂丘に形成された遺跡で、さらに陸生シルトが交互に堆積した沖積層に新しい時期の遺跡は形成されている。遺跡の南側や西側には石灰岩の基盤の露頭が飛び石状にみられ、その周辺に海生砂地や砂丘の堆積により陸化し、遺跡が形成された過程がみられる。それらの石灰岩露頭は生活址の指標にもなったと考えられ、国道58号沿いの露頭がクランモー（獅子蔵）という拝所になっており、さらに最西端の露頭は国道58号を100m以上も越え、ケラマジーというニライカナイの拝所になっている。

2. 地勢

北谷町の北側は標高10～30m程の緩やかな石灰岩高地が広がり、そこには極東一を誇る米空軍嘉手納飛行場が位置し、戦後、北の嘉手納町との行政区分のきっかけとなった広大な地域である。東側は標高100mあまりの脊梁から数段の石灰岩の海岸段丘が形成されていて標高80mの二段目で沖縄市との境域としている。南側は米海軍普天間飛行場の位置する標高60～70mの石灰岩台地に形成された海岸段丘を横切るように西流する佐阿天川によって宜野湾市と境域としている。西

側は東シナ海に面していることから北谷町域は東高西低の地勢をなしている様相である。

これら東側の沖繩市や南側の宜野湾市側の海岸段丘は隆起石灰岩一帯であることから保水性が悪く、段丘下には所々に湧水を排出し、特に沖積世平野部の近くでは多く、戦前まではそれを源とする水田が広がり、北谷町から南の宜野湾市までの沖積世平野部には連続して存在していた。特に北谷町の南側に位置する字北谷地域（現在のキャンプ・ズケラン）一帯は戦前までは沖繩本島の三大美田の一つとされている北谷ターブクァ（北谷田圃）と呼ばれ広がっていて、それらの地勢に起因しているという。

これらの段丘上の縁辺部や湧水近くには遺跡が点在し、特に宜野湾市に所在する米海軍普天間飛行場の丘陵上部の西側縁辺部（オープン・サイト）や麓は顕著で、数十箇所の遺跡が集中している^(註1)。北谷町域では北側の古い石灰岩の残りといわれる円錐形のカルスト残丘が点在し、その一つである砂辺集落背後の丘陵部一帯には遺跡（砂辺貝塚・クマヤ洞穴遺跡・サーク原遺跡・サーク原貝塚・カーシーノボントン遺物散布地・浜川御願遺跡）が集中し、南側では北谷城の丘陵部一帯の遺跡（北谷城・北谷城第7遺跡・玉代勢原遺跡・長老山遺跡）がそれらにあたり知られている。

キャンプ桑江のある平坦部は略北西方向から南東部方向への一直線上を境として北東部は標高約30mの海岸段丘の丘陵部が連なり、南西部は標高10m前後の小段丘を介して沖積世平野部の麓に至る。ここは桑江断層^(註2)といわれ湧水の所在するラインでもある。

3. 周辺の遺跡

旧キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査で段丘の麓から沖積世平野部にかけての一带に、北側から千原遺跡・平安山原A遺跡・平安山原B遺跡・平安山原C遺跡・伊礼原遺跡・伊礼原D遺跡・伊礼原E遺跡・小堀原遺跡・後兼久原遺跡の遺跡が発見され密集している様相がうかがえる。

この沖積世平野部は戦後の米軍によって削平や客土がくりかえされ、当地域の現状は一見すると標高数メートルの低平な平野部であると見受けられるが、石灰岩の岩塊が所々に露頭がみられる。試掘調査の成果や戦前の地形図、戦中の米軍航空写真などから丘陵部の形状や河川を追って旧地形を復元すると石灰岩微高地や河川の流路が確認でき、それらに伴う海岸線の形成過程である砂丘の発達上部に戦前の集落の配置も位置づけられ、旧地勢の様相の一旦が垣間見ることができる^(註3)。遺跡はそれらの石灰岩縁辺部の陸生土壌と形成過程のみられる海生砂地や砂丘の上に立地が見られ、基本的には内陸側から海岸よりへと、古い時代の遺跡から新しい時代への遺跡の展開の様相がうかがわれる。それらはキャンプ桑江の東側丘陵麓に位置するウーチヌカー（湧水）、さらに南側には奈留川（湧水）もありそれらを源として形成されている。

発見された遺跡の中でも伊礼原遺跡は沖繩諸島で最古の土器とされる爪形文であるヤブチ式・東原式土器が出土し、次いで曾畑式土器、室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器、面縄東洞Ⅰ・Ⅱ式土器、松山式土器、市来式土器、伊波式土器、荻堂式土器、大山Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類土器、カヤウチバンタ式土器、宇佐浜式土器、黒色磨研土器、阿波連浦下層の土器、弥生前・中期土器、玉縁口縁白磁、滑石製石鍋、カムイヤキ須恵器、青磁、華南三彩、天目茶碗、瑠璃釉などグスク時代の遺物まで連綿として出土している。沖繩諸島の先史時代編年体系が網羅できるほどの各型式が粗密はあるものの存在していて生活の場として息の長い地域であったことがうかが

われる。

伊礼原遺跡は丘陵部の麓に湧水があり、その下流域に曾畑式土器を中心とする低湿地遺跡として発見され、洗い場や水を確保する場所として永い間使用された水辺の生活址が確認された空間である。それらと共に曾畑式土器期からグスク土器期までの有機質の堆積がみられ、種子や樹種から当時の植物相が把握でき環境復元や植物利用の状況が把握された南島での新知見の遺跡であった。

さらに下流域の沖積平野部には陸生シルトや海生砂地には室川下層式土器や面縄前庭式土器、面縄東洞式土器、嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器、の炉跡や竪穴円形配石住居址などの生活址の痕跡、黒色磨研土器、阿波連浦下層の土器の遺構、諸岡型ゴホウラ貝輪の一括出土や弥生前・中期土器、玉縁口縁白磁、滑石製石鍋、カムイヤキ須恵器、青磁、華南三彩、天目茶碗、瑠璃釉などグスク時代の遺物が混在して出土した。これは縄文時代晩期以降、同一空間で新たな人々の生活が繰り返し行われた様相で、つねに改変された結果と判断された。

沖積平野部の砂丘地域は生活址として利用された空間で、低湿地の空間と連動して生活址が確認されるということで、砂丘地区の伊礼原A遺跡、低湿地の伊礼原C遺跡をまとめて伊礼原遺跡とした経緯がある。

さらに伊礼原遺跡より西側の海岸線側（国道58号より）には戦前の伊礼集落まで存在し、近世においても人々の痕跡が残り生活のしやすい環境の良い地域であったことがうかがえる。

この伊礼原遺跡の北側に西流するナガサガーがあり、その河口部分の改修工事で伊礼原B遺跡は発見され、発掘調査の成果からキャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査の発端にもなった遺跡である^(註4)。

参考文献

- 註1. 呉屋義勝ほか 『土に埋もれた宜野湾』 宜野湾市文化財調査報告書 第10集 宜野湾市教育委員会 1989年
- 註2. 松田順一郎 「伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地震痕跡」 『伊礼原遺跡』 — 伊礼原B遺跡ほか発掘調査—北谷町文化財調査報告書 第26集 北谷町教育委員会 2007年3月
- 註3. 中村愿・東門研治ほか 『キャンプ桑江返還に伴う試掘調査』 —伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業— 北谷町文化財調査報告書 第23集 2005年3月
- 註4. 中村愿 『伊礼原B遺跡』 —旧メイ・モスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査— 北谷町文化財調査報告書 第8集 北谷町教育委員会 1989年3月

第三章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

伊礼原B遺跡は現在のナガサガーが国道58号と接する地域で、1988年の那覇防衛施設局の河川改修の際に発見された遺跡で、緊急発掘調査を行い『伊礼原B遺跡』として公に付している^(註1)。この伊礼原B遺跡の発見・本発掘調査・報告書の一連の成果によりキャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査の発端にもなった遺跡でもあり、「伊礼原B遺跡ほか」との名称もこれからである。

発掘調査の成果をみると標高約3mに位置し、表土下1.5mまで米軍客土の第Ⅰ層。第Ⅱ層は厚さ30cmの汚れた灰褐色混土砂層で戦前までの生活層である。第Ⅲ層は厚さ0.3～1mの黄褐色シルト層で下半部にはレンズ上に海生砂層の混在があり、それから喜名焼の甕の破片が得られた。第Ⅳ・Ⅴ層は厚さ1.5mで有機質を多量に含みU字状やV字状の凹みをもつ海中堆積の灰褐色砂層で河川敷の無遺物層である。第Ⅵ層の標高1m以下の海生砂地から15～17世紀の青磁、染付、南蛮などの陶磁器と共にイノシシ・牛・馬の下顎骨と人骨片が出土している。第Ⅷ層の標高30cmの旧海底に堆積した枝サンゴ上部に水磨を受けた室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊A・B式土器、面縄東洞式土器、嘉徳Ⅰ式土器、伊波式土器が混在して出土し、二次堆積の様相を呈していた。

このように伊礼原B遺跡は縄文期・グスク期は二次堆積ではあるものの層的には明確に区別されていた。また、第Ⅲ層の下部から喜名焼や壺屋焼出土以後には黄褐色シルトが1～1.5mも急激に堆積していることから、上流地域の人的改変があったことがうかがわれ、近世の入植者との関わりが推察される状況がうかがわれた。

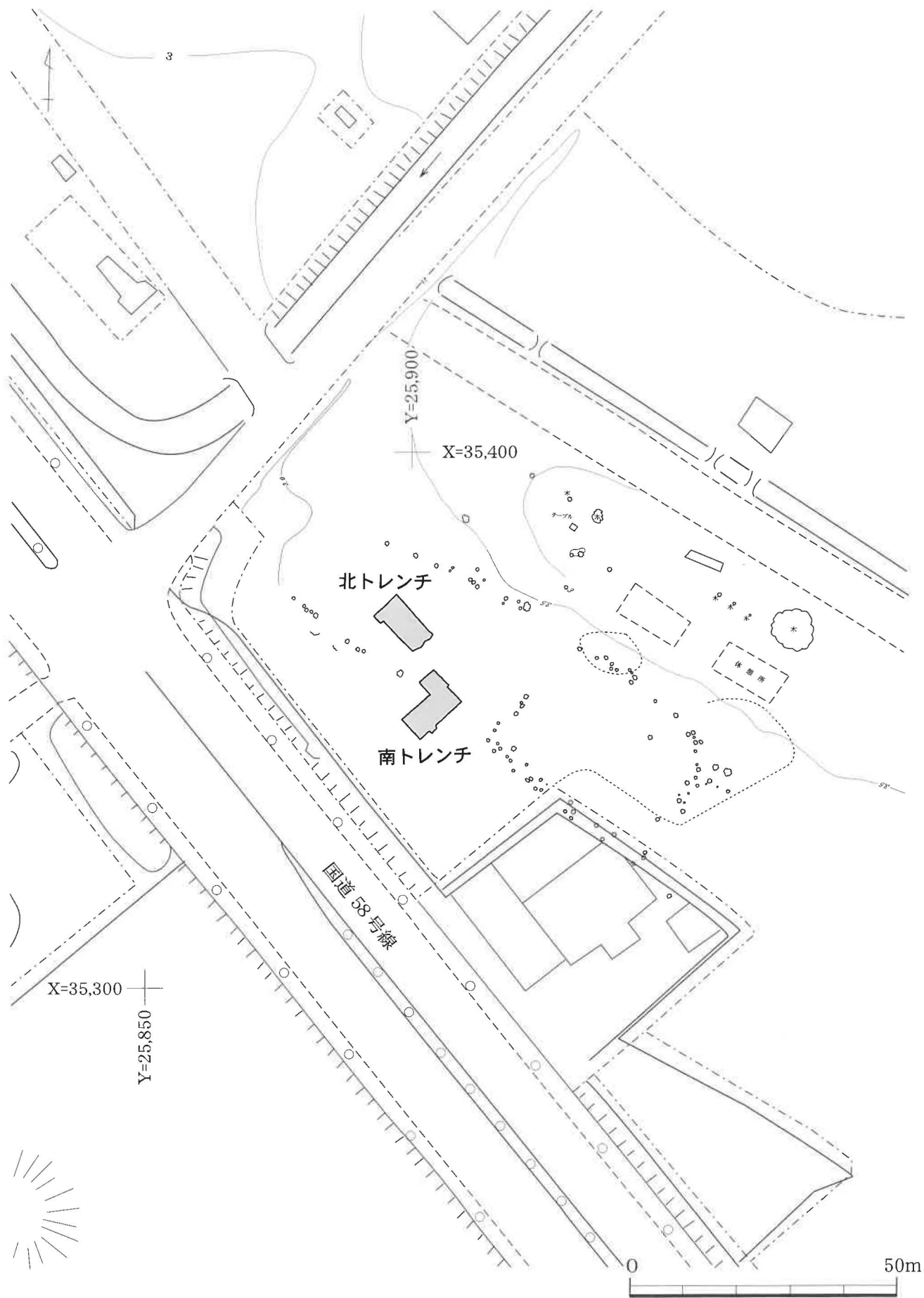
その周辺に遺跡の本体が予想され、旧集落側の方向である南側に調査区を設定することとした。しかし、当地域は試掘調査の結果において縄文期の遺物は標高1mの枝サンゴ粗砂層、標高0mの枝サンゴ層で出土しているが二次堆積であることから同層の確認については割愛することとした。

第2節 調査の経過

伊礼原B遺跡は平成14年2月4日から調査区の設定に入った。設定場所は伊礼原B遺跡（河川敷）から南側の60m地点と80m地点に幅5m、長さ10mのトレンチを2本設定した。同トレンチを北トレンチと呼び略南北に設定した。80m地点を南トレンチと呼び略東西に設定し、両者が直角になるように設置した。南トレンチは国道58号端との間は10mほどの近距離である。

実際の発掘は2月14日から3月26日までの実質26日間おこなった。当該地域が戦前の集落地域にあることから当初から手掘りでおこなった。

南・北トレンチの内、北トレンチは13年度事業で終了したが、南トレンチでは13年度の3月上旬段階で戦前の井戸とその洗い場の遺構が発見され、その輪郭の把握に努めた。平成14年度事業は5月23日から6月26日までおこなった。その間、井戸についての情報収集を行い、その井戸が



第4図 グリッド設定

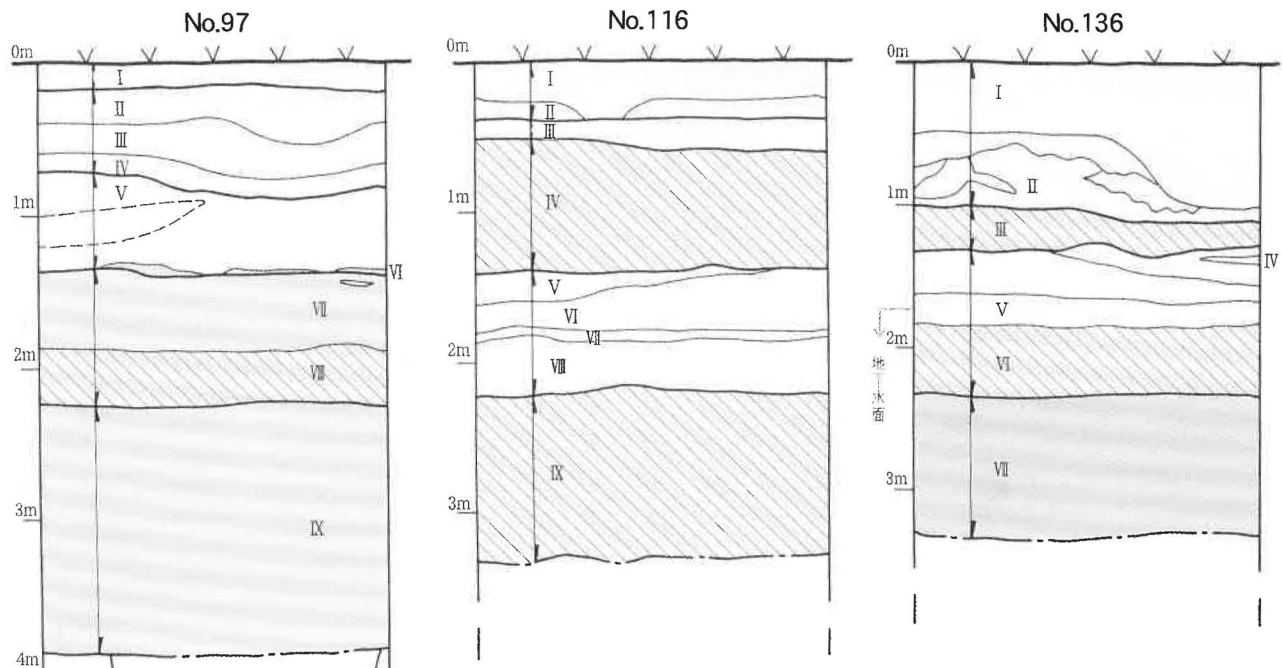
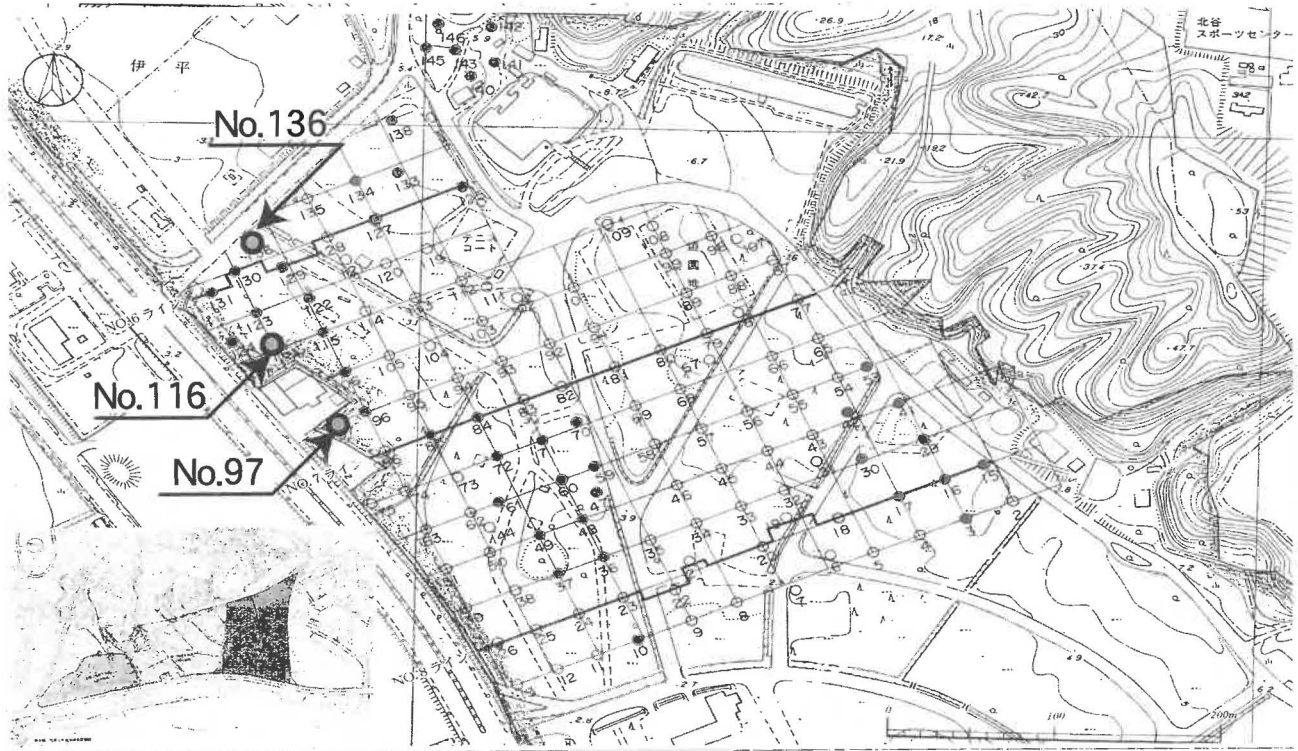
戦前の北谷町字伊礼原伊礼209番地の島袋さん宅（屋号：樽チチンミグラー）の所有であることが確認できた。当該井戸をもつ屋敷は伊礼集落の北西隅に位置し、地籍併合図とほぼ同位置に所在していた。

調査日誌

平成14年

- 3月4日 ・磁気探査（野崎・他2名）・松竹重機・5×10m トレンチ 2本掘削・トレンチNo.2（磁気探査No.1）は北側で南北を長軸としている。-50～80cmで戦前の遺構出土。・トレンチNo.1（磁・No.2）は南側で東西を長軸としている。-50～80cmで戦前の遺構出土。北側に井戸と洗い場が確認。
- 3月6日 ・No.1トレンチ、No.2トレンチ壁面清掃・井戸内の石除去
- 3月7日 ・No.1トレンチ平面清掃 ・井戸内の清掃
- 3月8日 ・No.1トレンチ平面清掃、石敷遺構（井戸も含め）の露出・No.2トレンチ平面清掃
- 3月18日 （北トレンチ）・南側 戦前遺構の掘り下げ・北側 白砂掘り下げ
（南トレンチ）・井戸の範囲確認のため広げる
- 3月19日 （北トレンチ）・南側 戦前遺構、平面実測の準備割付け・平面実測1/20 白砂掘り下げ
（南トレンチ）・井戸の範囲確認
- 3月20日 （北トレンチ）・南側 平面実測、遺物取上げ ・北側 白砂の掘り下げ、写真撮影。白砂を掘り下げ中で、現在は砂粒が固まる状況で、掘削がしにくい。・土器1点出土、ローリングを受けている。土器は不明
（南トレンチ）・北東側 井戸周辺の露出作業 ・割付作業
- 3月22日 （北トレンチ）・南側 平面実測及び遺物取上げ・北側 白砂（硬質）掘り下げ・白砂（硬質）から真水がしみ出しはじめる。・北側から、フェンサ上層式土器が1点出土。
（南トレンチ）・平面実測・井戸周辺露出作業
- 3月26日 （北トレンチ）・前日の雨の為、水抜き作業を行う。・南側 平面清掃後、写真撮影・柱穴の半截と、白砂（砂利混）層の掘り下げ・北側では水が3～5cm程たまる。掘り下げを中止し、南側の掘り下げを行う。
- 3月27日 （北トレンチ）・柱穴No.2～14の断面実測と写真撮影を行う。・柱穴内から特に遺物は無く、礎石も確認できなかった。
- 3月28日 （北トレンチ）・柱穴を完掘させ、写真撮影、平面実測を行う。その後No.15の柱穴にある礎石らしい石の断面実測をする為掘り下げを行う。白砂（砂利混）を掘り下げ、下層の確認作業と壁面実測を残す。
- 3月29日 （南トレンチ）・チンガー周辺の割付 ・黒住氏、樋泉氏、土壌サンプル採取の手伝い後、写真撮影を行う。
- 4月2日 （北トレンチ）・No.5柱穴の断面実測後、写真撮影、完掘後平面実測と写真撮影を行う。
（南トレンチ）・戦前遺構面の平面実測
- 4月3日 （南トレンチ）・戦前遺構面の実測を、チンガー周辺部と、その他の2つに分けて行う。・チンガー周辺の石組みは、石の外側が土で隠れている為、検出作業を行いながらの実測になった。
- 4月4日 （南トレンチ） ・戦前遺構面の平面実測・チンガー周辺の石組み内で、石と石に挟まれるように”寛永通宝”が1点確認できた

- 4月5日 (南トレンチ)・戦前遺構面の平面実測を行う・チンガー付近にある敷石の実測はほぼ終了。次は洗い場・チンガーの実測
- 4月30日 (南トレンチ)・戦前遺構面の平面実測を行う。
～9日
- 5月10日 (南側トレンチ)・戦前遺構面の平面実測(1/20)と、チンガー周囲の石組みを露出させる作業を行う。
- 5月13日 (南トレンチ)・戦前遺構面のチンガーの平面実測と、チンガー内の清掃を行う。
- 5月14日 (南トレンチ)・戦前遺構面の平面実測(チンガー)と、断面実測(敷石)を行う。・チンガー内に見られる石検出。清掃後、観察。チンガー付近の洗い場と思われる石組の一角を平面図、断面図の実測。
- 5月20日 (南トレンチ)・チンガーと洗い場の断面見通し実測作業終了
- 5月23日 (北トレンチ)・白砂層(南側)の掘り下げ②→③・壁面実測の為、割付け作業。
(南トレンチ)・戦前遺構面の掘り下げ・チンガー内北壁面の実測。(壁面簡略図有り)
- 5月30日 (北トレンチ)・白砂④の掘り下げ→遺物無し
(南トレンチ)・白砂①の掘り下げを行う。・チンガー内の北壁面図の断面見通し図追加
- 6月4日 (南トレンチ)・多量に見られる軽石の分布とELの確認作業を行う。西半分を掘り進める事にした。
(北トレンチ)・北半分を掘り進める
- 6月13日 (北トレンチ)・水抜きで3時間。その後、灰白色粗砂層の掘り下げを行う。土器片1点出土。・壁面図の所見を書く。
(南トレンチ)・白砂③→④→ビーチロック①の掘り下げを行う。・壁面清掃後、写真撮影、分層。
・北、南トレンチを通して、伊Bにおける層の堆積状況が石のようになる事が分かった。・I 客土…米軍によるもので戦後のもの。・II 戦前遺構面(文化層)…戦前の井戸などが検出。・III 白砂層…土器片数点出土、ローリング強し。・IV ビーチロック…土器片数点出土、ローリング強し。・V 灰白色粗砂…無遺物層・VI ビーチロック②…無遺物層
- 6月24日 (南トレンチ)・チンガーの平面清掃後、写真撮影を行う。・北壁面の実測。
- 6月28日 (北トレンチ)・戦前遺構から採集した砂をふるいがけする。
- 7月2日 台風5号の対策を行う。
- 7月8日 台風6号に備え、台風対策を行う。
- 7月15日 台風8号の強風により、遺物洗浄作業を行う。
- 7月19日 壁面実測図より、層序の照合作業を行う。
- 7月22日 午後より遺跡周辺を平板実測する。
- 7月24日 遺跡周辺(南東側)のフクギ並木等を平板実測する。・フクギ並木は戦前の住居周囲に植えられていたものらしく、規則的に並んでいた。(伊礼地区に住んでいた老人達の話)
- 7月29日 トレンチの掘削作業・4×4m×2本の掘削2台。磁気探査・全長60m掘り下げる。北西側に井戸らしき遺構がある。周辺を掘り下げ、後は手掘りで確認。・4×4m×2本。戦前の時期と思われる。米軍の廃棄場?
- 7月31日 チンガー周辺を砂で埋め、チンガー上部には約20cmメッシュの金網をかぶせる。
- 8月9日 北トレンチの井戸掘り。・井戸の露出作業、井戸内約70cm程掘り下げる。井戸内は最近土砂が入れ込まれた。



	No.97	No.116	No.136
層別遺物	VIII層：淡灰色粗砂層 伊波式・面縄前庭式・曾畑式土器	IV・V層：白色砂層・淡黄色混砂礫層 (後期系・浜屋原式・面縄東洞式・面縄前庭式・室川下・曾畑式土器)ローリング受けている	III層：暗褐色砂層 後期土器ローリング・伊波式・面縄前庭式土器
		IX層：淡灰白色砂層 大山式・面縄前庭式土器	VI層：灰白色混砂礫層 面縄前庭式土器

第5図 試掘ポイント (『キャンプ桑江試掘調査』(2005))

第3節 層序

調査区は、北トレンチと南トレンチの2つに分けて調査を行った。層序は、客土をⅠ層、文化層をⅡ層、白砂層をⅢ層、ビーチロックをⅣ層、灰白色粗砂層をⅤ層とし、五つに分けた。

北トレンチ（第6図）では層の動きに変化は見られないが、南トレンチ（第7図）の南壁・北壁を見るとⅡ層が東から緩やかに傾斜していることがわかる。北壁ではⅢ層の形成の仕方が顕著に見られ、伊礼原D遺跡に見られるような砂丘の形成が見られる。東側（丘陵側）から西側（海側）に行くにつれ、白砂層が緩やかに傾斜して堆積している。砂丘区の形成に於いて明確な資料と考えられる。白砂層で出土する土器片は全てローリングを受けており量も少ないことから、砂丘が暴浪や津波などの自然現象で、各時期の遺物がさらわれて何らかの形でこの層に紛れ込んだものとも考えられるため文化層との位置づけはしない。また、北トレンチにⅤ層まで続く攪乱層があり、Ⅳ層にフェンサ上層式土器が見られるのもこの影響だとも考えられる。

Ⅰ層 客土

現表土で、米軍による芝生の植えつけをⅠa層、攪乱を受けている層をⅠb層、その下のコーラル層をⅠc層とした。Ⅰb層は、コーラル層からⅤ層まで掘り込まれているが掘り込んだ目的は不明である。コーラル層は戦後、米軍が整地目的で運んできており、南トレンチの東壁では薄く西へ行くにしたがい厚くなる。

Ⅱ層 近世～戦前層

Ⅱa：茶褐色土層

近世～戦前の層。Ⅱb層と比べやや動いている感じである。層は締まり堅い。ガラス片や、陶器、磁器等を多量に含む。層中に赤色の粒土が帯状に連なる部分が確認できる。

Ⅱb：淡黒褐色土層

近世～戦前の面。層上面からは多量の陶器、磁器、ガラス、骨が得られた。その他にもジーファーやビー玉等、日用雑貨が検出された。Ⅱa層よりも更に締まっており、層全体の流動感を感じられない。又、同層からはピット状遺構、井戸を伴う敷石、洗い場遺構も確認された。

Ⅲ層 白砂層

Ⅲa：白砂層①

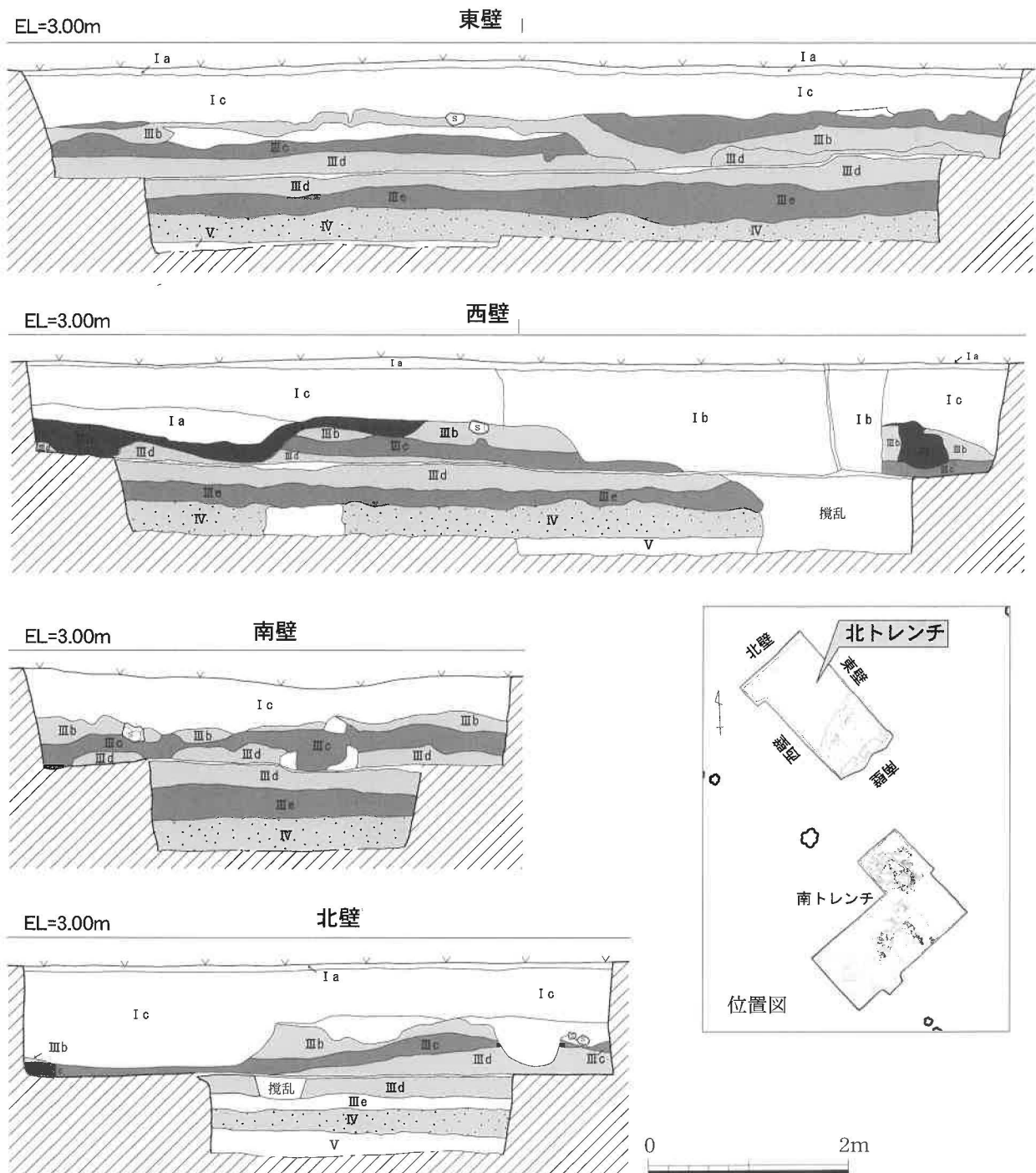
同層は南トレンチの西壁部分のみ確認でき、北トレンチでは確認できない。白砂の層で、Ⅲb層とは枝サンゴや砂利等で構成されるラインでもって区別をした。

Ⅲb：白砂層②

層を構成する砂の粒子はやや細かく、サラサラしている。もろく崩れ易い。Ⅱbの遺物が少量まぎれ込む。イソハマグリ等小型の貝が主流。

Ⅲc：白砂層③

Ⅲb層と枝サンゴや砂利で構成されるラインで分けた。Ⅲb層に比べ、砂の粒子が若干粗くなり、層全体に枝サンゴが多く含まれるようになる。南トレンチで土器片（ローリング強）が数



第6図 北トレンチ層序

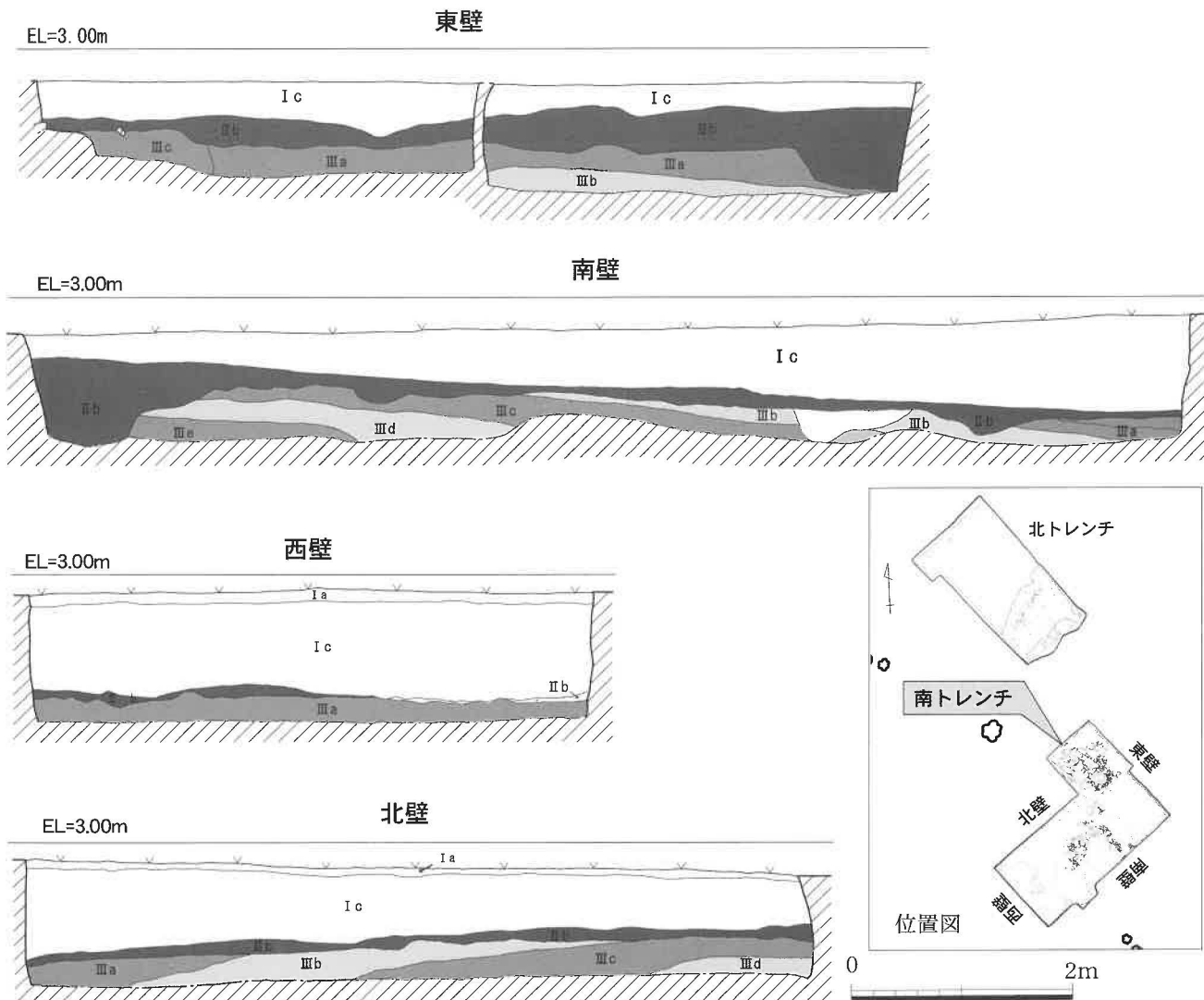
点出土。ザルガイやイソハマグリ等が見られる。

III d : 白砂層④

層上面に堆積した枝サンゴ層の他に南トレンチの南東側では大量の軽石（1～3cm大）が検出された。III c層よりも更に砂の粒子が粗くなる。南トレンチではローリングを強く受けた土器片が1点検出した。ザルガイ、イソハマグリ等が見られる。

III e : 白砂層⑤

III d層よりも更に砂の粒子が粗くなり、同層下部からは水がしみだし始める。リュウキュウシラトリやイソハマグリ等が見られる。



第7図 南トレンチ層序

IV層 ビーチロック層

粒の粗い砂や枝サンゴ、貝等が凝固し、ビーチロック状になっている。同層からは水が湧き始める。層中は赤くて5mm大のカワニナに似た巻貝が大量に確認できる。北トレンチからはフェンサ上層式土器が1点出土した。リュウキュウシラトリが多い。

V層 灰白色粗砂層

層の構成はIV層と同様であるが、IV層と比べ、ビーチロック状にならず、柔かめである。伊礼原D遺跡や伊礼原E遺跡の砂利層とは様相が異なる。ローリングを受けた後期土器が出土している。

第4節 遺構

遺構については、南北トレンチとも同じ茶褐色土層（Ⅱ層）で、ピット状の遺構と井戸を伴う敷石洗い場遺構が見られた。また、戦中の米軍航空写真（図版1）から、本部町字備瀬のフクギ並木のように防風林として集落を囲んでいた様子うかがえる。現在もその形を見ることができ、各地区について特徴的な遺構の概略を述べる。

a：北トレンチ（第10図）

ここでは、Ⅱb層からピット状遺構が出土した（No.2～No.15）。写真と図面では、白砂層からの遺構に見えるが、Ⅱb層からの遺構だと思われる。No.15では、ピット内から青磁が出土していた。住居プランは見られなかった。

b：南トレンチ

ここでは、淡黒褐色土層（Ⅱb層）から井戸を伴う敷石洗い場遺構とピット状遺構（No.1～No.4）が出土した。井戸は聞き取り調査で『チンガー』と呼ばれている。以下に詳細を述べる。

①チンガー（第9図）

淡黒褐色土層（Ⅱb層）上に遺構が構成されており、聞き取り調査から、戦前まで使用されていたものと思われる。北側の敷石部につながる側は大きめの琉球石灰岩が使用され、チンガーの内側に向く面は曲線を描き、表面はややなめらかに調整されている（30cm程度）。南側は小さめ（10～20cm程度）の礫を使用している為か少し崩れている。人力で水を汲んだのか滑車を使用したのか確認できる遺構。遺物はないが、チンガー南西部に見られる礫群が滑車に関する遺構の可能性も否定できない。また、チンガー内より水汲みに使用されていたと思われる桶の底（図版2）と紐も検出された。

最も下の部分は淡灰白色粗砂（Ⅴ層）で、北トレンチにも同様な層が白砂④層（Ⅲd層）下から見られる。おそらく淡灰白色粗砂は自然堆積の層で、チンガーもこれより下に掘り込みを行っていないものと思われる。淡灰白色粗砂の上層は、ビーチロック状（Ⅳ層）で、枝サンゴや貝殻、粗砂が硬質化する。周囲からは水がしみ出し、EL=1.100m付近のラインまでは水が満ちる。

白砂④層の上部に粘質土が堆積するが、北トレンチでは少しも確認できない為、人為的に白砂④層の上にセメントの代用品感覚で敷いたものと思われる。現在、植物の根が多く見られ、やや腐食しているようである。

チンガー内の壁面として用いられた石灰岩は、下部の方は20～40cm大のやや方形をし、比較的整えられた岩を使用している。上部のほうは規格性は低いものの、大きめの岩を使用しているようである。中部の石は横に長いものや、やや丸いものを使用し、石と石の隙間に小礫を詰める傾向にある。チンガーの上場の直径は約80cmで、下場は100cm（石灰岩の下場でチンガーの底部ではない）とやや末広がりになっている。下部、上部に見られる大きめの岩は表面があばた状を呈しているものが多く、小さめの石はそうではない。

淡灰白色粗砂の上部には上から落ちてきたと思われる10～20cm大の石灰岩が井戸内全体に見られ、それらの礫を取り除くと茶碗や蓋、木片が出土した。井戸の深さは約1.5～1.6mで、底の

ELは約0.90mである。水面のELは約1.10m→20cm程度の深さで直径1m程度の広さであるから常時200Lの水量が蓄えられていたと考えられる。

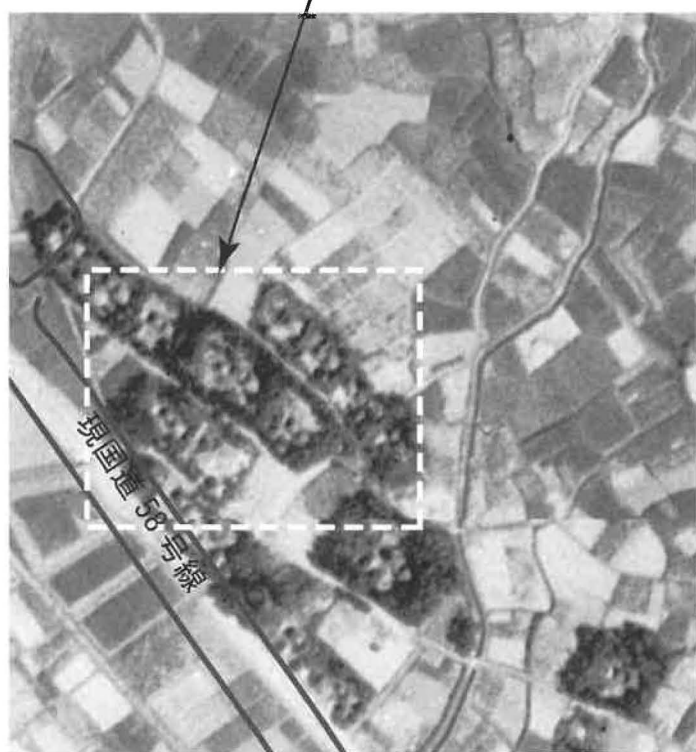
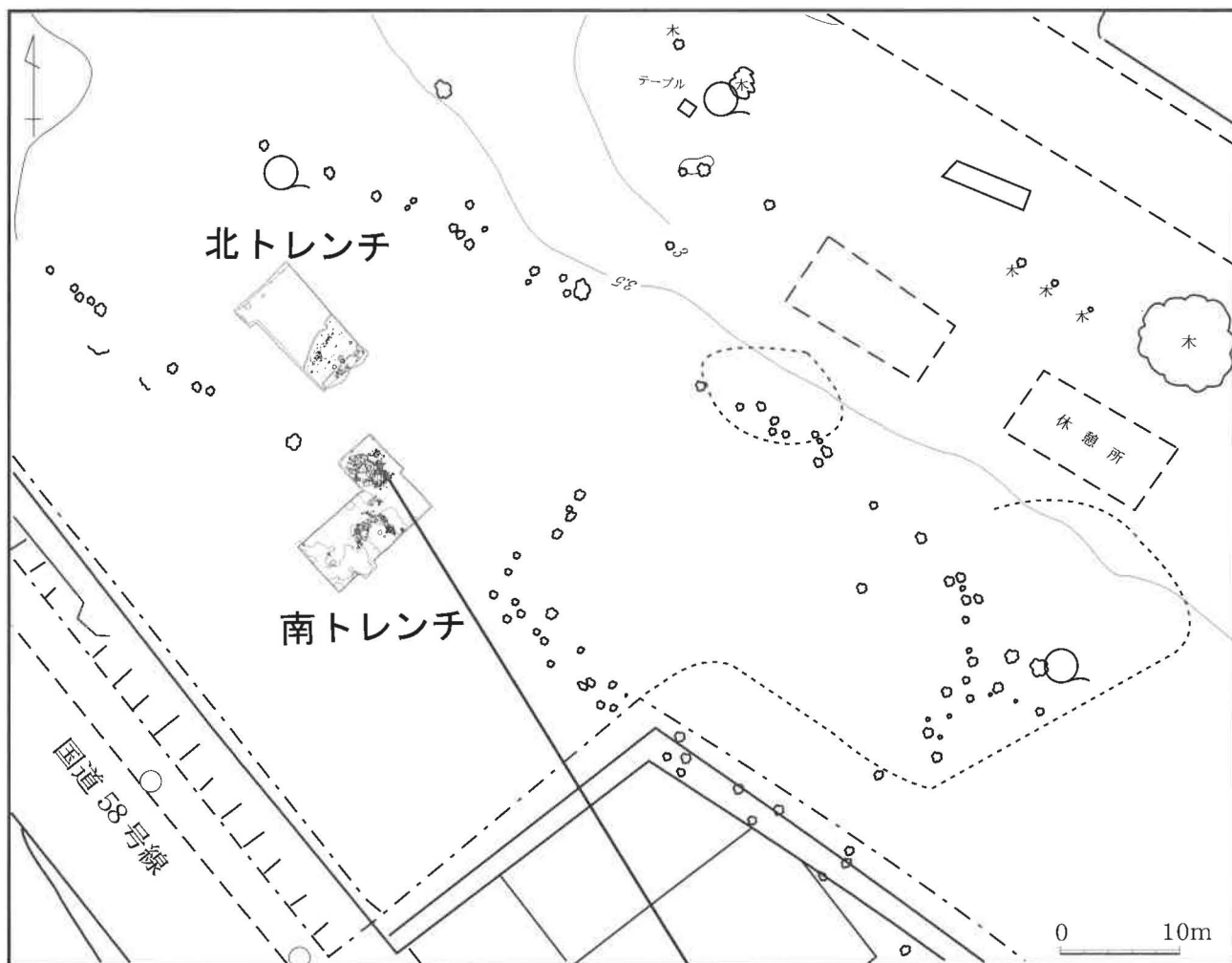
②敷石

チンガーから洗い場までの間を未加工で平らな面をもつ琉球石灰岩と更に平たく調整して寝かせた部分と多少ゴツゴツしている面を平たく調整して立てている部分とに分けられる。約1m20cm四方で、東側の作りはしっかりと残っているが、西側は大きく崩れ、本来の状態にはなっていない。平らな敷石と敷石の隙間からは寛永通宝が1点（第25図）確認できた。大きい岩では70cmを超えるものもあり又、石と石の隙間には小さな礫を詰めている事からなるべく平らな状態にしたかった事がわかる。

③洗い場

敷石同様、洗い場でも西側を構成している箇所が崩れている。使用されている琉球石灰岩はいずれも大きく40～70cmにもなる。洗い場の内側に面する部分と上部は平らに整形されており、石と石の間には10cmくらいの礫で隙間を埋め、更に砂を隙間につめ、十分締め堅め、水が漏れにくいよう設計されている。

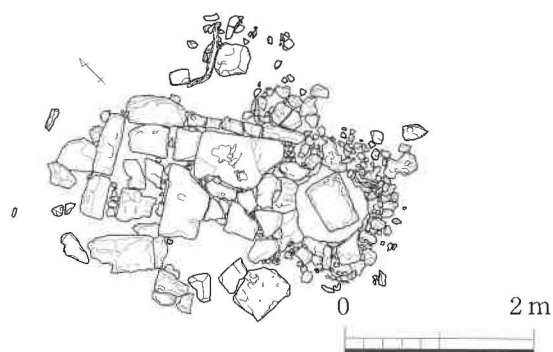
以上の遺構が確認できた層はⅡb層で、トレンチの東から西へ向かって緩やかな傾斜をしながら堆積をしている。その上層にあたる米軍による客土は層の上面を平らに仕上げている為、トレンチの東側よりも西側の方が厚くなっていく。おそらく、この辺りを整地する際により高い地表面から低い地表面へ客土（コーラル）を運んできた可能性がある。また、西側の方が客土が厚いため、その土圧でもって崩れた可能性もある。これらのことから遺構の西側が崩れていると思われる。



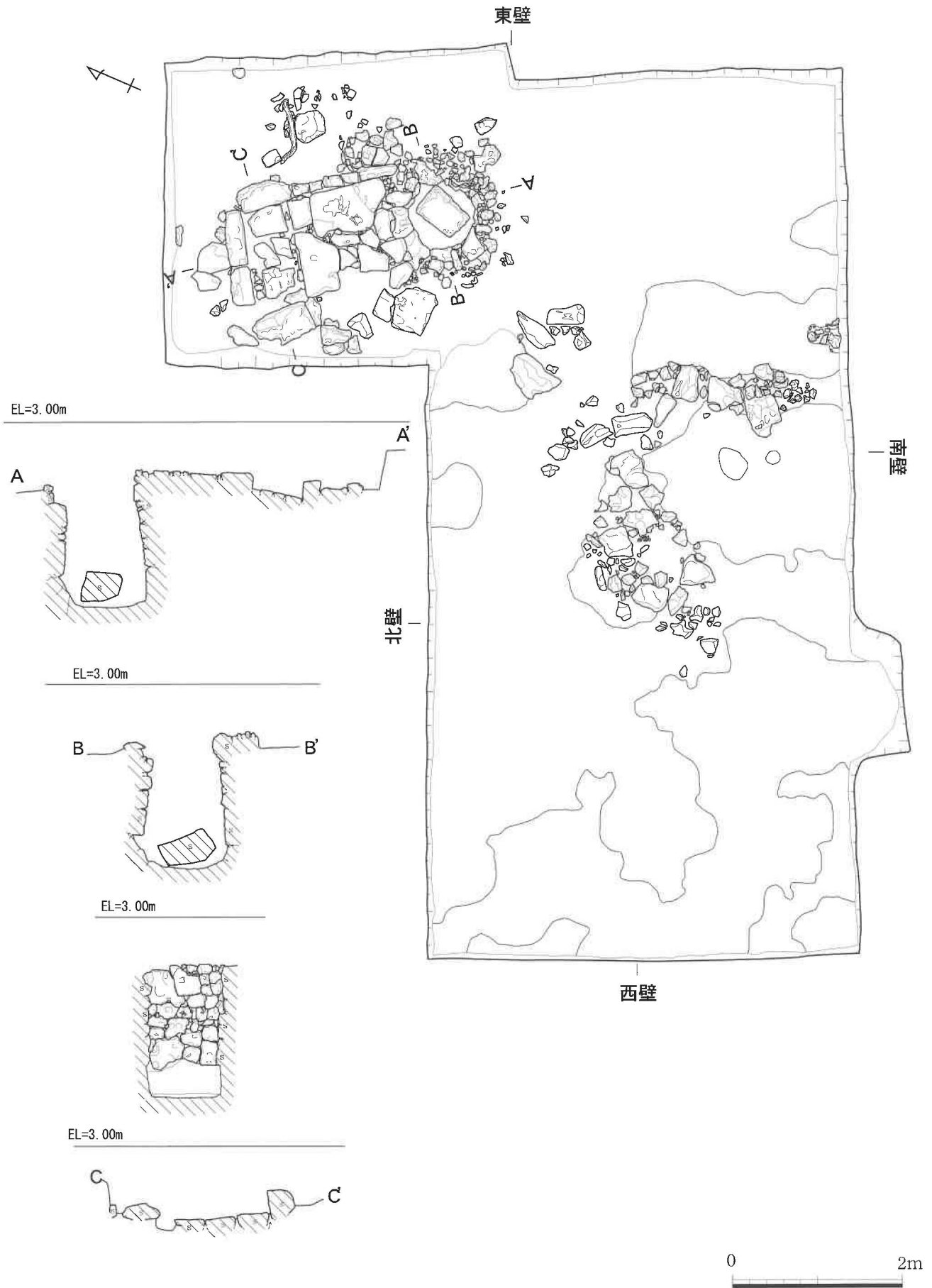
図版1 伊礼原B遺跡遠景



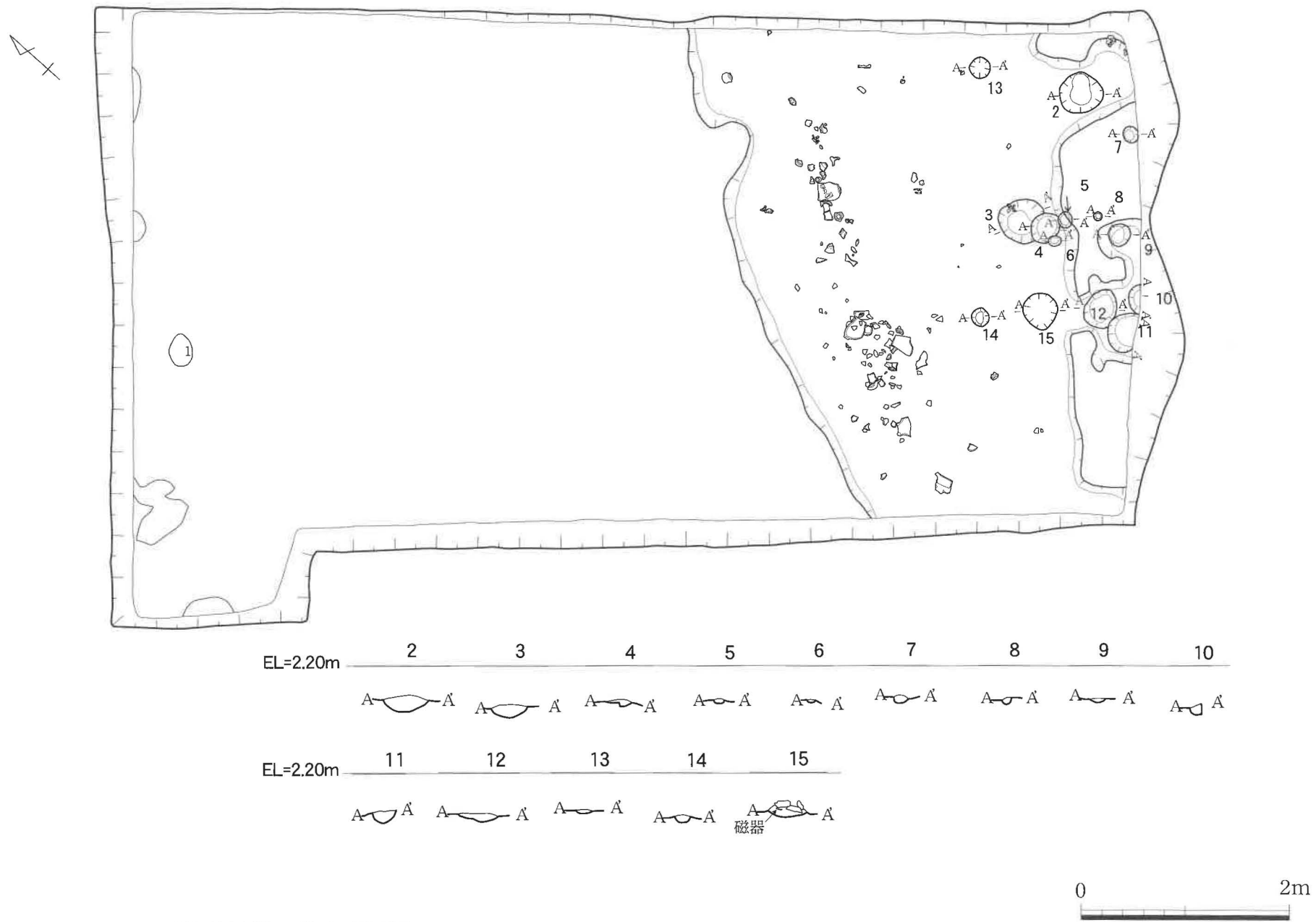
図版2 チンガー



第8図 戦前の集落とチンガー



第9図 南トレンチ戦前遺構（チンガー）平面図・断面図



第10図 北トレンチ戦前遺構と柱穴平面図

第5節 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は人工遺物と自然遺物がある。

土器34点、沖縄産施釉陶器398点、沖縄産無釉陶器435点、陶質土器496点、本土産磁器248点、石器3点であった。

以下、それぞれの遺物について略述する。

1、土器

土器は北トレンチで室川下層式土器2点、後期系17点、大当原式土器2点、型式不明9点の計30点。南トレンチでは後期系土器3点、型式不明1点の計4点で合計34点出土した。

これらについて主な遺物は表2に観察一覧、第11図、図版3に示した。以下、遺物について略述する。

室川下層式土器は2点出土した。いずれも北トレンチ白砂層の出土である。

図1は胴部で、器面の保持が悪く、文様などは明瞭でない。

図2は薄手の土器で、器面の保持も悪い。胎土にチャートの類を含むことから面縄前庭式土器に近いと思われるが、小破片のため、はっきりしない。

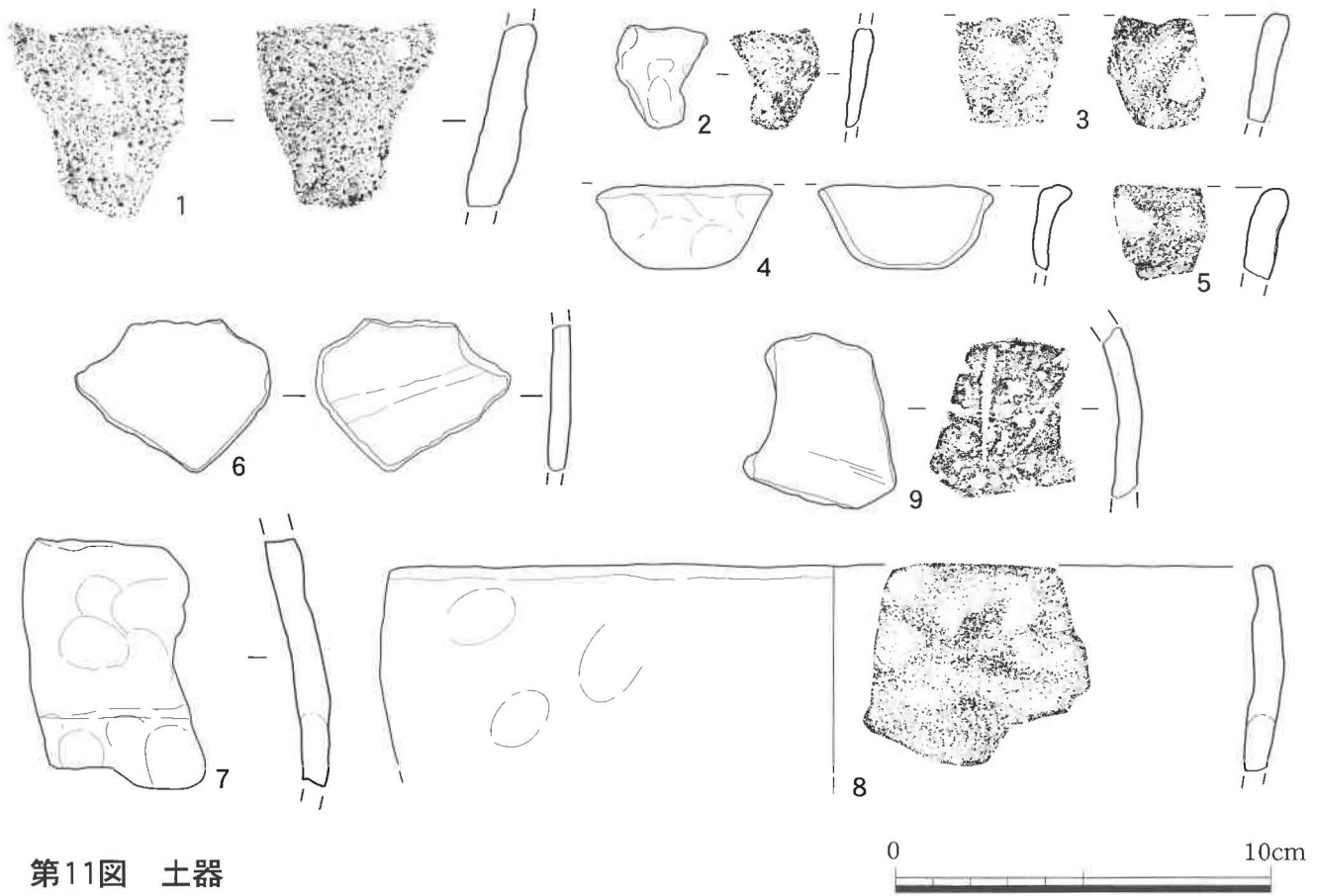
図3～7は後期系土器と思われる。図5は口縁部で口唇は鏝状に外反する。図3・5は指調整が明瞭に見られ、特に図3は、口唇部も指で調整し、波状を呈する。図7は厚手の胴部で、指調整も明瞭なことから大当原式土器の胴部と思われる。

図8・9はグスク系の土器である。図8は口縁部で内彎する。口唇部は角を呈し、泥質である。

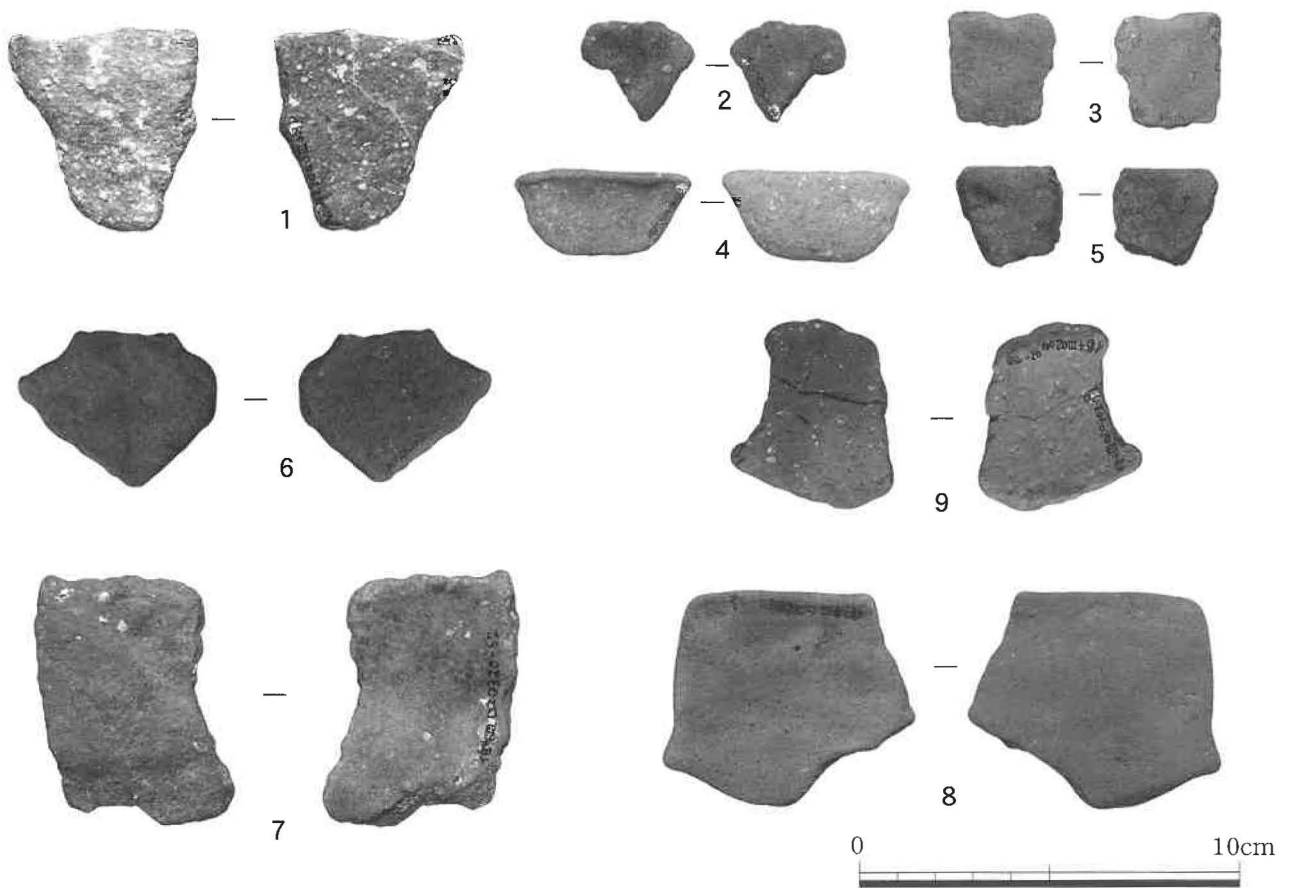
図9は胎土にグスク系土器の特徴である白色粒を混入する。これらの土器はそのほとんどが白砂層の出土で、包含層は認められない。隣接する伊礼原D遺跡や伊礼原遺跡（2006）からの流れ込みと思われる。同様な傾向は伊礼原B遺跡（1989）で報告されている。

表2 土器観察一覧

図版番号	報番号	種類	部位	口径・器高 底径(cm)	観察一覧	出土地
第11図(図版3)	1	室川下層式土器	胴部	—	砂質、石英・チャート、多量。角有り。赤褐色。焼成:やや良い。	北トレンチ白砂層④ 020524
	2	面縄前庭式土器?	胴部	—	砂質、チャート、多量。角前庭かも ローリング	北トレンチ攪乱部 020611
	3	後期系土器	口縁部	—	直口、波状口縁。泥質、白粒、光。少量。淡灰褐色。焼成:良好。	北(N○3)淡灰色土層 000219
	4	後期系土器	口縁部	—	外反口縁、玉縁。砂質、チャート・石英。暗黄褐色。焼成:悪い。ローリング。	南トレンチビーチロック① 020614
	5	後期系土器	口縁部	—	直口口縁、丸。砂質、光(黒)粒、少量。外面:暗茶褐色。焼成:良好。	北(N○1)淡黄色砂層 000219
	6	後期系土器	胴部	—	赤粒混入、赤茶褐色。焼成:良好。ローリング。	南トレンチ灰白色粗砂層(V)020613
	7	大当原式土器	胴部	—	光(黒)粒、多量。明瞭黄褐色。焼成:良好。ローリング。	北トレンチ白砂(凝固)層 020320
	8	グスク系土器	口縁部	口径23.5cm	内彎、角。少ない、石英・白粒混入、やや円味暗赤褐色。焼成:良好。ローリング。	北トレンチ白砂(凝固)層 020320
	9	グスク系土器	胴部	—	泥質、白粒・赤粒、多量。明赤褐色。焼成:良好。ローリング。	北トレンチ白砂(凝固)層 020402



第11図 土器



図版3 土器

2. 中国産陶磁器

中国産の陶磁器は、出土量は少ないが、青磁、染付、褐釉陶器が得られた。

a. 青磁

北トレンチで碗が1点出土した。

図1に示したもので、直口口縁の碗である。文様はヘラで細かく蓮弁文が描かれている。釉には貫入が見られ、釉は濃緑釉である。口径は推計13.4cmである。類例遺跡には湧田古窯跡や天界寺があり、16世紀ごろの線刻蓮弁文と思われる。

b. 染付

碗16点、小碗1点、杯2点、鉢1点、不明8点の計28点出土した。

出土地は北トレンチⅡ層4点、Ⅲ層で2点、南トレンチⅠ層3点、Ⅱ層8点、Ⅲ層1点、床掃除7点、表面採集1点、不明で1点得られた。

・碗：口縁部9点、胴部4点、底部3点、の計16点出土した。

図3、4、11、12は口縁部で11と12は小振りで小碗の可能性もある。

図3は口縁部で、直口する。文様は外面に草花文が見られ、呉須の発色は鈍い。南トレンチ、床掃除で出土。

図4は碗の口縁部で、外反する。文様は外面に草花文と内唇に圏線を配し、呉須の発色は鈍い。南トレンチの表面採集である。

図11は口縁部で外反する。文様は外面に草花文を施し、呉須の発色は濃い。南トレンチⅡ層の出土。

図12は口縁部で外反する。文様は外面に唐草文、内唇に唐草文を配す。呉須の発色は濃い。18C頃のものと思われる。南トレンチ床掃除で出土。

図5は胴部で、文様は外面に菊花文、内底に圏線を配す。呉須の発色は鮮やかである。16C中～後のものと思われる。南トレンチ床掃除で出土。

図7は底部である。文様は外面腰部にラマ式蓮弁文、内底に圏線を配す。素地は白く、呉須の発色は薄い。18C末～19C前半。南トレンチⅡ層の出土。

図9は底部で内底に文様が確認出来る。呉須の発色は薄い。畳付無釉である。底径7.0cmを測る。南トレンチⅠ層の出土。

図10は底部で、文様は外面の腰部と外底に圏線が施されている。呉須の発色は薄い。畳付無釉。底径7.3cm。出土地不明。

図6は胴部で、文様は外面に菊花文、内底に圏線を配す。呉須の発色は鮮やかである。16C中～後。南トレンチⅡ層の出土。

図8は胴部で文様は外面の胴部に唐草文、腰部に蓮弁文、内底に圏線を配する。呉須の発色は悪い。試掘No.1暗茶色砂質土層の出土である。

・杯：口縁部1点、胴部1点の計2点出土した。

図13の口縁部は直口口縁で、文様は外面に梵字文が見られ、呉須の発色は悪い。釉は不透明である。南トレンチⅡ層の出土である。

c. 褐釉陶器

壺3点、不明8点の計11点出土した。

出土地別には南トレンチⅠ層1点、Ⅱ層7点、床掃除で2点、表面採集で1点である。

図15は器種は不明で、胴部である。南トレンチ床掃除で出土した。

外面は暗茶褐色の釉を施す。内外面とも叩き痕が顕著である。おそらく壺の肩部と考えられる。器厚は10mmと前者よりは厚い。

まとめ

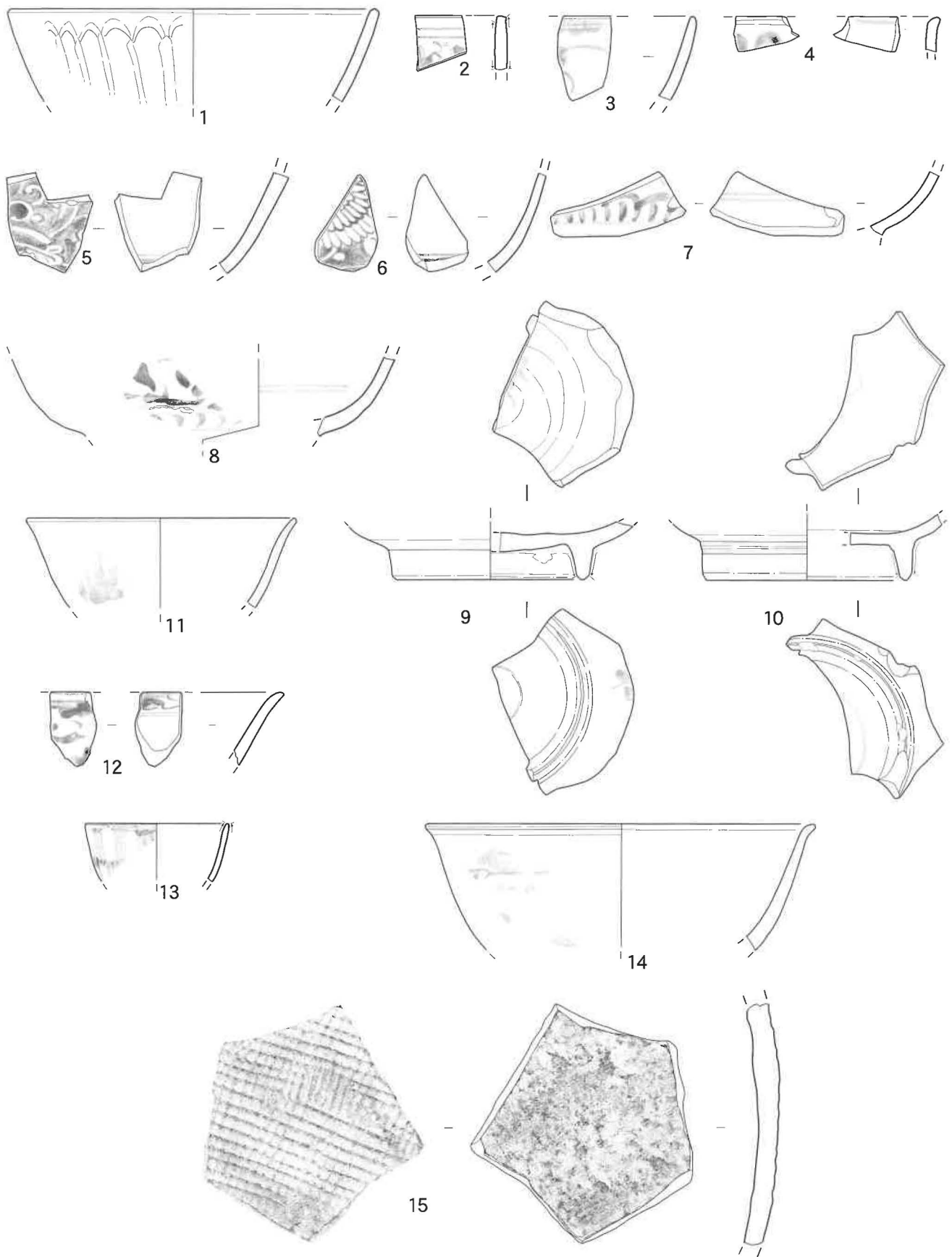
中国産陶磁器は北・南トレンチともⅡ層の出土である。出土量も少なく、青磁はヘラ描きの蓮弁文、染付は碗と杯が出土し、16C中～後および18C末～19C前半のものと思われる。隣接する伊礼原D遺跡から散った遺物と思われる。

表3 中国産陶磁器出土量

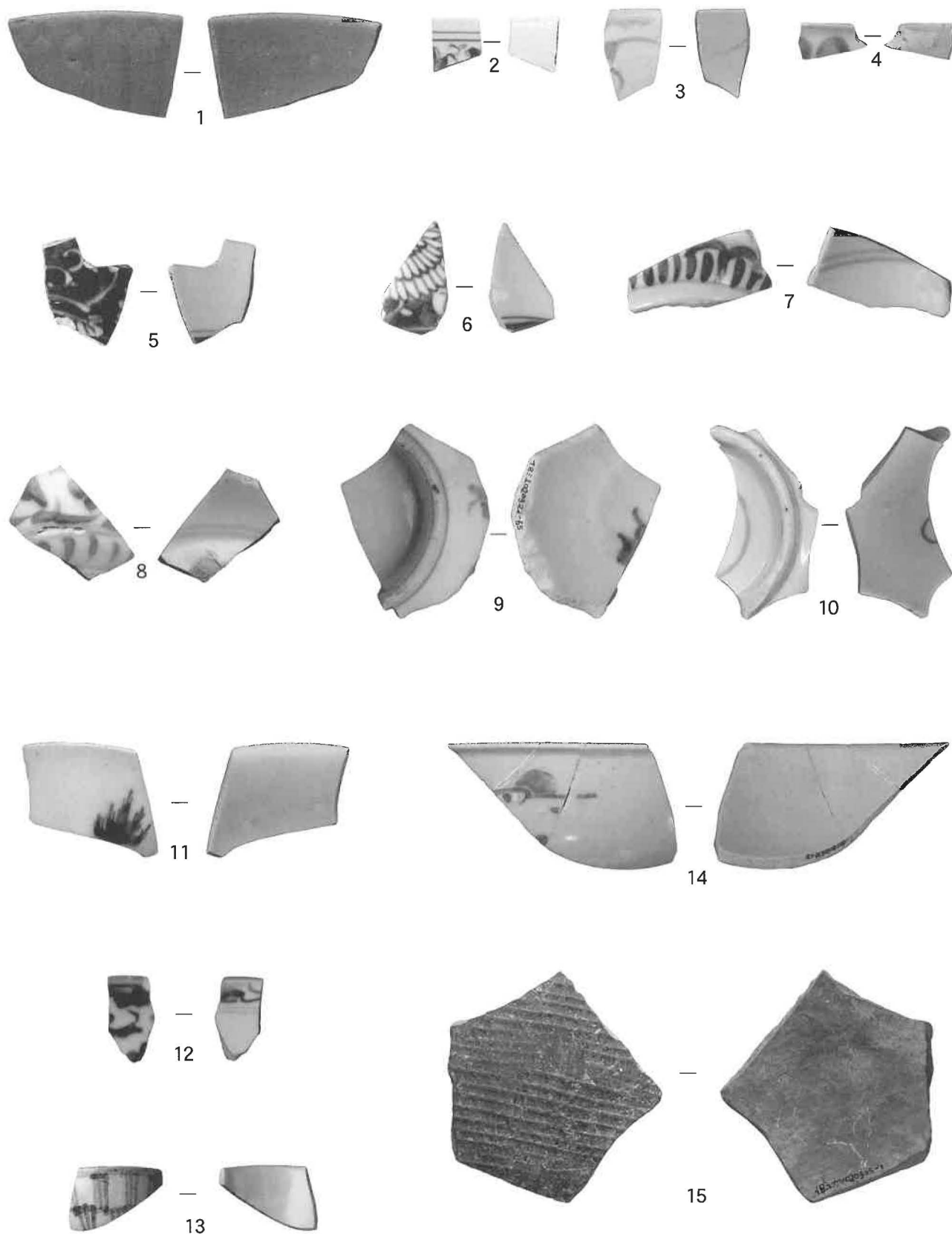
出土地		器種	褐釉		青磁	白磁			染付				小計	層序 合計	地区 合計
			壺	不明	碗	碗	猪口	碗	小碗	杯	鉢	不明			
北 ト レ ン チ	Ⅱ	口						1					1	4	7
		胴						1				2	3		
	Ⅲ	胴						1					1	2	
		底						1					1		
		口～底											0		
NO.5	口			1								1	1		
南 ト レ ン チ	表採	口						1					1	38	
		胴		1									1		
	Ⅰ	口						1					1		
		胴		1								1	2		
		底				1		1					2		
	床掃除	口						1	1				2		
		胴	1	1						1	1	3	7		
		底				1							1		
	Ⅱ	口				1		5		1			7		19
		胴	1	5				2					8		
		底	1			1	1						3		
		口～底					1						1		
	Ⅲ	胴										1	1		1
胴											1	1	1		
不明	不明	底					1					1	1	1	
小計			3	8	1	4	2	16	1	2	1	8			
合計			11		1	6			28				46		

表4 中国産陶磁器観察一覧

第 図 図版	報告 番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第 12 図 (図 版 4)	1	青磁	碗	口縁部	口径13.4cm	直口口縁。文様:外面に線刻蓮弁文。時期:16世紀	北トレンチ 試掘NO.5 000219
	2	染付	碗	口縁部	—	直口口縁。文様:外面に圈線と草花文。口唇内面:無釉。	南トレンチⅡ 020523
	3	染付	碗	口縁部	—	直口口縁。文様は外面に草花文。呉須の発色は鈍い。素地:白色。	南トレンチ 床掃除 020306
	4	染付	碗	口縁部	—	外反口縁。文様:外面は草花文、内唇に圈線。呉須の発色:鈍い。素地:白色。	南トレンチ 表採 020304
	5	染付	碗	胴部	—	文様は外面に菊花文、内底に圈線。呉須の発色は鮮やか。素地:白色。時期:16C中～後。	南トレンチ 床掃除 020307
	6	染付	碗	胴部	—	文様は外面に菊花文、内底:圈線。呉須の発色は鮮やか。素地:白色。16c中～後。	南トレンチⅡ 020527
	7	染付	碗	底部	—	文様:外面の腰部にラマ式蓮弁文、内底:圈線。呉須の発色は薄い。素地:白色。18c末～19c前。	南トレンチⅡ 020524
	8	染付	碗	胴部	—	文様:外面に唐草文と蓮弁文。内底:圈線 呉須の発色は悪い 素地:白色。	NO.1 暗茶色砂質土層 000124
	9	染付	碗	底部	底径7.0cm	呉須の発色は淡い。畳付無釉。素地:白色	南トレンチⅠ 020322
	10	染付	碗	底部	底径7.3cm	腰部:圈線、外底内圈線。呉須の発色は淡い。畳付無釉。素地:白色	不明
	11	染付	碗	口縁部	口径9.8cm	外反口縁外面:草花文呉須の発色濃い。素地:乳色	南トレンチⅡ 020524
	12	染付	碗	口縁部	—	外反口縁。外面唐草文、内唇唐草文。呉須の発色濃い。素地:白色	南トレンチ 床掃除 020308
	13	染付	杯	口縁部	口径5.3cm	直口口縁。文様:外面は梵字文。呉須の発色は悪い。不透明。素地:白色。	南トレンチⅡ 020605
	14	色絵	碗	口縁部	口径14.2cm	外反口縁。外面:赤一花、青一雲、黄。彩色はげる。素地:灰色。	南トレンチⅡ 020531
	15	褐釉陶器	不明	胴部	—	外面:暗茶褐色釉。内外面:叩き痕。	南トレンチ 床掃除 020305



第12図 青磁・染付・褐釉陶器



図版4 青磁・染付・褐釉陶器

3. 近世陶磁器

a. 本土産磁器

近世の肥前や薩摩で焼かれた磁器をここにまとめた。薩摩磁器は2006年に平佐窯の報告などから明らかにされつつある資料で、鹿児島大学考古学研究室の研究などで明らかになってきた。ここでは鹿児島大学の渡辺先生に同定をいただいた資料を報告する。肥前磁器と薩摩磁器の違いは釉が青味を帯びる方が薩摩磁器の特徴のようである。小碗、杯などが出土している。

図1は小碗の口縁部で、外反する。外面の文様は小破片のため、構図ははっきりしない。

図2・5は碗で、釉はやや青みを帯び、文様の呉須もぼんやりと施され、薩摩磁器の可能性が高い。前者は直口、後者は端反碗である。小破片ではあるが、新資料のため紹介した。

図3・4は杯で、前者は胴部で後者は口縁部である。図3は薩摩、図4は肥前磁器の可能性が高いようである。

b. 本土産陶器

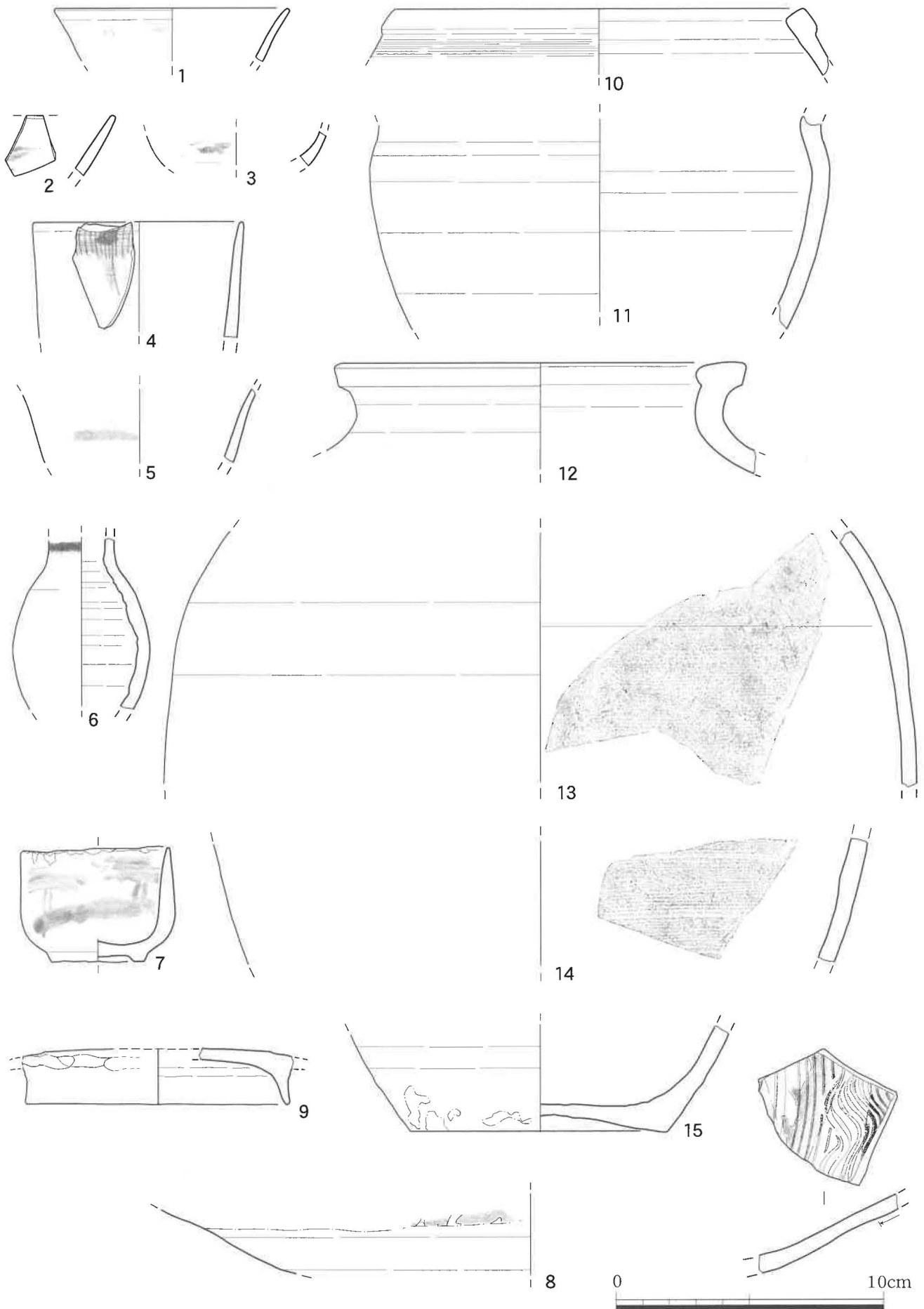
薩摩焼：薩摩焼とされるものは瓶（図6）、山茶家（図10）、土瓶（図11）、壺（図12・13・14）などが出土した。壺はそば釉を施したもので、厚さや釉の具合から同一個体と思われる。いずれも苗代窯で作られたものと思われる。

唐津焼：図8は唐津焼の皿の胴部で、内面に唐津焼の特徴である刷毛目文様が施されている。

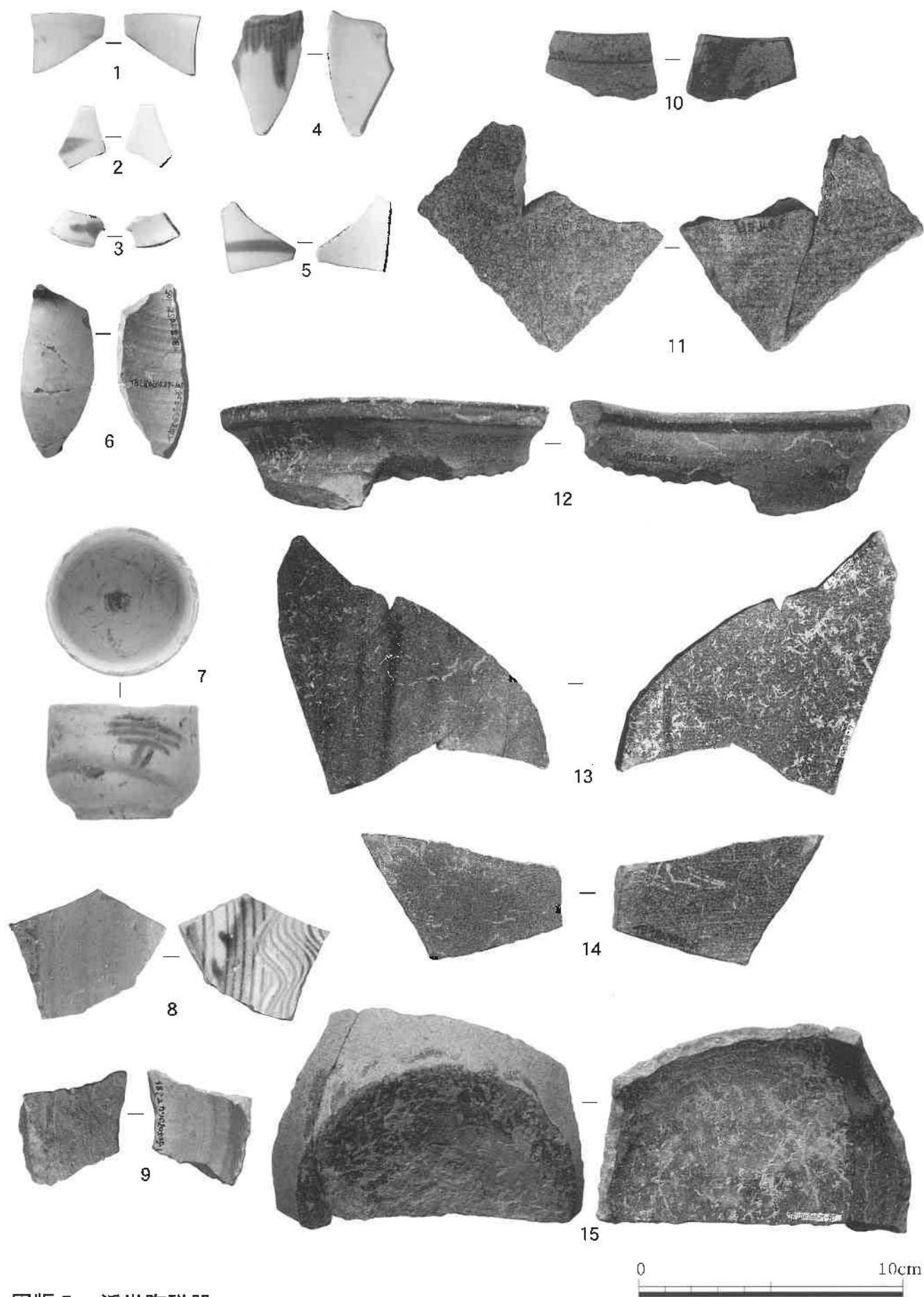
・不明：図7は白化粧を施した杯である。文様は山水画風の文様で、幕末のころ流行していたようである。

表5 近世陶磁器観察一覧

第 図 図版	報告 番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第 13 図 (図 版 5)	1	本土産磁器	小碗	口	口径8.8cm	外反口縁・舌状。文様：外面一有り呉須一淡い。釉：白釉。素地：白。薩摩か	南トレンチⅡ 020524
	2	本土産磁器	碗	口	—	直口口縁・舌状。文様：外面一草花呉須一ぼんやり。釉：青味。素地：白。薩摩	北トレンチⅡ 020322
	3	本土産磁器	杯	胴	—	外反口縁・舌状。文様：外面一唐草呉須一色悪い。釉：白釉(青味)素地：白。19c。量産品。	南トレンチ床掃除 020306
	4	本土産磁器	杯	口	口径5.9cm	直口口縁・舌状。文様：外面・口唇。呉須一淡い。釉：白。素地：白。伊万里	南トレンチⅡ 020528
	5	本土産磁器	小碗	胴	—	文様：外面一線(ワ)・草花。呉須一淡い。釉：青味。素地：白。薩摩ばい端反碗。	南トレンチ床掃除 020307
	6	本土産陶器	瓶	胴	—	釉：白化粧、口唇一サビ釉。素地：赤土・暗灰。内面一轆轤明瞭。焼成：良い。明治以降。最大胴径6.6cm。薩摩 龍門司。	南トレンチⅡ 020529
	7	本土産陶器	杯	完形	口径5.5cm 器高4.3cm 底径3.4cm	直口口縁。文様：外面一山水文。釉：外面一白化粧・透明釉、外底釉、畳付無釉。素地：灰。幕末山水文風。	北トレンチⅡ 020322
	8	本土産陶器	皿	胴	—	文様：刷目、白と縁釉。釉：外面・口唇一透明釉。素地：灰。外面一轆轤痕。唐津焼	南トレンチⅡ 020524
	9	本土産陶器	フタ		口径9.8cm	脚タイプ。釉：外面一暗茶褐色。素地：赤褐色。内面一轆轤明瞭。苗代川に似る。暗緑or褐釉。	南トレンチ床掃除 020305
	10	本土産陶器	鍋	口	口径15.2cm	角。内湾一口唇 肥厚10mm。文様：無文。釉：暗灰釉。素地：暗灰。外面一轆轤。苗代川、山茶家。おじやをつくる。	南トレンチⅡ 020524
	11	本土産陶器	土瓶	胴	—	文様：無文。釉：暗茶色、そば釉。素地：暗茶褐色。内面一轆轤痕。不明と接合。南トレⅠ020320-55、南トレⅡ020527-87。苗代川。	南トレンチⅡ 020531
	12	本土産陶器	壺	口	口径15.6cm	内部有段。文様：無文。釉：暗灰釉、口唇一無釉。素地：暗灰。外面一轆轤。	北トレンチⅡ 020312
	13	本土産陶器	壺	胴	—	文様：無文。釉：暗灰釉、そば釉。素地：暗灰。18・19c。南トレ020306-2と接合。苗代川、貝の痕跡はない。	南トレンチ床掃除 020308
	14	本土産陶器	壺	胴	—	文様：無文。釉：暗灰釉、そば釉。素地：暗茶色。内面一轆轤痕(細かい)。薩摩。	北トレンチⅡ 020312
	15	本土産陶器	徳利	底	底径9.6cm	釉：暗茶釉、そば釉。底面一糸切がない。薩摩？苗代川。	南トレンチⅡ 020527



第13図 近世陶磁器



图版5 近世陶磁器

4. 近代磁器

ここでは主に型紙刷り、銅版転写、吹き絵、ゴム印絵付けなど近・現代の本土産磁器についてまとめた。出土総数は238点（近世磁器の点数含む）である。

以下、器種別に略述し、詳細は表7の観察一覧、図14、15、16、図版6に示した。

器種は碗、小碗、筒碗、飯碗、皿、杯、急須、鉢、蓋、火炉、猪口がある。主に北トレンチII層に出土している。

a. 碗

44点出土した。

ほとんどは型紙摺り外反口縁である。

文様は外面、内唇、内底に見られ、それぞれその模様は関連している。

文様は下記の3種が確認される。（なお、分類記号については伊礼原E遺跡と統一したため、C種が本遺跡では欠落している。）

記号分類

A種：笹－図1

B種：笹、梅、丸窓（鶴）－図2、3、4

D種：菱形窓（丸）－図5

A種3点、B種5点、D種7点である。D種が多いようである。

D種は菱形と丸で構成する幾何学模様で、沖縄では戦後まで残っていた模様で、一般に「スンカン」と称されているものである。

文様の関連をみると外面と内唇の文様は前述したように同じようなパターンで構成されるが、内底文様は図1は草花文、図2、4、5は円の中に小花と葉をあしらうような構図で同じである。また、図2、4、5には内底面に製作上の目痕が確認できる。

b. 皿

北トレンチ10点、南トレンチ16点、試掘NO.1で3点、計29点出土した。加飾は銅版転写（図7～10）、ゴム印（図6、11、12）がある。

また、文様の構成は銅版転写は草花文が主で、ゴム印は山水画が見られる。

主に銅版転写の直口口縁である。銅版転写の色は青（図8、9）と緑が（図7）ある。

皿の大きさは径13cm（図6～9）、径10cm（図10、11）と2つに分かれる。

c. 小碗

北トレンチ10点、南トレンチ16点、試掘NO.1、1点、不明7点、計64点出土した。

加飾は種類は吹き絵やゴム印、クロム青磁などが見られる。

図15は唐草の総文様、図19は銅版転写、図20はクロム青磁で飛びカンナを施し、図18、21は吹き絵などの加飾が見られる。

器形は外反するもの（図16、17）と、直口するもの（図15、18、19、20、21）の2種がある。

d. 杯

杯は4点得られ、内底に吹き絵を施すもの（図14）無文（図13）がある。いずれも口縁部は外反する。

e. 急須

大（図22）小（図23）図22は藍色で花を大きくあしらい、小（図23）は笹をあしらったものである。いずれも近・現代の資料と思われる。

f. 筒碗

図24は型紙摺りの筒碗である。直口口縁。口唇および外底は無釉である。

g. 蓋

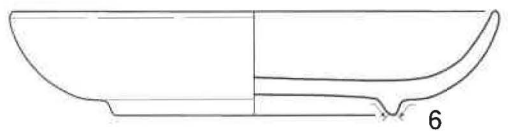
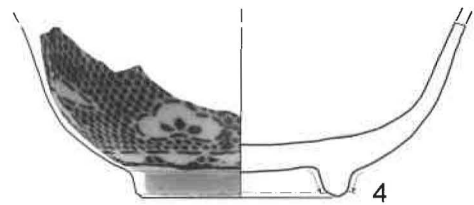
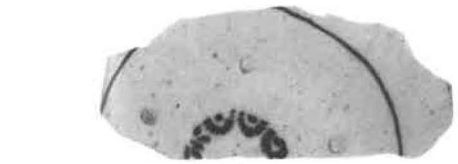
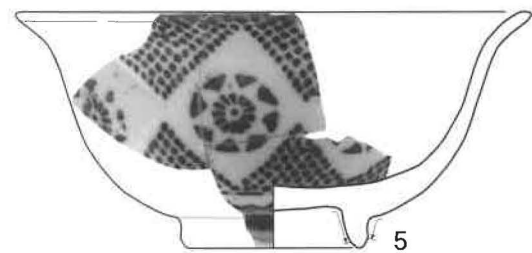
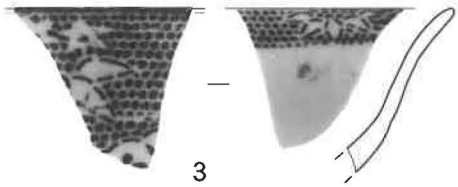
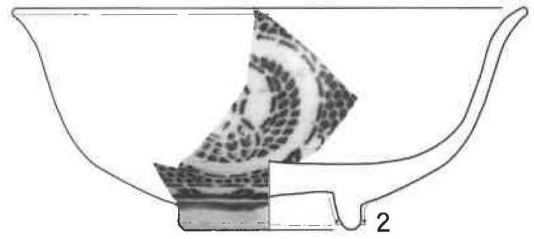
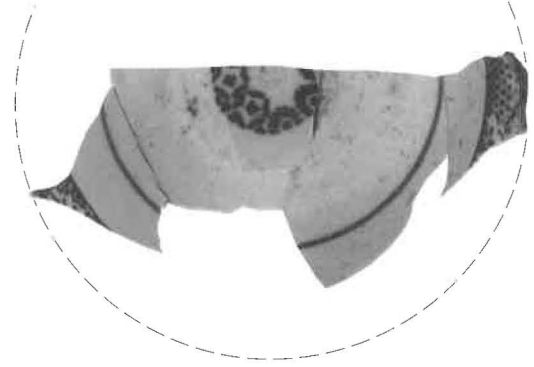
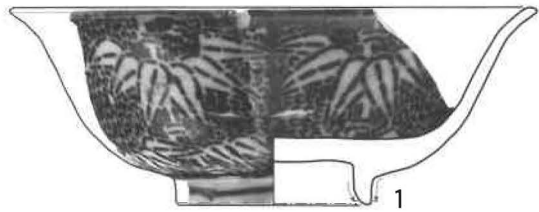
図25は型紙摺りの蓋である。口唇は無釉である。身は前述の筒碗だと想定される。

表6 近世・近代陶磁器出土量

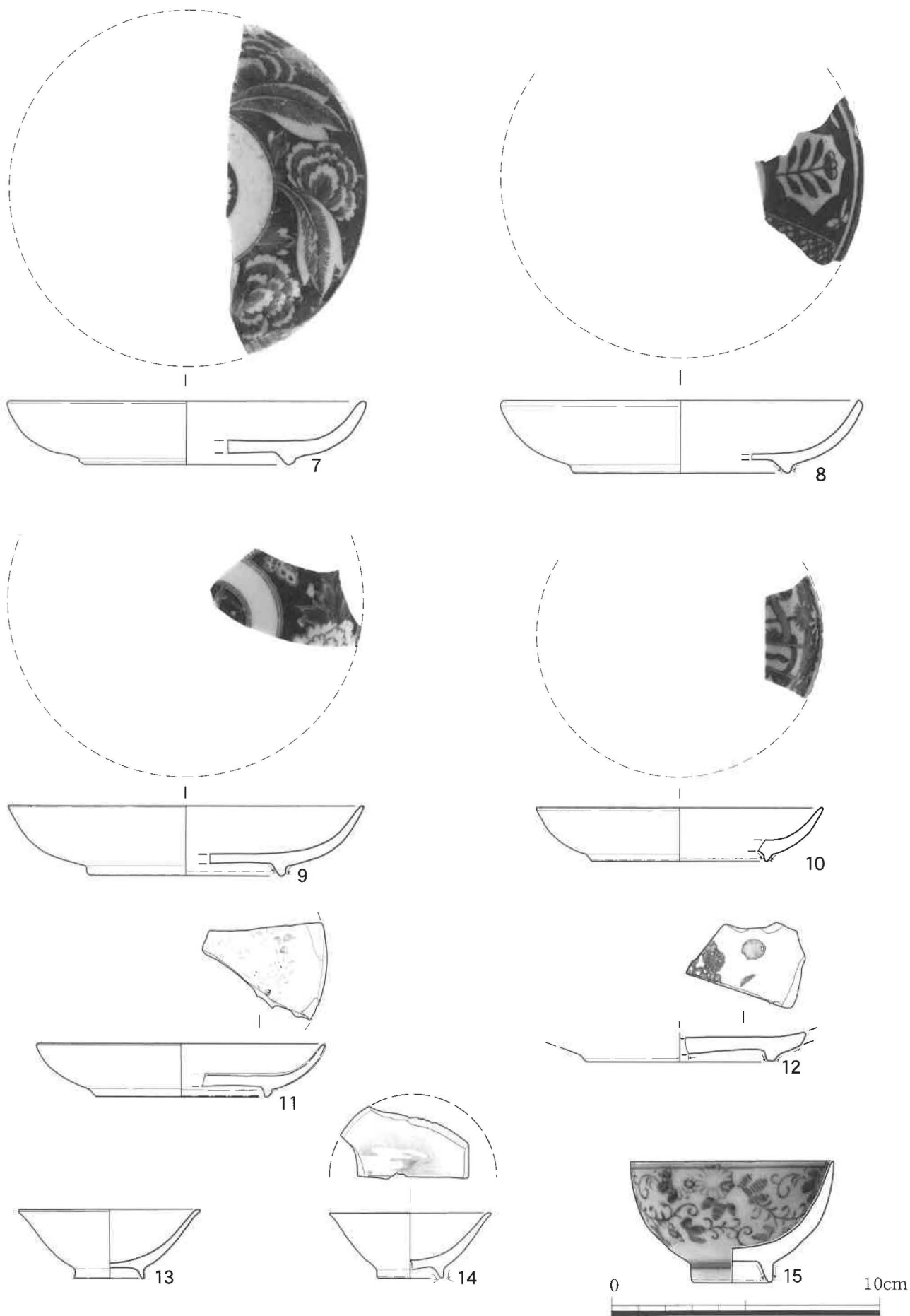
出土地	器種	陶器							磁器										合計	層序 合計	地区 合計			
		小 碗	皿	壺	フタ	火 炉	猪 口	不 明	碗	小 碗	筒 (小) 碗	飯 碗	皿	杯	急 須	鉢	フタ	火 取				猪 口	不 明	
北 ト レン チ	表採	口							1													1	2	76
		胴											1									1		
	Ⅱ	口								6	11			1			1	1			1	22	71	
		胴							1	3				2		2					16	24		
		底					1			2	7				1	1						12		
	Ⅲ	口～底								2	4			5						2		13	3	
胴																				2	2			
南 ト レン チ	表採(不明)	口								1												1	13	140
		胴													1						10	11		
		口～底												1								1		
	Ⅰ	口								8	3			1								12	26	
		胴							1	2	1	1				2					3	10		
		底								1	2											3		
		口～底														1						1		
	床掃除	口								7	7			1	2	2		2				21	66	
		胴					1			3	5					3					16	28		
		底							1		2	1		3								7		
		口～底									3			7								10		
	Ⅱ	口	2		1					3	5	1										12	34	
		胴								2	2	1									12	17		
		底									2			1								3		
口～底										2			2								2			
Ⅲ	底									1											1	1		
	口									2					1						3			
不 明	不明	胴							1	3	1				1					5	11	22	22	
		底									3		1		1					1	6			
		口～底									1				1									2
		口								1		1												2
No.1	暗茶色砂質 土層	胴		1													2				3	10	10	
		底												1										1
		口～底									1			2										4
		口								1		1												2
小	計	2	1	1	1	1	1	1	3	44	64	5	1	29	4	16	1	5	1	2	66			
合	計	10							238										248					

表7 近代磁器観察一覧

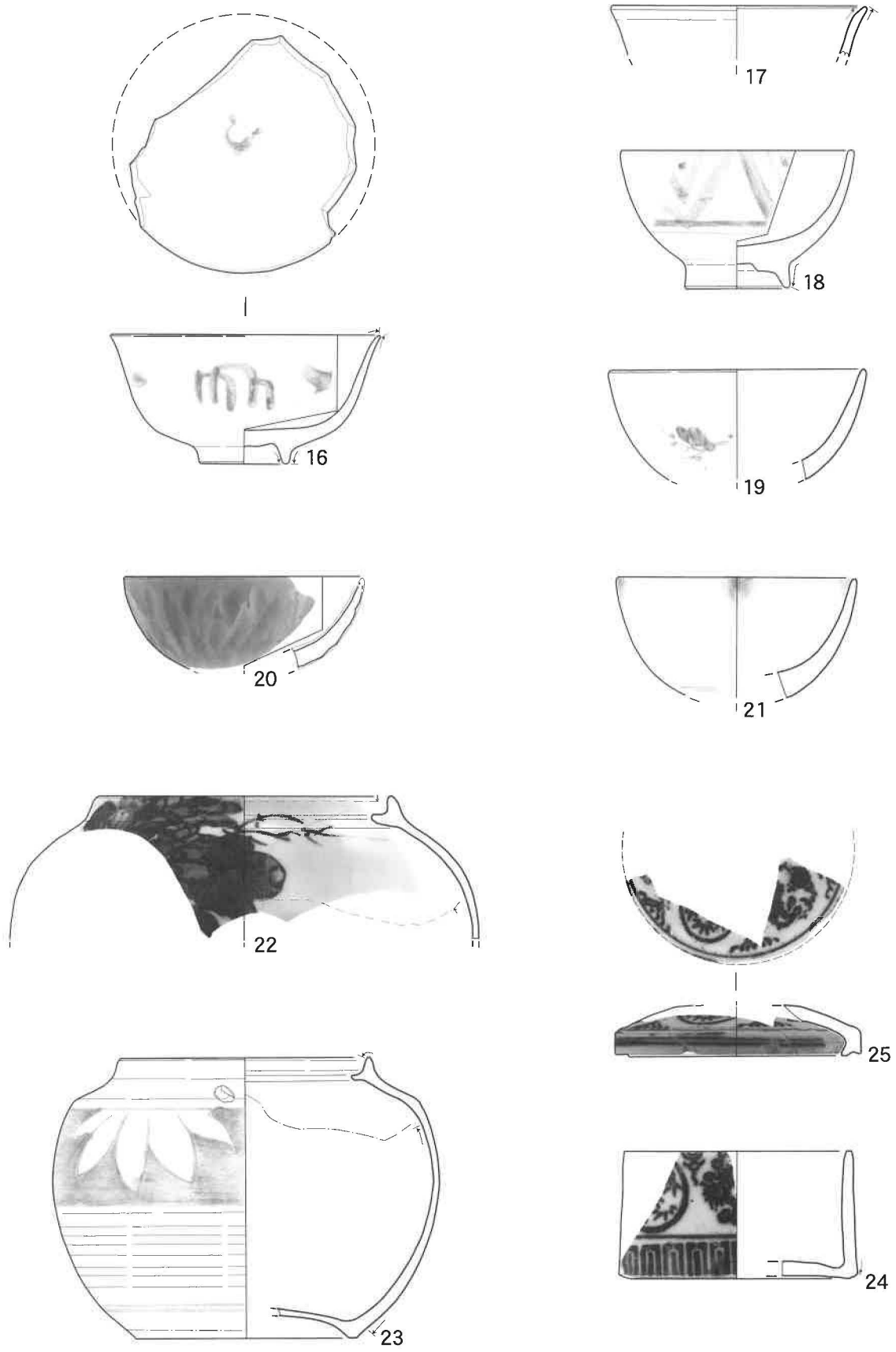
第 図 図版	報告 番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第14図(図版14)	1	碗	口～底部	口径13.9cm 器高5.2cm 底径5.1cm	型紙摺り。外反口縁。文様A。外面：笹文、内面：笹文、内底：草花文。発色はコバルト。畳付無釉。	北トレンチⅡ 020322
	2	碗	底部	口径13.6cm 器高5.8cm 底径4.8cm	型紙摺り。外反口縁。文様B、外面：丸窓に鳥文、内唇：笹・梅文、内底：菊水仙文。畳付無釉。内底：目痕。喜友名グスク5	南トレンチⅠ 020318
	3	碗	口縁部	—	型紙摺り。外反口縁。外面：笹文に梅、星か花文、内面：笹文。喜友名グスク5	南トレンチⅠ 020318
	4	碗	底部	底径5.1cm	型紙摺り。外面：笹文と梅、内底に花文。畳付無釉。内底：目痕。	北トレンチⅡ 020322
	5	碗	口～底部	口径13.6cm 器高6.3cm 底径4.9cm	型紙摺り。外反口縁。文様D、外面：菱形窓に花文、内面：三角窓に花文、内底：花文。畳付無釉。内底：目痕。喜友名グスク5	北トレンチⅡ 020322
	6	皿	口～底部	口径12.9cm 器高2.7cm 底径7.4cm	ゴム印。直口口縁。内面：山水文。畳付無釉。型造り	北トレンチⅡ 020312
第15図(図版15)	7	皿	口～底部	口径13.4cm 器高2.4cm 底径8cm	銅版転写。直口口縁。内面：牡丹文と唐草文。発色は緑。畳付無釉。	北トレンチⅡ 020322
	8	皿	口～底部	口径13.5cm 器高2.7cm 底径8.1cm	銅版転写。直口口縁。内面：窓に草花文と蝶。口唇錆釉、畳付無釉。型造り。	南トレンチ 床掃除 020307
	9	皿	口～底部	口径13.2cm 器高2.6cm 底径7.4cm	銅版転写。直口口縁。内面：牡丹と小花文。口唇錆釉、畳付無釉。型造り。	南トレンチ 床掃除 020306
	10	皿	口～底部	口径10.7cm 器高2cm 底径6.6cm	銅版転写。直口口縁。内面：八方区画花文畳付無釉。型造り。	南トレンチⅡ 020528
	11	皿	口～底部	口径10.8cm 器高2cm 底径6.4cm	ゴム印。直口口縁。内底：草花文。畳付無釉。	南トレンチ 床掃除 020306
	12	皿	底部	底径7.0cm	ゴム印。内底に草花文。畳付無釉。	南トレンチ 床掃除 020306
	13	杯	口～底部	口径6.8cm 器高2.6cm 底径2.6cm	やや外反口縁。無文。畳付無釉。	不明
	14	杯	口～底部	口径6cm 器高2.45cm 底径2.4cm	吹き絵。やや外反口縁。内底：富士山。畳付無釉。	北トレンチⅡ 020312
	15	小碗	口～底部	口径7.6cm 器高4.5cm 底径3cm	ゴム印。直口口縁。外面：唐草文。畳付無釉。	北トレンチⅡ 020322
第16図(図版16)	16	小碗	口～底部	口径9cm 器高4.35cm 底径3cm	やや外反口縁。外面：梵字文、内底：文様有。口唇錆釉、畳付無釉。	北トレンチⅡ 020312
	17	小碗	口縁部	口径8.6cm	やや外反口縁。口唇無釉。	南トレンチⅡ 020527
	18	小碗	口～底部	口径7.8cm 器高4.65cm 底径3.7cm	吹き絵。直口口縁。外面：青で幾何学文。胴部圏線外底、高台内無釉。2段	不明
	19	小碗	口縁部	口径8.4cm	銅版転写。直口口縁。外面：山水文。	北トレンチⅡ 020322
	20	小碗	口縁部	口径8cm	クロム青磁。直口。外面：トビガンナ。	北トレンチⅡ 020322
	21	小碗	不明	口径9.2cm	吹き絵。直口口縁。外面：吹付で丸文。口唇錆釉。	不明
	22	急須	口縁部	口径10cm	内部有段。外面：青で花文。内面：胴部まで施釉、内唇：無釉。	南トレンチ 床掃除 020307
	23	急須	口～底部	口径8.3cm 器高9.45cm 底径7.4cm	内部有段。肩部に笹、腰部に圏線外面：青で笹文。内面：胴部まで施釉、内唇：無釉。	南トレンチⅠ 020322
	24	筒碗	底部	口径7.6cm 器高4.3cm 底径8cm	型紙摺り。直口口縁。外面丸で花文、連弁。外底無釉。	北トレンチⅡ 020322
	25	蓋	口縁部	口径8.2cm	型紙摺り。直口口縁。外面：丸で花文。口唇無釉。	北トレンチⅡ 020322



第14図 近代磁器1

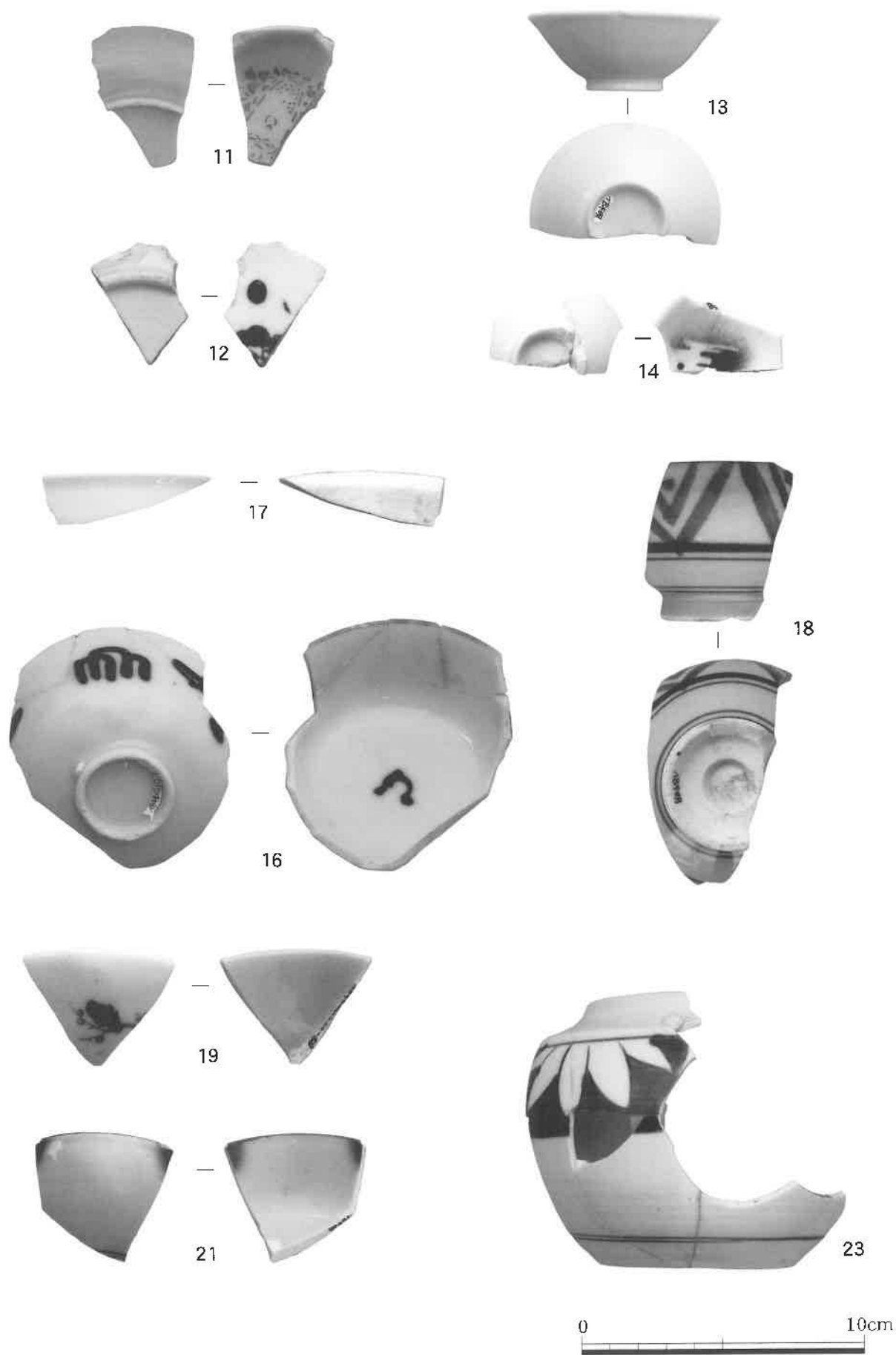


第15図 近代磁器2



0 10cm

第16図 近代磁器3



图版6 近代磁器

5. 陶質土器

鍋・急須・火炉・蓋などが出土した。

主に南トレンチで出土している。

以下、器種別に略述し、詳細は表9の観察一覧、図17、18、図版7、8に示した。

a. 鍋

鍋は口縁部17点、底部130点、胴部179点出土した。

鍋は「く」の字に湾曲する。口縁部の幅で大は17～24mm、小は12～14mmの2種に分類される。

大に分類されるのは図2、4、7、小に分類されるのは図1、3、5、6、8、9である。

図6は外耳も残存する。

図5は小に分類されるもので、径13.5cm推定される。

図7、8、9は鍋の底部ですべて丸底で、そのうち、図8は外面に煤、内面に石灰らしきものが付着している。このほかに胴部など細片が多数出土した。この中には煤が付着するものや厚さ3mmほどの石灰分が付着するものがあり、特に底部片に多い。

b. 急須

急須は口縁部14点、注口5点、胴部2点出土した。

図10は口縁部で、口唇が立ち口になる。

b種：同じ立ち口ではあるが頸部で外反するもの、前者よりはやや厚手である。焼成も後者の方が、弱いようである。

図11は急須の底と考えられるもので、丸底である。底面には煤痕が見られる。

図12は急須の注ぎ口で、注ぎ口の下部には煤あとが確認される。注ぎ口は急須本体の部分に径25mmの孔をあけ、貼り付けられている。

c. 耳

図13は急須の耳と考えられるもので平面形は台形状を呈し、ほぼ中央に径6mmの孔が施されている。内面は轆轤痕が明瞭に確認できる。注ぎ口の穴は楕円形を呈する。本体に対し、上斜めに貼り付ける。

d. 火炉

火炉は口縁部7点、底部12点、耳5点出土した。

口縁部は形と傾きで2種に分類される。

a種：口縁部断面が角を持ち、直口するもの、内部の突起は、棒状で口唇より20mm下部から口唇に向かって「U」字状に貼り付ける（図14）。

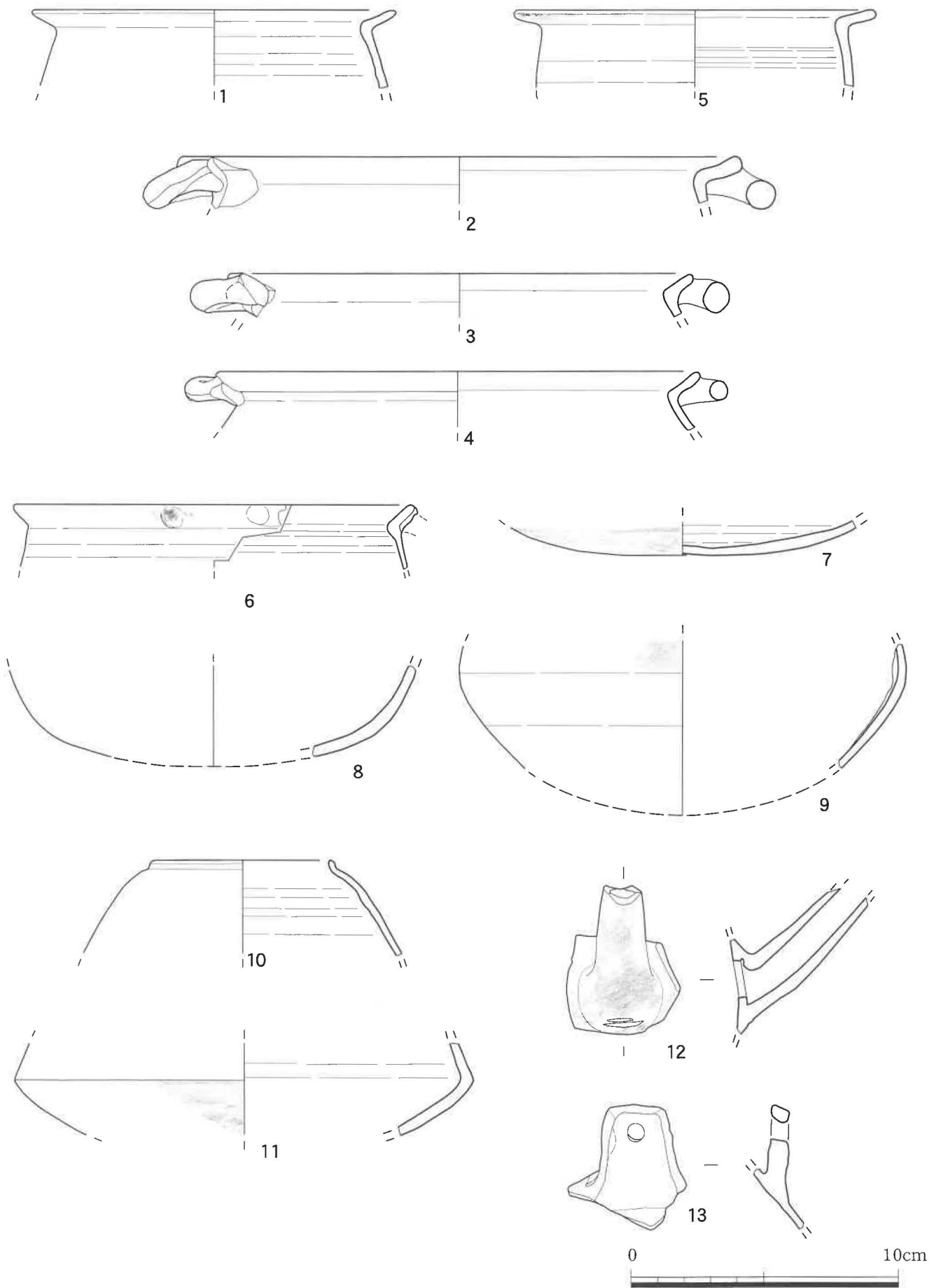
b種：口縁部断面が丸く、内彎するもの、内部の突起はやや三角形を呈し、口唇部に横位に貼り付ける（図15）。

底部は高台からの立ち上がりによって2種に分類される。

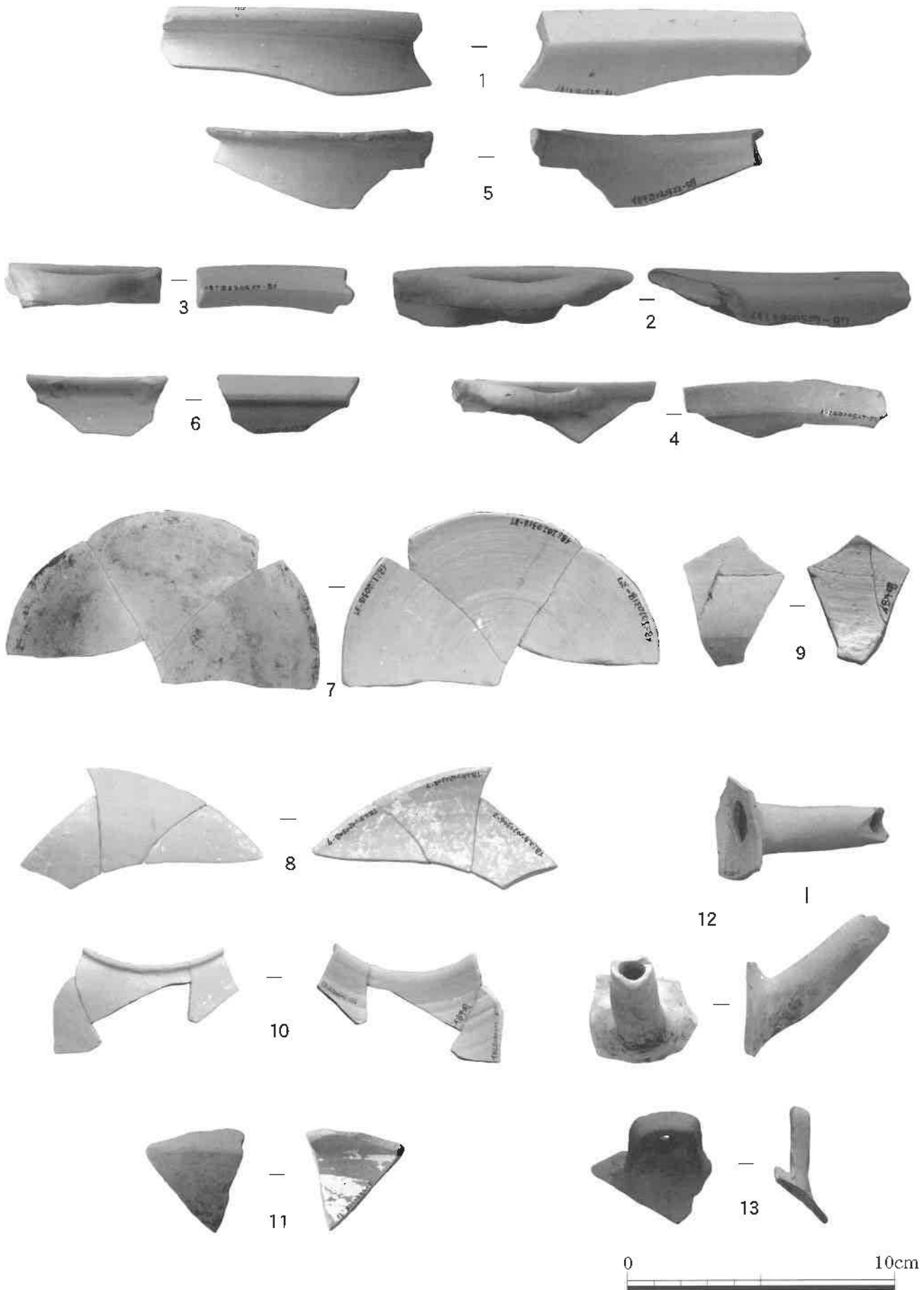
a種：高台の立ち上がりは明瞭である（図17）。

b種：脚部の立ち上がりがなだらかである（図16・18・19）。

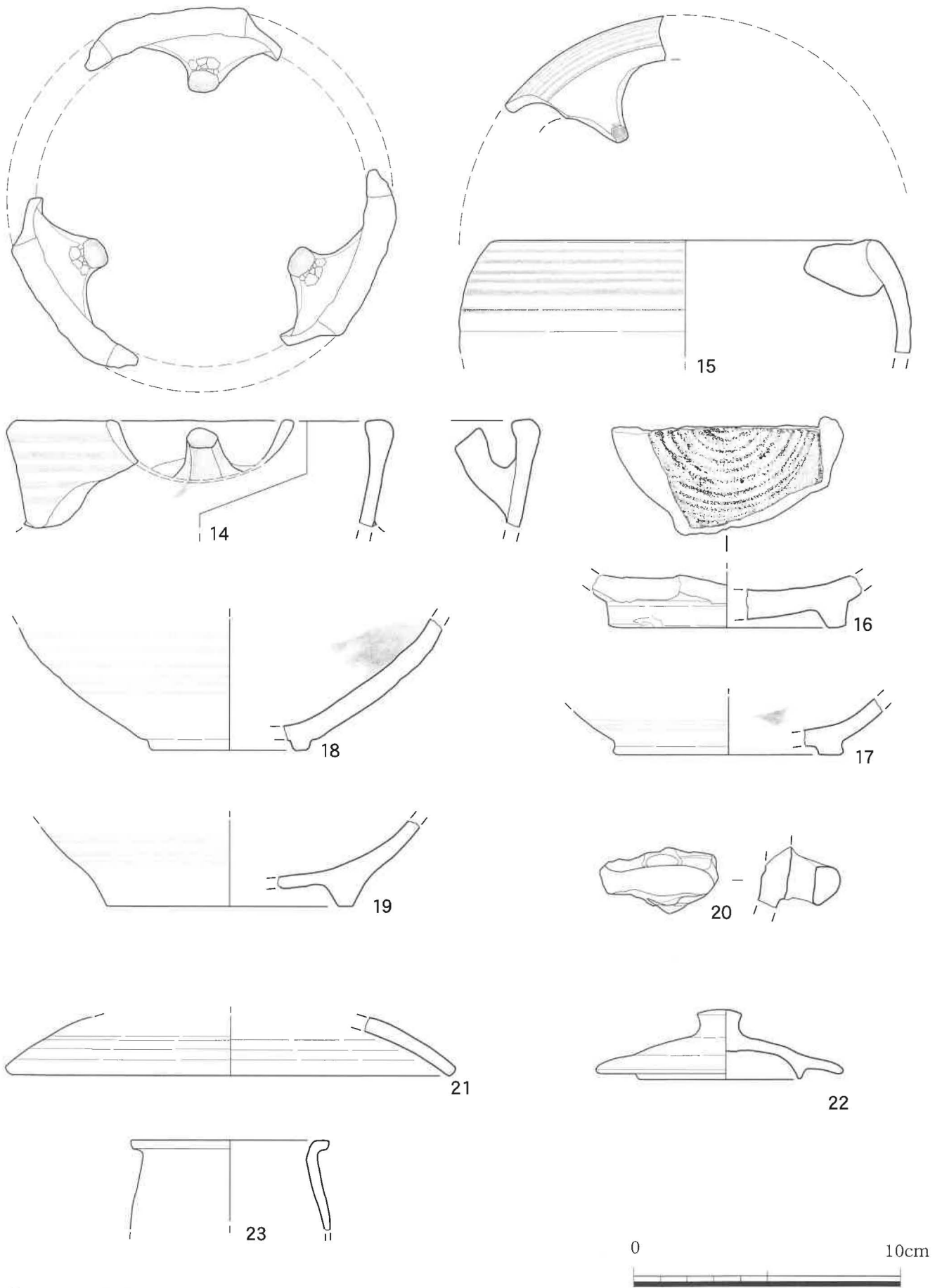
・耳は横のタイプ（図20）で、上面観は半楕円を呈し、中央に径10mmの孔を上から下に貫通させる。b種に伴う耳と思われる。



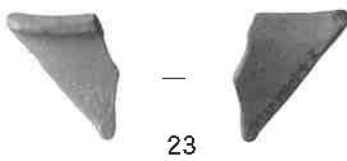
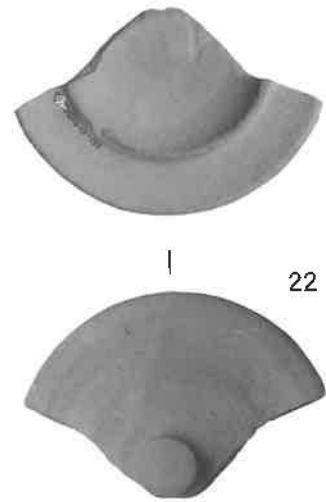
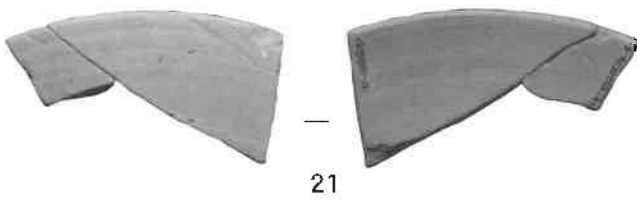
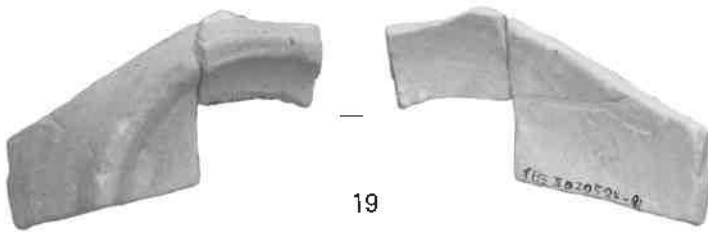
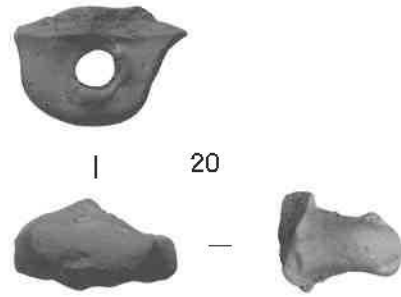
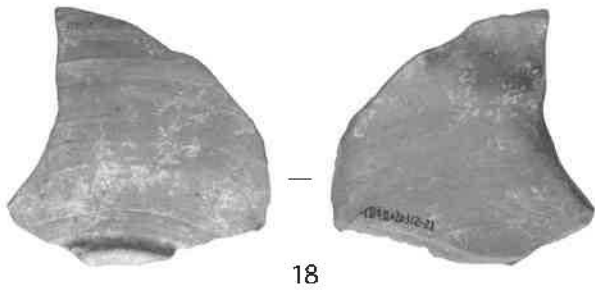
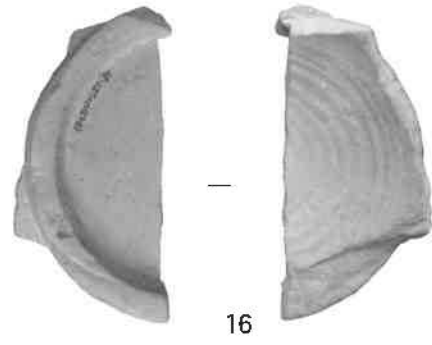
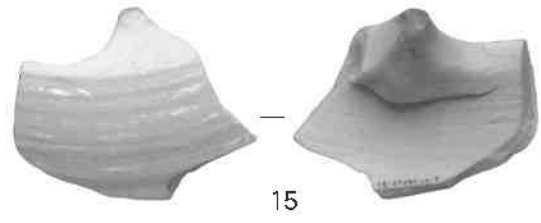
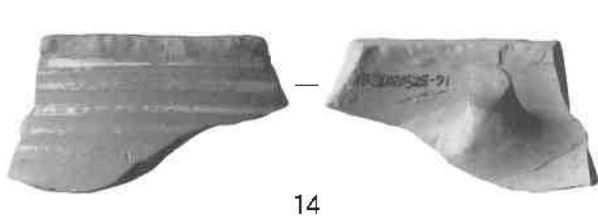
第17図 陶質土器1



図版7 陶質土器1



第18図 陶質土器2



図版8 陶質土器2

6. 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は碗193点、小碗13点、鍋75点、油壺（アングガーミ）16点、火炉3点、火取3点、急須34点、瓶24点、鉢8点、蓋5点、皿11点、酒器2点、灯明具1点、不明10点出土した。

出土地についてみると北トレンチで83点（20%）南トレンチ286点（71.8%）、試掘No.1、5点（1.2%）不明29点（7.0%）で主に南トレンチから得られた。

以下、器種別に略述し、遺物の詳細は表11に観察一覧、図19、20、図版9、10に遺物を示した。

a. 碗

北トレンチ53点、南トレンチ140点で、（表10）図1～9、12に図示してある。

灰釉碗（図1、2、3）、掛け分け碗（図5、6）、白化粧を施し透明釉をかけたもの（図7）、絵付けには呉須（図8、12）、イッチン（筒描き）（図9）がある。

b. 小碗

北トレンチ2点、南トレンチ11点の出土である。（表10）口縁部は外反口縁と直口口縁があり、外反口縁は掛け分けの施釉が主である（図10）。ほかに灰釉の碗も出土している。

c. 皿

北トレンチ1点、南トレンチ10点の出土である。ほとんどは直口口縁（図11）で、鉄釉が施され、施釉はフィガキーである。ほかに黒釉が見られる。素地は茶褐色が主で、ほかの施釉陶器よりは濃い。

d. 鉢

北トレンチ3点、南トレンチ5点の出土である。図13は口唇は破損しているが、図上復元から逆「L」字状の口縁の鉢である。外面が黒釉、内面が白化粧後、透明釉を施した掛け分けの鉢である。内底に半月状に熔着が見られる。

e. 鍋

北トレンチ7点、南トレンチ68点の出土である。図14は鍋で、両端に貼り付けの耳を有する。外面は施釉、内面は薄く釉を施すが、口唇には及ばない。

f. 急須

北トレンチ5点、南トレンチ29点の出土した。図15は底部で、釉は底部までは及ばない。図16は肩部が角をなす筒型の急須で、コバルトの釉を全面にかけるものである。これまでの出土例からは少ないタイプである。内面も白化粧が掛けられ、製品としては上物と思われる。図17は丸型の急須で、薄手である。外面に黒釉が施されている。

g. 瓶

北トレンチ6点、南トレンチ18点の出土である。図20は脚台タイプの瓶である。釉は黒釉と透明釉の掛け分けで、白化粧は施されてない。

h. 火取

北トレンチ1点、南トレンチ2点の出土である。図21は口縁部で、口唇はわずかに膨らむ。外面は白化粧の後、透明釉を施し、口唇部はコバルト釉を掛け、加飾する。

i. 酒器

北トレンチ2点の出土である。図23はいわゆる「カラカラ」と呼称される酒器である。加飾に胴上部に線彫りし、さらに黄色と藍色で彩飾する。本品は近接する伊礼原D遺跡でも同じタイプの酒器が出土している。

j. 油壺

北トレンチ3点、南トレンチ13点の出土した。図24は復元可能な製品で、外耳は縦位に4個と推定される。底部の立ち上がりは弱い方である。黒釉が施されるが口唇部と畳付には無釉かあるいは白化粧が施されている。図25をみると内面の施釉は薄く、均一ではない。

k. 火炉

北トレンチ2点、南トレンチ1点の出土である。図22は筒型で、内側の突起は「し」字状に折れ曲がり、外面の耳は横位に貼り付けられ、獣面のタイプで耳部から横位に二条の圈線を施す。釉はやや緑がかった黒釉で、口唇部は施釉はされてない。釉の色は暗灰色で薩摩焼に酷似する。

l. 蓋

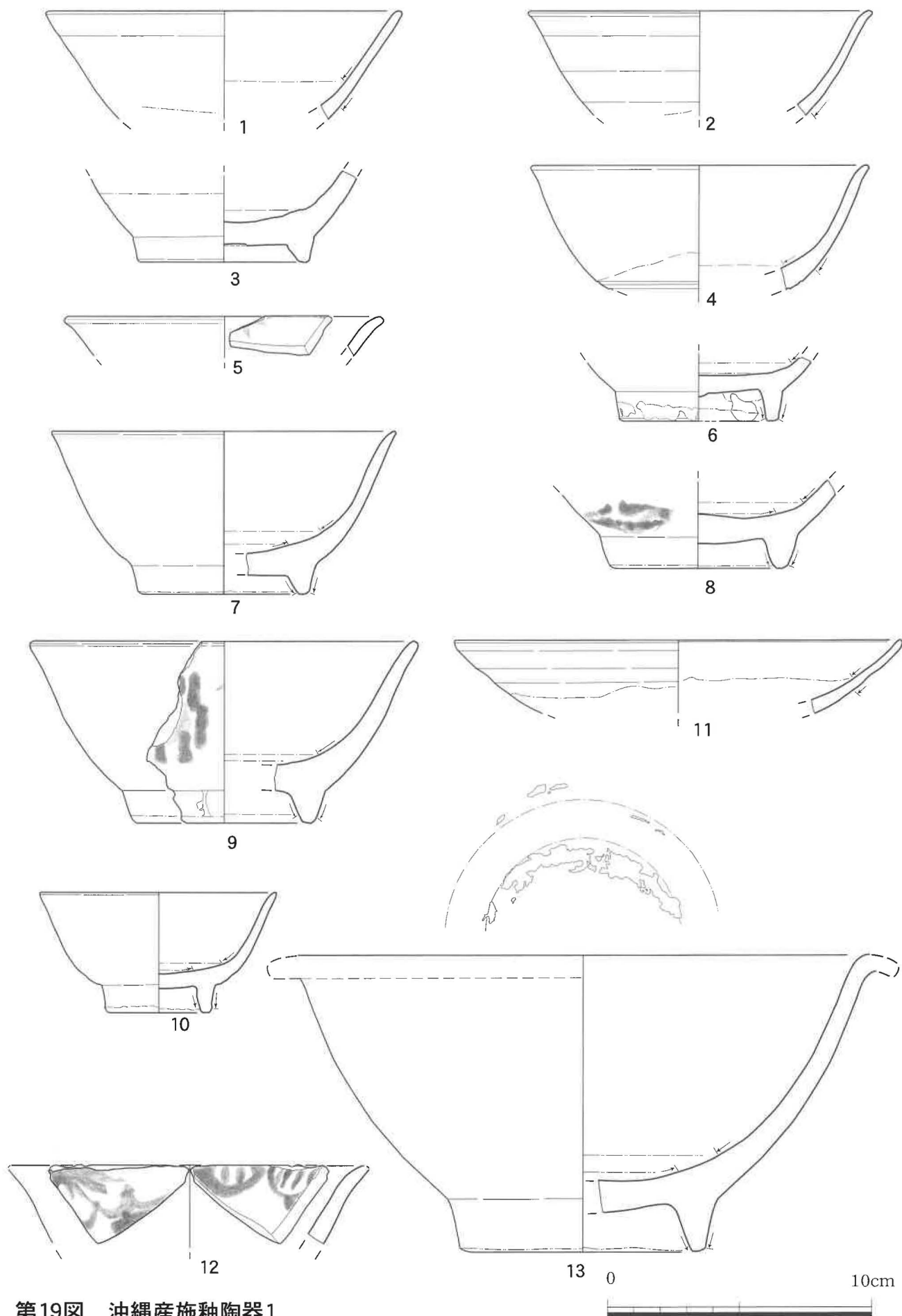
南トレンチ5点の出土である。図26は高台タイプの蓋である。釉は黒釉で、形状や大きさから鍋か油壺の蓋と考えられる。

表10 沖縄産施釉陶器出土量

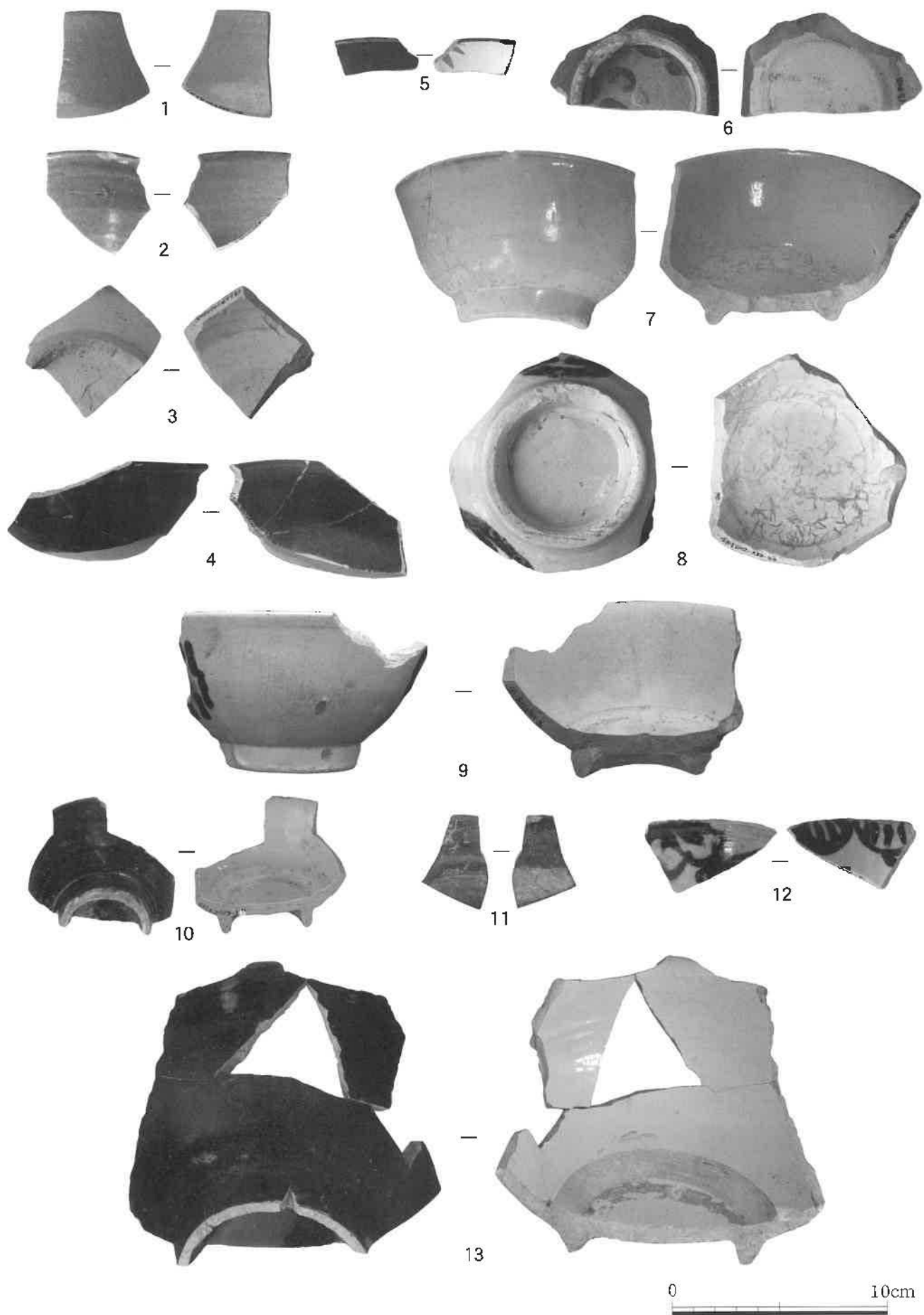
出土地		器種	器種													合計	層序 合計	地区 合計					
			碗	小碗	鍋	(油) 壺	火炉	火取	急須	瓶	鉢	蓋	皿	酒器	灯明 具				不明				
北 ト レ ン チ	表探	口							1								1	3	83				
		胴	1														1						
		底											1				1						
	Ⅱ	口	15	1	2		1				1		1		1		22	75		83			
		胴	21		1	2			3	6						1	34						
		底	12		1	1					1			1		1	17						
		耳			1												1						
	Ⅲ	口	1		1		1										1	5			83		
		胴						1									3						
		底	2	1	1				1								1						
南 ト レ ン チ	表探	口	2		1					1							5	13	286				
		胴	1		1							1					5						
		底	4	1						1							3						
	Ⅰ	口	7	1	5	1			2	2		1					6	29		286			
		胴	1						2								19						
		底							1								3						
		耳	15	1	1				1		1						1						
	床掃除	口	13	1	11	3		1	2	1		1				1	19	66			286		
		胴	5			1			1	2		1				2	34						
		底							1								12						
		口～底	35	3	2				4			1	3				1						
	Ⅱ	口	24	3	29	5		10	11	1		2				2	48	165				286	
		胴	7		8	2			1	1	1	5					87						
		底														1	25						
		耳			1												1						
		耳・撮	2	1													1						
		口～底	2		1												3						
	Ⅲ	口	3		3				2								3	13					286
		胴	1		1												8						
底		7														2							
不明	不明	口	9		3	1	1		1						2	7	29	29					
		胴	2		1				1										17				
		底																	5				
合 計			193	13	75	16	3	3	34	24	8	5	11	2	1	10	398	398					

表11 沖縄産施釉陶器観察一覧

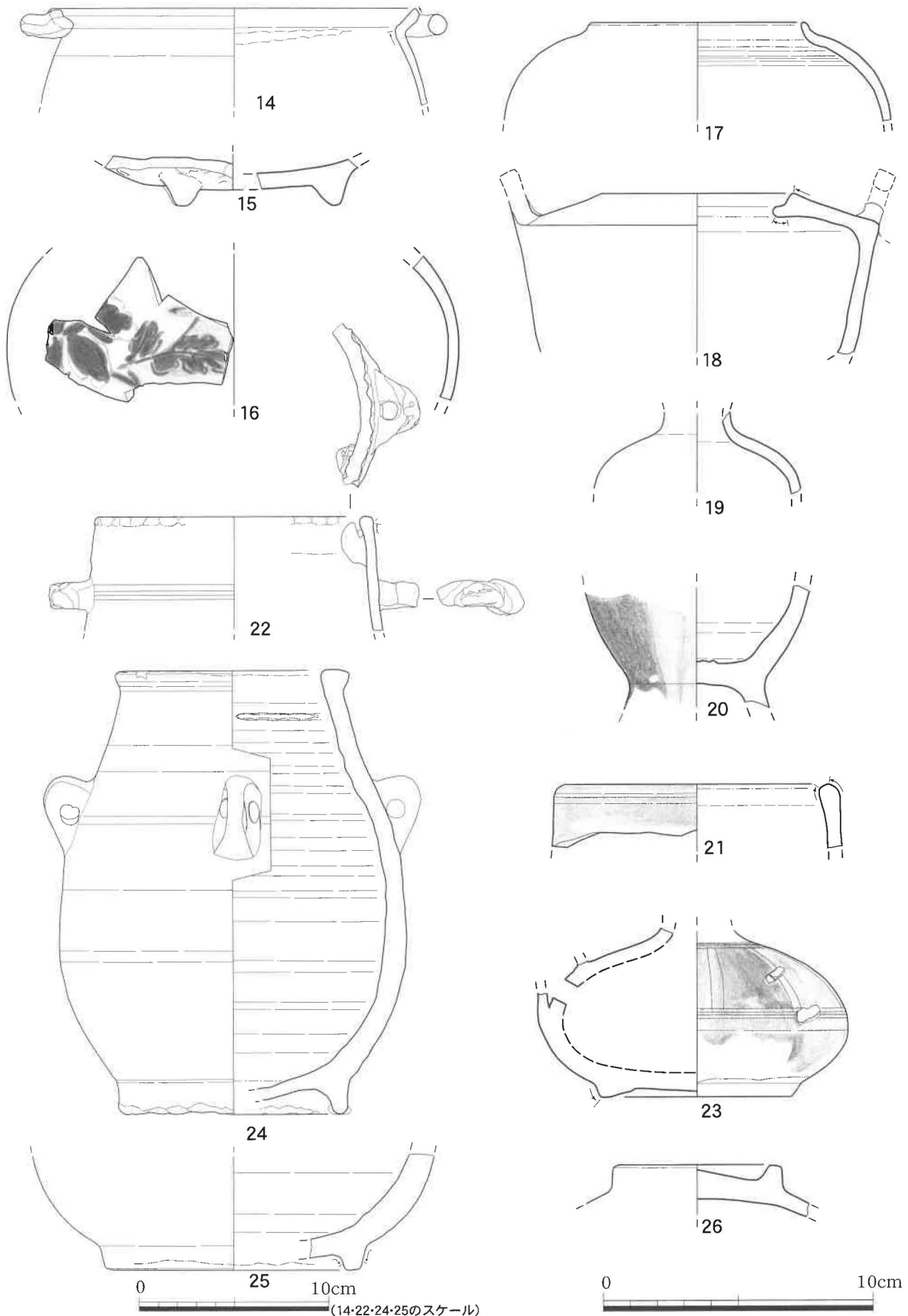
第 図 図版	報告 番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第19図 (図版9)	1	碗	口縁部	口径13.4cm	形状:直口口縁。釉色:内外面一灰色。底釉:フィガキー。素地:灰色。	北トレンチⅡ 020322
	2	碗	口縁部	口径13.0cm	形状:外反口縁。釉色:内外面一灰色。底釉:フィガキー。素地:灰色。	南トレンチ 床掃除 020306
	3	碗	底部	底径 6.5cm	形状:立ち上がりやや丸味。釉色:内外面一灰色。底釉:フィガキー。素地:灰色。	南トレンチ 床掃除 020305
	4	碗	口縁部	口径12.8cm	形状:外反口縁。釉色:内外面一黒色。底釉:腰部~底部、無釉。素地:灰色。南トレ020318-37	南トレンチ 床掃除 020308
	5	碗	口縁部	口径12.0cm	形状:外反口縁。文様:内面一笹文(鉄釉)。釉色:外面一黒色、内面一透明釉。素地:灰色。白化粧有り・かけ分け。	南トレンチⅡ 020527
	6	碗	底部	底径 6.0cm	形状:腰部は丸味。内底:蛇の目。釉色:外面一黒色、内面一透明釉。底釉:畳付白化粧。外底内一無釉。素地:乳白色。白化粧有り・かけ分け。	不明
	7	碗	口縁部~ 底部	口径12.9cm 器高 6.2cm 底径 6.7cm	形状:外反口縁。内底:蛇の目。釉色:内外面一透明釉。底釉:畳付無釉。外底一施釉。素地:白色。北トレⅡ020320-51	南トレンチ表採 020304
	8	碗	底部	底径 6.9cm	形状:腰部は丸味。文様:外面一呉須、丸文3個。内底:蛇の目。底釉:畳付は研磨。外底内一施釉。素地:乳白色。白化粧有り。	北トレンチⅡ 020322
	9	碗	口縁部~ 底部	口径14.5cm 器高 6.9cm 底径 7.0cm	形状:外反口縁。文様:外面一イチン。二彩。内底:蛇の目。釉色:内外面一透明。底釉:畳付無釉。外底内一施釉。素地:乳白色。白化粧有り。	南トレンチ表採 020304
	10	小碗	口縁部~ 底部	口径 8.9cm 器高 4.6cm 底径 4.0cm	形状:外反口縁。釉色:外面一黒色、内面一透明釉。底釉:畳付無釉。外底一施釉。素地:乳白色。白化粧有り・かけ分け。	南トレンチⅡ 020527
	11	皿	口縁部	口径17.0cm	形状:直口口縁。釉色:鉄釉。底釉:フィガキー。素地:暗灰色。	北トレンチⅡ 020312
	12	碗	口縁部	口径13.6cm	形状:外反口縁・玉縁状。文様:呉須。釉色:透明釉。素地:乳白色。白化粧有り。	南トレンチ 床掃除 020307
	13	鉢	口縁部~ 底部	口径24.0cm 器高11.4cm 底径 9.2cm	形状:逆「J」字状。内底:蛇の目。釉色:外面一黒釉、内面一透明釉。底釉:畳付無釉。外底内:施釉。素地:乳白色。白化粧有り・かけ分け。	不明
第20図 (図版10)	14	鍋	口縁部	口径19.6cm	形状:「く」の字状。釉色:外面一灰色釉。素地:乳白色。	南トレンチ表採 020304
	15	急須	底部	底径 6.0cm	釉色:内面一黒釉。底釉:腰~底部無釉。素地:乳白色。原稿には鍋としてあるかもあと	南トレンチⅡ 020527
	16	急須	胴部	胴径 16.6cm	文様:外面一貝付文・二彩。釉色:内外面一透明釉。素地:乳白色。白化粧有り。	南トレンチⅢ 020603
	17	急須	口縁部	口径 8.1cm	釉色:外面一黒釉、内面(頸のみ)。素地:乳白色。	南トレンチⅡ 020527
	18	急須	口縁部~ 底部	口径 7.0cm 最大胴径 13.4cm	形状:筒型。文様:内面一無。釉色:外面一コバルト釉。素地:乳白色。白化粧有り。	南トレンチ 床掃除 020308
	19	瓶	胴部	口径 2.4cm	釉色:外面一黒釉。素地:赤褐色。	南トレンチⅡ 020524
	20	瓶	底部	底径 5.0cm	形状:脚タイプ。釉色:外面一灰色と黒色のかけわけ二彩。外底一無釉。素地:乳白色。	南トレンチ 床掃除 020305
	21	火取	口縁部	口径10.6cm	形状:直口口縁。文様:外面有り、口唇に呉須。釉色:内外面一透明釉。素地:灰色。白化粧有り。	北トレンチ表採 020304
	22	火炉	口縁部	口径14.6cm	形状:直口口縁。釉色:外面一黒釉、内面(内唇のみ)一黒釉。口唇一ハゲ。素地:赤褐色。	北トレンチⅡ 020322
	23	酒器	胴部・底部 口縁部~	口径 2.8cm 底径 7.0cm	文様:線一二彩(青と茶)、内面一無。釉色:外面一透明釉。底釉:畳底無釉。外底内一白化粧のみ。素地:乳白色。白化粧有り。	北トレンチ表採 020304
	24	油壺	底部	口径12.6cm 器高23.7cm 底径12.3cm	形状:内湾、三角形。釉色:内外面一黒釉。底釉:畳付無釉。素地:乳白色。実測No.4と接合	北トレンチⅡ 020322
	25	油壺	底部	底径12.0cm	形状:腰部は丸味。釉色:外面一黒釉。底釉:畳付無釉。外底一施釉。素地:灰色。	北トレンチⅡ 020322
	26	蓋	高台状 つまみ	口径 6.2cm	釉色:外面一黒釉。底釉:つまみ内一施釉。素地:灰色。	南トレンチ 床掃除 020308



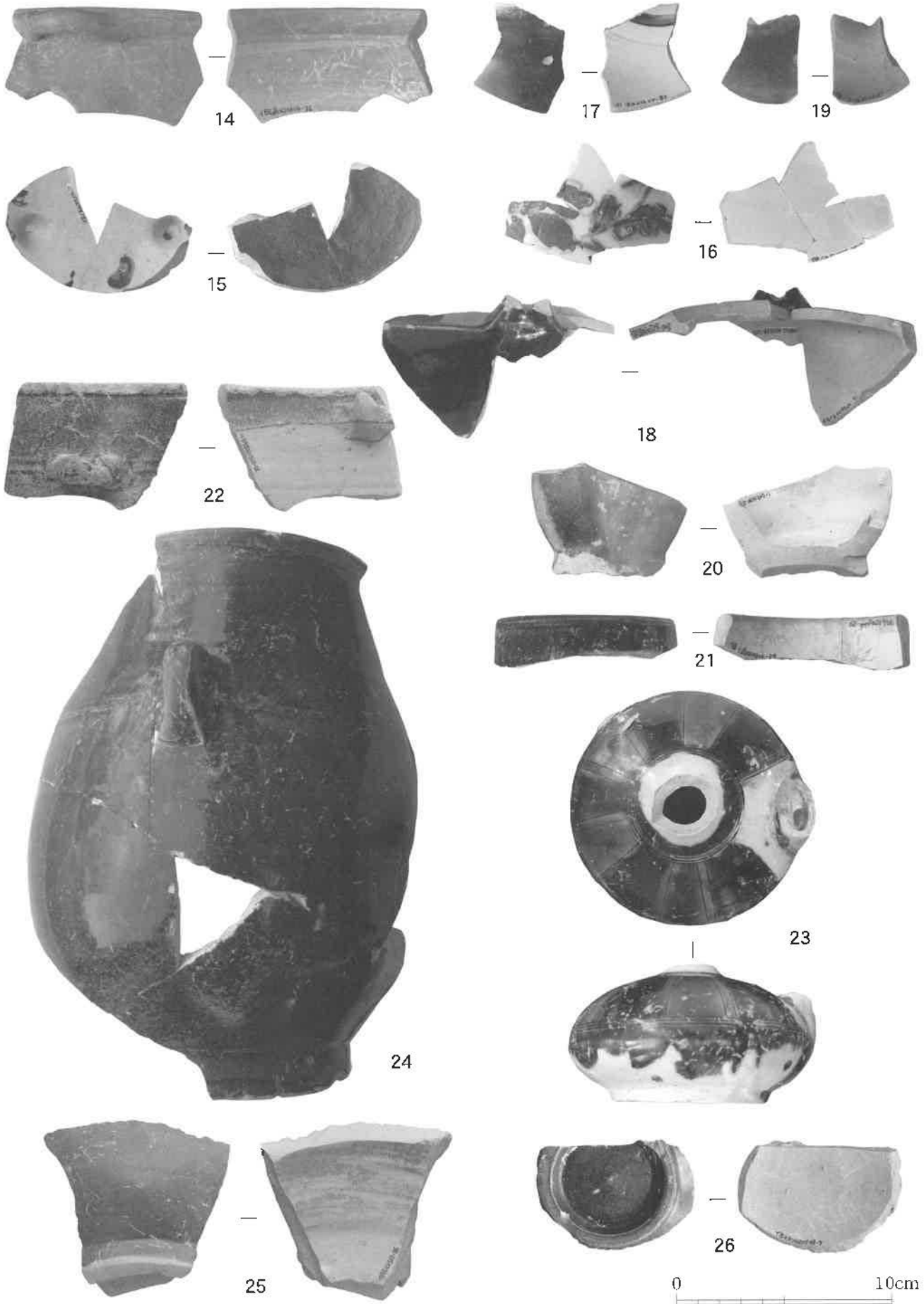
第19図 沖縄産施釉陶器1



図版9 沖縄産施釉陶器1



第20図 沖縄産施釉陶器2



図版10 沖縄産施釉陶器2

7. 沖縄産無釉陶器

鉢、すり鉢、火炉、瓶、急須、壺など435点出土した。

以下、器種別に略述し、詳細は出土状況を表12、主な遺物については表13の観察一覧、第21、22図、図版11、12、13に示した。

地区別の出土状況は北・南ともⅡ層の出土である。

a. 鉢

鉢は口縁部18点、底部1点出土した。

口縁部の形で2種に分類される。

a種：口縁部が逆L字で内彎するもの（図1・2）。

文様：口縁部下に櫛による波状文を施す。櫛幅は10mmで五条。

b種：口縁部が丸く、内彎するもの（図3・4）。

文様：外面に櫛目文を施す（図4）。

b. すり鉢

すり鉢は口縁部6点、胴部27点、底部2点出土した。

図5は、逆「L」字状の口縁部である。口唇のL字の幅は20mm～22mmが見られ、口唇の上部に沈線が施され、すり目の幅は30mmを測る。

図6と7は底部で、いずれも底面からの立ち上がりはまっすぐである。また、櫛目はいずれも粗い。

c. 火炉

火炉は口縁部2点出土した。

図8は口縁部で内彎、耳は横位に貼り付けている。口唇の周縁には煤の付着が顕著である。

d. 瓶

瓶は口縁部3点、胴部6点、底部1点出土した。

図9はアサガオ状に外反するタイプの瓶である。内面が黒味を帯びる。墨の類が塗られているようである。用途と関連すると思われる。

e. 急須

図10は口縁がわずかに立上がるものである。高さ10mm弱の立ち口で、湧田古窯跡の例から急須と思われる。文様は頸部に2条の沈線文が施されている。

f. 壺

大、中、小が確認される。

小サイズは、口縁は逆「L」字状のタイプが見られ、その幅は15mm（図11）、18mm（図12）、22mmの3サイズがある。いずれも有頸のタイプである。

図13—小壺の底部である。

大サイズは図14と15で口縁部は蒲鉾状を呈し、肩部はなだらかに胴部に至る。

g. 壺

a種：図11は逆「L」字状は幅15mm、図12はL字幅18mmである。後者は混和材に炭化物が確認される。

b種：蒲鉾状の口縁部（図14・15）で、図14は口縁部～底部まで接合できるもので、出

土地をみると北トレンチ・南トレンチのⅠ層及びⅡ層で出土している。両トレンチが同時期であることを裏付ける資料といえる。図15は肩部がナデ肩のタイプである。底部から2個体（図18・19）推定される。

《参考文献》

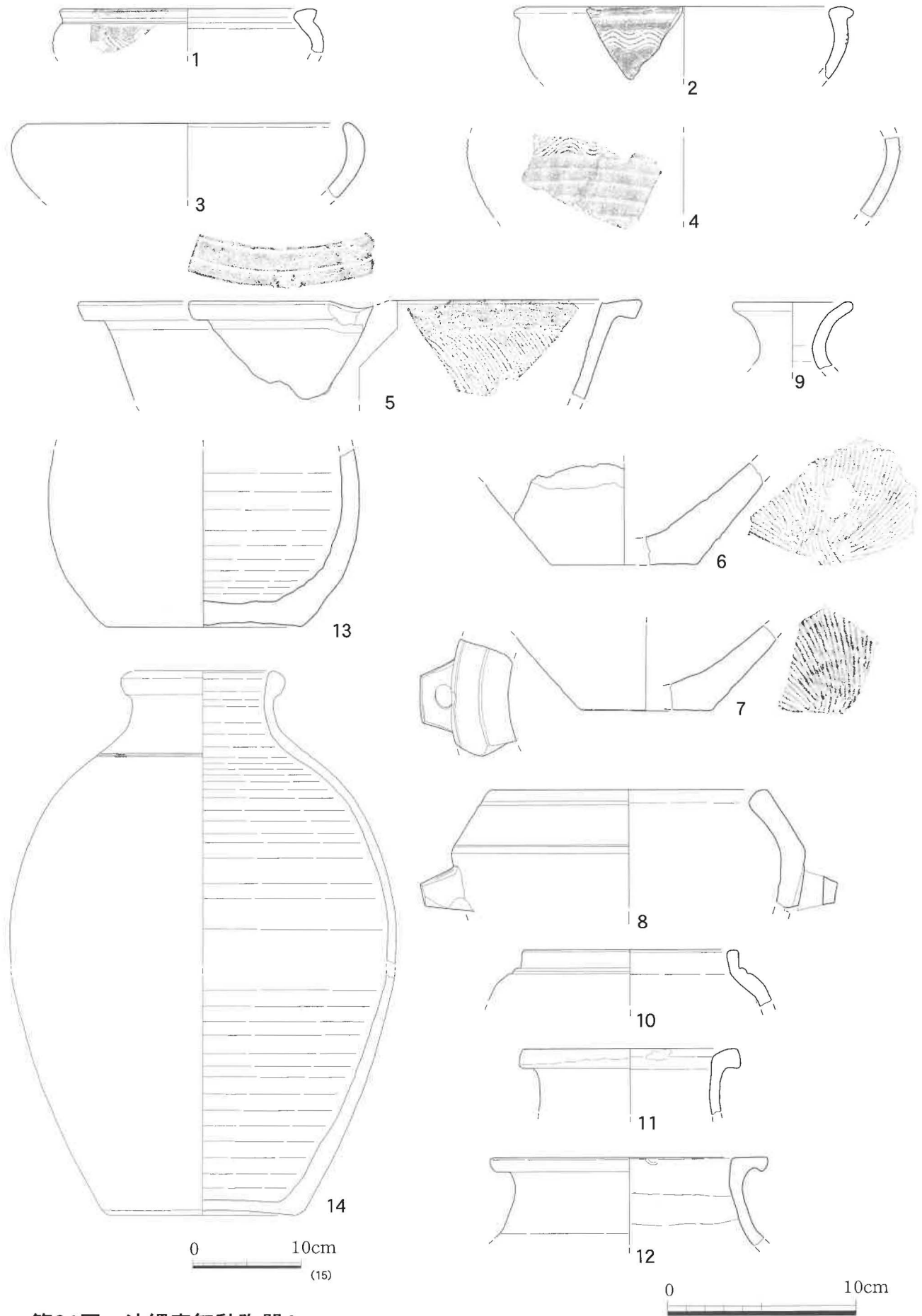
島袋洋・島袋春美・當銘清乃・古屋聡洋・田里一寿・藤崎京・宮平真由美・金子浩昌 『天界寺跡 Ⅰ』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年

表12 沖縄産無釉陶器出土量

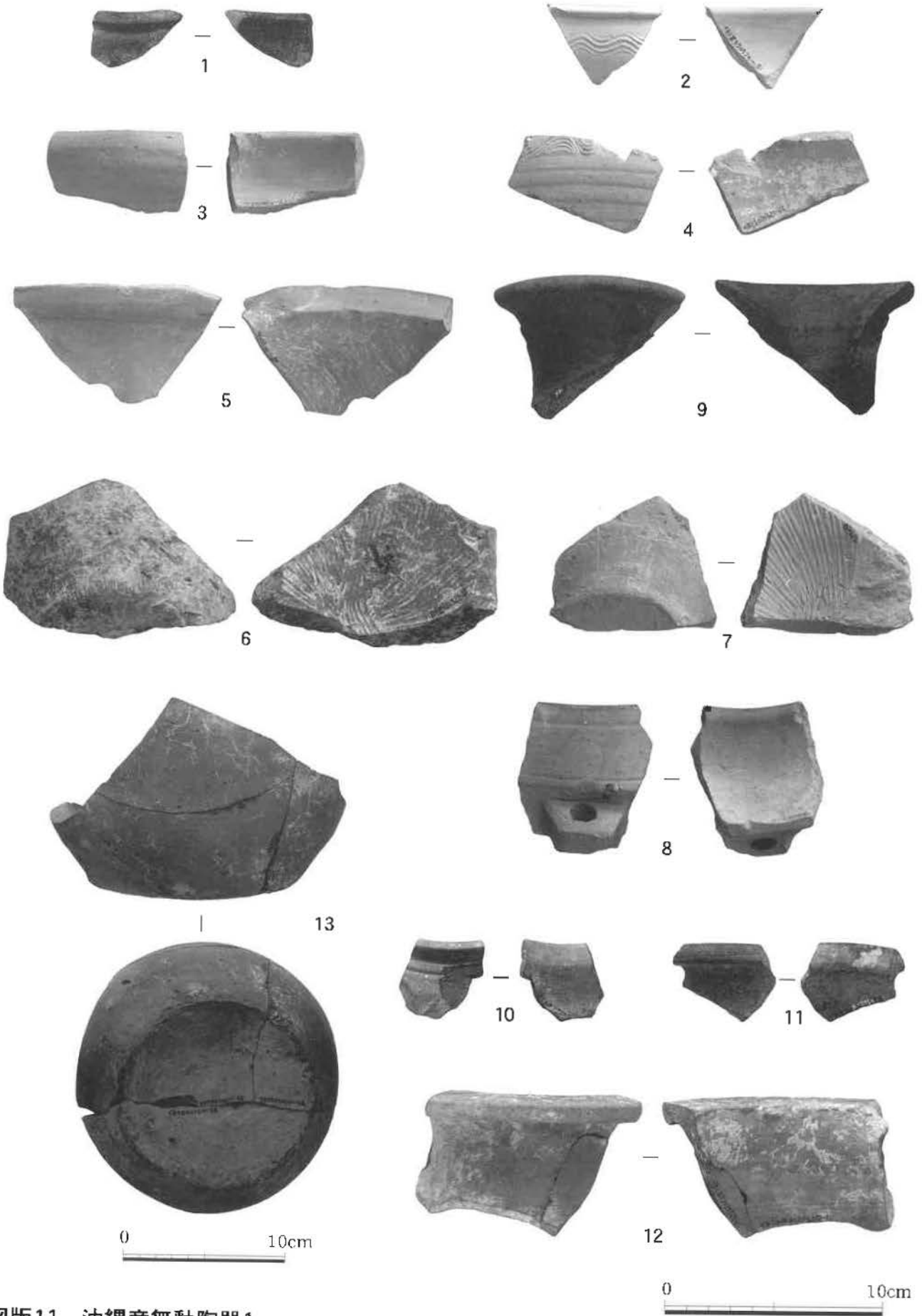
出土地		器種										合計	層序 合計	地区 合計
		碗	皿	瓶	壺	急須	鉢	すり鉢	火炉	不明				
北 ト レ ン チ	表採	口					1	1				2	13	83
		胴								11	11			
	Ⅱ	口				1		1				2	60	
		胴			5	11			5		28	49		
		底		1		7			1			9		
	Ⅲ	胴				2					7	9	10	
底		1									1			
南 ト レ ン チ	表採	口		1								1	132	307
		胴				2			1		11	14		
	Ⅰ	口				1		2				3	68	
		胴				2			2		109	113		
		底			1							1		
	床掃除	口			1	2	1	4	4			12	100	
		胴				28			1		24	53		
		底				3						3		
	Ⅱ	口			1			7	1	2	1	12	7	
		胴			1	5			14		64	84		
		底				4						4		
	Ⅲ	胴									6	6	1	
底					1						1			
不 明	Ⅱ	口					1				1	1	45	
		胴				1		2			3			
	不明	胴				4			4		28	36		
		底				2		1	1		1	5		
合 計			1	1	10	76	1	19	35	2	290	435	435	

表13 沖縄産無釉陶器観察一覧

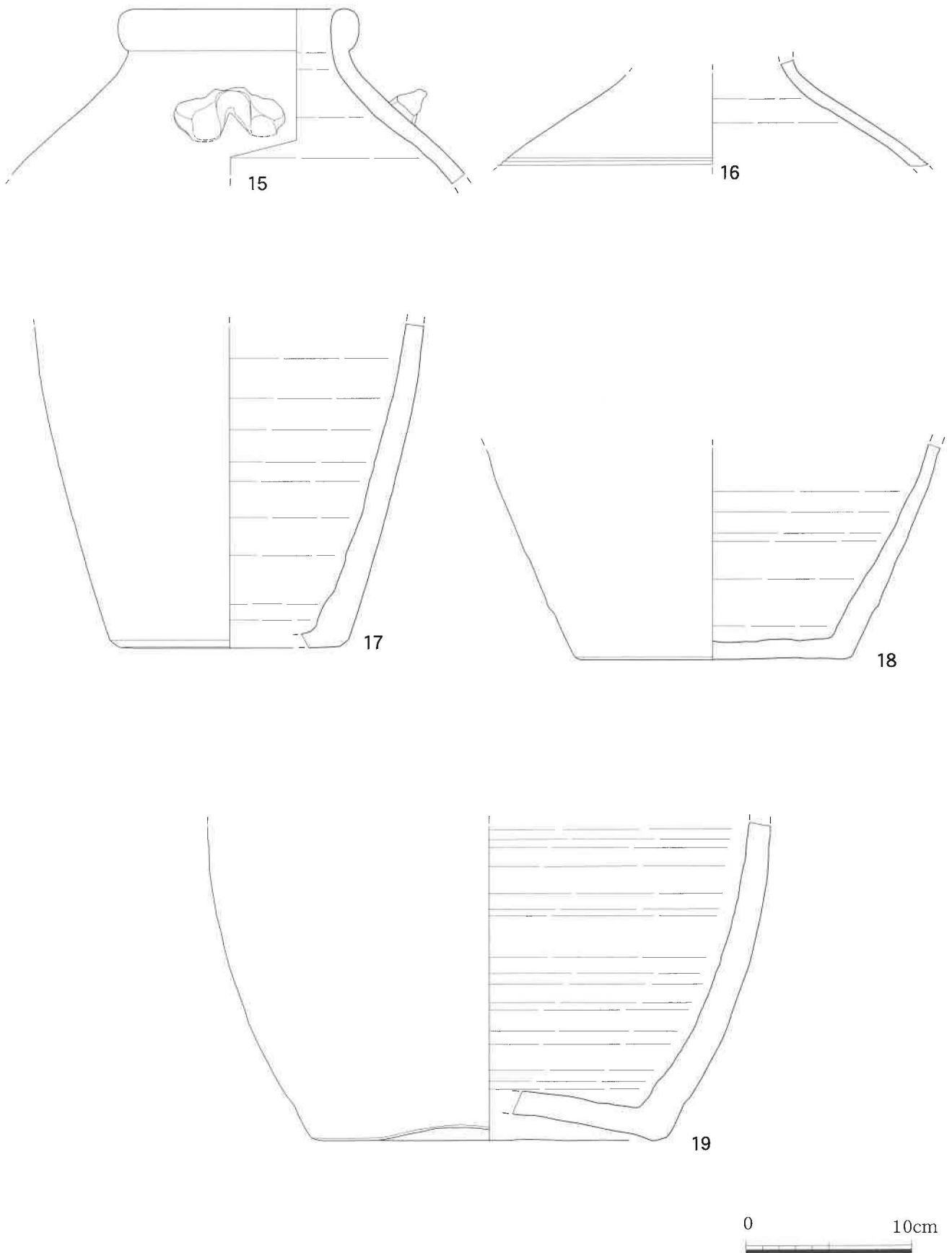
第 図 図版	報告 番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第21図 (図版11)	1	鉢	口縁部	口径13.6cm	内彎,内唇若干ふくらむ。逆「L」字状。文様:波状。混和材:石英1mm。内面に轆轤痕。器色:暗茶褐色サンドイッチ状。焼成:良好。外面に櫛による波状文。	北トレンチⅡ 020322
	2	鉢	口縁部	口径16.94cm	外反口縁。逆「L」字状。文様:波状。器色:明橙色。	南トレンチⅡ 020524
	3	鉢B	口縁部	口径17.4cm	内彎。舌状。混和材:石灰粒。外面一轆轤痕明瞭。器色:明茶褐色。焼成:良好。内面にくし目,粗い。	南トレンチⅡ 020603
	4	鉢	口縁部	最大胴径23.0cm	内湾,逆「L」字状。文様:外面一波状。混和材:2mm、石英まれにある。内外面轆轤痕明瞭。器色:暗茶褐色。焼成:良好。外面口縁近く波状のくし目文。	南トレンチⅠ 020320
	5	すり鉢	口縁部	口径30.0cm	逆「L」字状,L幅20mm。注口あり。文様:口唇一圏線。混和材:石英,若干。内唇15mm器色:暗茶褐色~茶褐色。焼成:良好。内面にくし目,斜め,口唇部に圏縁。ヘラナデー15mm。	南トレンチⅡ 020527
	6	すり鉢	底部	口径7.8cm	底面からの立ち上がりはストレート。幅27mm。櫛目,荒い。	北トレンチⅡ 020312
	7	すり鉢	底部	底径7.1cm	直底,立ち上がりはややふくらむ。外面ヨコナデ。器色:明茶褐色。焼成:良好。内面にくし目,粗い。	不明,不明
	8	火炉	口縁部	口径14.6cm	内彎,ヨコ耳。すず付着,外一圏線。器色:表一暗茶,裏一明茶。	南トレンチⅡ 020605
	9	瓶	口縁部	口径6.4cm	アサガオ状。口唇:丸,混和材:石英。内面:轆轤痕,ふくれる。器色:暗茶褐色、サンドイッチ状。焼成:良好。	南トレンチⅡ 020527
	10	急須	口縁部	口径11.4cm	口唇:角,立口9cm。文様:頸一圏線。混和材:石英。内面:轆轤痕(浅)。器色:暗茶褐色サンドイッチ状。焼成:良好。くびれに2条沈線。	南トレンチ床掃除 020306
	11	壺	口縁部	口径11.9cm	逆「L」字状,幅14cm。内唇まで自然釉。混和材:石英。底部削り。轆轤痕。器色:暗茶色。焼成:非常に良い。	南トレンチⅡ 020528
	12	壺	口縁部	口径14.7cm	「L」字状,幅18mm。混和材:アバタ、岩化、炭化物あり。内面轆轤痕。器色:表一暗褐色 裏一茶褐色。焼成:良好。	南トレンチ床掃除 020325
	13	壺	底部	底径10.4cm	内面轆轤。器色:暗茶,暗灰色。	北トレンチⅡ 020322
第21図 (図版12)	14	壺	口~底部	口径13.3cm 底径18.9cm	蒲鉾状,肥厚幅:22mm。文様:外面・頸に圏線。外面一自然釉。裏:有。器色:外面一暗茶,内面一赤茶。焼成:非常に良い。肩部に圏線。	南トレンチⅡ 020527
第22図 (図版13)	15	壺	口縁部	口径13.7cm	蒲鉾状:20mm。肩部はなだらか、ナデ肩。内面一轆轤痕。器色:暗茶色~赤茶色。焼成:非常に良い。耳一3個。	北トレンチⅡ 020322
	16	壺	胴部	最小頸径10cm	肩部はなだらか。外面一轆轤痕。器色:暗茶色。	北トレンチ表 020304
	17	壺	底部	底径13.4cm	底部の立ち上がりが強い。混和材:石英。内面一轆轤痕,底面一削り痕。器色:外面一暗茶,内面一明茶色。	北トレンチⅡ 020322
	18	壺	底部	底径16.2cm	混和材:石灰岩3mm数個,石英。内外面一轆轤痕明瞭,底面・境一削り痕。器色:外面一暗茶,内面一赤茶。焼成:非常に良い。	南トレンチⅠ 020318
	19	壺	底部	底径21.6cm	「L」字状,幅14cm。外面一自然釉。混和材:石英。内面轆轤明瞭,外面底面との差が削り。器色:暗茶。焼成:非常に良い。	北トレンチⅡ 020322



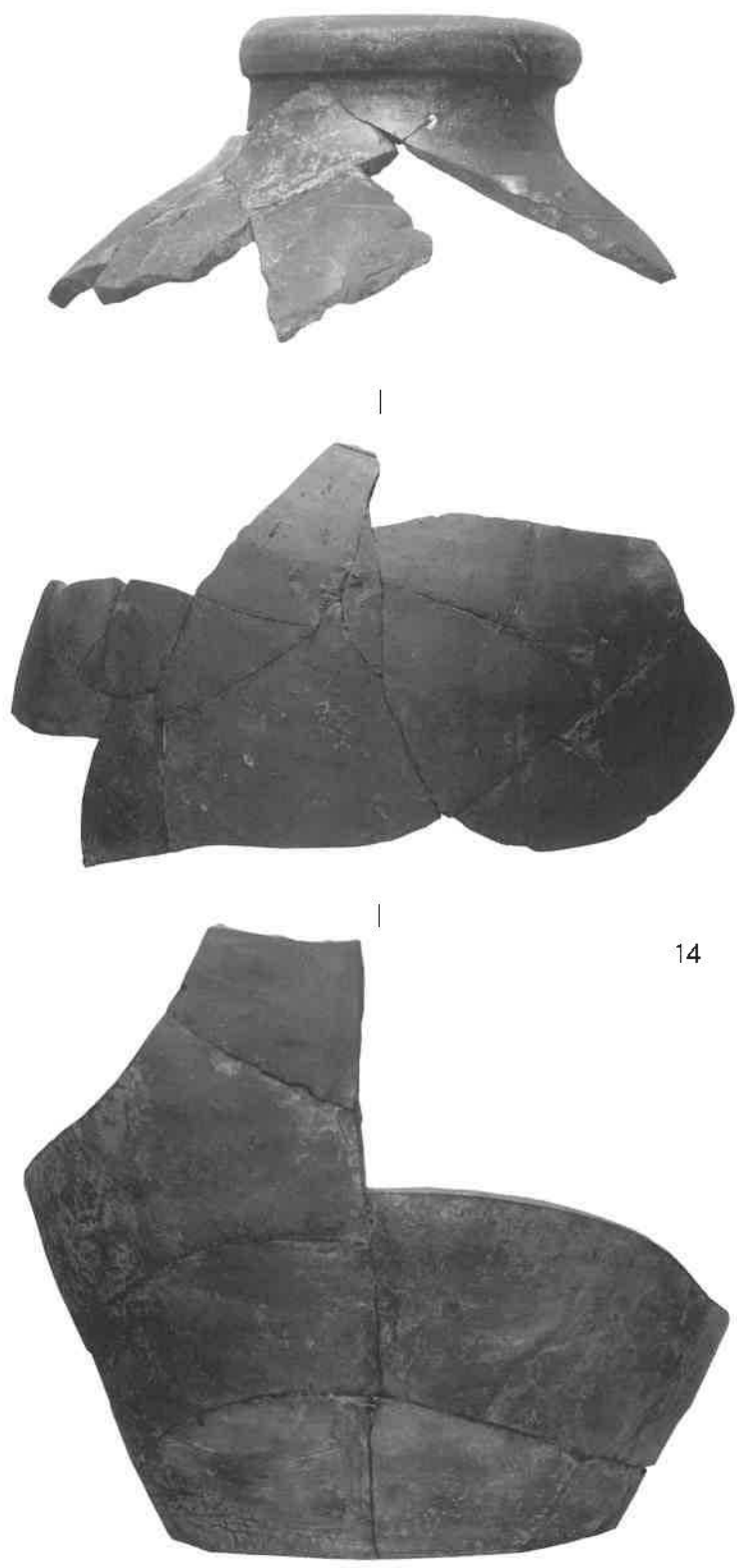
第21図 沖縄産無釉陶器1



図版11 沖縄産無釉陶器1



第22図 沖縄産無釉陶器2

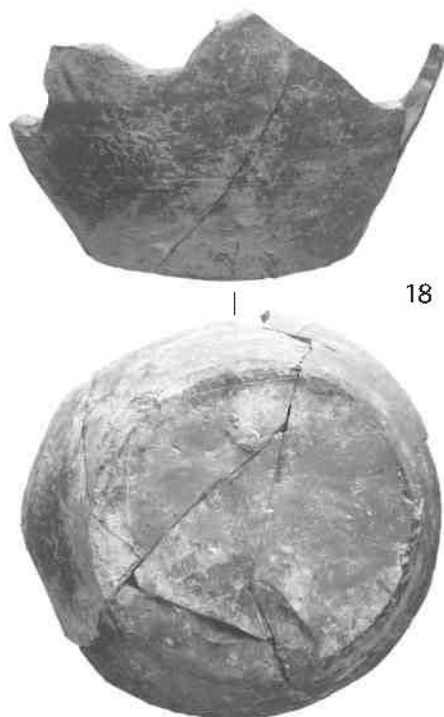


0 10cm

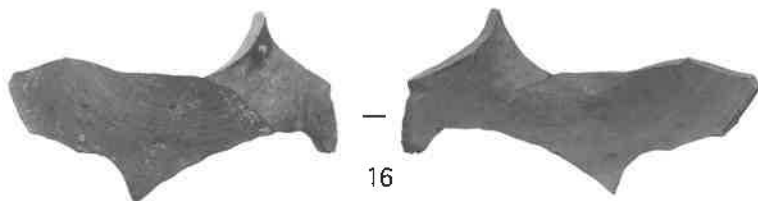
図版12 沖縄産無釉陶器2



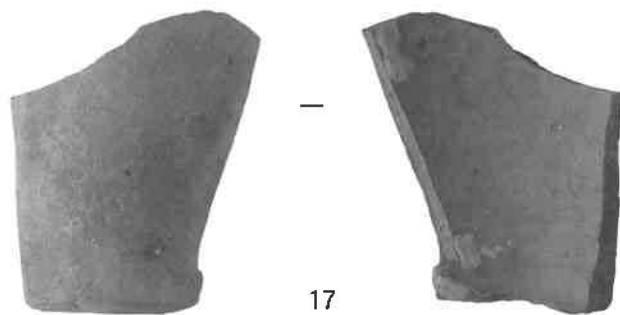
15



18



16



17



19



0 10cm

図版13 沖縄産無釉陶器3

8. 石器・石製品 (第23図・図版14)

石器・石製品は3点が出土した。器種は硯(第23図1)と砥石(第23図2,3)である。詳細は第14表で述べる。

図1は硯である。墨を溜める為の薄い窪みを海、墨を磨る為の少し高い部分を陸(おか)といい、本品は海が欠損したものであり、裏面に『嶽』という文字が彫られている。その下にも文字が彫られているように見られる。文字の位置から、下には2~3文字が続くものと思われ、『嶽』がつく姓は『嶽』と『嶽肩(たけがた)』があり、『嶽』一文字の姓であると出身は鹿児島県になると思われる。天界寺遺跡、尻並遺跡からの資料から推測すると全長約13cm幅の長方硯であったと思われる。また、近世以降の遺物集中地から出土しており、同じ層からガラス等が出土しているため戦前まで使用されていたのかもしれない。

図2の砥石は、上面が大きく湾曲しており、側面も湾曲している。井戸(チンガー)内から出土しており、鎌等の農耕具をその場で研いでいたと思われる。表面に左から右へと鑿で整形されており、裏面は右から左へと鑿痕が残る。側面にも僅かに鑿痕が残る。

北谷町役場社会教育課長大城操氏によるとこの砥石は、地面に埋め使用するもので初めは長方形をなしていた。上面(現・左側面)が、研ぐことにより次第に湾曲していき、今度は下面(現・右側面)を使用しそこも湾曲すると、今度は左側面(現・下面)を使用しており、ここも湾曲して研げなくなると現上面を使用し現在の形になった。現下面を除く研ぎ面は全て滑らかである。また、右利き用の鎌を研いでいたことも使用状況によってわかった。大城氏の体験談や近くには戦前まで使用されていた大型の砥石もあり、この砥石も同じように戦前まで使用されていたのではないだろうか。

図3の砥石は、孔が穿っており、孔から溝状の線が上に走ることから、紐を結いて用いた、携帯型砥石であると思われる。形は破損のため、判断できない。これも、図2と同じ時期に使用していたものと思われる。

《参考文献》

沖縄県立埋蔵文化財センター『天界寺跡(Ⅰ)』2001年

沖縄県立埋蔵文化財センター『尻並遺跡』2003年

表14 石器観察一覧

図版・第 図	番号	器 種	残 存	縦(cm) 横(cm) 幅(cm) 重量(g)	石質	観察事項	出土地
第 23 図 (図 版 14)	1	硯	陸	6.3 6.5 1.5 136	シルト岩	長方硯である。海部分が欠損したものであり、縁も破損している。全体によく研磨されており、陸には墨を磨った痕による凹みが観られる。また、裏面に「嶽○。」という文字もみられる。全体に細かい切傷がみられる。	南トレンチ Ⅱ-b層
	2	砥石	完形	11.2 16.9 7.4 1568	凝灰岩	表裏面を除く全ての面が研ぎ痕により、湾曲している。特に上面が大きく湾曲しており、整形時に鑿痕と思われる跡が表裏側面に残る。表裏面に強く観られる。渡名喜島原産。	南トレンチ チンガー内
	3	砥石	破	2.6 2.8 1.6 11.61	凝灰岩	表裏面に孔が穿っており、孔から上部に向かって溝が走る。左側面は研ぎ痕により、僅かながら湾曲しており、下面に延びていったと思われるが、破損のため、形状は、判断できない。	南トレンチ Ⅱ層

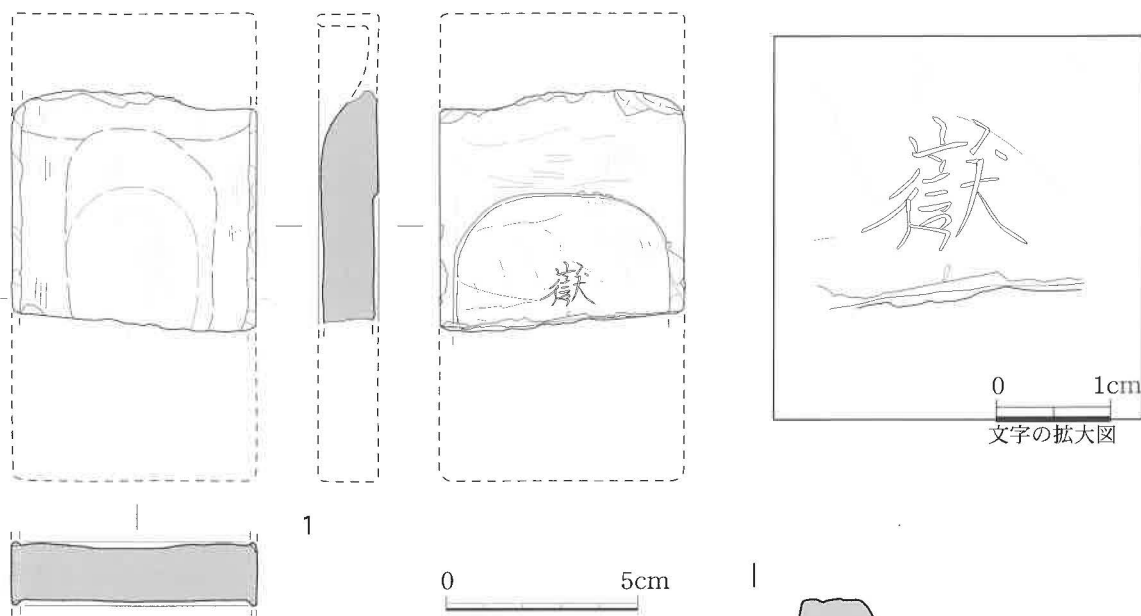
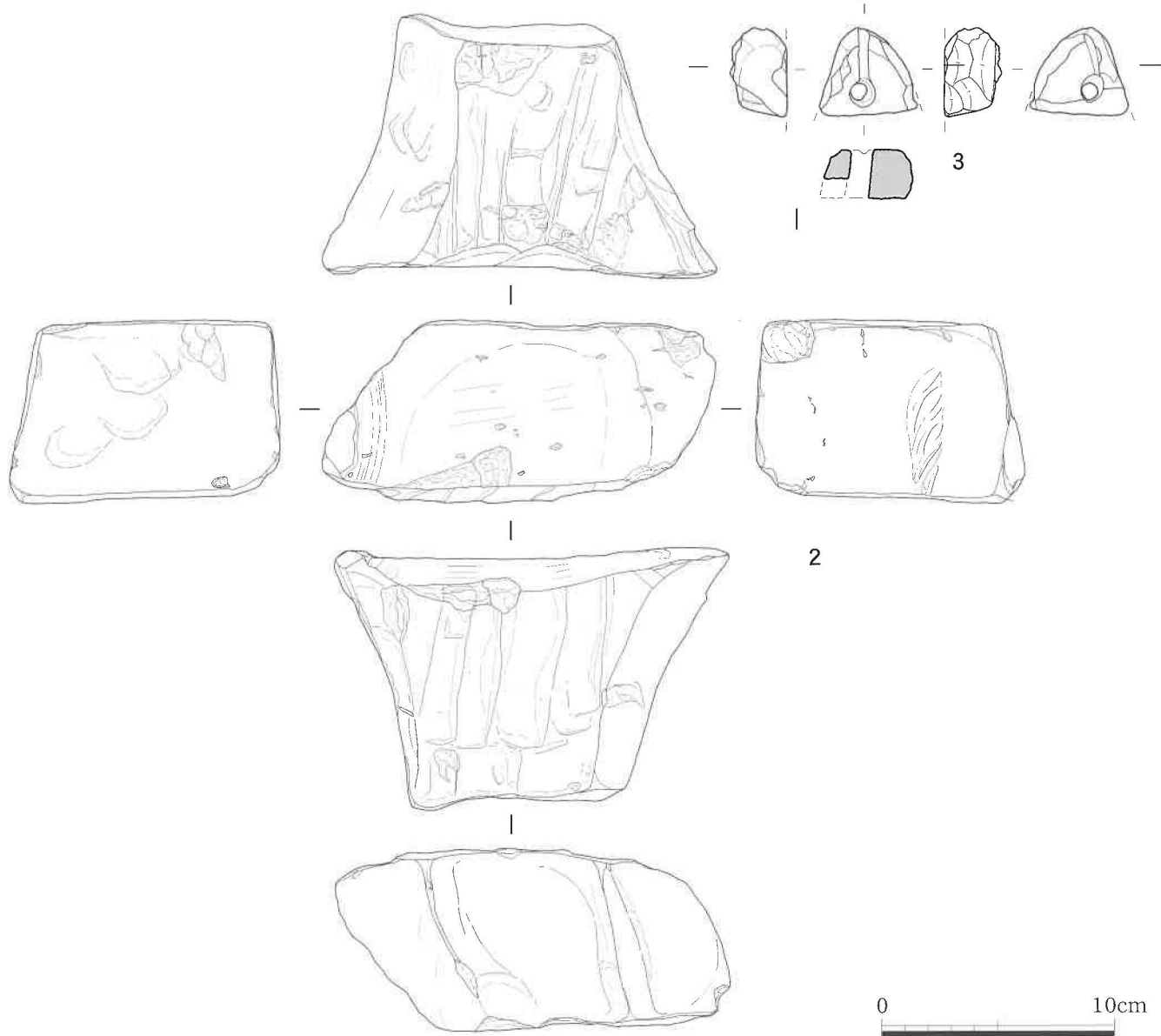


図1・3の縮小



第23図 石器

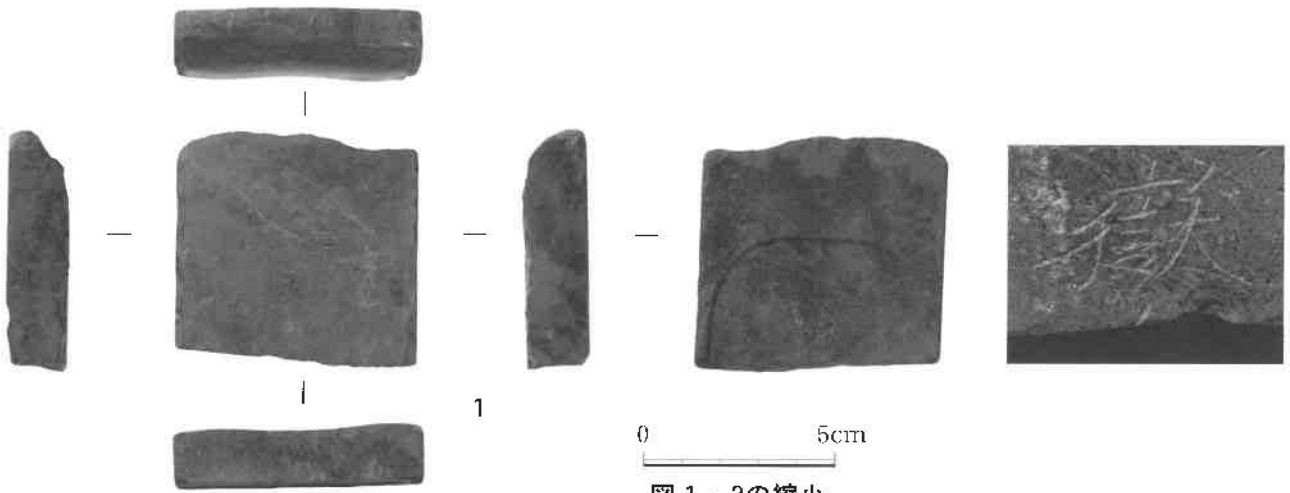
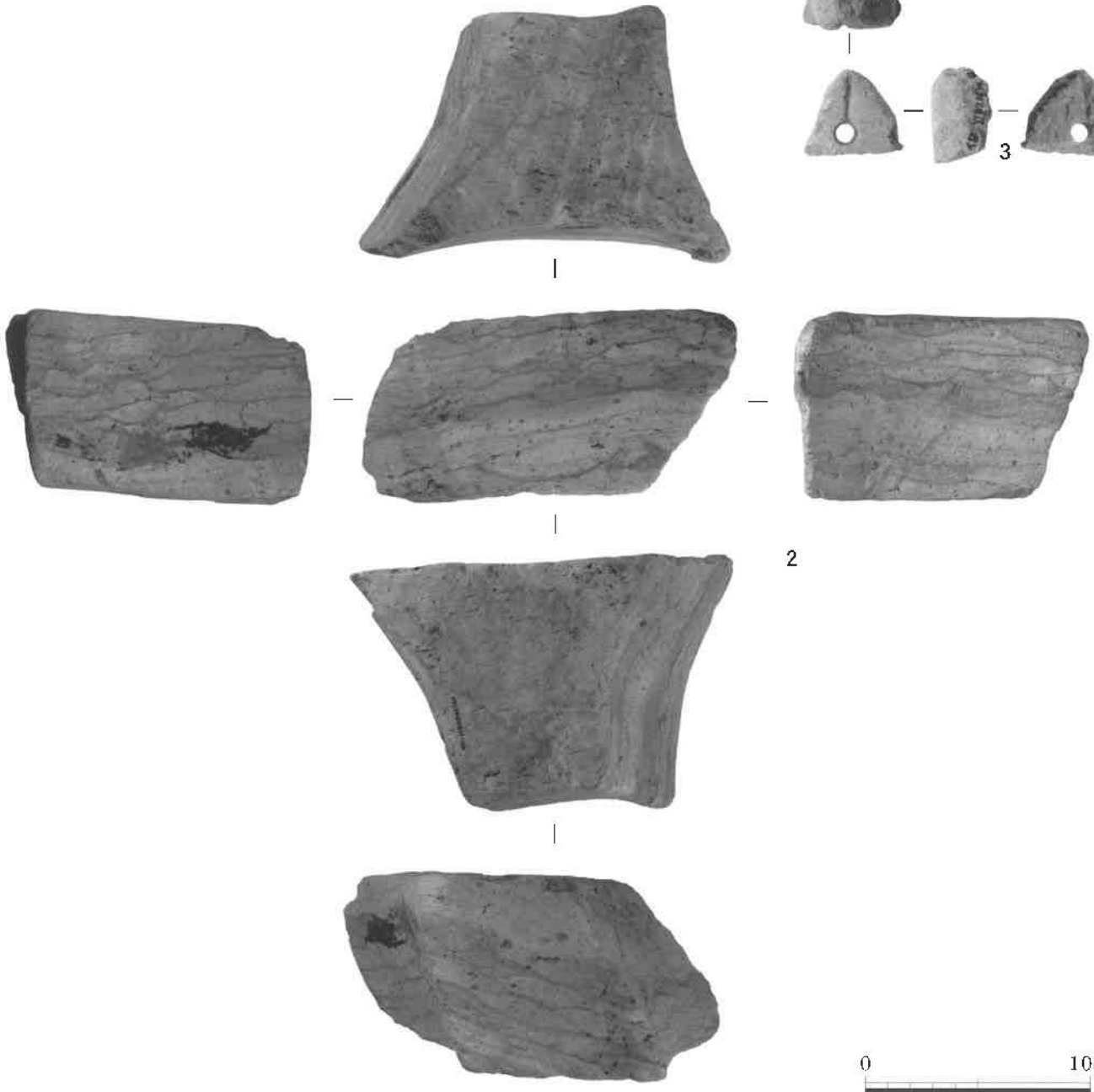


図1・3の縮小



図版14 石器

9. 貝製品

タカラガイ製品、二枚貝有孔製品、螺蓋製貝斧などの実用品が計9点出土した。

a. タカラガイ製品

タカラガイの背面を除去したもので、ハナビラダカラ2点、ハナマルユキガイ1点の計3点出土した。

ハナビラダカラのうち、図2は背面除去後、打ち割り調整の後、側面を整えている。図1は貝の色が残り、除去後の加工の細かい調整が認められないことから自然割れの可能性が高い。ハナマルユキガイは背面除去後、側面の高さ調整される。民俗事例から漁網錘と想定される。

b. 二枚貝有孔製品

二枚貝の殻頂あるいはその近くを穿孔するもの3点出土した。貝種はリュウキュウサルボウとカワラガイである(図4・5)。

このほかにツメタガイによって穿孔された(径2mm)のリュウキュウシラトリがある。参考資料として図示(6・7)しておく。

そのほかヤコウガイの蓋の薄い部分を連続で剥離し、刃状にしたものも出土している。

《参考文献》

岸上興一郎「宝貝の錘」『民族学研究』35巻4号262-263頁 1971年

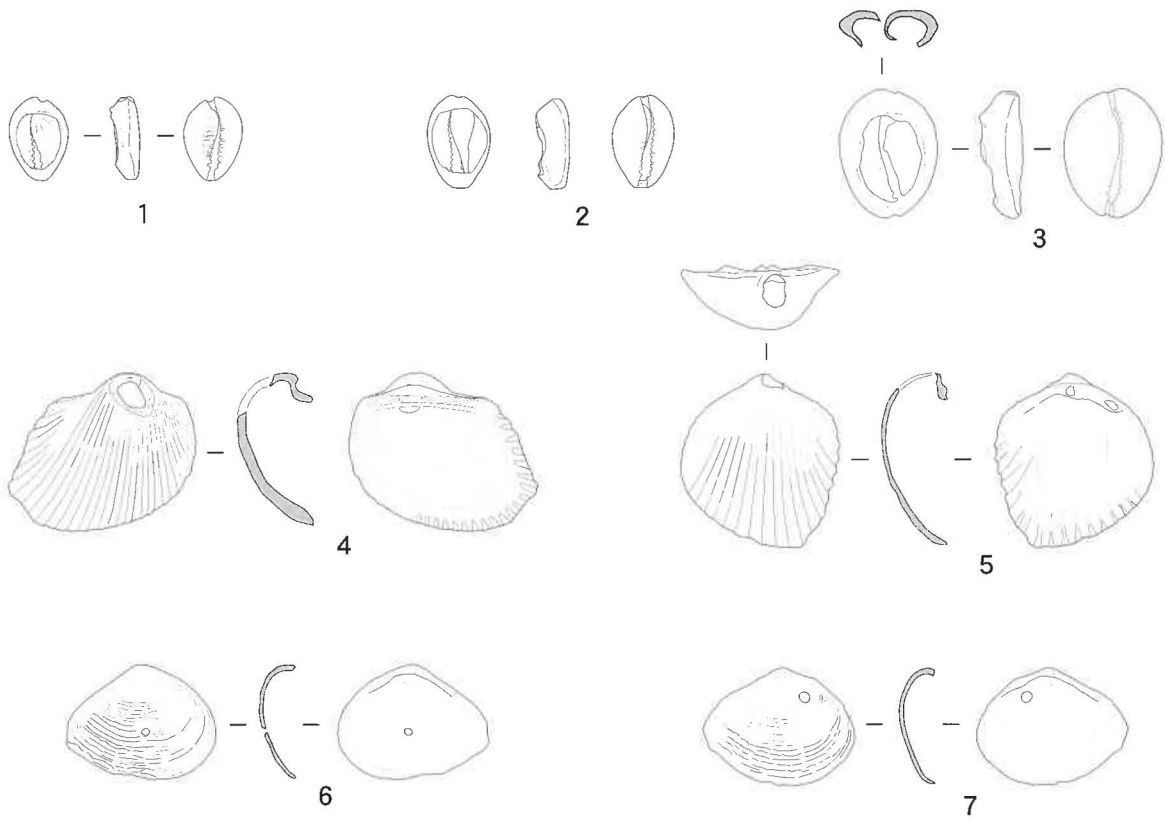
島袋春美「県内出土の「タカラガイ製品」について」『南島考古』NO.16 61-70頁沖縄考古学会 1997年

佐藤武宏(学芸員)「研究ノート ツメタガイの殻とらせん」『自然科学のとびら』第5巻 第1号 通巻第16号

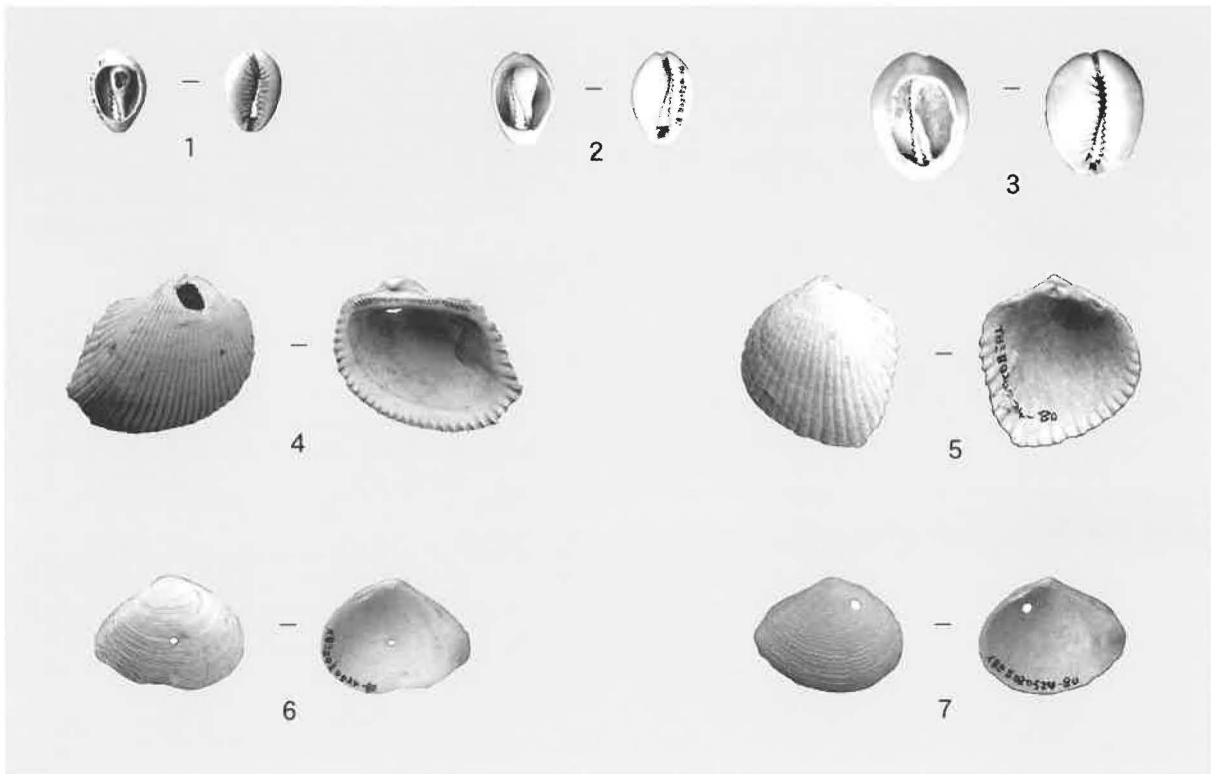
神奈川県立生命の星・地球博物館 1999年

表15 貝製品観察一覧

図・図版	挿図番号	製品	貝種	縦殻高(mm)	横殻長(mm)	孔縦(mm)	孔横(mm)	重量(g)	観察事項	出土地
第24図(図版15)	1	タカラガイ製品	ハナビラダカラ	24.8	16.5			1.62	つやあり。背面除去	南トレンチ・II層(戦前遺構)、2002.05.29
	2	タカラガイ製品	ハナビラダカラ	22.8	15.7			1.64	背面除去、側面丁寧に調整。殻軸一部除去	南トレンチ・II層(戦前遺構)、2002.05.27
	3	タカラガイ製品	ハナマルユキ	34.8	26.3			7.8	色残り。背面除去、側面丁寧に調整。殻軸一部除去	不明
	4	二枚貝有孔製品	リュウキュウサルボオ	40	50.5	9.4	6.7	16.31	僅かに色残。穿孔・内→外、孔位置:殻頂、腹孔。腹縁一後破損	北地区・no.4、2000.02.18
	5	二枚貝有孔製品	カワラガイ	45.5	41.3	10.6	6.6		ヘビ貝付着。殻頂破損	南トレンチ・II層(戦前遺構面)、2002.05.24
	6	二枚貝有孔製品b	リュウキュウシラトリ	30	49	2.7	2.5	3	自然。ツメタガイ(Glossaulax didyma)による穿孔。	南トレンチ・II層(戦前遺構面)、2002.05.24
	7	二枚貝有孔製品b	リュウキュウシラトリ	31	29	3.5	3.2	2.17	自然。ツメタガイ(Glossaulax didyma)による穿孔。	南トレンチ・II層(戦前遺構面)、2002.05.24
	—	二枚貝有孔製品	リュウキュウサルボオ			14	7	6.4	風化。	北トレンチ・表面清掃、2002.03.06



第24図 貝製品



図版15 貝製品



10. 円盤状製品 (第25図・図版16)

本遺跡では総計11点出土している。

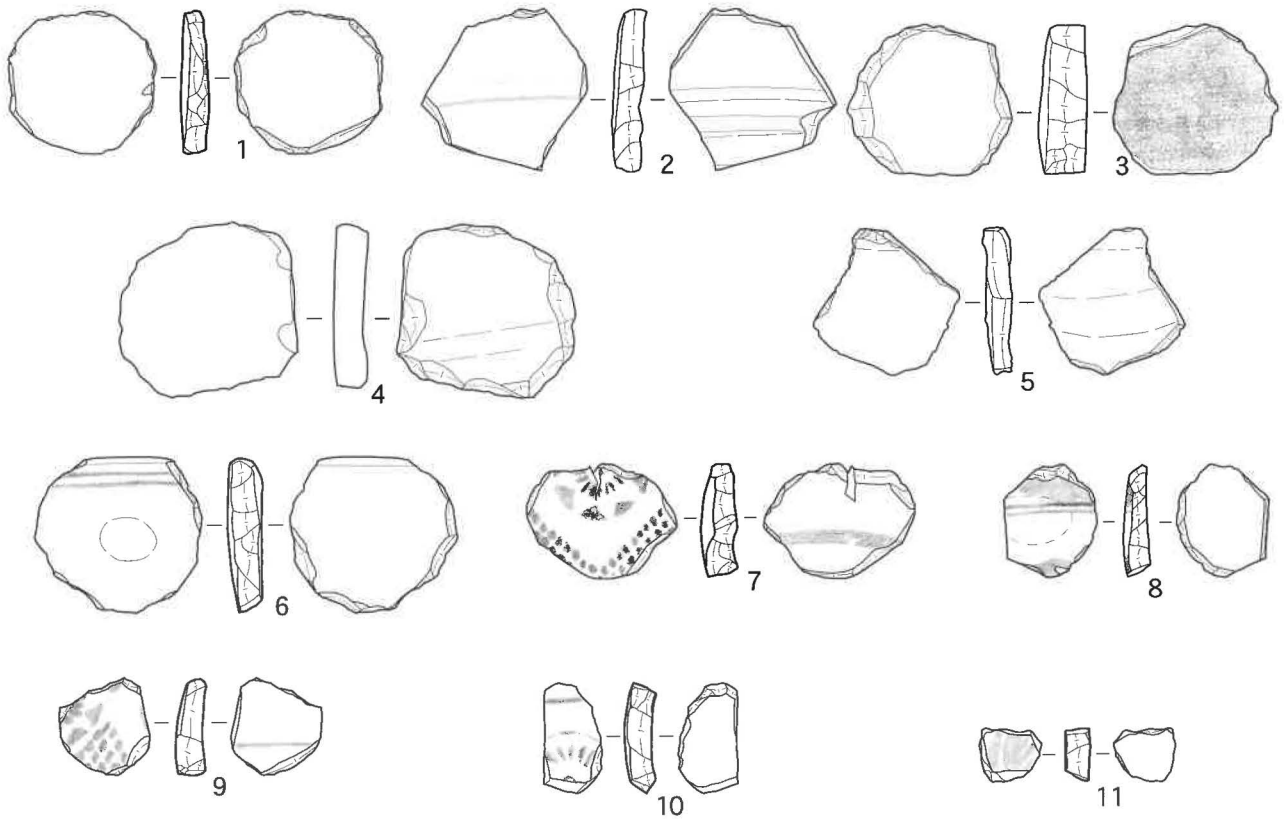
次のうち、二つ以上の条件を満たしものを、製品とした。

- ①五回以上剥離していること
- ②たとえば半円状であっても円形にする事を意識した形跡があること
- ③外面中央に摩擦痕が見られること

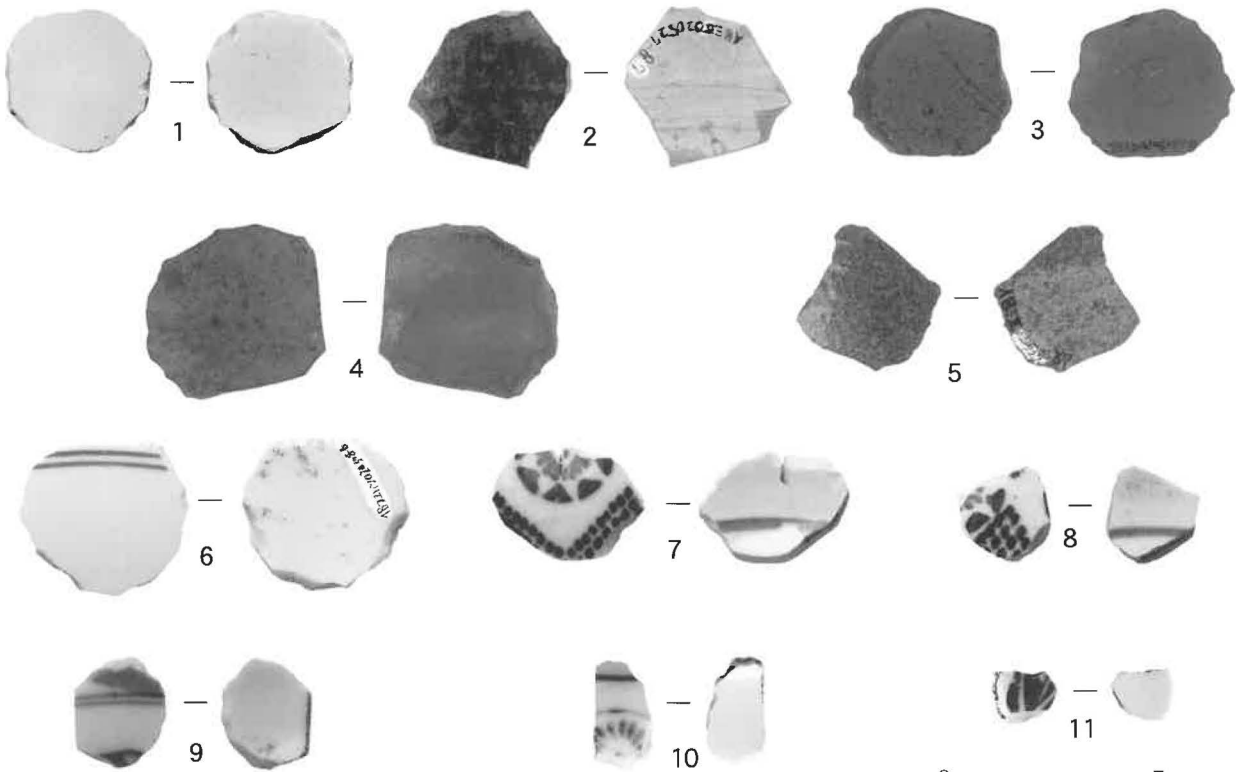
沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・薩摩焼・本土産磁器を素材としており、沖縄産無釉陶器を使ったものはやや大きく、本土産磁器を使ったものは小さい傾向にある。特徴として、本土産磁器3点と沖縄産施釉陶器1点の外面凸部に摩擦痕が見られ、摩擦痕のあるものは使用されたもの、ないものは未使用の可能性がある。次に図5は18c後半に作られた薩摩焼であり、北谷と鹿児島との交流を想定できる。さらに、図6は戦中に瀬戸や岐阜で作られた碗であり、戦中・戦後にも円盤状製品が作られていた可能性が高いことがあげられる。

表16 円盤状製品観察一覧

図・図版	図番号	材料	短軸 (cm)	長軸 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	観察事項	出土地
第27図(図版18)	1	沖縄産施釉陶器	3.1	3.2	3.5~5	5.6	碗の胴部を使用。やや丁寧な加工により円形を呈す。外面中央に摩擦痕有り。	南トレンチ清掃 20020305
	2	沖縄産施釉陶器	3.5	3.6	4.5~5.5	8.75	碗の胴部を使用。粗い加工により五角形を呈す。内面に白化粧が見られる。	南トレンチⅡ層 20020527
	3	沖縄産無釉陶器	3.3	3.8	9	15.7	甕の胴部を使用。やや丁寧な加工により円形を呈す。	北トレンチ白砂(凝固)層 20020402
	4	沖縄産無釉陶器	3.9	4.1	7	18.64	甕の胴部を使用。やや粗い加工によりやや方形を呈す。	北トレンチ白砂(凝固)層 20020320
	5	薩摩焼	3.1	3.2	3.5~4.5	4.71	土瓶か小壺の頸部を使用。粗い加工によりやや方形を呈す。苗代川窯産。内外面にそば釉が見られる。	南トレンチⅡ層 20020527
	6	本土産磁器	3.4	3.4	5	10.72	碗の口縁部を使用、口唇部直下に緑のラインが二本ある。丁寧な加工により円形を呈す。外面中央に摩擦痕有り。	清掃 20020308
	7	本土産磁器	2.4	3.35	4~6.5	6.14	型紙刷りの碗の胴部を使用。やや粗い加工により不整形円形を呈す。外面中央に摩擦痕有り。	南トレンチⅢ層 20020529
	8	本土産磁器	2.05	2.4	3~5	3.04	碗の胴部を使用、外面に文様。やや粗い加工により楕円形を呈す。外面中央に摩擦痕有り。	北トレンチⅢ層 20020311
	9	本土産磁器	2.1	2.1	4~5.5	2.93	型紙刷りの碗の胴部を使用、外面に文様。やや粗い加工により不整形円形を呈す。	南トレンチⅠ層 20020318
	10	本土産磁器	1.3	2.4	5	2.35	碗の胴部を使用、外面に文様。やや粗い加工により半円形を呈す。	南トレンチ清掃 20020305
	11	本土産磁器	1.1	1.3	4.5	1	碗の胴部を使用、外面に文様。やや粗い加工により半円形を呈す。	南トレンチⅢ層 20020529



第25図 円盤状製品



図版16 円盤状製品

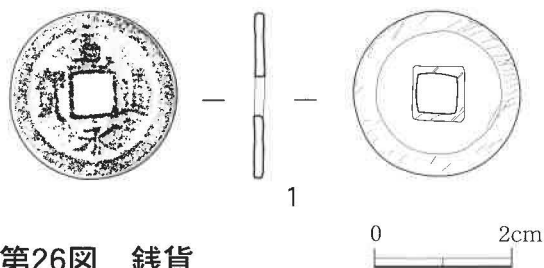


11. 銭貨

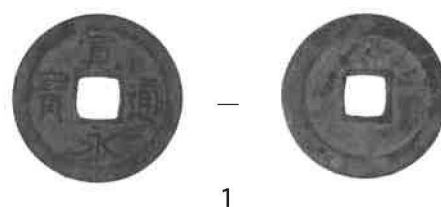
第26図（図版17）は「寛永通宝」で、径2.4cm、孔径0.6cm、重量3.11gである。字体から新寛永（3期）^註と思われ、南トレンチ戦前遺構(チンガー?)より1点出土している。

註

1697年(初鑄年) 永井久美男 1996『日本出土銭総覧』 兵庫埋蔵銭調査会



第26図 銭貨



図版17 銭貨

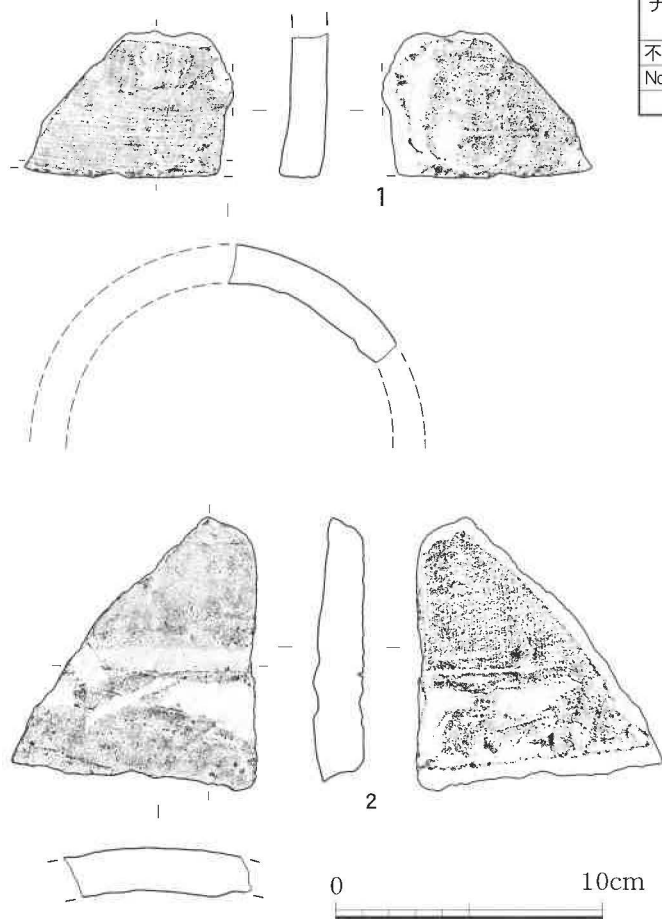
12. 瓦

瓦は丸瓦9点、平瓦19点、不明20点の計48点出土した。地区別には南トレンチで18点、北トレンチで9点と南トレンチに多い。

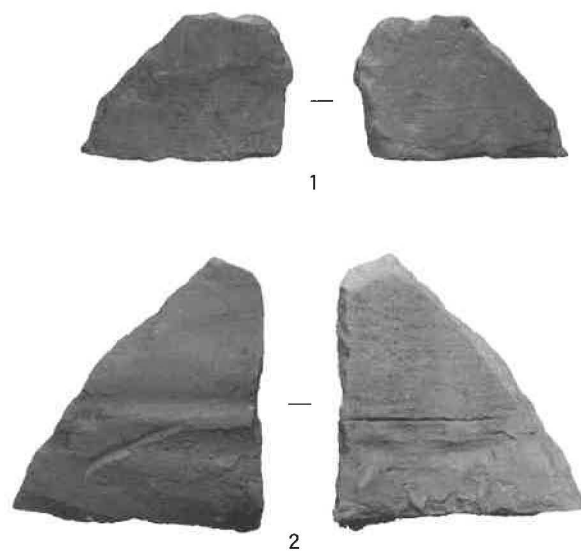
瓦以外の遺物も本土産陶磁器や沖縄産の陶磁器が多く、瓦の時期とも一致する。

表17 瓦出土量

出土地		器種	瓦	平瓦	丸瓦	瓦(天目) 碗	合計	
北トレンチ	表採	口		1	2		3	4
		胴	1				1	
	II	口			3		3	4
南トレンチ	III	口		1			1	1
		胴		1			1	
	I	口		1			1	10
胴	2	5	1		8			
不明	床掃除	胴	1	1	1		3	3
	II	胴	4				4	4
	III	胴		1			1	1
No.1	不明	胴	10	8	2		20	20
暗茶色砂質土層		胴	2				2	2
合計			20	19	9	1	49	



第27図 瓦



図版18 瓦

13. 簪

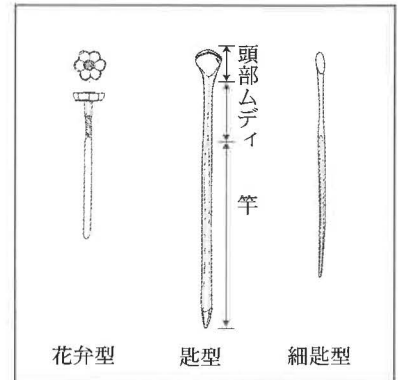
髪をまとめたり飾ったりするだけでなく、年齢や身分によって使い分けがあったという。金・銀・銅・真鍮・べっこう・骨・ガラスなどいろいろな素材で作られた。頭部形状は大きく分けて花形と匙形があり、匙形は丸い匙状と細い匙状に分かれる。花形や細い匙状は男性、丸い匙形は女性や子供のものとされる。金属製が2点、べっこう製が1点の総計3点出土している。

簪は頭部・ムディ・竿に分け、それぞれの特徴について表に記した。

《参考文献》

沖縄タイムス、沖縄大百科事典 1983年

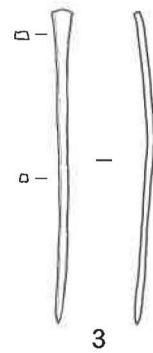
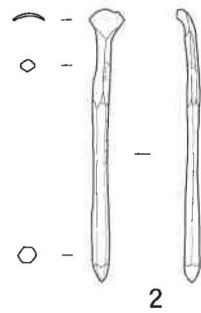
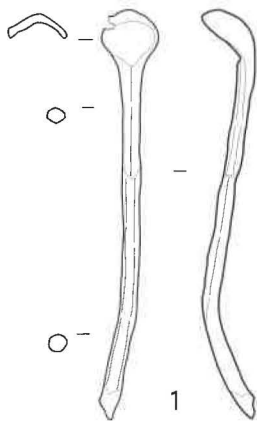
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集「首里城跡」2001年3月



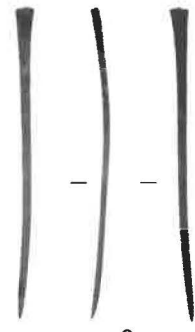
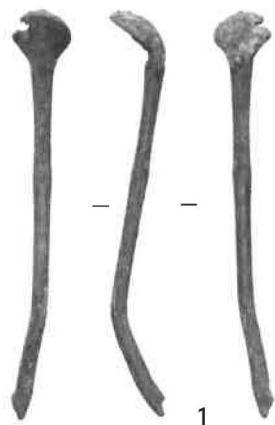
第28図 簪の分類と部位名称

表18 簪観察一覧

図・図版番号	図番号	完・破	頭部形状	材質・色	重量(g)	観察事項	出土地
第29図(図版19)	1	完	匙状	金属 (青白色)	5.09	長さ10.7cm、ムディの断面は六角で、竿との境で違う角度の六角に切り替わる。竿の途中で曲がっている。	南トレンチ戦前遺構面020529
	2	破	匙状	金属 (褐色)	6.13	残存長7.2cm、ムディの断面は六角で、竿との境で違う角度の六角に切り替わる。頭部は残存部から匙状であったと思われる。	南トレンチ戦前遺構面020528
	3	破	不明	べっこう(褐色)	0.46	残存長8.2cm、他の3点に比べ軽く、光を通す素材である。断面形状は台形である。	北トレンチ戦前遺構(黒色砂)020320



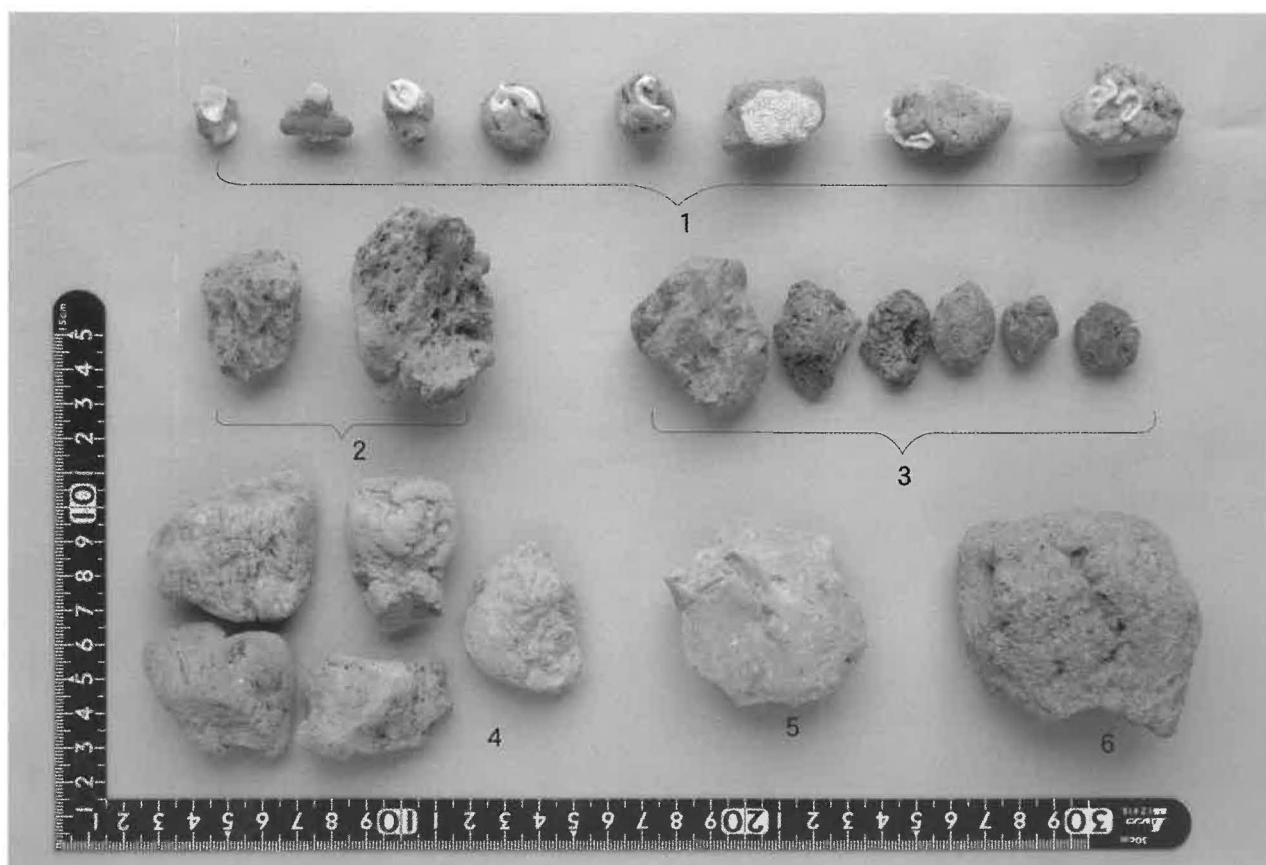
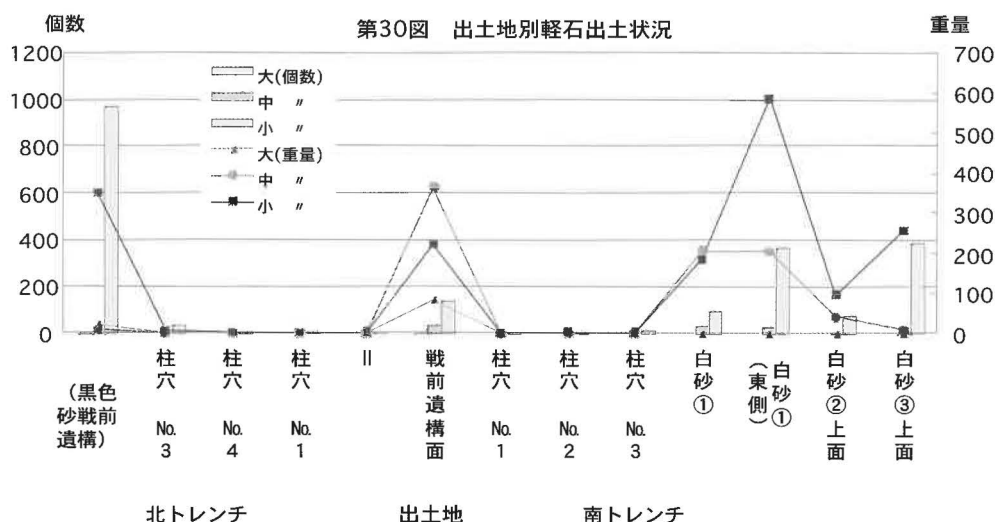
第29図 簪



図版19 簪

14. 軽石

作業としては、まず大(7cm以上)・中(3cm以上)・小(3cm未満)に分け個数と量を測った、重量は2,648gで、1コンテナ分となった。重量では南トレンチ白砂①(東側)層・南トレンチ戦前遺構面・南トレンチ白砂①層・北トレンチ戦前遺構(黒色砂)の順に多く、柱穴の埋土にはあまり軽石が入らないことがわかった。本報告の伊礼原E遺跡に同じく白砂層のものに関しては、この層が形成されていた時期にどこかから流れてきたものか可能性を考えている。次に軽石を色調別に分類(図版20)し計量した。層別の特徴が見られないか検討したが、特にはなかった。北トレンチ戦前遺構(黒色砂)から製品疑いありのものが確認されたが、検討を要する。

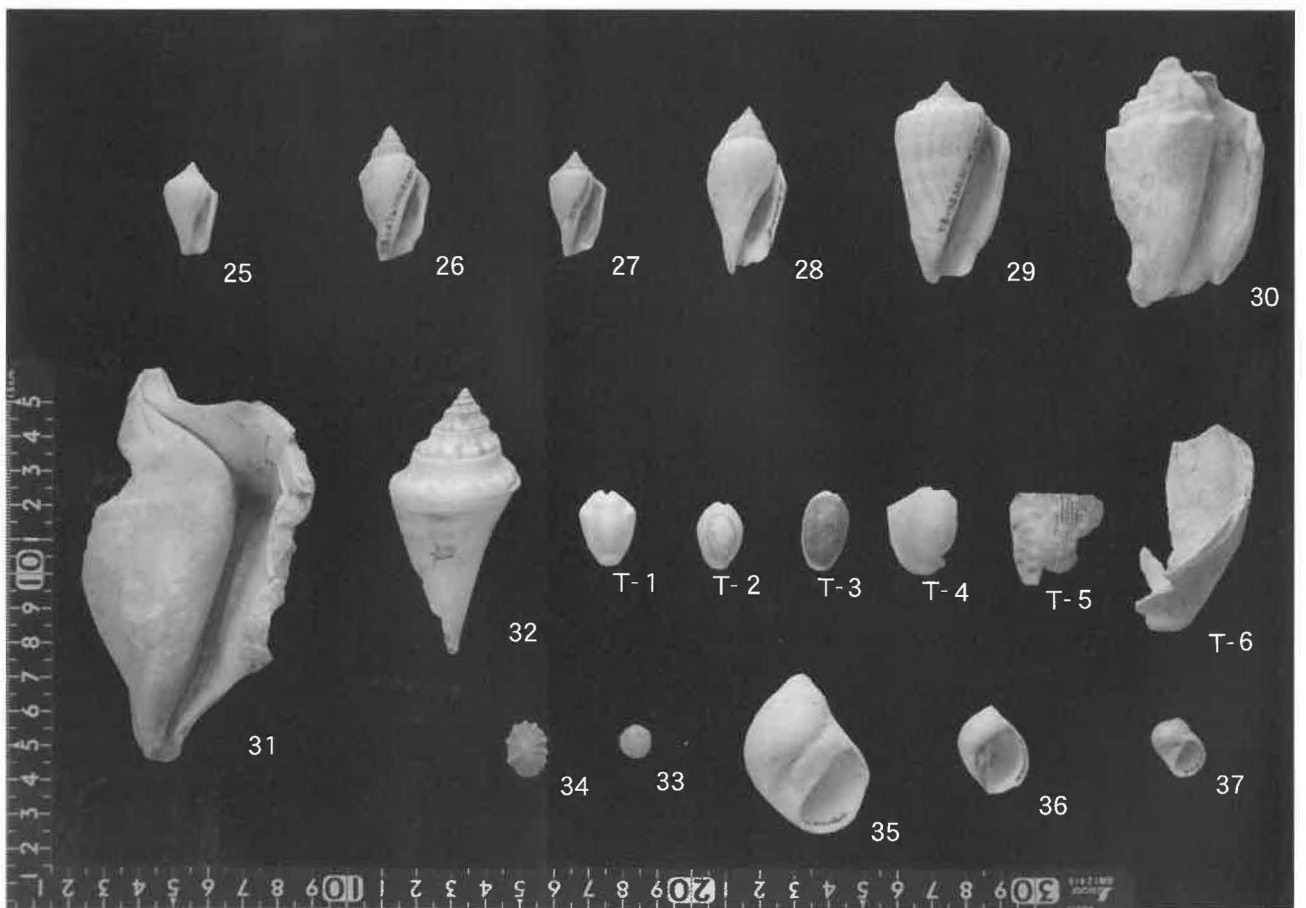
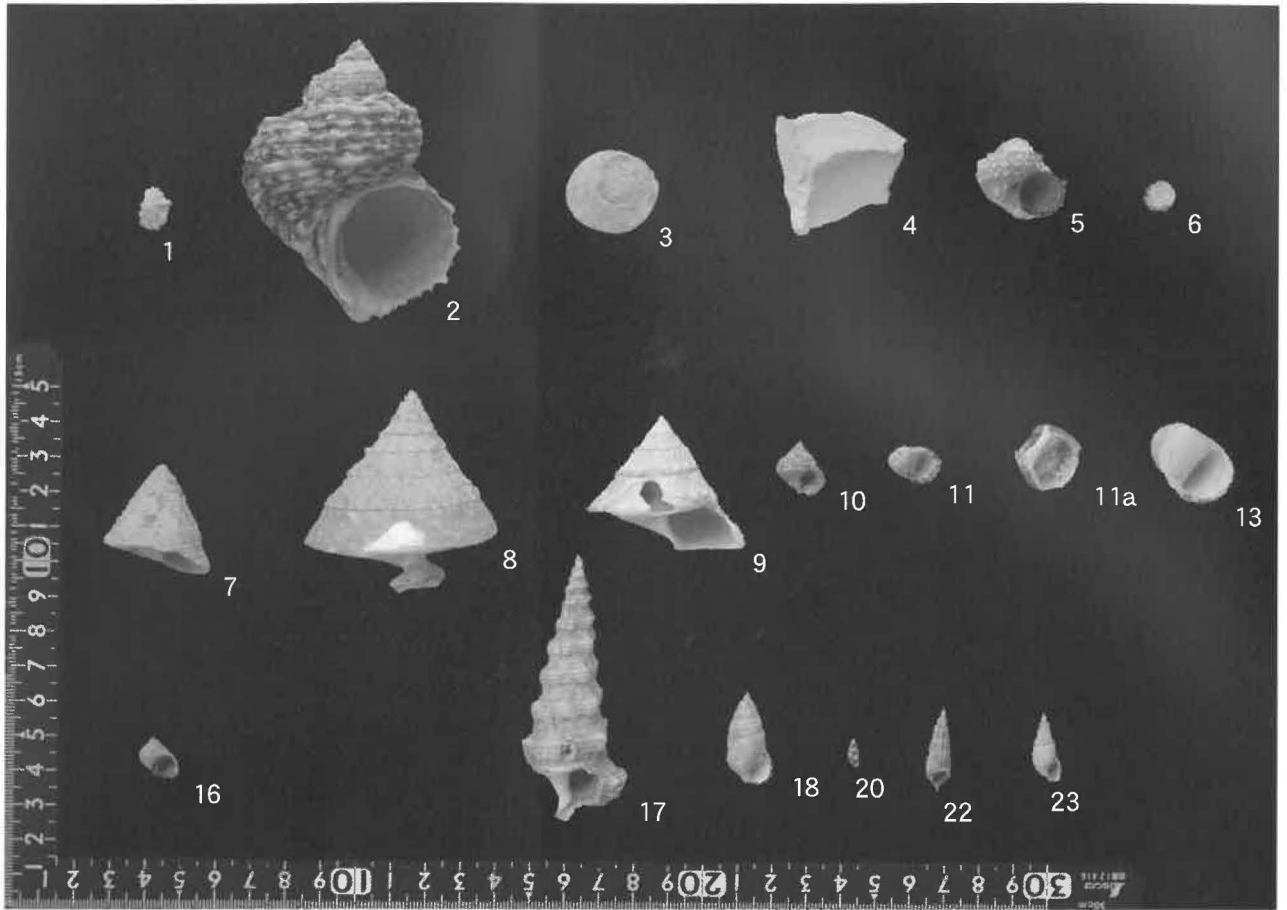


図版20 軽石 1・4淡灰色 2淡黄色 3黒褐色 5灰白色 6暗褐色

表19 海産腹足類（タカラ貝を除く）の出土詳細

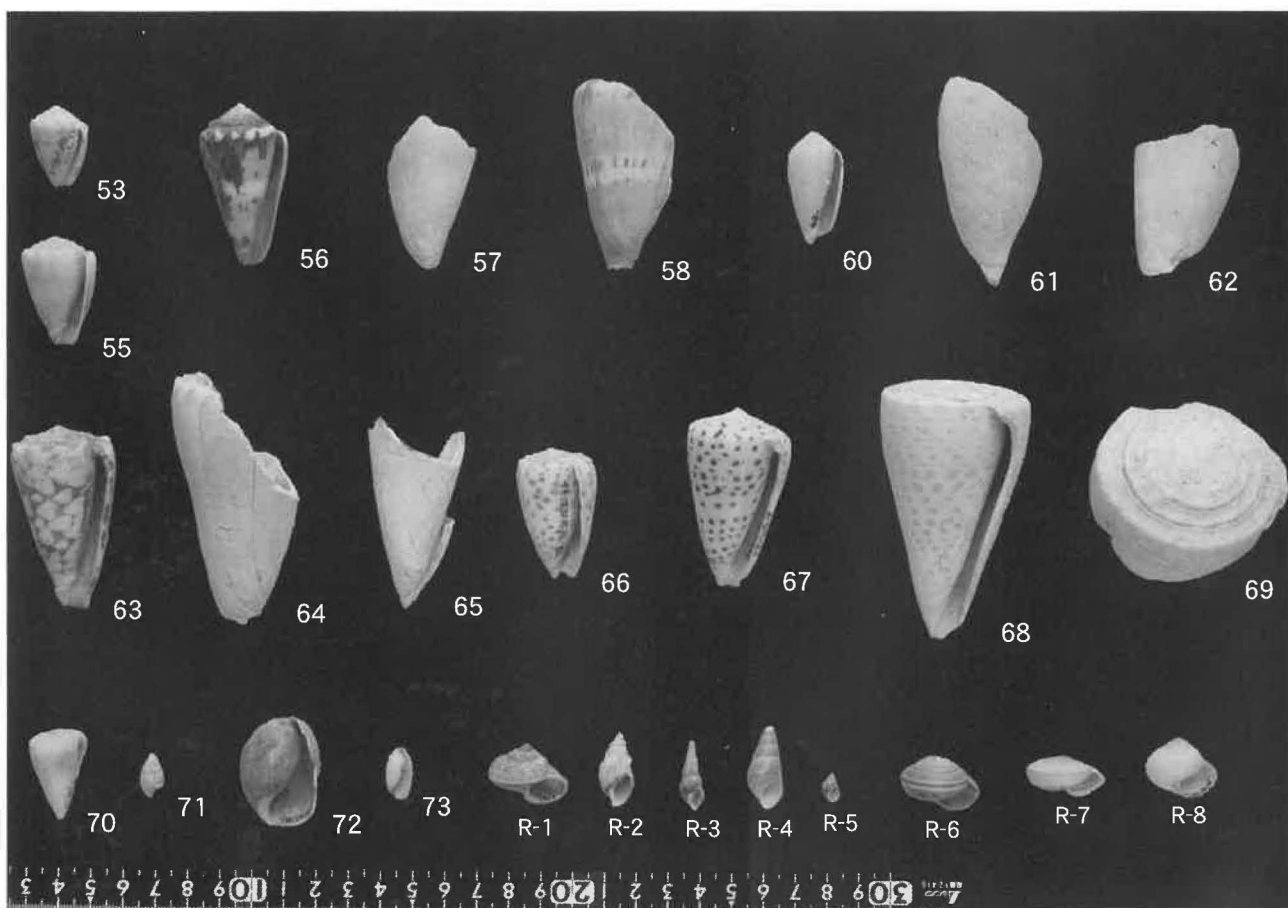
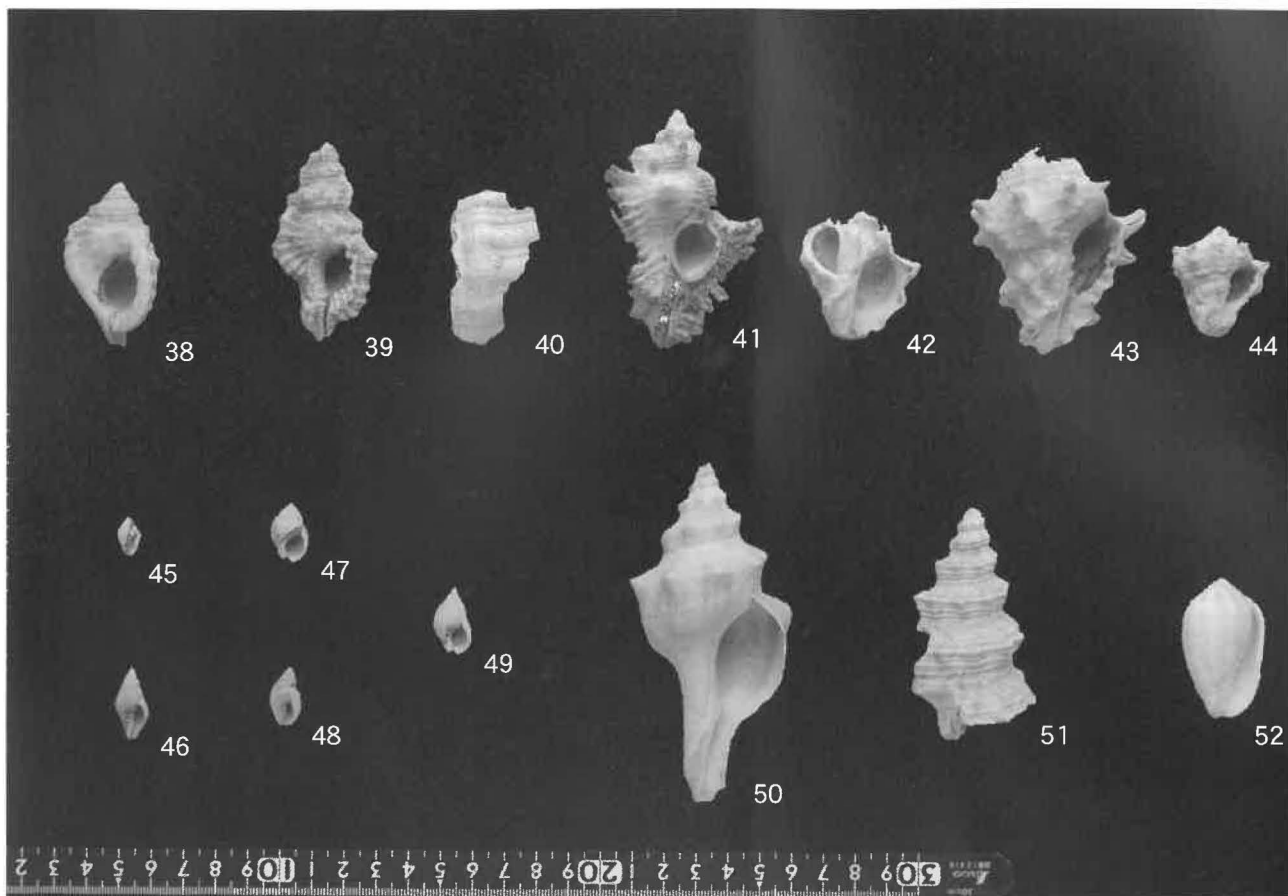
科	貝	地区	北トレ												不明	合計	殻頂 (完形+破片)	個体数 (完形+殻頂+不明)	
			II	III	表面 清掃	柱穴	Nc3	Nc4	I	II	III	海底 砂利層	暗茶色 土層	暗茶色 砂質層					表面 清掃
ツタノハガ イ科	ツタノハガ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	1
																			0
リュウテン科	リュウテン	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	14
																			8
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															3	4
																			0
アオブネガイ科	アオブネガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	1
																			0
ウミニナ科	ウミニナ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	16
																			7
タマガイ科	タマガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	3
																			0
スズメガイ科	スズメガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	1
																			0
タマガイ科	タマガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	7
																			6
フシギガイ科	フシギガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	1
																			0

科	貝	地区	北トレ												不明	合計	殻頂 (完形+破片)	個体数 (完形+殻頂+不明)	
			II	III	表面 清掃	柱穴	Nc3	Nc4	I	II	III	海底 砂利層	暗茶色 土層	暗茶色 砂質層					表面 清掃
ツタノハガ イ科	ツタノハガ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	1
																			0
リュウテン科	リュウテン	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	14
																			8
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															3	4
																			0
アオブネガイ科	アオブネガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	1
																			0
ウミニナ科	ウミニナ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	16
																			7
タマガイ科	タマガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	3
																			0
スズメガイ科	スズメガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	1
																			0
タマガイ科	タマガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	7
																			6
フシギガイ科	フシギガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	1
																			0
リュウテン科	リュウテン	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															11	13
																			1
アオブネガイ科	アオブネガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															2	26
																			26
ウミニナ科	ウミニナ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															7	7
																			0
タマガイ科	タマガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	2
																			45
スズメガイ科	スズメガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	1
																			0
タマガイ科	タマガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															4	4
																			1
フシギガイ科	フシギガイ	完形 殻頂 体層 破片 備考	1															1	1
																			0



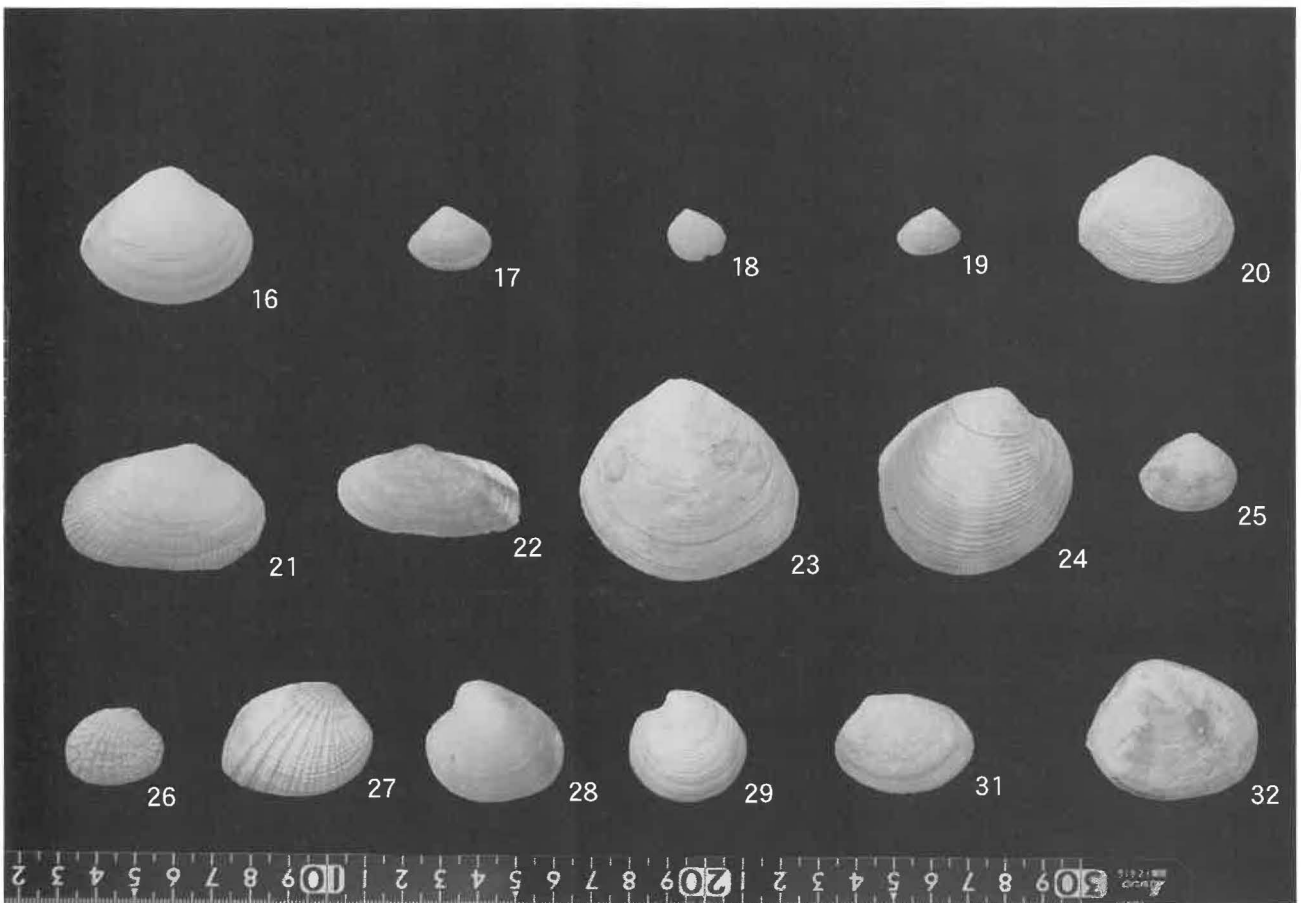
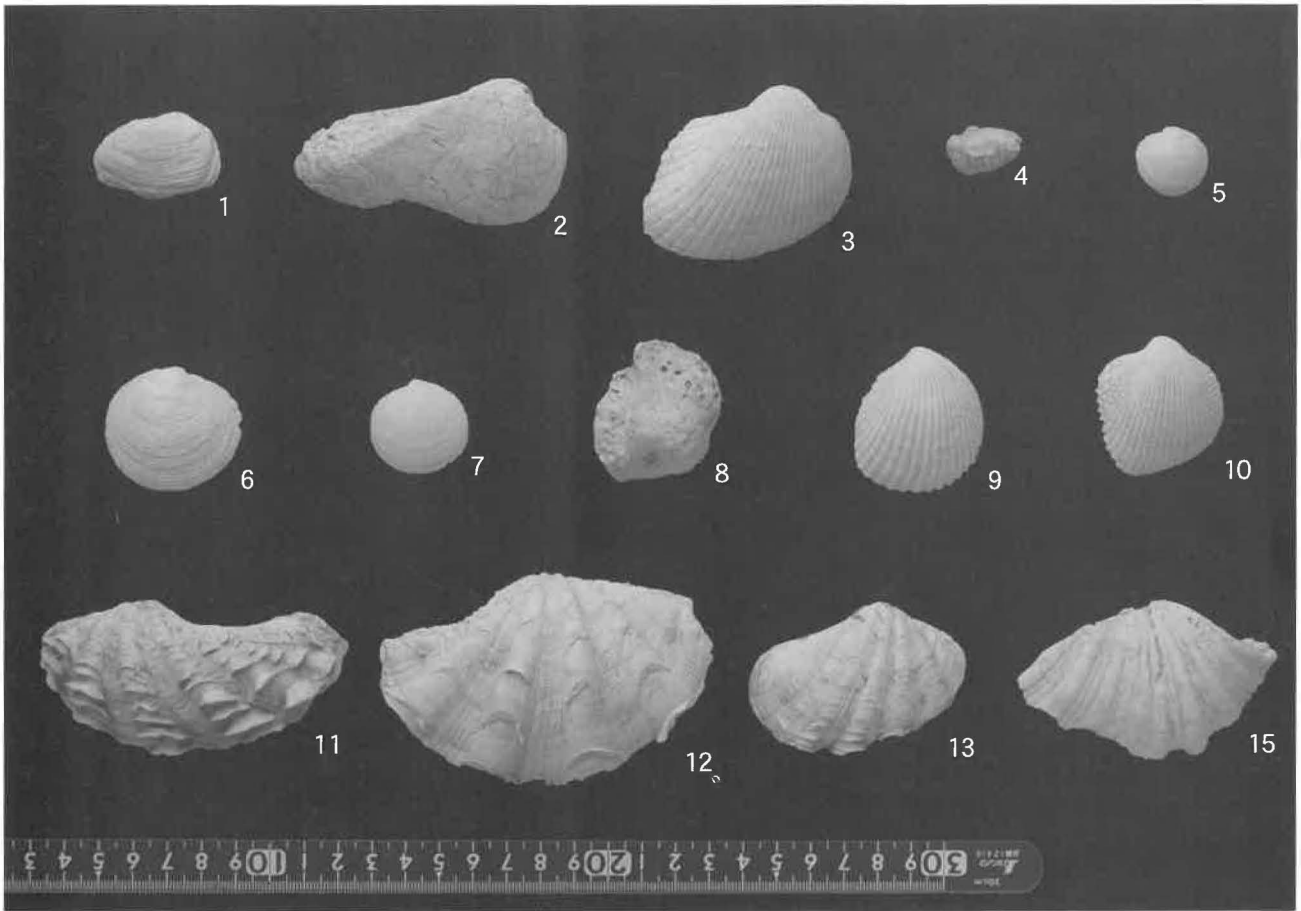
図版21 貝類(巻貝1)

(Tはタカラ貝 Rは陸産貝の番号を示す)



図版22 貝類(巻貝2)

(Tはタカラ貝 Rは陸産貝の番号を示す)



図版23 貝類(二枚貝)

表23 イノシシ・イノシシ/ブタ(イヌ・ウシ)・ブタ遺体の同定結果

種類 地区・層	部位	イノシシ							イノシシ/ブタ (イヌ・ウシ)							ブタ							合計				
		北トレンチ			南トレンチ			不明	表面清掃	計	北トレンチ			南トレンチ			不明	表面清掃	計	北トレンチ				南トレンチ			計
		II	III	I	II	III	II				III	I	II	III	II	III				チンガール内	表面清掃	II		III	I	II	
頭蓋骨		1			2	1			4	5	1						6	2	1	1					4	14	
上顎	左右不				1				0 0 1	1 1 1						1			1						1	0 1 2	
下顎	左右不								0 0 1	1 1 1		1							1				1		1 1 3		
歯		1							3	1						1									4		
顎骨		1							1																1		
胸椎									0						1	1									1		
椎		1			1				2	7		1			1	9	1	1							2	13	
肋骨					1				1	4						4	3		1						4	9	
肩甲骨	左	w p d s fr							1							0 0			1						1 0	1 1 0	
尺骨	右	p										1				1	1								1	2	
上腕骨	左右不								1 1 1	1 1 1		1				1 1 2									1 1 3		
橈骨	右	fr w p							0 0	1			1			1 1			1						1 1 1		
寛骨	左右破							1					1			1 2	1								1 2		
大腿骨	左	d 不 fr															1		1			1			1 1 1		
四肢骨			4		6	1		2	13	6		3	1		1	11	1	1	1	1					3	27	
脛骨	左	p s										1					1								1 1 1		
腓骨																	1								1		
距骨																0	1								1		
基節骨					1				1			1				1	2		1						3		
手(足)根骨										5		1				6	4								4		
中手(足)骨										1						1	2								2		
中節骨																2	2		1						3		
指骨																1	1								1		
不明										1						1									1		
計			14	0		12	2	1	2	31	36	1	1	13	1	1	2	55	28	4	9	2	1	1	4	129	

表24 イノシシ・ブタ・イノシシ/ブタ 歯牙一覧

種類 地区 層	部位	上顎				下顎								合計
		左右不明		左		右				左右不明		合計		
		P1	P4	I	M1	M2	I	C	P1	M2	I		C	
イノシシ	北トレンチ II	1		1					1	1	1	1	1	6
	南トレンチ II 床掃除不明		1			1					1		1	3
	合計	1	1	0	1	0	1	0	1	1	1	2	1	11
イノシシ/ブタ	北トレンチ II			1		1								2
	南トレンチ II			1										1
	合計	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
ブタ	南トレンチ 表面清掃				1									1

表25 その他の種類一覧

グリッド	層	種類	部位	左右不	数
北トレンチ	II	ウミガメ	背甲板	不	1
北トレンチ	II	リクガメ	上腕骨	不	1
北トレンチ	II	ニワトリ	大腿骨	右	1
北トレンチ	II	ニワトリ	上腕骨	左	1
南トレンチ	II	鳥類	四肢骨	不	1
北トレンチ	II	鳥類	上腕骨	不	1
北トレンチ	II	イヌ	椎	不	1
南トレンチ	II	イヌ	寛骨	左	1
南トレンチ	II	ネズミ	下顎C	不	1
不明	不明	小動物	肩甲骨	左	1
不明	不明	小動物	寛骨	不	1
南トレンチ	II	哺乳類同定不可	不明	不	1

表26 ウシ・ウシ/ウマ・ヤギ(?)の同定結果

種類 地区 層	部位	ウシ				ウシ/ウマ								ヤギ		ヤギ?		合計			
		下顎M		下顎M1		下顎?				肋骨				上腕骨		脛骨			四肢骨		
		左	破片	破片	右	fr	破片	fr	右	右	右	右	右	右	右	右	破片				
北トレンチ	II			2				2			1			1							6
	III						1														1
南トレンチ	II		1		1	1			1			1	3	1	1	1	1	1	1	1	14
	III		1																		1
合計		1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	22

表27 サカナ出土一覧

グリッド	層	種類	部位	数
北トレンチ	II	不明	棘	1
北トレンチ	不明	不明	椎	1
南トレンチ	床掃除	不明	不明	1

第四章 まとめ

本調査はキャンプ桑江北側返還跡地に伴う区画整理事業の範囲確認調査で、平成14年2月から6月までの5ヶ月を費やしての調査であった。

伊礼原B遺跡は北東側から流れる徳川の河口近くに位置し、数回の堆積、流出を繰り返し形成された縄文、弥生、グスク時代のたまかに3つの時期が存在する複合遺跡である。前回の試掘調査の結果を踏まえて、標高2.5mのレベルに近世の柱穴址が確認されている試掘穴が存在することや戦前の集落地域にあることから、グスク期の包含層や生活址を把握するために調査した。調査区は、伊礼原B遺跡（河川敷）から南側の60m地点と80m地点に幅5m、長さ10mのトレンチを2本設定した。60m地点を北トレンチと呼び略南北に設定した。80m地点を南トレンチと呼び略東西に設定し、両者が直角になるように設置した。

調査では、北トレンチからはピット状遺構（第10図）、南トレンチからは井戸などの遺構（第9図）が検出され、それに伴って近世の沖縄産施釉陶器、陶質土器、本土産磁器、青磁、白磁などの遺物と出土量は少ないがローリングを受けた室川下層式土器、仲泊式土器、浜屋原式土器、後期土器、グスク土器が出土した。

本遺跡の調査成果については、前章までに遺構・遺物について詳細と若干の考察を述べたが、本章では、今回の調査成果を今一度整理し、本遺跡の考察を行いたい。

検出面は、北トレンチで1つ、南トレンチで1つの合計2つの検出面が確認できた。検出面別の遺構は、北トレンチでは、第1検出面(Ⅱb 茶褐色土層)で、ピット状遺構が検出された。南トレンチでも同じ第1検出面(Ⅱb 茶褐色土層)から、井戸と洗い場、敷石を含む遺構とピット状遺構が検出された。また、井戸は戦前の北谷町字伊礼原伊礼209番地の島袋氏宅（屋号：樽チチンミグワー）の所有であることが聞き取り調査で確認でき、当該井戸をもつ屋敷は伊礼集落の北西隅に位置し、地籍併合図とほぼ同位置に所在していたことが確認できた。米軍の航空写真（1945）でも戦前の集落が見られる。

遺物は、沖縄産施釉陶器、本土産陶磁器、染付、陶質土器、古銭、簪、砥石、硯などの近世遺物と縄文時代前期～グスク期の土器片がⅢ～Ⅴ層からローリングを受けて出土している。以下、北トレンチ、南トレンチと検出面ごとに整理し若干の考察を行いたい。

北トレンチの第1検出面は沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、褐釉陶器、本土産陶器、本土産磁器、簪等が出土しており、特に沖縄産施釉陶器が多く次に本土産陶磁器、陶質土器、沖縄産無釉陶器となっている。それぞれ碗や小碗、皿、瓶、壺、鍋、急須等の様々な日用品が出土している。また、装飾品の簪や遊具品である円盤状製品等も出土している。ピット状遺構の中から青磁が出土しており、近世集落の遺構面だと考えられるが、屋敷跡につながるような柱穴群は見られなかった。

南トレンチの第1検出面でも北トレンチと同じような遺物が伴い、それに白磁や古銭、硯、砥石、貝製品等が出土している。古銭は敷石遺構から出土しており、『寛永通宝』と銘記されていることから、17世紀から18世紀に製造され、使用されていたものだと考えられる。また、井戸に伴う敷石遺構から出土しており、水が湧く所を神聖視する民俗事例から、この古銭は賽銭として

置かれた可能性も考えられる。ハナマルユキガイの貝製品も民俗事例から漁網錘と想定され、トビウオなどの表層に生息している魚類を対象にした漁法があった事を示唆している。チンガー内から出土した砥石は、磨面が大きく湾曲していることから、鎌等の農耕具をチンガーの水を使って研いでいたことが考えられる。

全体的にみると碗や瓶、壺、皿、急須、火炉などの日用品が多く出土していた。特に碗、壺、皿等は沖縄産施釉陶器が多く、陶質土器は火炉火取等の火に直接関わるものに多く使用されていることがわかった。また、本土産陶磁器、磁器からもゴム印や型紙刷り、銅版転写等の技法が見られ明治～大正期のものと判断できる。

獣骨もイノシシ、ブタ、ヤギ、ウシ、犬、猫、ネズミ、鳥、リクガメ、ウミガメ等の多種多様な獣骨が出土しており、解体時に付いたと思われる解体痕がイノシシの骨にみられた。

ローリングを受け摩耗した室川下層式土器、仲泊式土器、浜屋式土器、後期系土器がⅢ～Ⅴ層内で出土しており、本来ならば文化層ではない所に土器片が出土している。Ⅲ層から室川下層式土器、Ⅳ層からフェンサ上層式土器、Ⅴ層から後期系土器と層と時代が合っていない。また、白砂層の形成も考慮すると山側から緩やかに傾斜して海側に堆積を成しており、ローリングを受け摩耗した土器片だけでは縄文～グスク期の文化層を特定するには困難だと言えよう。

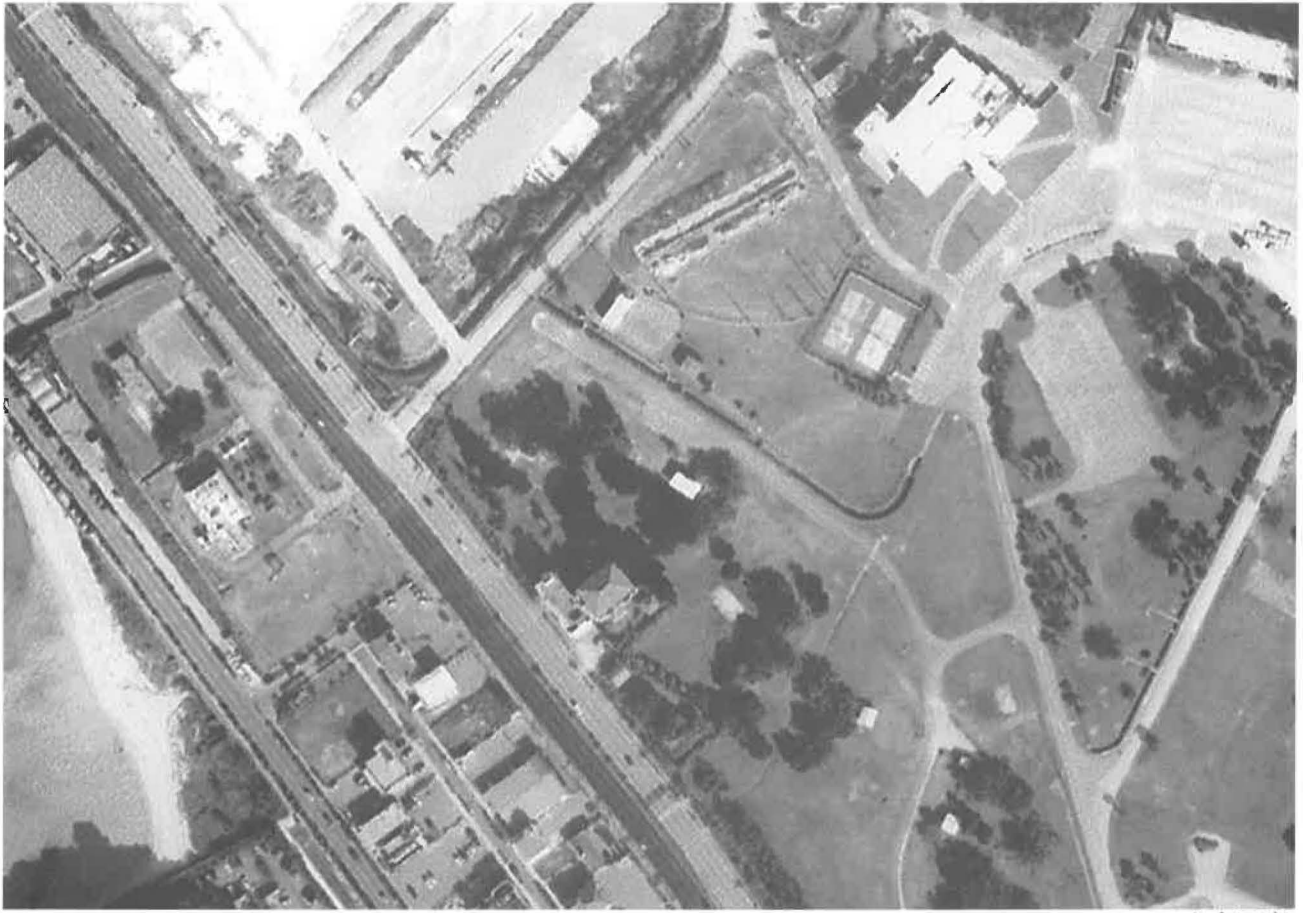
本遺跡では、Ⅱ層で沖縄産施釉陶器、青磁、型紙刷り（スンカン）の碗、先に述べた銅版転写やゴム印の技法を用いた本土産磁器、薩摩焼、『寛永通宝』等の遺物を伴って、井戸敷石洗い場遺構が出土していることや聞き取り調査から、近世以降から戦前までの生活跡であることがわかった。

今回の調査により、これらの成果を得ることが出来た。しかし、遺構が検出された南北トレンチには5m×10mと幅の狭い発掘調査区ということで、屋敷跡のプランや居住地、耕作地、葬地等の集落構造の構成要素の把握が十分に検討できなかった。本遺跡の今後の発掘調査に期待したい。

最後に、本遺跡の発掘調査、ならびに報告書作成に関わった関係者の方々に、深く感謝の意を表したい。

《参考文献》

- 名嘉順一・東恩納みさき・八田夕香「北谷町の地名―戦前の北谷の姿―」『北谷町文化財調査報告書 第24集』北谷町教育委員会 2006年
- 江戸遺跡研究会『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001年
- 野地 恒有「第四章 屋久島におけるヨロンノ衆のトビウオ漁の展開―ロープ引き漁」『現代民俗学の視点1 民俗の技術』朝倉書店 1998年



上空写真



南トレンチ 井戸



南トレンチ 井戸西側に散乱する転石



南トレンチ



南トレンチ 西側より

図版24 南トレンチ発掘状況と上空写真



北トレンチ 陶磁器出土状況



北トレンチ 雨による被害状況



作業風景



北トレンチ 柱穴



井戸の洗い場にある寛永通宝(南トレンチ)



井戸の砥石(南トレンチ)



島袋家にて使用していた砥石(南トレンチ)

図版25 北トレンチと遺物出土状況

伊礼原E遺跡

第五章 調査方法と成果

第1節 調査の方法

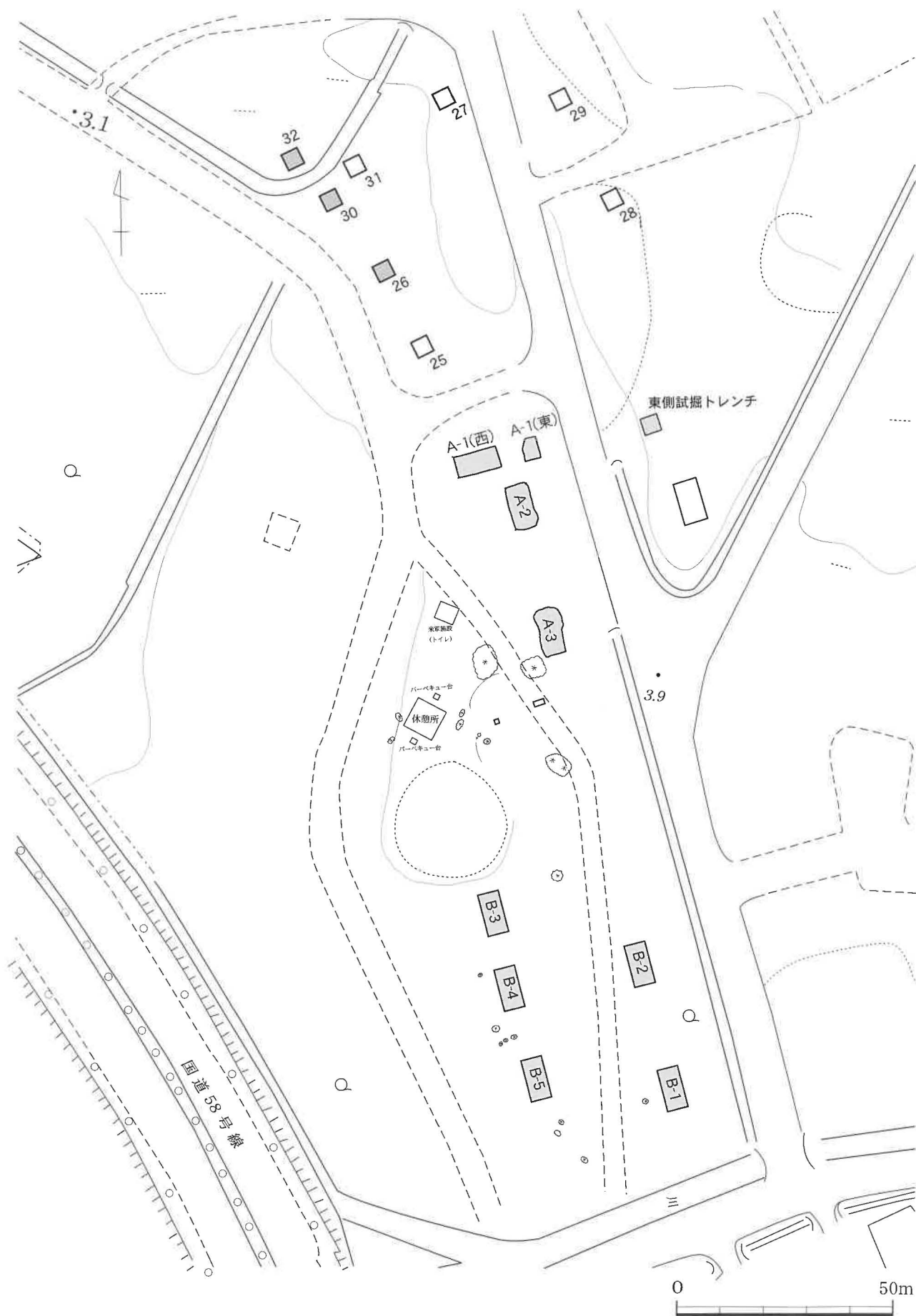
伊礼原E遺跡は伊礼原遺跡の南側約200m離れた場所に位置し、北側のクシヌカー（後ろの川）という小川で区切られ、南側はナルカー（奈留川）で境とした空間に所在している。遺跡の東側端部は赤土土壌（国頭マージと島尻マージが存在）の地山層に沿うように形成された海生砂地や砂丘に形成された古い遺跡と、さらに陸生シルトが交互に堆積した沖積層に新しい時期の遺跡は形成されている。遺跡の南側や西側には石灰岩の基盤の露頭が飛び石上にみられ、その周辺に海生砂地や砂丘の堆積により陸化し、遺跡が形成されたとみられる。それらの石灰岩露頭は生活址の指標にもなったと考えられ、国道58号沿いの露頭がクランモー（獅子蔵）という拝所になっており、さらに最西端の露頭は国道58号を100m以上も越え、ケラマジというニライカナイの拝所になっている。

試掘調査の成果から、当該地域の14ヶ所の試掘穴で遺物が確認でき、略南北に細長い楕円形の形状で面積約9,000㎡の範囲に広がっている。同遺跡の東側に南北に走る米軍宿泊施設（グリーン・ロッジ）への道路を境として東側は赤土土壌で遺跡の拡がり確認できなかった。これまで発見された他の遺跡のように東側の丘陵地域に古い遺跡があり、西側の海手側に新しい遺跡が存在する砂丘形成とは異なる様相であった。これは海岸砂地や砂丘の形成が当該地域に点在する隆起石灰岩岩盤の周辺に同心円状に堆積し、陸地化した地域に遺跡が形成された過程と判断され、河川の流入も影響していると判断された。よって、試掘穴の出土遺物も地点によって異なり、遺跡の本体を確定できない状況であった。しかし個々の試掘穴の層序や遺物の出土状況は一定しており、縄文時代の爪形文土器、室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器、面縄東洞式土器、弥生時代相当期では浜屋原式土器、大当原式土器、新しくはグスク土器や染付等が出土している。

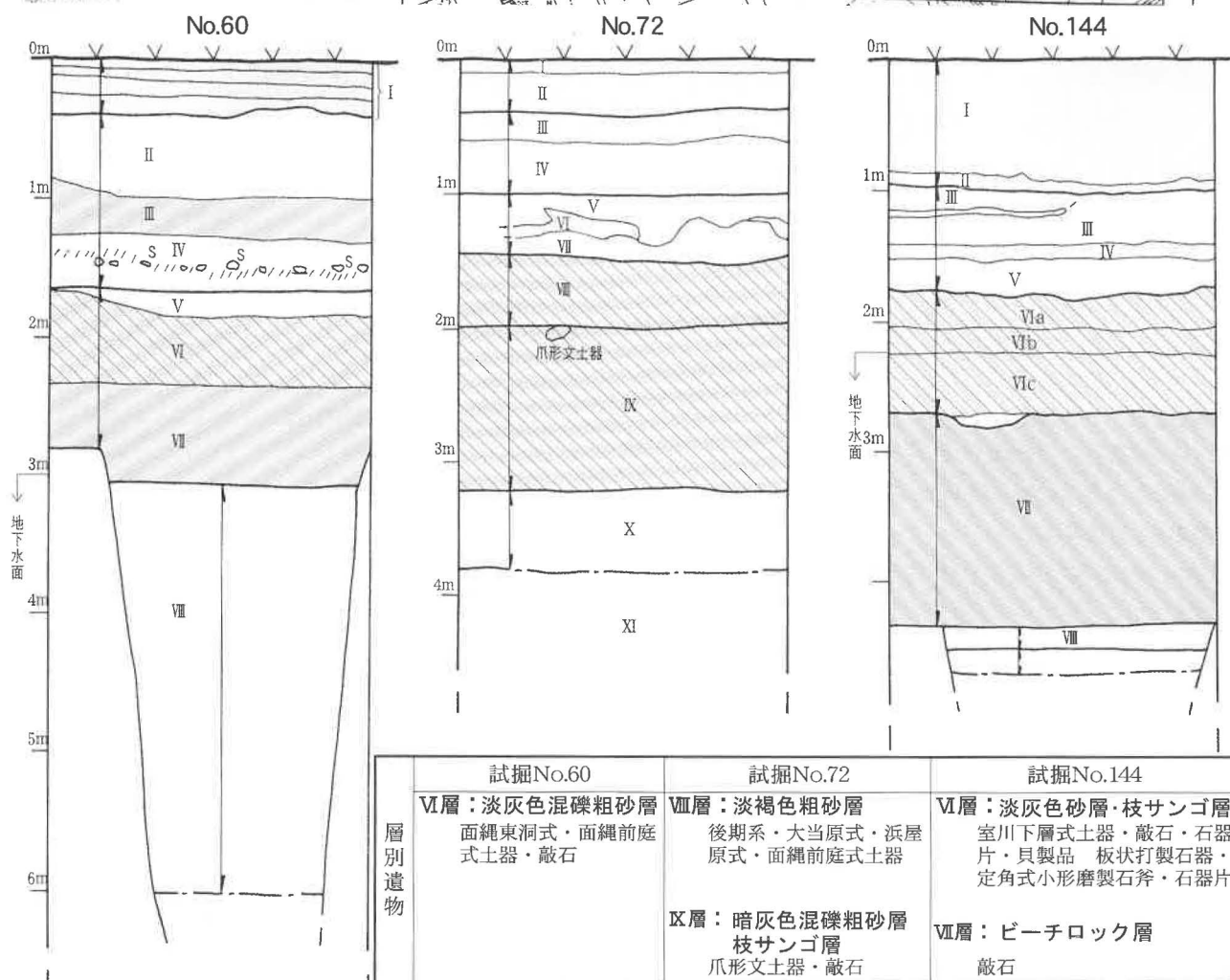
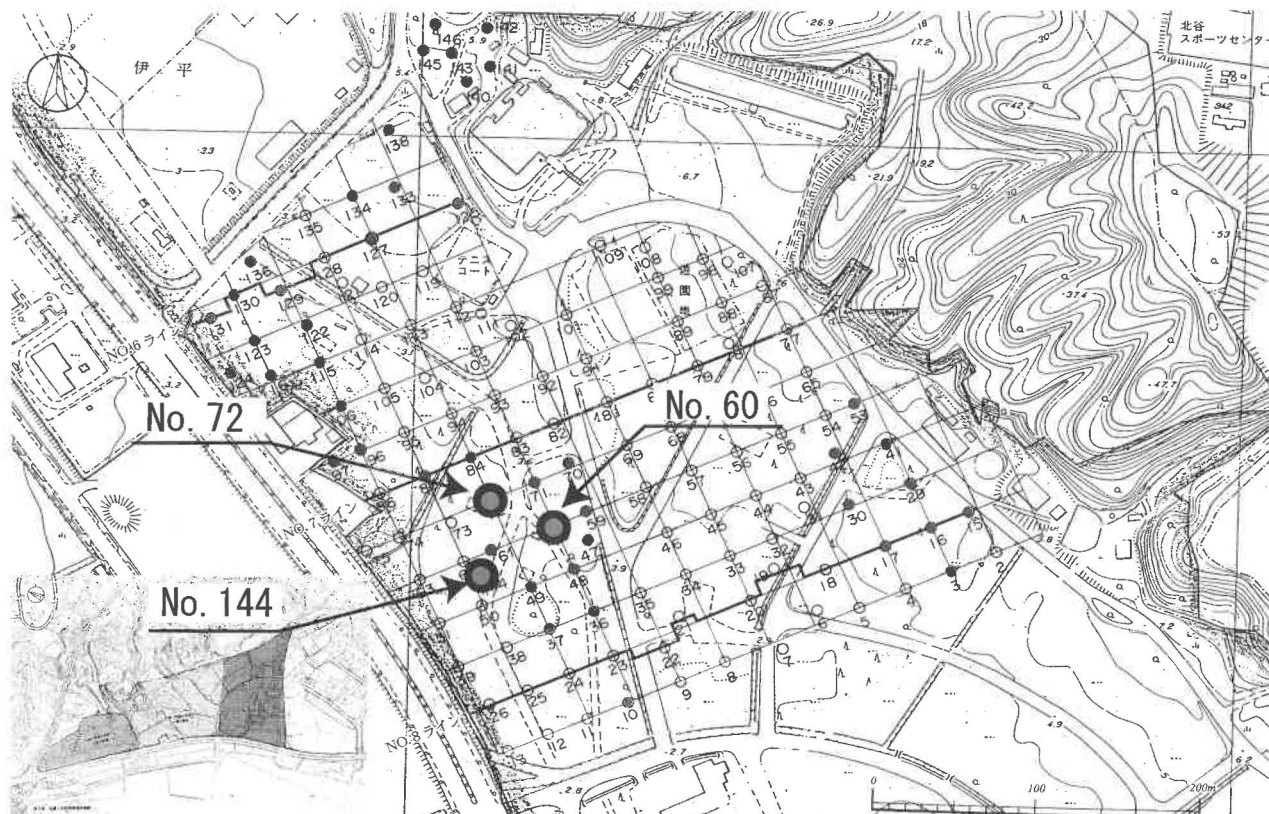
その様な様相から米軍宿泊施設（グリーン・ロッジ）への道路を境として東側へは遺跡の拡がり確認できないことから、それより西側に遺跡の本体は想定でき、特に古い縄文時代相当期の遺跡の確認のため北側に20×5mを1本、10×5mを2本、新しい弥生時代相当期の確認のため南側に10×5mを5本のトレンチを設定した。しかし、遺跡の中央部と想定される地域にはいまだ稼動しているパイプラインが南北に配置されていていつことから、トレンチの設定については米軍施設部の協力が必要であった。

北側地域をA区、南側地域をB区として仮称し設定した。A区は縄文期の遺跡の本体と形成状況を把握するために東西に20m×5mのトレンチを設定しA-1トレンチと仮称した。その北東角を基軸として南側10mに10×5mトレンチをA-2トレンチ、さらに20m南側に10×5mトレンチをA-3トレンチとした。

さらに南側100mの奈留川河口近く（右岸）に砂丘系土器（くびれ平底土器）の遺跡の本体の確認のため10×5m、10mの間をおいて10×5mを設定し、B-1・2トレンチとし、西側にはパイプラインを越して10m間隔で10×5mトレンチを北側からB-3、B-4、B-5トレンチを設定し仮称とした。



第31図 グリッド設定



第32図 試掘ポイント(『キャンプ桑江試掘調査』(2005))

伊礼原E遺跡の範囲確認調査は平成13年度事業として同年8月8日からスタートし、平成14年1月31日で終了した。

第2節 調査の経過

伊礼原E遺跡は平成13年8月13・14日両日に米軍施設部のパイプラインの位置の打ち出しと並行して、磁気探査をおこない、掘削作業に入った。

A-1トレンチでは近世の集落に近いせいか近世の陶器やジーファ（簀）が出土した。厚さ約1mの白砂層の間層下から拳大や人頭大の貝殻や礫がトレンチ全面に拡がる状態が確認され、土器はローリングを受けているが西側には嘉徳式土器、北側には面縄前庭式土器が出土する傾向がみられた。平面実測後、ドット上げを行い以下の確認を行ったが枝サンゴの海生堆積層で文化層は確認できなかった。

A-2トレンチでは暗褐色シルト層よりグスク土器などが出土した。厚さ約1m下からトレンチの東側1/3では暗褐色シルト層で、西側2/3では白砂層と明確に層の異なるラインが確認された。西側の白砂層からは拳大の礫とローリングを受けた土器が散在し、その内数点の石斧が検出された。その下層は枝サンゴの海生堆積層で無遺物層であった。東側の暗褐色シルト層は無遺物層であった。調査の終盤の平面実測中に白砂層と暗褐色シルト層の境目で石鏃の発見があった。

後日談であるが、当遺跡の区画整理事業に伴う本発掘調査の際、堆積学の松田順一郎氏の所見によると貝殻や礫面の堆積後、背後を横に流れる流水の結果としての凹地のランネルであろうとの見解であった。

A-3トレンチでは南西側に粟石状の石灰岩が露出し、その間から面縄前庭式土器を皮切りに石器やチャート片が多量に出土するようになった。調査の進捗に伴い石灰岩の露出が拡がり、結果的にはトレンチのほぼ全面を石灰岩で覆う形となった。調査の終盤である11月20日にトレンチの北西角で幅1mの石灰岩の割れ目、枝サンゴ海生堆積層の上面で人頭骸骨が検出された。取り上げをおこなった土井ヶ浜人類学ミュージアム館長の松下孝幸氏によると第二頸骨や上腕骨が同レベルに位置することから改葬はありえないことの所見を得た。その周辺では薄い灰色の有機質と共に爪形文（ヤブチ式）土器が数点出土した。

南側のB-1～5トレンチでは表土下1mの白砂層が確認できたが、ローリングを受けた砂丘系土器が数点出土したのみで、その下位では枝サンゴを含む粗砂層に変わり、地下水の湧出があり手掘り作業は不可能になった。したがってバックホーで掘り下げたが文化層は確認されなかった。

《参考文献》

註1. 中村 愿 『伊礼原B遺跡』一旧メイ・モスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査― 北谷町文化財調査報告書 第8集 北谷町教育委員会 1989年

調査日誌

- 平成14年
8月8日 ・グリッド設定・20m×5mの設定を行うが、南側に2つめのグリッドを設定しようと試みる
が、不可能であるため再度行う。
- 8月9日 ・トレンチ設定 5×20m No.1・5×10m 2東(?) (No.2~3)を設定・A地区の設定は
終了
- 8月10日 ・トレンチ設定 5×10m 5本予定 B地区・28m+4m (+80m 74) 154・フェンスラ
イン設定時間がなく終了
- 8月13日 ・松竹重機(07) 9:30~・みどり調査設計・11時前、T-205(トイレ)に配設されてい
ると思われる水道パイプをコンボでひっかけ水漏れが起きる。
- 8月14日 ・POL 第505燃料補給大隊 ・フェンスの支柱を打ち込む際、立ち会いを行う。・コンボ
10時すぎ・A地区に置かれているコンテナを移動
- 8月15日 ・A地区にELを設置するため国道58号線JOMO近くのTBM#2 EL=3、986より求め
る。
・A地区 A-2南側にEL杭を設置。EL=3、942
- 8月17日 ・A-1壁面清掃・台風対策
- 8月20日 ・A-2、A-3の掘り下げを行う。・A-2暗褐色砂層(Ⅲ層)ニービの砂の堆積 陶磁器、
土器出土 二次堆積か
- 8月21日 ・A-2 暗褐色砂層の掘り下げ。乳房状尖底出土。・溝らしき跡あり→キセル、陶器片
- 8月22日 ・A-1、A-3掘り下げ・A-2平面清掃・溝?掘り下げ。貝製品出土
- 8月23日 ・褐色土層有り。A-2の暗褐色砂質土とは異なると考えられる。出土遺物→石斧刃端部、ジ
ェファー、陶器など・溝がみられる。
- 8月28日 ・A-1写真撮影・A-1東 掘り下げ・A-2割り付け 平面実測・A-3
- 8月29日 ・A-1東・A-3・A-2実測・EL=3、942+1、268=5、210
- 9月6日 ・A-3東サブトレ 黄色砂質土層より室川下層式土器と思われる土器出土。口縁部片1点、胴
部片も2~3点出土。(簡略図あり)
- 10月2日 ・A-3被害状況 西北東壁 抉れが目立つ。西壁 白砂まで抉れる。・A-2東壁の崩落が目立
つ。
- 10月4日 ・A-2崩落土除去作業・A-3平面清掃・A-1東、分層、セクション図作成 ・A-2土除去
後壁面及び平面清掃を行う。東壁で分層を行う。(A-1 東I) ・腐食土芝 10~15 ・赤土
40 ・A-1、西 I層は東と同様 (A-2 I) ・腐食土芝 10~15 ・赤土 10~15 ・暗茶色
コンクリート混じり(A-3) I ・北側 腐食土芝 ・北側 赤土 ・南側 腐食土芝 ・南側 橙黄色
土 ・II 白砂
- 10月5日 ・A-1西 水汲み上げ・A-1東 セクション図作成
- 10月9日 ・A-3土器片(室川下層式土器 胴部片)、砂利石(約30cm大)の下より、赤褐色で厚さ
1cm前後。・A-1東トレンチ白黄色砂掘り下げ南側をサブトレンチと設け掘り下げを行う。・
A-1西トレ、北壁。(簡略図あり) (A-1西トレ) ・I 芝 ・II 赤土 ・淡灰褐色土(戦前?)
砂粉粗 ・Ⅲ淡灰褐色土、北壁にみられる。溝状の凹みができた後、凹みには暗灰色砂質土(土
器を含む)と淡灰褐色土の混じりがあり、その上部に堆積(大池の下層グループ) A-3 ・IV
暗灰色砂質土、土器を含む後期系浜屋原タイプ

- 10月12日 ・ A - 1西 東側、白砂の上に黄色砂
- 10月19日 ・ A - 3岩盤（板状の岩）の上に石器・ A - 2西側、十字畦を設け断面観察・ A - 2サブトレ南壁（簡略図あり）・ A - 1西 東側、貝及び石の集中部がみられる。
- 10月24日 ・ A - 1西 集石、貝は淡灰色粗砂上にある。
- 11月7日 ・ B - 1～5掘削・磁器探査、簡易探器
- 11月9日 ・ A - 1掘り下げ、3名、Dot上げ・ A - 2掘り下げ、3名・ B - 1掘り下げ、5名・ B - 2掘り下げ、5名・ B - 3掘り下げ、2名
- 11月20日 ・ A - 3人骨らしき頭骨出土
- 11月21日 ・ A - 3 ・ A - 2・ A - 1東・ A - 1西 平板測量、（ A - 1東） ・ 暗灰色砂 a ・ 暗灰色砂 b ・ 淡黄白色砂 a（マンガンを含む）・ 淡黄白色砂 b（マンガン含む）・ 白砂層 ・ 茶褐色土（土器、石器） ・ 淡灰白色シルト
- 11月28日 ・ A - 1西 EL=3、918・ A - 1東 東南EL=4、032・ A - 2 北東EL=3、936・ A - 3 ・ A - 1東 南東角、細かい枝サンゴを含む海砂の堆積がある。水が湧く。
- 12月6日 ・ 埋葬の可能性有り。（一体分） ・ 二次葬を考えることも検討。
- 12月17日 ・ B - 1南側の西壁に表土より - 1.7m程の攪乱。 ・ B - 2白色粗砂 後期土器？
- 12月 ・ 上層部で確認された人骨も鑑定。 ・ 埋葬の位置は現位置で間違いはないだろう。しかし、下層にも骨がみられることからその後に攪乱となったとみた方がよい。
- 平成14年
1月9日 （B - 2西壁） ①芝 ②旧表土（淡茶色砂質土） ③白色砂貝混じり ④軽石 ⑤白砂やや粗い ⑥淡灰白色砂 ⑦枝サンゴ・ A - 3岩より獣骨出土。
- 1月17日 （A - 2） ・ I層 芝生 客土（赤土・淡灰茶色土にコンクリート片を含む。） ・ II層 淡灰茶色土（溝がみられる） ・ III層 淡灰黒色砂質土、土器 ・ IV層 黄色砂層 ・ IV層 a 淡灰黄色砂層 移行層 ・ IV層 b 黄色砂層 マンガンを含む ・ IV層 c 明茶（？）色砂層 マンガンを多く含む ・ IV層 d 濃黄（？）色砂層 マンガンを含む ・ IV層 e 黄白色砂層 マンガンを含む ・ V層 白砂層 ・ VI層 茶褐色砂質土やや粘性 土器、石器 縄文後期？ VII層 淡灰色粗砂層
- 1月23日 （東壁） ・ 白色枝サンゴ ・ Eトレンチ 土器片
- 2月8日 （A - 2） ・ 茶褐色砂質土（石斧や土器を含む）の下の層にみられる灰色砂層（細砂）はA - 2
～13日 より始まる。
・ 芝生 ・ 赤土・ II・ III・ IV a 白砂・ IV b 白黄色砂・ IV c 白黄色粗砂・ V 黄色砂 マンガン・ VI 淡灰白色砂 砂利 淡灰白色砂・ 白色枝サンゴ・ VII 淡灰白色砂 土器、石器・ VIII 茶褐色砂質土・ 淡灰白色砂と粗砂の互層・ 枝サンゴ（簡略図あり）
・ I a ・ I b ・ I c 赤土・ II・ III・ IV 白砂・ V a ・ V b 粗砂・ V c ・ VI 黄色・ VII a ・ VII b ・ VIII 茶白色シルト・ IX シルト・ X 白色粗砂・ XI 茶褐色・ XI b ・ シルト
・ 粒子にばらつきがある（均一でない） ・ 洗いを行っている。 ・ 中世 方形状で内側が焼いた跡あり。 盤 皿 14C後～15C

第3節 Aトレンチ層序

伊礼原E遺跡は第32図の試掘No.60、72、144の柱状図によると上層の淡褐色粗砂層からは浜屋原式土器、大当原式土器、後期系土器や、枝サンゴ層から面縄前庭式土器、面縄東洞式土器、室川下層式土器、爪形文土器などが出土した。今回の調査ではさらに面積を広げ、遺跡の範囲を確認した北側をAトレンチ、南側をBトレンチ、また、山手側に東側試掘をもうけた。以下、トレンチごとに層序、遺構、出土遺物についてまとめた。

本遺跡は、海進期の堆積作用によりや河川堆積作用で土砂が堆積することで形成された沖積低地である。下部にはビーチロックや枝サンゴ層、白砂層などサンゴ礁に伴うもので、上部は茶褐色土層などで構成されている。その間は土→砂へ移行する砂質土となる。これら地形を構成する特質を勘案して本遺跡の層をまとめた。

図には調査時の明記を表記し、下記の統一層名も図に併記した。

- ①層：客土・造成土
- ②層：耕作土
- ③層：茶褐色土層・茶褐色砂層
- ④層：白砂層
- ⑤層：シルト層
- ⑥層 a：混礫白砂層
b：枝サンゴ層
- ⑦層：ビーチロック
- ⑧層：赤土・基盤

a. 東側試掘（第31図）

陸生の地層との関係を見るため、山手方向（第100図）、標高4.6mのところ2m×2mの試掘をもうけた。

試掘の結果、本試掘では大きく4層に区分されるが、遺物包含層はされなかった。しかし、基盤の琉球石灰岩の風化土（赤土）が確認されたことは本地域の遺跡の形成を考える上で意義深い。

①層：Ⅰ・Ⅱ層は客土である。Ⅰ層は厚さ40cmで上から芝生、砂、赤土の順で堆積する造成土で、Ⅱ層は砂利混土層で厚さ5～10cmである。いずれも無遺物層である。

②層：Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は旧耕作土である。炭や石英の粒を多く含み、堅くしまった土で、海産貝や陸産貝を若干含むⅢ層、石英が少なく、粘性のある茶褐色のⅣ層、石英を多く含む黒褐色のⅤ層に大きく分けられる。層の厚さはⅢ層が20cm程度、Ⅳ層が30～40cm、Ⅴ層が5～20cmを測る。後者のⅤ層は黒くさらに薄いことから床土の可能性が考えられる。

⑤層：Ⅵ層はシルト層で北壁では西側に厚く堆積し、東・南側では確認できない。色によって白色シルト（Ⅵa）、赤褐色シルト（Ⅵb）、赤土混シルト（Ⅵc）に分けられる。いずれも無遺物層である。

⑧層：赤土（Ⅶ・Ⅷ層）基盤の琉球石灰岩の風化土であるは南側で平坦に堆積し、北側では西方向に傾斜するようである。

b. Aトレンチ層序

A-1西（第34図）・A-1東（第35図）・A-2（第36図）・A-3（第37図）について略述する。

①層：客土。

米軍基地建設のための造成土でA-1東、A-1西、A-2、A-3で見られる。最も厚いのはA-2で、A-3の東側では厚みは安定せず、西側では薄い。芝生層とコーラルが敷き詰められている。

②層：旧耕作土・旧表土

A-1では東西にほぼ水平に堆積する。Ⅱ層では、貝のチップ・炭を多く含み、非常に締まって固い茶褐色混砂土である。Ⅲa層はⅡ層に比べ層中の砂利や貝チップが少なくなる茶褐色土層で、青磁片が1点、Ⅲb層では水路跡と思われるもので、北壁の西側に確認される。下部では白砂層とマーブル状になる所も見られ、茶褐色混砂（マーブル）層である。Ⅲc層は混礫白砂層である。溝の底部にあたり貝や礫が混じる。

A-1東、A-2は厚さ30cmでほぼ全面に見られる。

A-3では見られない。

③層：茶褐色土層

A-1西は固く締まり、浜屋原式土器が1点得られ、出土遺物包含層と思われる。Ⅴ層は淡オリーブ色シルト層。きめ細かい粒子でもろく崩れ易い、土器片が1点出土。

A-1東では若干、淡い色になる、厚さ20程度でほぼ全面に広がる。

A-2、A-3では見られない。

④層：白砂層

A-1西では枝サンゴや小形の貝が僅かに見られ西壁では見られない。北側に薄く、南側に厚さcmでほぼ平均してみられる。

Ⅶ層は白砂層（黄班混じり）で、粒子の質はⅥ層と類似し、柔らかくふかふかしているが黄班が見られる為、区別した。枝サンゴや小形の貝が僅かに見られる。

Ⅷ層は黄白色粗砂層で、Ⅵ、Ⅶ層よりも粒子が粗くなり枝サンゴや小形の貝の数も多くなる。

A-1東ではⅤ層で20～45cmでほぼ平均して見られる。

A-2の白砂層は南壁と北壁断面で見ると西側の層が東側に上に乗る形で検出される。後浜の境と考えられる。その下部に黄砂と白黄砂、灰色砂などの層が厚さ10cmの互層をなす。砂層であるが、マンガンを含んだりしており、単純な白砂層とは言い難い。この互層は厚さ1.2mあり、層の状況からは白砂層よりは古い時期と考える。その境は本トレンチの中央で西側の層が東側の層にかぶるように堆積する。遺物の出土状況も異なる（第41図）。

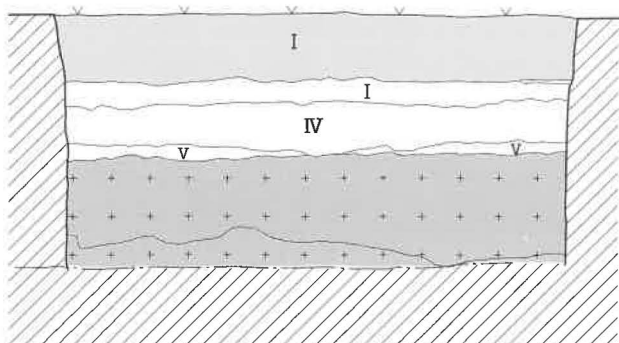
A-3（第37図）ではⅡ・Ⅲa・Ⅲb層がこれに相当する。厚さは20～100cmと安定しない。南東側にはなく、北西側に広がることから砂丘の境界と考えられる。白砂層の下部も他と異なり、大きな石灰岩が見られる。

⑤層：Ⅸ層は淡緑色シルト層（粗砂混じり）

A-1西ではシルト質の粒子と粗砂が交互に堆積する。水による影響と思われる。沈線文土器が得られた。

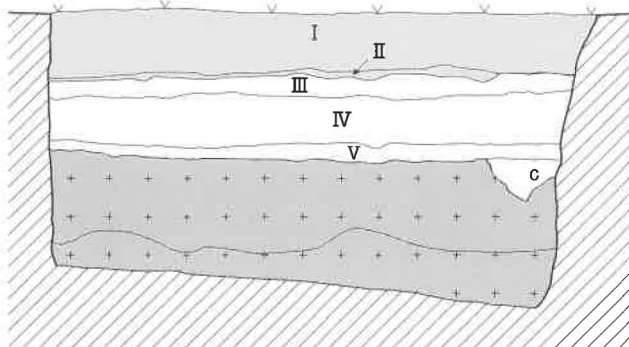
EL=5.00m

東壁



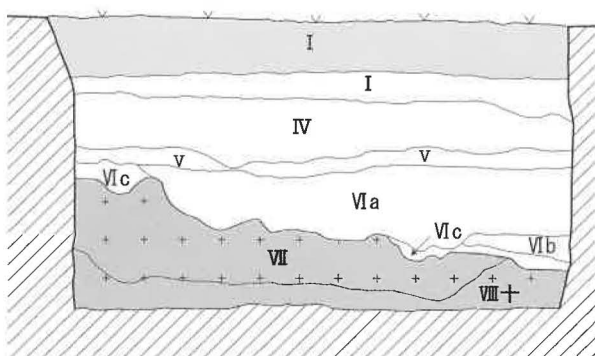
EL=5.00m

南壁



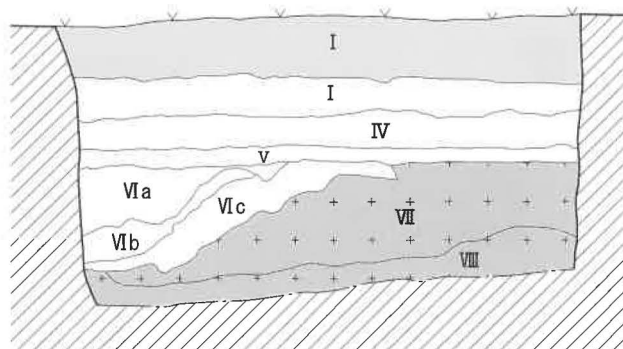
EL=5.00m

西壁



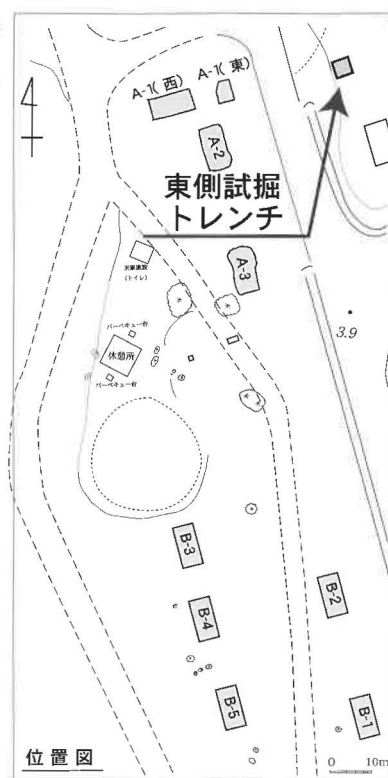
EL=5.00m

北壁

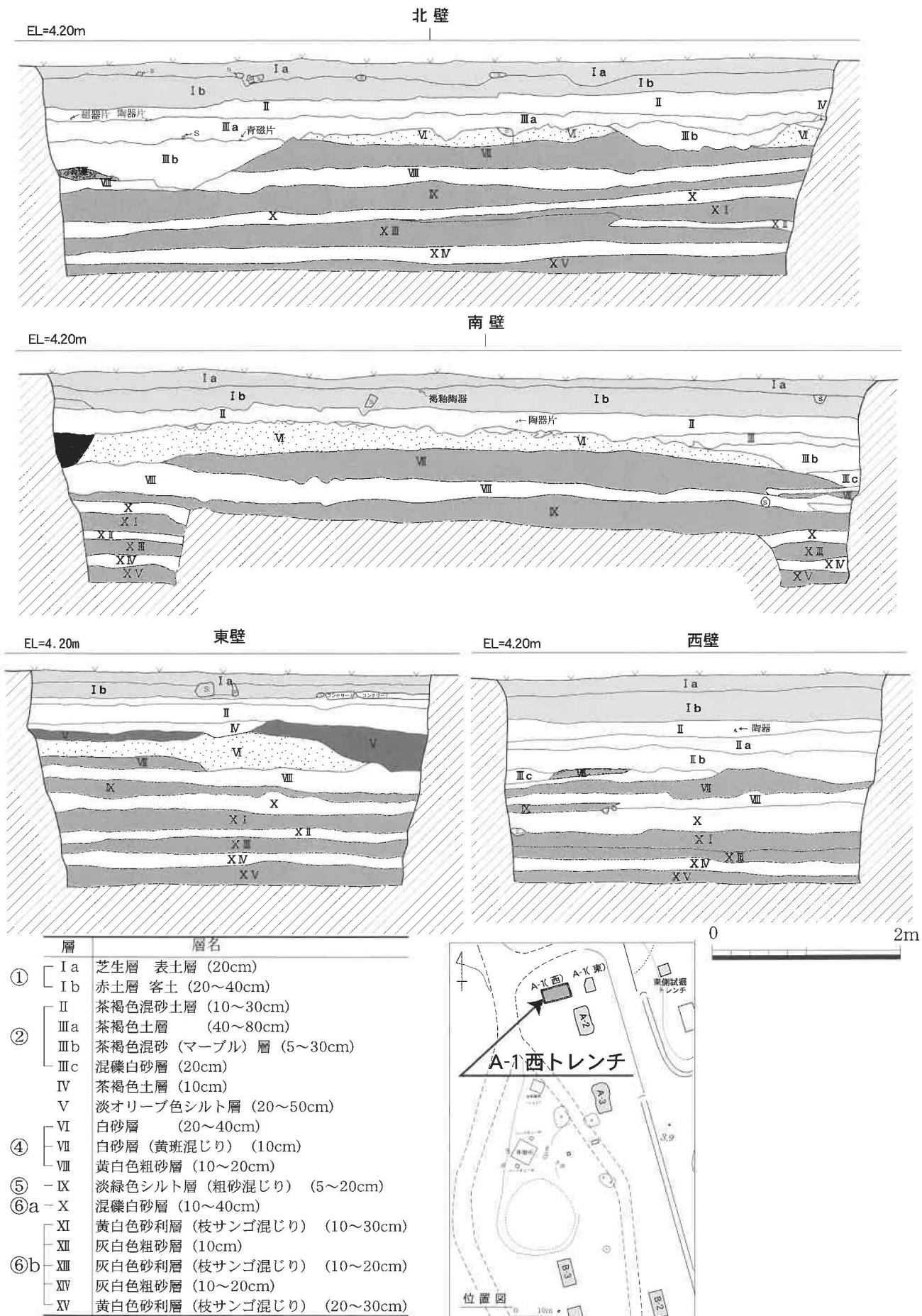


0 2m

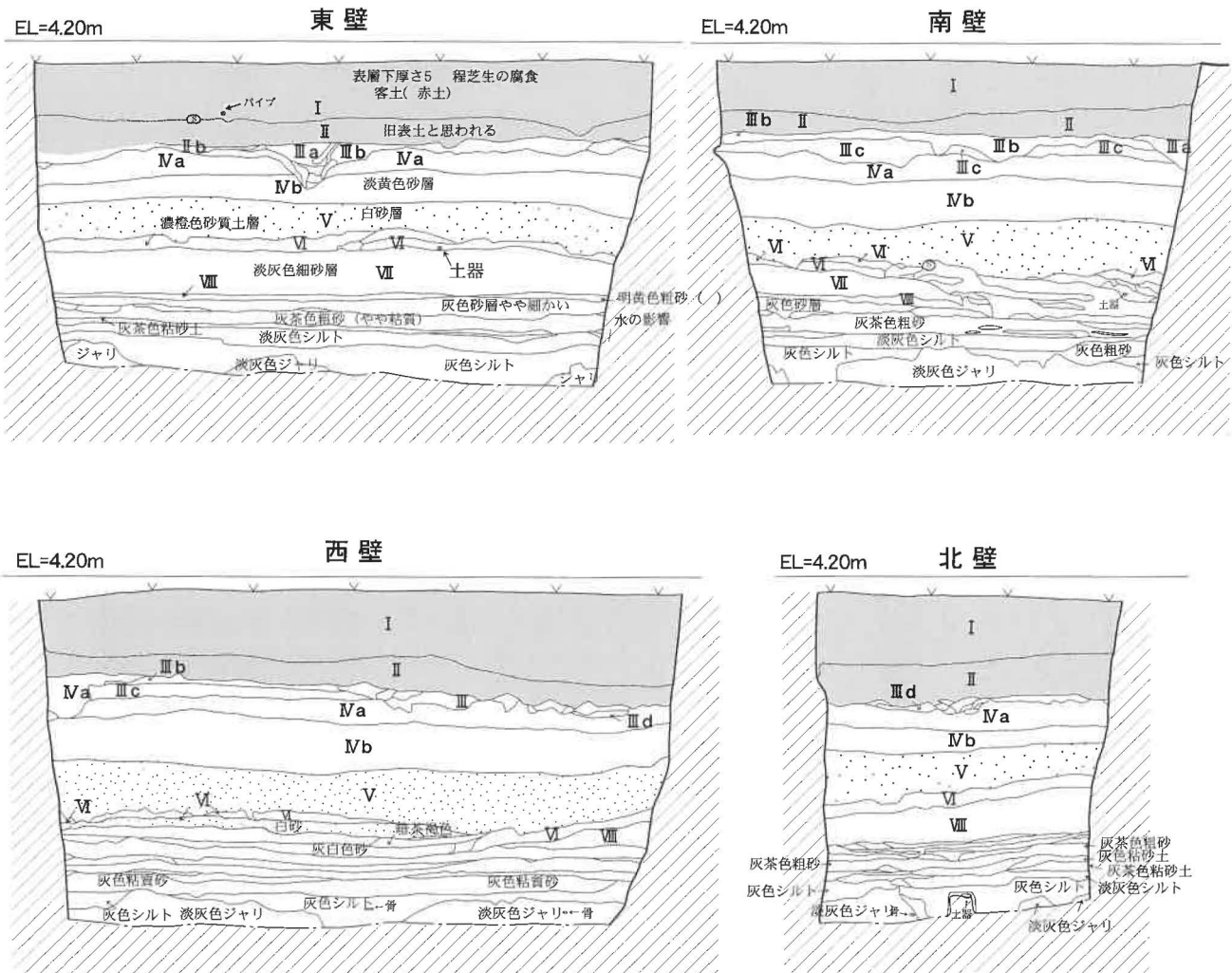
層	層名	所見
①	I 客土層(40cm)	戦後米軍が整地する為にもって来た土で、上から芝生、砂、赤土の順で堆積する。
	II 砂利混土層 (5~10cm)	無遺物層
②	III 旧耕作土A (20cm) (黒茶褐色)	炭を多く含み、石英の粒も多く見られる。堅くしまっている。海産貝や陸産貝を若干含む。
	IV 旧耕作土B (30~40cm) (茶褐色)	旧耕作土Aに比べ層中の炭、石英が少ない。粘性を帯びる。
	V 旧耕作土C (5~20cm) (黒褐色)	石英を多く含んでいる。海産貝や陸産貝は見られない。ややシルトを含む。
⑤	VIa 白色シルト層 (10~50cm)	無遺物層
	VIb 赤褐色シルト層 (10~20cm)	無遺物層
	VIc 赤土混シルト層 (10~30cm)	無遺物層
⑧	VII 赤土 (10~80cm)	石灰岩の細片を多く含む。
	VIII 赤土 (10~40cm)	無遺物層



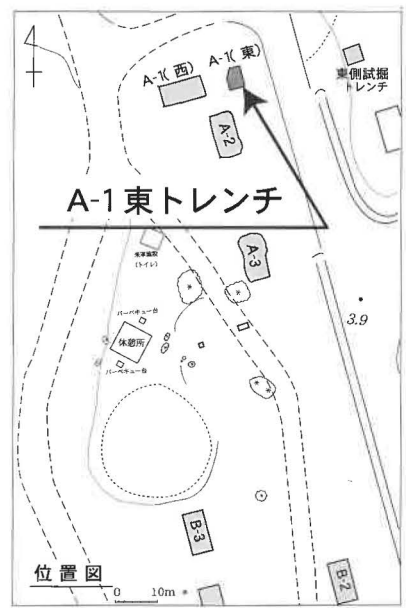
第33図 東側試掘トレンチ層序



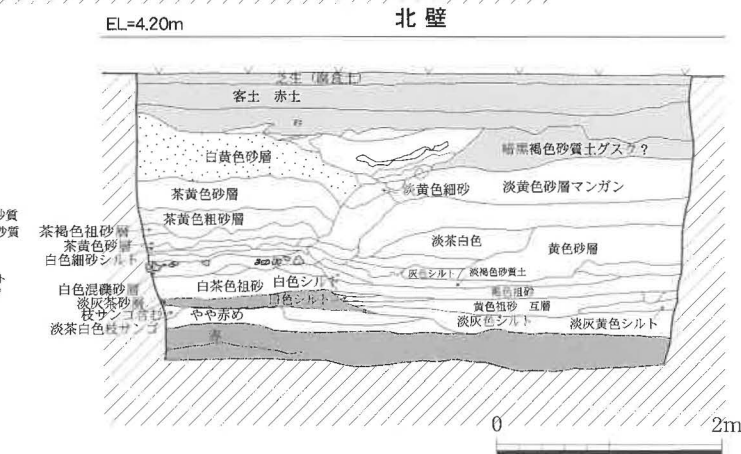
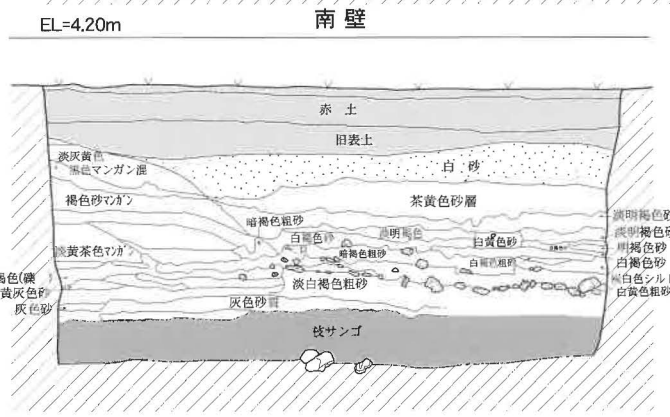
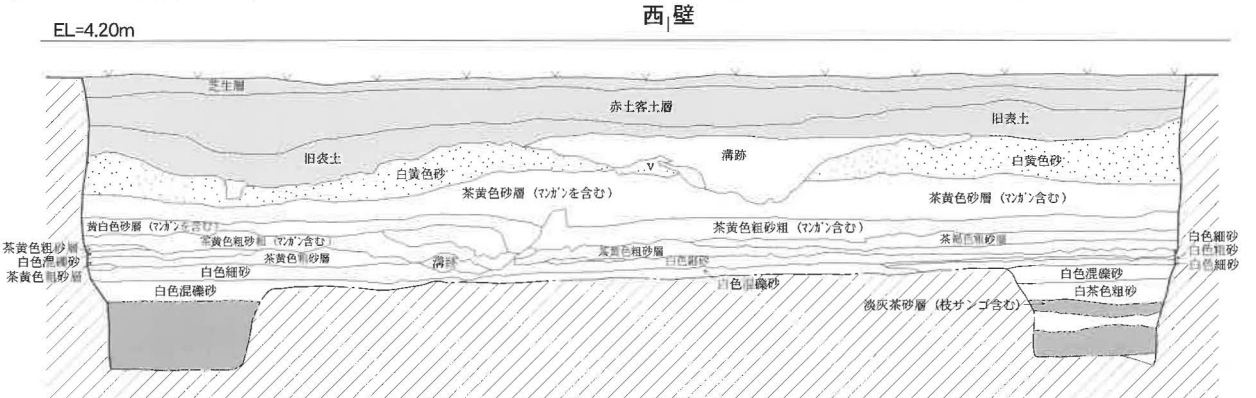
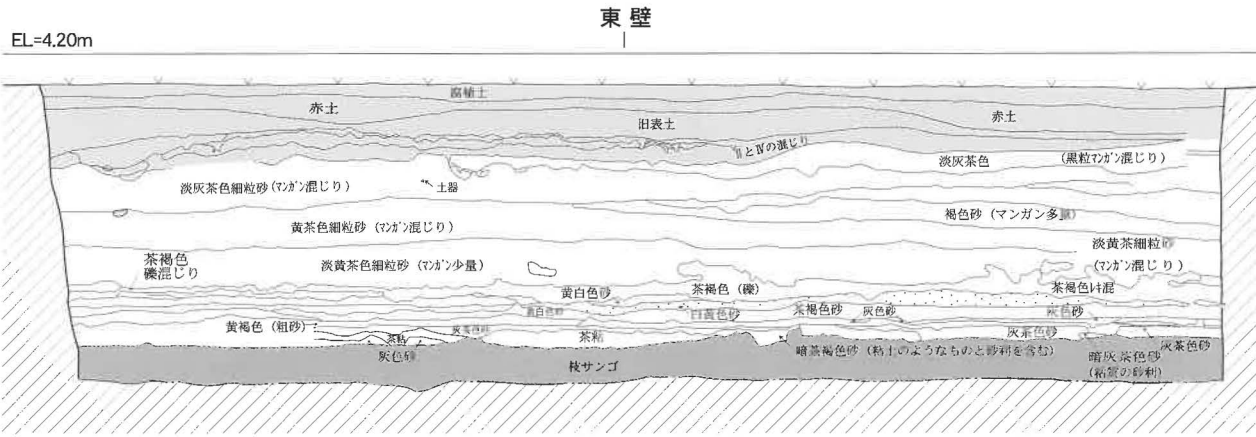
第34図 A-1西トレンチ層序



層	層名	
①	I	客土 (30~70cm)
	II	旧表土 (5~35cm)
③	IIIa	(5~20cm)
	IIIb	(5~20cm)
	IIIc	(10~20cm)
	IVa	(10~20cm)
④	IVb	淡黄色砂層 (5~40cm)
	V	白砂層 (20~45cm)
	VI	濃橙色砂質土 (5~10cm)
	VII	淡灰色細砂層 (10~35cm)
	VIII	明黄色粗砂 (5cm)
		灰色砂層やや細かい (5~10cm)
		灰茶色粗砂(やや粘質) (5~15cm)
		灰茶色粘砂土 (5cm)
⑤		淡灰色シルト (5~20cm)
		灰色シルト (5~25cm)
⑥a		淡灰色ジャリ (5~30cm)

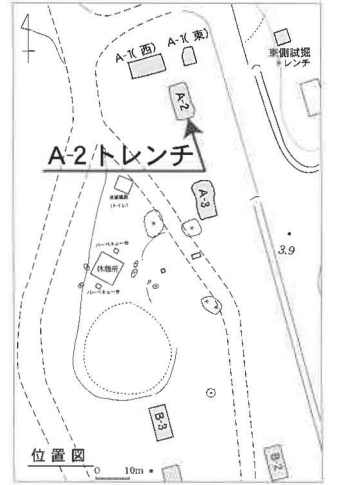


第35図 A-1東トレンチ層序



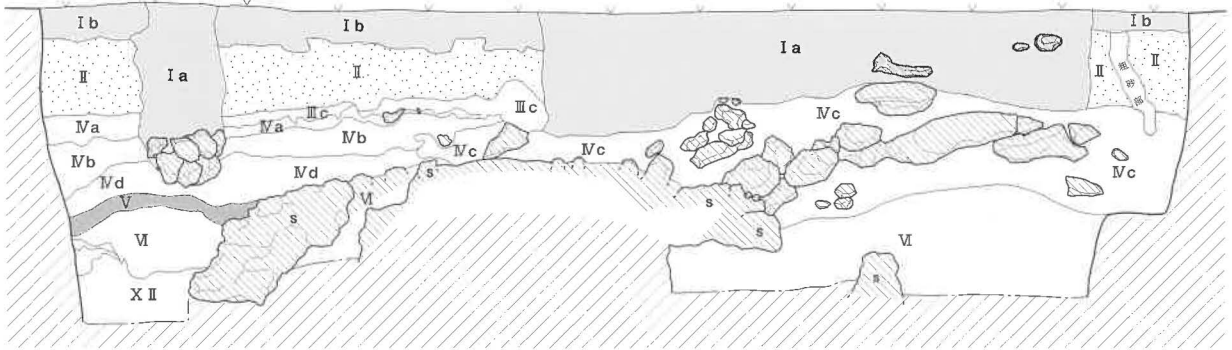
層	層名 (北壁)
①	Ia 現表土 芝生(腐食土)
	Ib 赤土
②	II 旧表土
	III 暗黒褐色砂質土
③	IV 白黄色砂層
	Va 茶黄色砂層
	Vb 茶黄色砂層
	Vc 濃茶褐色砂層
	Vd 茶黄色砂層

層	層名 (西壁)
①	I 芝生層
	II 赤土 客土層
②	III 旧表土
	IV 溝跡
③	V 白黄色砂
	VI 茶黄色砂層(マンガンを含む)
	VIa 黄白色砂層(マンガンを含む)
	VII 茶黄色粗砂層(マンガンを含む)
	VIII 茶褐色粗砂層
	IX 茶黄色粗砂層
	X 白色細砂
	XI 白色粗砂
④	XII 白色細砂
	XIII 白色混礫砂層
⑥a	XIV 白茶色粗砂
⑥b	XV 淡灰茶粗砂層(枝サンゴ層)



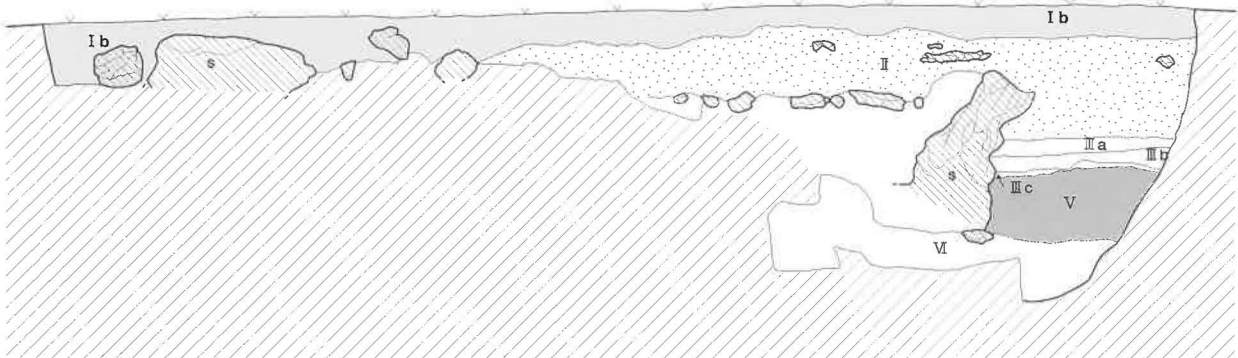
EL=4.00m

東壁



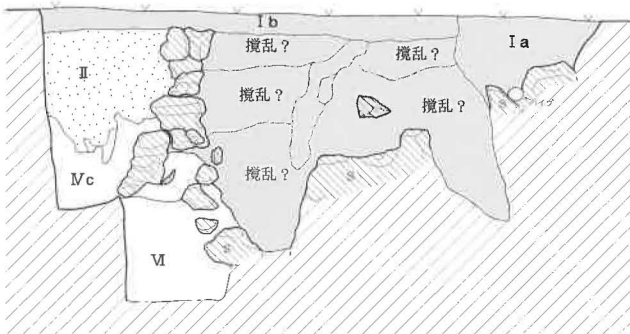
EL=4.00m

西壁



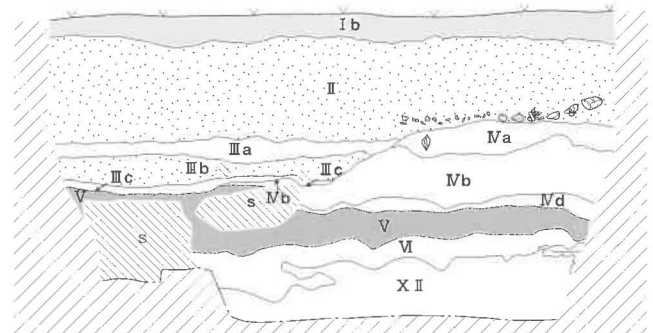
EL=4.00m

南壁



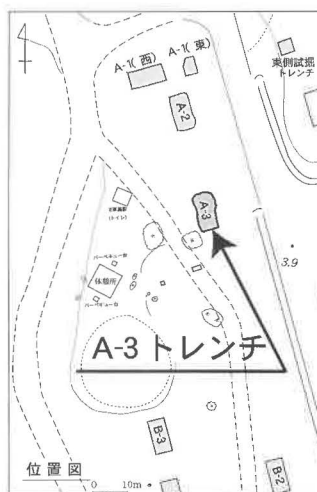
EL=4.00m

北壁



0 2m

層	所見
①	I a 米軍による掘り込み (40~120cm)
	I b 客土層 (10~50cm)
②	II 白砂層 (20~100cm)
	III a 白砂粗砂層 (10~20cm)
③	III b 白砂層 (10~30cm)
	III c 白砂粗砂層 (5~40cm)
④	IV a 茶褐色砂層 (20~40cm)
	IV b 白茶マーブル層 (20~50cm)
⑤	IV c 黄色砂(質)層 (20~100cm)
	IV d 山砂 (10~40cm)
⑥ a	V 貝混じり珊瑚礫層 (10~60cm)
⑤	VI 黄褐色砂質層 (30~100cm)
⑤	VII 緑色シルト質層 (20~60cm)



第37図 A-3トレンチ層序

A-2では見られない。茶褐色の礫混じりの層や淡黄茶色細粒砂と厚さ5cm程度の互層をなす。シルト層に相当するものと思われる。

A-3ではIVc・d層はシルト質の層で、他トレンチのシルト層と同じものと推定されるが、他の層とは若干、様相が異なる。

⑥a層：X層は混礫白砂層

A-1西では礫が一面に広がり、20～30cm大のシャコ貝や15cm大のサラサバティ等、比較的大きな貝類も多く見られる。面縄東洞式土器や面縄前庭式土器が出土した。東側から西側へ緩やかに傾斜している。又、東よりも西の方が礫のサイズが大きい傾向にある。

A-2では海拔2.0mで検出、下部の枝サンゴ層の上に水平に堆積する。東側ではなく、下部枝サンゴ層となる。

A-3では検出されていない。

⑥b層：枝サンゴ混じり層

A-1西でXI～XV層としたものである。砂の色で区別した。約10cmの互層をなしているようである。

XI層は黄白色砂利層（枝サンゴ混じり）、XII層は灰白色粗砂層、XIII層は灰白色砂利層（枝サンゴ混じり）、XIV層は灰白色粗砂層、XV層は黄白色砂利層（枝サンゴ混じり）で、この時点で水が湧き出す。西側で爪形文土器（指頭押圧文）1点、東側で曾畑式土器1点が出土した。

A-2西側半分で海拔1.7mのラインで検出され、ほぼ水平に分布する。

A-3ではV層の貝混じりサンゴ礫が本層に相当するものと思われる。その範囲は上部の白砂層と一致する。

その下部では緑色シルト層が確認されている。

第4節 Aトレンチ遺構

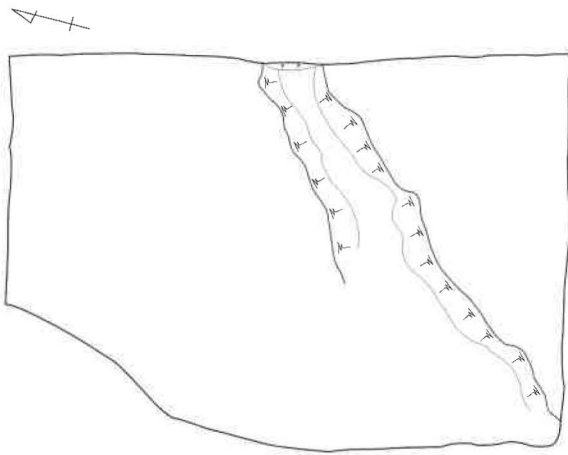
・戦前の溝状遺構

第38図に示したようにA-1西、A-1東、A-2で検出された。幅80～160cm、深さ約30cmの溝状の遺構である。

白砂層に掘り込まれたもので、茶褐色混砂（マーブル）層で、下部では白砂層とマーブル状になる所も見られる。いずれのトレンチでも北東～南西方向に検出された。

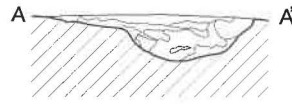
溝は約10cmの深さで幅が80cmに狭くなり、深さ30cmまで落ち込むが鍋底状を呈する。検出された遺構はいずれのトレンチでも北東から南西方向に流れる規則性があり、深さ及びほぼ同じであることから水路跡と思われる。

また、Bトレンチ（第72図）でも検出される。遺物は第73図4・5の後期系土器と仲泊a式土器が出土している。

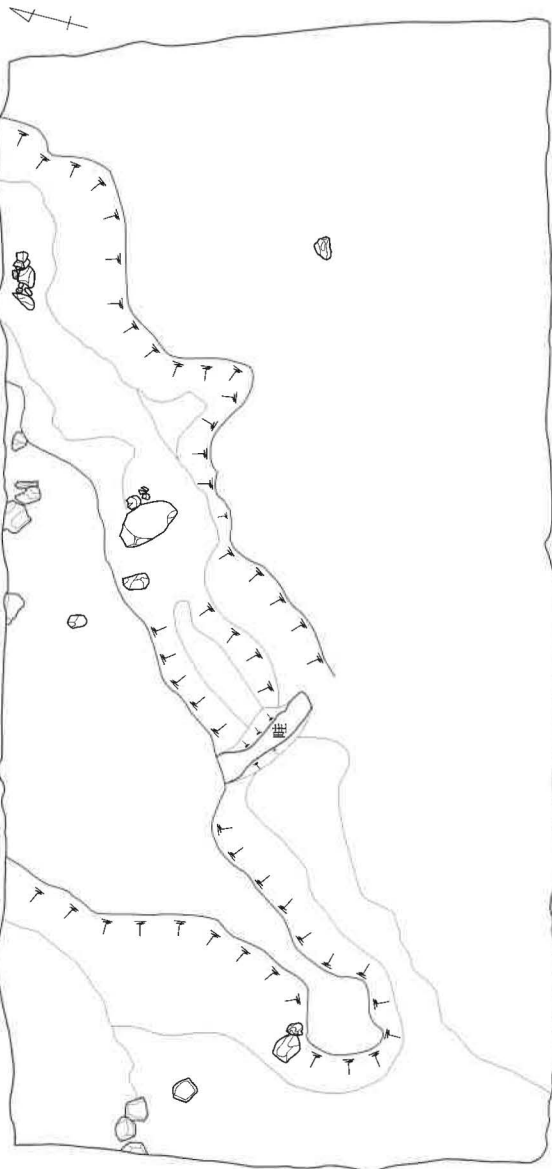
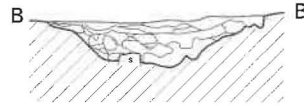


〈A-1 東〉

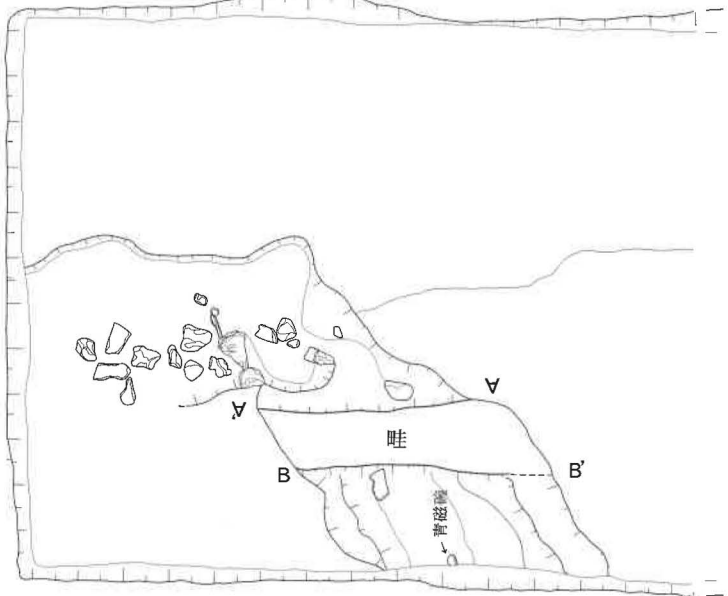
EL=3.50m 溝西壁



EL=3.50m 溝東壁



〈A-1 西〉



〈A-2〉



第38図 溝状遺構(A-1東・A-1西)

・ Aトレンチの遺物検出状況

Aトレンチでは生活面を持つ遺構は検出されなかったが、多量の遺物が検出されており、層序と同様、今後のキャンプ桑江北側地域のあり方は今後の沖積地での先史遺跡のあり方を考える上で意味をもつと思われるので遺物の出土状況を提示する。

ア) A-1東・西トレンチの遺物の検出状況

第40図はA-1東（右図）の灰色シルト層面（図版27）とA-1西（左図）は灰白色粗砂層面遺物の検出状況（巻首図版4下）を示したものである。

A-1東（第40図）では石斧、チャート、土器では室川下層式土器（第44図）などが出土した。石斧は両刃で縄文後期系（第52図）である。

A-1西（第40図）の灰白色粗砂層では室川下層式土器（第45図3）や仲泊式土器（第45図8）、クジラ製品（第59図2）、ゴホウラ貝輪・未製品（第56図6）、スイジガイ製品（第56図8）などの人工遺物やニービ、大形貝シャコガイなどが出土している。出土遺物はから時期はほぼ同じであるが、A-1東は遺物の包含が少なく、A-1西は遺物の包含が多い。いずれも生活層とは言い難い。また、後者のA-1は遺物に石灰分が付着している。

イ) A-2（第36図・巻首図版5上）

A-2は南北に長いトレンチを設定した。東側にシルト層面（図右側）と西側に枝サンゴ層（左側）遺物検出状況を示した。これは前述したA-1トレンチの東側と西側の状況が本トレンチで明瞭に現れたものである。

シルト層の出土遺物は少なく、浜屋屋原式土器の底部（第28図24）や石器、オオツタノハ製貝輪（第56図1）、チャートなどである。

枝サンゴ層面では室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器（第48図）、貝製の垂飾品（第56図10）、人骨（図版31）も出土した（詳細は第8節参照）。炭による放射性炭素年代測定は5180±40年の結果が得られている。

ウ) A-3（第37図）

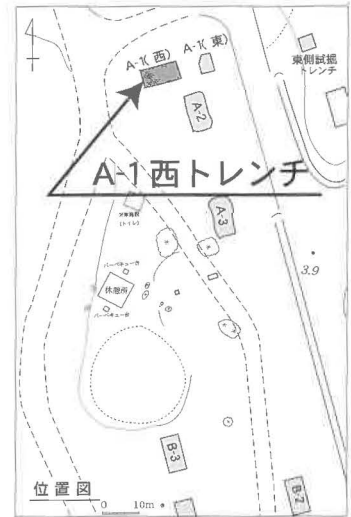
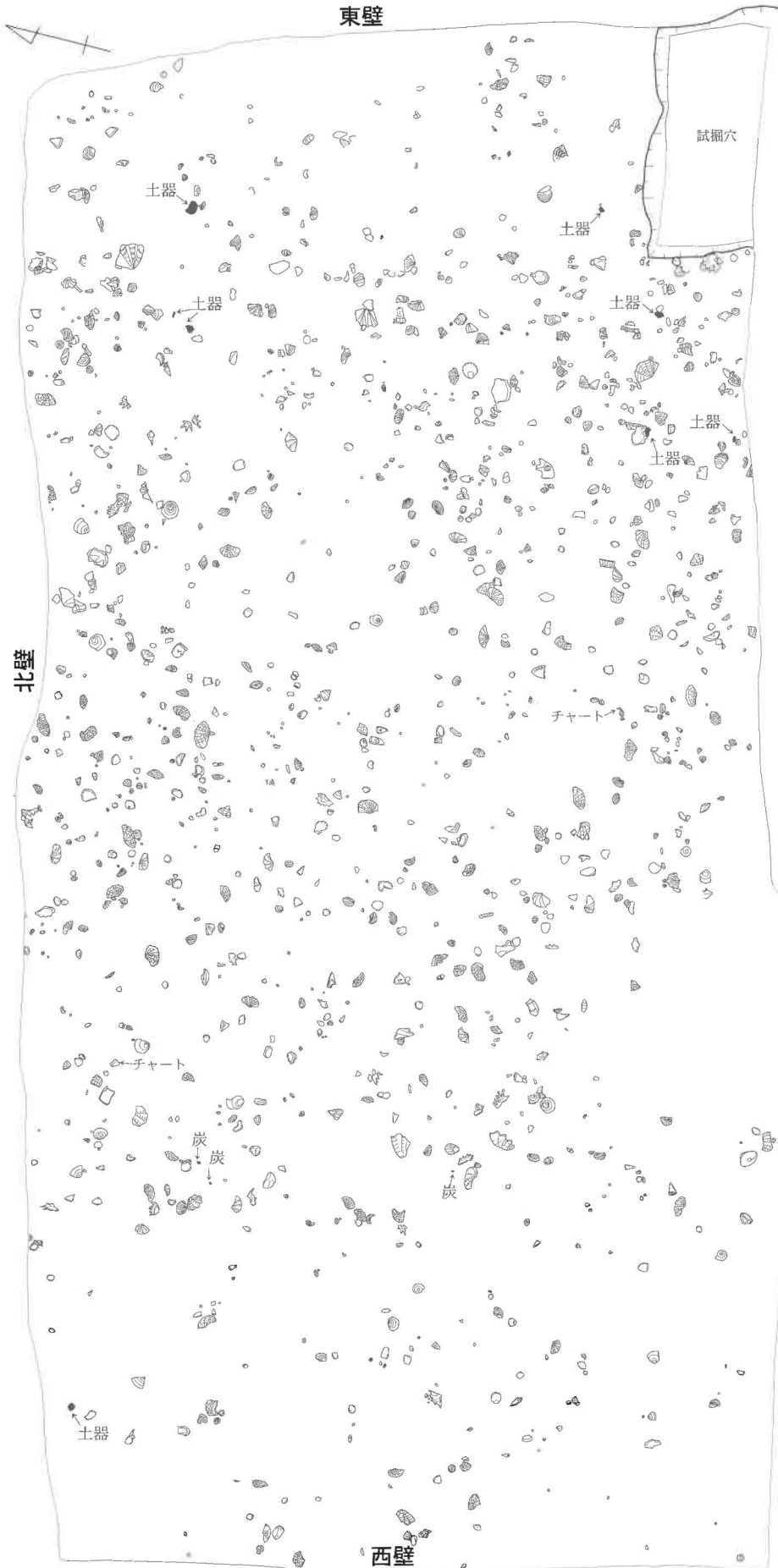
A-3トレンチも東西に長いトレンチである。前述のA-1・2のトレンチとは様相が異なる。ほぼ全面に琉球石灰岩の斜め、全体的に地山面は安定しないが、特に深い北西隅で人骨（巻首図版6下左）が検出された。

第43図に示したように1m程の石灰岩を3個、斜めに重ね、その下部にさらに30cm程の石を4個かぶせる。これを取り除くと人骨が検出された（第8節参照）。さらに掘り進むと黄～茶褐色の土と黒色（炭）土で厚さ10cmの互層をなす。

人骨は頭蓋骨、下顎骨と上腕骨、肩甲骨、脛骨の破片が出土。

炭化物から放射性炭素年代測定5100±40 B・P（第六章参照）が出された。

人骨は複数の部位がそろっていることから、仮に土壌とした。しかし、A-1・2の文化層面が確認できなかったこと、A-3トレンチも層は安定してないなどまだ問題は残る。



図版26 遺物検出状況

第39図 灰白色粗砂層遺物検出状況(A-1西)



第40図 遺物検出状況 (A-1東・西トレンチ)



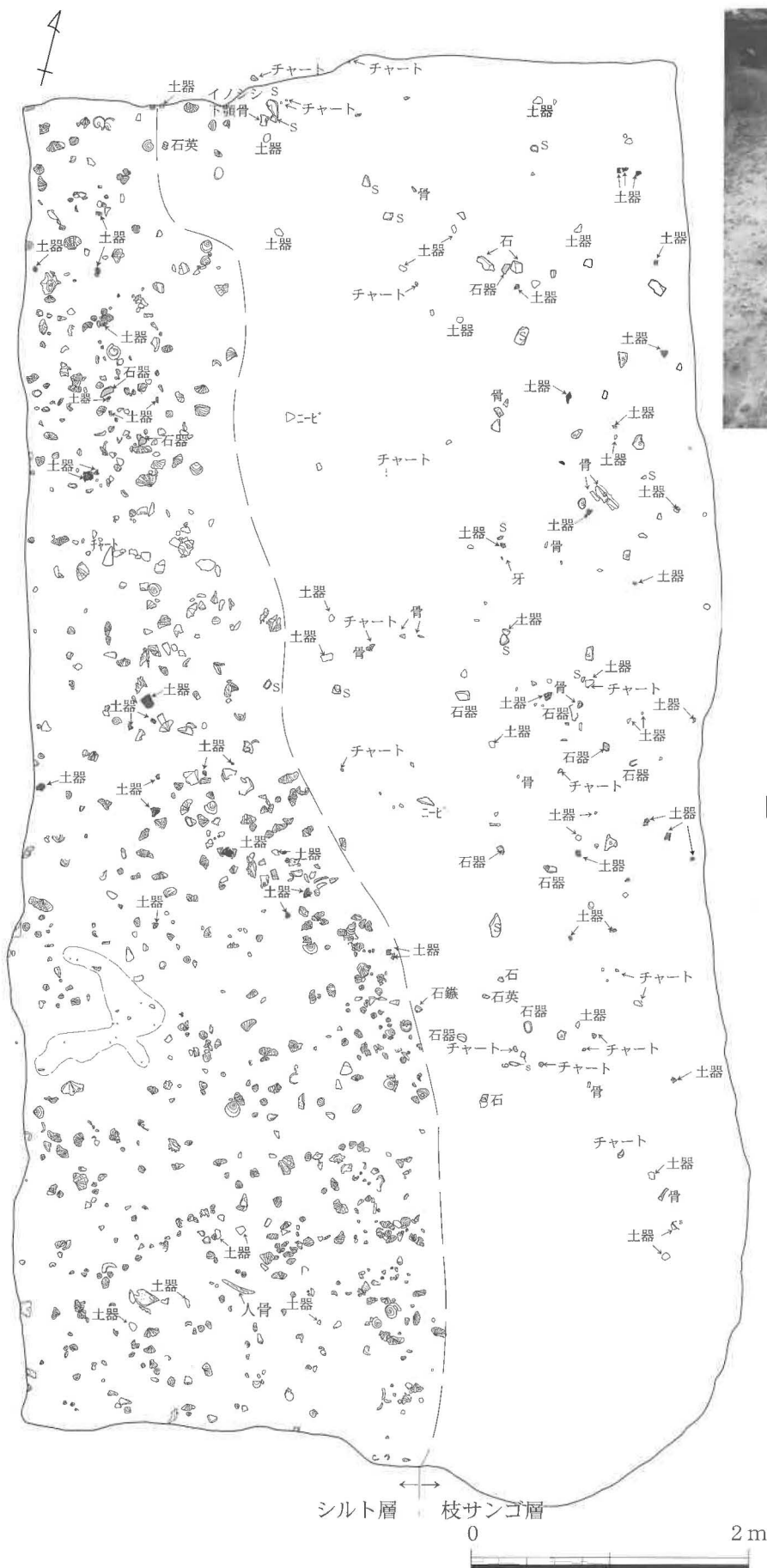
〈A-1西〉



〈A-1東〉



図版27 遺物検出状況 (A-1東・西トレンチ)



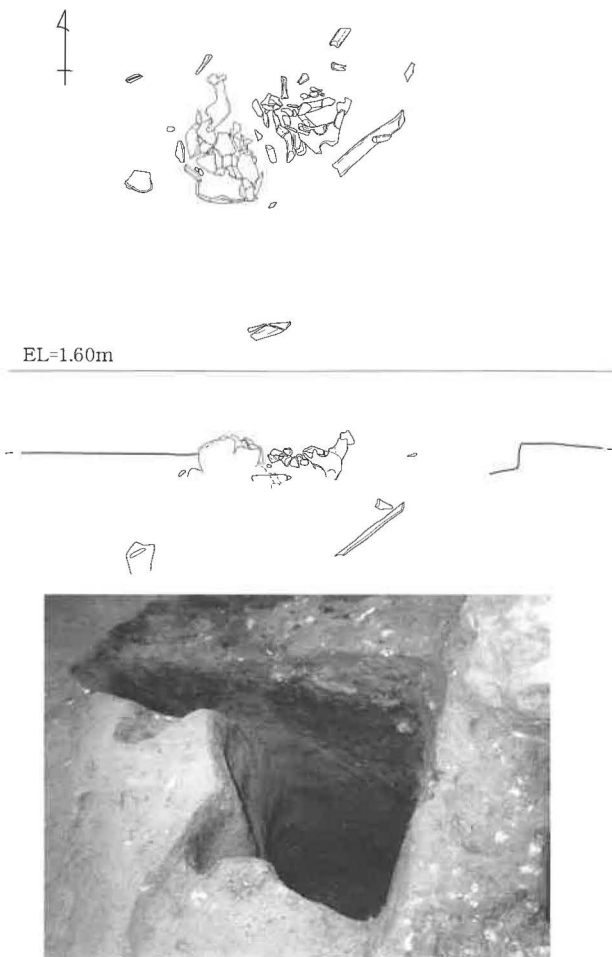
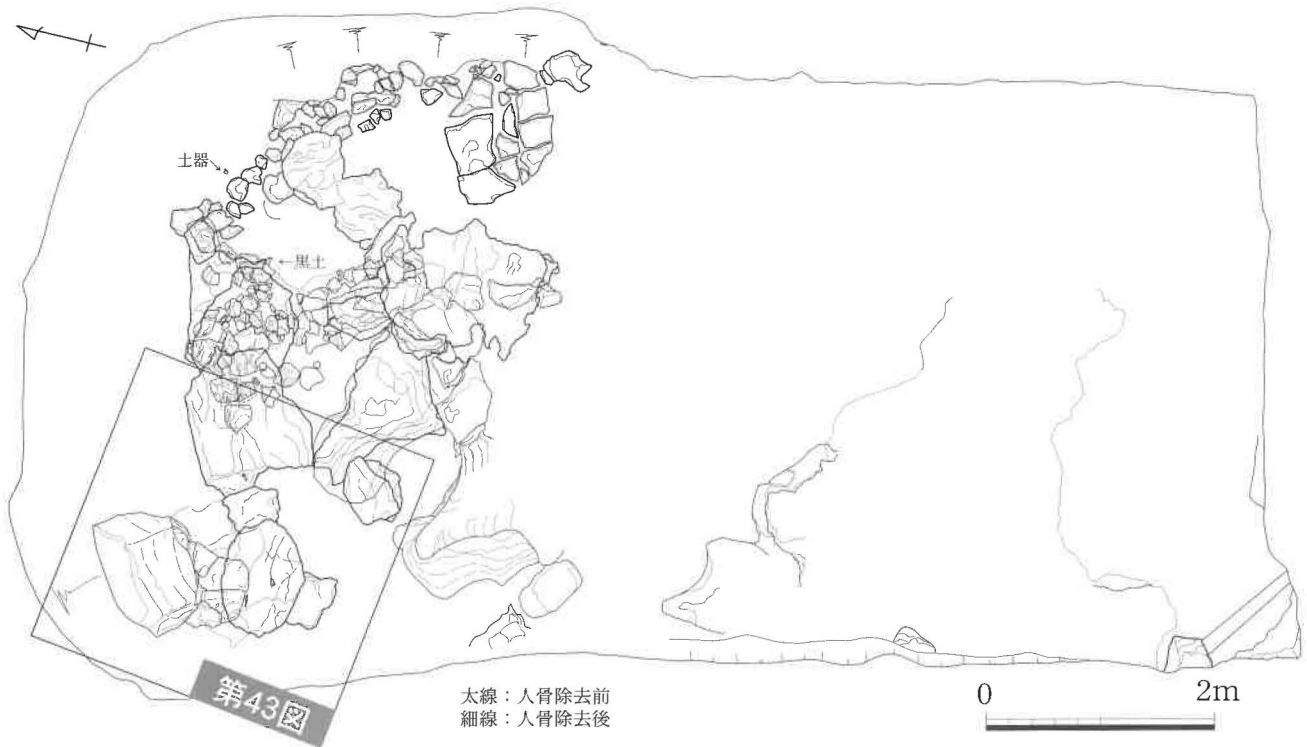
図版28 シルト層上面検出状況



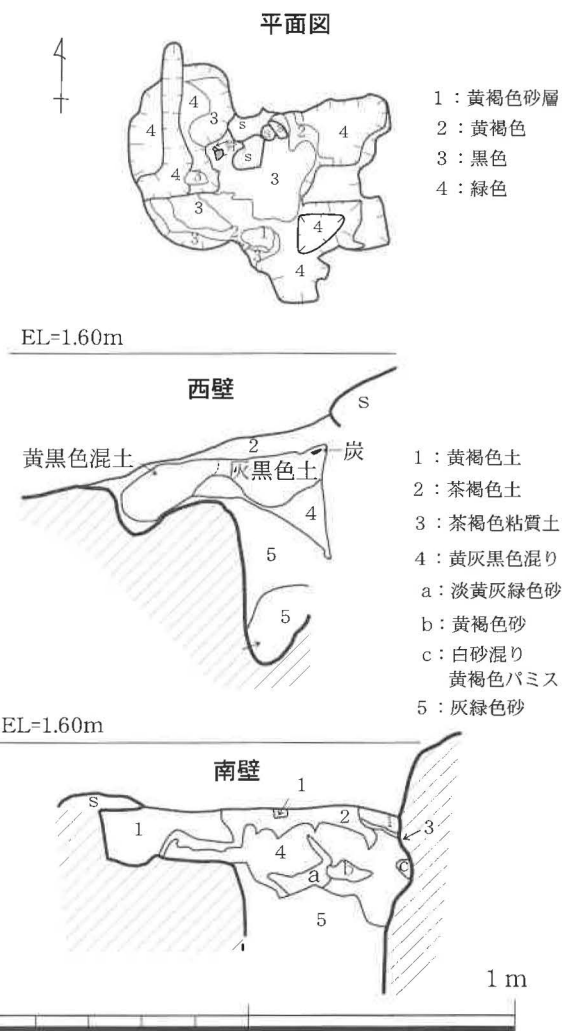
図版29 人骨の調査



第41図 遺物検出状況(A-2) (右・シルト層上面 左・枝サンゴ層面)

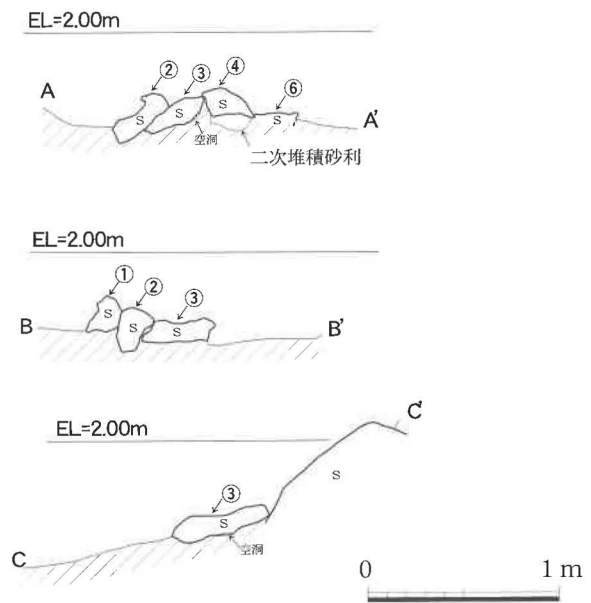
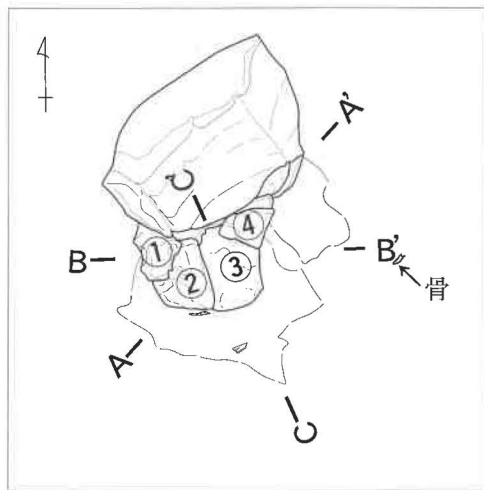


図版30 土壌半裁状況

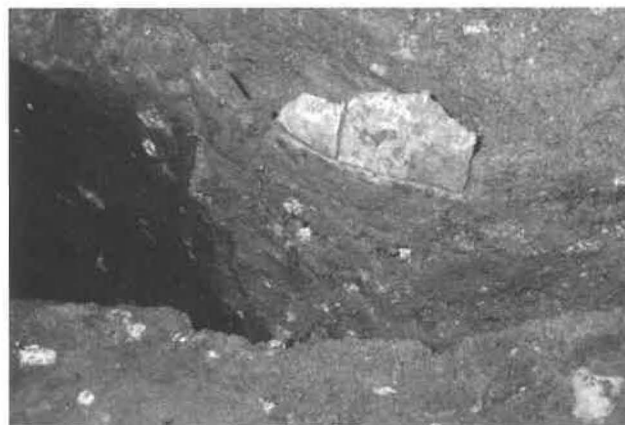
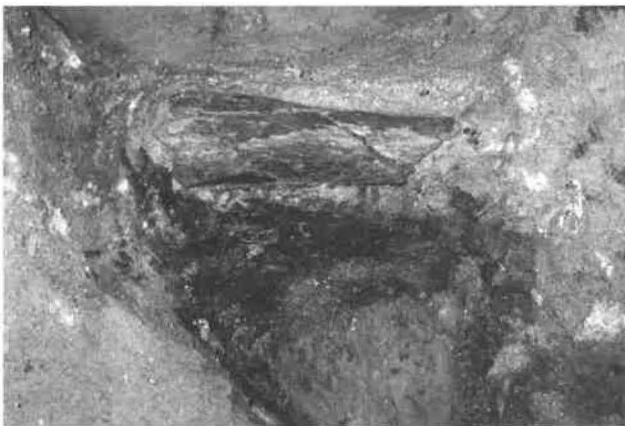


第42図 人骨周辺の岩と検出状況 (A-3)

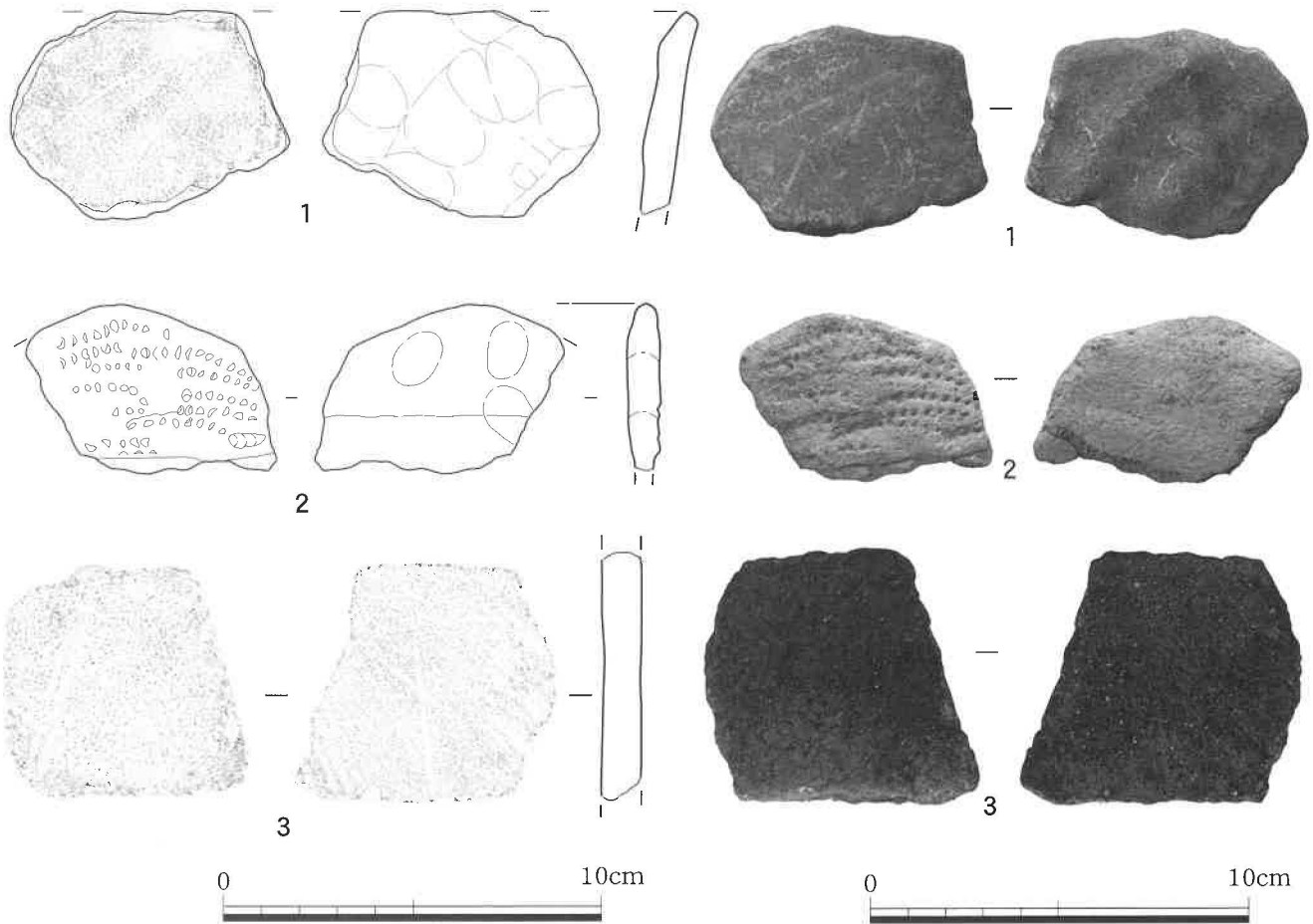
(上・人骨除去前と除去後の平面図 右上・人骨除去後の平面図 右下・土壌断面図)



第43図 人骨上部の石組み状況(A-3)



図版31 人骨出土状況 (右上・土壇の石 左上・土壇半裁 左下・頭蓋骨出土)



第44図 土器 (A-1東トレンチ)

図版32 土器 (A-1東トレンチ)

第5節 Aトレンチ出土遺物

1. 土器

(A-1東)

沖縄産施釉陶器、陶質土器など近代陶磁器、石斧、(暗褐色砂質土層)、チャート(灰白色シルト層)などが出土した。これらの遺物については後項でA・Bトレンチをまとめて報告する。ここではA-1東トレンチの試掘の層序の性格をつかむため、層ごとに土器について略述する。

土器は面縄前庭式土器、仲泊式土器A・B、面縄東洞式土器など6点出土した。

出土状況を表28、主な土器を第44図、図版32に示し、層順に略述する。

a 茶褐色砂層

後期土器(図1)と仲泊式土器(図2)が出土した。

図1は後期土器の口縁部で、口縁はやや外反し、角をなす。内面に指あとが顕著に認められ、焼成も良く、浜屋原式土器から大当原式土器の中間タイプと思われる。

図2は、仲泊式土器で、山形口縁で貝殻文を不規則に6条施す。

砂質で、器色は黄褐色を呈し、焼成は良い。

b. 灰色シルト層

室川下層式土器の胴部(図3)である。文様は斜めに幅広沈線文を施し、器色は内外面とも暗茶褐色、内外面とも条痕が顕著である。砂質で焼成悪い。

(A-1西)

中国産の瑠璃釉や染付、褐釉陶器、沖縄産施釉陶器（褐色土層）、ゴホウラ製貝輪やスイジガイ垂飾品（白色粗砂層・淡灰白色砂層）で出土した。これらの遺物はA・Bトレンチでまとめて述べ、ここではA-1西トレンチの層序の性格をつかむため、層ごとに土器について略述する。

土器は室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器、面縄東洞式土器、嘉徳Ⅱ式土器など20点出土した。

出土層はそのほとんどがX層の枝サンゴ層で、二次堆積の層である。

出土状況を表28、主な土器を第45図、図版33に示し、層順に略述する。

a. 白砂層

室川下層式土器の胴部（図1・2）が出土した。

b. X層

本層からは室川下層式土器（図3・4）、面縄前庭式土器（図12・14）、仲泊式土器（図7・8）、面縄東洞式土器（図5・6・9・10）、嘉徳Ⅱ式土器（図11）が出土した。

・室川下層式土器

図3は口縁部で、口縁は舌状で、やや外反するが筒状の形をなす。文様は幅広の沈線文を縦位、それを軸に左右に半月状を描く。

図4は胴部で、外面に二又状の沈線文を斜めに施す。内面は条痕が顕著に見られる。

・面縄前庭式土器

図12は口縁部で、凸帯文上に斜沈線文、その下部に斜沈線文を施すものである。

図7は2条の凸帯文に刻目を施し、その胴下部は面縄前庭式土器に見られるような斜沈線文を施す。口縁は2条の凸帯文が結合するところで角をなし、方形状の口縁を形づくるようである。また、2条の凸帯は肥厚口縁様に思われ、本品は面縄前庭式土器の定義から外れるようである。

図14は胴部で縦位に調整痕が確認できる。器厚は薄く、面縄前庭式土器の特徴を示している。

・仲泊式土器

図8は幅22mmの肥厚部に貝殻文を3条、胴下部に羽状の沈線文を密に施すものである。推定口径は22.4cmで、やや外反する。

・面縄東洞式土器

図5・6は肥厚幅が5cmと大きく、又状工具で押引文を施すものである。文様は流水構成である。

図9は方形の口縁に断面が三角形の肥厚の強い、市来式土器の影響を受けた（河口1981）土器である。

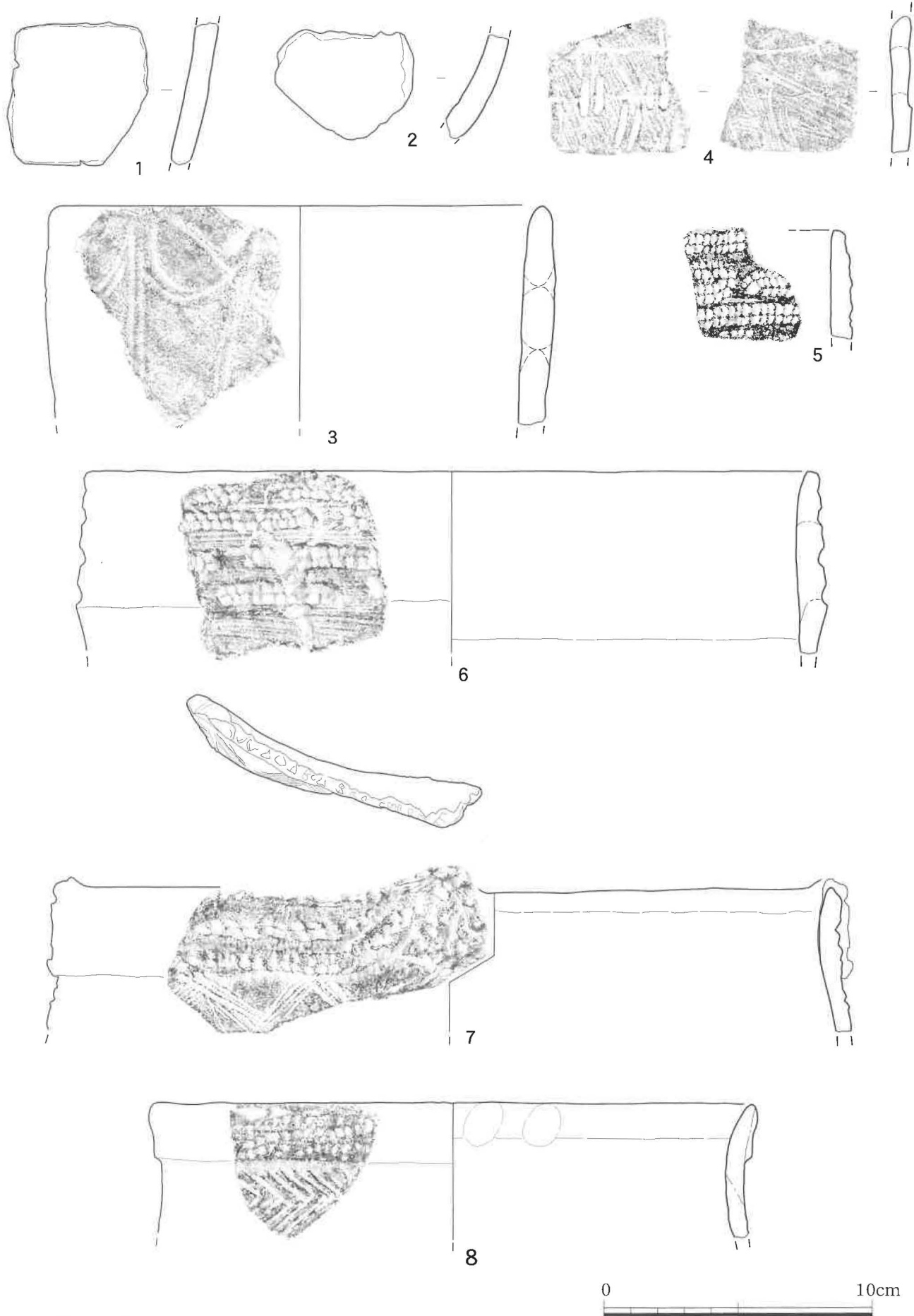
図10は前述と同じように方形の口縁をなすが、肥厚部は薄い。胎土は粗い、石英や砂粒を含むもので、胎土はやや異質である。移入土器の可能性もある。

・嘉徳Ⅱ式土器

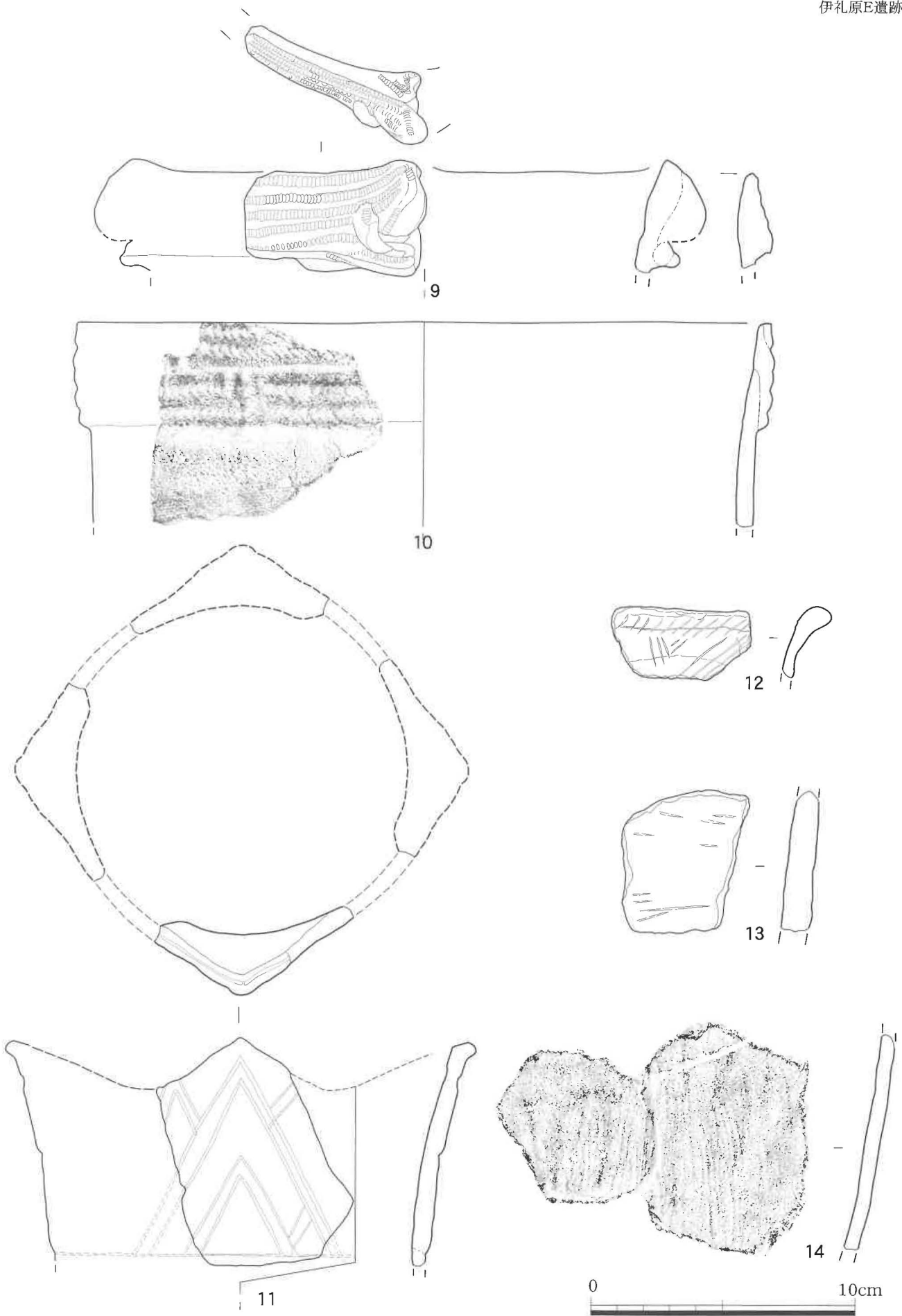
図11は方形状口縁に斜沈線を主に文様を構成するものである。胎土も細かい。沖縄諸島での報告は少ない。浦添貝塚、古我地原貝塚で報告されている。

《参考文献》

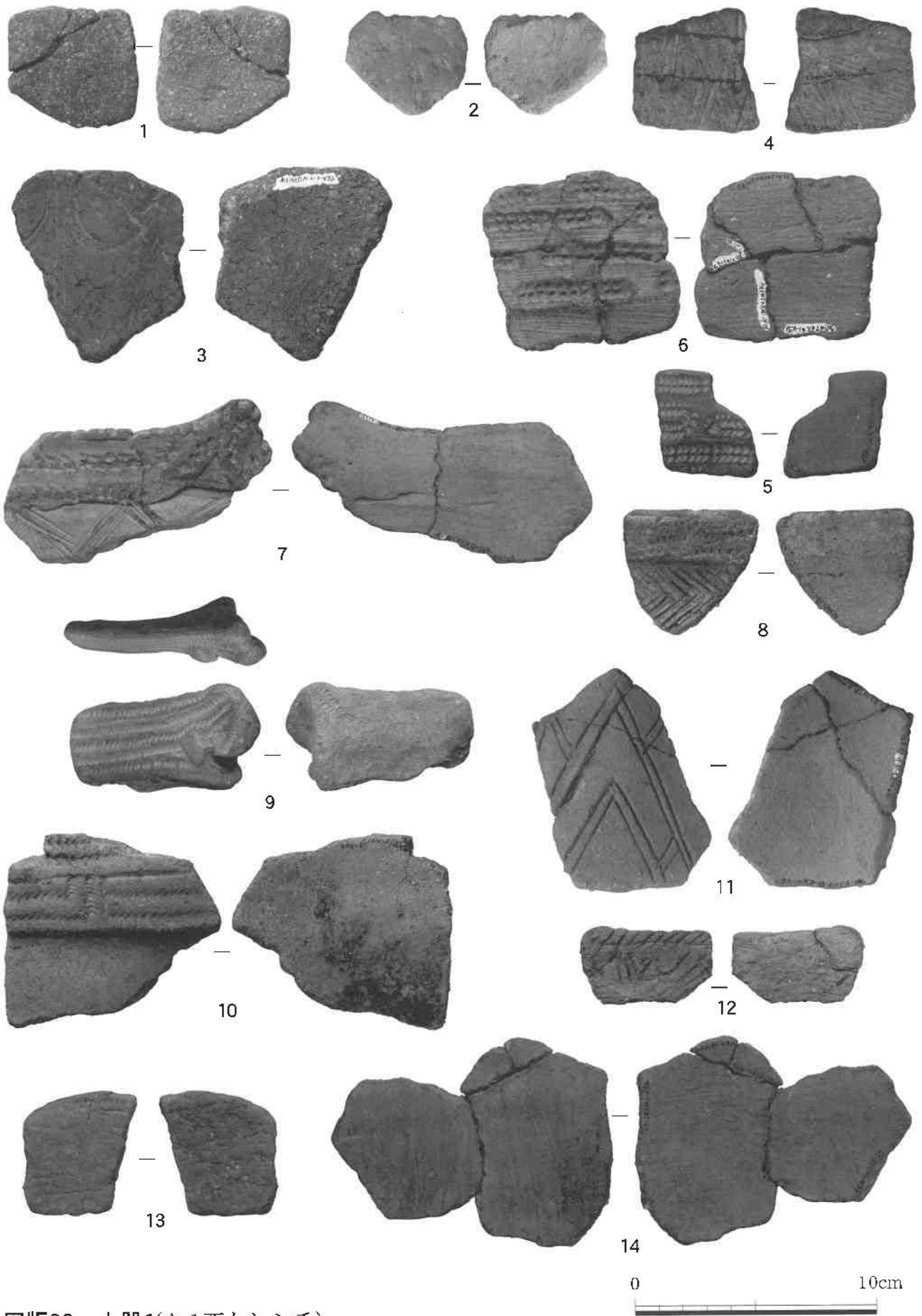
河口貞徳 「市来式の祖形と南島先史文化」 『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会 1981年



第45図 土器1 (A-1西トレンチ)



第46図 土器2 (A-1西トレンチ)



図版33 土器1(A-1西トレンチ)

(A-2)

出土遺物

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器（暗褐色シルト層）、石斧、オオツタノハ製貝輪（暗褐色砂質土）、チャート（灰色シルト砂層）が出土した。これらの遺物はA・Bトレンチでまとめて述べ、ここではA-2トレンチの土器について略述する。

土器は面縄前庭式土器、仲泊式土器、面縄東洞式土器など34点出土している。出土状況を表28、主な土器を第47図、図版34に示し、層ごとに略述する。

a. 暗茶褐色砂層最下

後期土器（図1、2）が出土した。いずれも内面に指頭痕が顕著に見られる。焼成も良い。図1は口縁部も四角で、浜屋原式土器に近いが、混和材が若干異なる。

b. 暗褐色砂層

図3は面縄前庭式土器の口縁部で、文様は凸帯文に刻目を施し、その下位に沈線文を縦に施したものである。器面の保持が悪く摩耗する。

c. 黄白色粗砂層

北側サブトレンチで、口縁部（図4）が出土した。推定口径は17cmと小降りの土器である。前述の後期系土器よりは厚く、器面調整は丁寧である。砂質で、黒色の鉱物が混入することから浜屋原式土器に分類される。

d. 白黄色砂層(黄粒混)

図5は中央より西側で出土したもので、胴部である。

e. 黄白色砂層

図6は浜屋原式土器の底部で北側サブトレ黄白色粗砂層(サンゴ含む)から出土した。

図7は面縄前庭式土器の口縁部で、凸帯文に刻目、下部に沈線文を施すものである。破損面は円味を帯び、器面の保持も悪い。ローリングを受けたものと思われる。

f. X層

主な土器は図8～22に示した。

型式別に見ると、室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器である。

以下、これらの土器について略述する。

室川下層式土器は口縁部（図8）と底部（図9）が出土した。器厚は10mm前後で、砂質である。

図10～13は仲泊式土器のaタイプである。

図14～16は仲泊式土器bタイプである。施文具は深い。

図15は山形口縁であるが、頂部は双状を呈する。器面の禿げた土器は図10、11、12、13でローリングを受けたものと思われる。

図15は仲泊式土器のbタイプで沈線文を羽状に施す。施文も明瞭で、器面の保持も良い。

図19～24は底部である。図19～23は丸底で、面縄前庭式土器か仲泊式土器の底部と思われる。

図22はやや小降りの尖底土器で、やや泥質である。宇佐浜式土器の底部の可能性も考えられる。

図23は丸底で、器色は内面黄褐色、焼成は良好である。

図24は尖底で器色が茶褐色、焼成も良好で浜屋原式土器の底部と思われる。

g. EL

X層下部で出土した遺物である。「E.L〇〇cm」として取り上げた。

・面縄前庭式土器

図25と26は面縄前庭式土器である。前者は口径27cmで外反する。口唇に凸帯が貼り付けられるが、肥厚帯をなすことから、面縄前庭式土器と仲泊式土器の中間と考えられる。

図26は面縄前庭式土器で凸帯文とその間に斜沈線文を施す。いずれも器面の保持は悪く、ローリングを受けたものと思われる。

・面縄東洞式土器

図27は面縄東洞式土器に分類されるもので、口径16cmを測り、口縁は肥厚幅が20mmで、断面は「三角形」を呈し、肥厚部に押し引き文が2条施されている。器色は明～暗茶黄褐色を呈する。

・仲泊式土器aタイプ

図28はやや内彎気味の口縁で、口唇部に刻目を密に施すものである。器色は暗茶褐色を呈する。ローリングを受け、器面の保持は悪い。

図30は肥厚部は13mmで、図25のように凸帯を貼り付けたものである。肥厚部分に小降りの貝殻文を3条と頸部に沈線文を斜位に施すものである。仲泊式土器 aタイプに近い。器色は赤褐色を呈し、焼成は悪い。

・仲泊式土器bタイプ

図31は、山形口縁で幅約33mmの肥厚をなす。肥厚部に羽状に沈線文を施す。器色は明赤～黄褐色を呈し、焼成は良い。

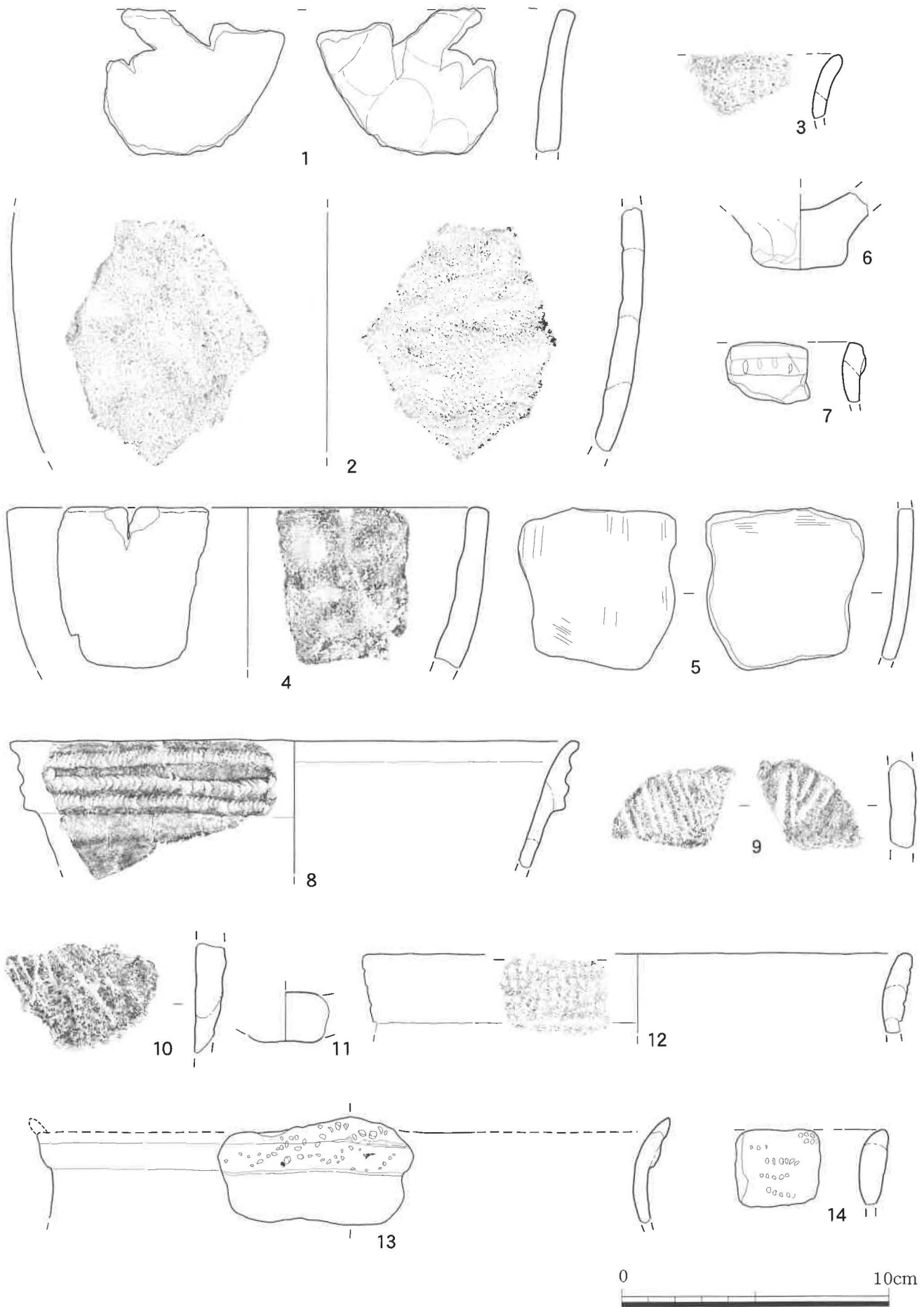
図32は肥厚幅15mmで外反する。文様は肥厚部と頸部に沈線文を鋸歯状に深く施文する。口径22.8cmを測る。器色は淡黄褐色を呈し、焼成は良い。

・型式不明

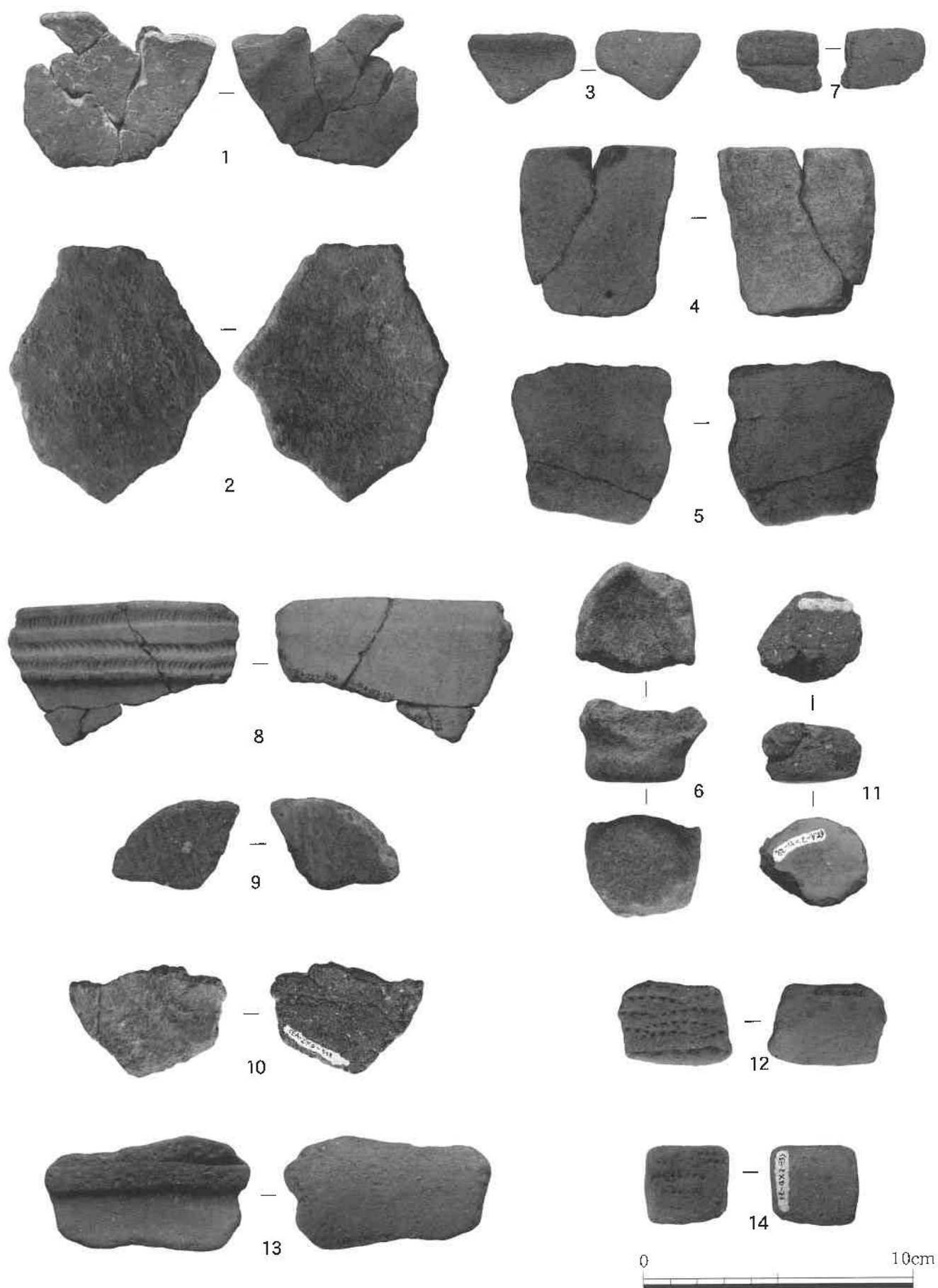
図29は縦位に2条、横位に1条の凸帯文を施すものである。口縁部断面は角状で一見、カヤウチバンタ式土器に似る。器色は暗茶褐色で、焼成は悪い。

h. 攪乱

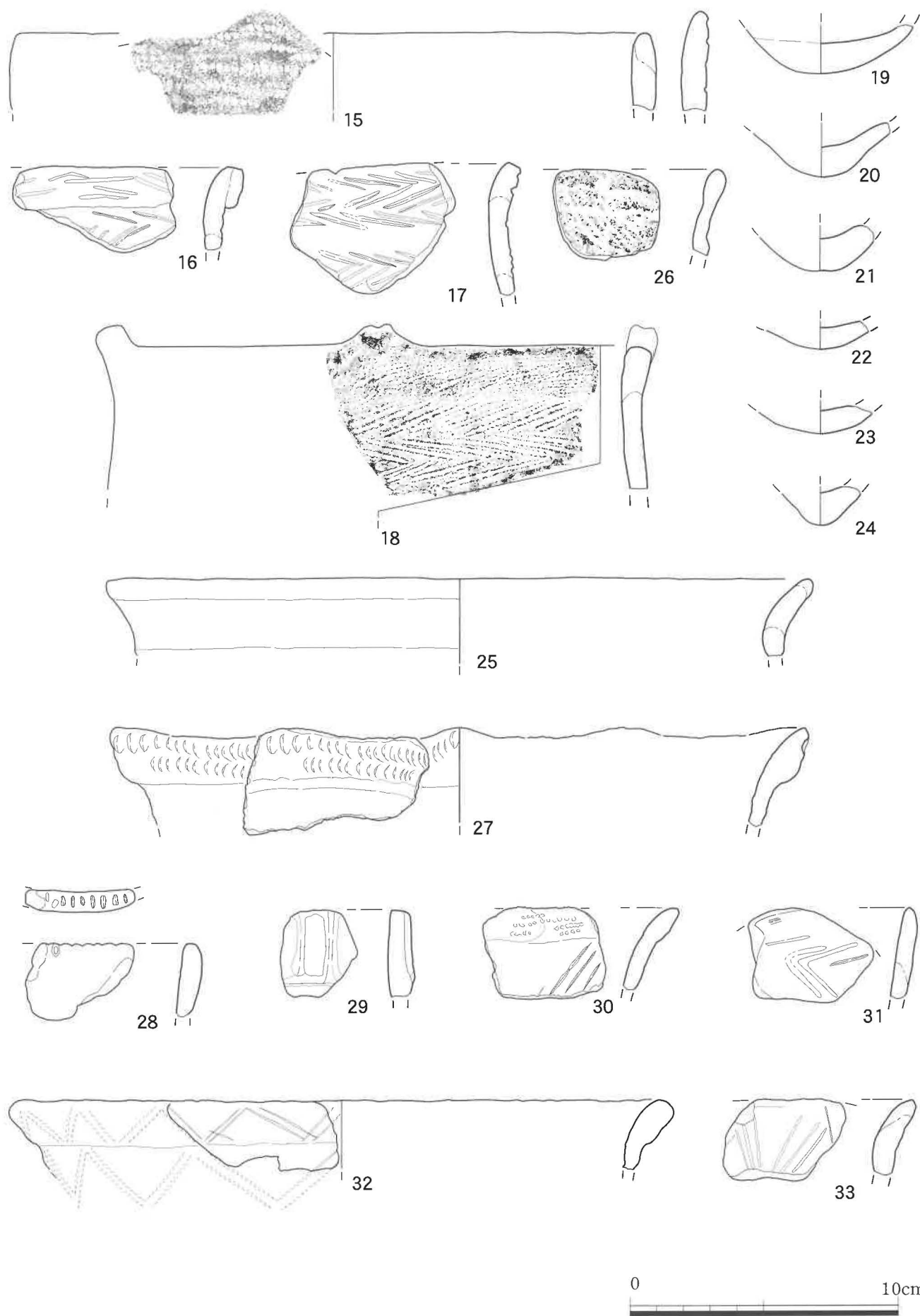
図33は内側に膨らみ気味の外反口縁である。文様は沈線文を3条、鋸歯状に施すものである。器色は黄褐色、焼成は悪い。面縄前庭式土器に分類される。



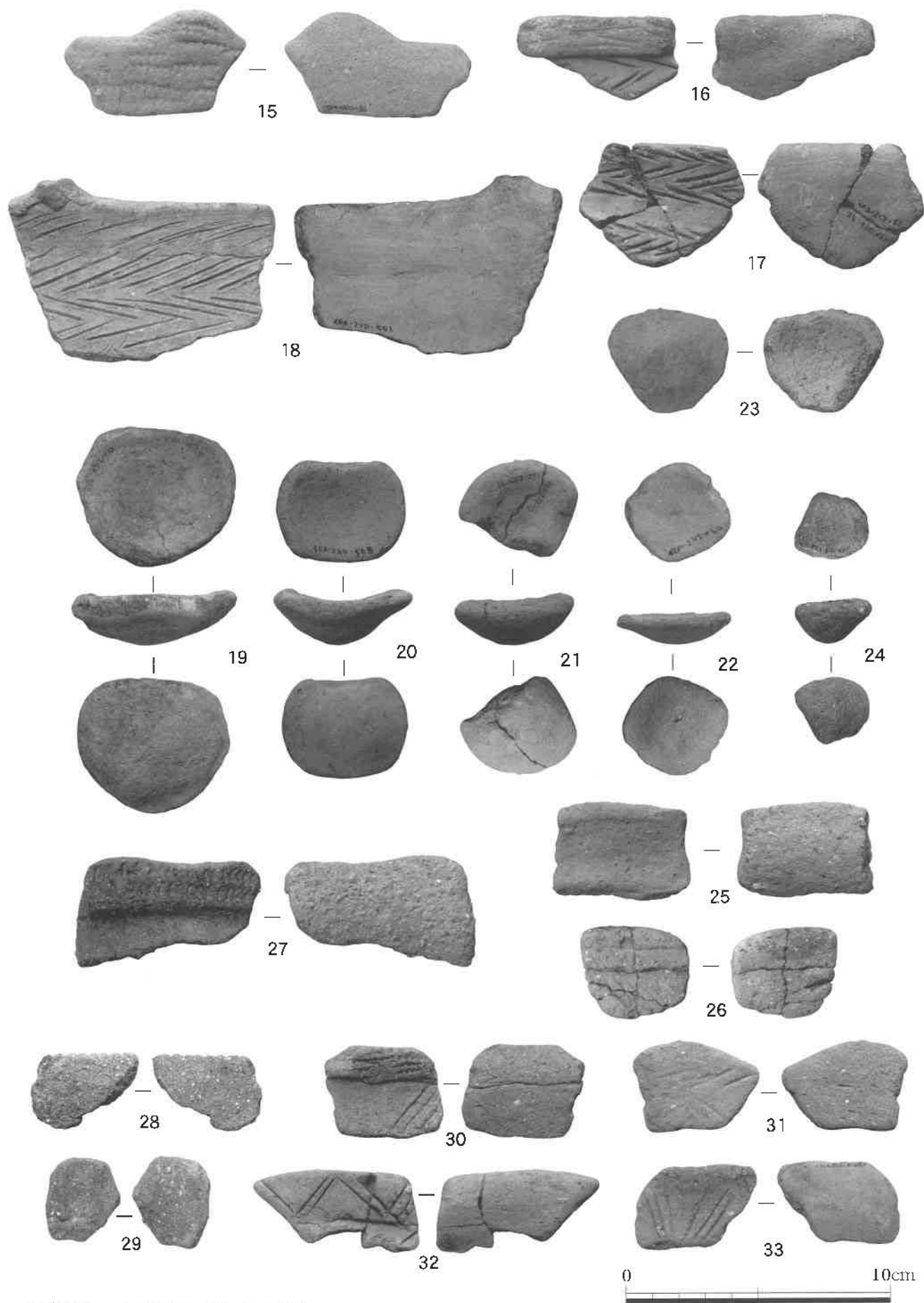
第47図 土器1(A-2トレンチ)



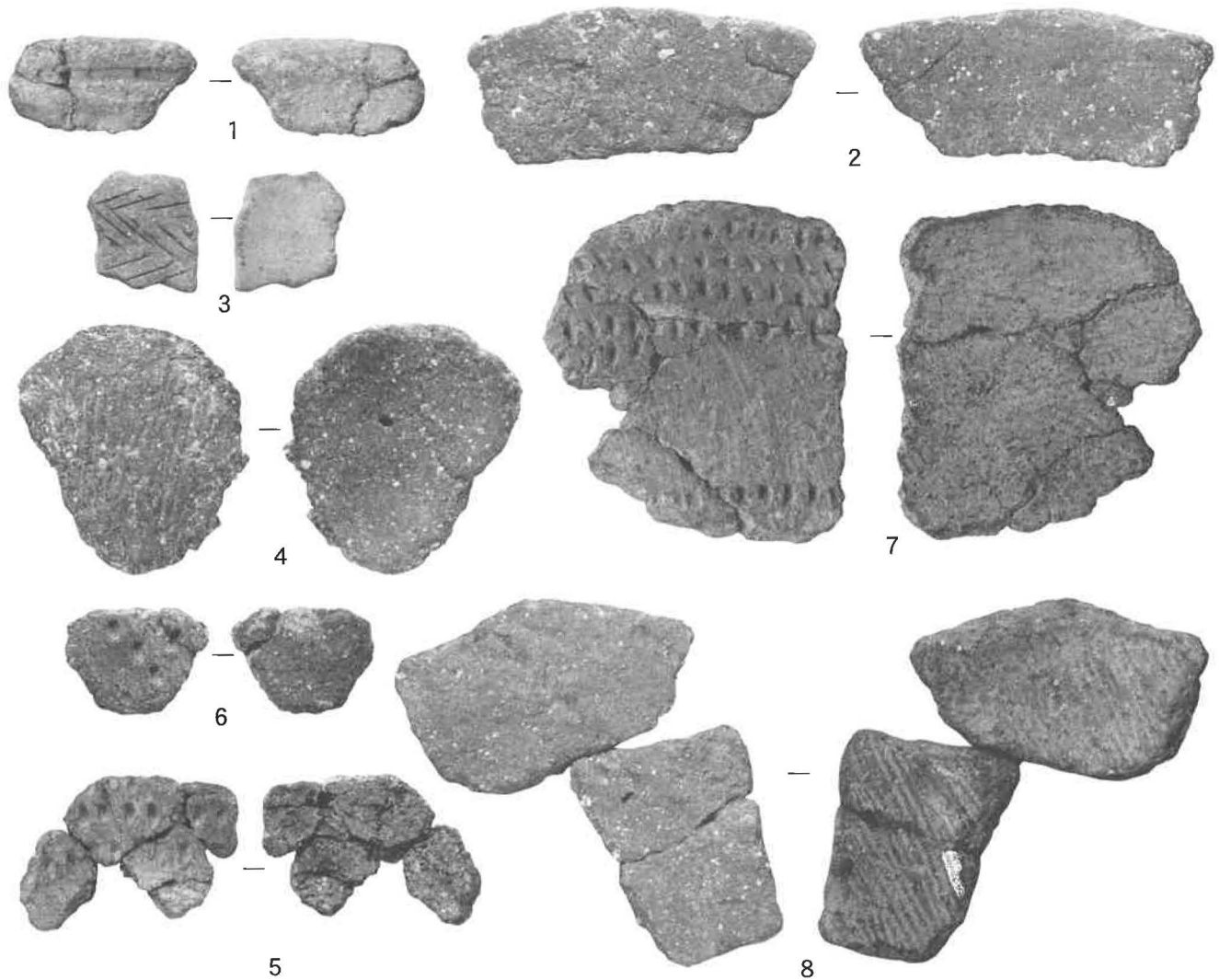
図版34 土器1(A-2トレンチ)



第48図 土器2(A-2トレンチ)



図版35 土器2(A-2トレンチ)



図版36 土器1(A-3トレンチ)

0 10cm

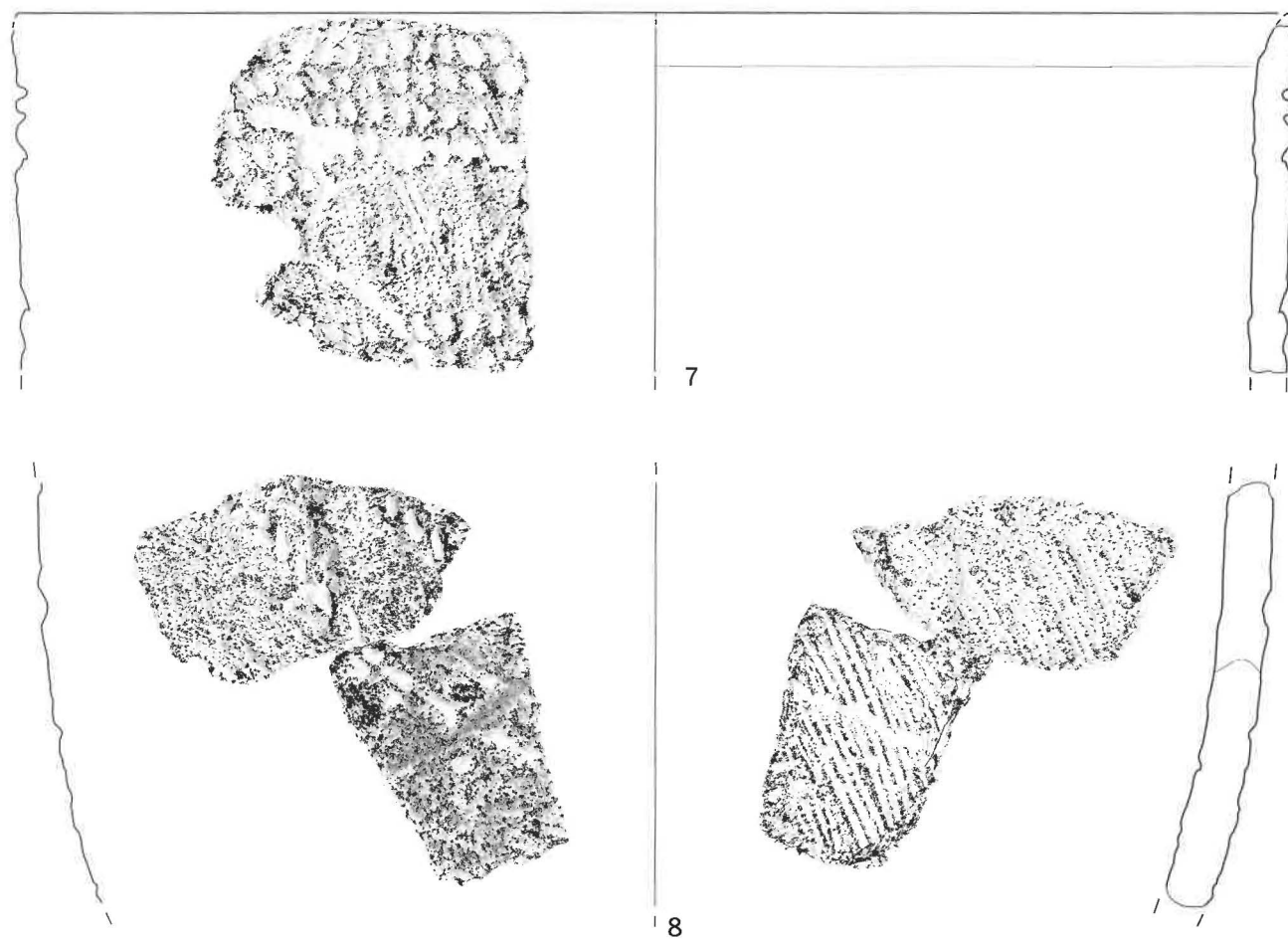
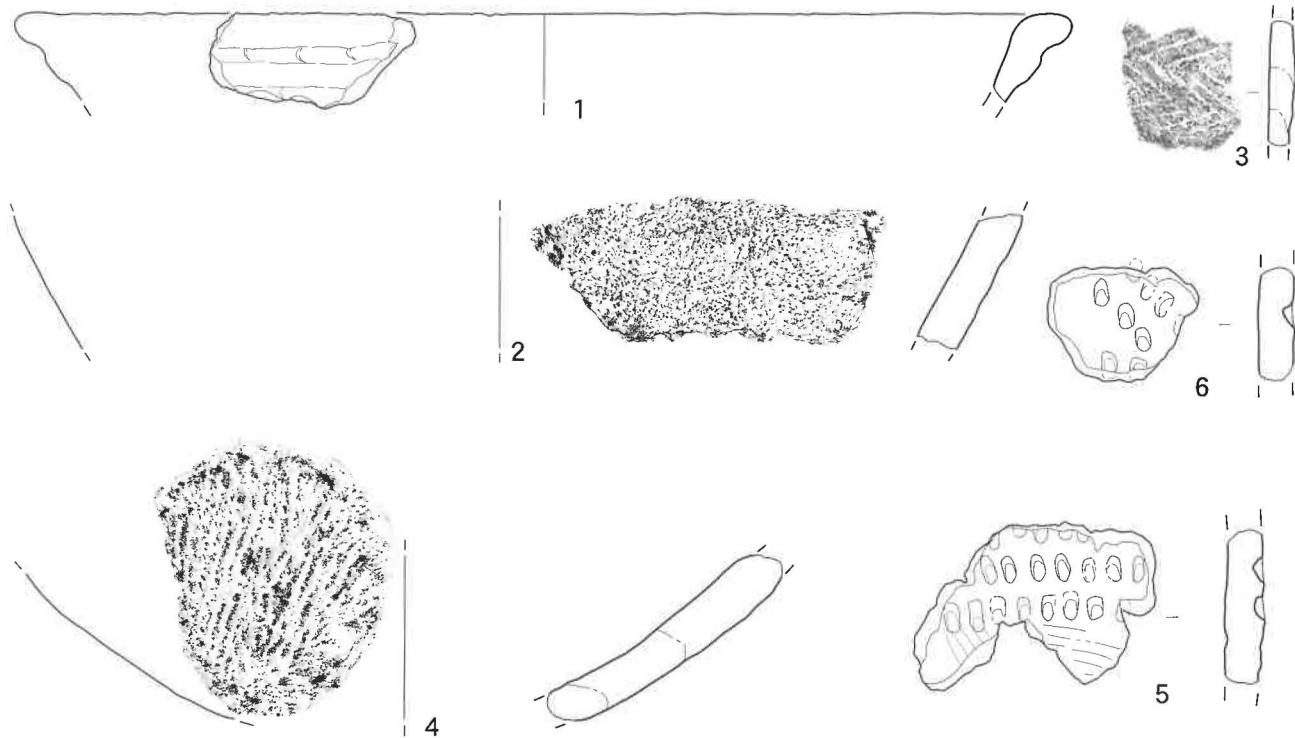
(A-3)

石斧や褐釉陶器（明黄色砂質土層）、メンガイ製貝輪（白砂層）、人骨（黄褐色砂質土層）などが出土した。

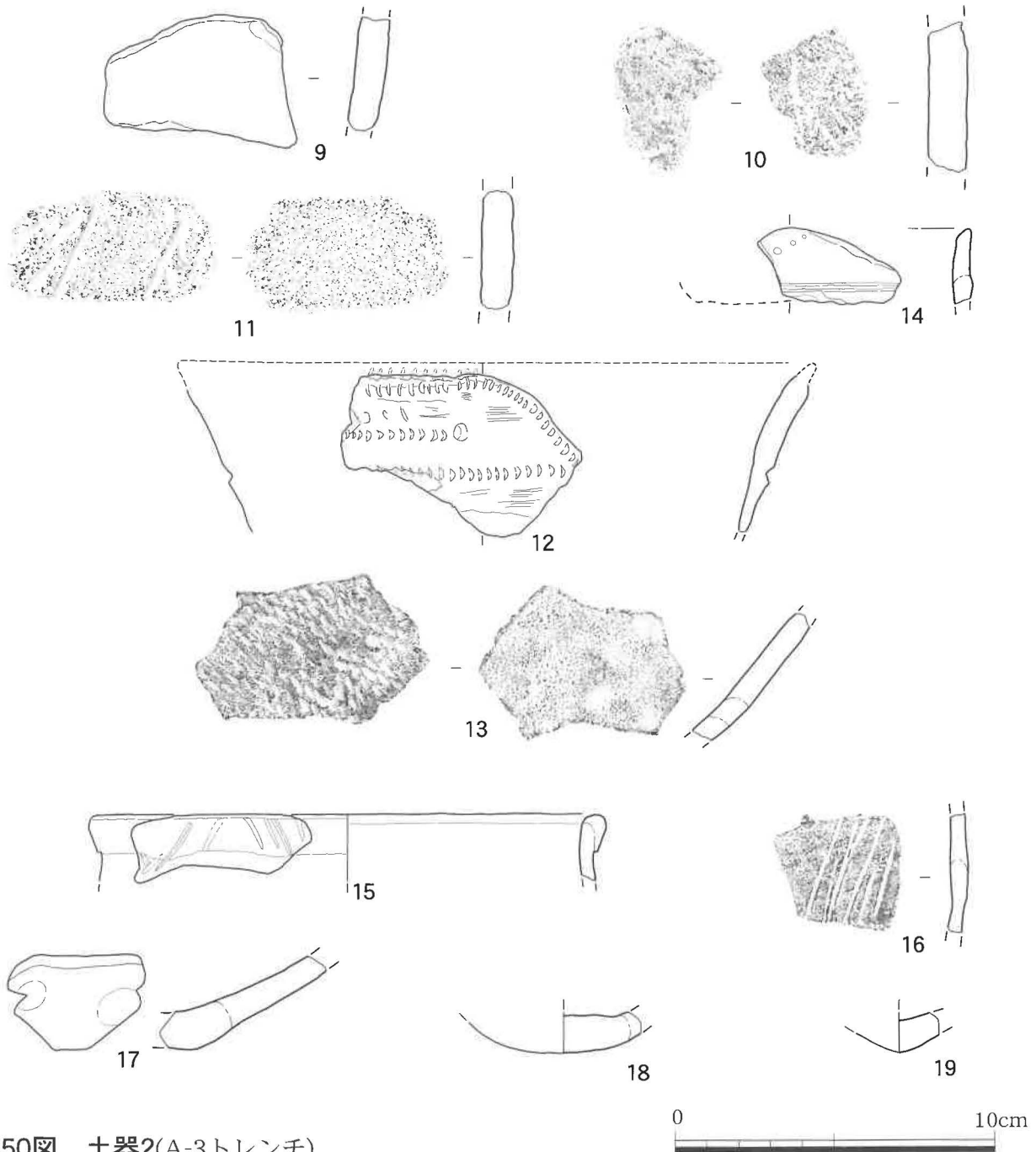
これらの遺物はA・Bトレンチでまとめて述べる。また、人骨については松下孝幸先生の玉稿をいただいた。（第七章参照）ここではA-3トレンチの層序の性格をつかむため、層ごとに土器について略述する

土器は爪形文土器、室川下層式土器、面縄前庭式土器、面縄東洞式土器、後期土器、嘉徳Ⅱ式土器など43点出土し、特に室川下層式土器と面縄前庭式土器（胴部は仲泊式土器を含む）が多いようである。

出土状況を表28、主な土器を第49図、図版36に示し、層ごとに略述する。



第49図 土器1(A-3トレンチ)



第50図 土器2(A-3トレンチ)

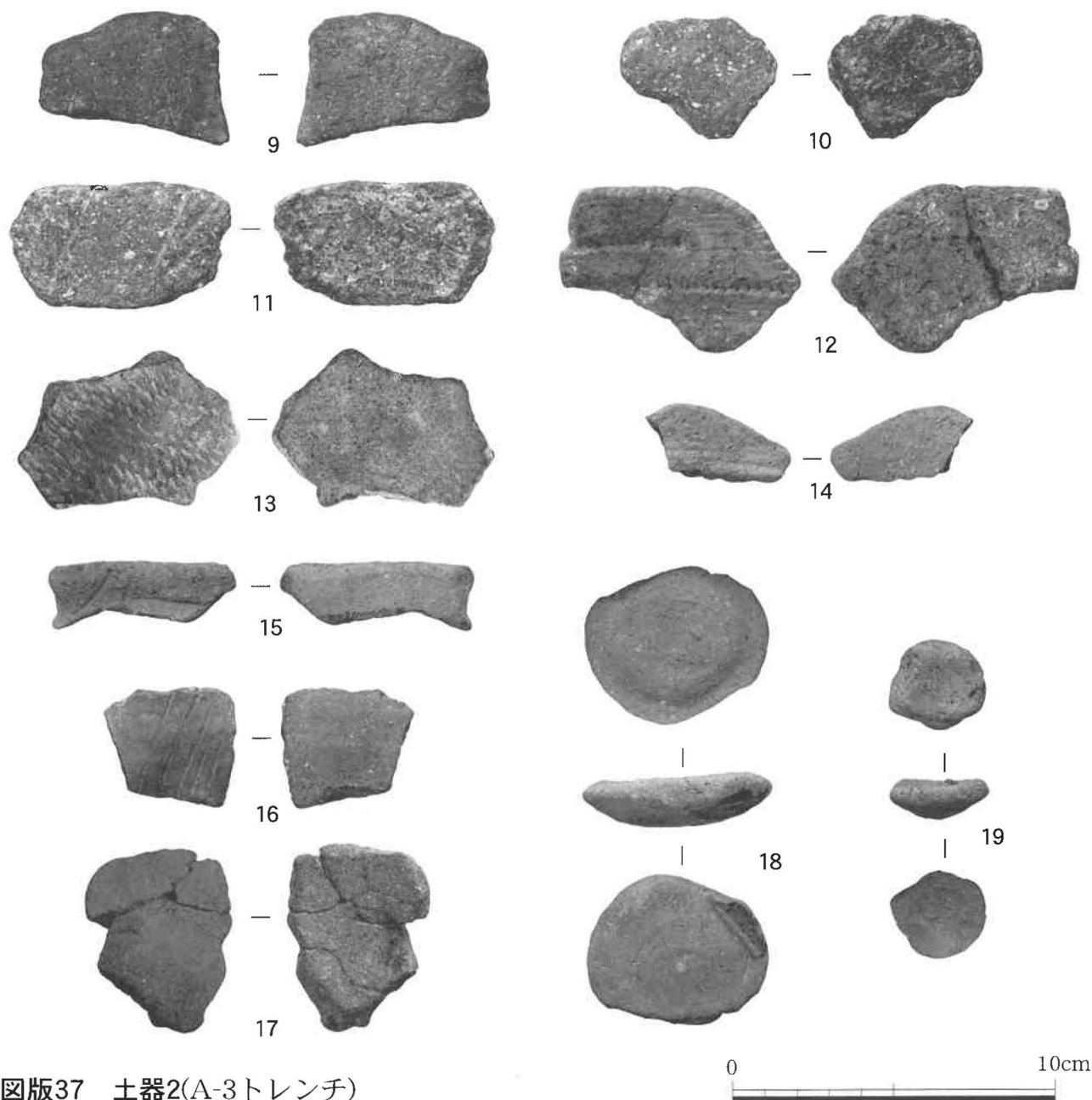
a. 石砂礫層

1個の出土である。

大山式土器（面縄東洞式土器）と思われ、口縁部は丸く、押引文を横位に施す（図1）。

b. 白砂層

図2は室川下層式土器の胴部下部で、最大胴径26cmを測る。内外面とも暗茶色、器面調整は外面が斜めに条痕文が認められるが、裏面の残りが悪い。



図版37 土器2(A-3トレンチ)

c. サング混じり砂利層

図3は仲泊式土器の胴部で斜沈線文を施す。器色の外面は暗茶色、内面は明赤褐色を呈し、内外面とも器面の保持はよい。

d. 黄色砂層上面

室川下層式土器の胴部（図4・9）、浜屋原式土器（図17）。

図4は、外面に条痕文が顕著に認められる。製作時の積み痕も明瞭に残る。

器色は外面は暗茶、内面は暗灰色を呈する。割れ面はやや丸味を帯びる。

図9は胴部で外面は暗灰色、内面は暗茶色を呈し、両面とも器面の保持は悪い。

図17は黄色砂質土の岩盤上部から出土したもので丸底である。浜屋原式土器の底部と思われる。器色は外面暗茶赤褐色、内面は明茶褐色を呈する。

e. 黄色砂層

室川下層式土器（図5・6・10）と面縄前庭式土器（図15、16、18）、仲泊式土器（図14）、面縄東洞式土器（図12）が出土した。

図5、6は室川下層式土器の胴部で、深く刺突文を施すことから口縁部に近い部分と思われる。

図5は横に3条を施し、斜めに幅広沈線文を施す。図6は斜位に刺突文を3条施し、その下部には条痕が残る。図10の胴部は外面は暗茶色、内面は暗黒色を呈するもの。

図15・16は面縄前庭式土器である。図15は口縁部は丸く、凸帯文の上に「ハ」字状に施文するが、文様は胴部にまで及ぶ。器色は外面は灰赤褐色、内面は灰褐色を呈する。

図16は胴部で斜沈線文で器色は外面が暗茶褐色、内面は明黄色を呈する。焼成良好である。

図18は丸底で、面縄前庭式土器の底部と考える。器色は外面は明灰褐色、内面は明灰褐色を呈する。

図14は仲泊式土器の口縁部で、断面は舌状を呈する。山形口縁でわずかに外反する。文様は器面の保持が悪くはっきりしないが、わずかに貝殻文とその下部に沈線文が確認出来る。器色は内外面とも茶褐色を呈する。

図12は面縄東洞式土器の口縁部と思われるが、口唇部がわずかに破損する。口縁部の断面は舌状を呈し、逆「ハ」字状に外反し、厚くなる。文様は先端が尖るもので押引文を施す。文様構成は流水状である。器色は外面は明橙褐色、内面はやや赤味を帯びる。また、外面は横位にハケ目痕が見られる。器面の保持悪い。

f. IV層

室川下層式土器の口縁部（図7）と胴部（図8・11）、型式不明（図13）が出土した。

図7の口縁部は断面が舌状をなし、わずかに外反する。文様は口唇部に平行に刺突文を4条、さらに胴部にも2条確認される。器面は条痕を外面は縦位に、内面は横位に施す。

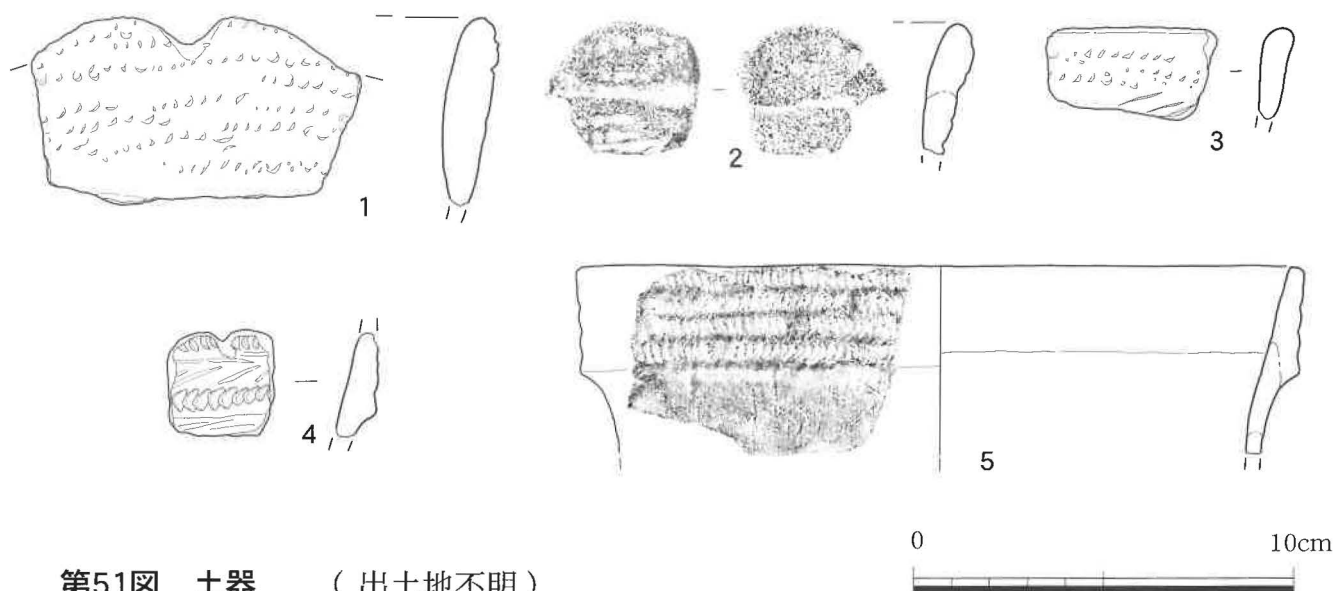
図8の胴部は胴径が32.6cm測るものである。文様は胴部に斜短沈線文を斜めに施すものである。器面調整は外面ははっきりしないが、内面は斜め条痕が明瞭認められる。

図11は貝殻文を斜め施すものである。器色は外面が明茶褐色、内面が暗灰褐色を呈し、器面調整は外面は斜め、内面は横位に調整痕が認められる。

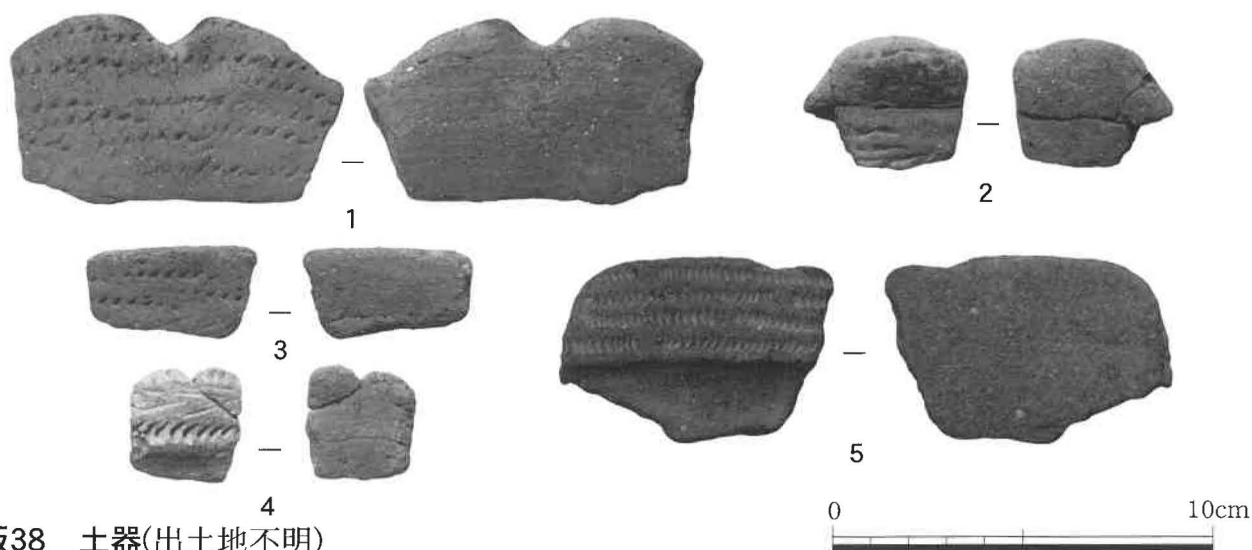
図13は、型式不明土器の胴部である。斜め縄目を転がしたような文様？が施され、内面には指痕が見られる。厚さは室川下層式土器よりは薄く、焼成も良い。外面は明茶褐色、内面は黄褐色を呈する。

g. 表面採集

図19はやや尖底気味の丸底である。形状から面縄前庭式土器に属すると思われる。器色は内外面とも暗灰褐色を呈するが内面はやや黄褐色が強くなる。



第51図 土器 (出土地不明)

図版38 土器(出土地不明)
(出土地不明)

第51図、図版38に図示した5点である。仲泊式土器(図1~3)、面縄東洞式土器(図4)、嘉徳I式土器(図5)が出土した。

図1は、双状の山形口縁である。最も広い部分の肥厚幅は36mmを測る。その上には貝殻文が7~5条施され、器色は黄褐色呈し、焼成は良好である。盛土採集。

図2も山形口縁で、肥厚する。特に山の部分は10mmと厚く広くなり、肥厚部は8mmを測る。肥厚部に4条の貝殻文を施す。砂質で、器色は外面は暗~明茶褐色、内面は明茶褐色を呈する。

図3は、口縁部で僅かに肥厚するもので、肥厚部に3条の貝殻文、その下部に羽状の沈線文を施す。砂質で、焼成は悪い。内外面とも明赤褐色を呈する。盛土で採集。

図4は口縁部で先端部は舌状を呈し、幅30mmの三角状に肥厚するものである。肥厚部に4条の押引文が施され、流水構成である。砂質で焼成は悪く、赤褐色を呈する。

図5は口縁部で、前述と同様、三角状に肥厚する。肥厚部は約30mmを測る。文様は上下に押引文、その間に羽状に沈線文を配す。砂質で焼成は悪く、器色は外面が暗黄褐色、内面が黄褐色を呈する。

表28 土器出土量

出土地		種類	瓜形	室下	前庭	仲泊	東洞	嘉Ⅱ	浜屋	大当	アジャ ンカー	ガス	他	小計	層合 計	グリッド 合計	
グリッド	層序	部位															
A-1	褐色土層	胴									1			1	1	6	
	黄褐色砂層	口				1								1	3		
	黄褐色砂層	胴			2									2	2		
	不明	胴			2									2	2		
A-1(西)	黄褐色粗砂層	胴			1									1	1	27	
	黄色砂質土層	胴		4										4	4		
	黄白色砂質層	胴		1	8								2	11	11		
	灰白色粗砂層	胴		1										1	1		
	不明	胴		1	9									10	10		
A-1(東)	淡色シルト層	口				1								1	7	14	
	淡色シルト層	胴				6								6			
	淡灰白色砂層	口				1								1			1
	淡灰白色シルト層	口			5		1							6			6
小計			0	7	27	9	1	0	0	0	1	0	2	47	47	47	
A-2	赤褐色砂層	胴		1	1									2	2	45	
	暗褐色砂質土層	胴			1		1						4	6	6		
	黄色砂質層	胴			3									3	3		
	黄褐色砂層	胴		1	5	1								7	7		
	黄褐色粗砂層	胴			1									1	1		
	黄白色粗砂層	胴			1									1	1		
	白黄色砂層	胴			1									1	1		
	灰色砂層	胴			1									1	1		
	白色砂層	胴		1									1	2	2		
	表土層	胴		1	1		1						3	6	6		
	不明	口				1	1						1	3	3		
不明	胴		2	6	1	3							12	15			
小計			0	6	21	3	6	0	0	0	0	0	9	45	45		
A-3	暗褐色砂質土層	胴									2			2	2	99	
	褐色土層	胴	1											1	1		
	黄色砂質層	胴		1									1	2	2		
	黄色砂層	口					2							2	12		
	黄色砂層	胴		6	3		1							10	12		
	黄色砂質土層	口				2	1							3	29		
	黄色砂質土層	胴		12	14									26	29		
	黄褐色砂質土層	胴		1	2									3	3		
	黄褐色砂質層	胴			1		1							2	2		
	白砂層	胴		4	9		6	2					1	22	22		
	茶褐色土層	胴			1									1	1		
	平面清掃	胴			3									3	5		
	平面清掃	底			2									2	5		
	明黄色砂質土層	胴		3	6									9	9		
不明	胴			11									11	11			
小計			1	27	52	2	11	2	0	0	2	0	2	99	99		
B-2	壁清掃	胴			2									2	2	3	
	白砂層	胴			1									1	1		
B-3	表土層	胴			2		1							3	3	4	
	白砂層	胴		1										1	1		
小計			0	1	5	0	1	0	0	0	0	0	0	7	7	7	
不明	黄色砂質土層	胴			1									1	1	13	
	不明	胴	2	1	4	1	3		1					12	12		
小計			2	1	5	1	3	0	1	0	0	0	0	13	13	13	
合計			3	42	110	15	22	2	1	0	3	0	13	211	211		

2. 石器・石製品

石器は総数92点出土している。この内、旧ロッジの石器は17点である。ここでは、確認できた器種は石斧、敲き石、凹み石、磨り石、石皿、砥石、石錐、石球、用途不明、石器片である。石器の素材としては、輝緑岩、安山岩、片状砂岩、玄武岩、砂質片岩、輝石安山岩、角閃岩、緑色岩、片岩砂岩、角閃石安山岩、班レイ岩、細粒砂岩、砂岩、凝灰岩、礫岩などが使用されている。図化したものの詳細は観察表で述べる。

a. 石斧

石斧は、合計13点出土し、磨製石斧と半磨製石斧と打製石斧に大別できる。また、刃部を「両刃」、「片刃」、「刃部不明」に分けた。それぞれの内訳は、磨製石斧2点、半磨製石斧8点、打製石斧3点である。石質は、輝緑岩を使用したものが多く、片状砂岩、安山岩、玄武岩、砂質片岩、輝石安山岩、角閃岩、緑色岩、片岩砂岩などの石材が使用されていた。磨製両刃の石斧は、図1である。磨製片刃石斧で形がバチ形のもの図2である。半磨製両刃石斧で形がバチ形のもの図3～5である。半磨製片刃石斧は図6である。半磨製刃部不明は図7である。打製両刃の石斧は、図8である。打製片刃の石斧は、図9・10である。図9は楕円形、図10は短冊形である。打製の刃部不明石斧の方形は図11である。

b. 敲き石

敲き石は、合計21点出土し、石斧転用品と円礫を利用したものに大別できる。また、形状を「転用品」、「円形」、「楕円形」、「半楕円形」、「球形」、「不明」に分けた。それぞれの内訳は、石斧転用品3点、円礫を利用したもの18点である。石質は、砂岩を使用したものが多く、角閃岩、角閃石安山岩、班レイ岩、片状砂岩、細粒砂岩などの石材が使用されていた。半磨製石斧を転用した敲き石は図12・13である。円礫を使用した楕円形の敲き石は図14である。楕円形の敲き石は図14～16である。隅丸方形は図17である。円形は図18である。球形は図19～21である。

c. 磨り石

磨り石は合計8点出土し、円礫を利用したものである。形状を「円形」、「半円形」、「楕円形」、「球形」、「方形」、「三角状」、「不明」に分けた。石質は、砂岩、片状砂岩などの石材が使用されていた。ここでは特徴のある球形を図化した（図22～24）。

d. 石皿

石皿は合計4点出土している。全て「半磨製」のもので、形状は「不明」である。石質は片状砂岩である。ここでは、形態が最も良いものを1点図化した（図25）。

e. 砥石

砥石は半磨製で、形状が三角形のものが1点出土している（図26）。

f. 石錐

石錐は自然石を使用したもので、形状は錐状のものが1点出土している（図27）。石質は細粒砂岩である。

g. 用途不明

磨製石器の方形は1点出土した（図28）。

h. 石器片

石器片は合計24点出土し、半磨製品と自然石を使用した石器片に大別した。形状は「柱状」、「方形」、「三角状」、「楕円形」、「有孔」、「不明」に分けた。

小結

敲き石の出土量が一番多く、次いで石斧、磨り石の順となる。敲き石や磨り石などの敲打器類が多く出土した。また、玄武岩を使用した半磨製石斧が出土しており、沖縄本島内では、玄武岩が産出されていないので、本島外からの移入だと思われる（図10）。

表29-1 石器観察一覧

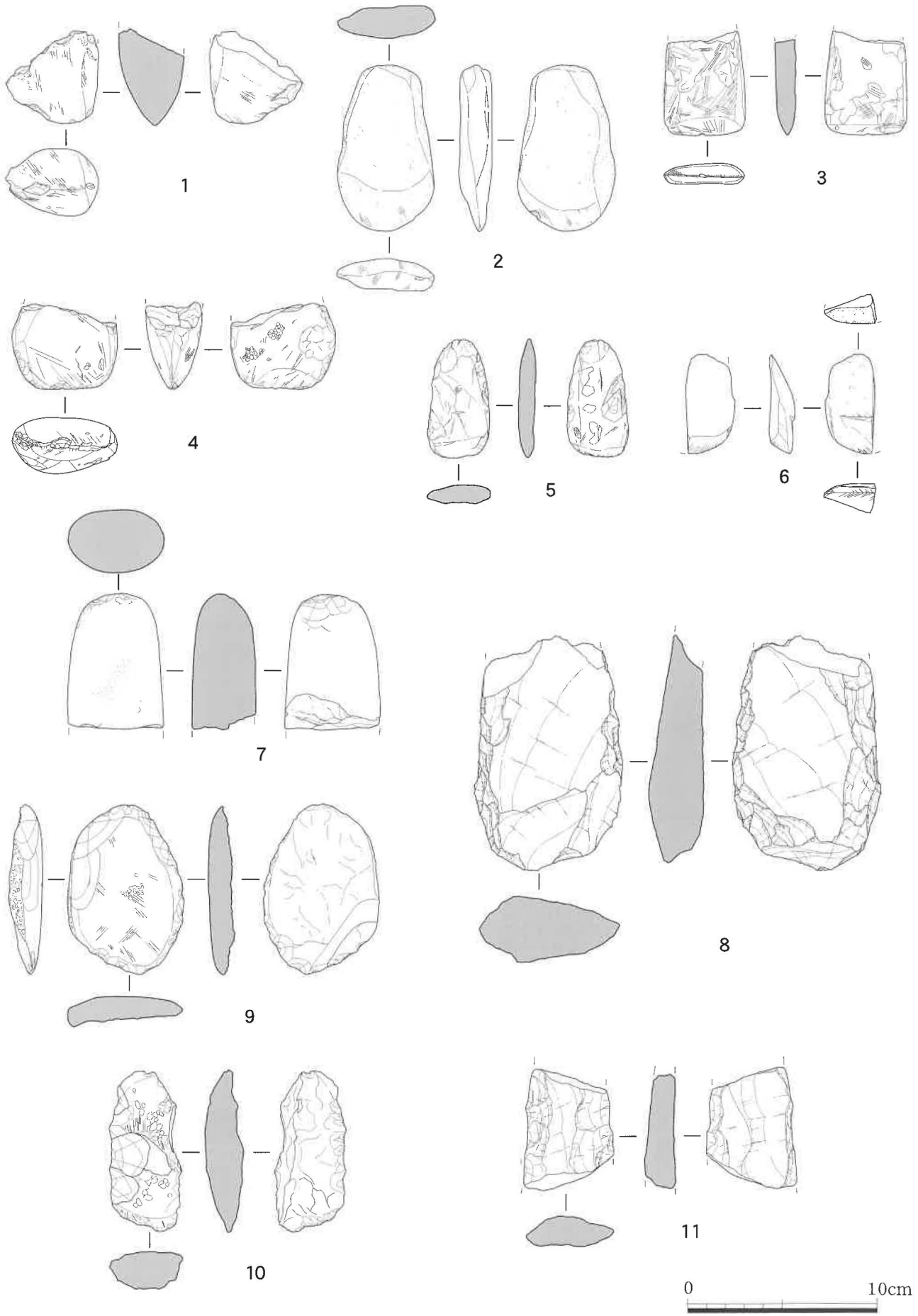
第図・図版	器種	大分類	小分類	残存	縦(mm) 横(mm) 幅(mm)	重量 (g)	石質	観察事項	出土地
第52図(図版39)	1	石斧	磨製	両刃	破損 41 53 37.5	92	輝緑岩	平面は半楕円、断面は三角状。刃縁は弧状で両刃である。表裏側面に研磨が施される。左側面には稜があるが、右側面には形成されていない。刃こぼれは1～2mm程度。刃部に剥離痕がある。	A-1 褐色土層
	2	石斧	磨製	片刃	完形 88 52 16.6	125	安山岩	平面はバチ形、断面は偏平。刃縁は弧状で片刃である。全体に研磨が施されている。また、表裏面には打ち割りの跡も見られる。	A-2 畦除去
	3	石斧	半磨	両刃	刃部 48 57 25	100	輝緑岩	平面はバチ形、刃縁は両凸刃で偏刃である。刃こぼれ有り。側面に敲打痕がある。	A-1 東 茶褐色砂層
	4	石斧	半磨	両刃	刃部 55 45 11	50	輝緑岩	平面はバチ形、断面は板状。刃縁は両凸刃で直刃である。こぼれは1～2mm程度。	A-1 東 茶褐色砂層
	5	石斧	半磨	両刃	完形 63 33 6	30	輝緑岩	平面はややバチ形、断面は板状。刃縁は両凸刃で、円刃である。刃こぼれ有り。	A-1 東 茶褐色砂層
	6	石斧	半磨	片刃	破損 53 25 13	22	玄武岩	平面は楕円、断面は不明。刃縁は弧状で片刃である。表裏面に研磨が施されている。側面にも研磨が施されており、稜を形成しているが、破損のため、全体形は不明。定角式石斧である。	A-1 (西) 白色枝サンゴ
	7	石斧	半磨	不明	頭部 73 48 30	190	片状砂岩	平面は半楕円、断面は棒状。破損のため全体形は不明。	A-1 西白色枝サンゴ
	8	石斧	打製	両刃	破損 80 34.4	465	砂質片岩	平面は方形、断面は柱状。全体に打ち割り痕が見られる。両凸刃であるが刃縁がはっきりしない。	IWXD-59-011113
	9	石斧	打製	片刃	完形 62 63 13	100	輝石安山岩	平面は楕円形、断面は板状。刃縁は片刃で偏刃である。自然礫を打ち割って作成しているが、作成途中か？	A-1 東 茶褐色砂層
	10	石斧	打製	片刃	完形 85 83 19	80	角閃岩	平面は短冊形、断面は偏平。刃縁は片刃で偏刃である。表裏面に粗い打ち割り痕が見られる。	A-2 南東隅崩落土 (暗灰褐色粘性砂層)
	11	石斧	打製	不明	破損 65 48 15.9	62	片岩砂岩	平面は方形、断面は偏平。表裏側面に打ち割り痕が見られる。破損のため全体形は不明。	A-1 W X層 D2
	12	敲き石	半磨	転用	完形 85 45 23	170	角閃岩	平面はバチ形、断面は楕円形。刃こぼれにより敲き石に転用されている。全ての面に敲打痕が見られる。側面の敲打痕が特に強い。	B-3 旧表土

表29-2 石器観察一覧

第53図(図版40)	13	敲き石	半磨	転用	完形	91 57 30	330	角閃岩	平面はバチ形、断面は楕円形。石斧から転用。上下側面に敲き痕がある。	B-3 旧表土
	14	敲き石	円礫	楕円形	完形	63 55 13	90	角閃石安山岩	平面は楕円、断面は柱状。円周に敲打痕が見られる。	A-1 東 茶褐色砂層
	15	敲き石	円礫	楕円形	完形	72 55 42.7	253	角閃石安山岩	平断面共に楕円形。上下に敲き痕が見られる。	A-3 白黄色土
	16	敲き石	円礫	楕円形	完形	62 51 15.4	185	角閃石安山岩	平面は楕円形、側面は板状。上下面に打割痕が見られる。	IWXD-59 011113
	17	敲き石	円礫	隅丸方形	完形	71.7 98.5 56.9	650	砂岩	平面は隅丸方形、断面は台形。上面に指に合わせるかのような凹みが生連状に連なっている。下面には若干凹みが見られる。敲打痕は弱い。	B-1
	18	敲き石	円礫	円形	完形	59 56 44.5	210	斑レイ岩	平面は円形、断面は楕円形。表裏面に敲き痕がある。	A-1(西) 白砂
第54図(図版41)	19	敲き石	円礫	球	完形	65 59 55.9	340	片状砂岩	平断面共に球形。全面に敲き痕が見られる。特に上下側面が著しい。	A-3 灰白色砂層
	20	敲き石	円礫	球	完形	58 53 52	220	細粒砂岩	平断面共に球形。裏側上下面に敲き痕が見られる。	A-3 灰白色砂層
	21	敲き石	円礫	球	完形	56 54 46.8	180	細粒砂岩	平断面共に球形。全面に敲き痕が見られる。	A-3 白砂
	22	磨り石	円礫	球	完形	53 50 46.8	150	砂岩	平断面共に球形。全面に敲き痕が観られ、磨痕は部分的にしか観られない。	A-3 黄色砂質土
第55図(図版42)	23	磨り石	円礫	球	完形	114 100 53.3	969	砂岩	平面は円形、断面は楕円形。表裏面に磨痕、周縁には敲打痕が観られる。	A-3 黄色砂層
第54図(図版41)	24	磨り石	円礫	球	完形	69 62 47.4	290	片状砂岩	平面は球形、断面は楕円形。川原石をそのまま使用している。周縁には敲き痕が観られる。	A-3 黄色砂層上面
第55図(図版42)	25	石皿	半磨	不明	破損	137 115 193	290	片状砂岩	平面形は不明。断面は柱状。表面は研磨が施されている。裏面は自然面だが、打ち割られた跡が残る。破損のため全体形は不明。	A-1(西) 白砂
	26	砥石	半磨	三角形	破損	104 115 23.1	280	凝灰岩	平面は三角形、断面は柱状。表面に研磨が施されている。また、表面には他の石器を研いだと思われる跡も見られる。	A-2 暗褐色砂質土(溝?)
第54図(図版41)	27	石錐	自然	錐	完形	119 26 24.9	60	細粒砂岩	平断面共に錐状。先端部は摩耗している。自然石をそのまま流用か?	A-1西 X層 D29
	28	用途不明	磨製	方形	完形	81 68 38.9	330	砂岩	平面は方形、断面は楕円形。全面に研磨が施されている。側面が少し凹んでおり、上面に敲き痕が若干見られる。	A-3 黄色砂質土

表30 石器出土量

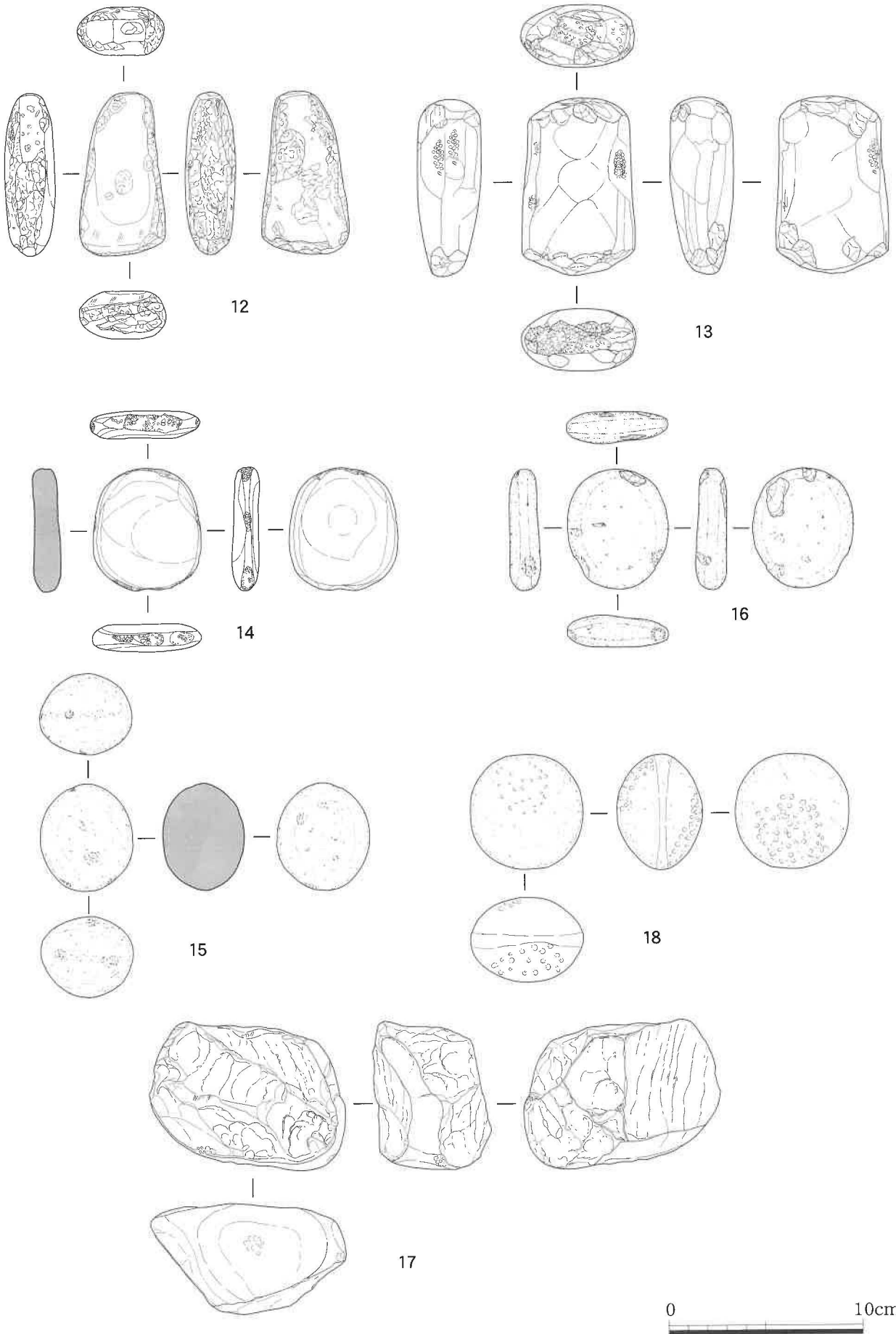
器種	石斧																		敲き石					凹み石	磨り石					石皿		砥石	石球	石錐	用途不明		石器片						計
	磨		半磨			打		半磨	円礫						円礫	円礫					半磨	半磨	円礫	自然	磨	半磨			円礫														
	両刃	片刃	両刃	片刃	不	片刃	不	転用	円	楕円	半楕円	隅丸	球	不	方形	円	楕円	球	方	三角状	不	不	不	三角形	楕円	錐	方	柱	方	三角状	楕円	不	楕円	有孔									
A-1	白砂								1																											2							
	(西) 白色枝サング				1	1																											2			4							
	(西) 淡灰白色砂層(礫)														1													1							2								
	(西) 淡灰白色粗砂枝サング層									1																									1								
	(西) 南東サブトレ 砂利混じり荒砂砂層																															3			3								
	(東) 茶褐色砂層				2		1		1		1													1								1	1	1		9							
	褐色土層	1																																	1								
淡黄褐色砂層																					1											1			2								
A-2	南東隅崩落土 (暗灰褐色粘性砂層)				1																														1								
	畦除去		1																																1								
	暗褐色砂質土(溝?)																							1											1								
	白色砂層																											1					1		2								
	淡灰白色砂層																															1			1								
	淡灰白色砂層 X II																														1			1									
	EL=2.084m																				1													1									
	EL=2.115m				1																														1								
	EL=2.115m																		1																1								
	EL=2.116m																																1			1							
EL=2.132m																															1			1									
EL=2.198m														1																				1									
A-3	表探																															1			1								
	黄褐色砂質土																																		1								
	明黄色砂質土					1																			1										2								
	白砂礫									1		1																							2								
	白黄色砂													1																					1								
	平面清掃(台風16号後)																																		1								
	黄褐色砂利(枝サングを含む)									1																									1								
	黄色砂質土																																		2								
	白黄色土										2																									2							
	灰白色砂層																																			3							
	白砂																																		1								
黄色砂層上面																																			1								
黄色砂層																																			1								
EL=2.244m																																			1								
A-6	東茶褐色砂層				1																														1								
B-1	B-1																																1		2								
B-3	旧表土								2																										2								
B-4	白砂層																															1			2								
不明	1WXD-59-011113								1																										2								
	1WXD-201113-400								1																										1								
	1WXD-29-011113																																		1								
不明	不明																																	2									
小計		1	1	4	2	2	1	2	3	2	8				1	1	2	2	1	1	1		4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	7									
中計		2		8			3				18				1			8				4	1	1	1	1				21			3										
合計				13							21				1			8				4	1	1	1	1	1				24			75									



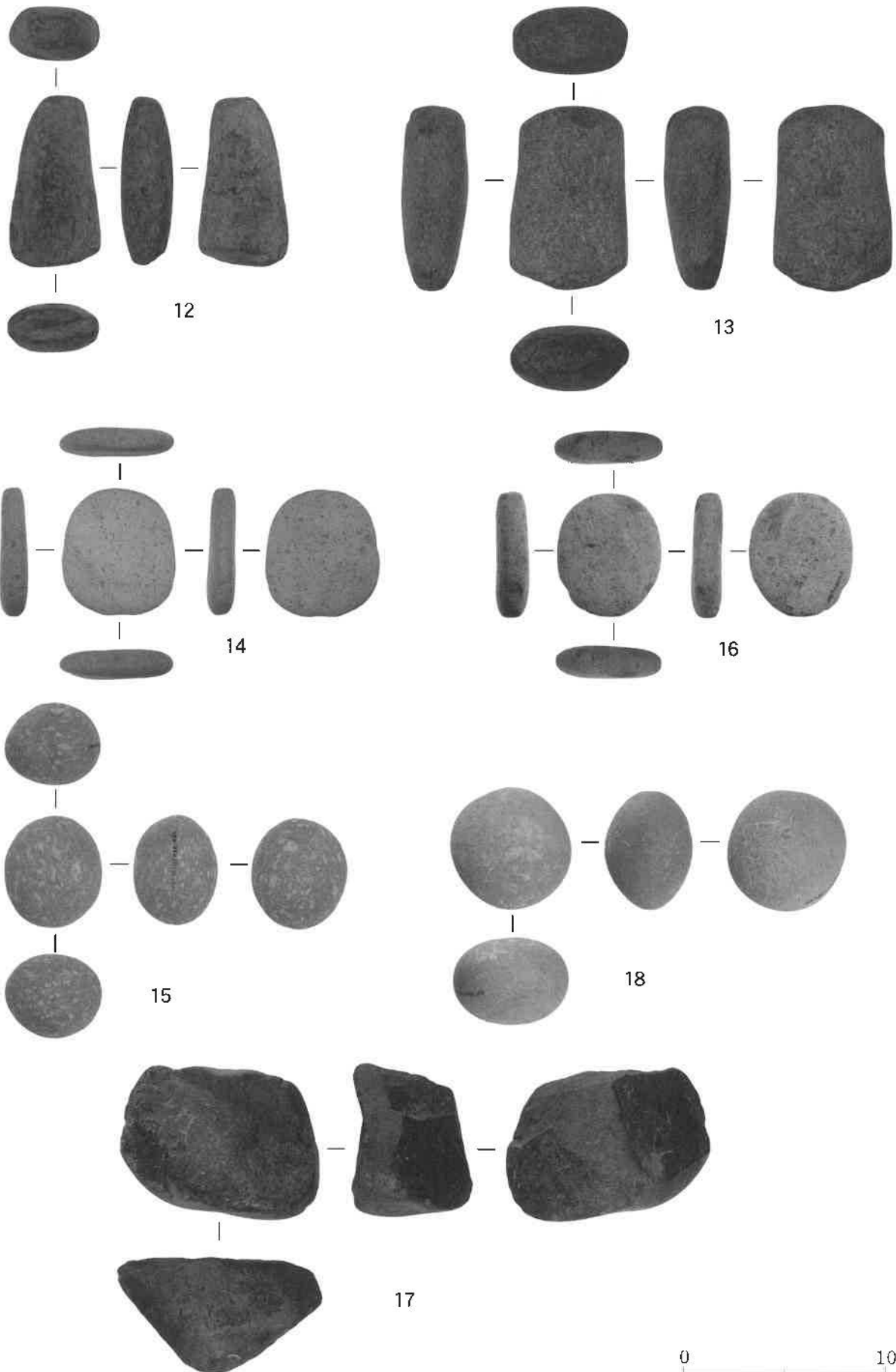
第52図 石器1 (石斧)



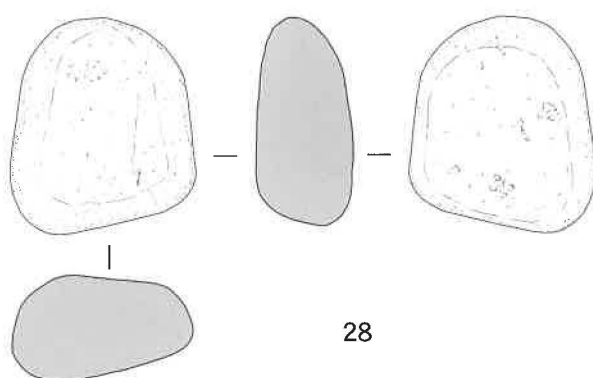
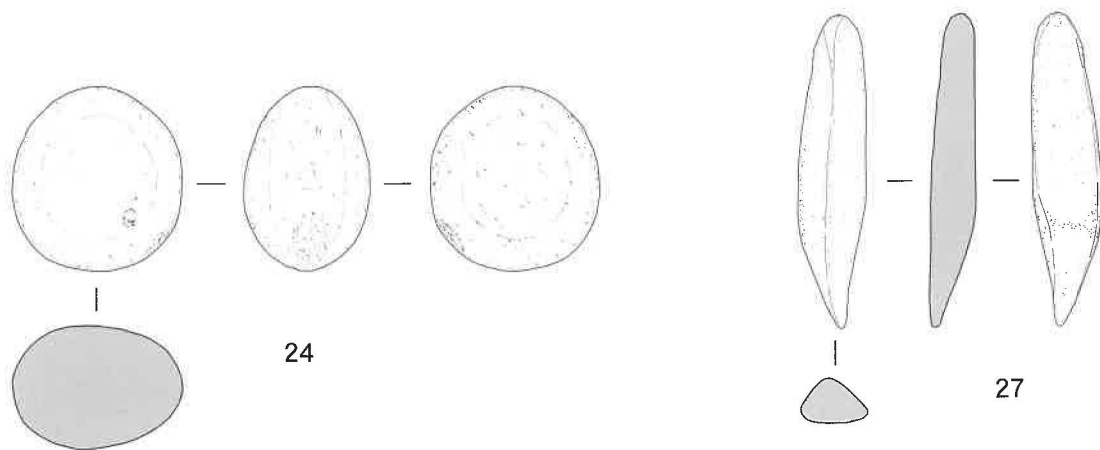
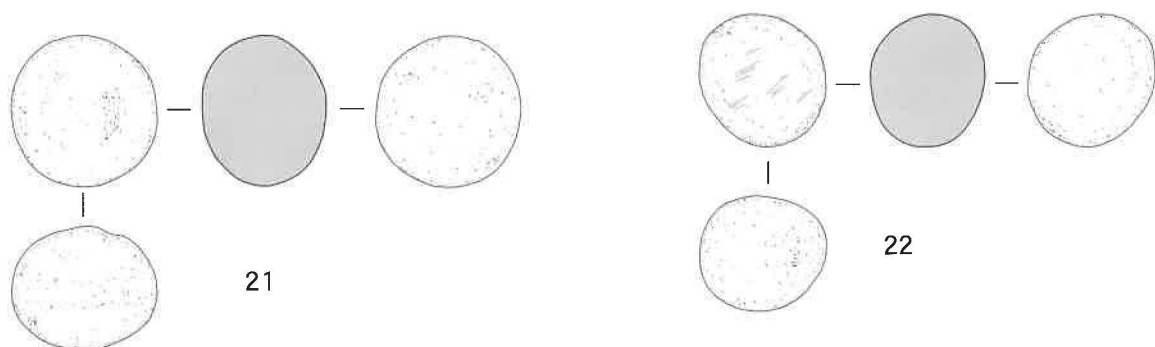
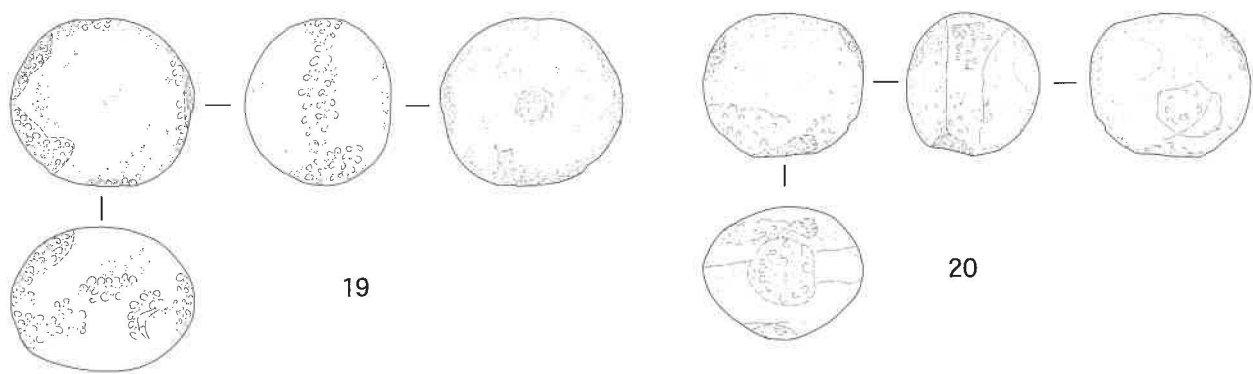
図版39 石器1 (石斧)



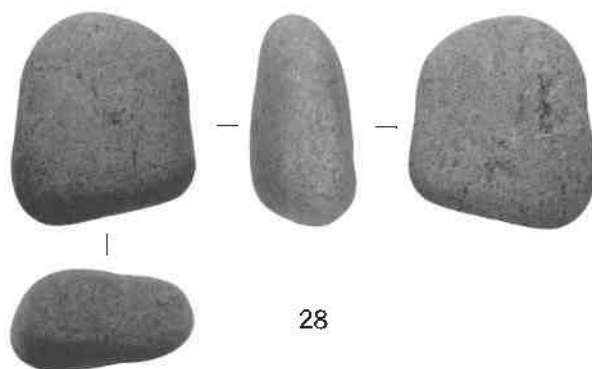
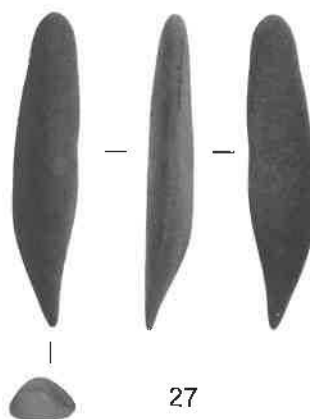
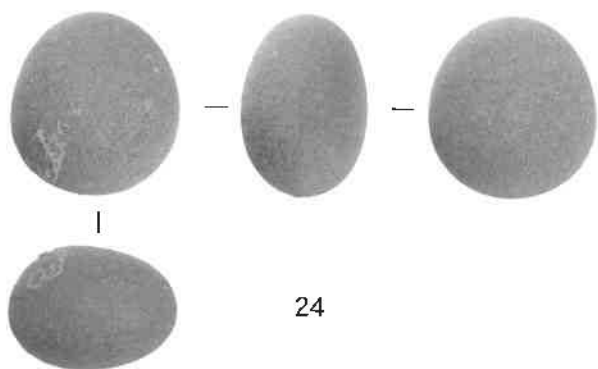
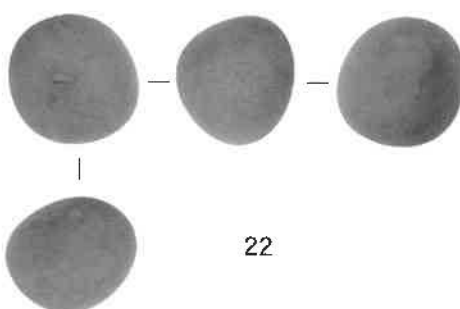
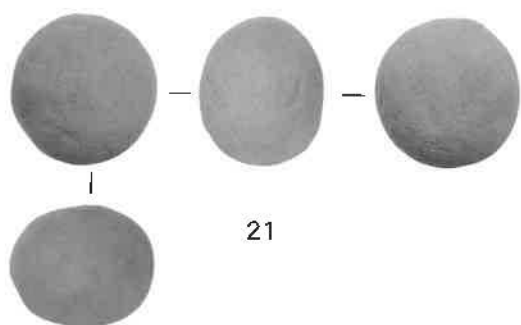
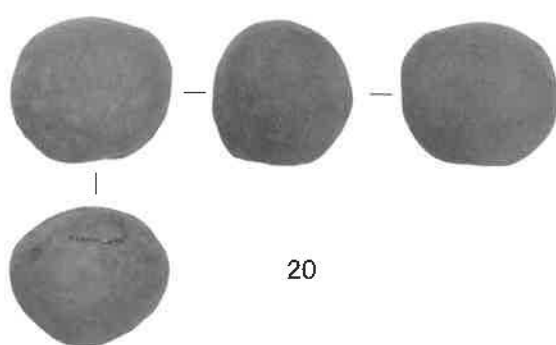
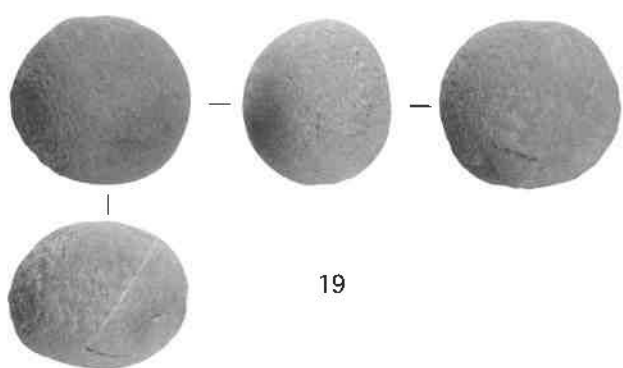
第53図 石器2 (敲き石)



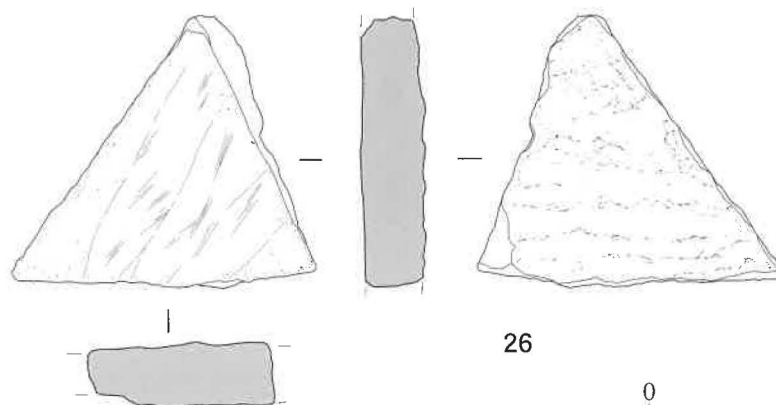
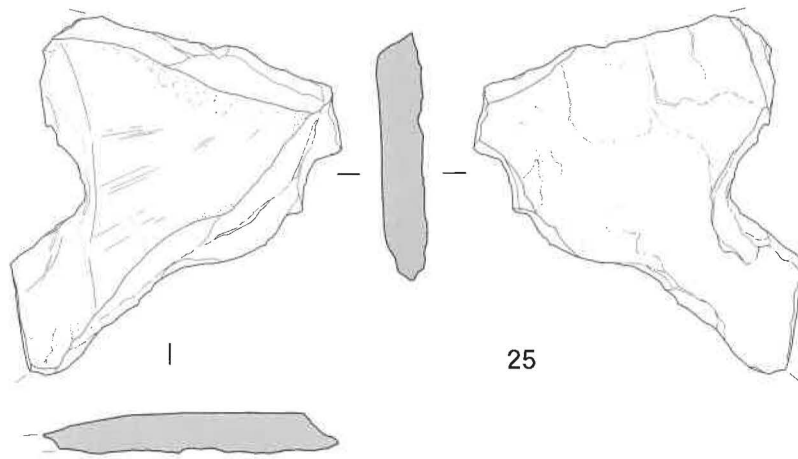
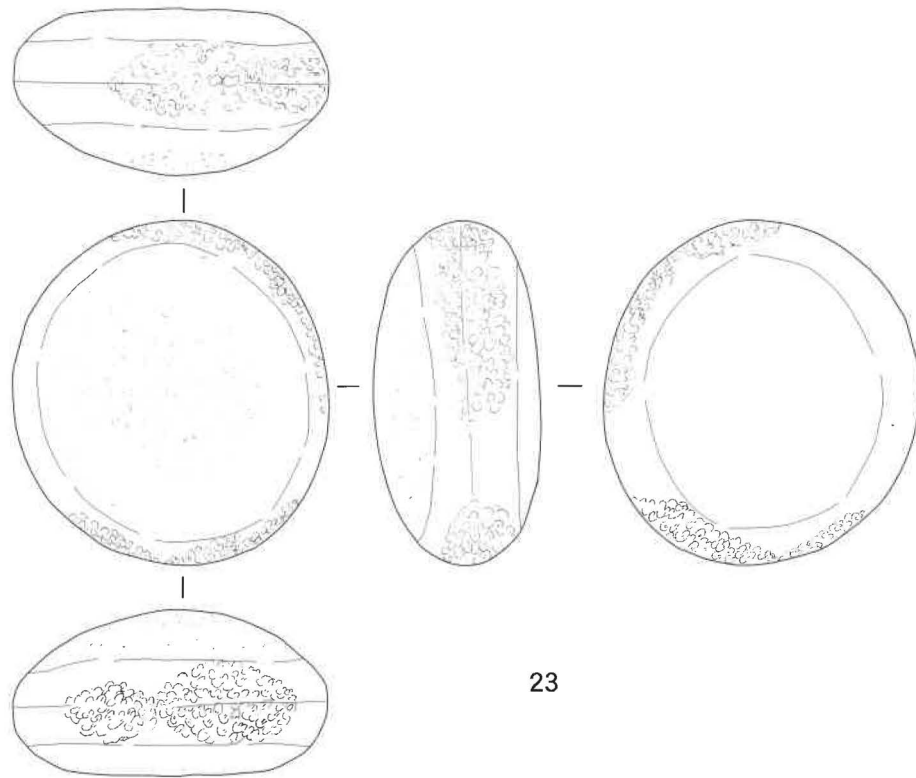
図版40 石器2 (敲き石)



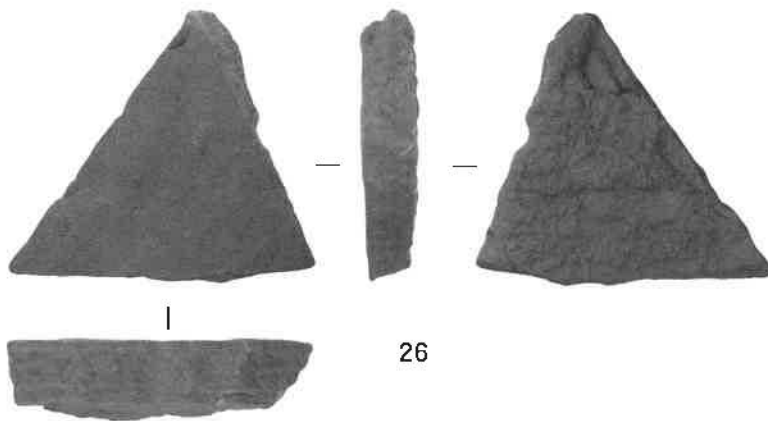
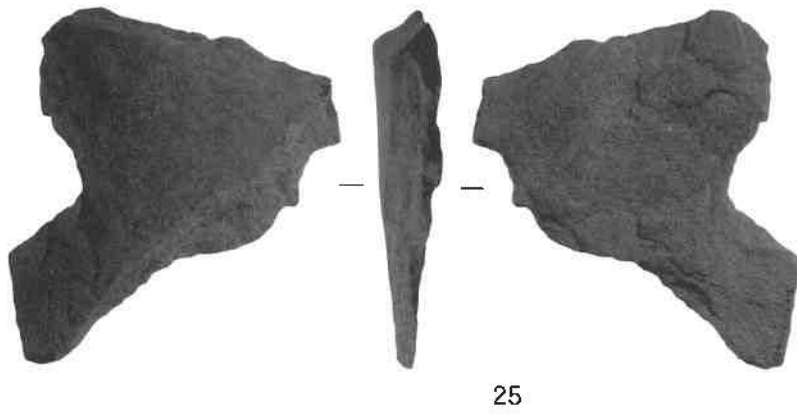
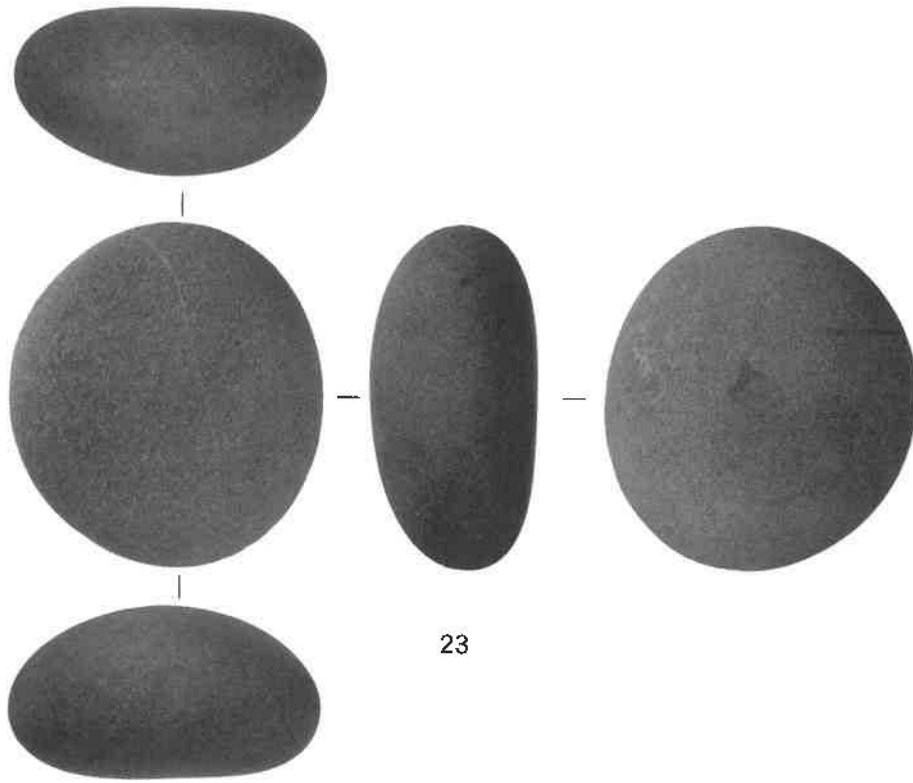
第54図 石器3 (敲き石・磨り石)



図版41 石器3 (敲き石・磨り石)



第55図 石器4 (磨り石・石皿・砥石)



図版42 石器4 (磨り石・石皿・砥石)

3. 貝製品

貝製品およびその未製品は57点出土した。

貝輪、垂飾品やその未製品を装飾品、二枚貝有孔製品などの実用品に分類される。

装飾品

a. 貝輪

・オオツタノハ

図1はオオツタノハガイの貝輪である。

全体の3分1を破損するが、図上復元すると大きさは78mm×55mmの楕円形となる。

表面は腹縁部分に大きなアバタが見られ、裏面の縁も破損する。内縁は摩耗するが、縁の厚さはやや均一である。A-2暗褐色砂質土層の出土である。

・メンガイ類

図2はメンガイ類の腹縁を幅11mmで均一に残したもので、これまでの例から貝輪の未製品と思われるものである。内縁は打割調整が複数確認される。表面の殻頂近くにヘビ貝付着する。

A-3白砂の出土。

・ゴホウラ

図3はゴホウラ背面型の貝輪で、破損品である。螺塔部が残存し、縁幅は20mmで、研磨は顕著で円味を帯びる。

図4はゴホウラの背面を利用した貝輪で、破損品である。背面部分をくりぬき、水平に研磨加工し、外縁は摩耗し、円味を帯びる。貝殻は径3mmのアバタがかなりあり、貝輪として使用したか、あるいは製作途中で破棄した可能性も考えられる。A-1西白色粗砂層の出土である。

b. 未製品

・ゴホウラ

図6はゴホウラの背面を用いたもので、完形である。

背面にヘビ貝が付着する。

裏面は貝の成長線で剥離し、自然のものと思われる。しかし、表面はヘビ貝が削られていることから何らかの加工が加えられたものと思われる。A-1西淡灰白色砂層、EL=2.314mで出土。

図6の製品を図4と照合すると貝の大きさはほぼ同じであることから同品は貝輪の製作途中と推定される。

c. 垂飾品

図7はクロチョウガイの腹縁を弧状に切り取り、周縁を研磨、小孔を2個施したものである。形状から垂飾品と考えられる。表面は貝色が残る。孔は内→外にすり切りで穿孔される。A-3白砂層の出土である。

図8はスイジガイの突起を用いたものである。身の大きい体層側に孔を施し、ほぼ中程には横位に沈線文を6本施す、沈線文を一部圍繞し、やや摩耗するがほぼ全面研磨される。

孔は基部側に施され、片側から穿孔する。一見、刺突具にも似る。A-1白色枝サンゴ層の出土。

ホシダカラの殻底を用いたものが図9と図10の2例見られた。前者は完成品で、後者は製作途中の未製品と考えられる。

図9はやや長めの三日月状を呈するもので、縁には殻底の内唇部分の鋸歯が残る。殻は小さめでヤクシマダカラと推定される。殻の状態は悪く、アバタや石灰分付着する。径5mmの孔は中より上の部分に穿孔する。B-2白色砂層で出土。

図10は三日月に近いが、下縁は直線を呈し、孔は前述の図9と同じく中央より上位に位置する。加工は外面に複数の研磨面が確認でき、内面は折損部分を丁寧に研磨する。全体の形状は、最終的にはおそらく図9と同じく尖るものと思われる。殻は内面に石灰分が付着、アバタも見られる。側縁にはホシダカラの鋸歯が残る。

d. 三角状製品（未製品）

図11はシャコガイの腹縁に近い部分を三角形状に象り、その周縁を打ち割り調整したもので、伊波貝塚（島袋2000）などで出土する製品の未製品と思われる。表裏面は自然面が残る。A-1西淡灰白色砂層（粗砂）dot+No.80～EL=2.372mで出土している。

e. 符状製品

図12は幅16mmの板状に加工したもので、大型イモガイを用いたものと思われる。

イモガイの殻口を研磨するもので、特に裏面は研磨面が水平である。貝の成長線が明瞭に見られる。長方形と考えられる。A-2西灰白色粗砂層

f. 貝玉

小形のイモガイやマガキガイの螺塔部を円盤状に切り取り、玉状にしたものである。

本遺跡では4点出土した。

図13はマガキガイで螺塔部を利用したもので、全面の研磨が顕著である。表面は凸面、裏面は凹面を呈し側面は研磨が著しく明瞭な稜をなす。丁寧な作りで、浦添貝塚や古我地原貝塚でも類例が見られる。A-2黄色砂層の出土。

図14はアバタ、風化が著しく、殻頂を利用した孔の周辺も自然摩耗の可能性が考えられる。

A-1西灰白色粗砂層の出土。

前者は明瞭な加工を呈するもの、後者は自然の摩耗のものである。2つのタイプがある。

実用品

g. 二枚貝有孔製品

二枚貝の殻頂およびその近くに15mm前後の粗孔を施すもので、本遺跡ではリュウキュウサルボウ4点、ヒメジャコガイ1点、カワラガイ3点、リュウキュウザルガイ3点、サメザラガイ1点、リュウキュウマスオ1点、シレナシジミ2点、ニッコウガイ1点の計22点出土した。

図15はリュウキュウサルボウでA-1西黄白色（粗砂）層貝取上。

リュウキュウザルガイ、カワラガイは貝殻が酷似し、孔の大きさも貝全体からは大きい。同じような用途が考えられる。

図22はシラナミに穿孔したもので、他の貝より肉厚で重い。孔は内→外に穿孔する。A-2灰色シルト層（シルト+赤色粗砂）の出土である。

図27はヒメジャコガイの前背縁に剥離調整するもので、その長さは35mm程度である。類例が無く、人工品か自然かは明瞭でない。A-1西黄白砂質層①（粗砂）の出土である。

・シレナジジミ

シレナジジミのほぼ中央に穿孔するもので（図23、24）の3点出土している。

本貝は貝殻のほぼ中央に穿孔するものが多く、そのまま、他の貝と同様、網の錘とすべきか後述する貝刃の可能性も否定できない。また、新たな用途を持つものかは現在のところ判断できない。

bタイプ：図25は二枚貝の有孔ではあるが孔の大きさが6mm前後で、前述の二枚貝有孔製品とは異なるものと思われる。貝はサメザラガイで孔は内→外に穿孔され、形も楕円を呈するものである。孔の位置は上中でA-3黄色砂質土で出土。

h. 貝刃

シレナジジミの腹縁部分が剥離するもので貝刃とされるものである。

と有孔と無孔（図26）がある。

図26は腹縁の剥離が顕著で特に前背縁は直線状を呈する。

i. スイジガイ製品

スイジガイの突起の一つを研磨するものである。

図28はスイジガイの背面を破損し、腹面に孔を施すものである。突起①は先端を研磨加工するが、突起のほとんどが打ち割られている。A-2 EL=2.208m（dot取上）で出土。

図29のスジガイの腹面には孔がみられない。

小結

貝製品の中には、海につかっていたせいか、アバタや白色になったものが多い。

図6のゴホウラの製品はこれまで貝皿と報告された例もあるが、今回図4の製品とあわせて考えるとゴホウラ製背面型の貝輪の未製品と判断される。つまり、図6→水平研磨→図4の貝輪を作るようである。縄文後期以前の製作工程と捉えることができる。

二枚貝有孔製品は貝の種類が多く、孔の位置も中ほどに穿孔されるものも見られ、網の錘以外複数の用途が考えられる。

《参考文献》

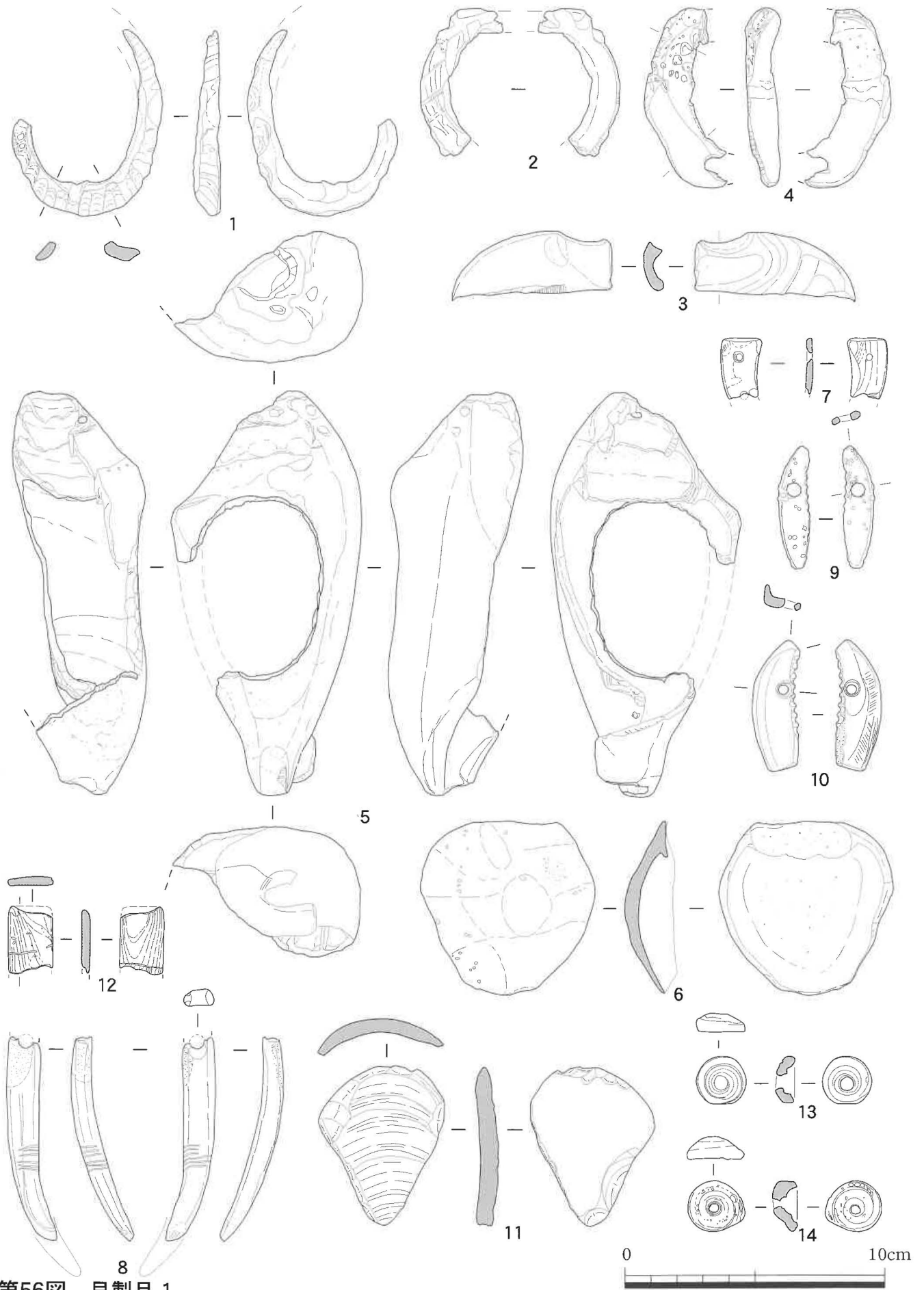
- 島袋春美「沖縄・奄美諸島における「骨製品」と「模造品」について」『琉球・東アジアの人と文化』（上巻）高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会 2000年

表31 貝製品出土量

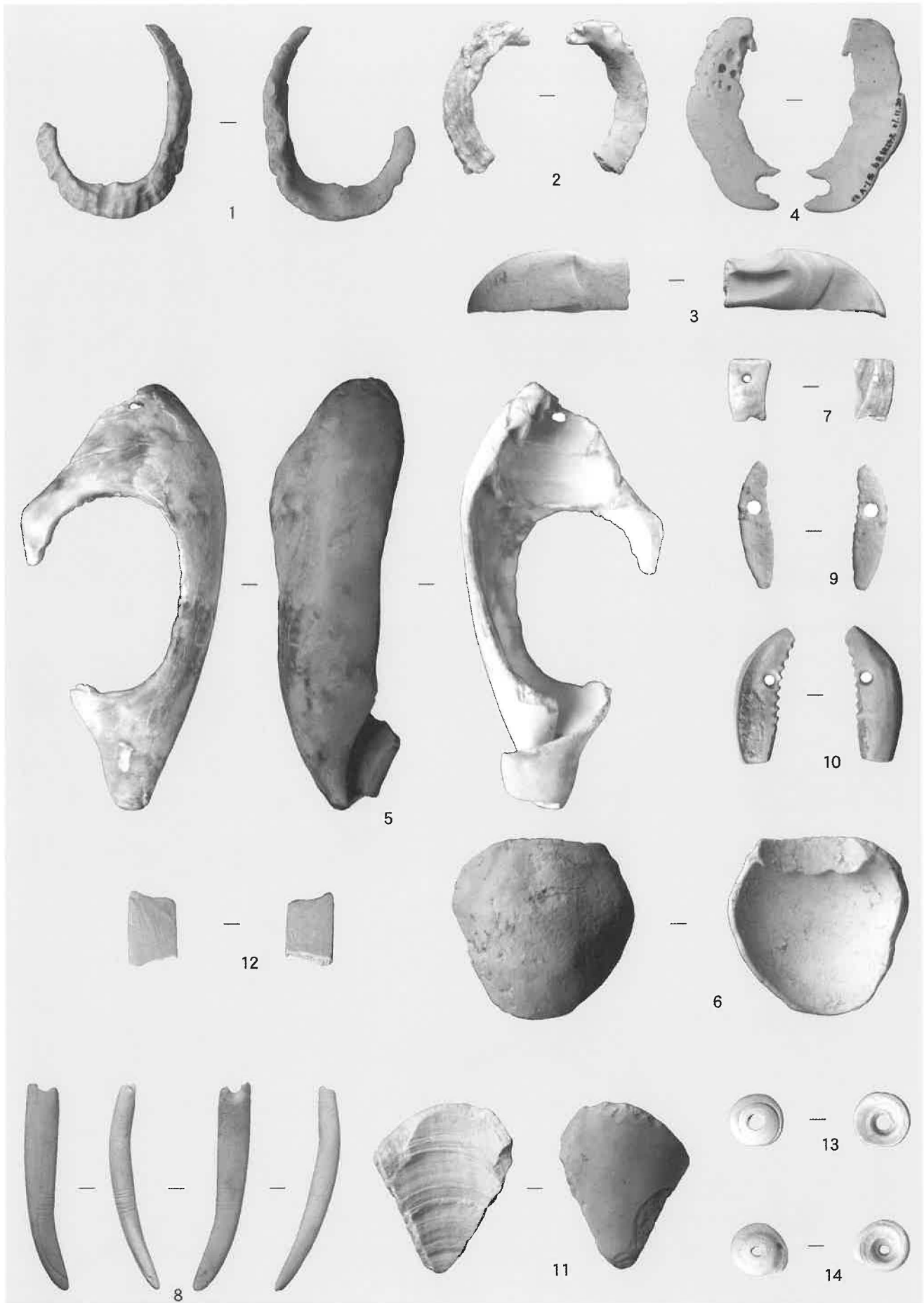
地区	層序	製品名 種類	貝輪		垂飾品			玉	円盤	タカイ ラ製 品(木)	二枚貝有孔製品							貝刃		有孔 製品	未製品				貝斧	符状 製品		不明		合計					
			オオツタノハガイ	ゴホウラ	メングイ類	スイジガイ	クロチョウガイ	ヤクシマダカラ	ホシダカラ	マガキガイ	イモガイ	ホシダカラ	カワラガイ	サメザラガイ	シャコガイ	シレナシジミ	リュウキユウザルガイ	リュウキユウサルボウ	リュウキユウシラトリ	リュウキユウマスオ	シャコガイ	シレナシジミ	リュウキユウマスオ	クロチョウガイ	シャコガイ	ゴホウラ	スイジガイ	ダイミヨウイモ?	クロフモドキ		ヤコウガイ蓋	大型イモガイ	オキシジミ	ゴホウラ	不明
A-1		淡灰白色砂												1																					1
A-1		灰白色粗砂層								1																									1
A-1		白色枝サンゴ					1																												1
A-1	西	淡赤褐色粗砂層										1					1																	2	
A-1	西	淡灰白色砂層						1															1	1							1	1	1	6	
A-1	西	黄白色砂質(粗砂)層							1					1	2			1	1													1	7		
A-1	西	緑色シルト質混じり黄白色砂質層(粗砂)																	1														1		
A-1	西	平面清掃																	1														1		
A-1	西	灰白色(粗)砂層		1				2																									3		
A-2		暗褐色砂質土	1																														1		
A-2	西	灰白色粗砂層																												1			1		
A-2		淡茶褐色砂																														1	1		
A-2		黄白色砂層(灰色シルト+黄色粗砂)						1			1																						2		
A-2		黄褐色砂層																									1						1		
A-2		白砂層										1										1									1	3			
A-2		白色枝サンゴ																															0		
A-2		灰色シルト層(シルト+赤色粗砂)												1																			1		
A-2		dot上げ														1								1									2		
A-2		EL=2.232m					1																										1		
A-2		EL=2.244m																1															1		
A-3		黄色砂質(土)										1																			1	2			
A-3		黄褐色砂層(灰色砂灰色シルト質混じり)										1																					1		
A-3		白黄色砂																							1								1		
A-3		白色砂		1		1					1				2										1								6		
A-3		白砂礫混じり													2																		2		
A-3		平面清掃(台風16号後)貝製品・土器										1		1																			2		
B-2		白色砂				1																											1		
B-3		茶褐色砂層																														1	1		
不明		表採・不明		2										1	1																		4		
合計			1	3	1	1	1	1	4	1	1	5	2	1	3	5	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	5	57	

表32 貝製品観察一覧

第 図 図版	挿 図 番 号	製品名	貝種	完形 破損	観察事項	縦 (mm)	横 (mm)	重量 (g)	孔縦 (mm)	孔横 (mm)	層序
第56図(図版43)	1	貝輪	オオツタノハガイ	破損	腹縁若干剥離。表面:自然、裏面:縁は破損。アバタ有り。内縁摩耗。縁はやや均一。	71	55	11.97	-	-	A-2 暗褐色砂質土(溝?)2001.08.22
	2	貝輪	メンガイ	破損	左。孔:内縁打割、縁11mmで均一。へび貝付着。貝殻の厚さは3.5mm。	58	12	7.47	-	-	A-3 白砂2001.08.29
	3	貝輪	ゴホウラ	破損	背面。表面:研磨、裏面:研磨凹面。貝殻は厚い。縁は研磨丁寧。円味を帯びる。	23.7	63.2	19.55	-	-	
	4	貝輪	ゴホウラ	破損	背面。表面:アバタ、径3mmと大きい。特に殻頂周縁に顕著に見られる。裏面:アバタあり。背面、水平に研磨、腹面は円味。	69	20	13.21	-	-	A-1西 白色粗砂層2001.11.20
	5	貝輪	ゴホウラ	破損		159	74	155	-	-	表採
	6	未製品	ゴホウラ	完形	背面。表面:へび貝、裏面:殻頂側剥離?。死貝。周縁はゆるやか。	67	67	41.63	-	-	A-1西 淡灰白色砂層EL=2.3142001.10.31
	7	垂飾品	クロチョウガイ	破損	腹利用。裏面:自然。貝色残。弧状に切り取り、周縁を研磨。穿孔方向:内→外すり切り。孔形:円形。孔位置:2カ所。	23	15.1	1.66	2.5	2	A-3 白砂2001.08.22
	8	垂飾品	スイジガイ	破損	突起。一見、刺突具にも似る。表面:6本横位に沈線文、一部圍繞。やや摩耗。ほぼ全面研磨。穿孔方向:片側から穿孔。孔形:円形。孔位置:貝の体層近く	79	12.7	14.07	-	-	A-1 白色枝サンゴ2002.01.24
	9	垂飾品	ヤクシマダカラ	完形	内唇の鋸歯残る。アバタ、石灰分付着。穿孔方向:外→内。孔形:円形。孔位置:中上	47.7	14.8	3.75	5.3	5	B-2 白色砂2001.12.14
	10	垂飾品	ホシダカラ	完形	殻底。表面:研磨一横位。裏面:石灰分付着。アバタが見られる。死貝を利用。鋸歯も研磨。側面一横位に研磨顕著。孔:両面すり切り	48	24.3	9.86	3	3	A-2 EL=2.232m
	11	未製品	シャコガイ	完形	腹:打ち割り。表面:自然。裏面:若干剥離。貝殻は厚い、7mm。周縁を剥離。主に外面から打ち割り。	62	48	28.83	-	-	A-1西 淡灰白色砂層(荒砂)2001.10.31
	12	符状製品	イモガイ	破損	殻口。裏面:水平に研磨。表裏面にアバタあり。表裏面とも丁寧に研磨、貝の成長線が明瞭に残る。貝殻の厚さは3mm。	26	16.3	3.34	-	-	A-2西 灰白色粗砂層2001.11.21
	13	玉	マガキガイ	完形	表面:研磨、裏面:研磨、凹面。アバタがある。縁は研磨のため、角が明瞭。研磨:顕著浦添貝塚に類似。穿孔方向:殻頂を研磨、側面は角を持つ。孔形:円形。孔位置:殻頂	18.8	18.9	4	5	4.3	A-2 黄色砂層?2001.10.03
	14	玉	マガキガイ	完形	自然の可能性が高い。表面:孔の周辺は摩耗か、裏面:自然摩耗。アバタ、風化が著しい。穿孔方向:殻頂のためとれる。孔形:円形。孔位置:殻頂	20	21.7	4.32	2.9	2.9	A-1西 灰白色粗砂層2001.11.22
第57図(図版44)	15	二枚貝有孔製品	リュウキュウサルボウ		左。複孔。表面:貝色残。貝殻は厚い。孔穿孔方向:内→外。孔形:三角形。孔位置:上中	55	74	40	9	9	A-1西 黄白色(粗砂)層貝取上2002.01.11
	16	二枚貝有孔製品	リュウキュウザルガイ	完形	右。穿孔方向:内→外。孔形:方形。孔位置:中右	46.1	38.8	7.79	12.8	9.9	A-3 白砂礫混じり2001.08.30
	17	二枚貝有孔製品	リュウキュウザルガイ	完形	右。複孔。穿孔方向:内→外。孔形:楕円。孔位置:上中	37.4	36.7	7.38	17.8	14.7	A-3 白砂礫混じり2001.8.30
	18	二枚貝有孔製品	リュウキュウザルガイ	完形	左。孔縁は打ち割り多し。穿孔方向:内→外。孔形:方形。孔位置:上中	49	46	11.77	18	19	A-3 白砂2001.08.29
	19	二枚貝有孔製品	カワラガイ	完形	右。複孔。穿孔方向:内→外。孔形:円形。孔位置:殻頂	44.25	40.03	12.6	14.25	15	A-3 白砂2001.09.05
	20	二枚貝有孔製品	カワラガイ	完形	右。表面:殻頂近く、アバタ。貝殻薄い。孔:貝の模様に沿う。穿孔方向:不明。孔形:円形。孔位置:上中	40	38	6.81	12	11	A-1西 淡赤褐色粗砂層2001.11.02
	21	二枚貝有孔製品	カワラガイ	完形	右。複孔。剥離。穿孔方向:内→外。孔形:楕円。孔位置:上中	49	45	14.11	16	9	A-2 黄白色砂層(灰色シルト+黄色粗砂)2001.11.01
	22	二枚貝有孔製品	シラナミ	完形	左。複孔。貝殻は厚い。穿孔方向:内→外。孔形:不定形。孔位置:後上	74	119	115.95	15	20	A-2 灰色シルト層(シルト+赤色粗砂)2001.11.22
	23	二枚貝有孔製品	シレナシジミ	完形	左。腹:若干剥離。表面:アバタ多し。穿孔方向:内→外。孔形:やや方形。孔位置:中中	65	82	45.79	21.2	22.2	A-1 淡灰白色砂EL=2.4172001.11.01
	24	二枚貝有孔製品	シレナシジミ	完形	右。腹縁剥離。表面:ややアバタ。貝殻は厚い。穿孔方向:内→外。孔形:円形。孔位置:上中	81	79	41.44	22	23	A-3 平面清掃(台風16号後)貝製品・土器2001.10.04
	25	二枚貝有孔製品	サメザラガイ	完形	左。腹縁4回の剥離。貝殻は薄い。複孔。穿孔方向:内→外。孔形:楕円。孔位置:上中	30	35	1.73	6	5	A-3 黄色砂質土2001.10.09
第58図(図版45)	26	貝刃	シレナシジミ	完形	左。腹縁剥離。表面:殻頂近く、アバタ。	77	78	37	-	-	A-1西 黄白色(粗砂層)貝取上2002.01.11
	27	貝刃	ヒメジャコガイ	完形	右。前背縁に剥離加工。色残り。	89	130	160	-	-	A-1西 黄白砂質層①(粗砂)2001.10.26
	28	未製品	スイジガイ	完形	表面:背面破損、裏面:孔穿孔。アバタが見られる。突起打ち割り。孔形:横楕円。孔位置:腹面	138	135	290	91	70	A-2 EL=2.208m(dot取上)A-3
	29	未製品	スイジガイ	完形	若干色残る。突起打ち割り。	155	72	197	-	-	白黄色砂2001.11.02



第56図 貝製品 1

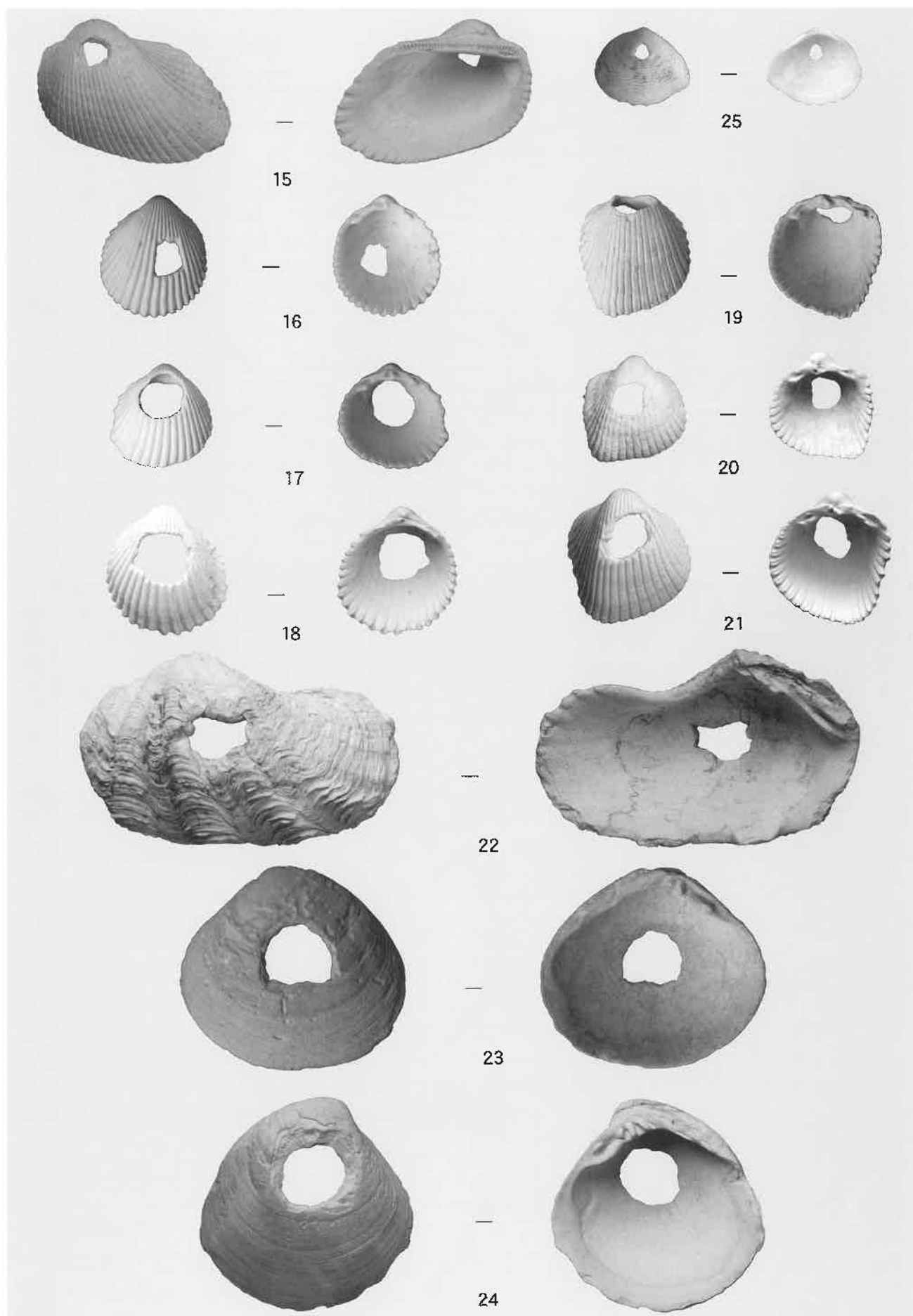


図版43 貝製品 1



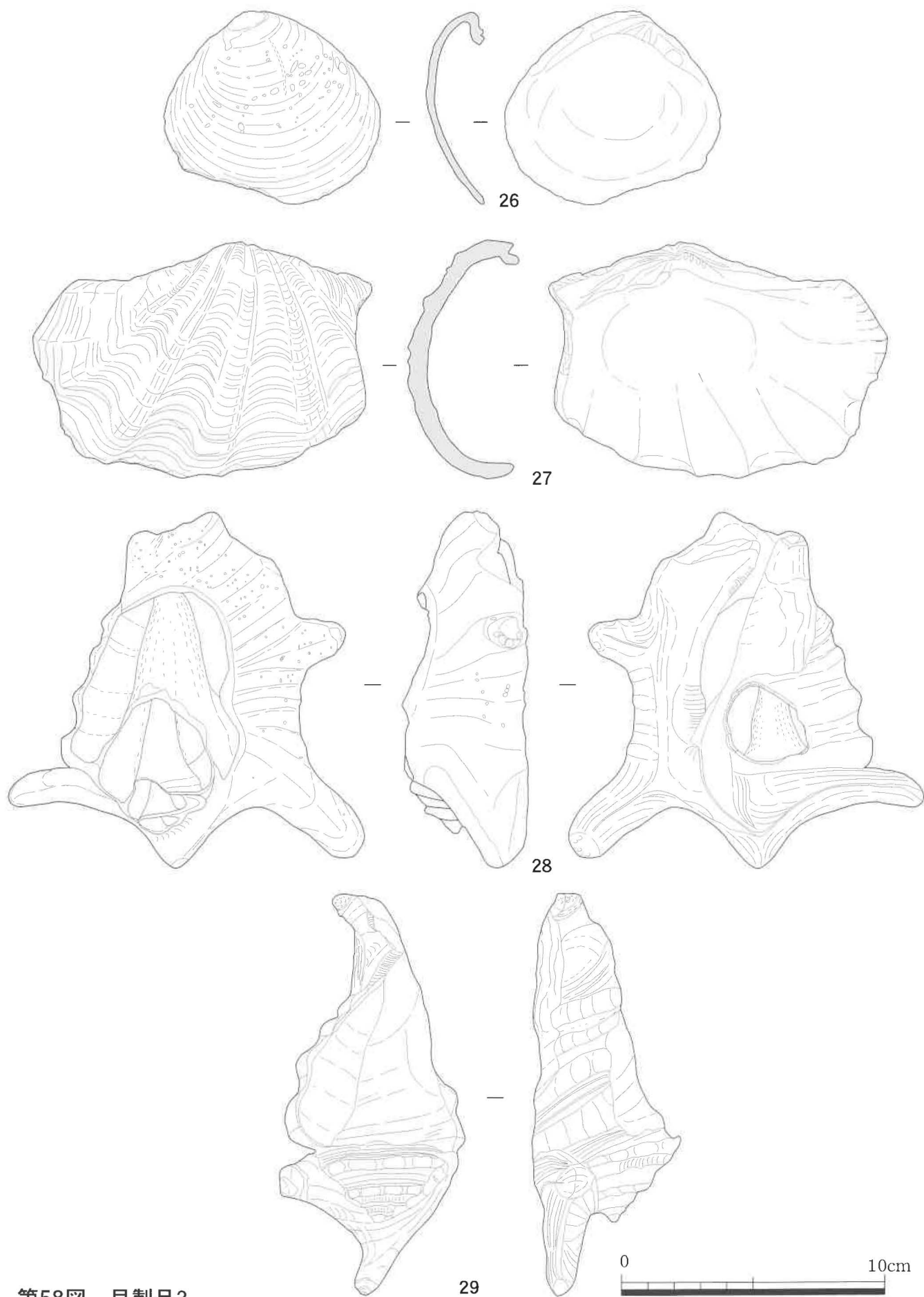
第57図 貝製品2



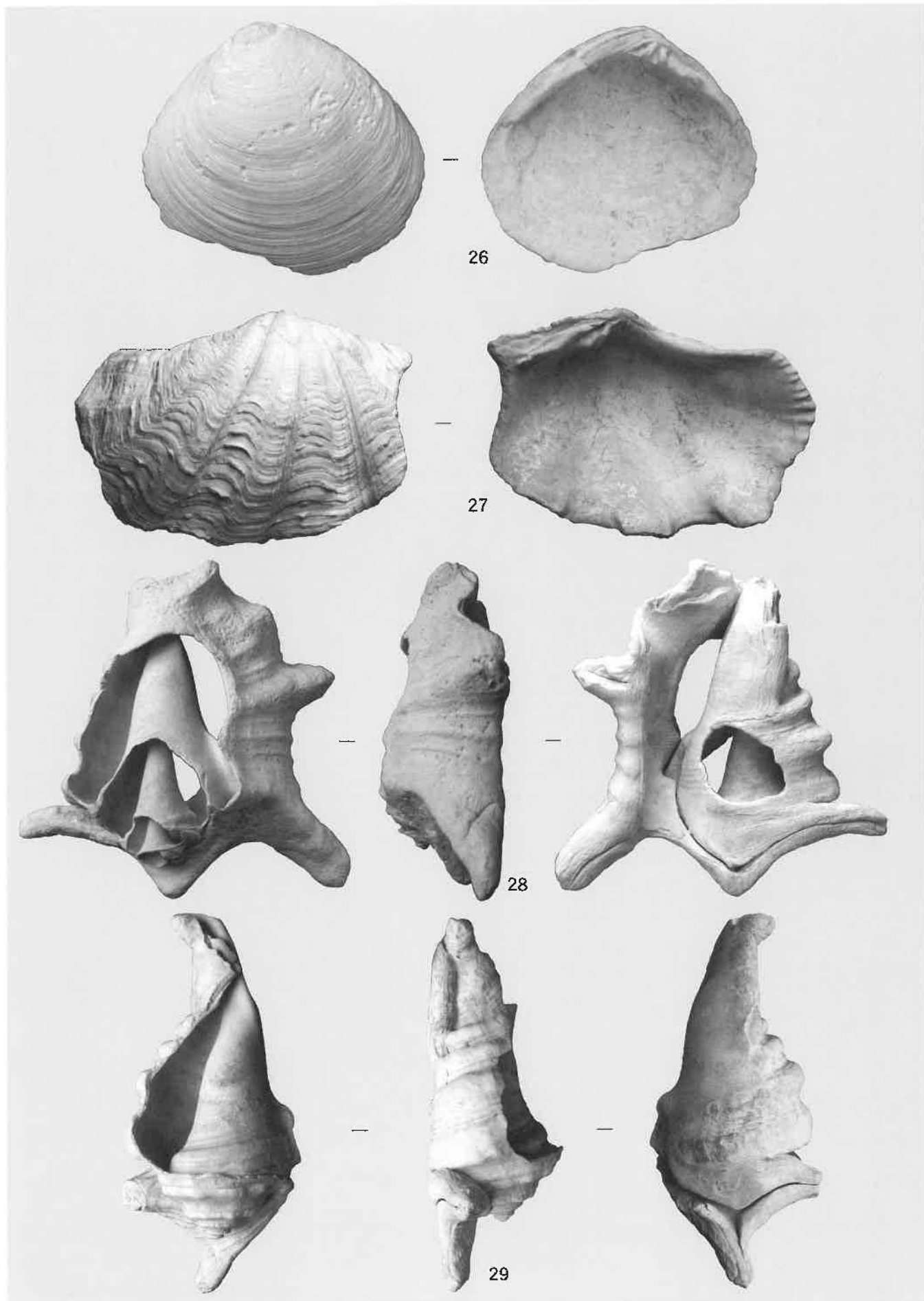


図版44 貝製品 2





第58図 貝製品3



図版45 貝製品 3

4. 骨製品 (図59・図版46)

クジラの未製品2点 (図1・2)、クジラ (図3) とイノシシの腓骨 (図4) の骨針がそれぞれ1点、板状製品1点 (図5) の5点出土した。出土地でみるとA-1で3点、A-2で1点、不明1点の出土である。

以下に遺物を略述し、観察一覧を表33、遺物を第59図、図版46に示した。

図1はクジラの骨を板状に加工し、さらに先端を尖らせたものである。頭部は方形に加工し、ほぼ中央に孔を穿つものと想定され、かんざしの未製品と思われる。

図2も前者と同様クジラの骨を利用したもので未製品である。略長方形を呈し、表・側面に削り痕が認められる。

図3のクジラの骨錐は石灰化し、白色あるいは灰色を呈する。針先の先端部分が反るのは、骨の自然の湾曲のようである。

図4はイノシシの腓骨を用いたもので、先端部分は折損し、円味を帯びる。未製品と考えられる。

図5は板状の製品で、表面は骨組織が密であるが、裏面は海綿組織が明瞭に見られる。イノシシの四肢骨の類を用いたものと思われる。

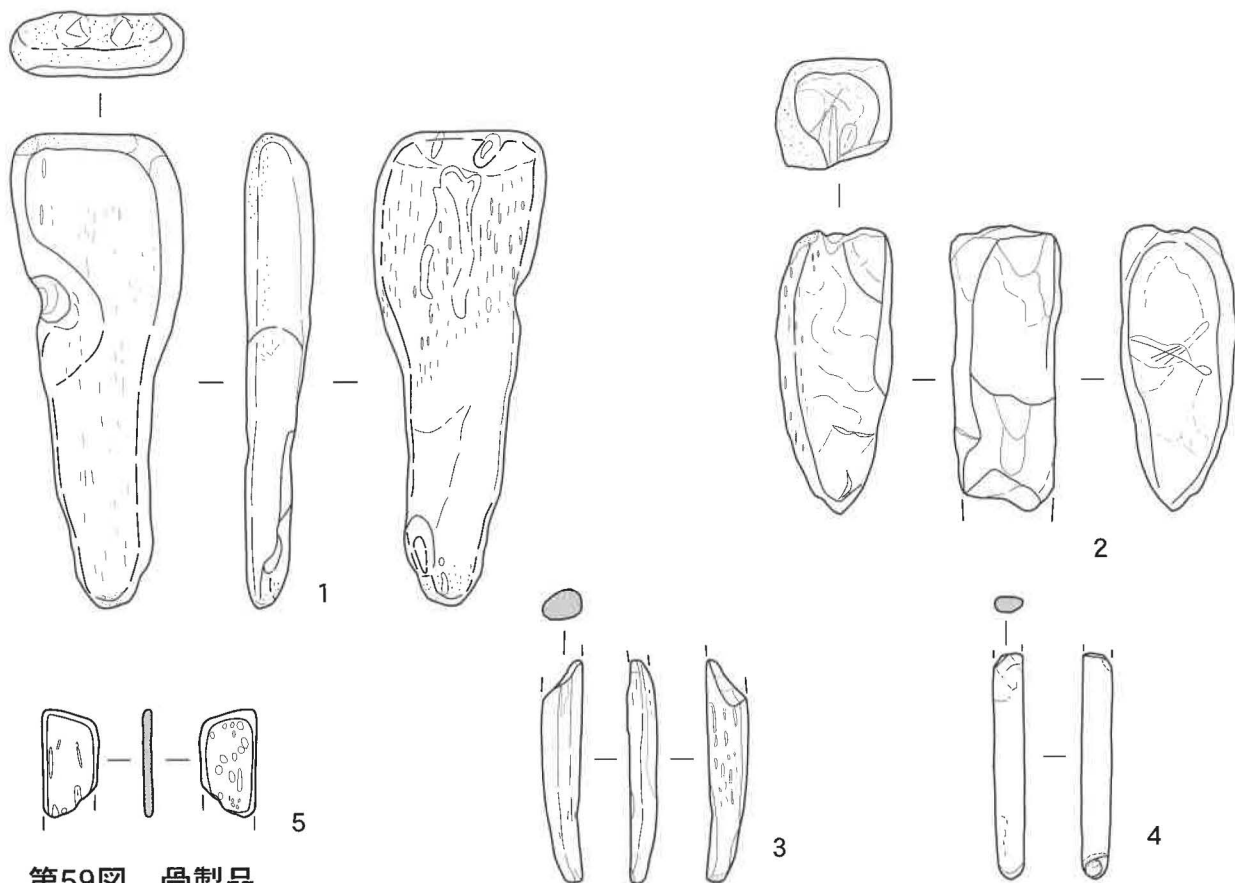
類例遺跡をみるとクジラのかんざしや骨錐は伊礼原遺跡 (2007)、古我地原貝塚など縄文後期など出土例がある。板状製品も伊礼原遺跡 (砂丘区) で出土している。

表33 骨製品観察一覧

第 図 図版	報 番 号	器種	部位	種類	部位a	計測	観察事項	出土地
第 59 図 (図 版 46)	1	かんざし	未製品	クジラ	椎体	長さ90.4mm 幅 31.8mm 厚さ10mm	頭部は方形。板状。横断面:長方形。乳色。表面:細かい、裏面:海綿組織粗い。	不明
	2	肋骨?	未製品	クジラ	肋骨	長さ54mm 幅 24mm 厚さ20mm	略長方形 板状方形乳色。表・側面に調整の為の削り痕。	A-1西 020123
	3	骨針	先端部	クジラ	椎体	長さ42mm 幅 7mm 厚さ6mm	先端は反る。棒状。横断面:楕円形。焼けたため灰色。表面:細かい、裏面:海綿組織粗い。	A-2 E.L=2270mm
	4	骨針	先端部	イノシシ	腓骨	長さ43mm 幅 5mm 厚さ3mm	棒状。先端を折る、摩耗。	A-1 020125
	5	板状	不明	イノシシ	四肢骨	長さ24mm 幅 10mm 厚さ1.5mm	隅丸方形。板状。横断面:板状。表面:細かい、裏面:粗い。	A-1

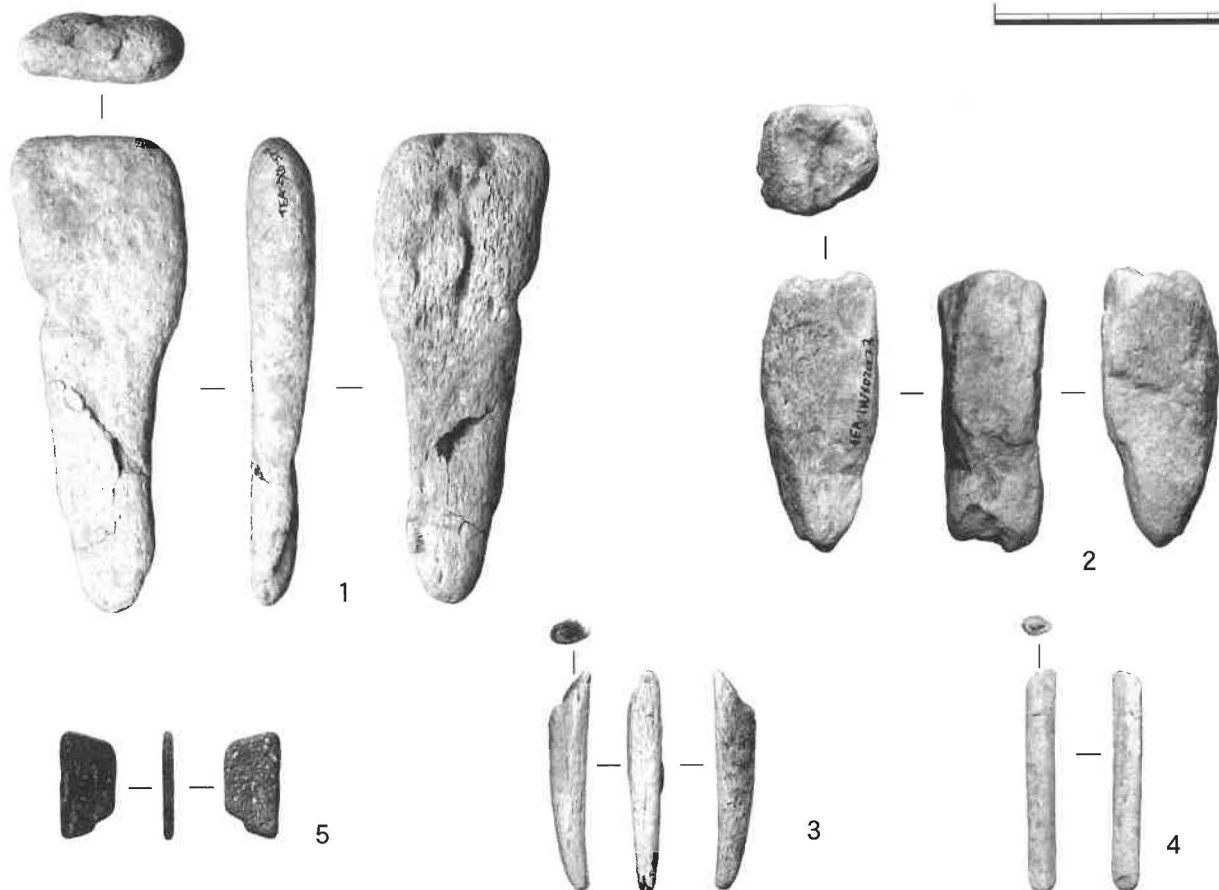
《参考文献》

北谷町教育委員会 『伊礼原遺跡一伊礼原B遺跡ほか発掘調査一』 北谷町文化財調査報告書 第26集 2007年



第59図 骨製品

0 5cm



図版46 骨製品

5. チャート（第65図・図版48）

本遺跡からは総計251点、重量3251.29g出土している。その内訳は、塊（礫・石核）54点、剥片が193点、製品としては、石鏃と礫を利用した敲き石の2点が出土した。この内、試掘調査（旧ロッジ跡）のチャートは石核が8点、重量166.9g、剥片が29点、重量127.5gで計37点、重量294g出土している。ここではトレンチ別チャート出土状況の表と図のみを呈示した。以下に平成13～14年度試掘の伊礼原E遺跡のチャート別の詳細を述べる。

a. 礫

礫は3点、重量614.2g出土している。最も大きいものは、300gでA-2枝サンゴ層で出土した。次に270g A-3黄色砂質土層（岩盤剥ぎ）、44.2g不明がある。

b. 石核

石核は53点、重量1807.2g出土している。最も大きいものは、250gでA-1（西）淡灰色砂層（礫）で出土した。最も小さいものは、0.3gでA-3黄色砂層で出土した。大きい順にみると190g、A-3灰色シルト層、120g、A-1（西）淡灰色砂層（礫）、105.7g、A-2 E L = 2.341m、72.5g、不明53.04g、A-2 E L = 2.102mである。

c. 剥片

剥片は193点、重量658.4g出土している。最も大きいものは、37.4gで出土地不明である。最も小さいものは、0.1gでA-2灰褐色砂層Ⅲから出土している。大きい順にみると32.4g、No.30、15.1g、A-2崩落土、14.9g、A-2 E L = 2.117m、12.9g、A-2 E L = 2.223m、12g、A-1（西）、10.8g、A-2淡灰白色砂層（礫）XⅡである。

d. 石鏃

石鏃は1点出土した。左が右より長く不均整な小型の石鏃である。細かい押圧剥離痕により形成されており良くできている。側縁からの整形角度が明瞭で、断面形は菱形を成す。無茎鏃で片足鏃であることから、どちらかの足に篋を付け使用していたと思われる。また、小型の石鏃であるためイノシシ等の大型の動物には致命傷を与えにくく、魚や小鳥等の小動物を狩猟の対象としていたとも考えられる。重量1.67gである。

e. 敲き石

平断面共に楕円形。上下に敲き痕が見られる。重量170gである。

小結

本遺跡をトレンチ別に出土数を見てみると、A-1トレンチが66点と最も多く、次いでA-2トレンチ60点、A-3トレンチ44点となった。最も少ないトレンチは、B-1トレンチ、試掘No.26トレンチ、試穴No.31トレンチで各トレンチそれぞれ1点ずつである。

重量では、A-2トレンチ930gが最も重く、次いでA-1トレンチ845g、A-3トレンチ804gである。出土量が少ないものは試穴No.26トレンチ4g、B-1トレンチ7g、TP-25トレンチ8gである。全体的に剥片の出土量が多く、製品は平成13～14年度試掘で出土した2点しか得られなかった。また、旧ロッジ跡の試掘調査では礫が出土せず、全て石核と剥片だけであった。

表34 チャート出土量 (個数)

グリッド	(石器の種類)	製品	礫	石核	剥片	計
A-1		0	0	17	49	66
A-2		1	1	15	43	60
A-3		1	1	5	37	44
B-1		0	0	0	1	1
B-3		0	0	1	1	2
不明		0	1	7	32	40
計 (個)		2	3	45	163	213

表36 試掘(旧ロッジ)チャート出土量(個数)

グリッド	(石器の種類)	石核	剥片	計
No.26		0	1	1
No.30		4	18	22
No.31		1	0	1
No.32		1	7	8
No.7		2	2	4
No.25		0	2	2
計		8	29	37

表35 チャート出土量 (重量)

グリッド	(石器の種類)	製品(g)	礫(g)	石核(g)	剥片(g)	計 (g)
A-1		0	0	670.09	174.85	844.94
A-2		1.67	300	454.66	174.2	930.53
A-3		170	270	266.63	96.98	803.61
B-1		0	0	0	6.98	6.98
B-3		0	0	30.64	4.15	34.79
不明		0	44.23	218.15	69.36	331.74
計 (g)		171.67	614.23	1640.17	526.52	2952.59

表37 試掘(旧ロッジ)チャート出土量(重量)

グリッド	(石器の種類)	石核(g)	剥片(g)	計 (g)
No.26		0	4.38	4.38
No.30		118.17	86.23	204.4
No.31		12.55	0	12.55
No.32		20.16	28	48.16
No.7		15.97	5.53	21.5
No.25		0	7.71	7.71
計		166.85	127.47	294.32

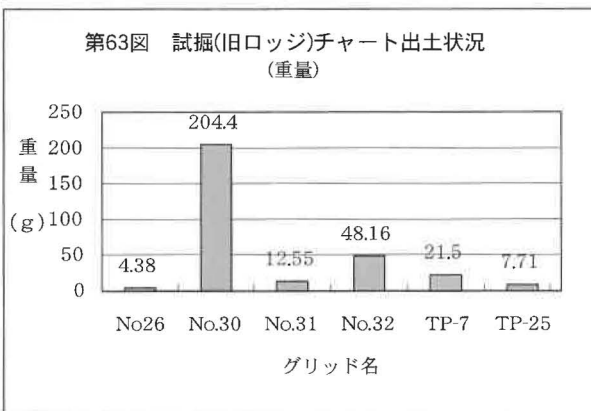
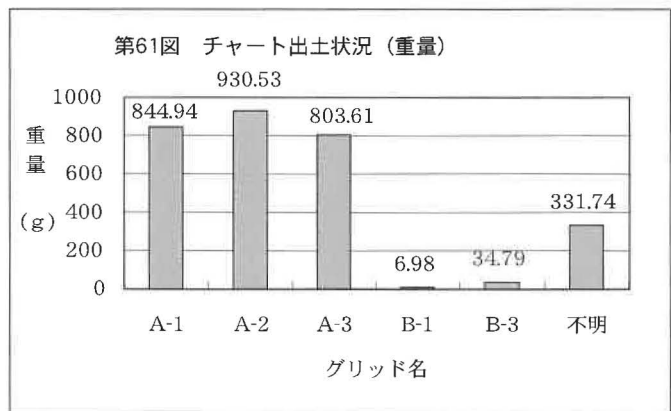
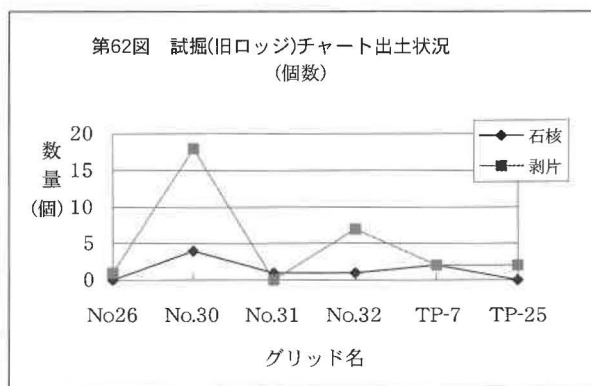
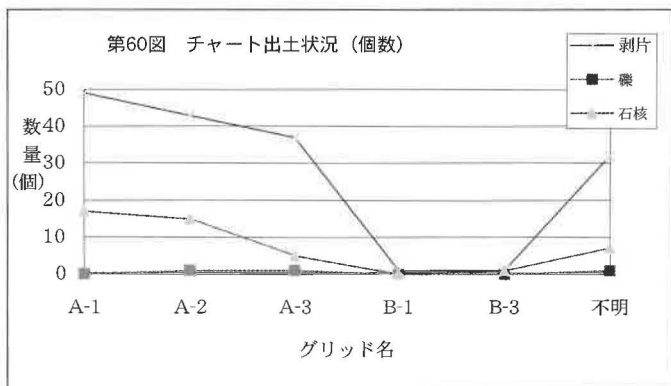
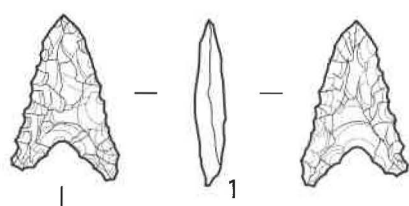
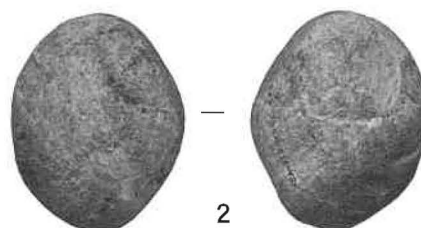
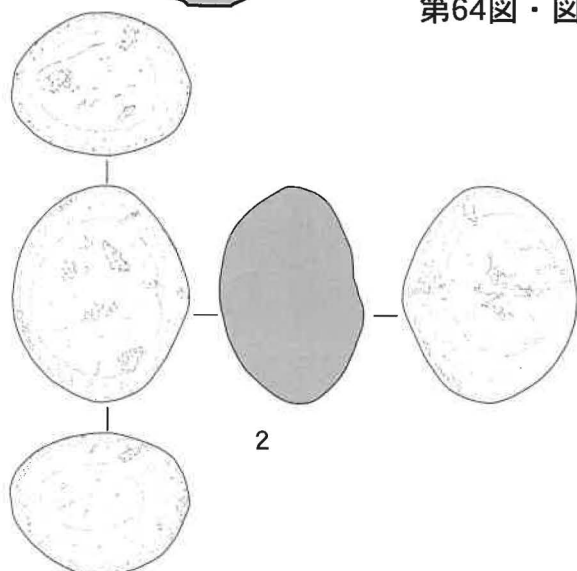


表38 チャート製品・チャート観察一覧

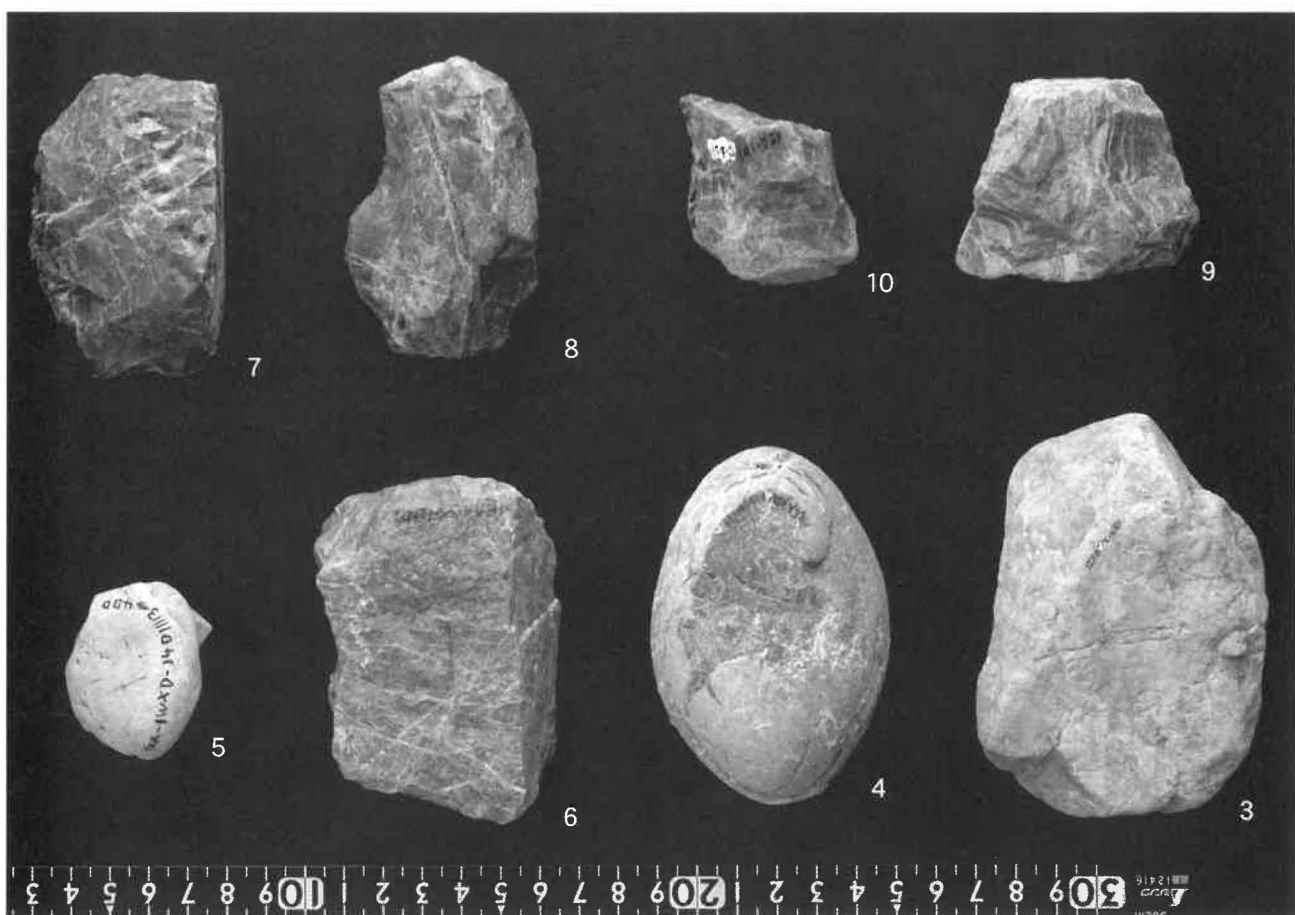
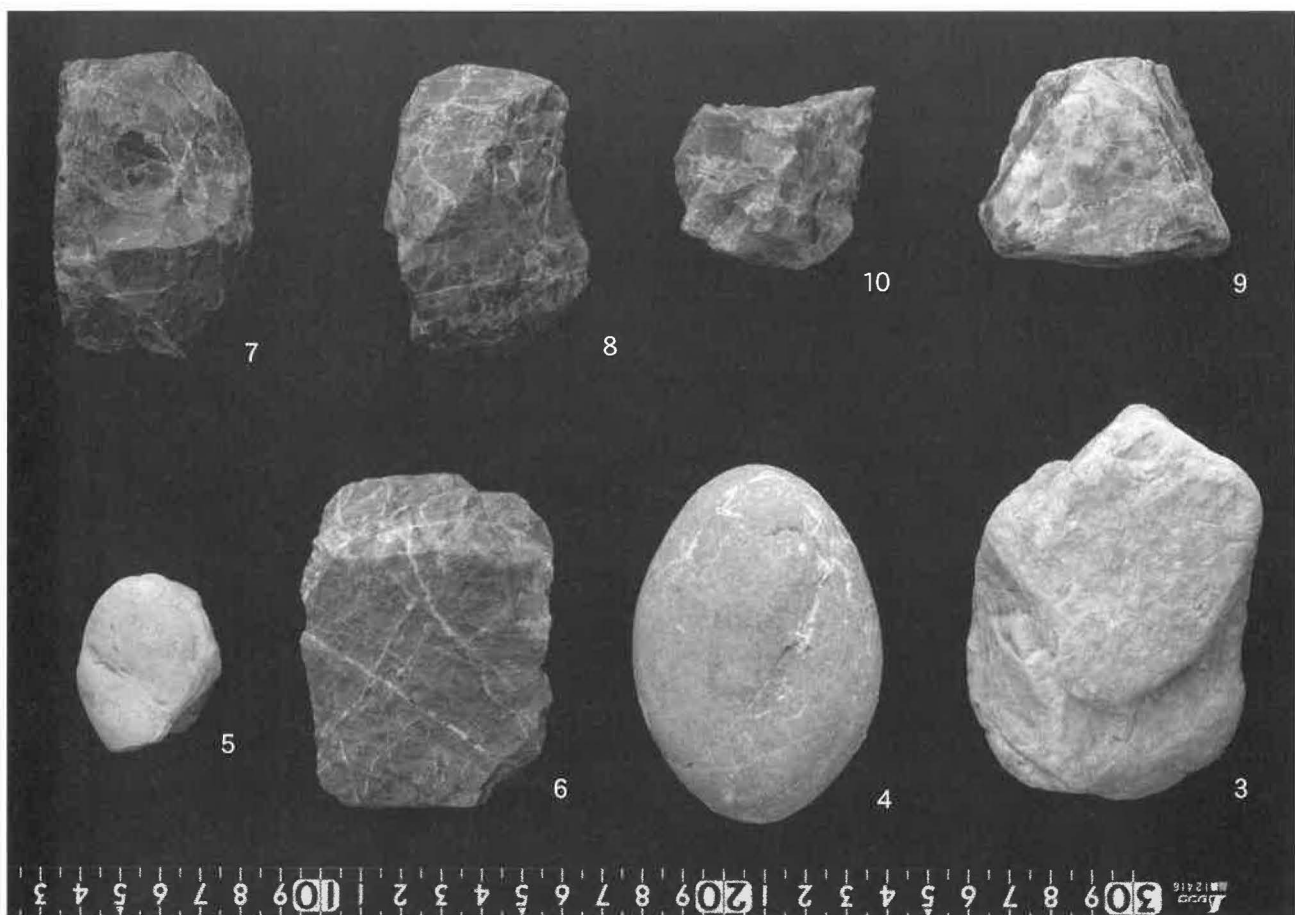
第図・図版	図番号	器種	縦(mm) 横(mm) 幅(mm) 重量(g)	観察事項	層序
(第64図・図版47)	1	石鏃	22.1 13.8 3.3 1.67	左が右より長く不均整な石鏃である。側縁からの整形角度が明瞭で、断面形は菱形を成す。使用チャートは、灰色を基調とするもので先端部から黒色、淡灰色、灰色の色調が観られる。	A-2 淡茶褐色砂
(第65図・図版48)	2	敲き石	59 47 46.4 170	平断面共に楕円形。礫石をそのまま利用したと思われる。上下に敲き痕が見られる。	A-3 白黄色土
図版49	3	礫	92.3 66.2 39.2 300	平面は長方形、断面は半楕円形。特に加工痕観られない。暗緑灰色。	A-2枝サンゴ層
	4	礫	80.9 57.6 42.3 270	平断面共に楕円形。裏面に剥離痕が観られる。暗緑灰色。	黄色砂質土層 (岩盤剥ぎ)
	5	礫	41.6 33.3 23.3 44.2	平断面共に楕円形。右側面に剥離痕が観られる。暗灰色。	不明
	6	石核	75 56 39 250	平面は略方形、断面は台形。加工は見られない。斜めに縞模様が走っており、一周している。灰色。	A-1西淡灰色砂層(礫)
	7	石核	68 48 39 190	平面は略方形、断面は楕円形。平裏面下部に剥離が見られる。暗灰色。	A-3灰色シルト層
	8	石核	65 50 28 120	平面は長方形、断面は半楕円形。縞模様が横位に走る。暗緑灰色。	A-1西淡灰色砂層(礫)
	9	石核	48 58 30 105.7	平面は台形、断面は逆三角形。左側面に剥離が観られる。灰色。	A-2 E L = 2.341
	10	石核	46.9 40.1 36.7 72.5	平断面共に五角形。縞模様が横位に走る。灰色。	不明



第64図・図版47 石鏃



第65図・図版48 チャート製品



図版49 チャート

第6節 Bトレンチ層序

Bトレンチは標高2.5cmの所に南北に10m×4mの細長いトレンチを東側（山手）に2本、西側（海側）に3本を設定した。

これらの試掘について第66図～第70図に示し、巻首図版7に示した。

以下、各層について略述する。なお、層名は第66図～第70図では調査時の表記を優先し、A・Bトレンチ共通の層の表記として①②③④・・・層としてまとめた。

①層：客土

米軍の基地建設に伴う造成土である。厚さ40～50cm程度で、B-1では西壁の南側に幅2m×深さ96cm鍋底状の大きな攪乱のあとが見られ、暗褐色砂質層、南壁に白色橙色砂質土（造成土）が見られる。

B-2では厚さ30cmで北側に深い掘り込み、B-3厚さ40cm北側で深い攪乱が見られる。B-4では厚さ30cmで東側から西側に僅かに厚くなる。また、西壁で攪乱の幅2m×深さ80cmの鍋底状の攪乱が見られ、その南側に長さ150cm×深さ30cmのコーラルが入る。

B-5では厚さ50cm程度で南壁に厚くなる。客土は赤土が含まれる部分もある。B-1とB-4で鍋底状の攪乱は溝状の遺構か排水溝と推定される。

②層：耕作土

暗茶色砂質土で、B-1で厚さ30cm程度であるが、東側には見られない。ほぼ中央から西側に見られ、南側に一樣に見られる。B-3では茶褐色砂質土、B-4淡黒色砂土である。西側は上部の攪乱の為に下部の白砂層（④層）の境はやや不安定である。

③層：淡茶・黒砂層

B-1・B-2では検出されなかった。B-3では南側に10cm程度の厚さでやや淡い茶白色砂である。西壁の底面でレンズ状に入り組んでいることから攪乱を受けていると思われる。B-4では淡黒色砂と淡赤褐色砂が見られる。上部の淡黒色砂は包含層の可能性が考えられ、下部の赤褐色砂は④層（白砂層）への漸次層と考えられる。

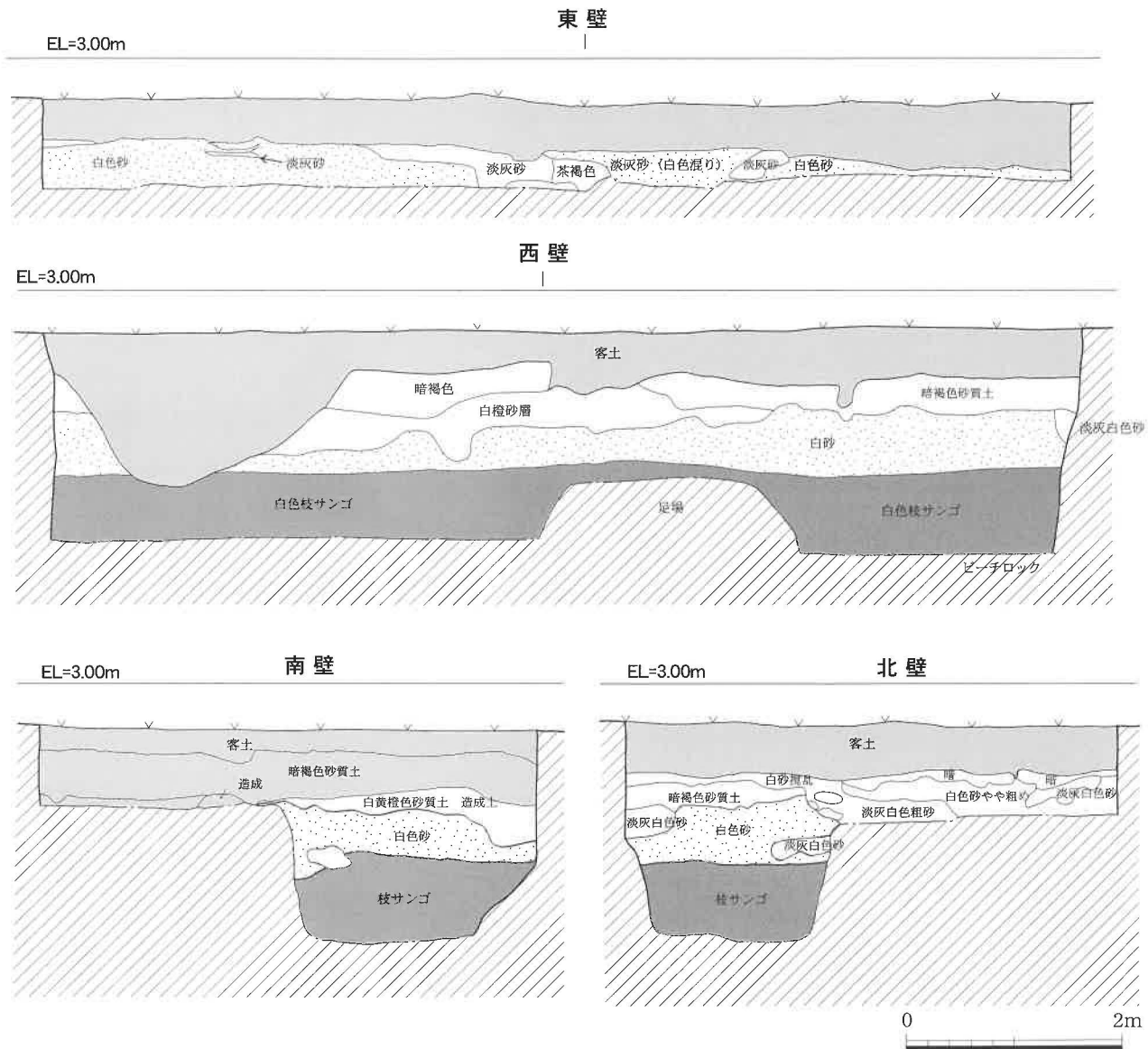
東壁で厚さ30cm程である。西壁は大きくうねり、中央部分は攪乱する。北壁では薄くなる。西壁の中央では黒色のパミスが幅50cm×厚さ30cmのレンズ状に見られる。東壁では黒色パミスは攪乱の下部に見られる。

B-5ではⅡ層（淡黒色砂）は底面に厚さ6cm程度で部分的に見られる。

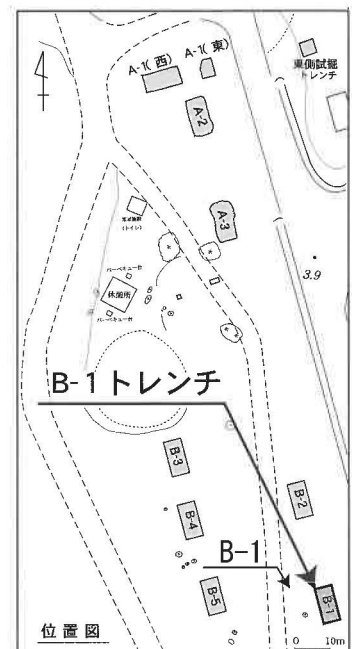
④層：白砂層

B-1は下部の試掘をした西側半分で厚さ50cm確認される。北壁と東壁では淡灰白色層と不規則な互層をなす。攪乱と思われる。

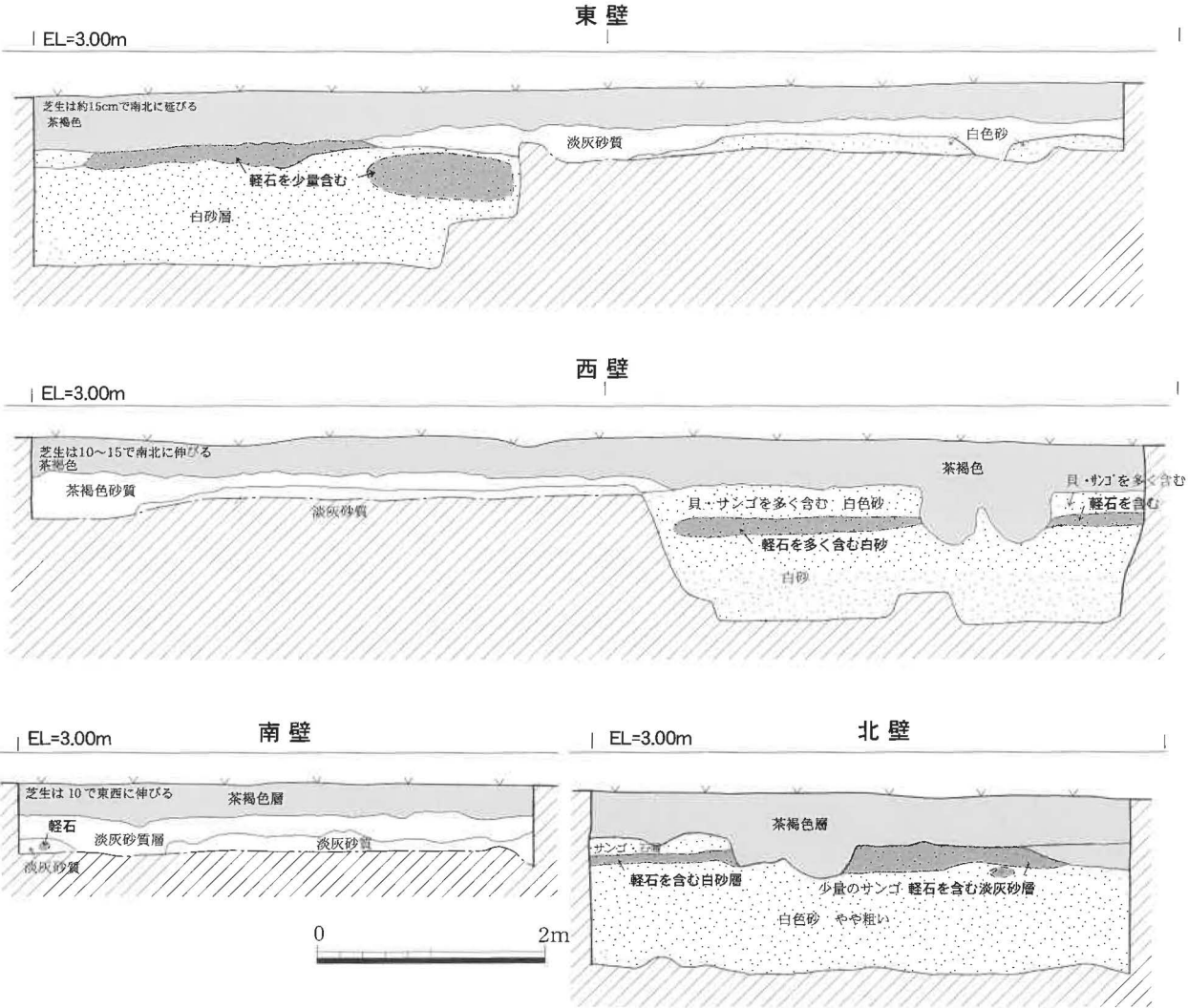
B-2では北側半分で厚さ1mを測る。北側サンゴ・貝を多く含み、上部では厚さ6cm程度の軽石の集中部分（第62図）が見られる。北・南・西壁の壁面で検出されたことから約2mの面で広がっ



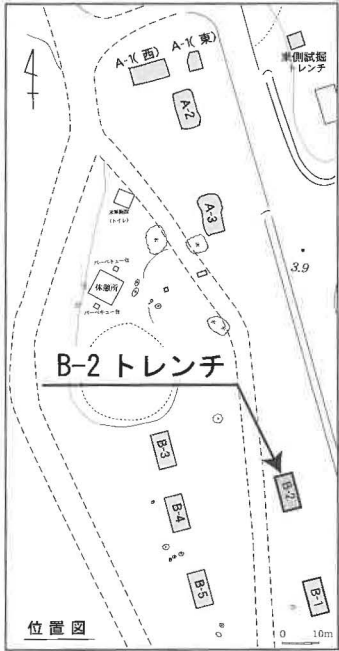
東壁	南壁	西壁	北壁
旧表土	客土	客土	客土
①白砂層と淡灰砂層が入り交じる。ほぼ中央に茶褐色の層	①暗褐色砂質土(造成)	①暗褐色層と北側に暗褐色砂質土が見られる。	①白砂層攪乱
—	①白黄橙色砂質土(造成)	①南側に大きな攪乱の跡。幅240cm、深さ120cmと深く白砂層を切る。	①暗褐色砂質土
—	—	—	④東側—淡灰白色粗
—	—	④白橙砂層	④淡灰白色砂
—	④白砂層	④白砂層	④白砂層
—	—	—	淡灰色砂層
—	⑥b枝サンゴ層	⑥b枝サンゴ層は水平に広がる。ほぼ中央に足場か。	⑥b枝サンゴ層
—	—	—	西側に幅1mの試掘トレンチをもうけ、層を確認した。



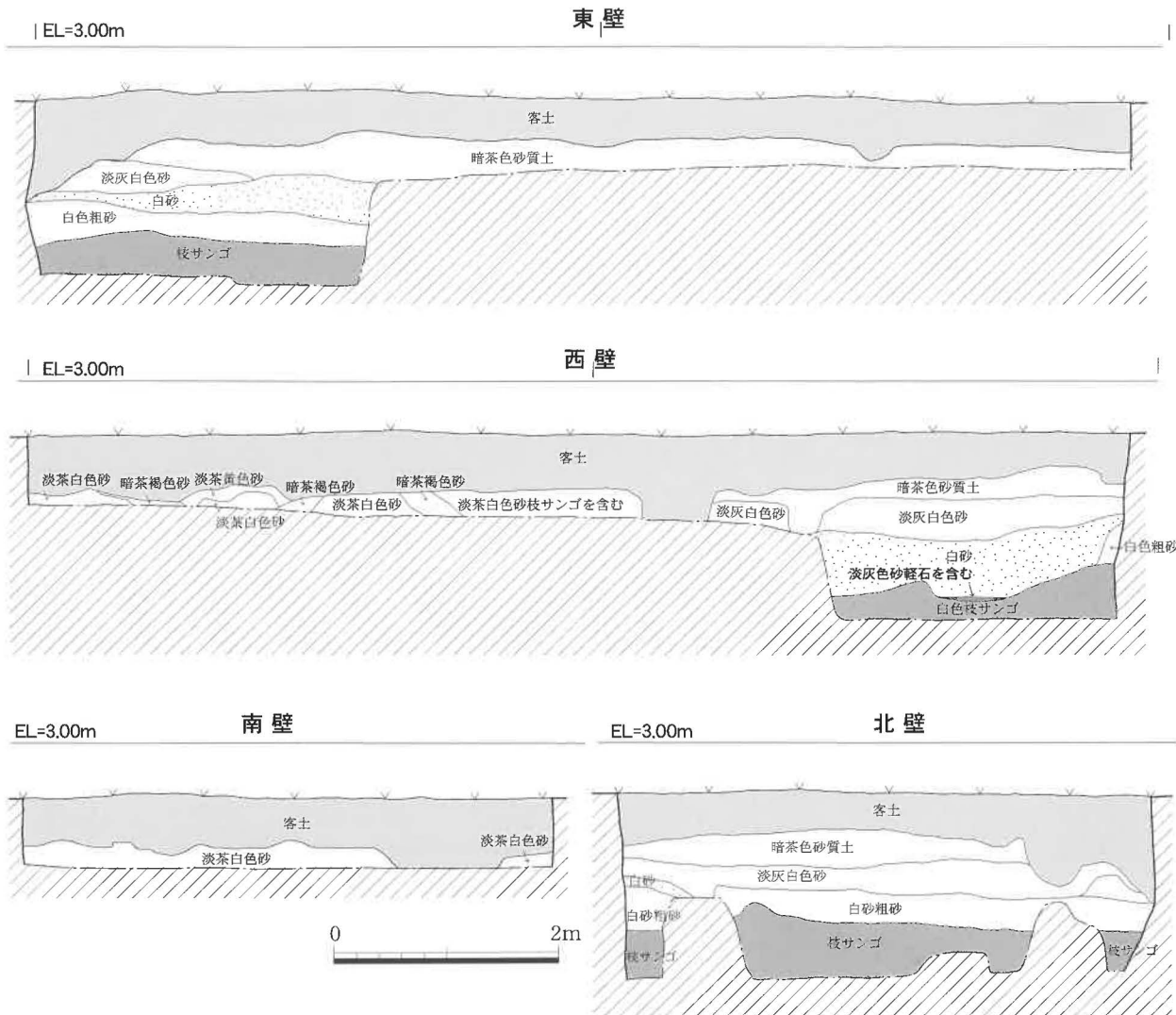
第66図 B-1トレンチ層序



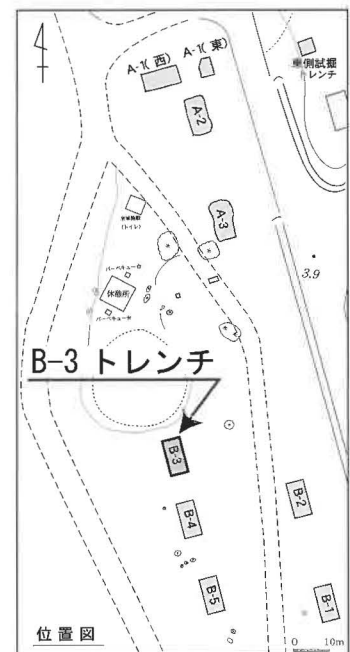
東壁	南壁	西壁	北壁
①芝生層15cm	①茶褐色層	①芝生層15cm	①茶褐色層
②茶褐色砂質	②淡灰砂質層	②茶褐色砂質	②淡灰砂質層
—	—	④貝サンゴを含む白砂層	④白砂層やや粗い



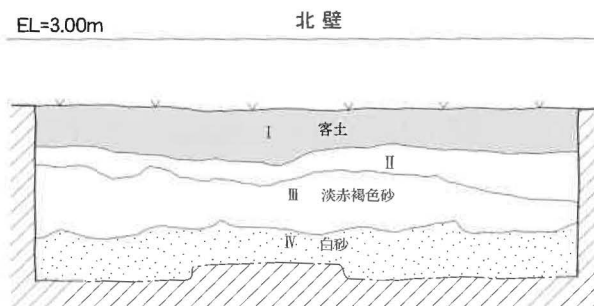
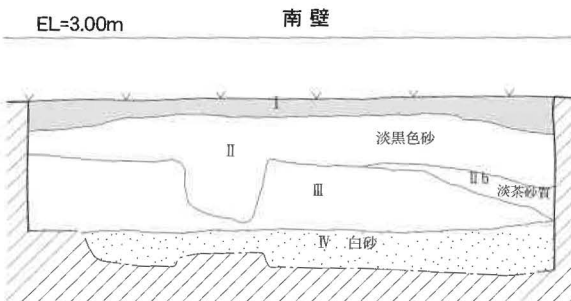
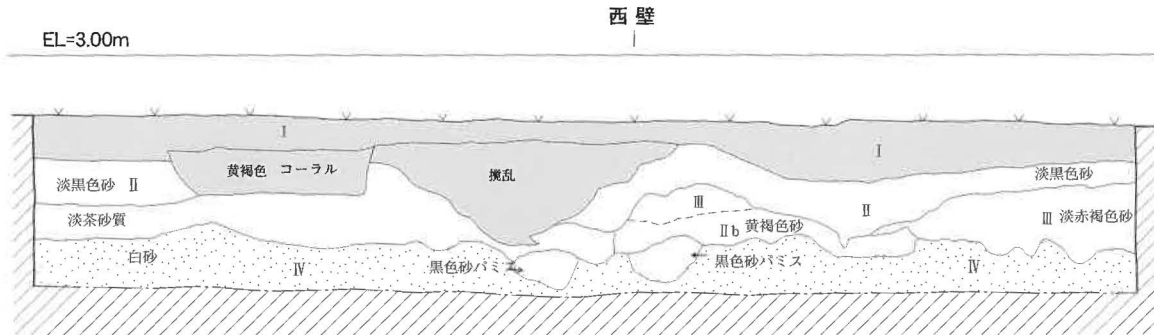
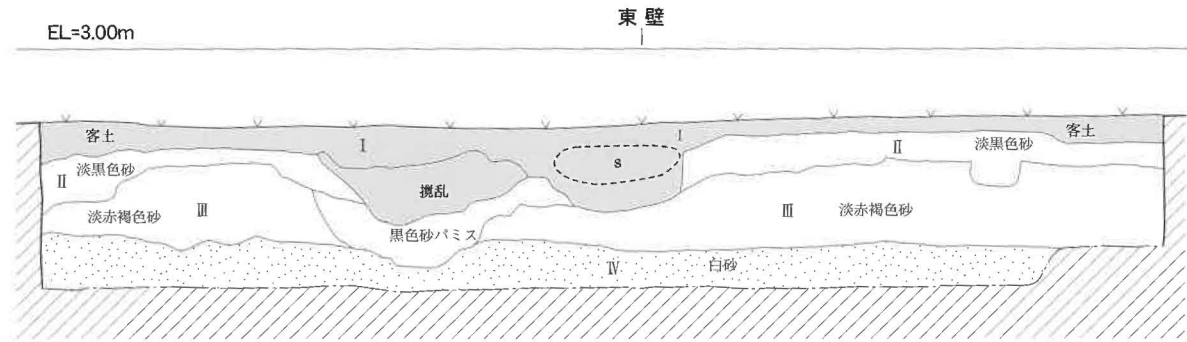
第67図 B-2トレンチ層序



東壁	南壁	西壁	北壁
①客土	①客土	①客土	①客土
暗茶色砂質土	—	②暗茶色砂質土	②暗茶色砂質土
④淡灰白色土	④淡灰白色砂	④淡灰白色砂	④淡灰白色砂
④白砂層	—	④白砂	—
⑥a白砂粗砂層	—	⑥a淡灰砂層(軽石含む)	⑥a白砂粗砂
⑥b枝サンゴ層	—	⑥b枝サンゴ層	⑥b枝サンゴ層

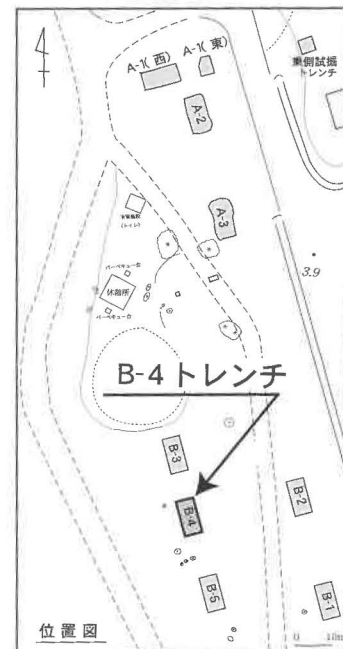


第68図 B-3トレンチ層序

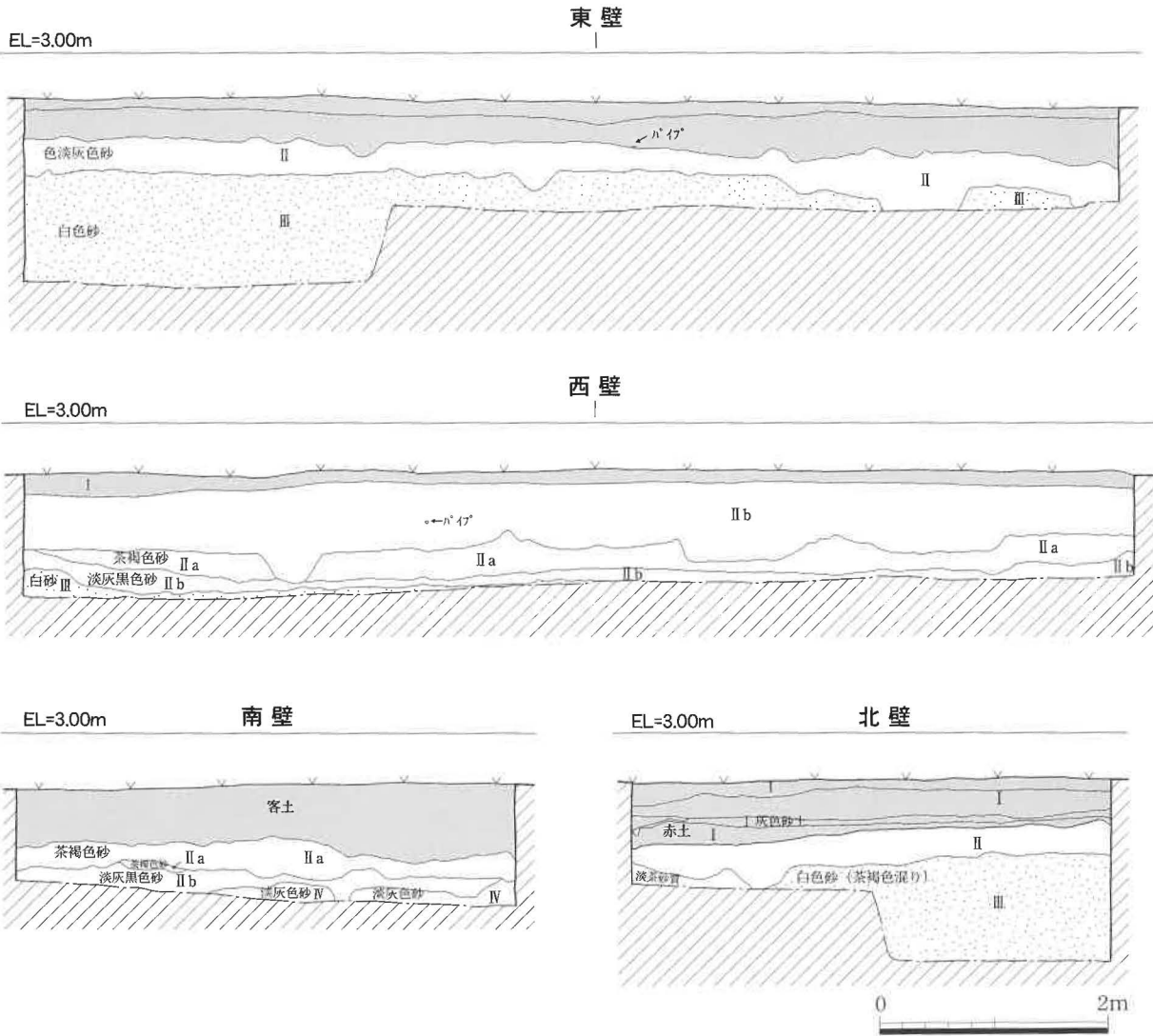


凡例

I	①客土
II	②淡黒色砂層
III	③淡赤褐色砂層
IV	④白砂層



第69図 B-4トレンチ層序



	東壁	南壁	西壁	北壁
I	—	—	—	①灰色砂土 赤土
II	③淡灰色砂	—	—	—
II a	—	③茶褐色砂	③茶褐色砂	—
II b	—	③淡灰黒色砂	③淡灰黒色砂	—
III	④白色砂	—	④白色砂	④白色砂 (茶褐色混り)
IV	—	④淡灰色砂	—	—



第70図 B-5トレンチ層序

ていたと想定される。人骨も出土、その人骨の放射性炭素年代測定は補正年代 200 ± 30 年という（第六章1・表2）

B-3では北側の試掘2.5mの範囲で淡灰白色砂、白砂粗砂層。

B-4では海拔1.5mで、西壁面では上部は安定しない。鉄製品（第82図）出土。

B-5では北側に試掘をもうけ、確認された。南に薄くなり、厚さ6cm程度である。

ここでは海拔200mを測る。

⑥b層：枝サンゴ層

B-1では西側の試掘部分で確認された。西壁をみると水平に広がる。海拔1.25m。B-2では未確認。

B-3では試掘した北壁で確認された。白砂層との間に軽石だまりが検出される。海拔1.25m。

⑦層：ビーチロック

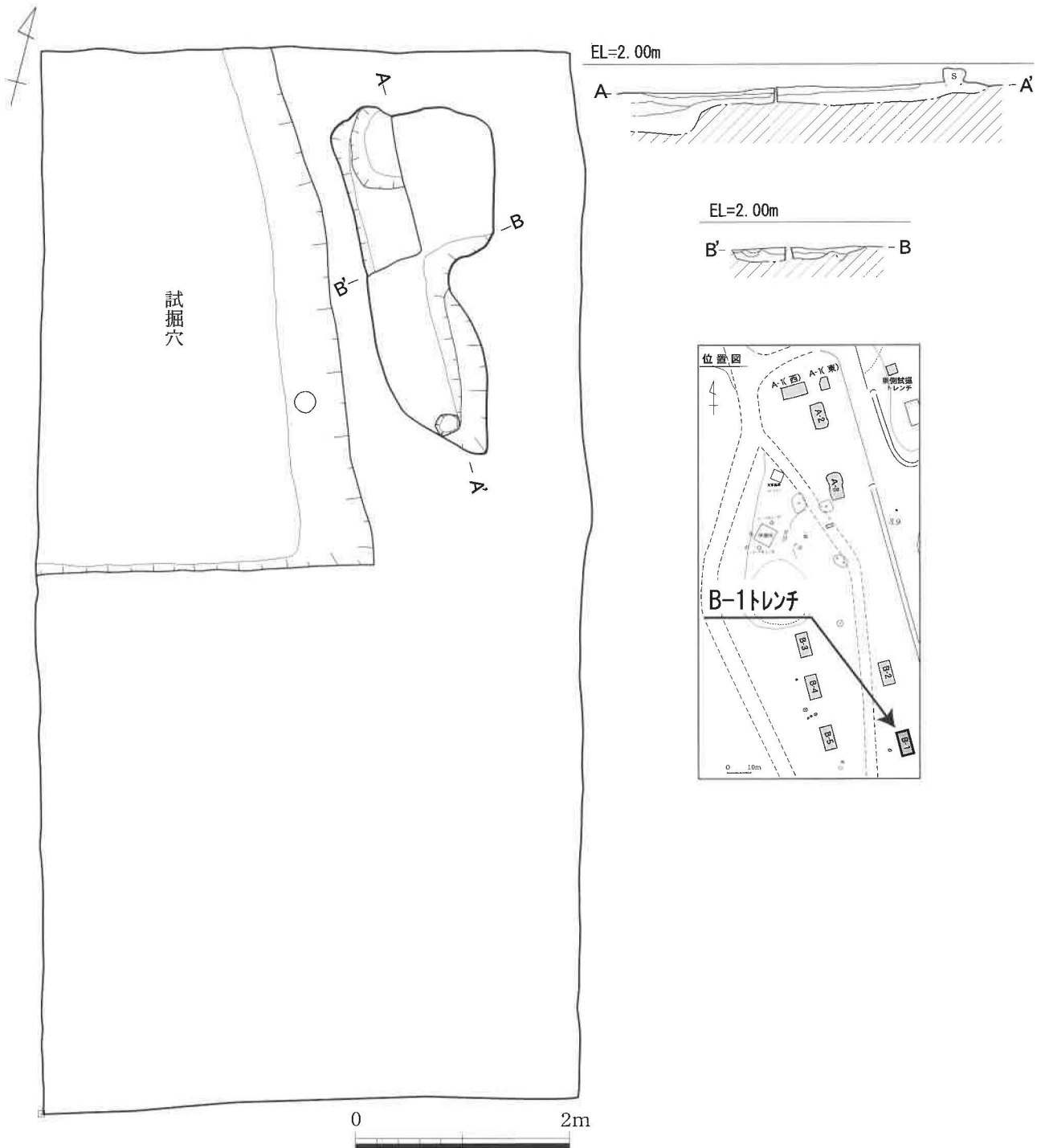
B-1試掘で下層確認のために検出された。海拔0.5m。

第7節 Bトレンチ遺構

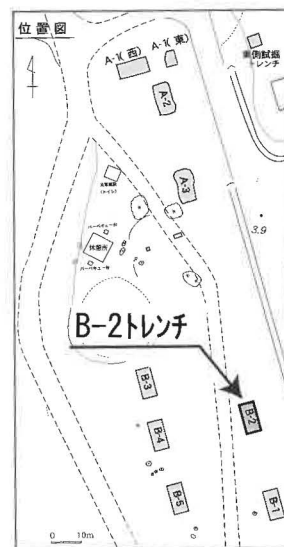
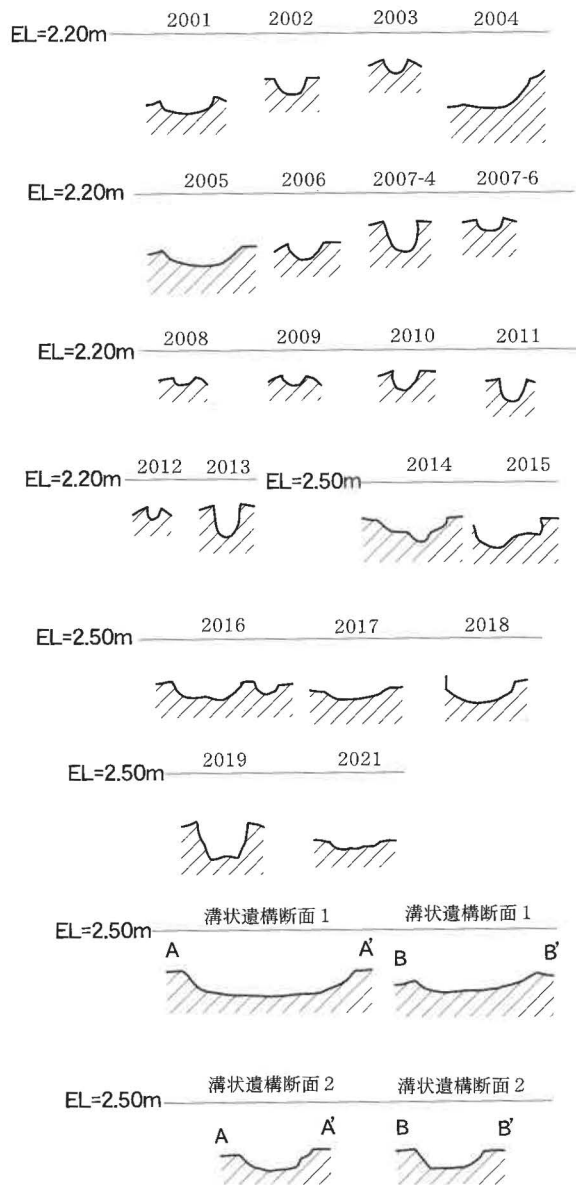
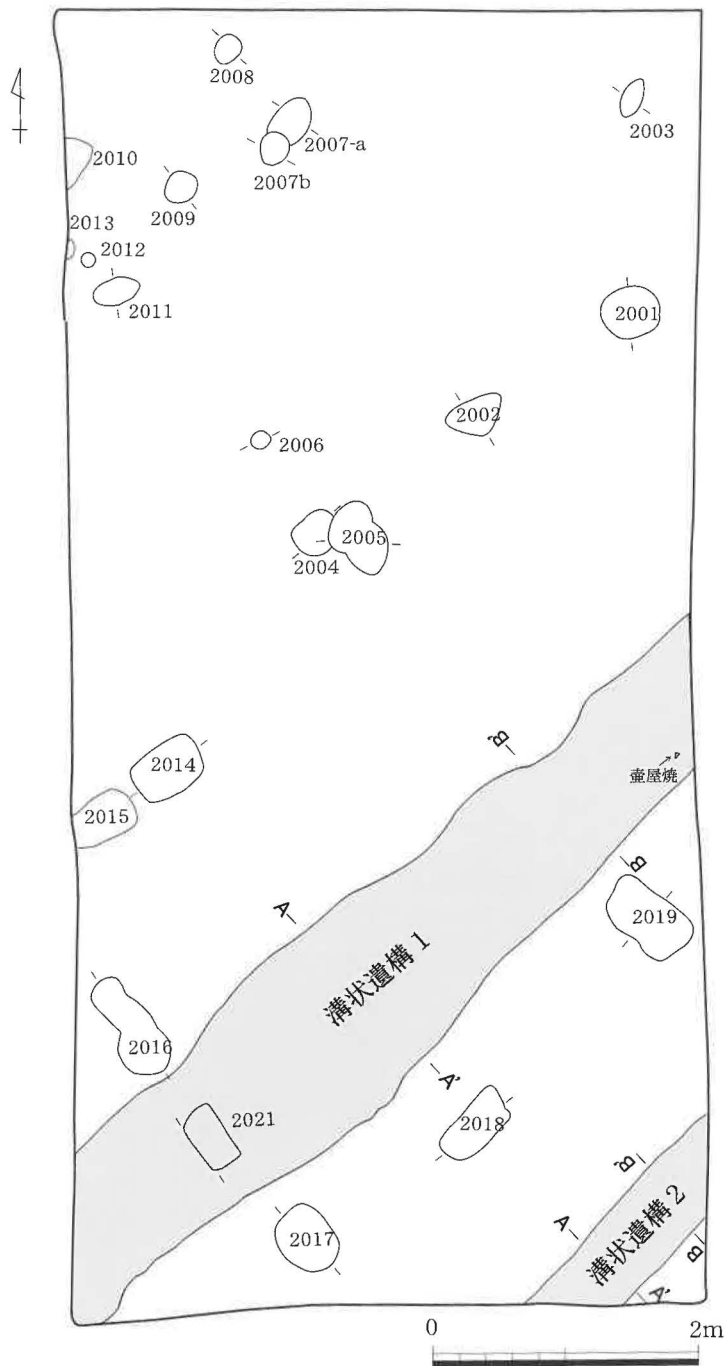
B-1（第71図）の北東側に $3\text{m} \times 115\text{m}$ の落ち込みが20cm弱の落ち込みが見られるが用途ははっきりしない。

B-2（第72図）幅125cmの溝状の落ち込みが北東～南西方向に2本見られる。深さ18cm程度で、Aトレンチ（第38図）でも出土し、畑に関連する遺構であろう。遺物は第73図4・5は後期系土器と仲泊a式土器が出土している。

本トレンチでは径50cm前後の落ち込みが検出されたが深さが10前後と浅い。平面的には溝状遺構に平行して直線状に並んでいるようにも見える。しかし、深さあまりないことを考慮すると柱穴とは言い難い。



第71図 遺構平面図(B-1)



第72図 溝状遺構・柱穴平面図・断面図(B-2)

第8節 Bトレンチ出土遺物

1. 土器

本トレンチでは土器の出土が少ないため、トレンチでまとめて記述する。

出土した土器は面縄東洞式土器、グスク土器、宮古式土器である。以下、第73図、図版50に示した。

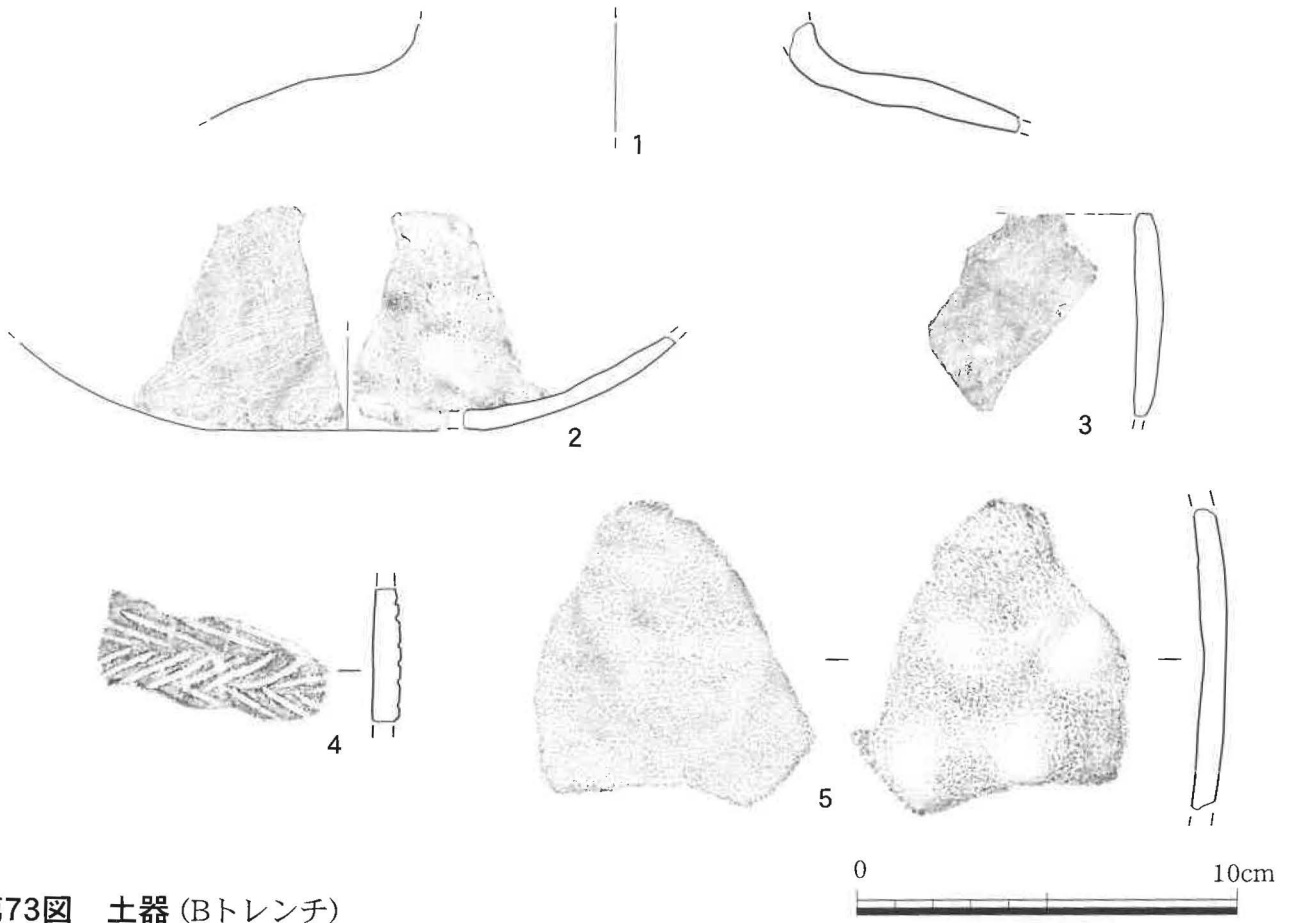
図4は外面の胴上部に羽状の沈線文を密に施すもので、仲泊式土器の胴部と考えられる。砂質で粗い砂粒を多量混入する。内外面とも黄褐色を呈する。B-3トレンチ白砂層で出土した。

図5は無文の胴部で外面に浅い擦痕が横位に認められる。砂粒を多量混入し、器色は外面が暗茶褐色、内面は黄褐色を呈し、器厚は6mmと薄い。焼成は良く、胎土などから面縄前庭式土器か仲泊式土器に近い。B-2トレンチ溝状遺構で検出された。

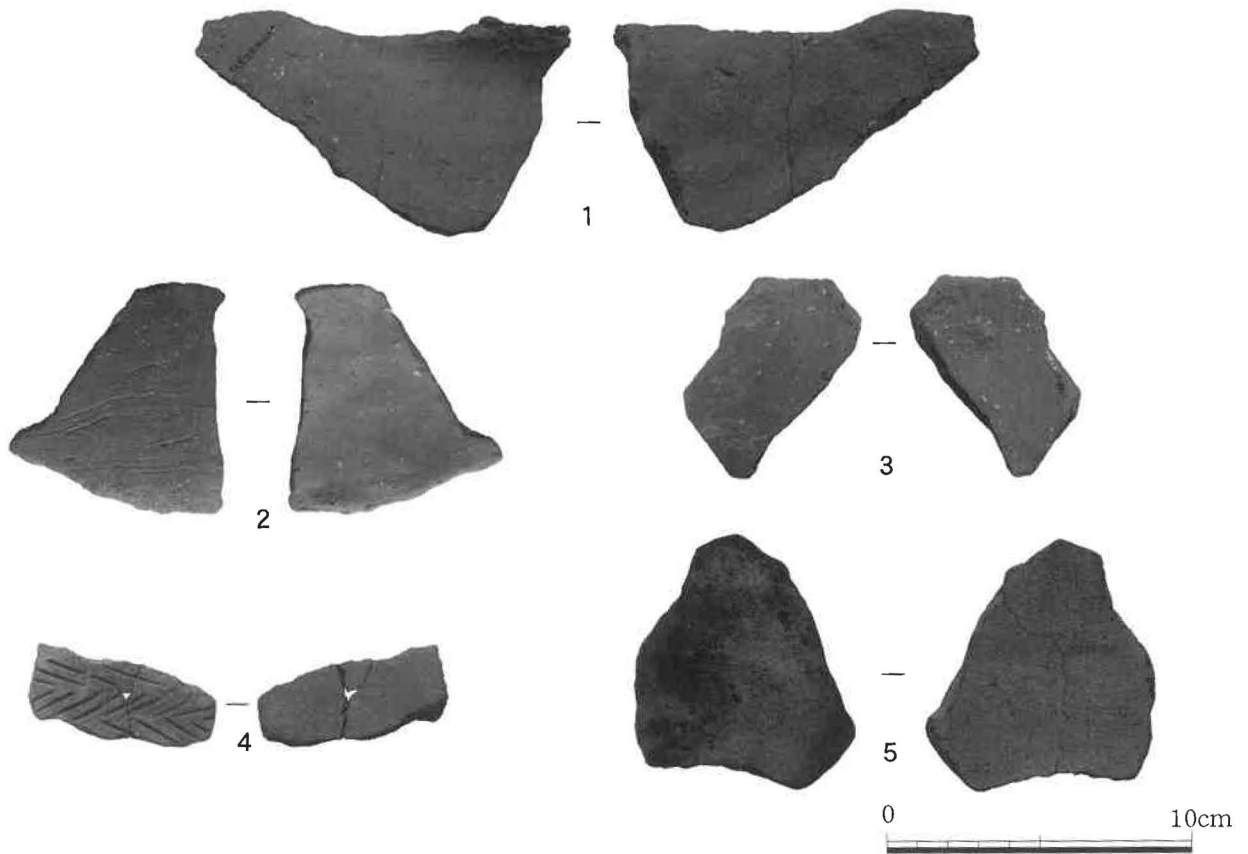
宮古島産グスク土器は、第73図1～3である。1を除く全てが壺形胴部片であり、図1は壺形頸部片で、頸径は13.6cmである。胎土は、貝殻片、砂粒等を含むもので、焼成は良好など各々類似しており、出土地区、層序も似通っていることから3点とも同一土器だと思われる。

表39 宮古式土器観察一覧

第図・ 図版	挿 図 番 号	器形	部位	類	観察事項	出土地
第73 図(図版 50)	1	壺	頸	II	質:泥質。表:橙。裏:橙。混種:貝片。砂粒。混大:細。混量:多。焼:良。調:表-ナデ。ユビ調整有。裏-ユビ調整有。頸径:13.6cm。厚:8.7mm。	B-2 白色砂(やや粗め)軽石より下 02.01.09
	2	壺	底部	II	質:泥質。表:橙。裏:橙。混種:貝片。砂粒。混大:細。混量:多。焼:良。調:表-ナデ。ユビ調整有。裏-ナデ。ユビ調整有。厚:8.1mm。	B-2 白色砂(やや粗め)軽石より下 02.01.09
	3	壺	胴	II	質:泥質。表:橙。裏:橙。混種:貝片。混大:5mm。混量:多。焼:良。調:表-ナデ。無数の凹線有。裏-ユビ調整有。厚:7.3mm。	B-2 白砂(掘下げ) 01.11.14



第73図 土器 (Bトレンチ)



図版50 土器 (Bトレンチ)

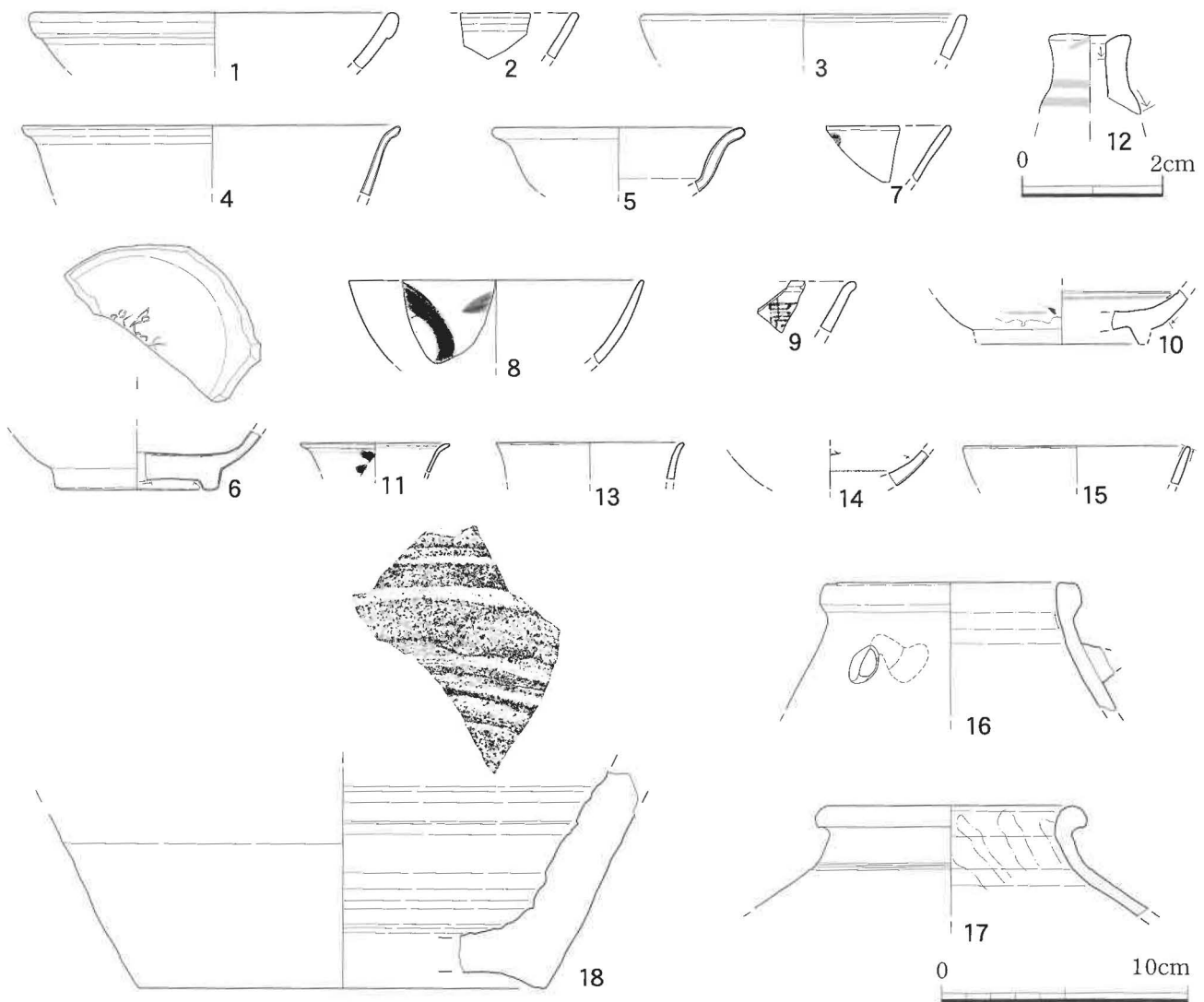
2. 中国・タイ産陶磁器

本遺跡から出土したものは、42点で中国産陶磁器は白磁・青磁・染付・瑠璃釉・青磁染付・褐釉磁器およびタイ産褐釉陶器である。出土地はA-1褐色土層、A-2暗褐色砂質土層の上部、B-1表採、B-2・3白砂層、B-4淡黒色砂質層・白色砂層、B-5表採である。出土状況を表41に、主な遺物については観察一覧を表40、第74図、図版51に示した。

白磁は玉縁口縁碗（図1）で、11世紀から12世紀の時期のものである。

青磁は碗と皿が出土した。碗は口縁部3点で、直口口縁（図2・3）と外反口縁（図4）が出土した。この中で図2は発色も悪く素地も灰色で沖縄産施釉陶器の灰釉碗に類似する、福建・広東系の産地と思われる。また、図3は釉の鈍い発色で、胴部に多数のアバタが見られる。素地も橙褐色で焼成は悪い。皿は胴部と底部がそれぞれ1点出土した。図5は口縁部でわずかに外反し、玉縁状をなすものである。図6は外反皿の底部で内底に印花文を施すものである。

染付は碗4点、杯1点出土した。碗は口縁部3点、底部1点出土した。図7と8は直口口縁碗である。図8は外面に丸文を施すものである。図9は底部で、外内面とも鉄釉で圏線を施す。文様の発色は鈍く、素地は乳白色で素地や施文の状況から産地は福建・広東系と考えられる。

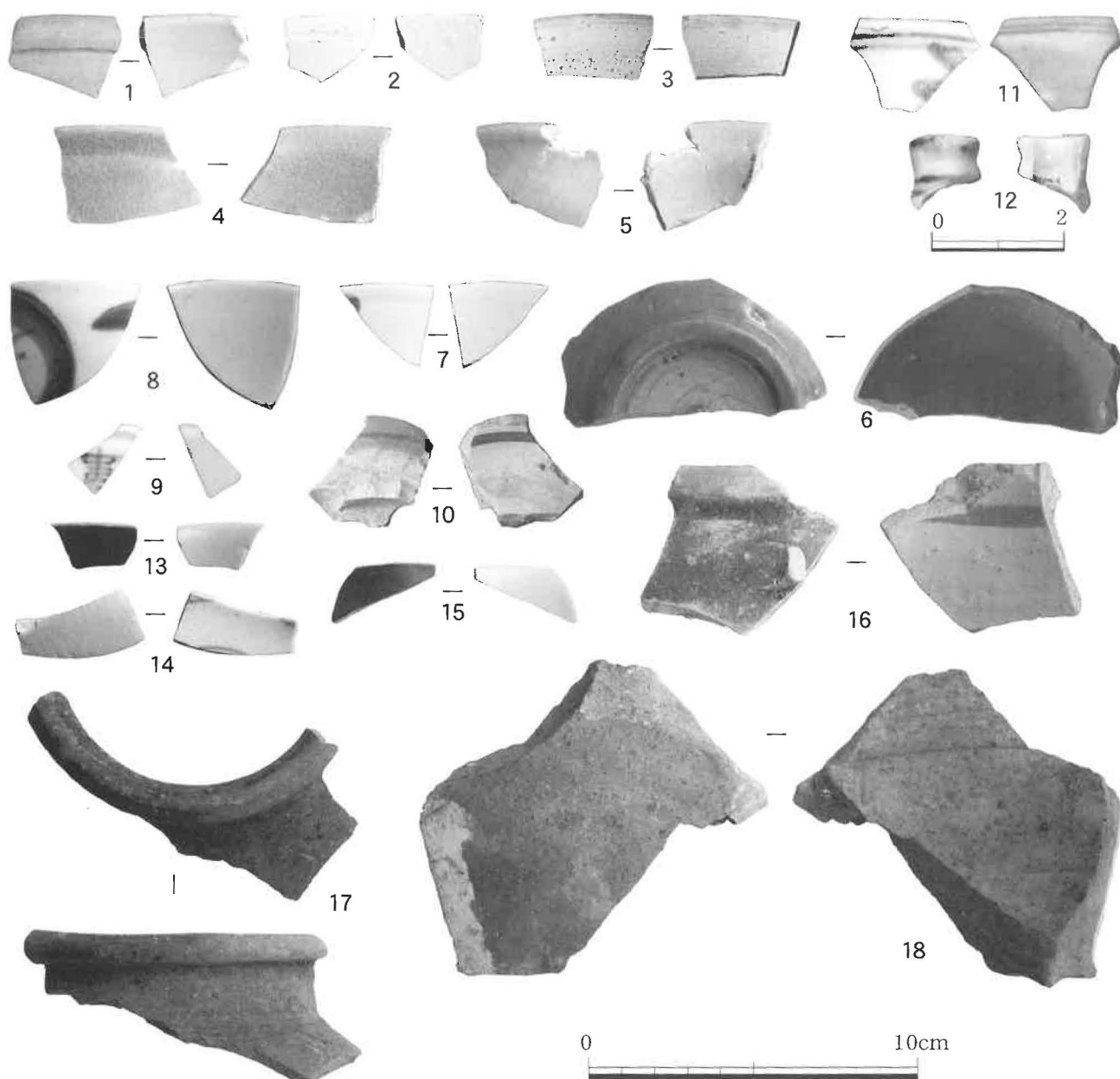


第74図 白磁・青磁・染付・瑠璃釉・青磁染付・褐釉磁器・褐釉陶器

杯（図11）は1点得られ、外反口縁で、2mmの薄手である。瓶（図12）は小瓶で径8mmを測る。瑠璃釉の碗が1点出土した。図13は外反口縁で、外面は瑠璃釉、内面は白釉の掛け分けである。青磁染付は1点出土した。図14は皿の胴部で、外面は青磁釉、内面は口縁部と底部近くに呉須で圏線を施す。

褐釉磁器は1点出土した。図15は直口口縁の碗である。

褐釉陶器は23点出土した。図16・17は口縁部で、蒲鉾状に肥厚する。図16はゆるやかな肩部に耳が貼り付けられ、大きさから3個と推定される。釉は暗灰色の釉で、内面は頸部に不規則に釉を施す。素地は明橙色で僅かに石英が含まれる。図17は外面の頸部に圏線を施す。釉は暗褐色で内面は口縁の周縁のみに施される。素地は灰色で黒粒を混入する。図18は褐釉陶器の底部で、器厚1.9cmは厚く、胎土に黑色物質を含み、灰褐色を呈することからタイ産陶器の可能性が高い。



図版51 白磁・青磁・染付・瑠璃釉・青磁染付・褐釉磁器・褐釉陶器

表40 白磁・青磁・染付・瑠璃釉・青磁染付・褐釉陶磁器観察一覧

第 図 図版	挿 図 番 号	器種	部位	口 径 器 高 底 径	観 察 事 項	出 土 地
第 74 図 (図 版 51)	1	白磁	碗	口径15cm	直口玉縁(幅11mm)素地:白色。11世紀~12世紀。	B-2 白砂層011211
	2	青磁	碗	—	直口口縁。文様:無文。素地:灰色貫入:無。沖縄産施釉陶器の灰釉碗に酷似。	B-2 白砂層 011113
	3	青磁	碗	口径13.4cm	直口口縁。	B-5 埋土 020107
	4	青磁	碗	口径15.2cm	外反口縁。文様:無文。素地:白色,貫入:細。	B-4 白色砂層011214
	5	青磁	皿	口径10.2cm	外反口縁。やや玉縁気味素地:乳白色。貫入:細	A-2 暗褐色砂質 土層上部010822
	6	青磁	皿	底径6.5cm	外底:蛇の目釉剥ぎ。「L」字状内底:印花文素地:灰色。貫入:粗。白粒混入。福建・広東系	不明
	7	染付	碗	—	直口口縁。発色:鈍い。素地:白色。	B-5 表採011108
	8	染付	碗	口径12cm	直口口縁,舌状。文様:丸文+葉。発色:暗い。素地:白色。福建	B-1 表採011108
	9	染付	碗	—	外反口縁。発色:鮮明。素地:白色。時期:18世紀。福建	B-1 表採011108
	10	染付	碗	—	素地:白色。	A-3 壁面清掃010905
	11	染付	杯	口径6cm	外反口縁。文様:外・圏線+草花文、内唇:圏線。発色:鮮明。素地:白色。時期:15世紀。	A-1 褐色土層 010823
	12	染付	小瓶	口径12mm		
	13	瑠璃釉	碗	底径7.6cm	外反口縁。発色:鈍い。素地:白色。貫入:気泡	A-1 褐色土層010824
	14	青磁染付	皿	—	腰折。内面:圏線+樺文。発色:鈍い。貫入:粗	B-4 淡黒色砂質層011130
	15	褐釉磁器	碗	口径9.2cm	直口口縁。素地:白色。	A-1 褐色土層010824
	16	褐釉陶器	壺	口径10.6cm	肥厚一藩銚状。耳3個。頸部は不規則に施釉。素地:明橙色。混入物:石英。	B-3 白砂層 011210
	17	褐釉陶器	壺	口径11cm	肥厚一藩銚状。文様:頸部に圏線。施釉:口縁~頸部。素地:灰色。混入物:黒粒。	不明 不明
	18	褐釉陶器 (91)	壺	口径16.4cm	やや上げ底。轆轤痕明瞭。素地:鉄分吹き出す。白粒あり。	不明

表41 青磁・染付・褐釉・白磁・瑠璃釉出土量

出土地		種類	青磁			染付			褐釉			白磁	るり釉	小計	層 集計	グリット 集計
グリット	層		種類	碗	皿	不明	碗	皿	猪口	碗	壺	不明	碗			
A-1	褐色土層	口						1	1				1	3	10	10
		胴				2				5				7		
A-2	暗褐色砂質土層	口		1										1	3	3
	溝状遺構	口			2									2		
A-3	明黄色砂質土層	胴								2				2	2	2
B-1	表採・表土層	口				2								2	3	3
		胴								1				1		
B-2	白砂層	口	1									1		2	2	2
B-3	表採・表土層	胴				1								1	2	4
		底					1							1		
	白(色)砂層	口								1				1	2	
B-4	淡黒色砂質層	胴		1										1	1	7
		口	1											1		
		胴				1				3				4		
B-4	白(色)砂層	底										1		1	6	
		底												1		
B-5	表採・表土層	口	1			1								2	2	2
不明	不明	口											1	1	9	9
		胴									1	1		6		
		底		1										1		
合 計			3	3	2	7	1	1	1	20	2	1	1			
器種 集計				8			9			23		1	1			
備考										小壺2						42

3. 本土産磁器

近世以降本土で生産された磁器で、器種は碗、小碗、皿、碗（筒）、猪口、急須、火取、蓋、瓶などがある。

出土地はBトレンチの表土層で33点と最も多い。器種別には碗19点、小碗30点、皿6点と日用雑器が多い。これらは装飾の方法で型紙摺り、銅版転写、ゴム印絵付、吹き絵などがある。

いずれも大きさが一致していることから量産化された近代磁器で69点出土した。

出土状況を表42、主な遺物の観察一覧を表43、第75図に示した。

a. 碗

碗は口縁部4点、胴部5点、底部4点の碗が19点出土した。

すべて型紙摺りで文様は以下の5種類が見られる。

文様Aは外面の地紋は櫛文を施し、文様は丸窓の中に菊花文、丸窓に吉祥文の組み合わせ、腰部には三角形の連続文。内唇には櫛文と菊文、内底は圏線と花2と葉の組み合わせ。（図1）

文様Bは外面の地紋は点刻文を施し、文様は五弁窓の中に水仙文、笹文と梅花文の組み合わせ、腰部にはU字文の連続。内唇には笹と松と梅文の組み合わせ。内底は圏線と花文。（図2）

文様Dは外面の地紋は点刻文を施し、五弁窓に水仙文？、腰部は破損のため、不明。内唇には半梅花文。内底は破損のため不明。（図3）

文様Eは外面の地紋は点刻文を施し、文様は菱形窓に花を意匠化した丸文、腰部には三角形の連続文、内唇には三角窓に半花文。内底は圏線、他は破損のため不明。（図4）

文様Fは外面の地紋に短斜沈線施し、笹文と丸窓の中に鳥？と他の組み合わせ。腰部はU字状の連続文。内唇と内底は圏線と半菊花文が施されている。（図5）

底部には目痕が径5mmの目痕が5個見られる。

b. 皿

皿は10cm前後の大きさで、銅版転写である。文様は内面に青や緑の釉で文様を施し、口唇にはサビ釉が施されている。文様をみると図6は口～底まであるもので、内面に青釉で五弁花文を施す。図7はほぼ完形で内面に櫛文と草花文の組み合わせている。図8はゴム印によるもので、内底に青釉で唐草様の文様を施す。

c. 小碗

小碗はすべて直口口縁で青磁に飛びカンナ（図8）、白地に青釉で亀甲文の総文様を施したもの（図10）、銅緑釉で2本の圏線を施したもの（図11）、口縁に雷文帯を施したもの（図12）、青鳥+亀甲を灰色とで施したもの（図14）などが出土した。

d. 小杯

大（図16）と小（図17）がある。

図16は薄手の直口口縁で舌状を呈する。釉色は白く、腰部と高台の境に青色で鋸歯状の文様を施す。畳付は無釉で「ハ」字に底面に太くなる。

図17は前者より小さいが厚手である。口縁は段を有する。口縁は部分的に緑釉を施す。腰部は5弁状に凹み、高台の形も五弁花を呈し、畳～外底は無釉である。

e. 火取

図17は筒状の口縁で、口縁の内側が肥厚するものである。型紙摺りで、口縁部近くに青海文

と丸文の組み合わせの文様を施す。

f. 蓋

図18の径は6cmの上に摘みをもつものである。口縁の内側は無釉である。

・肥前磁器

図19は碗で外面に文様、内面に圏線。発色が淡い色である。薩摩磁器の可能性も考えられる(註1)。

・本土産陶器

図21は皿の底部で、本土産陶器と思われる。

図20は蓋である。胎土および釉は乳色を呈し、胴部に草花文が施されている。摘みタイプである。

註

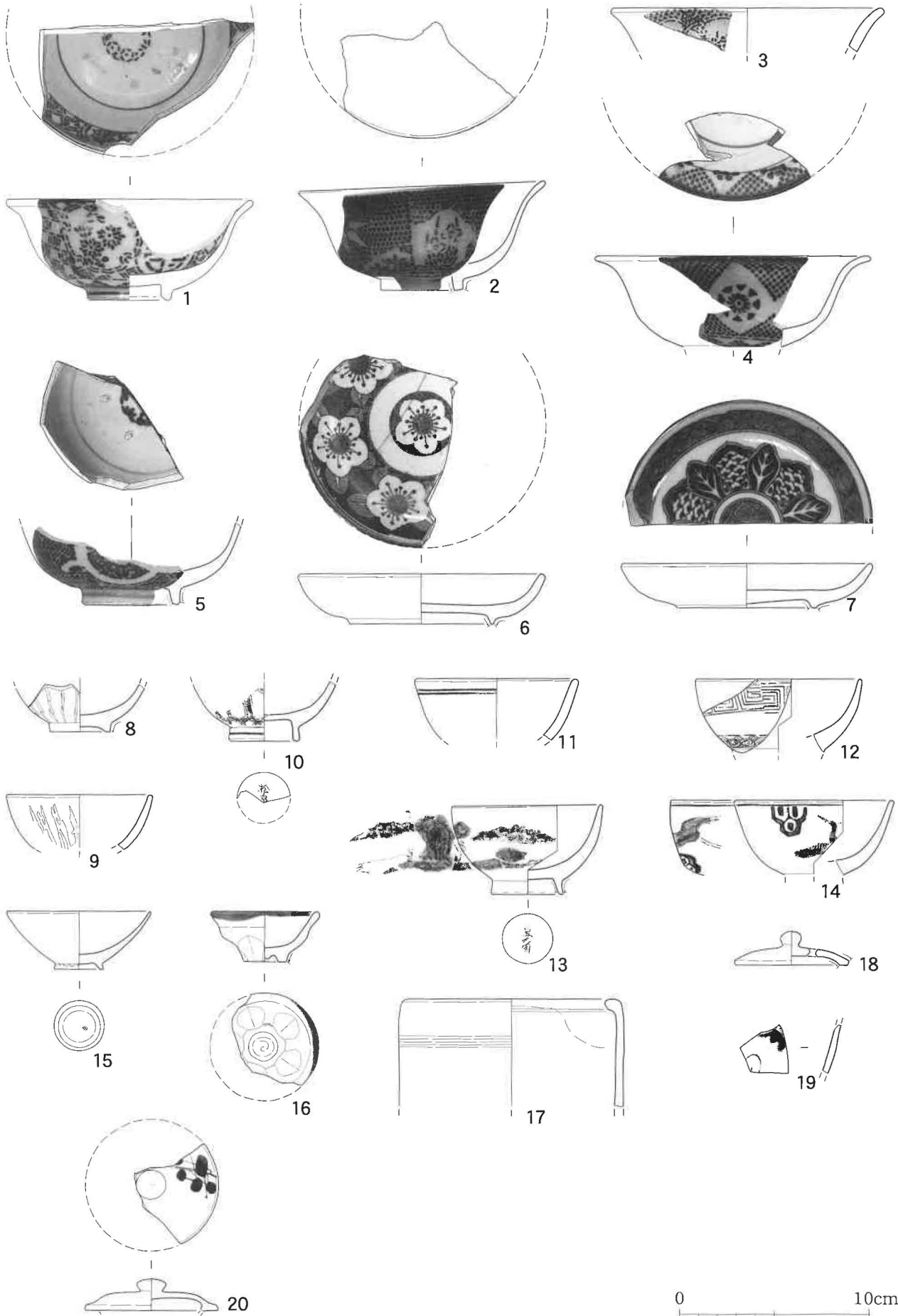
鹿児島大学 渡辺芳郎先生の教示

表42 本土産陶磁器出土量

出土地		種類	種類														層 集計	グリット 集計
			小碗	皿	蓋	碗	小碗	筒碗	皿	瓶	急須	蓋	火炉	猪口	不明			
グリット	層	種類																
A-2	褐色土層	胴				1											1	1
A-2(南東陽)	表土層	底		1													1	1
B-1	表土層	口								1			1				2	7
		胴												1			1	
		底				1	1										2	
		口～底				1	1										2	
	床面清掃	口				3										3	3	
B-2	表採	口				2	2										4	8
		胴					1										1	
		底				1	1										2	
		口～底												1			1	
	白色砂層	底					1									1	1	
	壁面清掃	口					1	1						1		3	5	
胴					1	1									2			
B-3	表採・表土層	口				9	4			2				1		16	47	
		胴	1			6	1				1					9		
		底				2	3			1						6		
		口～底				1	3	2		8			1		1	16		
	壁面清掃	口				1	2									3	4	
胴													1		1			
B-4	表土層	口					3									3	4	
		口～底					1									1		
	淡黒色砂質層	口					1									1	3	
		口～底					1									1		
		耳										1				1		
	茶褐色砂質層	口					2									2	1	
		口～底					1									1		
白砂層	口					1									1	2		
	口～底					1									1			
合 計			1	1	2	32	30	1	12	1	1	1	1	4	2	89		
					鍋								鍋					

表43 本土産磁器観察一覧

第 図・ 図版	図番号	器種	種類a	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第 75 図	1	碗	型紙摺り	口～底	口径13 器高5.3 底径4.3	口縁は丸く、外反する。底部に目跡5コ。釉色は白、疊付無釉、さらに2面に削る。文様の色は青釉で、Aタイプ。	B-1 表土層(重機) 011107
	2	碗	型紙摺り	口～底	口径13 器高5.8 底径4.2	口縁は外反し、内底に目痕。釉色は白、疊付無釉。文様の色は青釉で、Bタイプ。	B-1 表土層 020108
	3	碗	型紙摺り	口	口径 14.4	口縁は外反し、釉色は白、文様の色は青釉で、Dタイプ。文様ははげ気味である。	B-3 表土層(重機) 011107
	4	碗	型紙摺り	口～底	口径 14.4	口縁は外反し、丸い。釉色は白、文様の色は青釉で、Eタイプ。	B-2 表採 011108
	5	碗	型紙摺り	底部	底径4.4	口縁は外反し、内底に目痕。釉色は白、疊付無釉、疊付2面に削る。文様の色は青釉で、Fタイプ。	B-1 表土層埋めもどし 020108
	6	皿	銅版転写	口～底	口径13 器高2.7 底径7.6	口縁は直口で、丸い。釉色は白、疊付無釉。文様の色は青釉で、外面は無文、口唇はサビ釉。内面は五弁花文。	B-3 表土層旧表土 011227
	7	皿	銅版転写	口	口径 13.2 器高 2.35 底径7.4	口縁は直口で、丸い。釉色は白、疊付無釉。文様の色は緑釉で、内面に禪文と草花文。口唇はサビ釉。内面は花文。	B-3 表土層(重機) 011107
	8	小碗	—	底部	底径3.2	内外面ともクロム青磁、疊付および外底は無釉。外面は飛びカンナの文様。	B-3 表土層(重機) 011107
	9	小碗	—	口縁部	口径7.8	口縁部は直口。内外面ともクロム青磁、疊付および外底は無釉。外面は飛びカンナの文様。	B-4 茶褐色砂層(重機) 011203
	10	小碗	銅版転写	底部	底径3.4 口径8.6	内外面とも白釉。疊付無釉。銘款「松白〇」。文様は青釉で亀甲文(総文様)。	B-4 表土層(重機) 011107
	11	小碗	銅緑釉	口		口縁部は直口。内外面とも白釉。戦時中。文様は緑釉で、口唇に2本圈線。	B-3 表採 011108
	12	小碗	—	口	口径9.0	口縁部は直口で、丸い。内外面とも白釉。一型紙摺りのずれがある。口縁に雷文と腰部に螺旋文	B-3 表土層 020108
	13	小碗	銅版転写	口～底	口径7.9 器高右 4.8 左4.7 底径3.8 口径8.4	口縁部は直口で、丸い。内外面とも白釉。疊付無釉「〇〇〇」青、灰山水文、腰部に圈線2本	B-1 表土層(重機) 011107
	14	小碗	ゴム印	口		口縁部は直口で、丸い。内外面とも淡青釉。ゴム印鳥+亀甲圈線	B-3 表土層 011226
	15	小杯	—	口～底	口径7.5 器高3.1 底径2.6	口縁部は直口で、舌状を呈す。内外面とも白釉。疊付無釉。文様は青釉で、高台に鋸歯文。	B-3 表採ハイ 020108
	16	小杯	銅緑釉	口～底	口径5.7 器高2.7 底径2.2	外反丸内外面とも白釉。疊付および外底は無釉。高台の形は五弁状。文様は緑釉で、口唇に緑釉腰部は五弁状に凹む。	B-2 表採 011108
	17	火取	型紙摺り	口	口径 11.5	口縁部は直口で内唇に肥厚。外面および内唇は白釉。内面は無釉。文様は青釉で、青波文+丸文。	B-1 表土層埋めもどし 020108
	18	蓋	—	口～底	口径6.0 器高1.8 底径5.9	内外面とも白釉。内面の口唇は無釉。湯飲みの蓋か。	B-1 表土層 020108
	19	碗	伊万里 か薩摩 磁器	胴部		外面に文様あり、破片の為、図柄不明、内唇に圈線。内外面白釉。	B-3 表採 020108
	20	蓋	—	口～底	口径7.0	内外面とも乳色。内面の縁内は無釉。文様は黒釉で草花文。	B-3 表採 011108



第75図 本土産磁器

0 10cm

4. 陶質土器

陶質土器は厚さ3～5mmの薄手の焼き物で、俗に「アカムン」と呼称されているものを陶質土器として扱った。

器種別には鍋13点、急須2点、蓋1点、鉢1点、摺り鉢1点、火炉5点、不明4点の計27点出土している。

出土地別にはAトレンチ4点、Bトレンチ23点でBトレンチが多い。Bトレンチの層をみると表土層で5点、8点の出土である。

主な遺物については下記に略述し、遺物の出土状況は表44、主な遺物の観察一覧は表45に示し、図は第76図、写真は図版52に示した。

a. 鍋

口縁部2点、耳1点、底部8点、胴部2点の計13点出土した。

図1は口縁部で、口径15.7cmと小型の鍋である。外耳がつけられ、その大きさは厚さ10mm、幅40mmと小さい。本体への装着はコピナデで貼り付けている。

図2は鍋の底の部分で外底に煤が付着しているのが確認できる。胎土に黄雲母らしきものが含まれている。

b. 急須

注口が2点、底部近くが1点の計3点出土した。

図3は注口の部分で、長さは65mmを測る。本体部分に18mmの孔をあけ、注口を貼り付ける。注口の先端は斜めにカットし、その大きさは計10mmを測る。注口の下部面は明瞭に煤のあとが確認できる。

図4は注口の部分は径12mmで前述より若干大きいようであるが、注口の長さはほぼ同じで製品規格化された製品であることが窺える。

図5は急須の胴部から底部にかけての部分で、胴部は口縁部方向にくびれ、底部は丸底になると思われる。内外面に轆轤が確認され、器厚は3mmと薄手である。

c. 鍋(蓋)

図6の1点の出土である。

直口口縁で、先端部は円味を帯びる。内外面とも轆轤痕が確認できる。径11cmで、形状から前記した鍋の蓋と考えられる。

d. 火炉

口縁部2点、胴部1点、底部2点出土した。ほとんどBトレンチの出土である。

口縁部は口唇の形状から2種に分類される。

a種：口縁部が「く」字に内彎し、角をもつものである。2条の圈線を巡らす。

図7で内面に轆轤痕が見られる。口唇部に煤が付着する。

図8は白化粧土で圈線4本を施す。器色は、明橙黄白色を呈す。

b種：口縁部は内彎し、口唇は円味を帯びるもので、先端部は膨らむ。

内面に轆轤痕が認められる。胎土は前者に比べて砂っぽい。

その他に鉢およびすり鉢が各々1点ずつ出土している。前者は口縁部、後者は胴部である。

まとめ

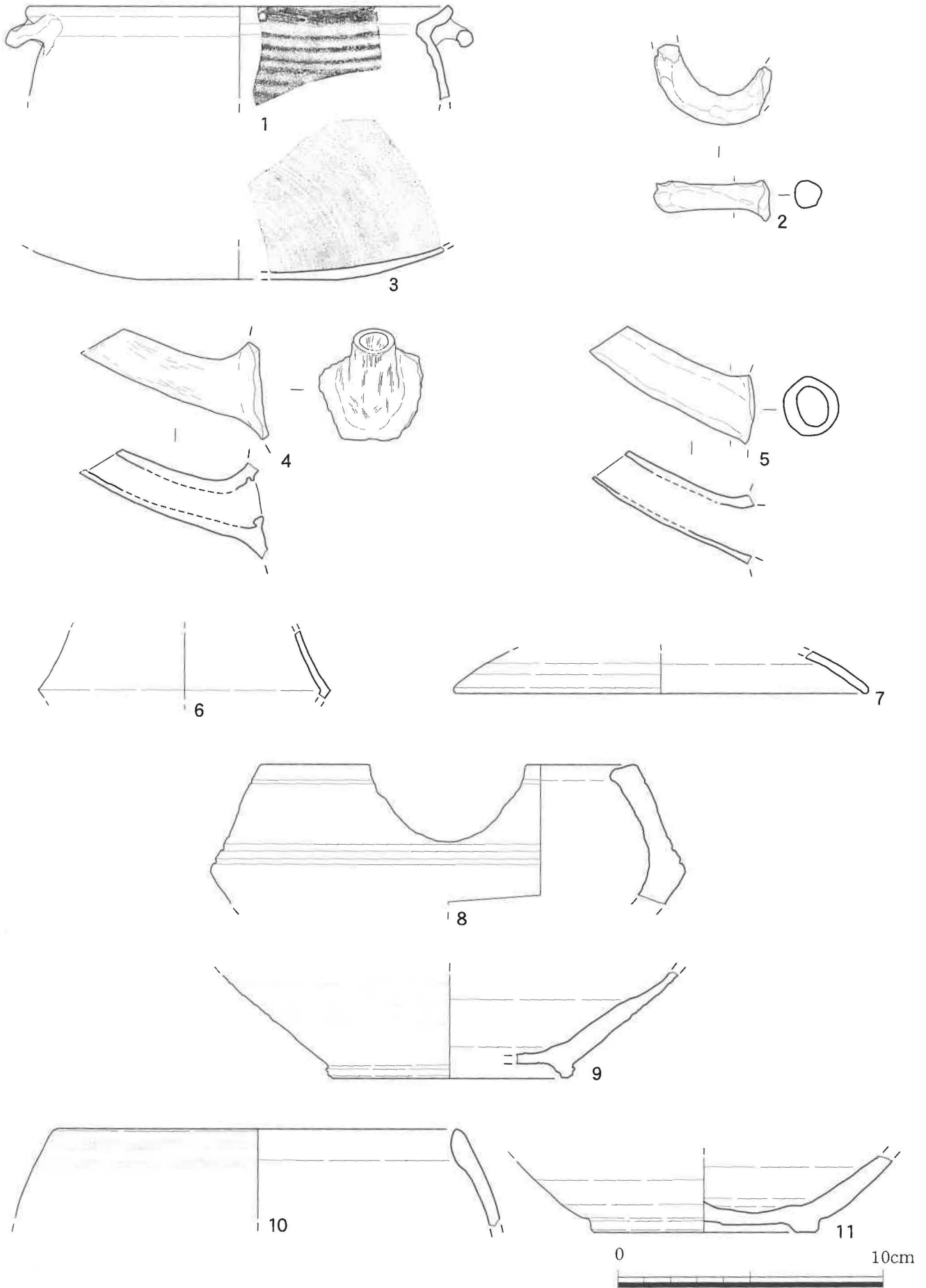
陶質土器は鍋や火炉など煮炊きに用いる器種が多いようである。

表44 陶質土器出土量

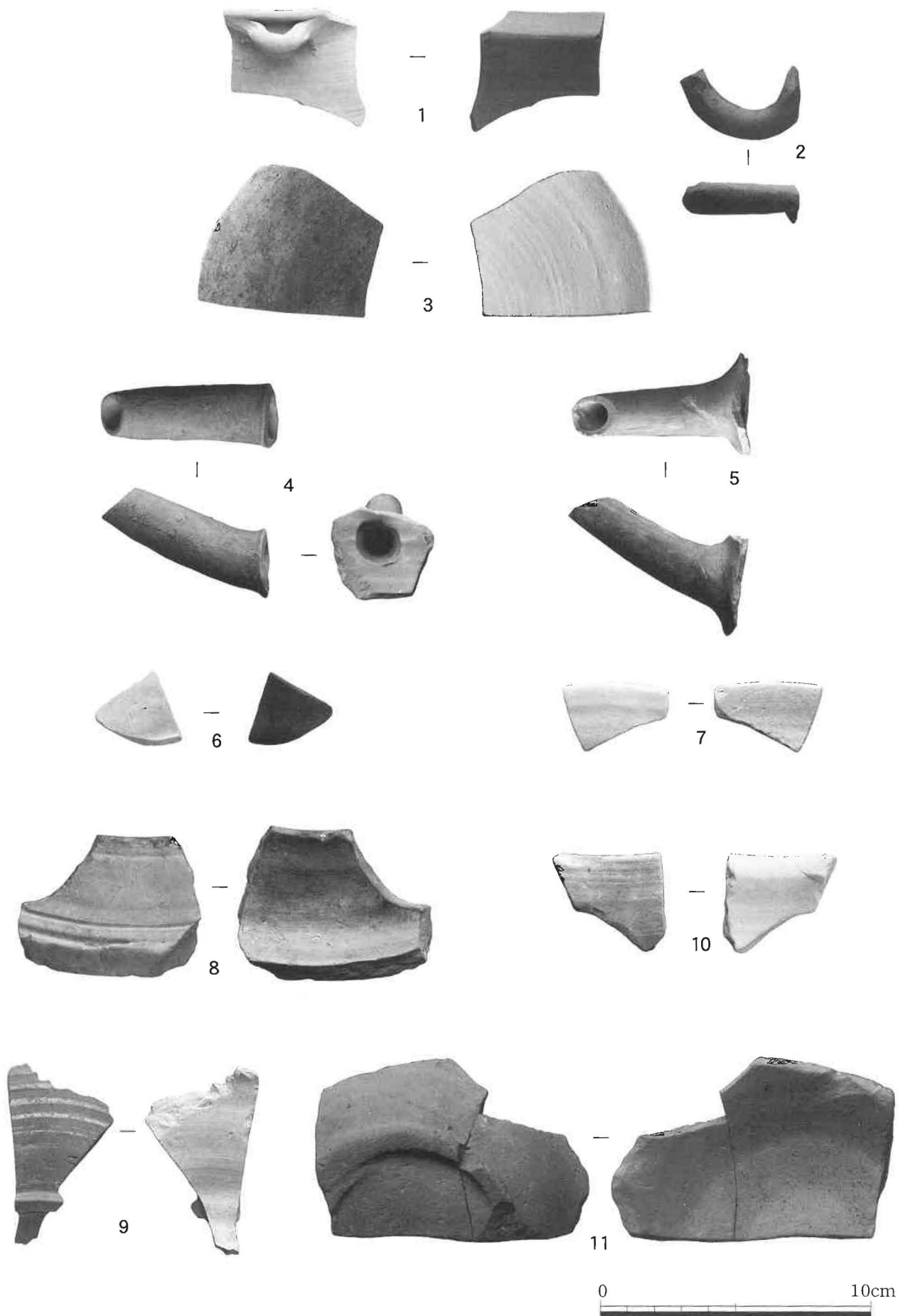
出土地			種類	急須	鍋	蓋	鉢	すり鉢	火炉	不明	小計	層集計	グリット集計
グリット	層	種類											
A-1	褐色土層	胴								1	1	2	2
		底		1							1		
A-1 東	暗褐色砂質土層	底		1							1	1	1
A-3	白砂層	胴								1	1	1	1
B-1	表採・表土層	口							1		1	8	15
		底		6							6		
		耳		1							1		
	床面清掃	胴		1						1	1		
白(色)砂層	底			1							1	1	
	胴			5							5	5	
B-2	表採	口		4							4	7	12
		底		3							3		
壁面清掃	口			5							5	5	
	胴					1					1	5	7
表採・表土層	口		1							1			
	底			1				1		2			
注口	注口		1								1		
	壁面清掃	口							2		2	2	
B-4	表採・表土層	口					1				1	5	6
		胴								2	2		
	底								2	2			
淡黒褐色砂質層	胴									1	1		
B-5	表土層	胴						1			1	1	1
不明	不明	胴							1		1	1	1
合 計				2	29	1	1	1	7	5		46	
備 考						鍋							

表45 陶質土器観察一覧

第 図 版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第76図(図版52)	1	鍋(耳)	口・耳	口径16.0cm	小タイプ。口縁は内側に「く」。器色は明橙色。胎土に黄色の光るもの有り。外耳の厚さは6mm、幅は35mm。内面にロク口痕。	B-2 表採 011108
	2	鍋	耳	—	器色は明橙色。厚さ10mm。内外面にユビ痕。	B-1 表土層(重機) 011107
	3	鍋	底部	底径 8.0cm	丸底。器色は明橙色。胎土に黄色の光るもの有り。外底に煤付着。内外面ロク口痕。	B-3 表土層 旧表土(盛土) 011226
	4	急須	注口部	—	器色は暗橙色。注口下部に10mm、煤のあと65mm、元-18mm	B-3 盛土 011226
	5	急須	注口部	—	器色は明橙色。注口下部に12mm。	B-1 表採 011108
	6	急須	胴部	胴径 9.0cm	器色は明橙色。内外面ロク口痕。	B-3 表採 011108
	7	鍋(蓋)	口縁部	口径 7.7cm	直口で、丸。器色は明褐色。内外面ロク口痕。	B-3 表採 011108
	8	火炉	口縁部	口径16.2cm	a種。口縁は内側「く」で筒。外面に白色土で圏線2本。器色は明赤色。口唇に灰付着。内面轆轤痕。	B-3 壁面清掃 011109
	9	火炉	底部	底径 9.0cm	a種。丸底。外面に白色土で圏線。器色は明橙色。白色土で圏線。内面轆轤痕。	B-1 表土層 020108
	10	火炉	口縁部	口径15.0cm	b種。内鬚。丸一先端にふくらむ。器色は明褐色。素地はa種に比べて砂っぽい。内面ロク口痕。	B-1 表採 011108
	11	火炉	底部	底径 8.4cm	高台タイプ、底から腰部に丸味。器色は明褐色。内面ロク口痕。	B-4 表土層(重機) 011107



第76図 陶質土器



図版52 陶質土器

5. 沖縄産施釉陶器（第77・78図・図版53・54）

器種別には碗56点、小碗6点、皿3点、鉢4点、鍋13点、瓶5点、油壺11点、壺1点、急須6点、酒器1点、蓋3点、火炉4点、灯明具1点、不明4点の計118点出土した。

a. 碗

碗は口縁部27点、胴部17点、底部12点計56点で、出土別にはAトレンチで8点、Bトレンチで48点である。

碗は施釉の方法から白化粧施したもの（Bタイプ）と施してない（Aタイプ）ものに大別される。また形態から口縁部は直口するものと外反するもの、底部は腰部がストレートに立ち上がるタイプと円味をもつものがある。

以下、Aタイプ（白化粧なし）、Bタイプ（白化粧あり）の順で、口縁部・底部の形態も含めて略述する。詳細は表47に観察一覧、表46に遺物の出土状況を示し、図および写真を第77・78図、図版53・54に提示した。

①Aタイプ（白化粧のないもの）

・口縁部

図1は灰釉碗で、口縁部は直口口縁で、底部もストレートに立ち上がる。釉はやや厚めに塗られ、若干気泡が見られる。釉はフィガキー法で、露胎は淡灰色を呈する。

図2は口縁部で、若干外反する。釉は外面が黒釉、内面が暗灰釉で、掛け分けのようである。

・胴部

図3は胴部で、外面は黒釉、内面は透明釉である。底部近くに黒釉で薄く圏線を描く。表採資料である。

・底部

図4は底部で、腰部はストレートに立ち上がり、釉は内外面に施されてなく、いわゆる「フィガキー」である。

図5も底部で、前述の図4よりは腰部は若干丸味を帯びるが、施釉は前者の図4と同じである。

図6も前2者と同じく「フィガキー」に分類されるものであるが、内底に銹釉で丸文を施すものである。しかし、畳付に白化粧土が確認される。

図7は腰部が若干丸味を帯びるもので、内外面とも薄い黒釉が施される。釉は腰部から内底まで無釉、内底は蛇の目釉剥ぎが施されている。

図8は腰部の円味が強く、成形が丁寧である。釉は透明釉で、内底は総釉である。釉に貫入が見られ、胎土も細かいことから本土産陶器の可能性も考えられる。

図4→図5→図6→図7→図8の形態変化が想定される。

②Bタイプ（白化粧あり）

図9の口縁部は外反し、玉縁状を呈するもので、釉は内面が白化粧の後、透明釉、外面は銹釉を施すもので、いわゆる掛け分けである。そのため、口唇部は内外面の釉が異なるため黄味を帯びる。Aタイプ（白化粧なし）との過度的な様相を呈するものである。

図10は口縁部から底部が復元出来る資料である。口縁部は外反し、底部は緩やかな丸味を帯びるもので、外面には呉須釉を斑点状に丸文、その中央に黄釉で大きな斑点をつけたもので「イチチン」とされるものである。

底部は内底が蛇の目釉剥ぎで、外底が畳付部分が無釉で、白化粧土が確認され、その後、削り調整して円味を帯びる。

本品の技法は沖縄産施釉の終末のタイプで、類例は城間遺跡など、近世の遺跡で出土している。

図11は胴部で、白化粧を施した後に、内外面に呉須で文様を施すものである。呉須の絵付けが両面に見られることから皿か浅鉢の可能性も考えられる。

b. 小碗

口縁部3点、底部3点、計6点で、出土地はA-1 東で1点、Bトレンチで5点の出土である。

図12は口縁部で若干外反し、腰部は丸味を帯びるものである。釉は白化粧の後、透明釉を施したもので、口唇に緑釉を巡らしている。

図13は底部で、白化粧を施したのち、畳付を削りとっている。

c. 皿

口縁部1点、胴部1点の計2点出土した。

図14は波状口縁で、黒釉を施したもので、白化粧は認められない。

図15は外反口縁で白化粧の上に透明釉を施したものである。内面には呉須で草花文を描く。

d. 鉢

鉢は口縁部3点、底部1点の計4点で、出土地はAトレンチで1点、Bトレンチで3点である。

図16は口縁部近くで、外面が黒釉、内面が白化粧の後、透明釉を施したいわゆる掛け分で、B-3盛土で出土している。

図17は底部で、鉢の中でも大きい方で、高台の脚の高さが22mmを測り、畳付の方向に徐々に細くなる。内底は蛇の目釉剥ぎである。

e. 鍋

口縁部1点、胴部と底部はそれぞれ6点の計13点、出土地はAトレンチ1点、他はBトレンチである。

鍋の口縁部は蓋受けの為、内唇は釉が剥ぎとられている。

図18は錆釉を厚く施しているため、黒釉に近いが、内面の釉は薄い。

図19は底部で、外面は露胎で、内面は暗灰釉が施され、内面は明瞭な轆轤痕、外面は若干煤が認められる。器厚は7mmと他に鍋に比べて厚いようである。B-2溝状遺構の出土である。

図20は直径12mm、瘤状を呈するもので、鍋の脚である。内底に錆釉が施されている。

f. 蓋

3点で、いずれもBトレンチで出土した。

摘みの形は饅頭タイプと高台タイプの2種があり、前者は急須の蓋、後者は鍋か油壺の蓋と考えられる。

図21は饅頭タイプで、摘みの径は18mmを測り、その中央に径2mmの孔を貫通する。おそらく中の蒸気を抜くためのものと思われる。釉は外面の全面に呉須を施し、内面は白化粧のみである。

高台タイプは2点出土した。図22は摘みのみで、畳付に相当する部分、及び摘みの内部は釉が施されてない。釉色は黒釉で、蓋は小さく、大きさから油壺の蓋と思われる。

図23は図21と同じ、油壺の蓋と考えられ、図22よりは若干小さくなる。摘み部の先端も細くなる。

g. 火炉

4点でいずれもBトレンチで出土した。

図24は胴部で、黒釉に白化粧なく、外面に深い線彫りを施す。

線彫りは胴部で斜めに数条、その下部に横位に二条施すものである。

図25・26は口縁部で口唇に呉須で圍繞するものである。施釉は白化粧の後、透明釉、内面は白化粧のみである。

内唇一剥離、共通、意味がある。

h. 急須

急須は取手1点、底1点、耳1点、胴部2点の径5点の出土である。

出土地はすべてBトレンチの表土層あるいは表面採集である。

急須は大型と小型に分類される。

・小型

図27は口縁部と耳の部分である。口縁部は直口で円味を帯びる。白化粧に透明釉を施し、耳のまわりは緑～青釉をかける。

図28は底部で白化粧のあと透明釉を施し、線刻と呉須で文様を施す。

・大型

図29は大型の急須の取手である。釉は黒色である。取手の幅は44mm、厚さ7mmである。湧田古窯跡で報告されている。

i. 油壺

口縁部1点、胴部4点、外耳1点、底部3点の計11点出土した。

Aトレンチで1点、Bトレンチ10点の出土でそのほとんどは表土層の出土である。

図30は口縁部である。

口唇部は釉は施されて無く、全体的に剥離が見られることから、剥離は意図的なものと思われる。

口縁部は内唇に三角形状に肥厚する。

釉は黒釉でやや薄い。外耳の中央の位置に圈線を1条、繞らす。内面は轆轤痕が明瞭に見られる。

図31は外耳の部分である。耳は縦35mm、幅10mmの縦耳で、径8mmの孔を横位に施す。黒釉を施すが、裏面の釉は気泡が見られる。

図32は底部である。

畳付け、外底は釉は施されてなく、内面は轆轤痕が認められ、内底は蛇の目釉はぎが見られ、熔着痕がある。多量の砂が付着する。

j. 瓶

口縁部1点、胴部4点の計5点出土している。

A-2で1点、Bトレンチで4点の出土でそのほとんどは表土層の出土である。

K. 酒器

注口が1点出土した。

図34は酒器の注口である。

注口のまわりは茶色の釉を繞らす。内面には轆轤痕が認められる。

I. 灯明具

底部が1点出土。

図35は灯明具の底部で、径は2.3cmを測る。

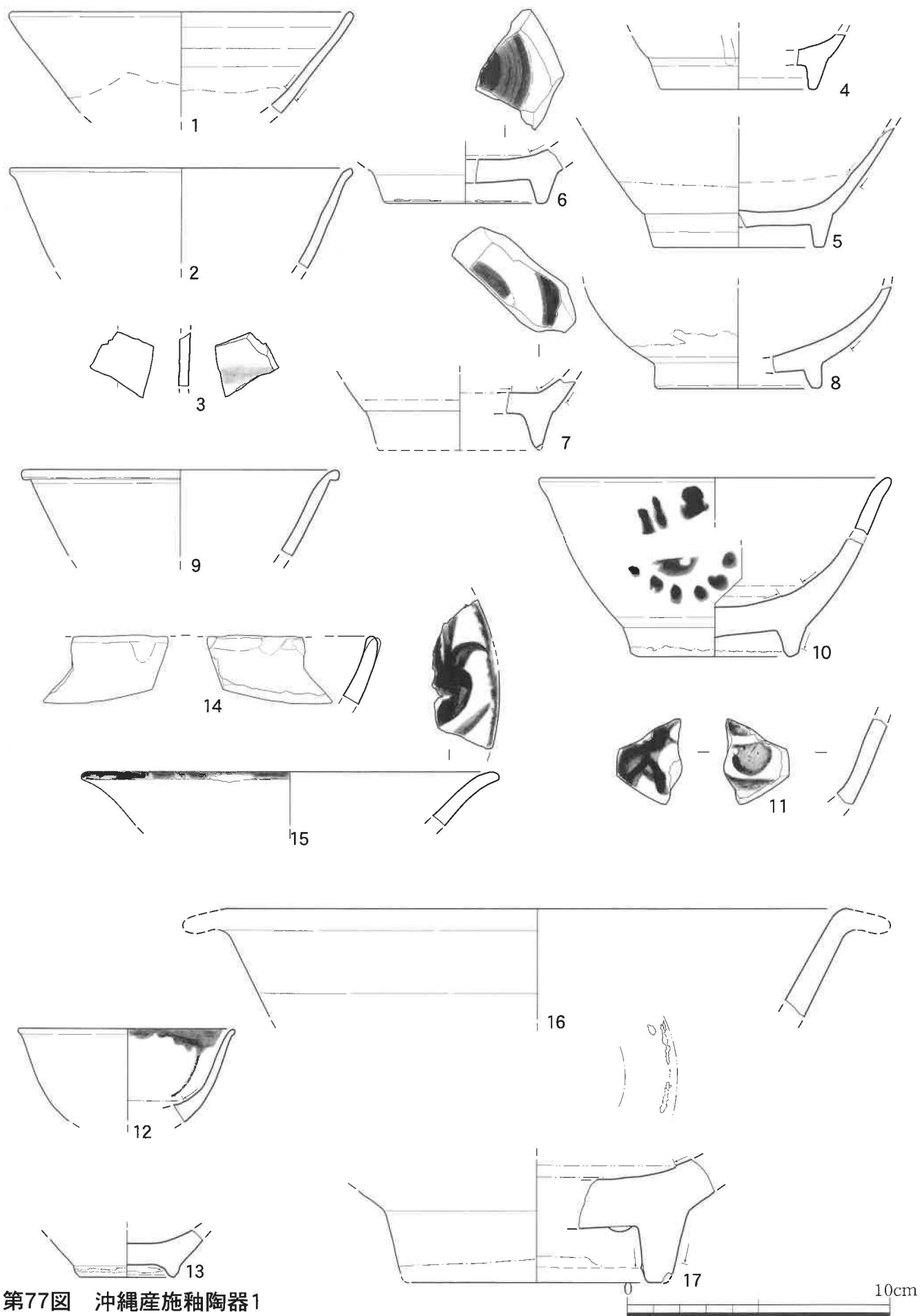
釉は透明釉で、底面は無釉である。

表46 沖縄産施釉陶器出土量

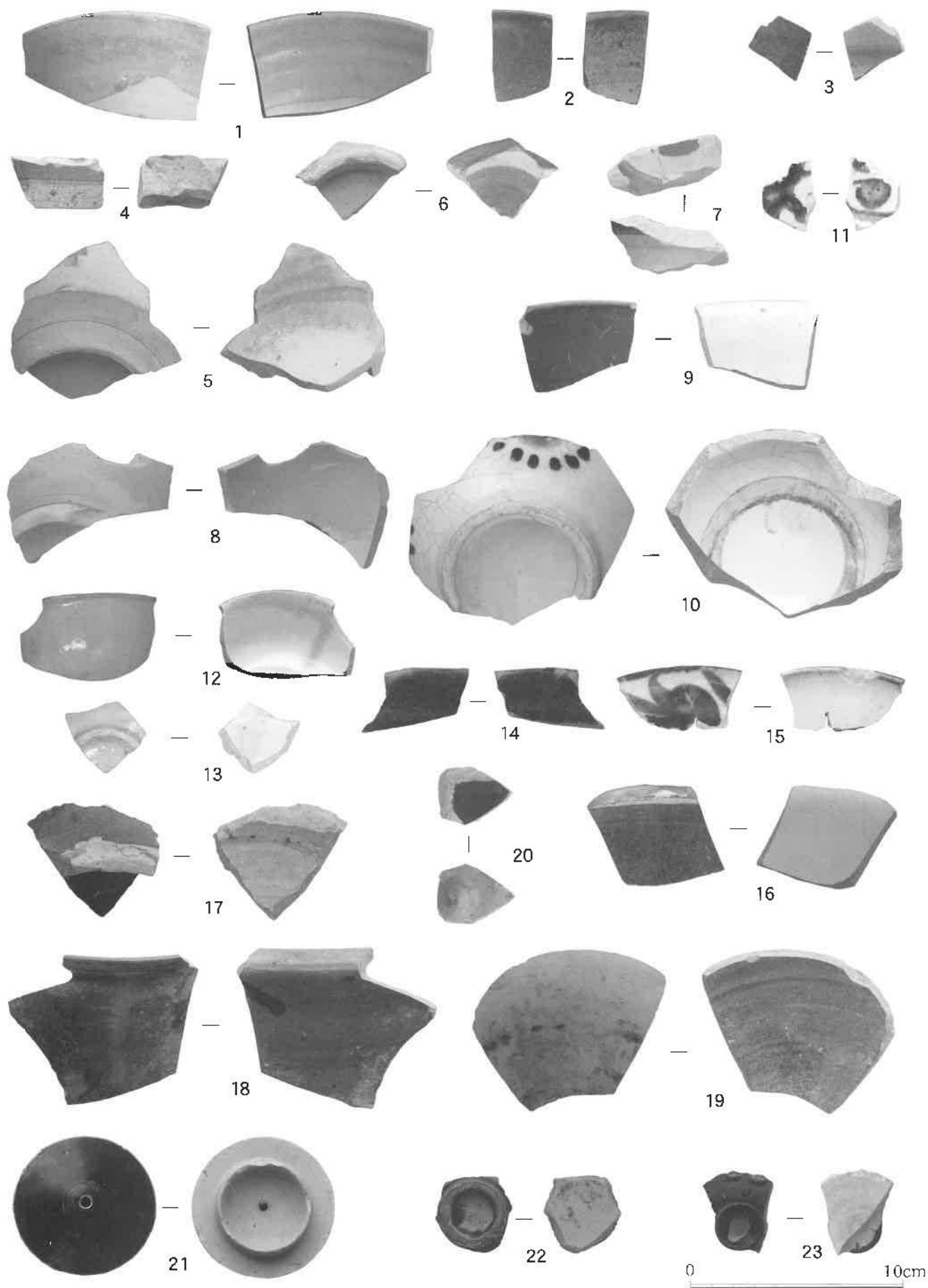
出土地		種類	碗	小碗	鍋	壺	油壺	火炉	急須	瓶	鉢	蓋	皿	酒器	灯明具	不明	小計	層集計	グリット集計		
グリット	層	種類																			
A-1	褐色土層	胴	2														2	2	2		
A-1 西	壁面清掃	胴														1	1	1	1		
A-1 東	壁面清掃	底		1													1	1	1		
A-2	表採	口	1														1	1	8		
	暗褐色シルト層	胴	1														1	3			
		底					1				1						2				
	暗褐色砂質土層	口	1															1		3	
		胴	1															1			
	底	1															1				
A-2(南東隅)	暗褐色層	胴			1												1	1	2		
	表土層	胴	1							1							2	2			
B-1	表採	口	3	2							1						6	17	26		
		胴	4		1	1	1				1				1	9					
		口～底	1							1							1				
		取手															1				
	床面清掃	口							1									1		3	
		胴	2															2			
	白砂層	口	1															1		5	
胴						1	1										2				
	底	1		1													2				
	白色砂層	底										1					1	1			
B-2	表採	口	4	1									1				6	17	31		
		胴			1				2								3				
	底	2									1					3					
	溝状遺構	底			1												1			1	
	白砂層	口	1														1			2	
	胴	1															1				
	白色砂層	口	1														1	1			
	壁面清掃	口											1				1	1			
B-3	表採・表土層	口	6		1		1	2			1						11	30	21		
		胴			2		4			1			1			1	9				
		底	2	1			2		2								7				
		口～底	1									1					2				
	壁面清掃	耳				1											1	1			
B-4	表採・表土層	口	3														3	21	7		
		胴	1		1												2				
		底	1		1												2				
	淡黒褐色砂質層	注口											1				1			1	
	淡黒色砂質層	口	1								1									2	7
		胴	2																	2	
		底	1	1	1															3	
茶褐色砂質層	口	1															1	2			
	胴															1	1				
茶褐色層	口	1															1	1			
	胴																1				
白砂層	口	1															1	3			
	底	1		1													2				
B-5	表採・表土層	口	1								1						2	4	7		
		胴	1														1				
	耳								1								1				
白砂層	底	1		1											1		3	3			
	口	1															1				
不明	不明	口	1														1	2	2		
		胴	1															1			
合計			56	6	13	1	11	4	6	5	4	3	3	1	1	4		118			

表47 沖縄産施釉陶器観察一覧

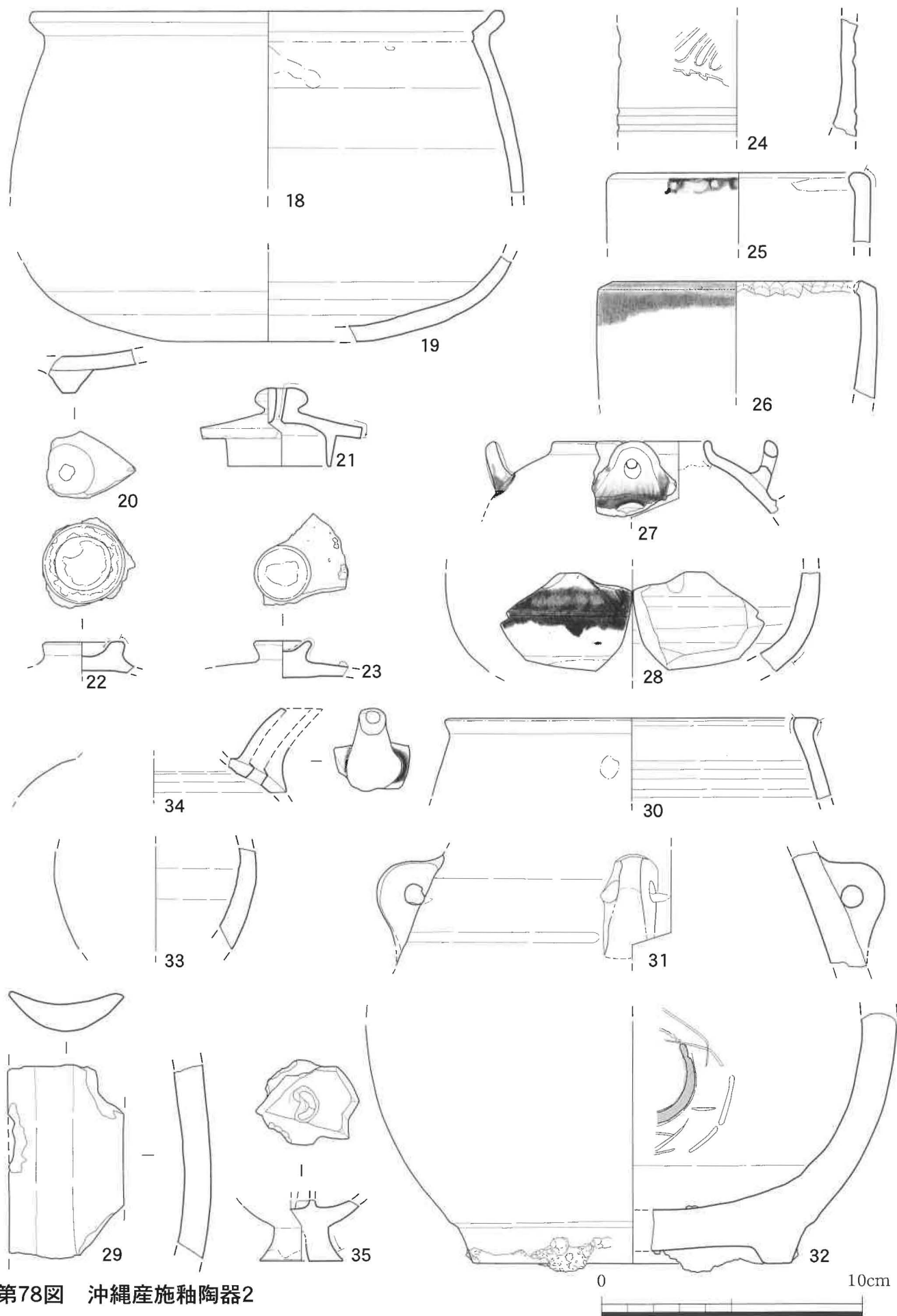
第 図 図版	報告 番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第77図(図版53)	1	碗	口縁部	口径13cm	直口。内外面:灰釉白化粧無施釉:フィガキー。素地:淡灰色。内面:轆轤痕	B-4 表採 011108
	2	碗	口縁部	口径13cm	外反、玉縁。外面:黒釉、内面:灰釉、白化粧無。素地:暗灰色。内面:轆轤痕	B-1 表採 011108
	3	碗	胴部		施釉:フィガキー。	不明不明不明
	4	碗	底部	底径6cm	腰部はまっすぐ。透明釉	
	5	碗	底部	底径6.4cm	腰部はまっすぐ。内外面:灰釉、フィガキー。素地:乳色。内わずかに轆轤痕	B-1 白砂層 011130
	6	碗	底部	底径6.2cm	腰部はやや丸い。丸文畳付に白化粧。施釉:腰部~外底無釉蛇(銹釉で丸文)。素地:淡赤褐色。外面:轆轤痕	B-2 表採 011108
	7	碗	底部	底径6.2cm	銹釉、丸文内外面:黒釉、白化粧無。施釉:腰部~外底無釉、蛇の目。素地:淡乳色。	B-4 淡黒色砂質層 011130
	8	碗	底部	底径6.4cm	腰部は丸い。内外面:透明釉、白化粧無。施釉:腰部~外底無釉総釉。素地:乳色。	B-5 白砂層 011114
	9	碗	口縁部	口径12cm	外反、玉縁。外面:銹釉、内面:透明釉、白化粧有。素地:淡乳色。	B-2 表採 011108
	10	碗	口~底部	口径13cm 底径6.1cm	外反切味、舌状。文様:イッチン、黄釉と呉須の二彩。内外面:透明釉、白化粧有。施釉:畳付無釉蛇→白化粧→ケンマ。素地:乳色。	B-3 表土層(重機) 011107
	11	碗	胴部		文様:内外面-呉須で草花文。内外面:透明釉、白化粧有。素地:乳色。	B-4 淡黒色砂質層 011130
	12	小碗 小	口縁部	口径8.2cm	外反、舌状。内外面:透明釉、白化粧有。素地:淡灰色。	B-1011129
	13	碗	底部	底径3.6cm	内外面:透明釉、白化粧有。施釉:畳付無釉総。素地:乳色。	B-4 淡黒色砂質層 011130
	14	皿	口縁部		直口、丸(波状)。内外面:黒釉。素地:暗乳褐色。	B-5 表土層旧表土(盛土) 011227
	15	皿 中	口縁部	口径15.8cm	外反。呉須で草花文透明釉。白化粧有。素地:気泡、乳色。	B-2 壁面清掃 011108
	16	鉢 (ワンブー)大	口縁部	口径23cm	外反、L字状。外面:黒釉、内面:透明釉白化粧釉。かけ分け。素地:乳色。	B-3 表土層旧表土(盛土) 011226
	17	鉢 大	底部	底径10cm	高台高2.8cm。外面:黒釉、内面:透明釉。白化粧有。かけわけ。施釉:畳付無釉、白化粧有蛇の目。素地:乳色。	011107
第78図(図版54)	18	鍋	口縁部	口径18cm	外反、L字状-内湾切味。薄い黒釉茶(銹)薄い内面轆轤痕	B-3 表土層埋土 020107
	19	鍋	底部	最大胴径18.5cm	外面:無釉。内面:施釉。素地:灰色。底部と胴部に轆轤痕	B-2 溝状遺構 011114
	20	鍋	底部	脚径12.0mm	脚。外面:無釉。内面:サビ釉素地:乳色。	B-4 淡黒色砂質層 011130
	21	蓋 a摘み	摘	口径6.2cm、器高3cm、底径3.9cm	白釉(雑)白化粧。素地:灰色。内面:轆轤痕	B-3 表土層(重機) 011107
	22	—	摘	口径2.2cm	外面:黒釉、内面:無釉。施釉:外底無釉。素地:淡灰色。内面:轆轤痕	B-2 表採 011108
	23	蓋(高台タイプ)	摘	撮み径3.1cm	外面:黒釉内面:無釉。施釉:畳付~外底無釉。素地:灰褐色。	B-1 白色砂層 011112
	24	火炉	胴部	胴径9.0cm	文様:線彫りに呉須(単彩)外面:透明釉、内面:無釉。素地:乳色。内面:轆轤痕	B-1 白砂層 011130
	25	火炉	口縁部	口径10.6cm	直口、L字内湾。文様:口唇に呉須。内外面:透明釉、白釉(雑)。白化粧有。素地:淡灰色。内面轆轤、内唇剥離。	B-3 表採 011108
	26	—	口縁部	口径10.0cm		B-1 床面清掃 011109
	27	急須 小	口と耳	口径6cm	直口、丸。文様:耳のまわりに緑~青釉。内外面:透明釉、白化粧有。有素地:灰色。	B-5 表採 011108
	28	急須 小	底部	最大径14.5cm	文様:線彫りに呉須(単彩)外面:透明釉、内面:白化粧。白化粧有。施釉:畳付白化粧、白化粧。素地:乳色。	B-2 表採 011108
	29	急須 大	摘	取っ手幅4.4cm	黒釉。素地:灰褐色。	B-1 011129
	30	油壺 中	口縁部	口径14.2cm	内湾、三角。文様:耳と耳の間に沈線文。内外面:黒釉 素地:乳色。内面に轆轤痕	B-3 表土層旧表土(盛土) 011226
	31	油壺	胴部耳	最大胴径19.0cm	内外面:黒釉 素地:暗灰色。裏面の釉に気泡	B-3 表土層(重機) 011107
	32	油壺 中	底部	最大胴径20.2cm 底径12.2cm	内外面:黒釉 施釉:畳付~外底無釉蛇(熔着痕有り)。素地:淡灰色。内面:轆轤痕	B-3 表土層旧表土(盛土) 011226
	33	瓶	胴部	最大胴径7.5cm	外面:灰釉。白化粧無。素地:淡灰色。内面:轆轤痕。	B-3 壁面清掃 011109
	34	酒器	注口	最大胴径10.3mm	文様:注口のまわり茶釉。透明釉白化粧無。素地:淡灰色。内面轆轤痕	B-4 淡黒褐色砂質層 011116
	35	灯明具	底部	底径2.3cm	内外面:透明釉、白化粧無。施釉:畳付~外底無釉。素地:淡灰色。	B-5 白砂層 011114



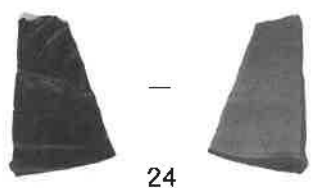
第77図 沖縄産施釉陶器1



図版53 沖縄産施釉陶器1



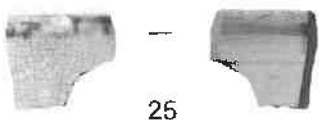
第78図 沖縄産施釉陶器2



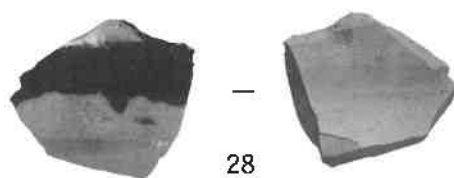
24



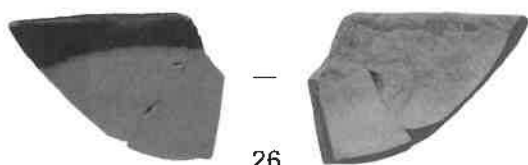
27



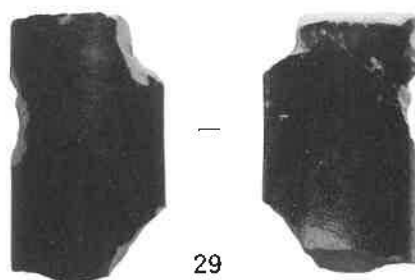
25



28



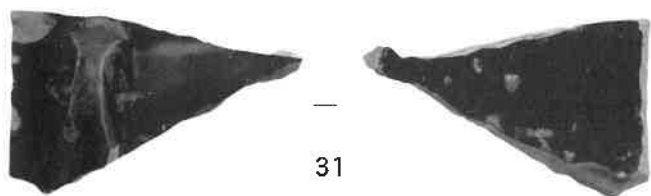
26



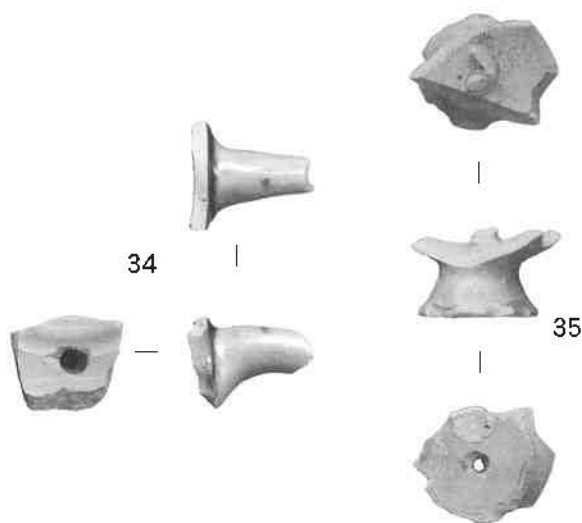
29



30



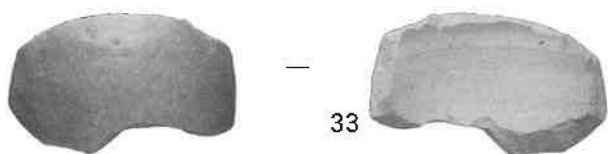
31



34

35

33



32



図版54 沖縄産施釉陶器2

6. 沖縄産無釉陶器 (第79・80図・図版55・56)

沖縄産の無釉陶器で俗に「アラヤチ」と呼称されているものである。

器種別には鉢6点、すり鉢5点、火炉1点、水甕6点、瓶4点、壺は中1点、大4点、不明24点の計81点出土した。

他に沖縄産無釉陶器製の煙管や二次加工した円盤状製品も出土している。

出土地はAトレンチ7点、Bトレンチ62点、不明2点である。

- ・鉢は6点出土した。

図1は鉢で、口縁部は「L」字状の口縁部はL字の幅は29mmを測り、その先端部はやや膨らみ、圏線が施される。暗茶褐色内外面とも轆轤痕が確認される。

- ・摺り鉢は口縁部2点、胴部2点、底部1点、計5点出土した。

図2は「L」字状の口縁で、その幅は21mmを測る。口唇部に圏線を施したものである。内面のすり目は粗い。

図3は「L」字幅が28mmである。

図4は底部で、脚台状のタイプである。器色は前者に比べて暗く、すり目も前者に比べて深い。すり目の幅は22mmを測る。

- ・火炉は口縁部が1点出土した。

図は省略する。

- ・瓶は口縁部1点、胴部3点、計4点の出土である。

図5は瓶か小壺の底（上げ底）部である。底部の形態は上げ底になることから瓶の底部の可能性が高い。器色は明茶褐色で内外面とも轆轤痕が明瞭に残る。

- ・水甕は口縁部3点、胴部3点の計6点出土した。

図6は口縁部で「L」字状を呈し、直口するものである。「L」字の幅は52mmを測り、その縁深い圏線を巡らすものである。また、内唇の近くは凹み、L字の口縁部の先端は若干ふくらむ。Bトレンチの旧表土で出土している。

図7は口縁部断面が四角形（ハブラシ）に肥厚するタイプである。肥厚部には2条の圏線を施すものである。器色は暗茶褐色を呈し、内面はロクロ痕が施されている。また、外面に石灰分付着する。

図8は胴部で胴上部にヘラ状の工具で圏線と幅15mmの波状文を施す。内面は轆轤の後に剥離が確認できる。

- ・壺はほぼ完形が1個、表土層で出土している。他に底部8点、胴部19点が出土した。

壺は大、中、小に分類される。

壺の小型壺は4点出土した。

図9は小型壺の口縁部で、外反する。頸部に3条、胴上部に1条の圏線が施されている。黒色が見られるが墨の可能性もある。内面には轆轤痕が明瞭に残る。器厚は6mmと薄手である。

図10は小型壺の胴部である。頸部に5条の圏線が施されている。内外面に轆轤痕が見られる。

中型壺は1点出土した。

図11は口縁部で外反する。形状は三角形に肥厚するもので内外面に轆轤痕が認められ、調整

のため、凹みがある。器厚は前述に比べて10mmと厚い。

図12は「L」字状の口縁で、幅28mmを測る。口唇の側面に3条の圈線を施す。圈線は深い。

まとめ

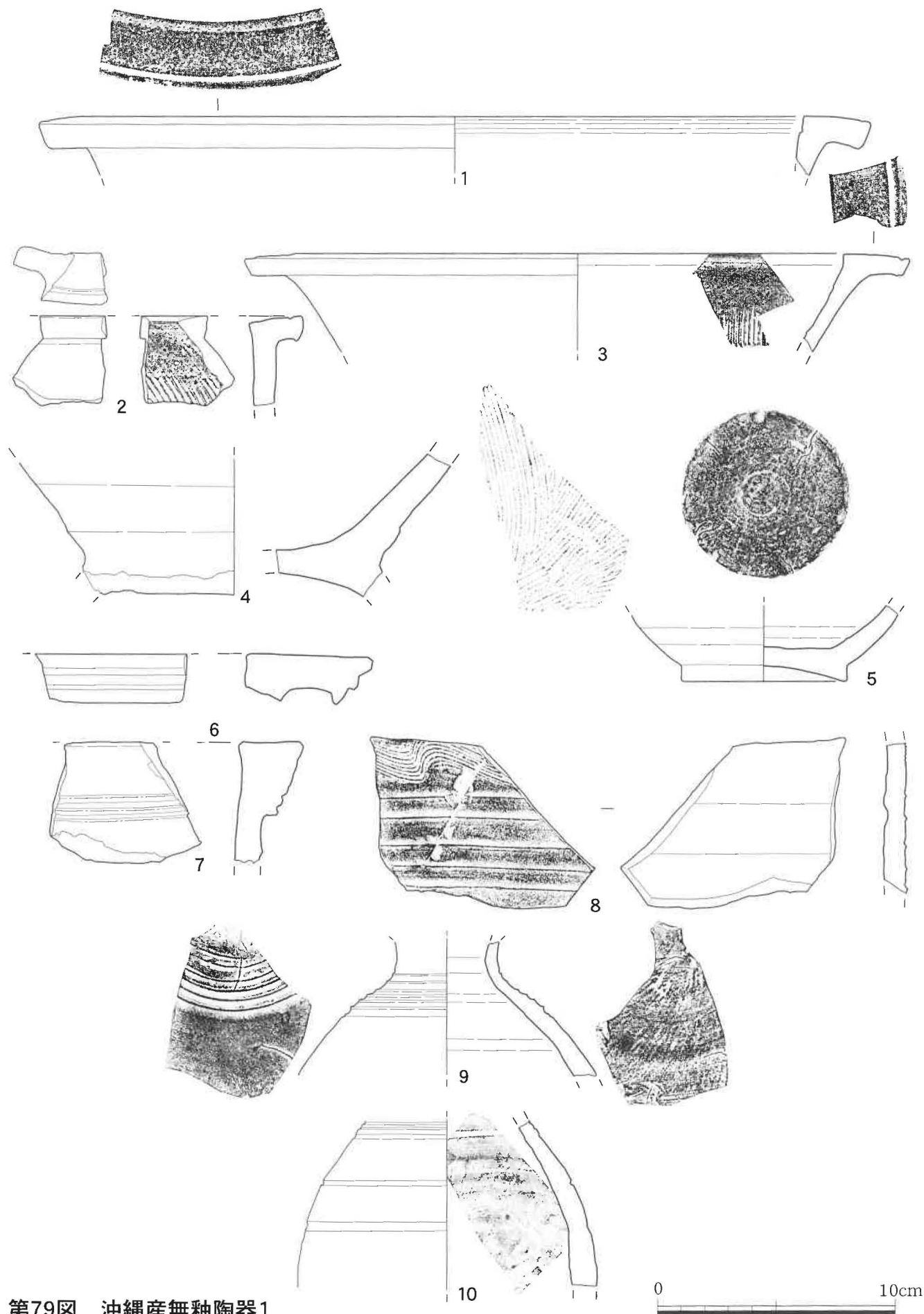
摺り鉢や鉢の口縁形態が「L」となすことから安里の編年でみると新しい時期に属するものと思われる。また、壺や水甕など貯蔵用や摺り鉢などの調理用の器種が主体をなす。

表48 沖縄産無釉陶器出土量

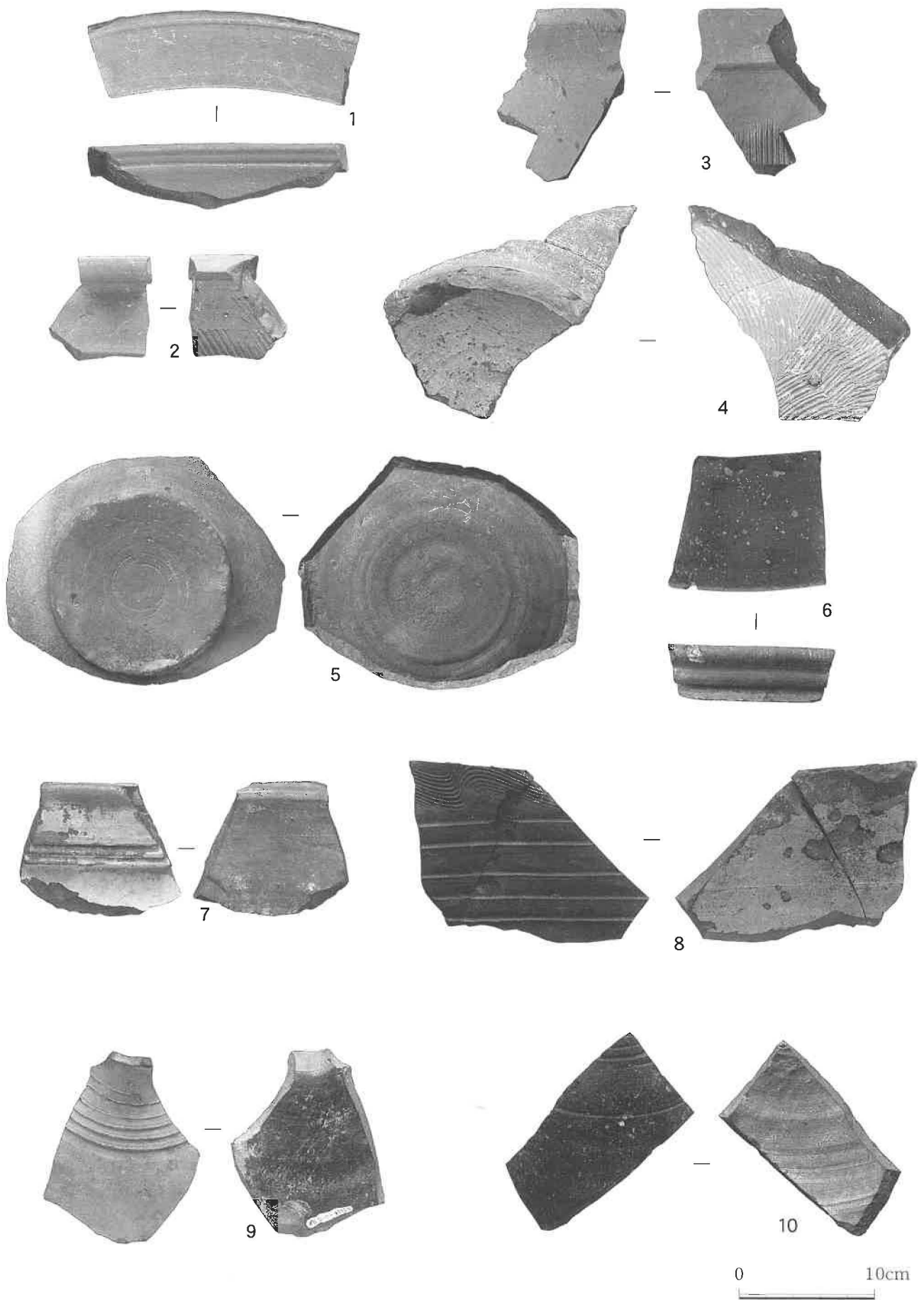
出土地		種類	壺	壺 (小)	壺 (中)	鉢	鉢 (すり鉢)	火炉	瓶	水甕	不明	小計	層 集計	グリット 集計
グリット	層	種類												
A-1	褐色土層	胴	1								1	2	2	2
	表土層	胴									2	2	2	
A-2	暗褐色シルト層	底	1			1						2	2	5
	暗褐色砂質土層	胴									1	1	1	
B-1	表採・表土層	胴	1	1					1		3	6	8	13
		底	2									2		
	床面清掃	胴	1							1	1	3	3	
	白砂層	口				1						1	2	
		胴	1									1		
B-2	空白	口					1					1	2	9
		胴	1									1		
	溝状遺構	胴	1									1	1	
	白砂層	胴	1									1	1	
	壁面清掃	口								1		1	5	
		胴								1	2	3		
		底					1					1		
B-3	表採・表土層	口			1	1		1	1	1		5	20	23
		胴	4				1			1	5	11		
		底	3								1	4		
	壁面清掃	胴								2	2	3		
		底								1	1			
B-4	表採・表土層	胴	2				1		1		2	6	8	18
		底	1	1								2		
	淡黒褐色砂質層	胴									1	1	1	
	淡黒色砂質層	口				1						1	3	
		胴	1									1		
		底	1									1		
茶褐色砂質層	口				1							1	3	
	胴							1				1		
	底		1									1		
	白砂層	胴	1	1							1	3	3	
B-5	表土層	口				1						1	3	9
		胴	2									2		
	白砂層	胴									1	1	1	
	壁面清掃	胴	1									1	1	
不明	不明	口					1			1		2	4	
		胴	1								1	2		
合計			27	4	1	6	5	1	4	6	25		79	

表49 沖縄産無釉陶器観察一覧

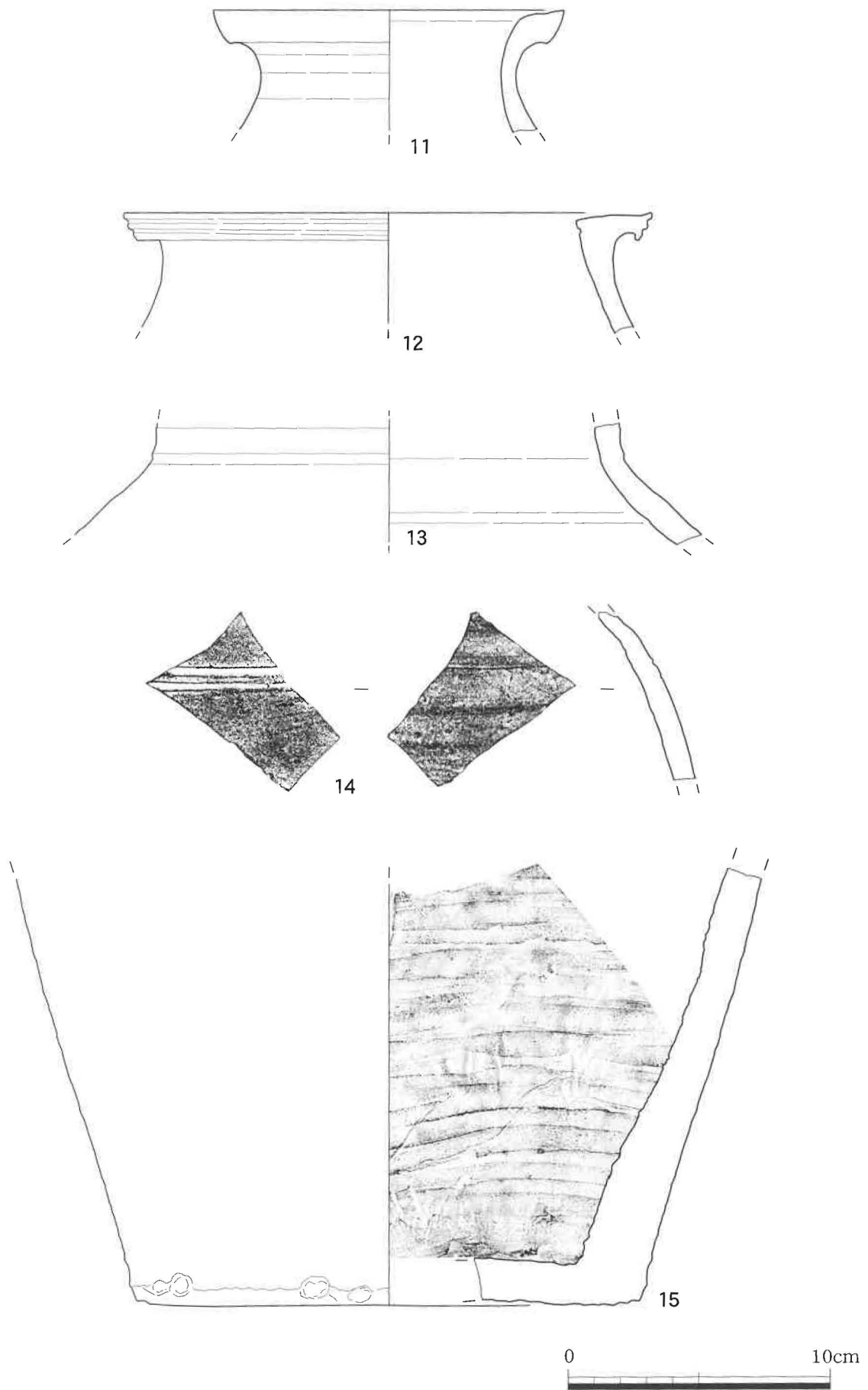
第図・ 図版	図番 号	器種	部位	口径 胴径 底径	観察事項	出土地
第79図(図版55)	1	鉢	口縁部	口径:28.5cm	分類:大。「L」字状、幅29mm。Lの断面はややふくらむ。口唇:深い沈線文。暗茶褐色内外面:轆轤痕。	B-5 表土層(埋土) 020107
	2	すり鉢	口縁部		「L」字状、幅21mm。すり目ー粗い、「L」の先端は丸味をおびふくらむ。暗赤褐色。内外面:轆轤痕。	B-2 遺構? 011113
	3	摺り鉢	口縁部	口径:28.0cm	「L」字状、幅28mm。	A-3壁面清掃Ⅱ層 010815
	4	すり鉢	底部		脚タイプすり目の幅は22mm内面:すり目深い。暗茶褐色	B-2壁面清掃 011108
	5	瓶or壺	底部	底径:7.0cm	分類:小。上げ底。明茶褐色内外面:轆轤明瞭。	B-4茶褐色砂質層 011116
	6	水甕	口縁部		直口、「L」字状、幅52mmL字の先端はふくらむ口縁に圈(深)暗茶褐色。内面:轆轤痕。(口唇近く凹む)	B-2壁面清掃 011108
	7	水甕	口縁部		分類:大直口、肥厚(ハブラシ形)。外面に石灰分付着。文様:肥厚部に圈線。暗茶褐色。内面:轆轤痕。	B-3表土層(旧表土) 011227
	8	水甕	胴部		圈(ハブで4条)、波(幅15cmの板で)内面:轆轤後に剥離。	B-1床面清掃 011109
	9	壺	胴部	最小頸径: 4.5cm	分類:小。文様:頸部に5条の圈線。暗茶褐色。内外面:轆轤痕。	B-1表土層 020108
	10	壺	胴部	最大胴径: 12.5cm	分類:小外反。文様:頸部に3条、胴上部に1条の圈線。内面に黒色を塗る。墨か。暗茶褐色。内面:轆轤痕明瞭。	B-4表採 011108
第80図(図版56)	11	壺	口縁部	口径:6.7cm	分類:中外反、肥厚(三角)。調整のため凹む。淡茶褐色。内外面:轆轤痕明瞭。	B-3表土層(旧表土) 011227
	12	甕	口縁部	口径:20.2cm	「L」字状、幅30mm文様:口縁部に2条の圈線、内唇に圈線。	不明
	13	壺	胴部	頸径:23.9cm	分類:中肩部をもつタイプ。淡赤褐色。内面:轆轤痕。	B-4 盛土 020109
	14	壺か甕	胴部		分類:大水甕の胴部かも文様:2条の圈線。暗茶褐色内面:轆轤痕。	B-3表土層(旧表土) 011227
	15	壺	底部	底径:19.2cm	分類:大直・カドの部分一削る。若干上げ底、形状から壺は細身明茶褐色内面:叩きと轆轤痕。	B-3表土層(旧表土) 011226



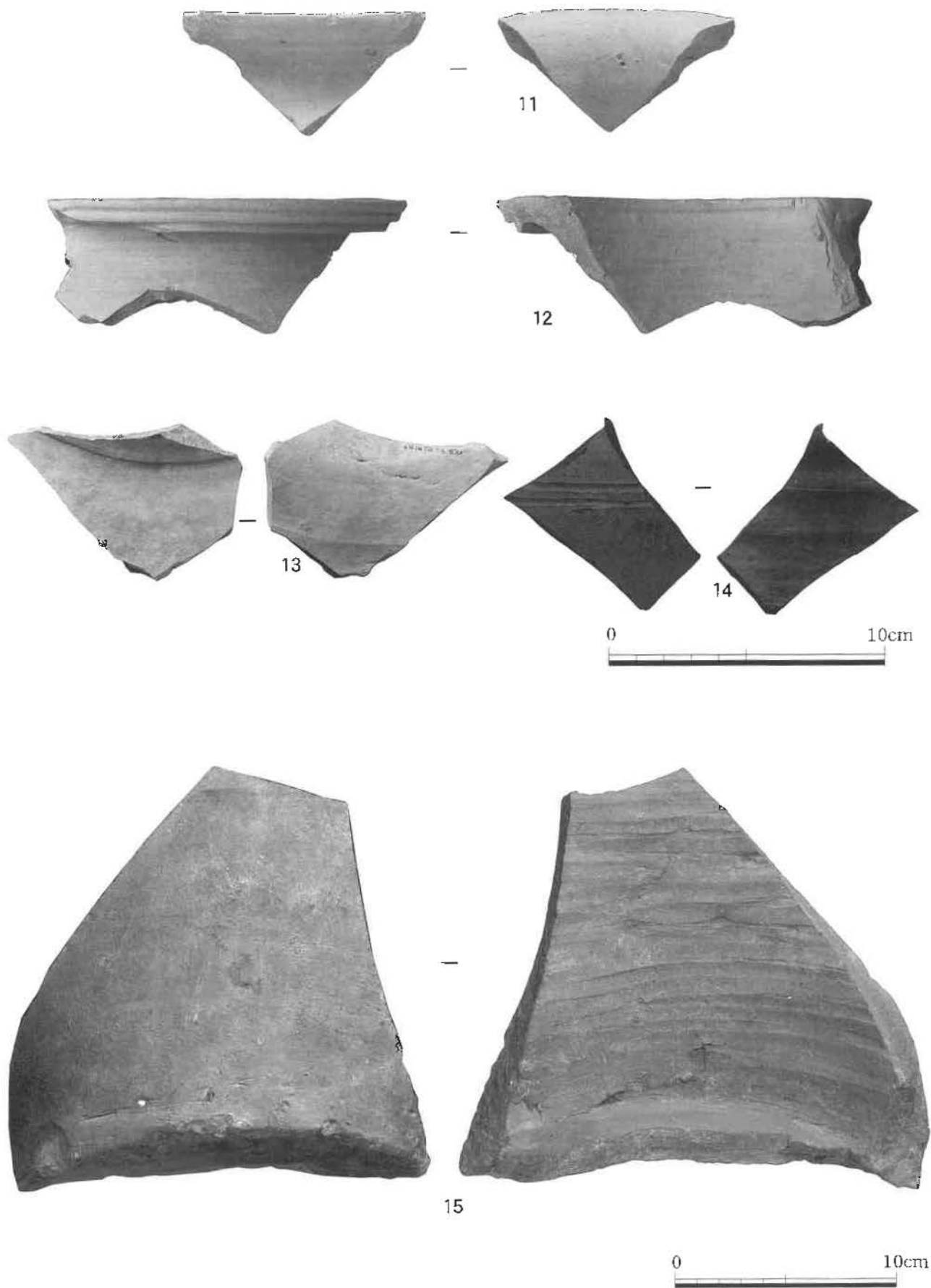
第79図 沖縄産無釉陶器1



図版55 沖縄産無釉陶器1



第80図 沖縄産無釉陶器2



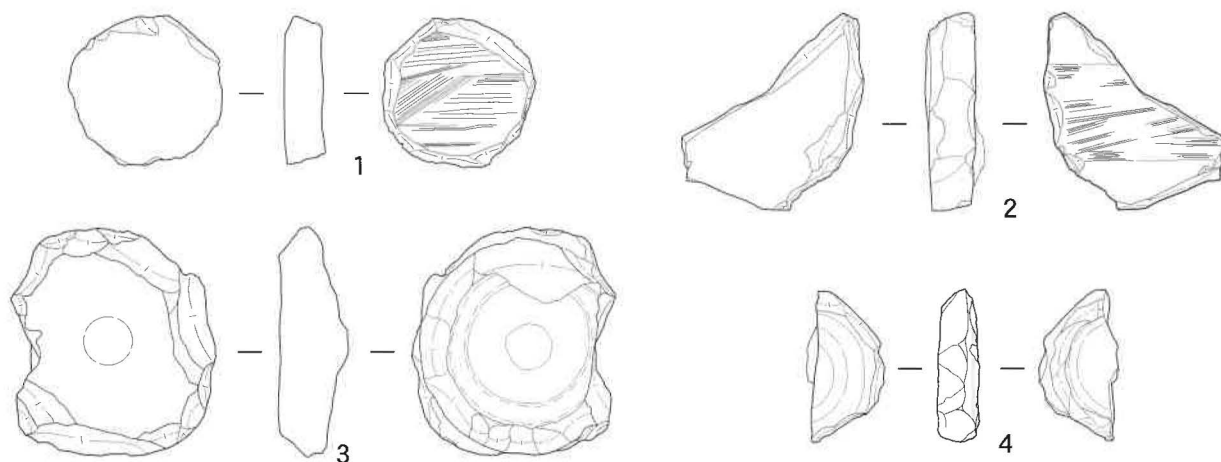
図版56 沖縄産無釉陶器2

7. 円盤状製品

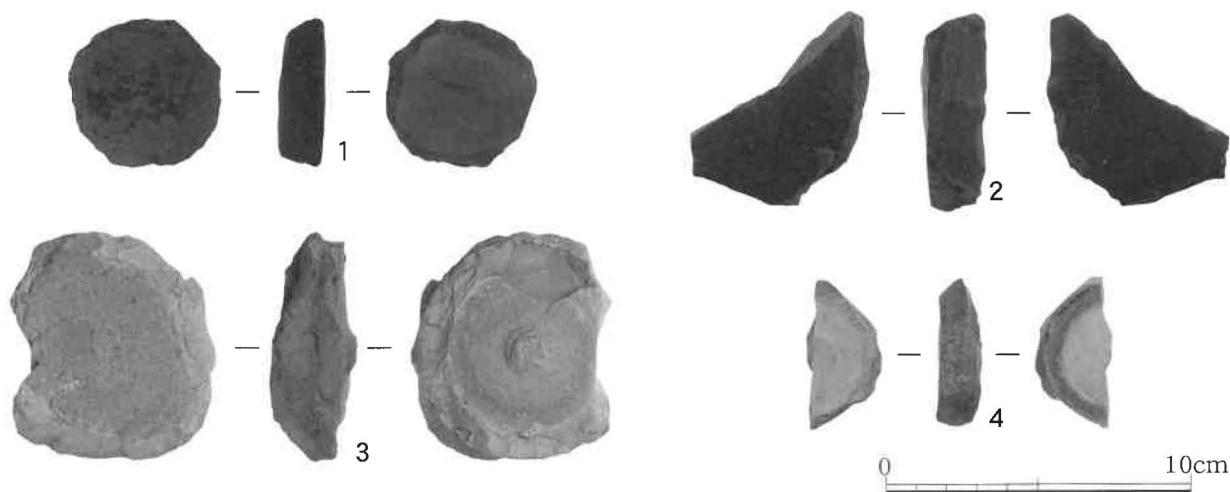
円盤状製品は器を二次加工したもので、本遺跡では4点出土している。
 沖縄産無釉陶器・青磁・染付を材料としている。大きさは4.9cm～8.1cmの幅がある。

表50 円盤状製品観察一覧

図・図版番号	図番号	材料	短軸 (cm)	長軸 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	観察事項	出土地
第81図(図版57)	1	沖縄産施釉陶器	4.8	4.9	1.2	46.9	甕の胴部を使用。やや丁寧な加工により円形を呈す。	B-1表土層 20011107
	2	沖縄産施釉陶器	5.5	6.4	1.4	59.71	甕の胴部を使用。やや荒い加工により楕円形を呈していたと思われるが半分が欠損している。	A-3壁面清掃(II層) 20010815
	3	青磁	7.6	8.1	2.3	124	碗の底部を使用。やや荒い加工により円形を呈す。高台から高台内部に被熱跡あり。	B-4茶褐色砂質層 20011116
	4	染付	2.5	4.9	1.1	17.47	皿の底部を使用。やや丁寧な加工により円形を呈していたと思われるが半分が欠損している。高台に被熱跡あり。	B-3表採 20020108



第81図 円盤状製品



図版57 円盤状製品

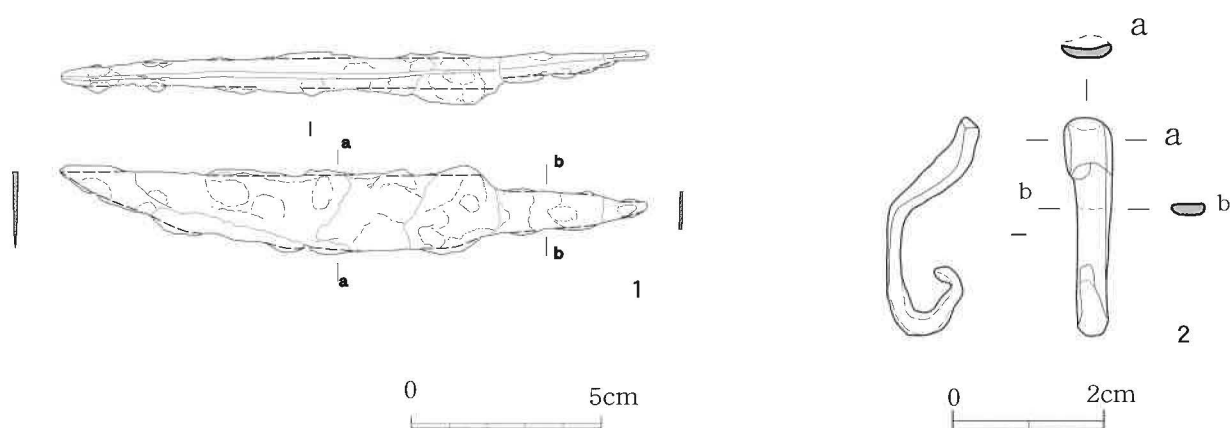
8. 金属製品

計2点出土している。1は鉄製の刀子で、全長15,7cm、刃部長10,8cm、幅2,0cm、重量38,91g。B-4白砂層から出土。内部は暗灰色を呈す。錆が原因か層状にひびが入り、脆くなっている。

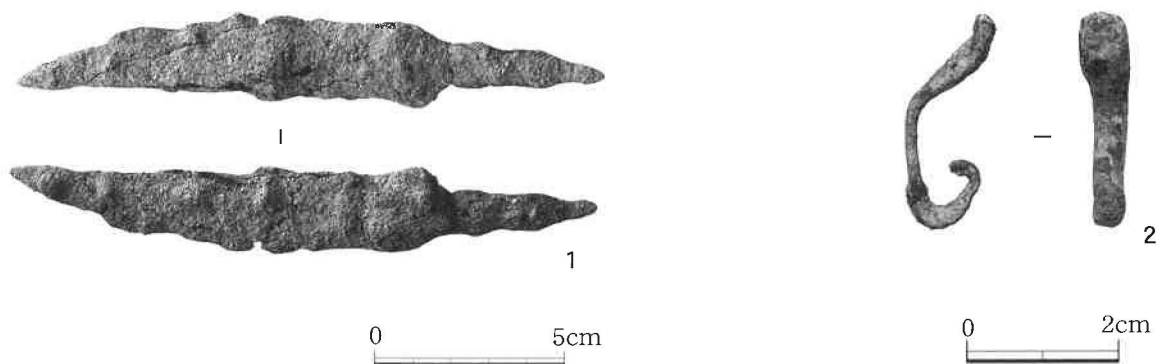
2は青銅製品で、残存長3.0cm、幅0.7cm~0.2cm、厚さ0.1cmで緑青色を呈す。断面形状は扁平な長方形である。幅の広いほうを頭部とした。類例は首里城^(註1)に見られるが、用途は不明である。A-1(西)から出土しているが、面縄前庭式土器とともに出土しており、混入と考えている。

註

1 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007「首里城—御内原西地区発掘調査報告書—」



第82図 金属製品



図版58 金属製品

9. 簪

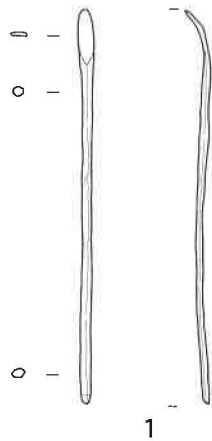
1点出土している。完形の金属製で、暗い青色を呈す。頭部は幅の細い匙状で、ムディは六角、竿は扁平気味の六角である。長さは10.3cm、重量は2.99gである。出土地不明。

10. キセル

雁首の胴部片が1点出土している。沖縄産施釉陶器で、赤色を呈す。残存長1.75cm、高さ1.15cm、重量0.93g、A-2暗褐色(溝?)より出土。

11. 銭貨

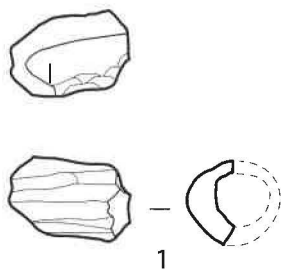
1点出土している。径2.35cm、重量2.51g、一部欠損。文字や遺物の状況から1739年初鑄の鉄一文銭と考えられる。B-3茶褐色砂層から出土。



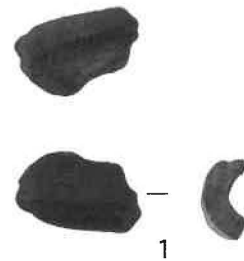
第83図 簪



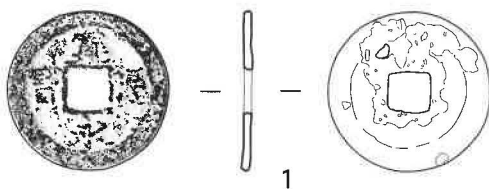
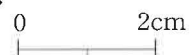
図版59 簪



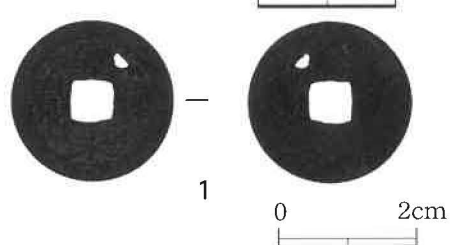
第84図 キセル



図版60 キセル



第85図 銭貨

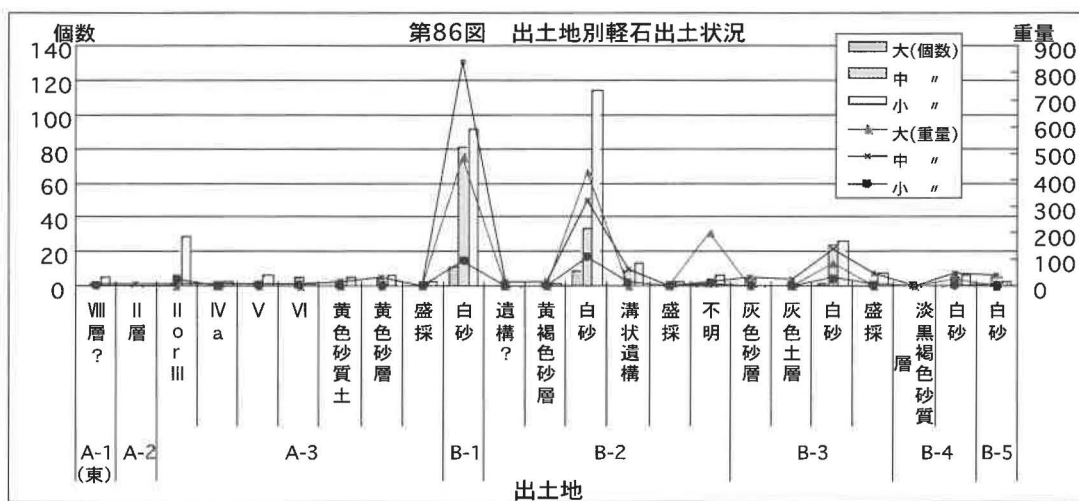


図版61 銭貨



12. 軽石

作業としては、まず大(7cm以上)・中(3cm以上)・小(3cm未満)に分け個数と量を計った。重量は3227gで、2コンテナ分となった。そのうち大の24点すべてが白砂層からであること、重量でもB-1白砂層・B-2白砂層・B-3白砂層の順に多いこと、溝状遺構でわずかに軽石が見られることがわかった。本報告の伊礼原Bと同じく白砂層のものに関しては、この層が形成されていた時期にどこかから流れてきた可能性を考えている。次に軽石を色調別に分類・計量を行い、層別の特徴が見られないか検討したが、特にはなかった。B-2の白砂層から製品疑いのものが数点確認されているが、検討を要する。



図版62 軽石 1・7黄白色 2橙色 3淡褐色 4淡赤褐 5淡灰褐 6黒褐色

13. 瓦

瓦は丸瓦3点、平瓦8点の計11点で、Aトレンチ・4点、Bトレンチ・6点、不明4点の出土である。出土した瓦はすべて破片で形状から丸瓦と平瓦に分類される。そのうち、器種がわかる2点を図示した。

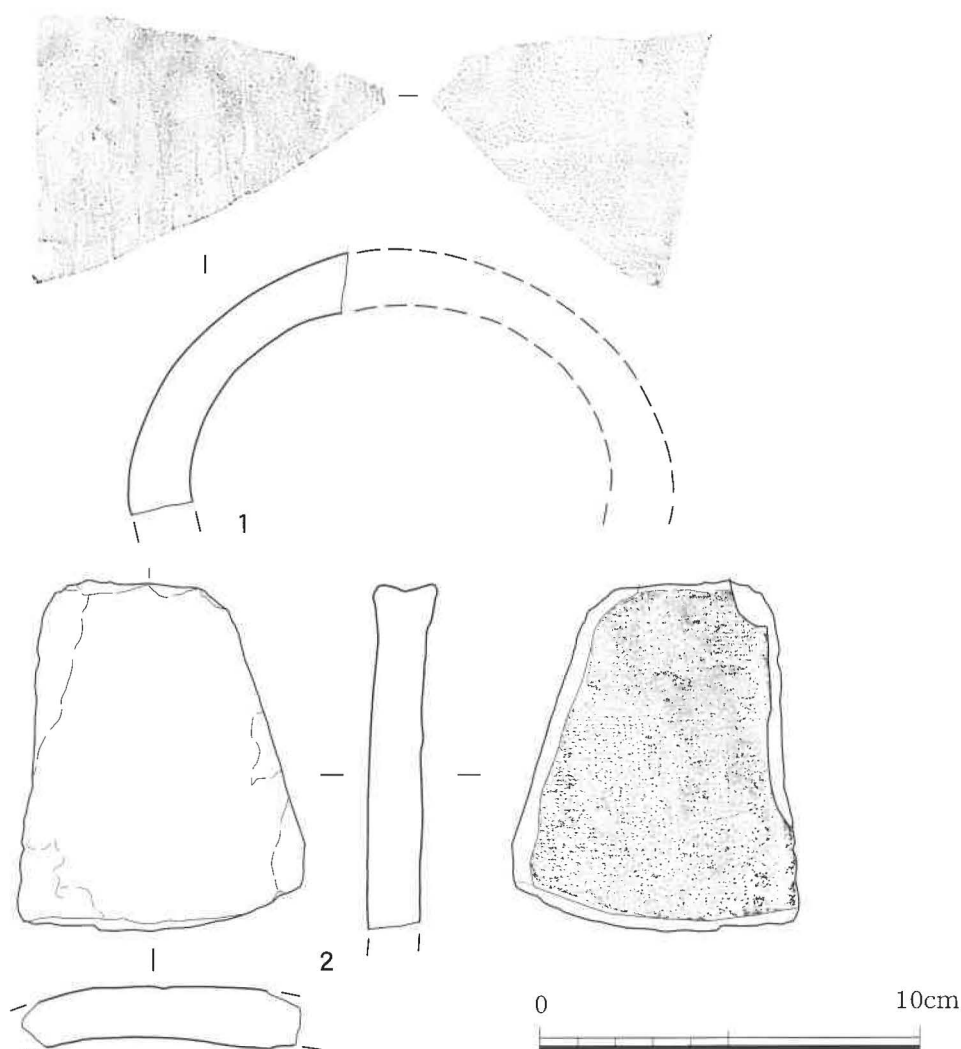
図1は丸瓦の破片で、断面から模骨径11.1cmと推定される。表面は縦位に削り、裏面には布目痕が確認される。A-1表採品である。

図2は平瓦の上左縁の部分である。表面は横位にヘラで撫でられ、裏面は布目痕が見られる。胎土に2mm程度の石灰粒が確認される。B-3表土層で出土している。

いずれも焼成がよく、出土状況から近世の瓦と判断される。

表51 瓦出土量

出土地	種類		丸	平	不明	合計
	層	部位				
A-1	表採	口縁	2			2
A-2	表採・表土層	口縁		1		1
		胴		1		1
B-3	表土層	口縁		2		2
B-4	表採	胴		2		2
B-5	表土層	口縁			1	1
		胴		1		1
不明	不明	胴	1	1	2	4
合計			3	8	3	14



第87図 瓦

表52 魚類遺体出土一覧

グリッド	層序	種類	部位	左右不	備考
A-1 東	茶褐色砂層	フグ?			
A-1(西)	暗茶褐色砂層	ペラ科	前上顎	右	D:19.4mm
A-1(西)	灰白色層	ハリセンボン	下顎		
A-1(西)	白砂層	ペラ科	上咽	左	D:10.8mm
A-1(西)	黄白色砂質層	ハリセンボン	歯		
A-1(西)	白色枝サゴ層	ブダイ科	歯骨	左	D:20.8mm
A-1(西)	白色枝サゴ層	ハリセンボン	前上顎	右	
A-1(西)	白色枝サゴ層	ナンヨウブダイ	上咽		D:14.6mm
A-1(西)	不明	ハタ	肋骨	右	
A-2 南東陽	表土層	イロブダイ	前上顎	左	D:24.3mm
A-2	暗褐色砂質土層	ハリセンボン	前上顎	右	
A-2	X II	ブダイ科	不明		D:41.1mm
A-2	白色砂層	ブダイ科	不明		
A-2	白色砂層	ペラ科	上咽		D:25.7mm
A-2	白色砂層	ハリセンボン	不明		
A-2	Dot-510	ハリセンボン	不明		3個
A-2	不明	ブダイ科	不明		
A-3	白砂層	ペラ科	歯		
不明	不明	ペラ科	下咽		
不明	不明	ペラ科	歯		
不明	不明	ハリセンボン	歯骨		
不明	不明	ブダイ科	歯骨		
不明	不明	サカナ?			
不明	不明	他	不明		
不明	不明	不明	背鰭		

注：計測記号 D:歯板面幅 B:歯骨咬合面長

表53 ウシ・ウシ/ウマ出土一覧

地区	層序	種類	部位	左右不	数
A-2	暗褐色砂質土上部	ウシ	四肢骨	不 破	1
B-2	表探	ウシ	四肢骨	不	2
B-3	白砂層	ウシ	四肢骨	不	1
A-2	Dot 1 7	ウシorウマ	脛骨	右 d	1
A-3	砂利層	ウシorウマ	下顎	不	1

表56 イノシシ/ブタ出土一覧

地区		層序	頭蓋骨		上顎		下顎		椎		肋骨		肩甲骨		上腕骨		橈骨		尺骨		大腿骨		四肢骨		脛骨		踵骨		不明	計
			破	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
イノシシ /ブタ	A-1(西)	白砂層																											1	
	A-1(西)																												4	
		計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5
	A-2	Dot-514																											2	
	A-2	Dot-539																											1	
	A-2		1																										2	
		計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	A-3	黄色砂層																												1
	A-3	袋No.373																												1
		計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	B-3	表土層																												1
B-3	壁面清掃																												1	
	計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
	不明																												4	
	小計	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	
ブタ	A-1(西)	灰白色層																											1	
	A-1(西)																												1	
		計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	A-1(東)	黄灰白色枝サゴ層																											1	
		計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	A-3	黄褐色砂質層																											1	
	A-3	黄色砂層																											1	
	A-3	袋No.32																											1	
		計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	B-1	白色砂層																											1	
		計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	B-2	表探																												2
		計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	B-3	表探																												4
	B-3	壁面清掃																												1
		計	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	B-4	表探																												1
		計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	不明	1	1	1	1																								4	
	小計	1	1	2	2	2	2	2	0	1	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19	
	合計	3	1	2	2	2	2	2	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	1	1	1	2	5	1	1	1	1	37		

第六章 理化学的分析

1 伊礼原E遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北谷町に所在する伊礼原遺跡は、沖縄本島中部の東シナ海に臨む海岸低地に位置する。周辺の詳細な地形分類については、松田(2007)により周辺の地形分類図が呈示されている。今回調査が行われた伊礼原E遺跡は、海岸低地のほぼ中央に形成され、周囲を低湿地で囲まれた残存する砂丘の東端部付近に位置する。B-2トレンチでは、表層から近世の遺構・遺物が確認されており、その下位の白色砂層から人骨の出土が認められている。本報告は、近世と関連づけられる人骨の各試料を対象に放射性炭素年代測定を行い、この人骨に関わる年代資料の作成を目的とするものである。

1. 試料

試料は伊礼原E遺跡B-2トレンチの近世遺物包含層とされた白色砂層から出土した人骨(試料No.9)の1点である。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。今回のように、骨が試料である場合には、無機質成分である炭酸カルシウムよりも硬タンパク質のコラーゲン成分の方が適当とされていることから、アルカリ処理と塩酸による脱灰を行い、コラーゲンの抽出を行う。

抽出した試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。試料No.9は 200 ± 30 BPを示した。表2には暦年較正結果を示す。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	遺跡名	採取位置・層位 など	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
No.9	伊礼原E	B-2トレンチ 白色砂層	人骨	200 ± 30	-23.19 ± 0.53	170 ± 30	IAAA-72259

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料名	補正年代 BP	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.	
		σ	2σ					
No.9	200 ± 30		cal AD 1,655	cal AD 1,679	cal BP 295	271	0.334	IAAA-72259
			cal AD 1,764	cal AD 1,800	cal BP 186	150	0.499	
		2σ	cal AD 1,939	cal AD 1,951	cal BP 11	1	0.167	
			cal AD 1,648	cal AD 1,684	cal BP 302	266	0.286	
			cal AD 1,734	cal AD 1,806	cal BP 216	144	0.550	
			cal AD 1,929	cal AD 1,952	cal BP 21	2	0.165	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

較正には北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。また、暦年較正は測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差を σ として計算させた結果、暦年は、試料No.9でcalAD1,655-1,951であった。No.9の人骨の年代については、その示す時代は近世から現代にまで至るが、近世とする発掘調査所見とは矛盾しない。

引用文献

松田順一郎,2007,伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地震跡.伊礼原遺跡-伊礼原B遺跡ほか発掘調査-北谷町教育委員会,44-59

2 放射性炭素年代測定結果報告書

(株)地球科学研究所

1. 報告内容の説明

未補正14C年代 (y BP) : (同位体分別未補正) 14C年代 “measured radiocarbon age”
試料の 14C / 12C 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前 (BP) かを計算した年代。

14C年代 (y BP) : (同位体分別補正) 14C年代 “conventional radiocarbon age”
試料の炭素安定同位体比 (13C / 12C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り 14C / 12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に基準化することによって得られる年代値である。
(Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion: Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと)
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

$\delta^{13}\text{C}$ (permil) : 試料の測定 14C / 12C 比を補正するための 13C / 12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(13\text{C} / 12\text{C})[\text{試料}] - (13\text{C} / 12\text{C})[\text{標準}]}{(13\text{C} / 12\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、13C / 12C [標準] = 0.0112372である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴの U-Th年代と 14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。

使用したデータセット : Intcal04

Intcal04: Calibration Issue of Radiocarbon 46(3), 2004)

(海洋性の試料に対しては、Marine04を使用)

較正曲線のスムーズ化に用いた理論

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A.S., Vogel, J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), 317-322

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄

acid washes : 酸洗浄

acid etch : 酸によるエッチング

none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

2. C14年代測定結果

試料データ	未補正14C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 241224	5100 ± 40	-26.8	5070 ± 40
試料名 (33073) 伊礼原E遺跡A-3(土墓)			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 241225	4850 ± 40	-27.1	4820 ± 40
試料名 (33074) 伊礼原E遺跡A-3(No.314)			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 241226	3520 ± 40	-27.5	3480 ± 40
試料名 (33075) 伊礼原E遺跡A-2(No.327)			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 241227	5180 ± 40	-28.7	5120 ± 40
試料名 (33076) 伊礼原E遺跡A-2(枝サコ'塚)			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26.8:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-241224**

Conventional radiocarbon age: **5070±40 BP**

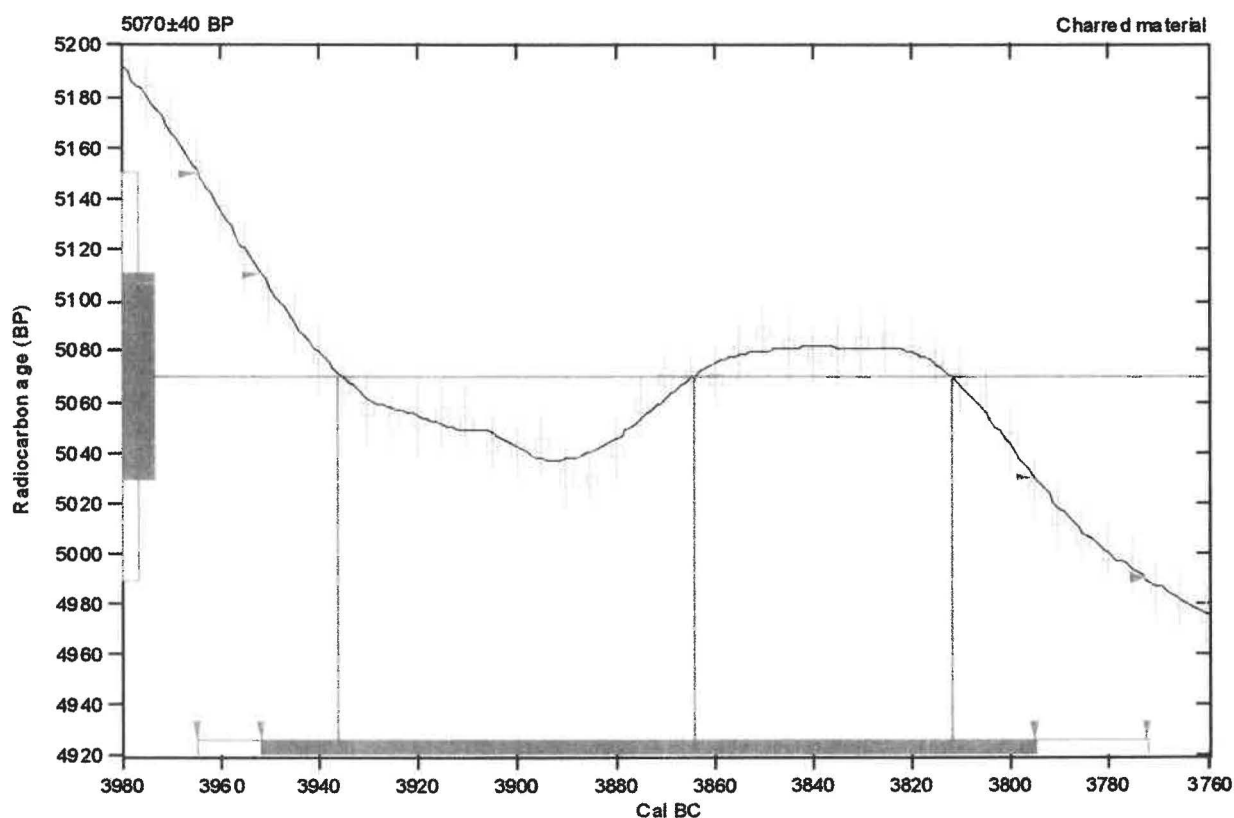
2 Sigma calibrated result: Cal BC 3960 to 3770 (Cal BP 5920 to 5720)
(95% probability)

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age
with calibration curve:

Cal BC 3940 (Cal BP 5890) and
Cal BC 3860 (Cal BP 5810) and
Cal BC 3810 (Cal BP 5760)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 3950 to 3800 (Cal BP 5900 to 5740)
(68% probability)



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305) 667-5167 • Fax: (305) 663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.5;lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-241226**

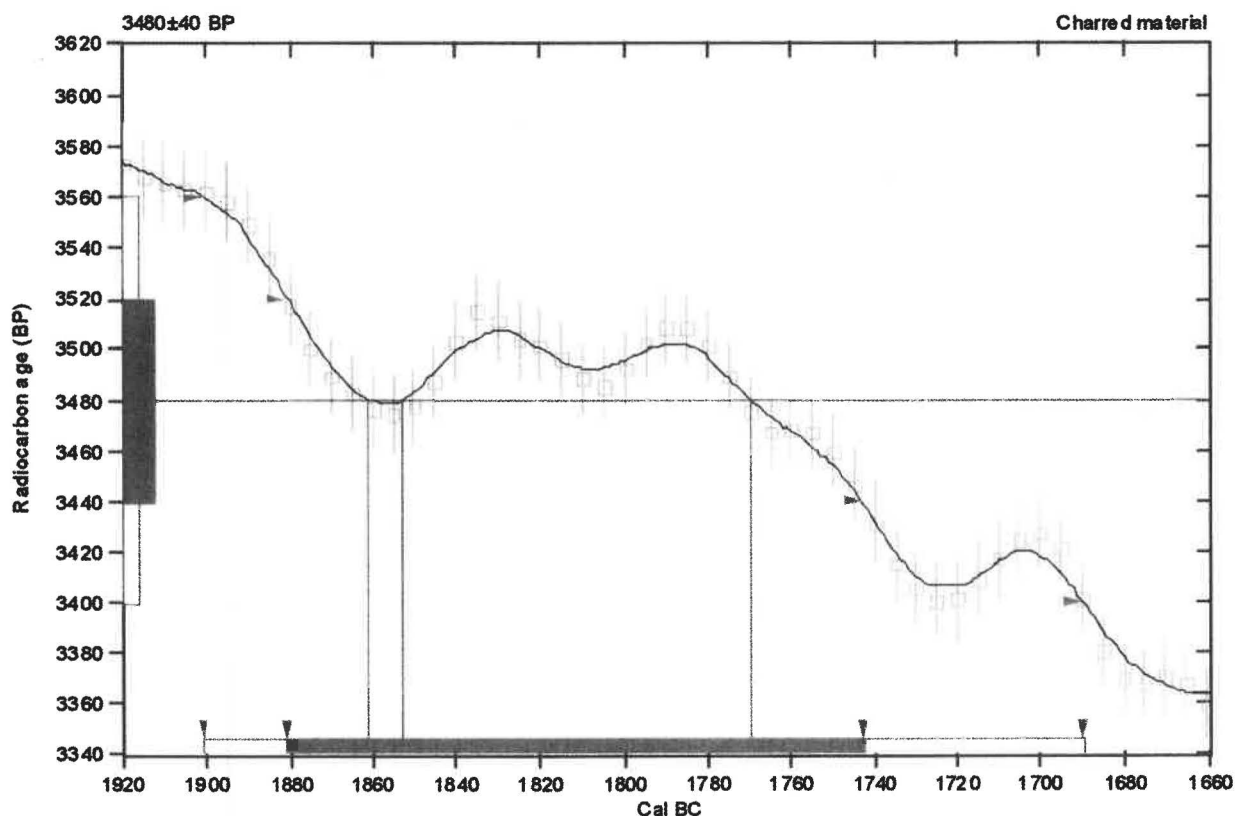
Conventional radiocarbon age: **3480±40 BP**

2 Sigma calibrated result: Cal BC 1900 to 1690 (Cal BP 3850 to 3640)
(95% probability)

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 1860 (Cal BP 3810) and
Cal BC 1850 (Cal BP 3800) and
Cal BC 1770 (Cal BP 3720)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 1880 to 1740 (Cal BP 3830 to 3690)
(68% probability)



References:

- Database used*
INTCAL04
Calibration Database
INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration
*In*IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).
- Mathematics*
A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305) 667-5167 • Fax: (305) 663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.1:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-241225**

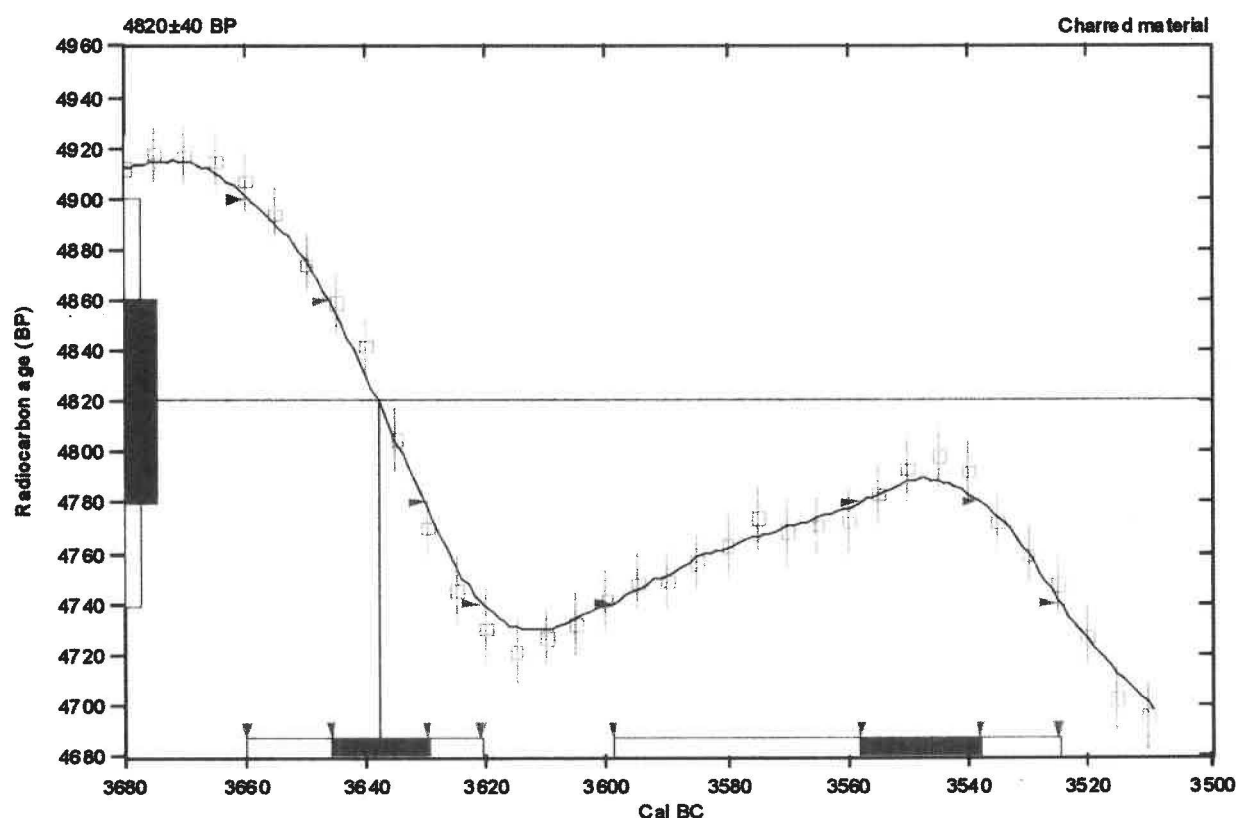
Conventional radiocarbon age: **4820±40 BP**

2 Sigma calibrated results: Cal BC 3660 to 3620 (Cal BP 5610 to 5570) and
(95% probability) Cal BC 3600 to 3520 (Cal BP 5550 to 5480)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 3640 (Cal BP 5590)

1 Sigma calibrated results: Cal BC 3650 to 3630 (Cal BP 5600 to 5580) and
(68% probability) Cal BC 3560 to 3540 (Cal BP 5510 to 5490)



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

In Cal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305) 667-5167 • Fax: (305) 663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: $C13/C12=-28.7$; lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-241227**

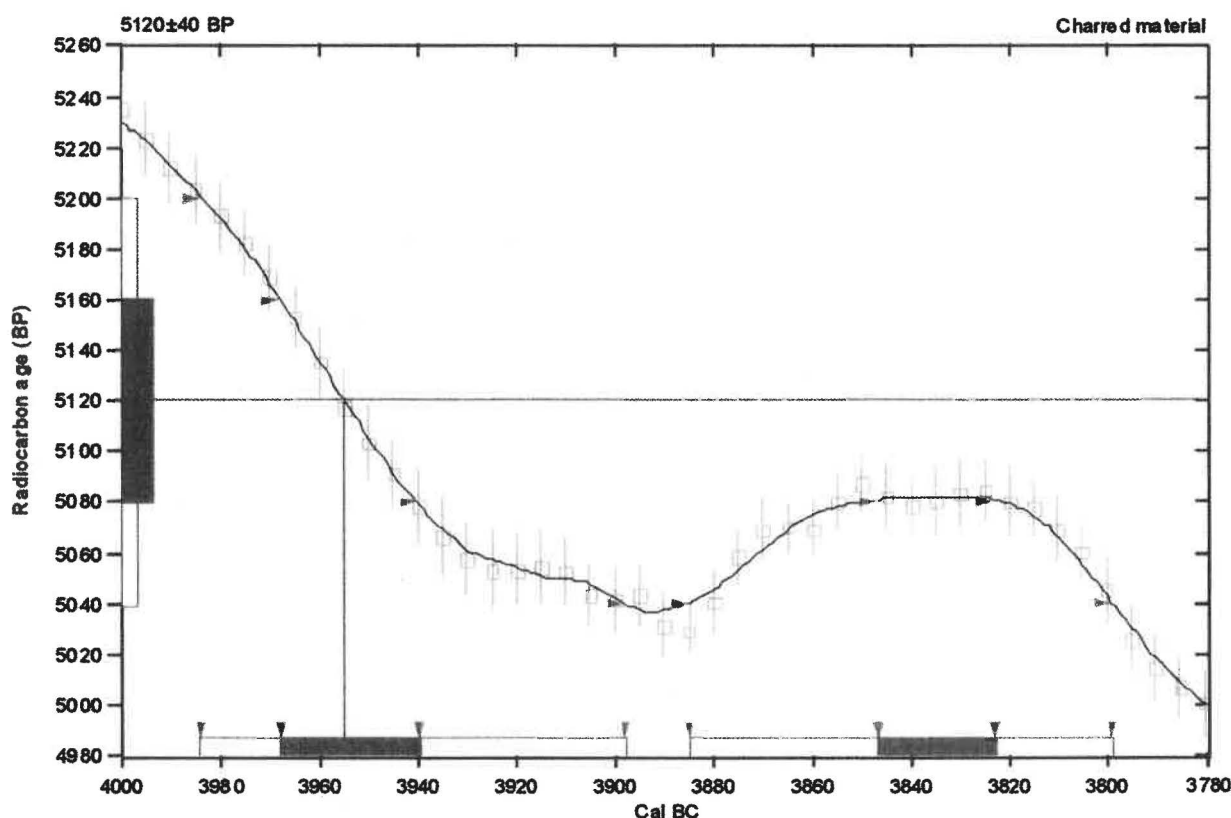
Conventional radiocarbon age: **5120±40 BP**

2 Sigma calibrated results: Cal BC 3980 to 3900 (Cal BP 5930 to 5850) and
(95% probability) Cal BC 3880 to 3800 (Cal BP 5840 to 5750)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 3960 (Cal BP 5900)

1 Sigma calibrated results: Cal BC 3970 to 3940 (Cal BP 5920 to 5890) and
(68% probability) Cal BC 3850 to 3820 (Cal BP 5800 to 5770)



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

In Cal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com



Beta Analytic Inc.
4986 SW 74 Court
Miami, Florida 33155 USA
Tel: 305 667 5167
Fax: 305 663 0964
Beta@radiocarbon.com
www.radiocarbon.com

Mr. Darden Hood
Director

Mr. Ronald Hatfield
Mr. Christopher Patrick
Deputy Directors

Consistent Accuracy...

Delivered On Time.

Quality Assurance Report

This report provides the results of reference materials used to validate radiocarbon dating results on unknown materials, prior to reporting. Known age reference materials were analyzed as QA measurements to verify the accuracy of the results. These are analyzed in multiple detectors. To test accuracy, the "blind sample" was measured in TWO separate detectors without the engineers knowing the age. This report quotes the results of the QA measurements.

Report Date: March 1, 2008
Submitter: Mr. Kazumi Asai / Mr. Sumihisa Matsuyama
Sample: Beta-241224-241227

QA MEASUREMENTS

TIRI wood standard (international standard)

Expected value: 4500 +/- 50 BP
Measured value: 4550 +/- 40 BP
Agreement: accepted

TIRI carbonate standard (international standard)

Expected value: 18160 +/- 100 BP
Measured value: 18110 +/- 90 BP
Agreement: accepted

Blind sample

Known age: 340 +/- 40 BP
AMS age: 390 +/- 40 BP
Agreement: accepted

Background signal

Expected value: 39000 to 48000 BP
Measured value: 48800 +/- 1500 BP
Agreement: accepted

COMMENT: All standards were within accepted ranges. (TIRI stands for Third International Radiocarbon Inter-comparison. This material has a very well known age.) The "Blind sample" is a sample that was measured at least twice in a detector at different times.

Validation:

Darden Hood

Date: March 1, 2008

3 伊礼原（D・E）遺跡の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（ ^{14}C ）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去の大気中の ^{14}C 濃度は一定ではなく、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学の成果などを利用した校正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に換算する必要がある。

2. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法	備考
No.1	伊礼原E, Y-1	人骨(歯)	acid washes	AMS	コラーゲン抽出
No.2	伊礼原D, MA-1	人骨(歯)	acid washes	AMS	コラーゲン抽出
No.3	伊礼原D, ST-01	人骨	acid washes	AMS	コラーゲン抽出

acid washes：酸洗浄，AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

3. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 ^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年代 Calendar Age (2 σ :95%確率, 1 σ :68%確率)
No.1	241423	NA	NA	—
No.2	241424	NA	NA	—
No.3	241425	NA	NA	—

(1) 未補正 ^{14}C 年代

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

デルタ

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(3) ^{14}C 年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

(4) 暦年代 (Calendar Age)

^{14}C 年代を実際の年代(暦年代)に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。IntCal04ではBC24050年までの換算が可能である(樹木年輪データはBC10450年まで)。

シグマ

暦年代の交点は、 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を示し、 1σ (68%確率)と 2σ (95%確率)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

4. 所見

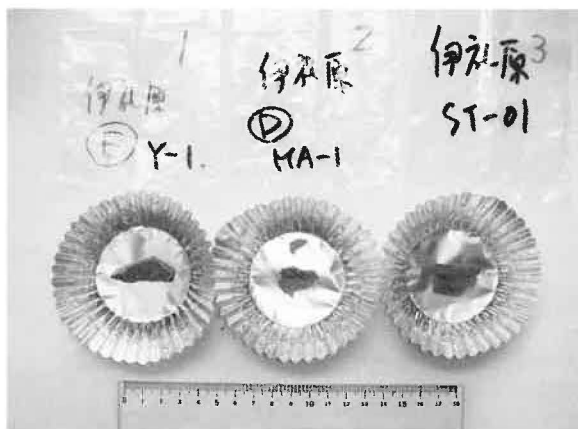
伊礼原(D・E)遺跡の人骨(No.1~No.3)について、加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定を試みた。その結果、いずれの試料もコラーゲンが残存しておらず、測定結果を得ることができなかった。また、人骨の他の部位についてNo.1とNo.3は2回、試料2は1回の追加測定を試みたが、いずれの試料もコラーゲンが残存しておらず、測定結果を得ることができなかった。

文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

尾寄大真(2005) INTCAL98からIntCal04へ。学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3 -炭素年代測定による高精度編年体系の構築-, p.14-15.

中村俊夫(1999) 放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院, p.1-36.



No.1, No.2, No.3 (2回目)



No.1, No.3 (3回目)



No.1
伊礼原E Y-1



No.2
伊礼原E MA-1



No.3
伊礼原E ST-01

4 北谷町伊礼原B・D・E遺跡出土石器の岩石肉眼鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、伊礼原B～E遺跡から出土した石器について、肉眼観察により、その岩質を鑑定し、石材の利用傾向を把握する。

1. 試料

肉眼鑑定を行った試料は、伊礼原B遺跡出土の石器12点、伊礼原D遺跡出土の石器17点、伊礼原E遺跡出土の石器18点、合計47点である。器種の内訳は、磨製石斧3点、半磨製石斧10点、打製石斧4点、石斧1点、石皿4点、砥石1点、敲石16点、磨石5点、凹み石1点、石錐1点、用途不明1点である。

2. 分析方法

(1)肉眼鑑定

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。個々の石材の正確な岩石名は、薄片作製観察、X線回折試験、全岩化学組成分析等を併用することにより調べることができるが、今回の鑑定では石材の組成を把握することを目的としているため、肉眼観察のみに留めている。

3. 結果

(1)肉眼鑑定

石器・岩質一覧を表1に、遺跡別肉眼鑑定結果一覧を表2示す。肉眼観察の結果、堆積岩類として砂岩28点、チャート1点、火山岩類として輝石安山岩1点および玄武岩1点、半深成岩類として輝緑岩4点、変成岩類として緑色千枚岩1点、緑色片岩3点、堇青石ホルンフェルス2点、変質岩類として輝緑凝灰岩1点および緑色岩5点が同定された。

器種別の石材組成は以下の通りである。

磨製石斧：磨製石斧を構成する岩石は緑色岩2試料、輝緑岩1試料である。

表1. 肉眼鑑定による石器・岩質一覧

		磨製 石斧	半磨製 石斧	打製 石斧	石斧	石皿	砥石	敲石	磨石	凹み石	石錐	用途 不明	合計
堆積岩	砂岩		3	3		4	1	11	4	1	1		28
	チャート							1					1
火山岩	輝石安山岩							1					1
	玄武岩								1				1
半深成岩	輝緑岩	1	1		1			1					4
変成岩	緑色千枚岩		1										1
	緑色片岩		2	1									3
	堇青石ホルンフェルス		2										2
変質岩	輝緑凝灰岩											1	1
	緑色岩	2	1					2					5
	計	3	10	4	1	4	1	16	5	1	1	1	47

石斧：刃部は欠損し体頭部のみの1試料が輝緑岩である。磨製石斧に属すると思われる。

半磨製石斧：半磨製石斧を構成する岩石は砂岩3試料、緑色片岩・堇青石ホルンフェルス各2試料、緑色千枚岩1試料、緑色岩1試料、輝緑岩1試料である。

打製石斧：砂岩4試料、緑色片岩1試料の構成となり砂岩を多く使用している。

石皿：4試料ともに砂岩を使用している。

砥石：砂岩を使用している。

敲石：砂岩11試料、チャート1試料、輝石安山岩1試料、輝緑岩1試料、緑色岩2試料の構成である。

磨石：砂岩3試料、玄武岩1試料を使用している。

凹み石：砂岩1試料を使用している。

石錐：砂岩1試料を使用している。

用途不明：輝緑凝灰岩1試料を使用している。

4. 考察

沖縄島の地質は構造的には、本部累帯・国頭累帯および島尻累帯からなり、各帯の間はそれぞれ辺土-名護断層及び天願断層により境されている(小西,1965)。また、この他、中期更新世以後の新期堆積岩類が全島に亘って散在・分布する。北谷町にも更新世の琉球層群国頭層および那覇層が分布するがこれらの地質からは石器の材料となる硬質岩は採取できないことから、これらの基盤をなす地質に石材の起源が求められる。北谷町から最も近い基盤岩の露出地域としては、嘉手納町や沖縄市の北部に分布する国頭累帯が挙げられる。以下に国頭累帯の地質について概説する。

本部半島を除く国頭～中頭地方の地質は本州・四国・九州の四万十帯に相当する国頭累帯に属している。国頭累帯を構成しているのは嘉陽・名護両累層で、KONISHI(1963)及びKONISHI et al.(1973)によって、白亜紀～古第三紀に対比される堆積岩類および変成岩類で構成されている。

名護累層は泥質千枚岩・同片岩・砂岩片岩・互層片岩・緑色片岩および緑色岩などの変成岩類からなり、また嘉陽累層は、砂岩・粘板岩・泥質千枚岩・砂岩片岩・礫岩片岩などからなり、砂質岩に富むのが特徴である。両累層は複雑な摺曲構造を示し、かつNE性の摺曲軸に直交する多くの断層で切られ、錯綜した分布を示す。

また、国頭累帯中には、石英斑岩・花崗斑岩・デイサイトなどの酸性岩岩脈が貫入している。これらの岩脈の一つである名護東南方の黒雲母石英安山岩について ^{40}Ar - ^{39}Ar 法や Kr - Ar 法で測定した結果では、およそ1200万年前という値が出ている(木崎編,1985)。

以上述べた地質学的背景から、今回鑑定された各石材について、その産地について述べてみたい。

1)輝緑岩

敲石に1試料、磨製石斧に1試料、半磨製石斧に1試料、石斧に1試料使用されている。沖縄島では他遺跡でも磨製石斧として多用されている岩石である。

2)緑色千枚岩・緑色片岩・堇青石ホルンフェルス

緑色千枚岩(1試料)、緑色片岩(3試料)が打製石斧および半磨製石斧に使用されている。緑色千枚岩・緑色片岩は国頭累帯を構成する岩種である。在地性岩石と判定される。堇青石ホルンフェルスは半磨製石斧(2試料)に使用されている。堇青石ホルンフェルスは、一般に泥質堆積

岩類が花崗岩などの深成岩類の貫入による熱変成作用を被ることによって生成される岩石である。沖縄島においては、読谷村の長浜川上流域において名護層に貫入した閃緑岩とその周縁に形成されたと考えられているホルンフェルスが確認されているほかは、ほとんど記載例がない。今回認められたホルンフェルスが、上記の岩体に由来するか否かは、現地調査による確認と試料の顕微鏡観察等による比較が必要である。

なお、琉球列島における比較的大規模な花崗岩類の分布域としては、石垣島、奄美大島、徳之島、沖永良部島などがある。石垣島においては、中生代のチャート、頁岩、砂岩などの堆積岩類を主体とする富崎層に貫入する中新世の花崗岩類がある。奄美大島、徳之島および沖永良部島には、白亜系の四万十帯の堆積岩類に、始新統の花崗岩類が貫入している。これらの花崗岩類の周辺にはホルンフェルスが生じていると考えられるが、その分布範囲はいずれも小規模で石器に利用された例は知られていない。本試料は県外から移入された可能性も十分考慮されなければならない。

3)砂岩

砂岩は全石器中28試料を占め最も多く見られる岩種である。器種も多岐に渡り、打製石斧(3試料)、半磨製石斧(3試料)、石皿(4試料)、凹み石(1試料)、砥石(1試料)、敲石(11試料)、磨石(4試料)、石錐(1試料)に使用されている。在地性岩石と判定される。チャートは敲石(1試料)に使用されている。チャートは名護断層北西側の中-古生層に属する岩石で、本部半島の本部層・今帰仁層に相当する地層に由来する在地性岩石である。

4)輝石安山岩・玄武岩

沖縄島には新第三系の久米島、現世の硫黄島に見られるような安山岩の大規模火山活動は知られていない。しかし、本部累層および国頭累層中には各所に安山岩の岩脈が認められ、とくに安富祖および本部半島塩川の採石場に含角閃石安山岩の岩脈などが観察の対象とされている(沖縄地学会,1982)。玄武岩については、沖縄本島においてその分布は知られていないため、産地は不明である。ただし、名護層に産する緑色岩の弱変質玄武岩の可能性や、上記の安山岩に伴う漸移的な岩相の可能性も考えられることから、鏡下観察や原産地調査を行なう必要があるだろう。

5)変質岩類

緑色岩が磨製石斧(2試料)、半磨製石斧(1試料)、敲石(2試料)に、輝緑凝灰岩が用途不明の石器に使用されている。これらは沖縄島にも存在する岩石で、緑色岩は国頭累帯名護層緑色岩部層の構成岩石となっている。また、輝緑凝灰岩は本部累帯の石灰岩分布地帯の石灰岩下盤に存在する。したがって、いずれも在地性とみなされる。

引用文献

木崎甲子郎編著,1985,琉球弧の地質誌.沖縄タイムス社,278p.

小西健二,1965,琉球列島(南西諸島)の構造区分.地質学雑誌,7,437-457.

KONISHI,K.,1963,Pre-Miocene basement complex of Okinawa and the tectonic belt of the Ryukyu Islands.Science Report Kanazawa University,8,569-602.

KONISHI,K.,ISHIBASHI,T. and TSURUYAMA,K.,1973,Find of nummulites orthoquartzitic pebbles from the Eocene turbidites in Shimajiri belt,Okinawa.Science Report Kanazawa University,18,45-53.

沖縄地学会編著,1982,日曜の地学14 沖縄の島々をめぐって.築地書館,228p.

表2.遺跡別肉眼鑑定結果一覧

遺跡名	番号	No.	器種	岩石名
伊礼原B遺跡	1	1	半磨製石斧	緑色岩
	2	2	半磨製石斧	堇青石ホルンフェルス
	3	3	半磨製石斧	緑色千枚岩
	4	4	打製石斧	緑色片岩
	5	5	半磨製石斧	砂岩
	6	6	半磨製石斧	砂岩
	7	9	敲石	砂岩
	8	10	敲石	砂岩
	9	11	敲石	砂岩
	10	12	磨石	砂岩
	11	13	磨石	砂岩
	12	16	不明	輝緑凝灰岩
伊礼原D遺跡	1	1	半磨製石斧	緑色片岩
	2	2	半磨製石斧	緑色片岩
	4	4	打製石斧	砂岩
	5	5	半磨製石斧	砂岩
	6	6	石皿	砂岩
	7	7	石皿	砂岩
	8	8	凹み石	砂岩
	10	10	敲石	砂岩
	11	11	敲石	緑色岩
	12	12	敲石	砂岩
	13	13	敲石	輝緑岩
	14	14	磨石	玄武岩
	19	19	石皿	砂岩
		151	石斧	輝緑岩
		152	半磨製石斧	輝緑岩
	156	磨石	珪化砂岩	
	164	磨製石斧	輝緑岩	
伊礼原E遺跡	1	11	打製石斧	砂岩
	2	13	半磨製石斧	堇青石ホルンフェルス
	3	16	石錐	砂岩
	4	20	磨製石斧	緑色岩
	5	24	石皿	砂岩
	6	32	磨製石斧	緑色岩
	7	34	砥石	砂岩
	8	94	打製石斧	砂岩
	9	102	敲石	輝石安山岩
	10	104	敲石	砂岩
	11	112	敲石	砂岩
	12	113	敲石	砂岩
	13	114	磨石	砂岩
	14	116	敲石	チャート
	15	117	敲石	緑色岩
	16	118	敲石	砂岩
	17	119	敲石	砂岩
	18	120	敲石	砂岩

第七章 沖縄県北谷町伊礼原E遺跡出土の縄文人骨

松下孝幸* 松下真実**

【キーワード】：沖縄県、縄文人骨、男性、屈強

はじめに

沖縄県北谷町字伊平伊礼原に所在する伊礼原E遺跡の範囲確認調査がおこなわれ、2001年(平成13年)に人骨が出土した。人骨周辺の遺物から、本人骨は縄文時代相当期に比定されており、縄文人骨の少ない沖縄県ではきわめて貴重な資料である。しかも1体は貝塚時代早期に属すると推定されており、港川人骨などの旧石器人骨を除けば、沖縄県では最古級の人骨となる。

沖縄県で、筆者が調査に加わったり、報告をおこなったものは、縄文時代相当期人骨としては、宜野湾市・真志喜安座間原遺跡(松下・他、1992)、伊是名村・具志川島遺跡群(松下・他、1993)、北谷町・クマヤ洞穴(松下・他、1989a)、北谷町・伊礼原B遺跡(松下・他、1989b)、伊礼原遺跡(松下、2007a)、嘉手納町・野国遺跡、具志頭村・ガルマンドウ原洞穴(松下、2007b)から出土した人骨がある。

1988年の伊礼原B遺跡の発掘調査では6体の人骨が出土したが、そのうちの1体が縄文後期の人骨で、残りの5体はグスク時代に属する人骨であった。縄文後期人骨は右側脛骨体のみで、径は小さく、扁平性がまったく認められない女性脛骨である。伊礼原遺跡の2004年の調査で出土した縄文人骨は3点である。1点は頭蓋で、縄文晩期に、1点は右大腿骨体、残りの1点は右脛骨体で、ともに縄文中期に属すると推測されている。この3点は男性骨と思われるが、出土地点が異なり、所属時期も違うので、別個体である。男性頭蓋は超短頭型(頭蓋長幅示数は91.12)で、鼻根部は縄文人的特徴が濃厚で、顔面は低・広顔である。大腿骨は、骨体の径は小さいが、骨体両側面は後方へ発達しており、骨体近位端部が外側へ強く捻転した大腿骨であった。脛骨は後面に一稜が認められるものの、径は小さく、扁平性も縄文人としては弱い方であった。

今回出土した人骨の量は少ないが、出土例の少ない縄文時代人骨である。人類学的観察と計測をおこない、興味ある所見を得たので、その結果を報告しておきたい。

資料

2001年の調査で出土した人骨は表1に示すとおりである。人骨を解剖学的・人類学的に精査した結果、4体分の人骨と推定した。そのうちの1体は貝塚時代早期人骨で、残りの3体は縄文後期に属する人骨と推測されている。4体のうち3体は男性、残りの1体は性別を明らかにすることができなかった。出土した人骨は大腿骨、頭蓋などで、「Y-1」とした人骨以外は散乱骨なので、大腿骨には「FE」を、頭蓋には「SK」を付して、人骨番号とした。なお、「Y-1」とした人骨は頭蓋と四肢骨からなり、重複部分が見あたらないことから、1体分の人骨と推断し、「Y-1」という番号を付けた。

* Takayuki MATSUSHITA, ** Masami MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

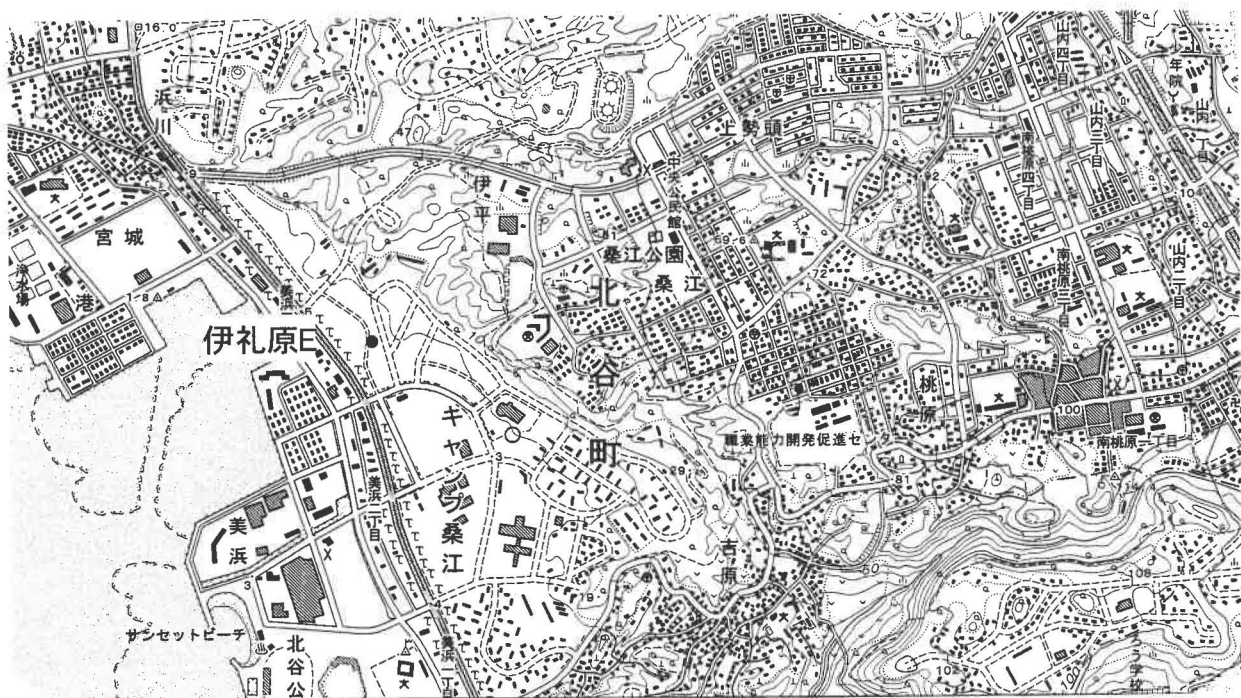
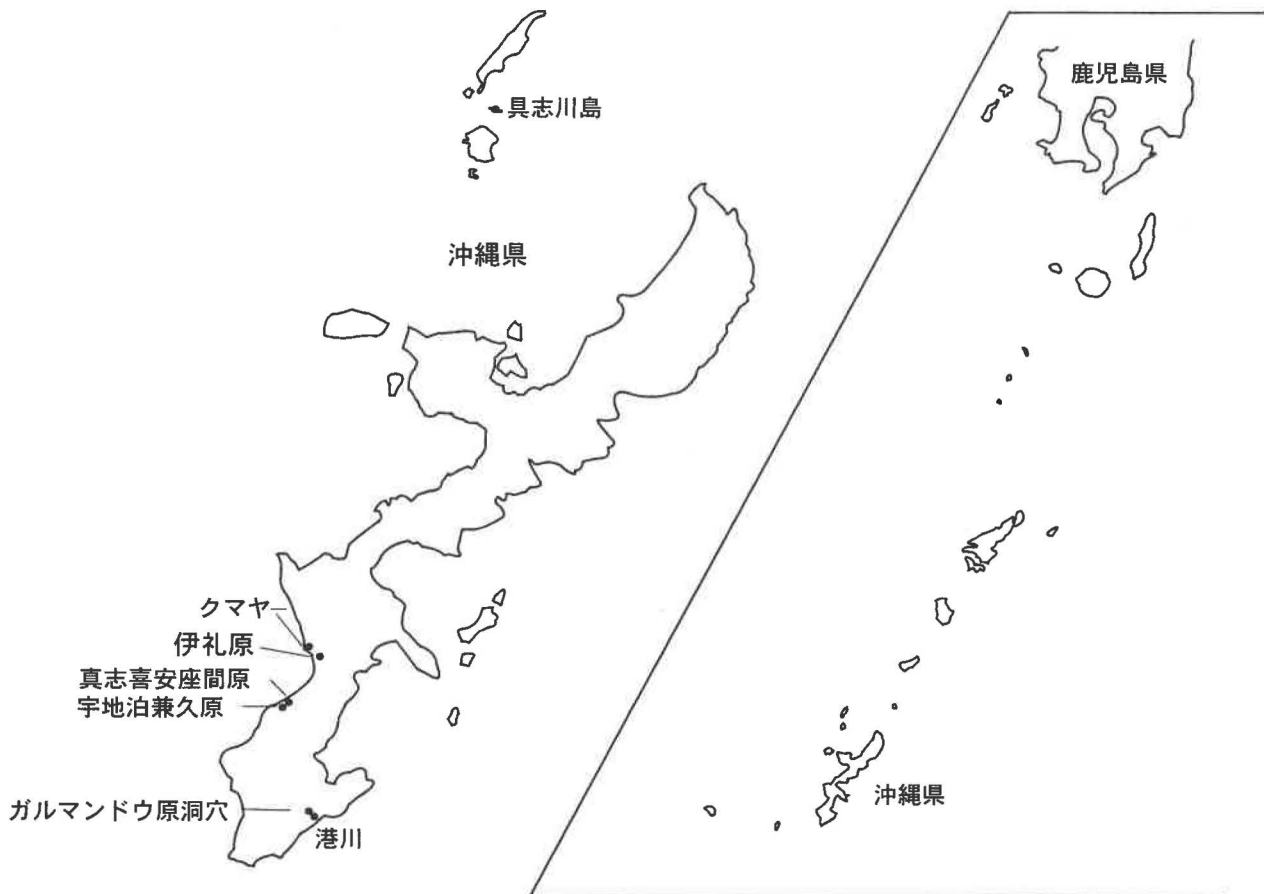


図1 遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig. 1 Location of the IrebaruE site, Chatan cho, Okinawa Prefecture)

A-2から出土した人骨は左側大腿骨1本のみであるが、A-3から出土した人骨は、散乱骨と一部は埋葬状態を保っていると思われる人骨(Y-1)が出土した。散乱骨は、頭蓋片1片と両側の大腿骨である。この頭蓋片と大腿骨が同一個体に属するかどうかは明らかにできないので、本稿では一応別個体として取り扱うことにした。なお、「Y-1」の下顎骨と上腕骨は径がかなり大きく、頑丈であることから、屈強な体格の縄文人であったことがうかがえる。

表1 出土人骨一覧 (Table 1. List of skeletons)

調査区	人骨番号	性別	年齢	時代・時期	備考
A-2	FE-1	男性	不明	縄文・後期	左側大腿骨
A-3	SK-1	不明	不明	縄文・後期	頭蓋片
A-3	FE-1	男性	不明	縄文・後期	両側大腿骨
A-3	Y-1	男性	熟年	貝塚・早期	

計測方法は、Martin-Saller(1957)によった。年齢区分は表2のとおりである。

表2 年齢区分 (Table 2. Division of age)

	年齢区分	年齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所見

A-2-FE-1 (男性、年齢不明)

左側大腿骨の骨体が残存していた。骨質は堅牢で、骨体両側面は後方へ発達しているが、径は小さい。

計測値は、骨体中央矢状径が27mm(左)、横径は25mm(左)で、骨体中央断面示数は108.00(左)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は82mm(左)で、骨体は細い。また、上骨体断面示数は82.14(左)となり、骨体上部の扁平性は弱い。

四肢骨のみで性別を推定することは沖縄県の場合は特に困難である。径が大きいものは問題ないが、これまで沖縄県出土人骨の調査をしてきた経験から、径が小さいからといって女性とするにはためらいがある。本大腿骨も性別を決めるのが困難であるが、形態的な特徴から男性大腿骨としておきたい。年齢は不明である。

A-3-S K-1 (性別・年齢不明)

5 cm×4 cm大の頭蓋骨片である。おそらく頭頂骨の一部であろう。骨壁は薄い。性別・年齢は不明である。

A-3-F E-1 (男性、年齢不明)

両側の大腿骨体が残存していた。左側は緻密質が大きく剥落しており、計測はできない。右側は骨体上部の計測ができた。骨体上横径は33mm(右)、骨体上矢状径は24mm(右)、上骨体断面示数は72.73(右)となり、骨体上部は扁平である。粗線の様態は不明であるが、骨体の径はあまり大きいものではない。本大腿骨は「A-2-FE-1」と大差ない大きさである。骨体近位部はわずかに本例の方が大きいようである。「A-2-FE-1」の場合と同じように性別を決めがたいが、一応男性大腿骨としておきたい。年齢は不明である。

A-3-Y-1 (男性・熟年)

1. 頭蓋

頭蓋、上腕骨、肩甲骨、脛骨および手の骨が残存していたが、肩甲骨と脛骨は破片である。

頭蓋は、前頭骨、左右の頭頂骨、後頭骨などが残存していたが、復元できない。従って頭型や顔面の形態は不明である。冠状縫合と矢状縫合の観察ができた。両縫合とも内板は癒合閉鎖しているが、外板はまだ開離している。下顎骨は径が大きく、頑丈で、下顎枝の下部は窪んでおり、咬筋の発達がかがえる。また、下顎角は外反しており、下顎切痕は浅い。

2. 歯

下顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。風習的抜歯の有無は不明である。

⑧ 7 ⑥ 5 / / / / / / / / / / ⑤ ⑥ 7 ⑧

〔●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 / :不明 ▽:先天性欠損、番号は歯種〕

〔1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小臼歯、5:第二小臼歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯〕

3. 上腕骨

上腕骨は左側骨体が残存していた。一見して大きく、頑丈である。

計測値は、中央最大径が27mm(左)、中央最小径は22mm(左)で、骨体断面示数は81.48(左)となり、骨体には扁平性は認められない。骨体最小周は72mm(左)、中央周は79mm(左)で、骨体はかなり太く、三角筋粗面の発達も良好である。

4. 性別・年齢

性別は、上腕骨の径が著しく大きいことから、男性と推定した。年齢は、冠状縫合と矢状縫合の内板が癒合閉鎖し、外板はまだ開離していることから熟年と思われる。

考 察

「Y-1」の上腕骨について、若干の考察をおこなっておきたい。表3は、男性上腕骨の比較表である。

これまでの発掘調査で出土した人骨の研究をおこなったところ、非常に大きな上腕骨を何例かみてきた。表3に掲載しているものがその例である。もっとも太かったのは宜野湾市のテラガマ洞穴から出土したグスク時代の上腕骨(HU-4)で、中央周が84mmもあった。この値は平均的男性の大腿骨の中央周の大きさに相当する。本例は中央周が79mmもあり、表3ではテラガマ洞穴のHU-4に次いで大きい。後兼久原のグスク時代人は鍛冶職人だったことが遺構・遺物と人類学的特徴の研究からほぼ判明している。しかし、テラガマ洞穴と勢頭原から出土した近世人については埋葬跡の調査だけなので、被葬者の職業や所属していた社会的階層などについては明らかではない。従って、この太くて頑強な上腕骨がどうして形成されたかはわからない。今回貝塚時代早期に属すると思われる人骨には、太くて頑強な上腕骨と屈強な下顎骨が認められた。一般的に、沖縄以外では縄文時代早期・前期人骨はきゃしゃで、後期・晩期人骨は頑丈であることがわかっているが、その形質的差異は時代差ではなく、前者は山間部からの、後者は海浜部から出土していることから、生活環境の違いによって生じた可能性も考えられる。山間部から後期・晩期人骨が、海浜部から早期・前期人骨が出土すれば、その要因を検証することができるかもしれない。

骨体断面示数は勢頭原に次いで大きく、骨体には扁平性は認められない。とくに後兼久原とテラガマ洞穴HU-4との差は大きい。

表3 上腕骨計測値(男性、右、mm) (Table3. Comparison of measurements and indices of male right humeri)

		伊礼原E 貝塚時代早期人 沖縄県 北谷町	後兼久原 グスク時代人 沖縄県 北谷町 (松下)	テラガマ洞穴 グスク時代人 沖縄県 宜野湾市 (松下)	勢頭原 近世人 沖縄県 宜野湾市 (松下)
		A-3-Y-1	1号	1号 HU-4	HU-20
5.	中央最大径	27 (左)	27	19 29	23
6.	中央最小径	22 (左)	19	14 21	19
7.	骨体最小周	72 (左)	69	52 78	65
7(a).	中央周	79 (左)	75	53 84	71
6/5	骨体断面示数	81.48 (左)	70.37	73.68 72.41	82.61

要約

2001年(平成13年)におこなわれた沖縄県北谷町字伊平伊礼原に所在する伊礼原E遺跡の範囲確認調査で人骨が出土した。本人骨は縄文時代後期に相当する時期と貝塚時代早期に属する人骨と推測されており、沖縄県での形質変化を追究する上で、きわめて貴重な資料となるものである。人類学的観察と計測をおこない、以下の結果を得た。

1. 出土した人骨は4体分である。4体のうち3体は縄文後期に属する人骨で、2体は男性骨、残りの1体は性別不明である。4体のうち1体は貝塚時代早期に属する男性骨である。
2. 縄文後期の大腿骨は、径は小さいものの、骨体両側面の後方への発達は比較的良好である。
3. 貝塚時代早期人の下顎骨と上腕骨は、径が大きく、屈強である。
4. 沖縄県を除く縄文人の形質は、縄文時代早期・前期人骨はきゃしゃで、後期・晩期人骨は頑丈

である。しかし、前者は山間部から、後者は海浜部から出土していることから、その差は生活環境の違いによって引き起こされた可能性もあり、単純な時代差ではないかもしれない。本例は海浜部の遺跡から出土した縄文早期人骨で、きゃしゃではなく、きわめて頑丈な人骨であった。縄文人の形質の起源や変化を知る上で、本例は貴重な資料であるが、例数が少ない。例数の増加をまって、検討を深めたい。

謝辞

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた北谷町教育委員会の皆様に感謝致します。》

《参考文献》

1. Baba,H,b.Endo,1982 : Postcranial Skeleton of the Minatogawa Man.The Minatogawa Man(The university Tokyo,bullentin, 19) : 61-195.
2. 金関丈夫、1929 : 沖縄県那覇市外城嶽貝塚より発見せる人類大腿骨に就いて。人類学雑誌、44 : 217-230.
3. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag, Stuttgart : 429-597.
4. 松下孝幸・他、1988 : 沖縄県宜野座村クジチ墓出土の近世人骨。宜野座村乃文化財第6集(クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書) : 107-140.
5. 松下孝幸・他、1989a : 沖縄県北谷町クマヤ洞穴出土の古人骨(縄文時代晩期相当期人骨)(会)。解剖学雑誌、64 : 362.
6. 松下孝幸・他、1989b : 沖縄県北谷町伊礼原B遺跡出土の人骨。伊礼原B遺跡-旧メイモスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査-(北谷町文化財調査報告書第8集) : 39-48.
7. 松下孝幸・他、1990 : 沖縄県浦添市城間古墓群出土の近世人骨。城間古墓群-牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査- : 75-112.
8. 松下孝幸・他、1992 : 沖縄県宜野湾市真志喜安座間原遺跡出土の縄文・弥生時代人骨。謝名II(真志喜土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 [1]) (宜野湾市文化財調査報告書第15集) : 第5章 : 1-99.
9. 松下孝幸・他、1993 : 沖縄県具志川島遺跡群出土の古人骨。具志川島遺跡群(伊是名村文化財調査報告書第9集) : 215-244.
10. 松下孝幸、1996 : 沖縄県北谷町上勢頭古墓群出土の近世人骨。上勢頭古墓群(北谷町文化財調査報告書第16集) : 105-115.
11. 松下孝幸、2001a : 沖縄県大里村大里城出土のグスク時代人骨。大里城-都市公園計画に係わる緊急確認発掘調査報告書(2)- : 109-122.
12. 松下孝幸、2001b 沖縄県北谷町山川原古墓群出土の近世・近代人骨。山川原古墓群(2)-瑞慶覧(11)倉庫建設に係る文化財発掘調査報告(北谷町文化財調査報告書第20集) : 239-273.
13. 松下孝幸、2001c : シャレコウベが語る、日本人のルーツと未来、長崎新聞社(長崎新聞社新書)。
14. 松下孝幸、2003a : 沖縄県読谷村木綿原遺跡出土の弥生時代人骨。南島考古、No.22 : 67-108.
15. 松下孝幸、2003b : 沖縄県北谷町後兼久原遺跡出土のグスク時代人骨。後兼久原遺跡-庁舎建設に係る文化財発掘調査報告書-(北谷町文化財調査報告書第21集) : 385-399.
16. 松下孝幸、2003c : 沖縄県北谷町大作原古墓群出土の人骨。大作原古墓群-嘉手納(12)・(13)送油管移設に係る文

化財発掘調査報告-(北谷町文化財調査報告書第22集):149-161.

17. 松下孝幸、2004:「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』:444-454. 朝倉書店
18. 松下孝幸、2006:宜野湾市嘉和テラガマ洞穴遺跡出土の縄文時代人骨。嘉和テラガマ洞穴遺跡(宜野湾市文化財調査報告書第35集):81-102.
19. 松下孝幸、2007a:沖縄県北谷町伊礼原遺跡出土の縄文人骨。伊礼原遺跡(北谷町文化財調査報告書第26集):467-479.
20. 松下孝幸、2007b:沖縄県具志頭村ガルマンドウ原洞穴遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第2号:38-62.
21. 松下孝幸、2007c:宜野湾市喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群出土の近世人骨。
22. 松下孝幸、2007d:宜野湾市喜友名前原第1古墓群出土の近世人骨。
23. 松下孝幸、2008:沖縄県北谷町伊礼原D遺跡出土の古人骨(1)。(投稿中)

表4 下顎骨(mm、度)(Mandibula)

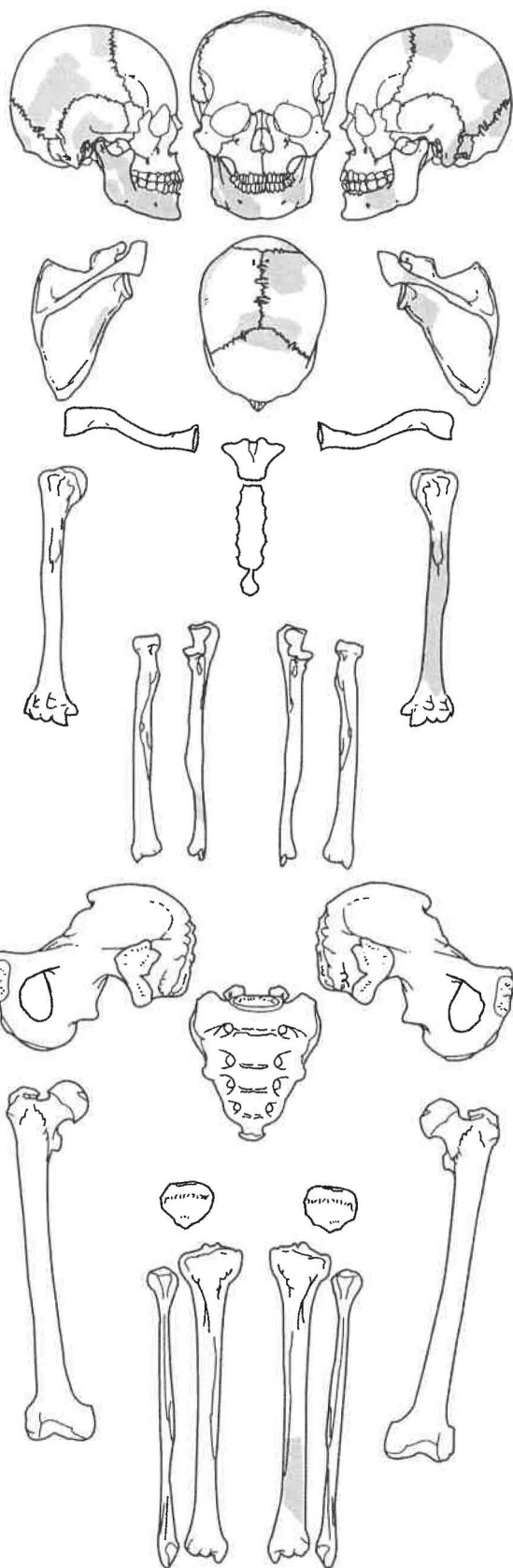
		伊礼原E A-3-Y-1 男性
65	下顎関節突起幅	-
65(1).	下顎筋突起幅	-
66	下顎角幅	-
67	前下顎幅	-
68	下顎長	-
68(1).	下顎長	-
69	オトガイ高	-
69(1).	下顎体高(右)	(27)
	(左)	-
69(2).	下顎体高(右)	26
	(左)	-
70	枝高(右)	60
	(左)	-
70(1).	前枝高(右)	53
	(左)	-
70(2).	最小枝高(右)	-
	(左)	-
70(3).	下顎切痕高(右)	-
	(左)	-
71(1).	下顎切痕幅(右)	-
	(左)	-
71	枝幅(右)	-
	(左)	-
71a.	最小枝幅(右)	-
	(左)	-
79	下顎枝角(右)	120
	(左)	-
66/65	下顎幅示数	-
68/65	幅長示数	-
68(1)/65	幅長示数(右)	-
69(2)/69	下顎高示数(右)	-
	(左)	-
71/70	下顎枝示数(右)	-
	(左)	-
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	-
	(左)	-
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	-
	(左)	-

表5 上腕骨(mm) (Humerus)

		伊礼原E A-3-Y-1 男性 (左)
1.	上腕骨最大長	-
2.	上腕骨全長	-
3.	上端幅	-
3(1).	横上径	-
4.	下端幅	-
5.	中央最大径	27
6.	中央最小径	22
7.	骨体最小周	72
7(a).	中央周	79
8.	頭周	-
9.	頭最大横径	-
10.	頭最大矢状径	-
11.	滑車幅	-
12.	小頭幅	-
12(a).	滑車幅および小頭幅	-
13.	滑車深	-
14.	肘頭窩幅	-
15.	肘頭窩深	-
6/5	骨体断面示数	81.48
7/1	長厚示数	-

表6 大腿骨(mm) (Femur)

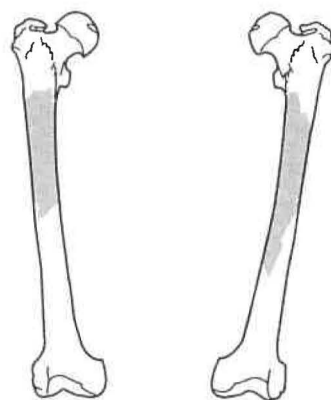
		伊礼原E A-2-FE-1 男性	伊礼原E A-3-FE-1 男性
1.	最大長(右)	-	-
	(左)	-	-
2.	自然位全長(右)	-	-
	(左)	-	-
3.	最大転子長(右)	-	-
	(左)	-	-
4.	自然位転子長(右)	-	-
	(左)	-	-
6.	骨体中央矢状径(右)	-	-
	(左)	27	-
7.	骨体中央横径(右)	-	-
	(左)	25	-
8.	骨体中央周(右)	-	-
	(左)	82	-
9.	骨体上横径(右)	-	33
	(左)	28	-
10.	骨体上矢状径(右)	-	24
	(左)	23	-
15.	頸垂直径(右)	-	-
	(左)	-	-
16.	頸矢状径(右)	-	-
	(左)	-	-
17.	頸周(右)	-	-
	(左)	-	-
18.	頭垂直径(右)	-	-
	(左)	-	-
19.	頭横径(右)	-	-
	(左)	-	-
20.	頭周(右)	-	-
	(左)	-	-
21.	上顎幅(右)	-	-
	(左)	-	-
8/2	長厚示数(右)	-	-
	(左)	-	-
6/7	骨体中央断面示数(右)	-	72.73
	(左)	108.00	-
10/9	上骨体断面示数(右)	-	-
	(左)	82.14	-



伊礼原遺跡A-3-Y-1 (男性・熟年)



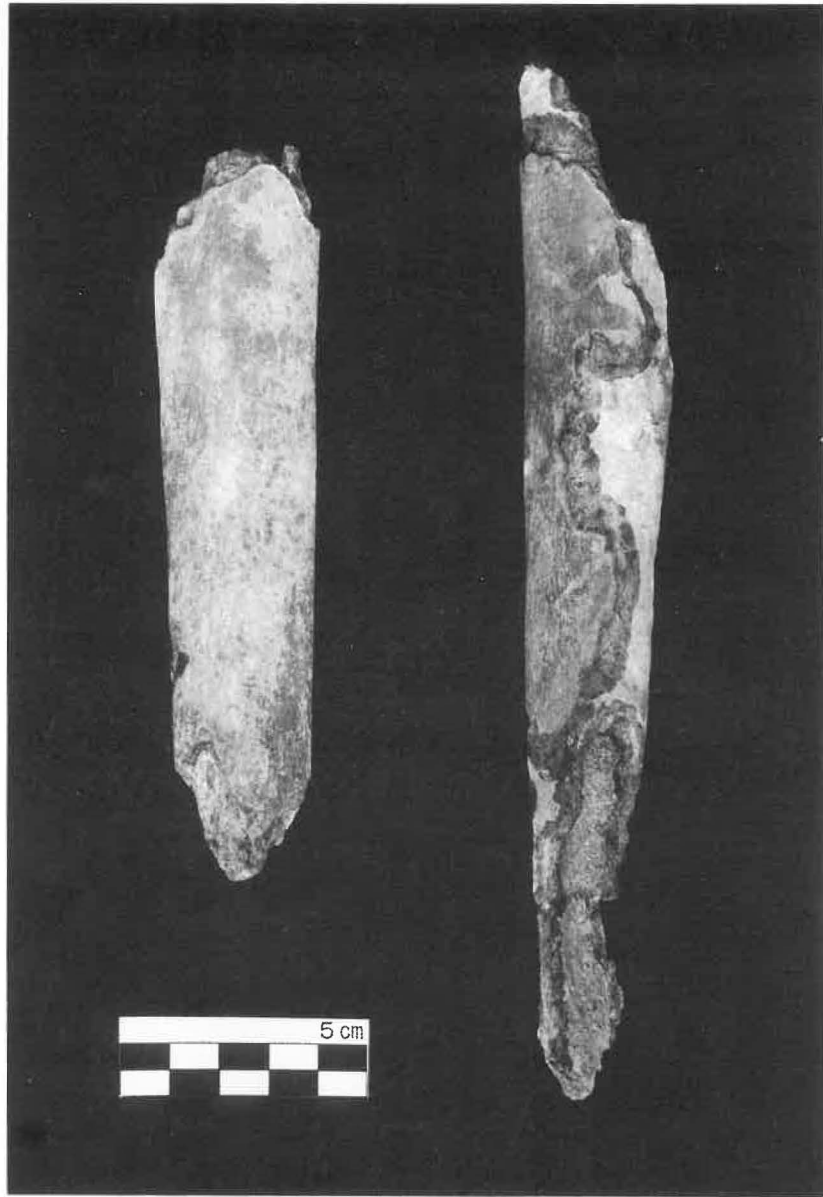
伊礼原遺跡A-2-FE-1 (男性・不明)



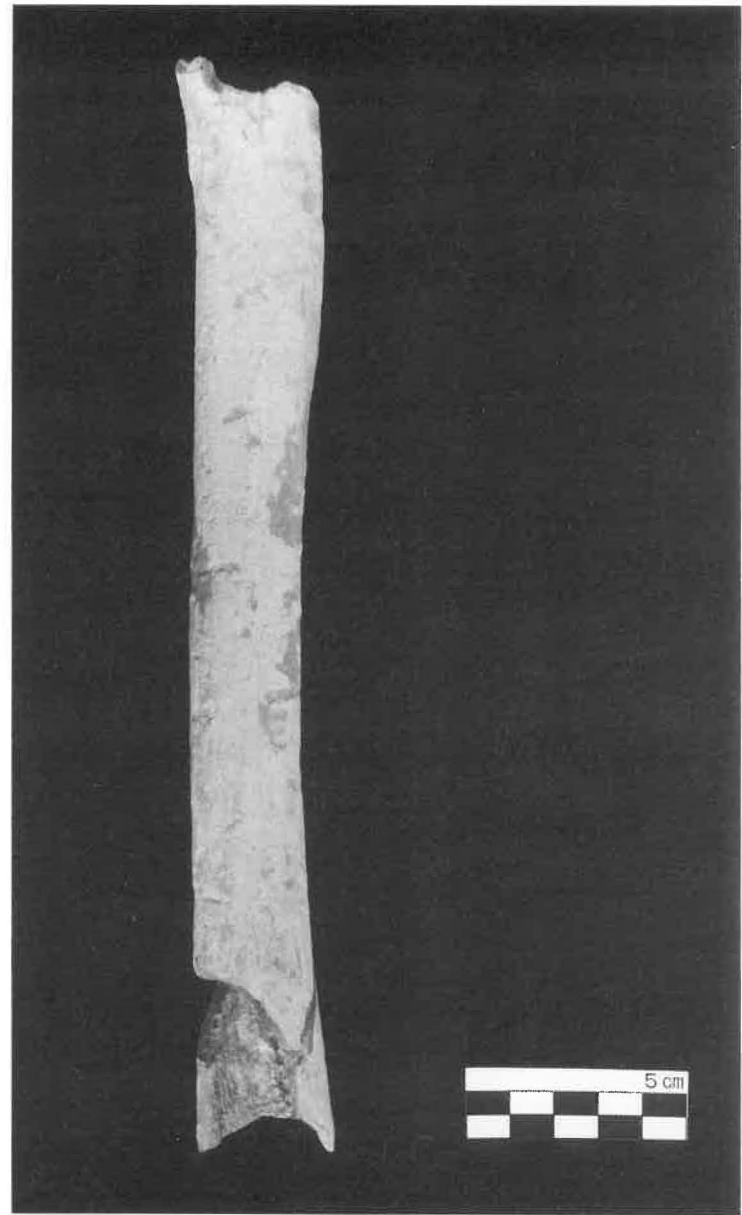
伊礼原遺跡A-3-FE-1 (男性・不明)

図2 人骨の残存図 (アミかけ部分)

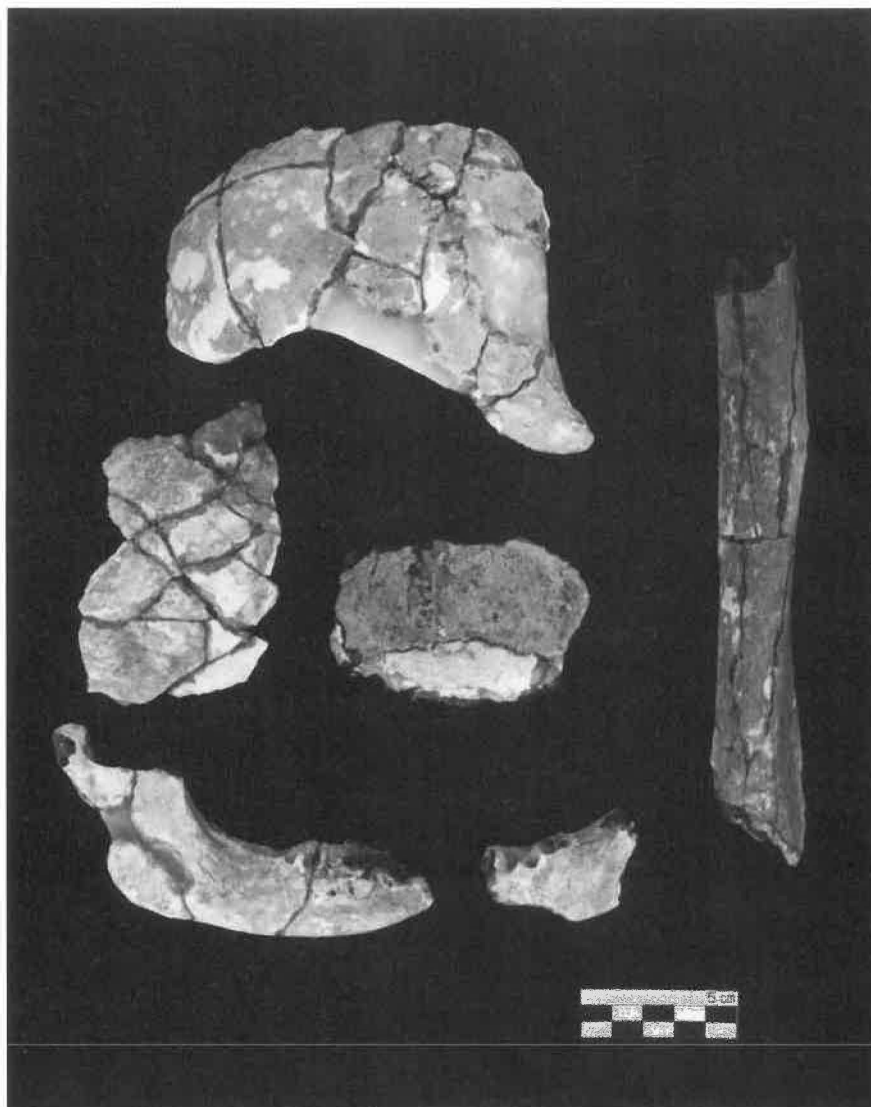
(Fig. 2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



伊礼原E A-3-FE-1 (大腿骨・男性)
(Ireibaru E A-3-FE-1, Femur, male)

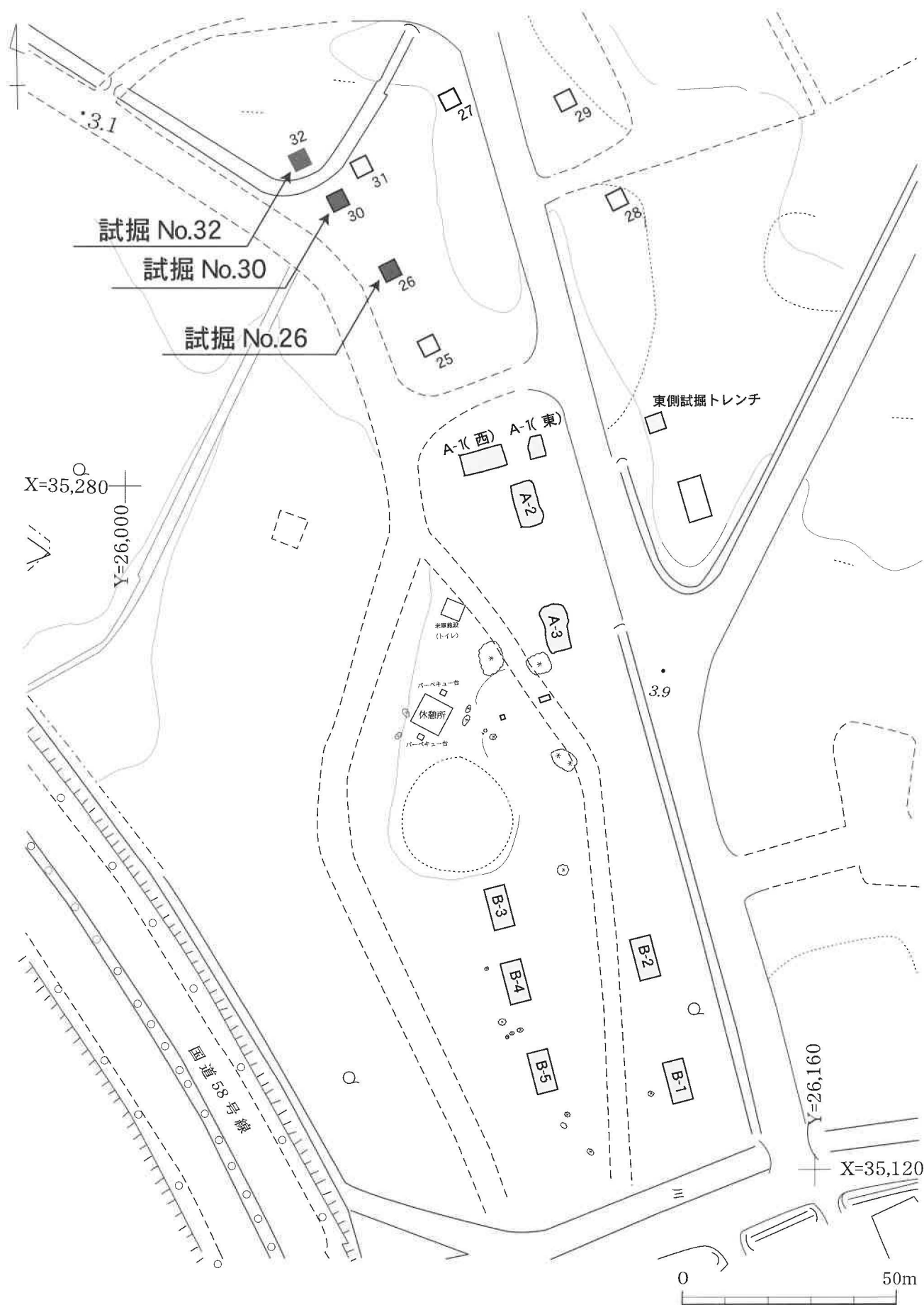


伊礼原E A-2-FE-1 (大腿骨・男性)
(Ireibaru E A-2-FE-1, Femur, male)



伊礼原E A-3-Y-1 (男性・熟年)
(Ireibaru E A-3-Y-1, mature male)

伊礼原E遺跡
旧ロツジ試掘No.26・30・32

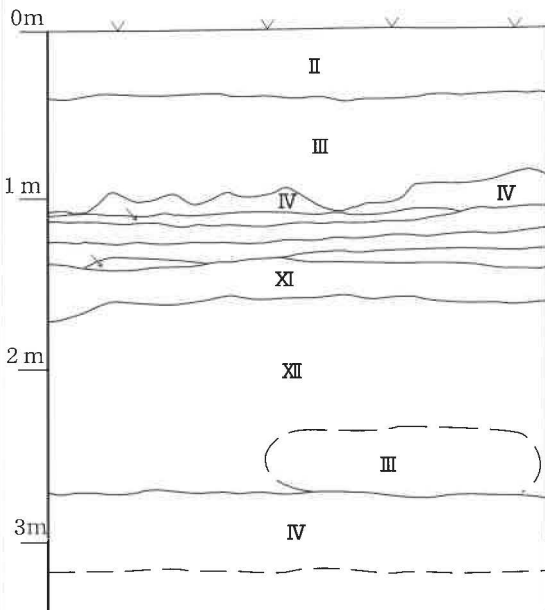


第88図 試掘ポイント位置

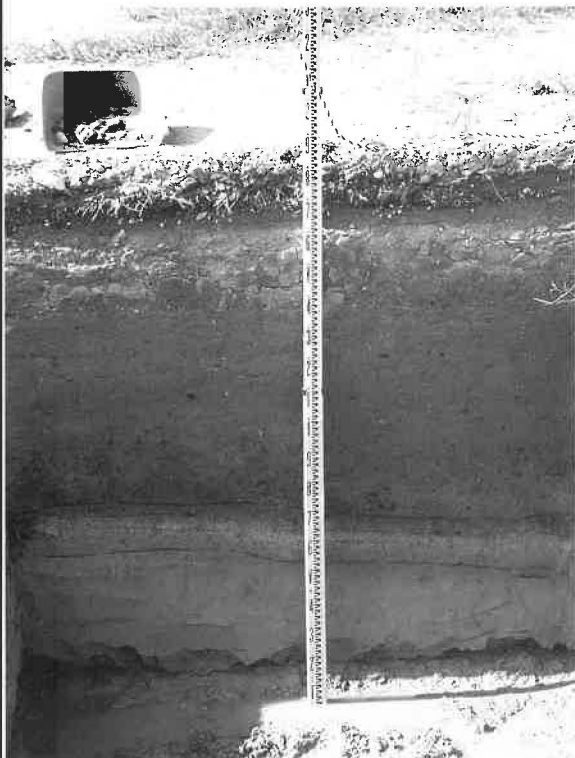
伊礼原E遺跡（旧ロジ）（試掘 No.26）

〈調査日〉平成16年9月30日

〈記述〉



第89図 No.26東壁柱状図



図版64 No.26東壁

1. 標高：3.8メートル

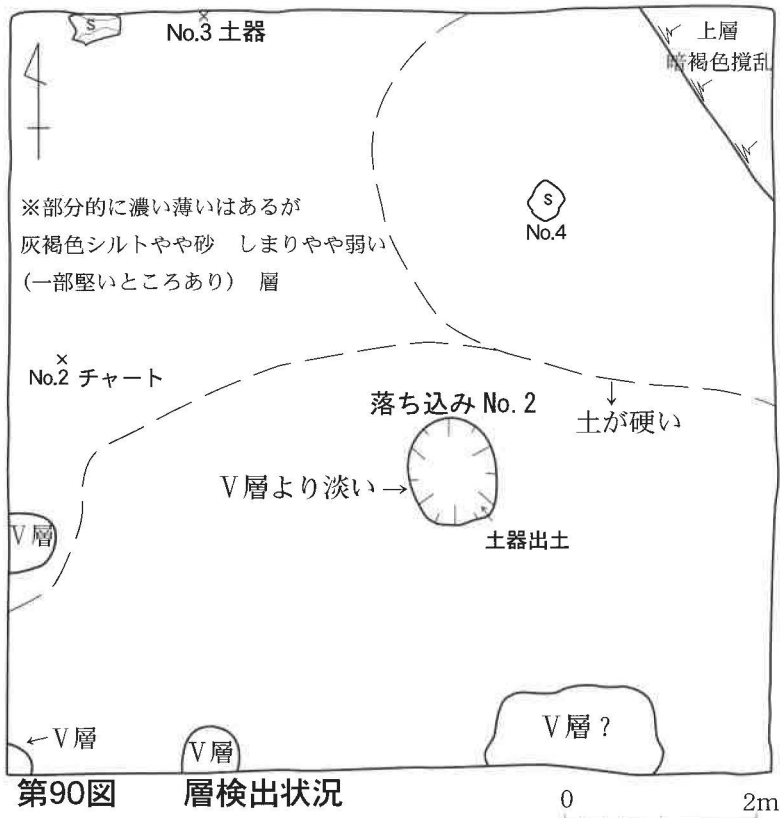
2. 層序：

- I層：暗茶褐色シルト層（20cm） やや粘質しまりはやや強い
- II層：赤褐色粘質土（20cm） ややシルト質しまりは強い
- III層：暗褐色シルト層（70cm） やや砂混じりしまりはやや強い
- IV層：淡黒褐色砂質土層（10～20cm） 炭入るしまりはやや弱い
- V層：淡黒褐色砂質土層 黄褐色砂質土が1～3mmの粒で入るしまりはやや弱い
- VI層：黄褐色砂質土層 部分的に暗いしまりはやや弱い
- VII層：暗灰褐色砂質土層 白灰色粘質土が1mm～2mmの粒で入るしまりはやや強い
- VIII層：灰白色粘質土層（10cm） 灰褐色粘質土が1mm～2mmの粒入るややシルト質でしまりはやや強い
- IX層：明黄褐色粘質土層（10cm） 淡灰褐色粘質土混じるややシルト質しまりはやや強い
- X層：灰白色砂質土層（10cm） 灰褐色砂質土でしまり弱水が湧く
- XI層：淡灰褐色砂質土（30cm） しまり弱い
- XII層：淡黄褐色砂質土層（1m） しまり弱い
- XIII層：黒褐色砂質土層（40cm） 黒褐色粘質土が混じるしまり弱い
- XIV層：暗はい褐色砂質土層（50cm） やや粗砂しまり弱い 大量に水が湧く

3. 特記事項：

〈出土遺物〉：

- III層：陶器片 炭 焼土
- VII層：面縄前庭式土器 チャート片
- XI層：土器
- XII層：面縄前庭式土器・チャート
- XIV層：サンゴ・貝



第90図 層検出状況



図版65 落ち込みNo.2



図版66 層検出状況(南東側)

遺構

第90図は地表下1~1.1mの地点で土層の検出状況である。

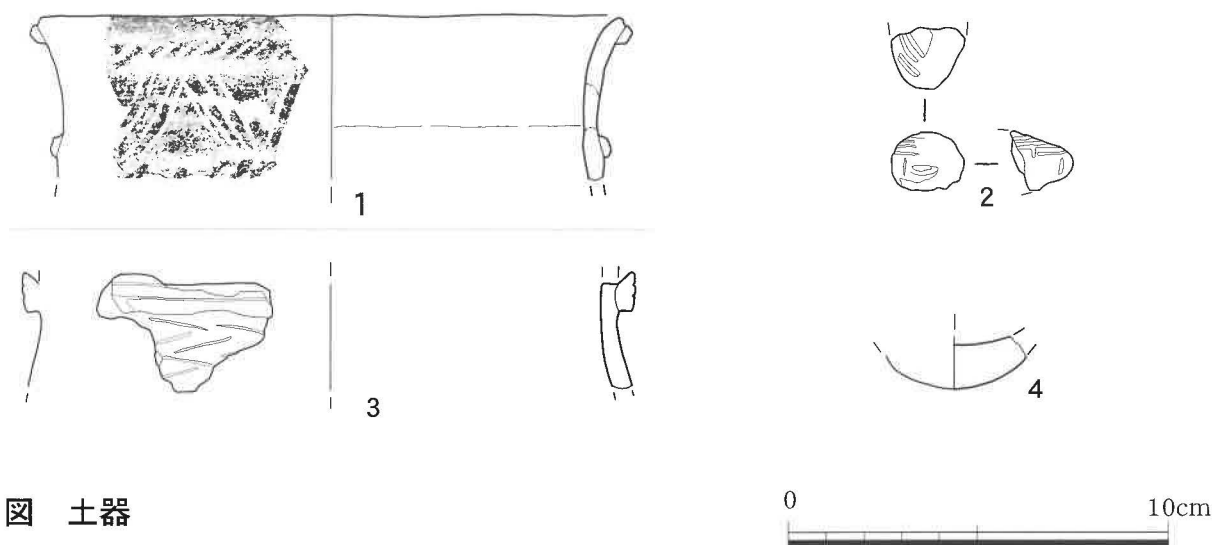
北東隅に上層（暗褐色攪乱層）、北東の4分の1にIV層が検出されている。その中央部分に石（No.4）が検出され、その状態は立位のようなものである。

北側にVII層の灰褐色シルト層が露出した状況で、部分的に濃淡が見られる。しまりの弱い土で、南側半分はやや堅い。

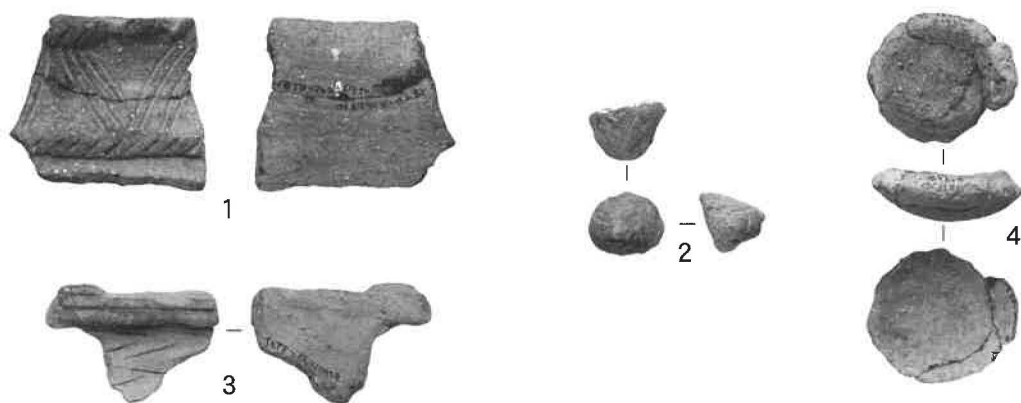
西側にチャート（No.2）、北壁で石、面縄前庭式土器（No.3）が検出された。

4カ所にV層よりの落ち込みが確認でき、直径30cmが西壁と南壁の2カ所できる。

また、ほぼ中央にV層よりの落ち込み見られるが、土が淡く、半裁（図版65）すると浅い。面縄前庭式土器が出土した。



第91図 土器



図版67 土器 (試掘No.26)

出土遺物

・土器 (第91図・図版67)

表土層では面縄前庭式土器の胴部7点、仲泊式土器1点の計8点。

Ⅲ～Ⅵ層では室川下層式土器胴部1点、面縄前庭式土器1点の計2点。

Ⅵ層およびⅦ～Ⅸ層では面縄前庭式土器の口縁部1点、胴部9点、底部1点の合計11点の出土である。主な土器は第91図、図版67である。

図1は面縄前庭式土器の口縁部で、外反する。口唇は玉縁状に丸く、口唇に刻目文、その下部に斜沈線文を施す。やや泥質で、焼成良好。外面は器面調整のための条痕が残る。混入物は粗い。内外面とも黄褐色を呈する。黒色系砂層上部で検出された。

図2・3は仲泊式土器に分類されるもので、図3は頸部で、肥厚部に横位の沈線文、胴上部に羽状の沈線文を配す。最大胴径14.5cmを測る。清掃中出土。

図2は山形口縁の突起の部分と考えられる。片面に羽状の沈線文が施され、頂部には凹文が2個確認される。図3は丸底で形状から前述の面縄前庭式土器か仲泊式土器の底部と思われる。

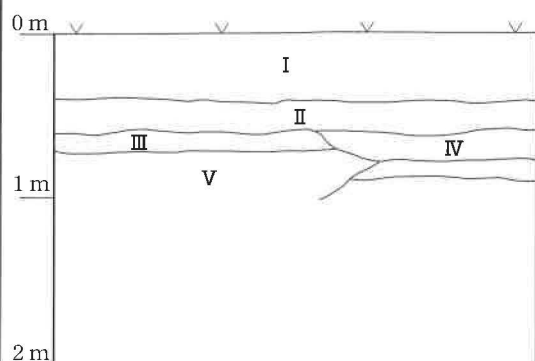
伊礼原E遺跡（旧ロッジ）（試掘 No.30）

〈調査日〉平成16年10月27日

〈記述〉

1. 標高：3.6メートル

2. 層序：



第92図 No.30北壁柱状図

- I層：淡橙褐色シルト土（40cm） やや粘質 しまり強
1～5cm礫大量
暗褐色土まじる
- II層：暗紫褐色シルト（20cm） やや砂 しまり強
橙褐色土のシミ入る
- III層：淡黄色褐色砂質土（10cm） しまり弱
暗紫褐色土混じる
- IV層：茶褐色砂質土（15cm） しまり弱
暗紫褐色土混じる
- V層：淡黄褐色砂質土（30～） しまり弱
10～20cmの石がポロ
ポロ入る
- VI層：暗褐色砂質土（10cm） しまり弱
茶褐色土混じる
- VII層：暗褐色砂質土 しまり弱



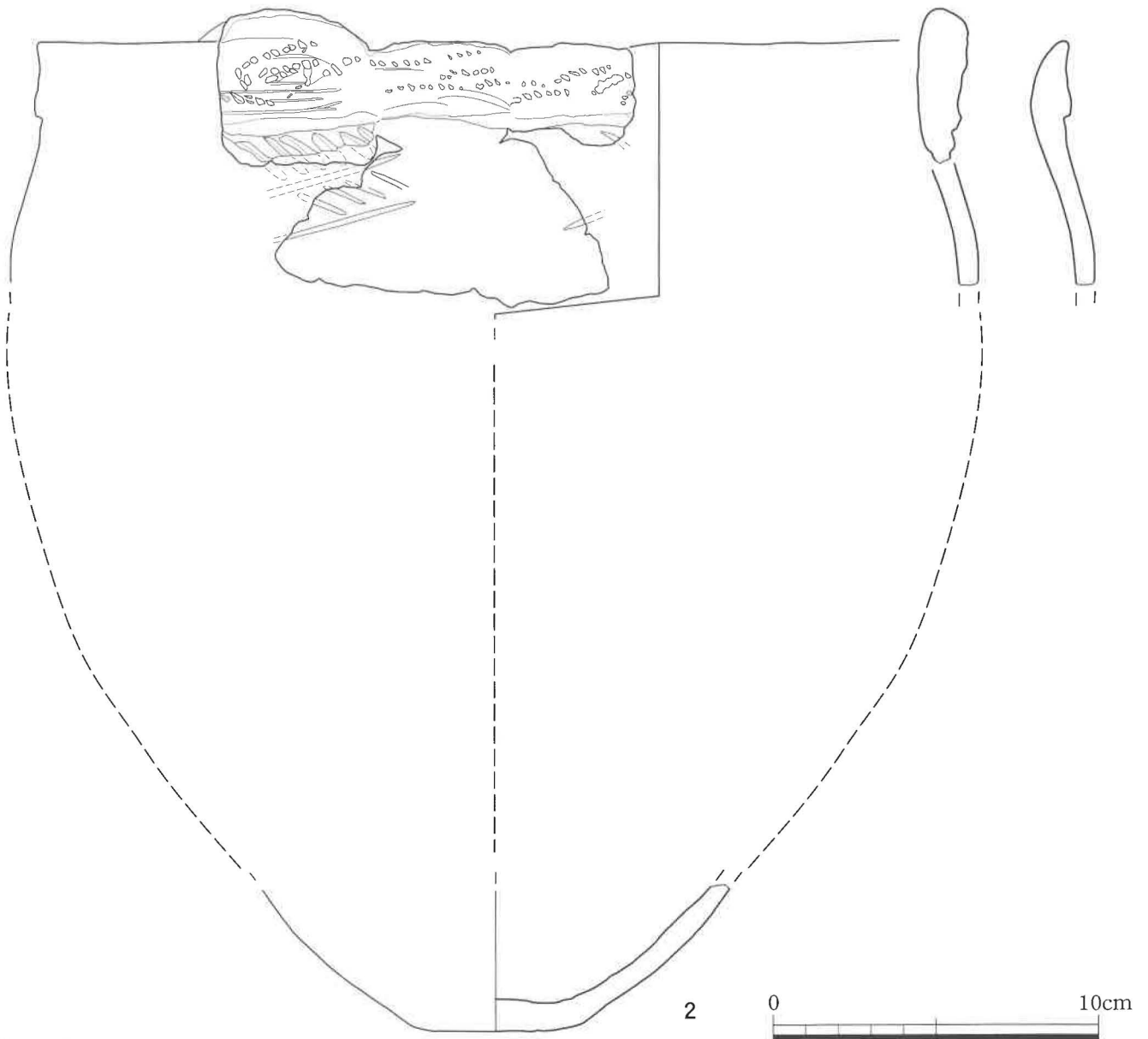
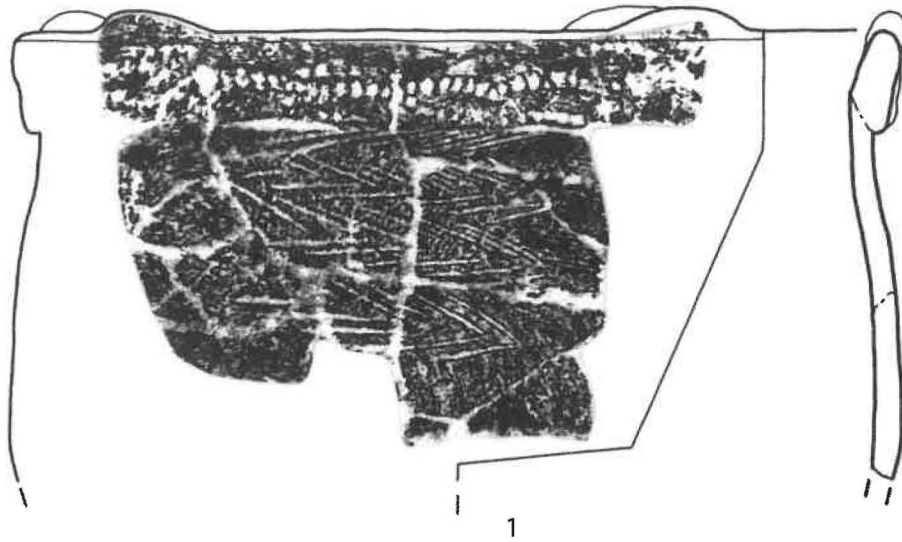
図版68 No.30北壁

3. 特記事項：

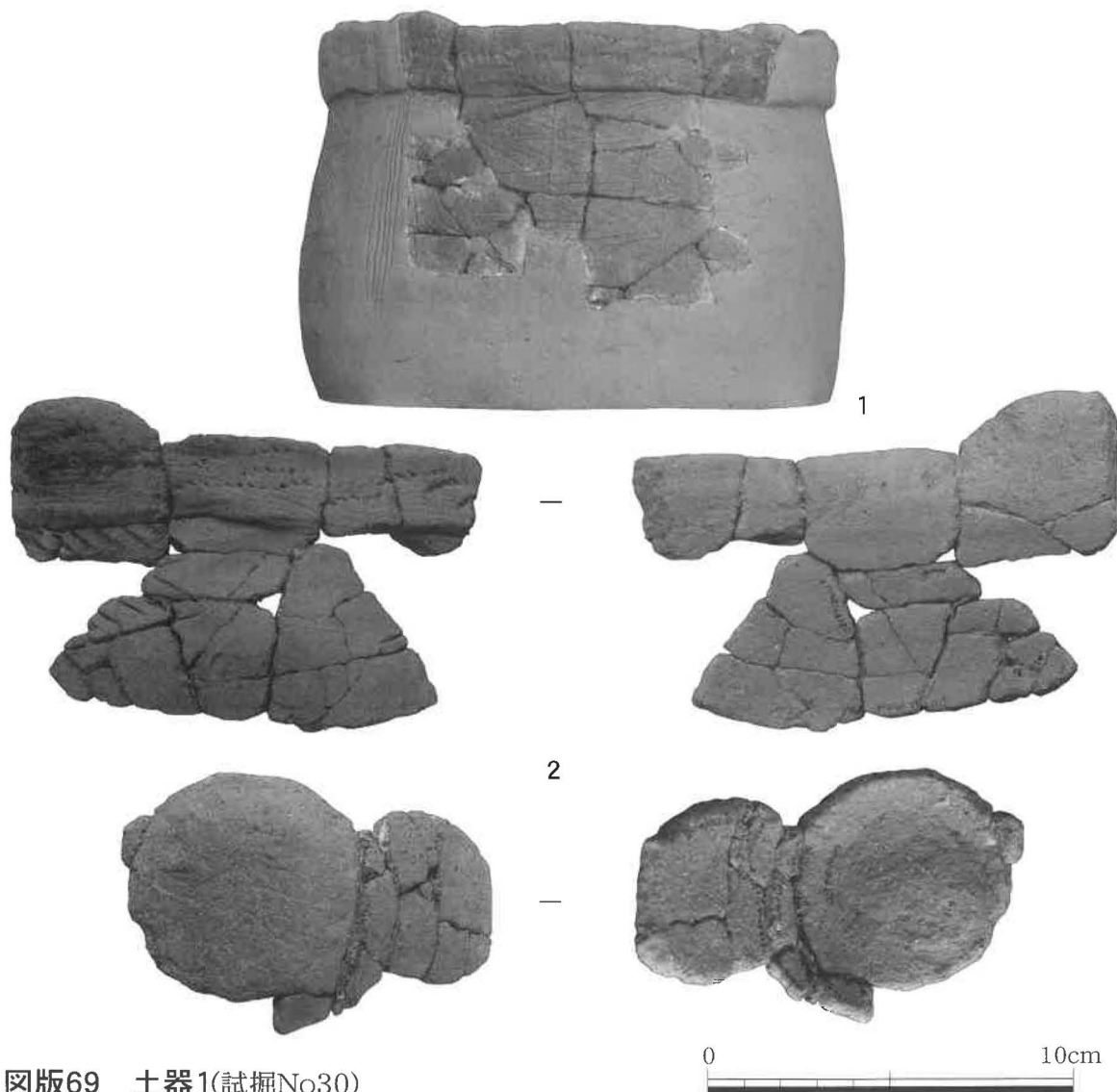
〈出土遺物〉

V層～VII層：土器（面縄東洞式・仲泊式土器）
石斧・チャート片

VII層：仲泊式土器（一括土器）



第93図 土器1(試掘No.30)



図版69 土器1(試掘No30)

出土遺物

本試掘からは土器は242点出土した。石斧4点、磨り石1点出土（237ページに参照）した。以下、主な土器について第93・94図、図版69、70に記述し、石器については試掘の石器として後項にまとめて記述した。

・土器（第93・94図・図版69・70）

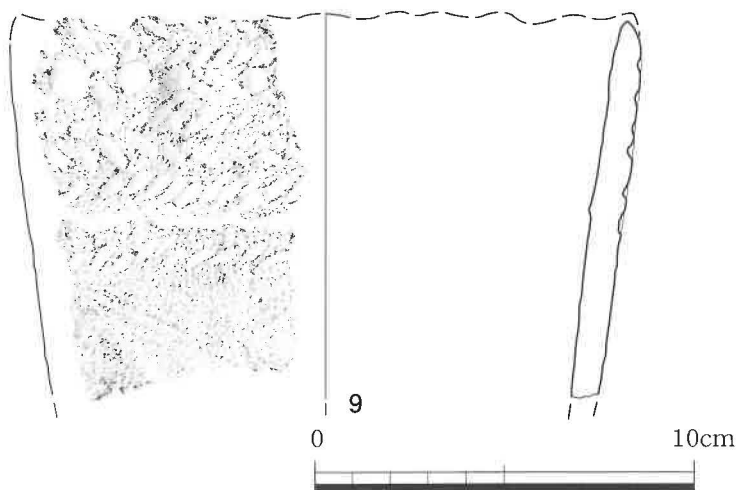
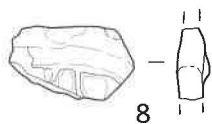
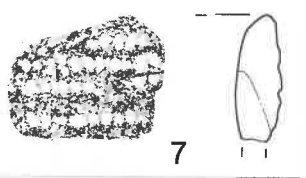
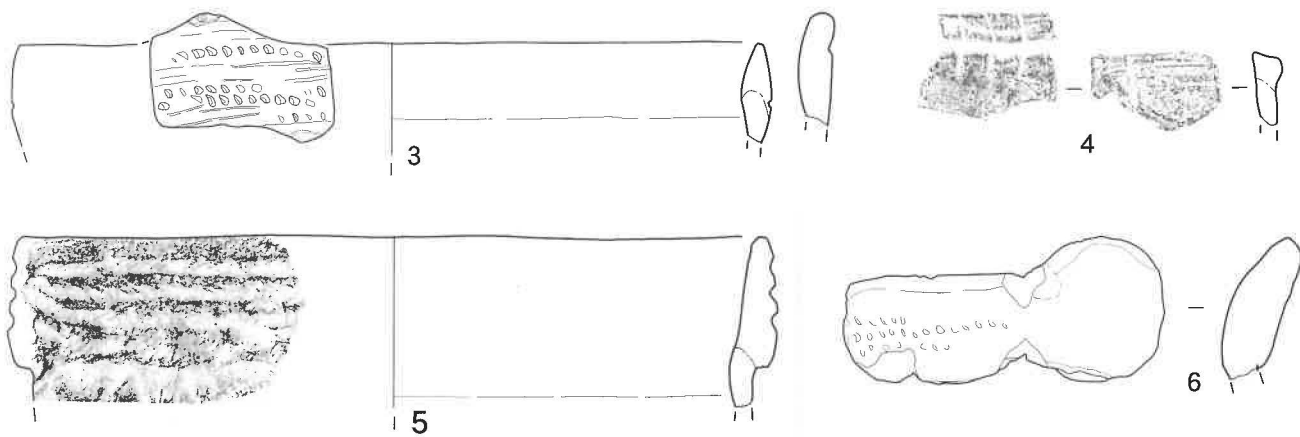
出土した土器は室川下層式土器、口縁部1点・胴部24点、面縄前庭式土器、口縁部54点・胴部75点・底部17点、仲泊式土器、口縁部11点である。以下、型式別に略述する。

室川下層式土器（図9）

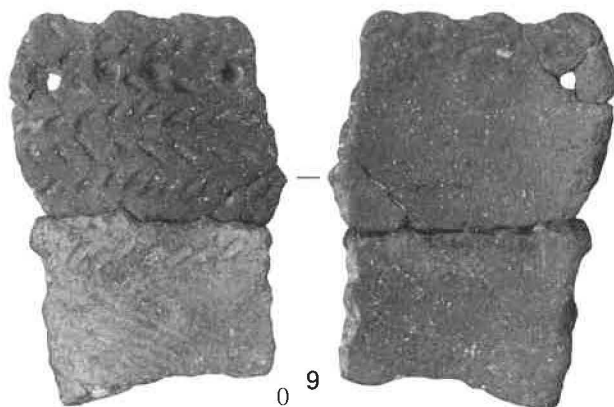
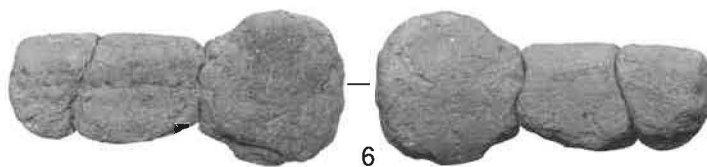
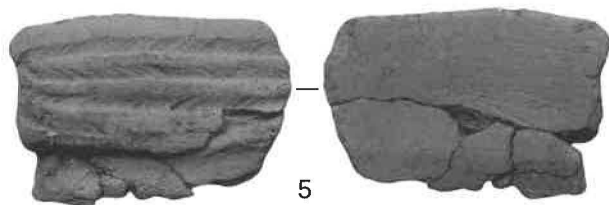
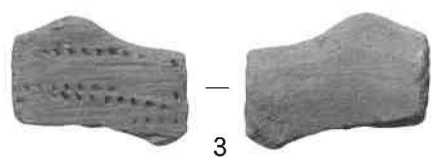
図9は直口口縁で、舌状を呈する筒状の土器で口径16.6cmを測る。文様は竹管文と短い斜沈線文の組み合わせで深く施文する。器色は内外面とも暗茶褐色を呈し、砂質で焼成はもろい。

面縄前庭式土器（図4、8）

図7は口縁部で外反する。口唇は玉縁状に丸く、口唇に刻目文、その下部に斜沈線文を施す。やや泥質で、焼成良好。外面は器面調整のための条痕が残る。混入物は粗い。内外面とも黄褐色を呈する。黒色系砂層上部で検出された。



第94図 土器2(試掘No.30)



図版70 土器2(試掘No.30)

図8は胴部で、凸帯文の上に刻目文を施す。泥質で焼成良好。内外面の器面の保持も良い。混和材は多量に混入し、粒子も粗い。器色は外面:暗褐色、内面:黄褐色。を呈す。-30IV層以下掘り下げで検出された。

仲泊式土器 (図1、2、3、6)

図1は山形口縁を5個配すると推定されるもので、肥厚の幅は32~22mmを測る。文様は貝殻文を肥厚部、囲繞しない斜沈線文を胴上部に配す。砂質で焼成はもろい。口径は22.8cmを測る。出土層は不明。

図2は口縁部で肥厚する。山形口縁で、肥厚の幅は35mm~25mmを測る。肥厚部には貝殻文を五条施す。砂質で、焼成は良好で、器面の保持も外面は:やや良好で、内面は悪い。混和材に石英やチャートなど粗いものを用いる。器色は外面は暗灰色、内面は黄褐色を呈する。黄褐色砂層(盛土)の出土。

図3は前述と同じく、山形口縁で、やや外反する。肥厚幅は25mmで、肥厚部に貝殻文を施す。砂質で焼成良好、器面の外面は条痕文が認められる。混和材は少量で、細かい。器色は内外面とも黄褐色を呈する。口径19.2cm。盛土表採。

図6は仲泊式土器の範疇に分類されるもので、瘤状の突起である。暗黄褐色砂層掘り下げて検出された。

面縄東洞式土器 (図5、7)

図5は肥厚の口縁部である。文様は肥厚部に刺突文を流水状に施文する。砂質で焼成やや悪い。裏面は器面調整のための条痕が顕著に認められる。

表58 試掘(旧ロジ)土器出土量

グリッド	層序		ア	グ	庭	室下	室川	仲	仲-a	仲-b	東	他	爪形文	嘉II	後	晩期	浜	弥模	大当	不明	小計	層合計	グリッド合計			
TP-26	Ⅲ~Ⅵ層	胴			1	1																2	2	21		
	Ⅵ、Ⅶ~Ⅸ層	口			1																	1	1		11	
		胴底			9																		9			9
		表土層	胴			1			1														1			8
TP-30	Ⅲ層	口			3					3												6	6	242		
		胴			5	4																	9		15	
	Ⅴ、Ⅵ層	口			1																	1	1		4	
		胴			3																	3	4			
	Ⅴ、Ⅶ層	口			2					1	1												4		4	21
		胴			15	2																	17		17	
	Ⅶ層	胴			8																		8		8	24
		胴底			16																		16		16	
	暗黄褐色砂層	口			45				5														50		53	46
		胴			3							3											3		3	
		暗黄褐色層	胴		6																		6		6	
		暗灰色土層	胴		6													17					23		23	
		括土器土層	胴															1					1		1	
		黄褐色砂層	口						1														1		1	
黄褐色粘質土層		口			4														1				5	5		
		胴底			5	9	2				2								1				19	25		
黒色系砂層	口			1																1		1	1	12		
	胴			8													3			1		11	11			
表土層	口							1		3		1					14	1			4	44	49	46		
	胴尖	3	1	16	4												1					1	1			
TP-32	不明褐色土層	胴			6	2																8	8	46		
	黒色系土層	胴			1													17				17	17			
	淡灰色砂層	口			1															7		1	16			
	灰色砂層	胴			1	8																15	15			
	表土層	胴			2					1								6				7	7			
合計				3	1	170	34	2	6	2	4	10	1	0	0	0	0	0	0	61	3	8	4	309		

伊礼原E遺跡（旧ロッジ） 試掘 No.32

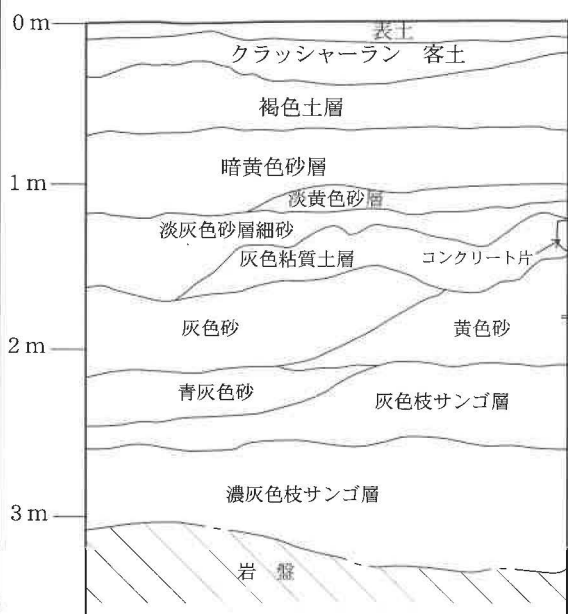
〈調査日〉平成16年10月25日

〈記述〉

1. 標高：3.6メートル

2. 層序：

- 表土(10cm)
 - クラッシャーラン 客土 (10~20cm)
 - 褐色土層 (30~50cm)
 - 暗黄色砂層 (30~50cm) 土器出土
 - 淡黄色砂層 (10cm)
 - 淡灰色砂層 細砂 (10~50cm)
 - 灰色粘質土層 (20cm) コンクリート片
 - 灰色砂層 (50cm)
 - 黄色砂層 (50cm) 水が湧く
 - 青灰色砂層 (50cm)
 - 灰色枝サンゴ層 (10cm)
 - 濃灰色枝サンゴ層 (50cm)
- 80~100cm台の岩が見られる。
岩はごつごつしている。



第95図 No.32南壁柱状図

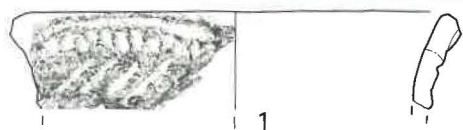
3. 特記事項：

〈出土遺物〉

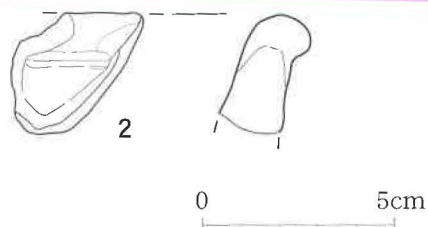
暗黄色砂層：面縄前庭式土器出土



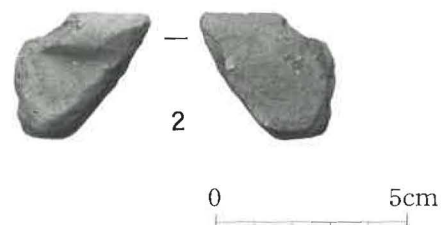
図版71 No.32南壁



第96図 土器 (試掘No.32)



図版72 土器 (試掘No.32)



・出土遺物

土器46点、石斧2点 (236ページ参照) 出土した。

以下、主な土器について第96図、図版72に記述し、石器については試掘の石器として第 節にまとめて記述した。

・面縄前庭式土器 (第96図)

図96は外反口縁である。凸帯文の上に斜沈線文を施す。砂質で焼成はやや悪い。混和材は多く、細かい。内外面は赤褐色を呈する。旧表土下掘り下げ中 (一部米軍土まじる) に出土。

・後期系土器 (図2)

図2は逆「L」字状の口縁で、外反気味である。砂質で、焼成良好。器面は内外面とも残る。混和材は多量に含み、粗い。内外面は黄褐色を呈する。厚さも12mmと厚く、弥生系土器に近いようである。

その他の遺物

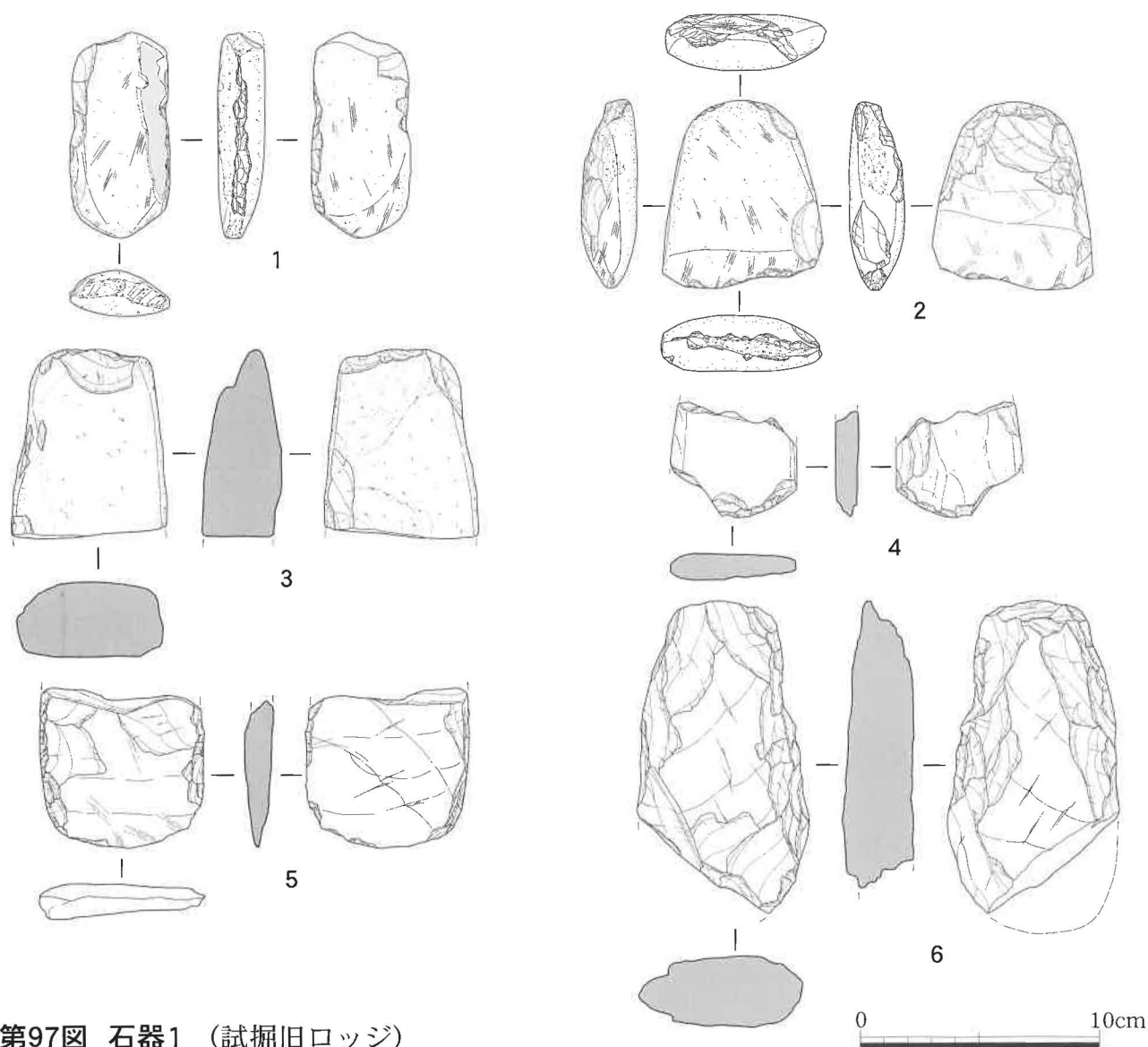
1. 石器 (第97図・図版73)

石器は総数92点出土している。この内、旧ロッジ跡の石器は17点である。確認できた器種は石斧、敲击石、凹み石、磨り石、用途不明、石器片である。石器の素材としては、片状砂岩、輝緑岩、玄武岩、砂質片岩、緑色岩、砂岩、礫岩などが使用されている。図化したものの詳細は観察表で述べる。

・石斧

石斧は、合計6点出土し、半磨製石斧と打製石斧に大別できる。また、刃部を「両刃」、「片刃」、「刃部不明」に分けた。それぞれの内訳は、半磨製石斧4点、打製石斧2点である。石質は、輝緑岩を使用したものが多く、片状砂岩、安山岩、玄武岩、砂質片岩、輝石安山岩、角閃岩、緑色岩、などの石材が使用されていた。

半磨製両刃石斧で形が短冊形のは図1で、バチ形のは図2である。半磨製刃部不明石斧で形が短冊形のは、図3で、図4は刃部不明である。打製片刃の石斧は、図5で短冊形である。打製の刃部不明石斧のバチ形は図6である。



第97図 石器1（試掘旧ロッジ）

・ 敲き石

敲き石は、合計2点出土し、全て円礫を利用したものであった。形状はそれぞれ「半円形」と「饅頭状」である。石質は砂岩を使用していた。半円形の円礫を利用したものは図7・8である。饅頭状は図9である。

・ 磨り石

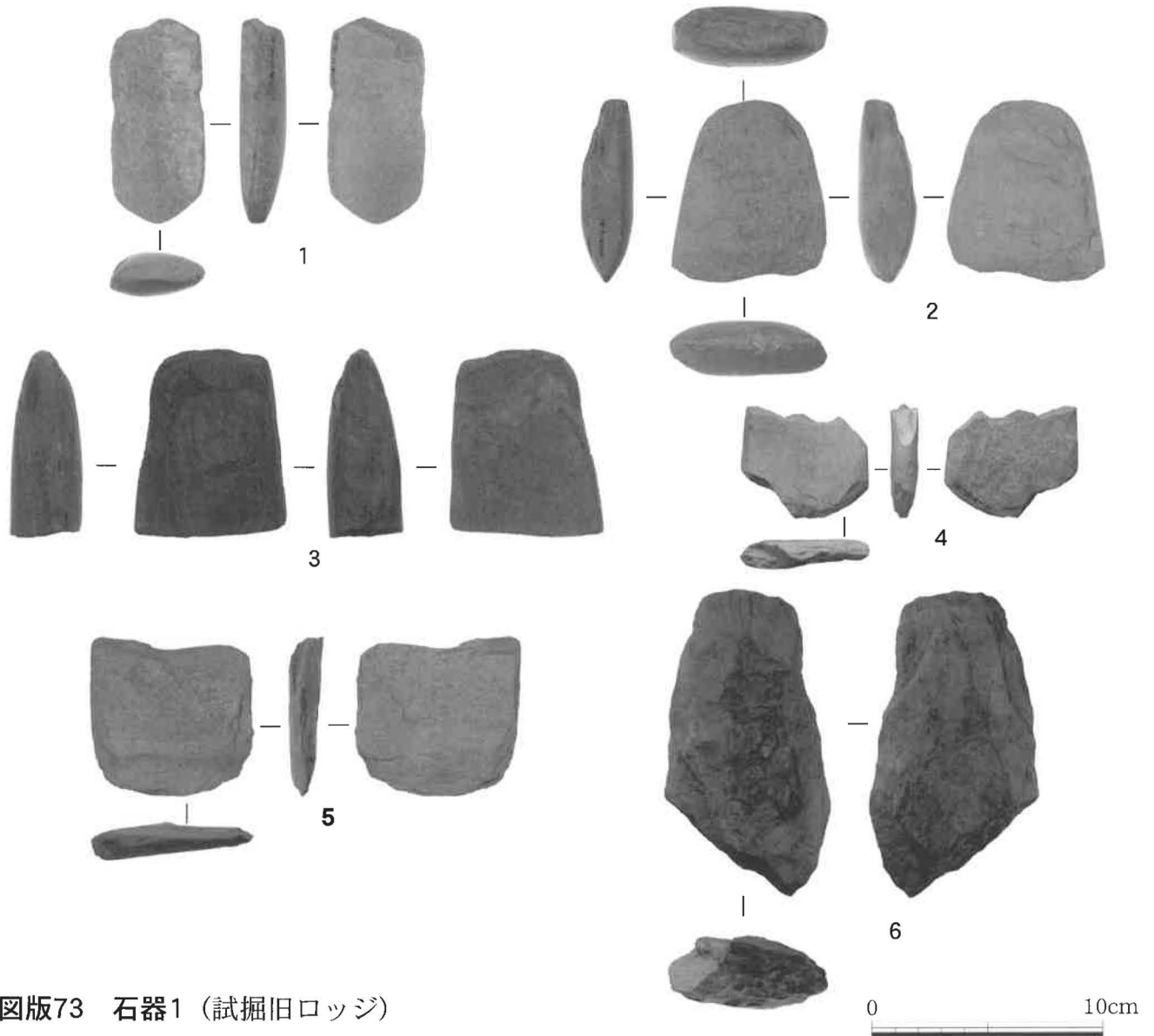
磨り石は合計3点出土し、円礫を利用したものである。形状は「半円形」、「楕円形」、がある。石質は、砂岩、片状砂岩などの石材が使用されていた。半円形は図10、楕円形は図11である。

・ 用途不明

用途不明半磨製石器は、1点出土し、形状は「楕円形」である（図12）。石質は礫岩である。

・ 石器片

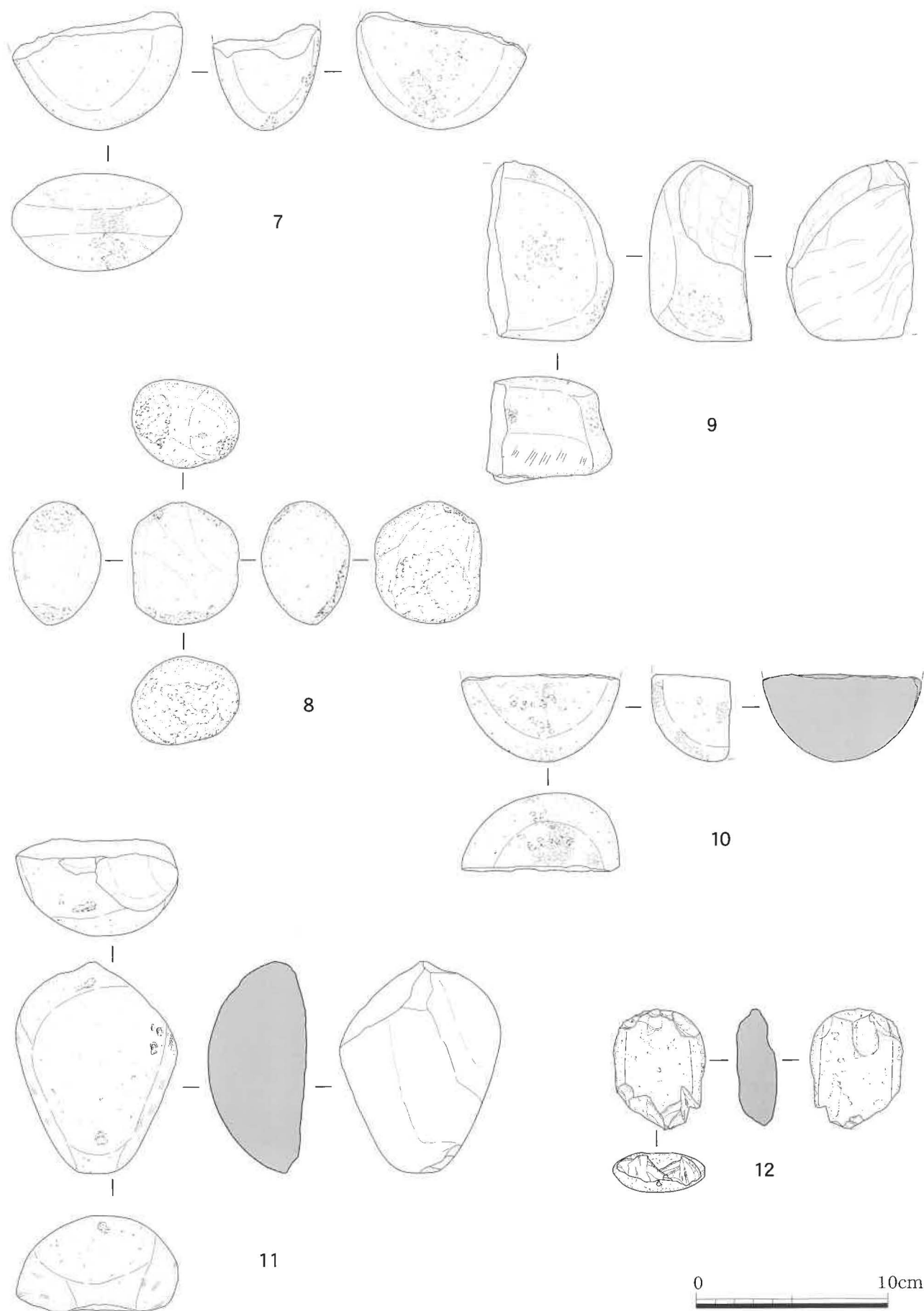
石器片は、半磨製で4点出土し、形状は「方形」、「不明」である。方形は1点、不明は3点である。



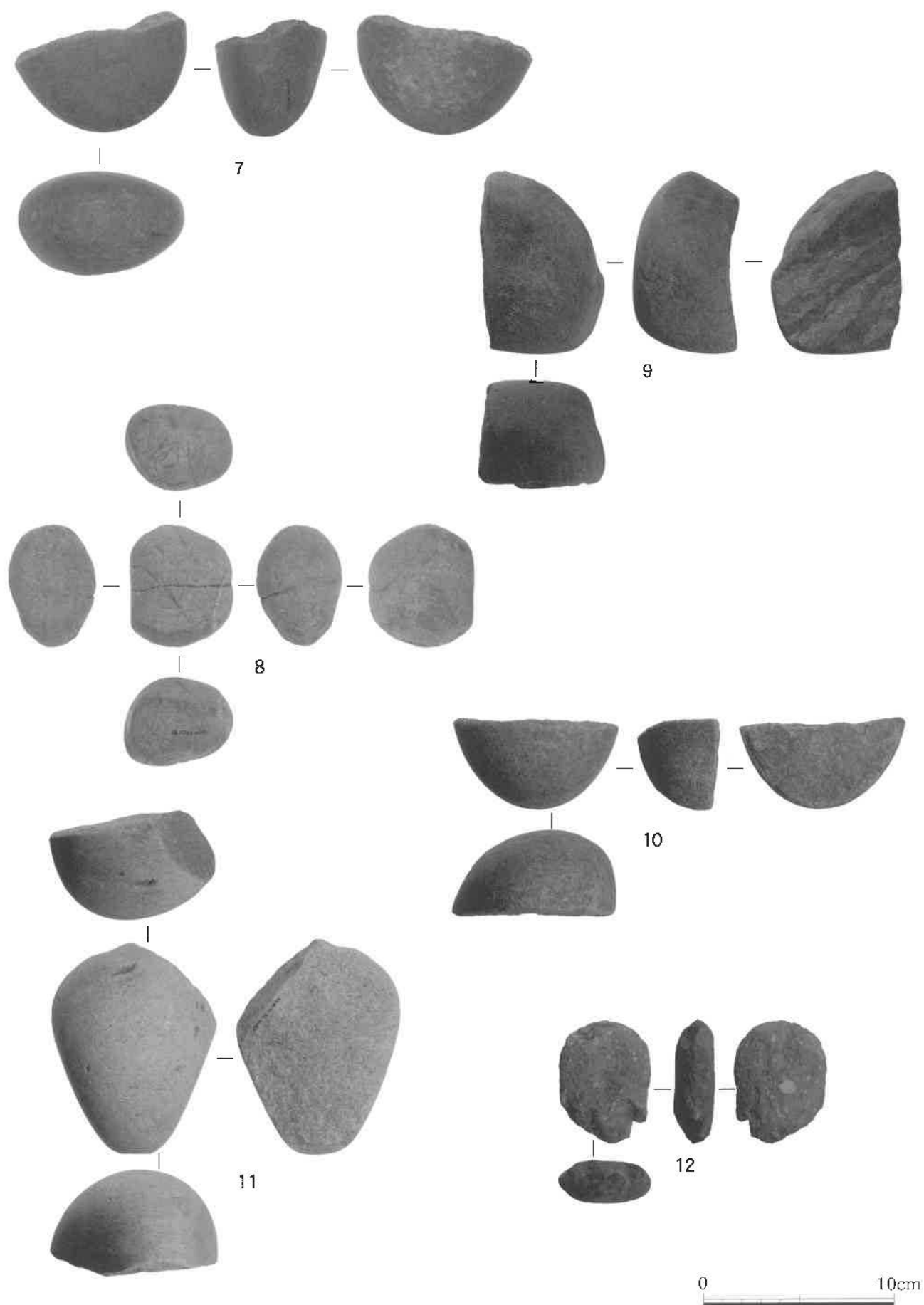
図版73 石器1 (試掘旧ロッジ)

表59 試掘(旧ロッジ)石器出土一覧

出土地		石斧		敲き石		磨り石		用途不明	石器片		計		
		半磨		打		円礫		円礫	半磨	半磨			
		両刃	不	片刃	不	半円	饅頭	半円	楕円	楕円		方	不
No.23	X VI～X VIII層					1		1				2	
No.25	TP.No.25 灰黒色土と白砂の混じり		1						1		1	3	
No.26	清掃中出土										1	1	
No.30	III～VII層 若干II層混じる 盛土表採			1								1	
	V層の下部(地表下-123cm)				1							1	
	V層出土	1										1	
	VII層掘下げ中		1									1	
No.32	TP-30 拡張南壁清掃中							1				1	
	盛土表採										1	1	
	付近 表採									1		1	
	畦灰褐色土下の砂の盛土表採若干暗褐色土混じるV・VII層床の時壁・床清掃中					1						1	
No.32	旧表土下掘り下げ中 灰色砂 淡灰色砂	1										1	
No.32	灰色砂 淡灰色砂					1						1	
小計		2	2	1	1	2	1	2	1	1	1	3	
分類別合計		4		2		3		3		1		4	
器種別合計		6				3		3		1		4	



第98図 石器2(試掘旧ロッジ)



図版74 石器2(試掘旧ロッジ)

表60 試掘(旧ロジ) 石器観察一覧

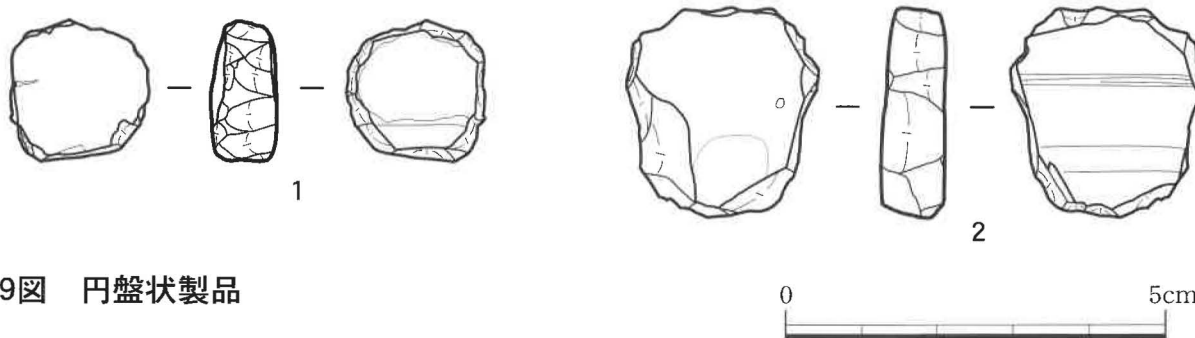
第 図 図版	図 番号	器種	大分 類	小分類	残存	縦(cm) 横(cm) 幅(cm) 重量(g)	石質	観察事項	出土地
第97図(図版73)	1	石斧	半磨	両刃	刃・体部	8.7 4.0 1.9 103.9	片状砂岩	平面は短冊形、側面は柱状。両凸刃で、刃縁は円刃で、摩耗しており、鋭くはない。刃部を除く全ての面に打割痕が観られる。	No.30 V層出土
	2	石斧	半磨	両刃	完形	8.0 6.5 2.4 200	輝緑岩	平面はバチ形、側面は楕円形。両凸刃で、刃縁は偏刃である。表裏側面に研磨が施され、両側面には綾が形成されている。定角式石斧である。また打割も全面に観られ、上下面には敲打痕がある。刃部左側は敲打痕により、刃縁が著しく摩耗している。敲き石に転用か？	No.32旧表土掘り下げ中 灰色砂 淡灰色砂
	3	石斧	半磨	短冊形	頭部	8.0 6.0 3.3 268	玄武岩	平面は短冊形、側面は柱状。表裏面に研磨が施され、表裏上面には打割痕。裏、両側面に敲き痕がある。破損しているため、全体形は不明。沖縄からは採掘されない石であり、他地域から移入か？	No.30VII層掘り下げ中
	4	石斧	半磨	不明	体部	4.6 5.3 0.9 42.79	砂質片岩	平面は不明、側面は柱状。表裏側面に研磨が施されているが、裏面は一部分だけで、残りは自然面である。また、表裏側下面には打割痕が観られる。破損しているため、全体形は不明。	TP.No.25
	5	石斧	打製	片刃	刃部	6.8 6.8 1.1 91.52	緑色岩	平面は短冊形、側面は板状。弱凸強凸片刃で、刃縁は円刃。打割のみで、研磨は施されていない。破損しているため、全体形は不明。	No.30 III～VII層若干 II層混じる盛土表採
	6	石斧	打製	不明	頭・体部	13.2 7.0 2.7 380	緑色岩	平面はバチ形、側面は柱状。全体面に打割痕が観られる。破損しているため、全体形は不明。	No.30 V層の下部 (地表下-123cm)
第98図(図版74)	7	敲き石	円礫	半円	破損	6.3 8.7 5.4 360	砂岩	平面は半円、側面は半楕円。上面を除く全ての面に磨痕が施されている。また、裏側下面に敲き痕が観られる。破損しているため、全体形は不明。	畦灰褐色土下の砂の盛土表採若干暗褐色土混じるV・VII層床の時壁・床清掃中
	8	敲き石	円礫	半円	完形	9.4 6.6 5.5 549	砂岩	平面は半円形、側面は方形。表側下面に磨痕、表面には敲打による凹みが観られる。また、側上面に打割痕が観られ、上面には敲き痕も観られる。左手で持ちやすいように加工されているように思われる。破損したため、二次使用か？	NO.23 XVI～XVIII層
	9	敲き石	円礫	饅頭状	完形	5.6 6.2 4.7 229	砂岩	平面は饅頭状、側面は楕円形。表裏下面に磨痕、下面を除く表裏面に打割痕が観られる。また、側上下面に敲き痕が観られる。	No.32灰色砂 淡灰色砂
	10	磨り石	円礫	半円	破損	4.5 8.3 4.1 208	砂岩	平面は半円、側面は扇形。表下面に磨痕、敲き痕も観られる。破損しているため、全体形は不明。	TP-30拡張南壁清掃中
	11	磨り石	円礫	楕円	完形	11.1 8.2 5.0 585	片状砂岩	平面は楕円、側面は半円。表側面に磨痕、表面には敲き痕が観られる。また、上下面に打割痕が観られ、左手で持ちやすいように加工されているように思われる。	TP-No.25灰黒色土と 白砂の混じり
	12	用途不明	半磨	楕円	破損	6.4 4.5 2.1	礫岩	平面、側面共に楕円形。表側面に部分的に研磨が残っているが、全体的に破損しているため、その様相は判然としない。表面下部に切り込みが二条あり、右側が特に深く切り込んでいる。	TP-No.25

2. 円盤状製品

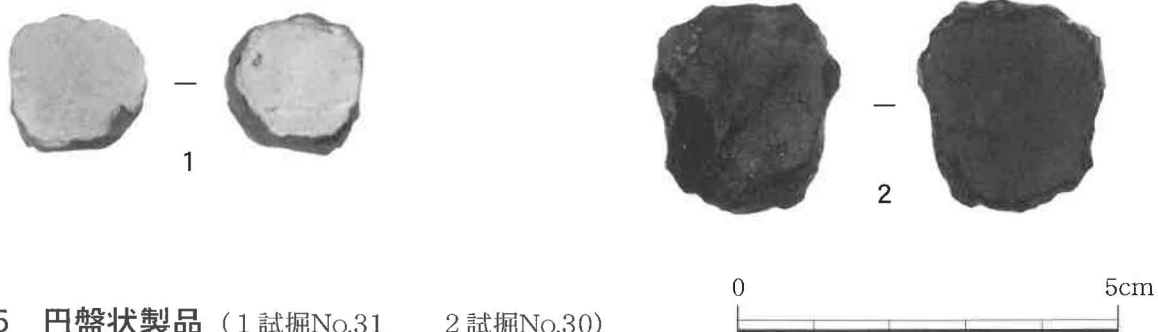
総計2点出土している。図1は白化粧土に透明釉がかかる沖縄産施釉陶器で、図2はやや赤みのある無釉陶器である。

表61 試掘(旧ロッジ) 円盤状製品観察一覧

図・図版番号	図番号	材料	短軸 (cm)	長軸 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	観察事項	出土地
(図版75)	1	沖縄産施釉陶器	1.8	1.8	6~8	3.35	碗の胴部を使用。やや丁寧な加工により円形を呈す。	No.31試掘旧表土・米軍攪乱土 20041014
	2	沖縄産施釉陶器	2.41	2.74	6~7.5	7.59	器種不明、胴部を使用。やや荒い加工により楕円形を呈す。	No.30試掘 20041101



第99図 円盤状製品



図版75 円盤状製品 (1 試掘No.31 2 試掘No.30)

3. 脊椎動物遺体

試掘No.25、30、32から出土した脊椎動物遺体が得られた。

試掘No.20でウシの歯、試掘no.30では魚がハリセンボン、フエフキダイ、リクガメ、イノシシが出土している。特にイノシシの出土量が多いようである。試掘No.32ではハリセンボン、ウミガメ、ジュゴンなどが出土した。

詳細は表に示す。

第八章 まとめ

キャンプ桑江北側の返還に伴う試掘調査の成果から伊礼原E遺跡と命名された本遺跡はさらに、その範囲を確認するため、平成16年に米軍の旧ロッジ跡の試掘No.26、No.30、No.32と平成14年に10m×5mのトレンチを8本の試掘設け、調査を行った。その結果、伊礼原E遺跡は伊礼原遺跡（低湿地区・砂丘区）の所在する北側に包含層が存在する可能性が高いようである。

伊礼原E遺跡は平成14年に返還されたキャンプ桑江北側地区のほぼ中央部分で奈留川とナガサ川に挟まれた沖積低地である。

第100図に示したように本遺跡の地形断面はAトレンチとBトレンチは南北（A-A'）と東西（B-B'）に高低差があり、Bトレンチ方向に低くなる。

東側試掘とAとBトレンチの層序を統一すると

- ①層（米軍造成土）。
- ②層（旧表土）厚さ30cm。
- ②層 耕作土
- ③層（淡茶・黒砂層）
- ④層（白砂層）土器は含まれない海拔2.0m、
人骨の放射性炭素年代測定年代200±30年。
- ⑤層（シルト層）。
- ⑥a層（粗砂層）。
- ⑥b層（枝サンゴ層）B-3、1、25m。
放射性炭素年代測定A-2 枝サンゴ層、5180±40BP
- ⑦層（ビーチロック）B-1海拔0.5m。
- ⑧層（赤土・琉球石灰岩風化土）、東側試掘のみで確認。
- ③層は薄いが浜屋原式土器の時期の層があると思われるが薄いようである。④層の白砂層は⑥b層の枝サンゴ層で縄文時代後期土器が多数出土することから、それ以降に形成された砂丘といえる。

今回の調査で、枝サンゴ層に含まれた遺物が室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器、面縄東洞式土器など縄文時代後期以前であることから枝サンゴ層の下部と上部で時代を区分が可能と思われる。⑥b層下部は縄文時代後期以前、⑥層の上部は縄文時代後期以後と位置づけられ、④層の白砂層は新しい時期のものである。

沖縄本島と同じようにサンゴ礁で囲繞された奄美大島先史遺跡についてみると長浜金久遺跡（I・II・III・IV・V）では縄文後期の住居址や包含層に白黄砂が被さるという状況が見られた。発掘調査の成果から調査者は標高12m～9mの縄文前期～後期の長浜金久II遺跡―ケジI・II・III遺跡、新砂丘をさらに3つに細分、砂丘Iを標高9.0mの弥生時代・古墳時代の長浜金久III・IV・V遺跡、砂丘IIを標高13.0mの古墳～奈良・平安時代の長浜金久I遺跡、砂丘IIIを現在の海岸としている（第101図）。

沖縄本島では旧砂丘と新砂丘の境界は明瞭でなく、遺跡の立地する砂丘のあり方は異なるようである。

枝サンゴ層は奄美大島の泉川遺跡の3層（褐灰色砂層）でも確認され、報告者は「サンゴ塊・枝

サンゴを含み、貝殻の死骸で構成され、人為的でなく海進海退の影響を受け、現位置ではなく二次的な堆積と判断した。」とし、遺物は出土してない。

本遺跡周辺の立地では奄美大島の「白黄砂」に変わるものとして「枝サンゴ層」が考えられ、出土した土器から枝サンゴ層の上部が縄文時代後期以降に位置づけられる。

伊礼原E遺跡ではA-2で枝サンゴ層とシルト層が東西に分かれ、その上部に白砂層（④層）が西側部分に被さるように検出された。東側には遺物包含層らしきものが確認されたが薄い。また、南北の壁面で断層が見られ、この断層は松田の指摘する（2006）、大きな波力が加わったことに起因するものであろうか。

今回の調査で出土した室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器、面縄東洞式土器と枝サンゴ層の範囲を試掘調査（2005）の成果を元に平面分布を第102図に示した。これによると伊礼原遺跡（2007）を中心として南北に標高1.25mのラインで沖積低地に一様にな広がりを持つようである。これは、『伊礼原C遺跡の語るもの』（2004）に示した、縄文時代後期の汀線のラインを証左するものである。同時に同じような地形を示す沖縄本島のほかの地域での枝サンゴ層の検出の可能性を秘めているものと思われる。また、同じサンゴ礁地域の奄美大島でも先史時代に海進海退があり（河名・松田2006）、本遺跡の枝サンゴ層に含まれている考古遺物はその時期を照明あるいは特定することができる好資料といえよう。

遺構についてみると近世と縄文時代前期のものが確認された。

近世の遺構は④層（淡茶・黒砂層）の時期のもので幅50cmの細長い溝状遺構で、いずれも北東から南西にA-1西、A-1東、A-2、B-1、B-2で白砂層に掘り込まれて検出された。遺物は青磁や褐釉磁器、褐釉磁器などが少量出土する。溝の断面は鍋底状を呈することから畑に関連するものと思われる。

近代の集落跡が確認でき、前項の伊礼原B遺跡の遺物組成と酷似する。これは近代の集落の範囲を裏付けるものである（名嘉地2006）。

縄文時代前期の遺構と考えられるものがA-3の土壌である。石組みの下部から人骨が検出された「Y-1」と呼ばれる1体分（第七章参照）である。熟年男性で、屈強な体格の縄文人である。土壌の中から得られた炭化物の放射性炭素年代測定年代が $5100 \pm \text{BP}$ 年という結果（第六章2）が得られている。しかし、A-2枝サンゴ層から出土した放射性炭素年代測定年代でも $5180 \pm 40 \text{BP}$ の結果があり、A-3の層は下部で大形の石が多数含まれ、層序は不安定な状況であるため、土壌は墓か落ち込みかは今後の調査に結論をゆだねたい。

遺物についてみると近代遺物は表面採集・表土層で出土し、陶質土器は火炉・鍋や急須など火を使用するもの、沖縄産施釉陶器、や近代磁器は碗類、小碗などの日用食器類、沖縄産無釉陶器は壺などの貯蔵器で当時、用途別に焼き物の種類を使い分けていたようである。瓦はA-1、2、3、B-3、4、5から得られ、建物が予想される。

土器についてみると浜屋原式土器が③層で数点出土したが、層は薄く、下部との攪乱などで安定しない。しかし、浜屋原式土器の前後の攪乱と判断され、弥生時代相当と位置づけられる。

枝サンゴ層で出土した土器についてみると室川下層式土器は小形タイプで、伊礼原遺跡のものとは様相を異にし、胎土も黒っぽい。面縄前庭式土器は出土する割合は低く、仲泊式土器は大形破片で、出土量も他の型式に比べて高い。

また、第45図7に示したように口縁部の作りが凸帯文と肥厚口縁の中間タイプで胴上部の施文ものは伊礼原遺跡（2007）でも多数得られ、この地域の縄文時代後期の特徴的な土器といえる。今後、口縁形態及び文様などを細分が可能だと思われる。

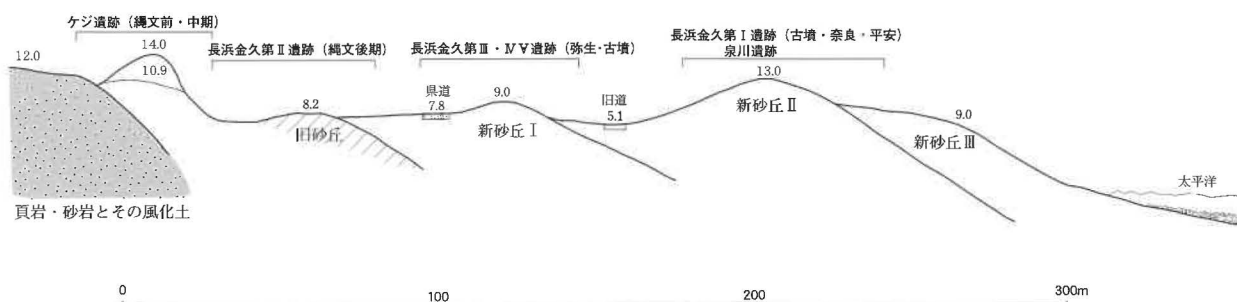
石器では石鏃がA-2淡茶褐色層で出土。所属年代ははっきりしない。バランスの悪い基部で、沖縄諸島では初めての出土である。また、チャートの剥片や石核なども多数得られている。骨製品はクジラの骨を利用したもの、貝製品ではタカラガイやスイジガイの垂飾品、弥生時期にあるようなゴホウラ貝輪なども出土している。遺物の出土状況は伊礼原遺跡の砂丘区と酷似する。伊礼原E遺跡の枝サンゴ層の中に含まれる遺物は伊礼原遺跡の砂丘区の縄文時代の領域、EC-19ラインの人々の可能性が考えられる。

これら土器を持つ人々は浦添市浦添貝塚（標高60m）、うるま市石川古我地原貝塚（標高60m）と高い地域に立地することの要因になったのかもしれない。

枝サンゴ層の中に縄文後期の遺物が出土することは北谷町キャンプ桑江における地域限定なのか、縄文後期の沖縄島全体に及ぶことなのかでその後の先史時代の展開に問題を投げかけるものといえる。また、沖縄本島の内湾する地域での遺跡のあり方に問題を投じているものと思われる。

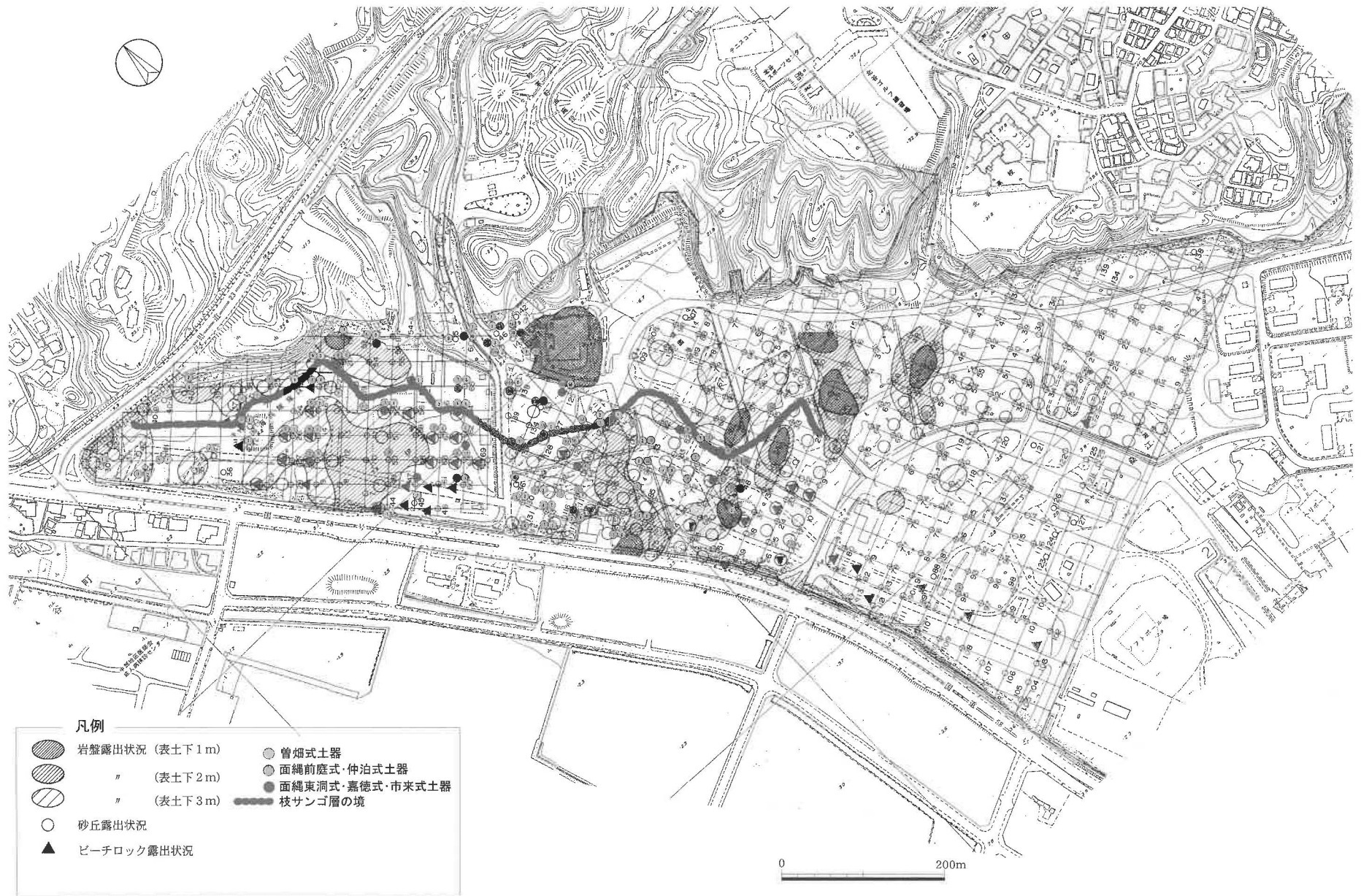
参考文献

- 中村 豊・東門 研治・島袋 春美 「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業」『北谷町文化財調査報告書』第23集北谷町教育委員会 2005年
- 松田 順一郎 「伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区に見られた古地震跡—」『伊礼原遺跡—伊礼原B遺跡ほか発掘調査—』北谷町文化財調査報告書 第26集 北谷町教育委員会 2007年
- 松田 順一郎 「第3章 第2節 マツノト遺跡の砂丘堆積物の分析」木下尚子編『先史琉球の生業と交易2—奄美・沖縄の発掘調査から—』熊本大学文学部2006年
- 名嘉 順一・東恩 納みさき・八田 夕香 「北谷町の地名—戦前の北谷の姿—」『北谷町文化財調査報告書 第24集』P240 北谷町教育委員会 2006年
- 新田 重清 「浦添貝塚調査概報」『南島考古』創刊号沖縄考古学会 1970年
- 島袋 洋（編）「古我地原貝塚」『沖縄県文化財調査報告書』第84集 沖縄県教育委員会 1987年
- 河名 俊男 「海岸地形と自然災害—奄美大島笠利半島における考察—」木下尚子（編）『先史琉球の生業と交易2—奄美・沖縄の発掘調査—』熊本大学文学部2006年

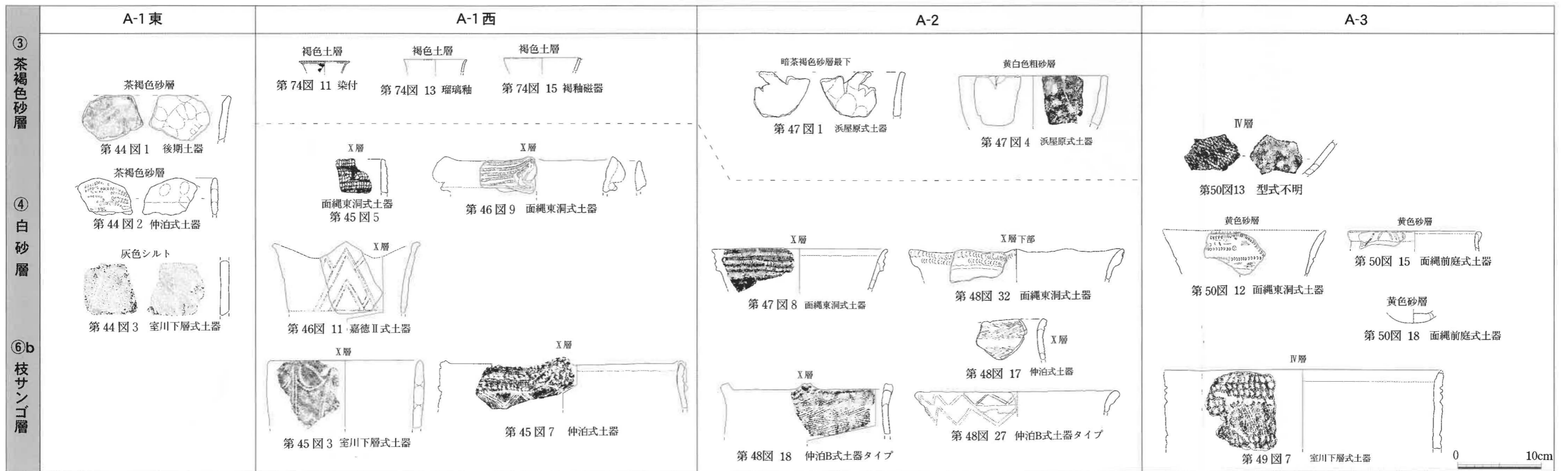
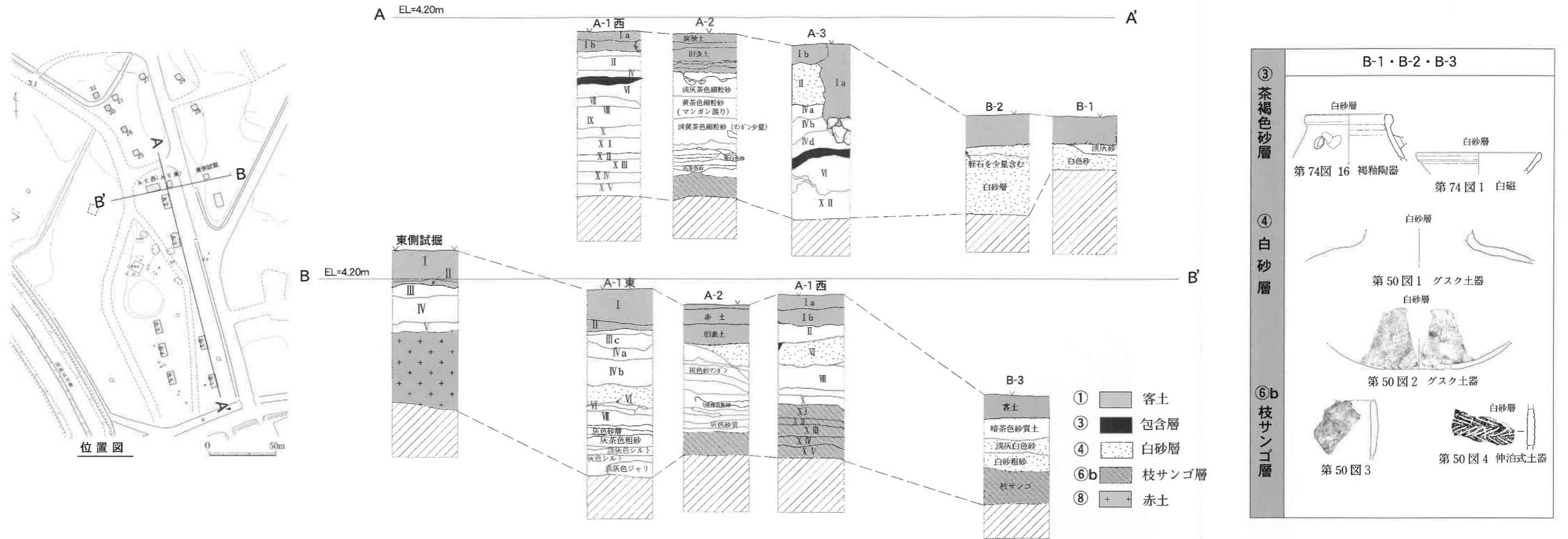


第101図 砂丘形成と長浜金久遺跡群・ケジ遺跡・泉川遺跡の立地横断模式図

(『長浜金久遺跡』1987 転載)



第102図 枝サンゴ層の範囲と出土土器の分布 (「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査」 2005 一部加筆)



第100図 伊礼原E遺跡の柱状図と遺物変遷図

報 告 書 抄 録

ふりがな	いれいばるいせき							
書 名	伊礼B原遺跡							
副書名	キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査							
巻 次								
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第27集							
編著者名	中村 愿・東門 研治・松原 哲志・島袋 春美・細川 愛・秋本 真孝							
発行機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2008年(平成20年)3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いれいばる いせき 伊礼原B遺跡	おきなわけん 沖 縄 県 ちやたんちよう 北 谷 町 あざいへい 字 伊 平 こあざいれいばる 小字伊礼原	473260	11	26° 19′ 08″	127° 45′ 34″	2002. 02) 2002. 06	120	キャンプ 桑江北側 返還に伴 う範囲確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物			特記事項	
伊礼原B遺跡		近世・近代	井戸状遺構 (チンガー) ピット状 遺構	石器・貝製品 青磁・白磁・染付・褐釉陶器 本土産陶磁器・沖縄産陶磁器・ 陶質土器・円盤状製品・簪・ 銭貨・砥石・硯				
		白砂層		室川下層式・浜屋原式・ 仲泊式・後期・グスク土器				
要 約	<ul style="list-style-type: none"> ・北トレンチからピット状遺構、南トレンチから井戸状遺構が検出された。 ・遺物では北トレンチで沖縄産陶器、陶質土器、本土産陶磁器、青磁、白磁など、また、白砂層(ビーチロック)からローリングを受けた室川下層式、浜屋原式、仲泊式、後期、グスク土器が出土した。 ・南トレンチでも北トレンチと同じような遺物が伴い、それに貝製品、銭貨等が出土した。 							

報 告 書 抄 録

ふりがな	いれいばるいせき							
書 名	伊礼原E遺跡							
副書名	キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査							
巻 次								
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第27集							
編著者名	中村 愿・東門 研治・松原 哲志・島袋 春美・秋本 真孝・細川 愛・松下 孝幸・松下 真美							
発行機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2008年(平成20年)3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いれいばる いせき 伊礼原E遺跡	おきなわけん 沖 縄 県 ちやたんちよう 北 谷 町 あざいへい 字 伊 平 こあざいれいばる 小字伊礼原	473260	45	26° 19' 05"	127° 45' 41"	2001. 03 { 2002. 03.31	120 試掘 No.26・ 30・32 48㎡	キャンプ 桑江北側 返還に伴 う範囲確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物			特記事項	
伊礼原E遺跡		縄文時代前期	土壙	熟年男性人骨			5100±BP	
		縄文時代前期～後期 (枝サンゴ層)	二次堆積 (海底?)	室川下層式・面縄前庭式・ 仲泊式・面縄東洞式・ 嘉徳Ⅱ式・貝製品			4850±40BP 3520±40BP 5180±40BP	
		近世	溝状遺構	青磁・褐釉磁器・ 浜屋原式土器				
		近代 (Bトレンチ) 白砂層		沖縄産陶器・陶質土器・ 本土産磁器・円盤状製品・ 簪・キセル				
試掘(旧ロッジ) No.26・30・32				仲泊式土器・石器 円盤状製品				
要 約	<p>北側のAトレンチの中央に設定したA-2トレンチで西側に枝サンゴ層、東側にシルト層の境界を確認。枝サンゴ層からは室川下層式土器。仲泊式土器など縄文時代後期以前の土器や貝・骨製品が出土。東側の上部からは貝塚時代後期前半の浜屋原式土器が出土。南側のBトレンチではローリングを受けた土器や沖縄産の陶器。また、北側の伊礼原遺跡に近い旧ロッジの試掘では仲泊式土器が一括して出土、北側方向に包含層の存在が高いことがわかった。</p>							

北谷町文化財調査報告書 第27集

伊 礼 原 B 遺 跡

伊 礼 原 E 遺 跡

—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～14年度)—

編 集： 北 谷 町 教 育 委 員 会

発 行： 2008年（平成20年）3月28日

沖縄県北谷町字桑江226番地

電話（098）936-3490

印 刷： （有）S k i l l

沖縄県読谷村字波平1732-1-203号

電話（098）958-1515

©

